
もう一つの黒芒楼

黒芒の化け狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの黒芒楼

【Nコード】

N4109N

【作者名】

黒芒の化け狐

【あらすじ】

世界を渡る少女、ネリは様々な世界の住人と出会い、最後に烏森の世界へとたどり着いた。（本編完結済です。ただいま番外編。）

原作・境界師を知らない方でも読めるようにしてあります。主人公達の言動など、最大限沿うように努力しております。初めての二次創作なので、どうか拙い文章でもご了承ください。

ちなみに作者がこの小説を書きたいと思ったのは、登場人物の一人に幸せな人生を送ってもらいたかったからです。

人並みに恋をして、好きな人が出来る普通の日常を味あわせてあげたいと切に思ったからです。

(と言っても、原作では悲惨な最期をとげる少年なのですが……)

原作ネタバレを多く含みます。それでも大丈夫という方は、どうぞお付き合いくださいませ。

(1) 烏森の皆さん、こんにちは

「結結結、結う！」

「ちよつ、良守！待ちなさいってば！」

深夜の校舎に少年と少女の声が響き渡る。二人ともこの学校に通っている学生であるが、今は制服姿ではない。

少年は真っ黒な着物、少女は真っ白な着物をそれぞれまとっていた。

「今度こそ…結！滅！」

少年の名を、すみむらよしもり 墨村良守。

少女の名を、ゆきむらとぎね 雪村時音。

学校 はらまときもり 烏森の地を四百年守ってきた一族である。

開祖、はらまときもり 間時守の弟子、雪村家と墨村家の直系の子孫である彼らは、毎夜毎夜こうして夜の校舎を見回っているのだ。

「よっしやあ！…まだらお斑尾、次は？」

『中等部の…二階と三階。おや、両方とも教室だねえ。』

それを聞いて、少女 時音は彼女の相棒に目を向けた。

「あれ、びくは白尾？」

『…おかしいな、オレは何も感じないぜ？ハニー』

『そっちの青臭いのと一緒にしないでくれ』

ハツ、と斑尾 既に霊体で肉体を持たない妖犬 は誇らし
気に鼻を鳴らした。

「じゃあ、良守は三階をお願い。あたしは二階に行くから」

「了解。行くぞ、斑尾！」

『はいよ』

少年は袖をなびかせながら走り始めた。側に付き従うのは、白銀の妖犬、斑尾。

結界師達の夜は、長い。

良守が勢い良く教室の扉を開けると、そこには

「……………え？」

机に突っ伏して寝息をたてる、少女がいた。銀色の髪が波打ち、月の光を反射している。陶磁器のような肌と、彫りの深い目鼻は日本人離れした美しさだった。

「人間……………だよな」

『日本人では無いみたいだけど、邪気は感じないね』

斑尾がそう言うなら、とその女の子の側まで歩み寄る。足音を消していたつもりは無かったのだが、その女の子は起きる気配すら無かった。

「なあ…授業終わったぞ」

話しかけても、反応無し。それどころか、寝言を返してきた。

「ん〜。レナ…モン……？」

『なんだい、レナモンって』

「俺が知るかよ…」

こりゃ時音に知らせた方が良いかな、と良守が考えた時、斑尾がハツと顔をあげた。瞬時に後ろを振り返り、叫んだ。

「良守！後ろだ！」

「……！」

体を捻って飛び上がり、反射的に構えた。青みがかつた透明な境界を自分と女の子の周りに張り、暗がりを目をこらす。

「ネリから離れる、人間」

堂々と闇から歩み出てきたのは、金色の毛並みを持つ獣 狐だ
った。

だが、まるで人間のよう^{あやかし}に二本の足で立ち、喋る姿は良守が今まで相手にしてきた妖よりおそらく強い。

基本的に低レベルの妖は、意志疎通が出来ないのが一般的だからだ。

(何なんだ?!この女の子の知り合いってことか?!……だが、言葉だけじゃ信じられない……!)

「お前、妖か？」

「違う。私はネリのパートナーデジモンだ」

良守は何一つ理解できなかった。さっきまでは時音に知らせる方法もあつたが、一般人を動かせない以上、迎撃するしかない。

「頼む、起きてくれ！」

「ネリ。何だか知らないが、面倒なことになっているぞ」

二人が一人と一匹が眠り姫に語りかけると、その子はゆっくり目を開けた。

「ん……。あれ?ここは……?」

「気がついたところ悪いけど、あれアンタの友達？」

良守が構えを解かず、背を向けたまま確認を取ると、女の子は悲鳴をあげた。ガタンツと椅子から立ち上がり、結界に阻まれていることに気づく。

「ちょっと、これ何?!出してよ!」

「わ、待て待て…解!」

スウ、と結界が溶けるように無くなると、女の子は一直線に狐へ駆け寄った。

「レナモン、大丈夫?!何かされなかった?」

「白い着物の人間に追いかけられたが、大丈夫。適当にあしらっておいた」

レナモン、と呼ばれた狐が微笑みながら言うのを良守が聞き咎めた。

「白い着物…それって!」

話しぶりからして時音のことを指しているのは明らかだろう。

「やっぱりコイツ…」

『ちょっと待ちな、良守』

白銀の相棒が、はやる主人の少年に待ったをかけた。その直後、教室の扉が音を立てて開かれる。

「ちょっと良守!こっちに妖…って一般人!」

「…ネリ。ここはひとまず帰った方が良い。おそらく知らぬ間にシフトしたのだろう?」

時音が理解できない、という表情で良守を見る。良守は混乱しつつ

も、狐と女の子が親しいということだけはどうにか信じる事ができた。

「あの、さ。ここにいられると色々困るんだ。特に用が無いなら、出てってくれない？」

「……………」

女の子　　ネリは二人の人間を交互に見てから、首を傾げた。

「そのセリフ…………どこかで聞いたような……………」

「ネリ？」

お人形のように美しい少女は、その紫の瞳を瞬かせ、良守の服装に目を留めた。

黒地に白の正方形が胸の辺りにあしらわれた着物をまとい、側には霊体の犬。槍の金属部分の途中に丸い輪がはめ込まれた、不思議な武器。記憶の中に、遠い昔読んだ漫画が蘇る。

「あなた達…もしかして、結界師？」

「そうだけど」

ネリは完全に思い出して、ふと辺りを見回した。自分の記憶が正しければ、この烏守の地は二人の他にもう一人少年が守護についているはず。だが、出てくる気配は無かった。

「何を探してる？」

「あの……つかぬ事を聞きますが……志々尾限という名前に心当たりは？」

「志々尾？いや、知らないけど。時音は？」

「あたしも知らないわ。ねえ……ネリちゃん、だっけ。貴方は一体何者？」

時音はいつもの冷静さを取り戻し、静かに教室の扉を閉めた。もちろん、逃がさないようにである。

「私は……ベアトリックス・ネリ・ユリカ。オランダ人と日本人とのハーフで……べ、別に烏森の力が目的とか、そんなのじゃないから安心して下さい。雪村時音さんと、墨村良守君……ですよね。」

名前を言い当てられて、結界師二人に緊張が走る。

「その言い方だと、まるで烏森目当てみたいに聞こえるんだけど」

「だよな」

二人が同時に右手を構える。ネリの額を冷や汗が伝った。どうやら、あらぬ疑いを自らかけてしまったらしい。

殺される、と錯乱したネリの行動は速かった。

「レナモン！」

「分かった」

レナモン、進化！！キュウビモン！！

カツと目を見開いた黄金の狐は、弾ける閃光と共に巨大化した。小柄でほっそりした、二足歩行の狐は姿を消し、人をゆうに飲み込めそうな、九つの尾を持つ獣　　キュウビモンに進化した。

「な、何?!」

「同時に能力発動！鏡渡り！」

そう叫んでネリは、廊下に面した窓ガラスに、自分の右手を押し付けた。

「キュウビモン！」

「ちよっ、待てよ!」

良守が反射的にキュウビモンを結界で囲もつとするが、時音に止められた。

「バカ！また話がややこしくなるでしょ!」

「でも!」

そうこうしている間にネリの姿は窓ガラスを通り抜けて消え、キュウビモンも闇の中に消えた。

『あの狐……見事な隠形おんぎょうだねえ』

『気配を消すってことだからな、ヨッシー。』

「そ、そんなくらい分かる！バカにすんな！」

斑尾はキュウビモンの消えた闇を見やり、ハアアと長いため息をついた。

『全くアンタ達が、殺気を軽々しくぶつけるからだよ？あの子が逃げちまったじゃないか』

「だって、おかしいだろ？！何なんだよ、あの子。どうして俺達の名前知ってんだよ！」

「……………」

時音はネリが消えた窓ガラスを見つめていた。良守は頭の整理がつかないのか、ひたすらわめいた。

「結界師ですか？なんでもっともらしい事言っつて、あんな妖操るなんて！しかもあの狐喋ってたし！」

「……………うるさいからちょっと静かにして。」

時音は顎に手をやり、先程のネリの言葉を思い返していた。

志々尾限という名前に心当たりは？

(誰なの？その人を探してるってことなの？あの子から悪い感じはしなかったし…)

見たことも無い術を使い、鏡渡りと呼ぶ方法で姿を消した妖獣使いのベアトリックス・ネリ・ユリカ。

不本意だが、応援を頼むしか無さそうだった。

「良守。繁守さん呼んで。あたしもおばあちゃん呼ぶから」

「ハア?! やだよ、なんでじじい呼ばなきゃいけないーんだよ!」

良守は応援を呼ぶことに難色を示した。なぜなら、本来墨村家と雪村家は仲が悪く、両家 特に現当主の二人、雪村時子と墨村繁守は折り紙つきの仲の悪さだ。

顔を合わせる度に、喧嘩が起こり良守は時音と話すことさえまな
らなくなる。

そんなのは嫌だった。

(2) 繋ぐ能力で皆さん、仲良くね

「俺達だけで、あいつらをしとめる!」

「バカ!あの狐、変化とは少し違うし妖じゃない。滅するのはまだ。ちゃんと頭を使いな」

「バカって言うなよ...」

時音の冷めた声にしゅん、となった良守は口ごもった。

「俺だつてちゃんと考えてんのに...」

「.....!」

突然、時音は目を見開き、すくつと立ち上がった。そして、すぐ何事もなかったかのように良守に指示を出した。

「じゃ今度は良守が高等部の方を見てきて。あたしは中等部を見るよ」

「.....分かった」

なんでお前が仕切ってるんだ、とブツクサ言いながらも良守は、相棒を連れて教室を出ていった。

斑尾は、企み顔で時音の方をチラリと見たが、何も言わずに少年と共に夜の校舎へと消えていった。

完全に足音が聞こえなくなったのを確認したあと、時音は誰にと

無く、口を開いた。

「言う通りにしたわよ。出てらっしゃい」

『……八二一？』

白尾が不安そうに眉をひそめ、辺りを見回した。

『あの子がここにいるのかい？』

「ええ。ご丁寧な条件付きだね。良守を遠ざけてくれて」

説明し終わった後、突如目の前にあの巨大な九尾の狐が現れた。その背には案の定、制服姿のネリが乗っている。

「ありがとうございます。墨村さんよりも雪村さんの方が、話が分かる人なので……」

時音はネリの言い方に引っかけりを感じた。まるで自分のことを良く知っているような口振りだからだ。

「あなた…いやあなた達は、一体何者？」

キュウビモンの背中から、銀髪の美少女は軽やかに降り立った。

「改めまして。私はネリ。“繋ぐ”能力を持つ異能者で、あらゆるものを接続することが出来ます　　世界でさえも」

これが、世界を渡ってきたネリと烏森の結界師達との、最初の出会い

いだった。

「私は異界と異界を繋ぐ能力で、たくさんの世界、平行世界を旅してきました。この世界もその一つです。」

キュウビモンの豊かな毛並みを感じつつ、ネリは言葉を続ける。

「キュウビモンとも平行世界の一つ、デジタルワールドというところで出会い、私はティマーになりました。」

そう言つて、握り拳大の電子機器を時音に見せる。それは時音とは無縁なゲーム機の様に見えた。

「これはデジヴァイスとって、パートナーデジモンと意志疎通をしたり、場所を把握したりするための物。」

次に、とネリは右の手の平から蜘蛛の糸のような物を出した。

「これは、意識の糸…まあ、私が勝手に名付けているだけなんですけど。あなた方の念糸みたいな物です」

「念系の事まで知ってるのね……」

紐状の結界である念糸は、まだこの段階では使い道が無いので、つきりネリは二人が知らないと思っていた。

だが、勉強家である雪村の方は知っていたようだ。

「この意識の糸を対象に絡めて繋ぐと、さっきのように雪村さんだけに話しかける事が出来ます」

ネリは喋り疲れたのか、キュウビモンの前足にもたれかかった。そして時音に向き直った。

「もう会うことも無いでしょうから、ひとつだけ、忠告しておきます」

ネリは、余計なお世話かなと思いつつも言わずにはいられなかった。

「志々尾君と火黒を近づけないで。出来るなら、良守君がもっと早く絶界を扱える様に時子さんか豆蔵さんにも、修行をつけてもらってください」

「ちょっと、おばあちゃんのことまで?!」

無理だろうな、とは思う。原作では、避けて通ることの出来ない重要な要素であり、親友の死は良守をがむしゃらに強くした。

分かってはいるのだが、いざ自分がその世界にいると思うと、助けられる物なら助けたいと思ってしまう。

「ネリ。それ以上は……」

「分かってる!」

キュウビモンの首にしがみつき、ネリは親友の死を前にした良守の

涙を思い出す。

(中学校二年生で、死ぬなんておかしいよ……)

すん、とネリが鼻をすするのをキュウビモンは穏やかな目で見守っていた。

「では、これにて我々はネリの世界に帰る」

キュウビモンがネリを促し、彼女は無言のまま右手をまた、窓ガラスに押し付けた。

「能力発動、“世界渡り”。」

どこか暗い声で、銀髪の少女が呟くと一人と一匹は、ガラスに吸い込まれるようにして消えた。

静寂の中、時音の息の音だけが教室に響いて聞こえる。

結界師、というのも家業とはいえ随分一般人から外れた存在だと思っていた。だが時音は、上には上がいることに恐れおののいた。

「平行世界を行き来するって……そんなの」

人間技とは思えない。

ただただ、今見たことが信じられない時音だった。

「じゃ、行ってきます」

次の日の朝、良守はコーヒー牛乳を片手に通学路を歩いていた。

(んだよ、時音のやつ！)

結局、妖しい少女は姿をくらし、烏森から去っていったと時音は言っていた。

(勝手に話し付けて、勝手に終わらせるなんてさっ。一人で何でもかんでも背負いやがって)

ズンズン、と音が立ちそうな位いらだちながら、烏森学園の校門をくぐる。

珍しく時音とは会わないまま、学校に着いた事に少なからず良守はがっかりした。

いつものように教室の扉を開けて、後ろの席に座る。途端に市ヶ谷^{いち}知則と田端ヒロムが話しかけてきた。

「お、墨村。お前、転校生が俺らのクラスに来るの知ってる？」

田端が持ち前の情報収集力で、担任からいち早く聞いてきたようだ。

「ああ？知らねーよ」

枕を抱えて健やかな眠りにつこうとする良守。だが、次の田端の言葉で良守は飛び起きた。

「その転校生、銀髪巻き毛に紫の瞳で、超美少女なんだってさ。今朝から目撃されてる」

(え?)

「それ本当か?!」

良守の飛び上がりっぷりに、親友二人は一步身を引いた。

「まあ、すぐホームルームだし、黒須先生が連れてくるだろ」

(墨村。珍しい反応だな)

市ヶ谷も自分の眼鏡を磨きつつ、良守をうかがった。眠気が吹っ飛んだ顔の友を見るのは久しぶりなのだ。

(コイツが給食以外で起きてるなんて)

ブツブツと何事かを呟いている良守は、不思議そうに見つめる親友達に気がつく余裕は無かった。

(まさかとは思うが、昨日の妖しい女の子か…? 訳分かんねーし!)

わしゃわしゃと頭をかきむしっても始まらない。教室の扉を睨み付けるようにして、良守は今か今かとネリを待っていた。

そして、その時は訪れた。

「ホームルーム始めるぞー。皆聞いているとは思うが、オランダからの留学生だ。日本語は達者だから、気にしなくていいぞ」

じゃ入って、と担任の黒須が手招きする。2年2組の教室へ足を踏み入れた少女は良守の予想通り、昨夜狐を連れていた少女だった。

日の光の下で見ると、随分印象が違って見える。昨夜は肌がまるで生気を感じられない、人形のような雰囲気をもっていたが、黒板の前で挨拶している少女は違う。

頬はほのかに薔薇色に色づき、紫の瞳は宝石の様。そしてなにより肩につくほどの、銀系の巻き毛が目眩しい。

十人が十人振り返って見るだろう美しさだ。

時音以外関心の無い良守だったが、さすがに胸がどきりとした。

(って、そーじゃなくて！)

「初めまして。ベアトリックス・ネリ・ユリカと言います。どうぞユリカと呼んでくださいな。」

ふふ、と少女が微笑むと教室の各所から悶絶する男子が続出した。その間で良守は、あれ？と首を傾げる。

(昨日の狐は、ネリって呼んでたよな)

外国の風習なのか？と良守が考えていると、ネリは少年に目を向けた。

「一日ぶりですね、墨村君」

「……！」

普段注目を集めることの無い良守に、クラス中の目が集まった。良守は、椅子から転げ落ちる勢いでのけぞった。

「おまつ、なん　　ハア?!」

混乱の極みなのか、良守は恥ずかしさで死にそうだった。

「昨日町の観光がてら、案内してくれたんですよ。おかげで学校にも迷わず来れました」

ありがとうございますね、とイタズラっぽく笑うと鼻血を出して昏倒するものが数名出た。

面倒な事になった…と良守は一人頭を抱えることしか出来なかった。

「何なんだよ！朝の説明は！」

「ごめんなさいね。墨村君と早く話がしたかったの」

困った様に笑うとネリは、やはり昨夜とは違い普通の人間にしか見えない。あの狐が側にいなければ、ネリの印象はここまで変わるものなのか、と良守は驚いていた。

「お前…異能者なのか？昨日の変化からして、あの狐は妖だろ?!」

「ああそれは、ちょっと違うかな。私のレナモンは変化じゃなくて、進化するの。この烏森の力とは関係なく。」

「レナモン……って昨日の狐の名前か。」

良守が質問するとネリは律儀に答える。

「そ。私にとつての相棒。あなた方の白尾や斑尾と一緒にだと思ってくれていいわ」

「本当に何でも知ってるんだな……。じゃあ！もしかして烏森の力の事も知ってるのか?!」

思わず良守が身を乗り出すと、ネリは静かに言った。

「本当に知りたい?」

空気が、変わった。他者を圧倒する何かがある、目の前の小さな少女から発せられていた。

「部外者の私の口から、本当に知りたいの?」

「そ、それ、は…」

良守の目が泳ぐのを見てとつて、ネリは薄く笑った。徐々に、放っていた矛のような空気を収める。

「まあ、どつちにしても、来年には知ることになるから。安心して夜のお仕事頑張って」

「ら、来年って！そんな先なのかよ！」

思わず声をあげた良守に、思い出したようにネリは口を開いた。

「そういえば、三能たつみ先生って知ってる？高等部の」

「あ？誰だよだから」

「狙ってるよ？」

良守がハッとネリを見た。

「雪村さん、三能たつみのことが気になってるみたい」

ガーン、という効果音がお似合いの良守は見ていて見ものだった。

(3) ちゃんと話さないと、誤解は怖いよ

時音は人のいない階段の踊り場で、愕然としていた。

(私の行動まで知ってるってどういうの？こっちが…監視されてる？)

巡回用の式神が、偶然ネリを見つけたので、そのまま監視していた。その式神が見聞きした事は、術者である時音も把握することが出来るので、良守との会話を知ることが出来たのだ。

元の世界に帰ると言って、消えたのになぜのこのこと戻ってきたのか。

(やっぱり…昨日の話は嘘？)

素直に話を聞いていた昨夜の自分に怒鳴ってやりたい気分だった。あの狐は妖ではないが、現世の理から外れた獣であることに変わりはない。

(今夜、滅するしかない)

三能たつみに近づきつつ、時音は覚悟を決めた。

(良守にも、注意しておかないと。あの子は、何か変だ)

ネリの原作知識は主人公達に、裏目裏目に出っていたのだった。

「まさか、三能たつみとの戦闘がまだだとは思わなかったな……」

校舎の屋上、良守が昼休みの間、寝床にしている給水塔の近くに腰を下ろす。すぐ側にレナモンも控えていた。

留学生のネリは、他の子とは所々違う時間割なので、2年2組のクラスメイトとは別行動をとれるのだ。

「昼間に様子を見たが、雪村の少女が三能にはりついていた。……ちゃんときがついているんじゃないのか？」

「うん。それは心配無いんだけどね。志々尾君が来るまでに、出来る限り話の流れを変えたいんだよ」

ハア、とネリは片膝を胸に抱えた。

「何で戻れないんだろう……？」

昨日の夜、世界渡りを発動させると、目の前に元の世界は無かった。何度試しても、この世界から 『結界師』の世界から出られなかった。

ネリが通っていたオランダの中学で授業中、居眠りをしてしまったところまでは覚えている。

だが、いつの間に“世界渡り（シフト）”したのか、目が覚めたら烏森学園の教室だった。

平行世界、というのは可能性の世界の事だ。漫画や小説によって昇

華された物語が、実在するかもしれない、異世界。

「ここは結界師の物語の世界だから、この町の外に出ることは出来ない。日本だけど、日本じゃない。外国とは隔絶されている、局地的な…日本。」

「ネリ。あまり思い詰めないでくれ」

レナモンが、ネリの真横に音もなく、腰をおろした。

「元の世界はネリにとって住みにくかったじゃないか。たとえ帰れなくとも、ここなら…少なくともネリには、未来の先の先まで分かる。危険は回避出来るだろう」

「そう…だね」

確かに未来は分かる。ネリは平行世界を旅する者として、手に届く範囲、全ての小説・漫画に目を通していているからだ。もちろん原作・結界師も熟読している。だから、分かる。

この世界では、レナモンの様な人語を解する獣は、妖と同列に見られてしまうということも。

「時音さんは、話分かる人だけど…同時に厳しい人でもある。烏森に害ありと判断したら、あたしだって消されちゃう」

ネリとしては、同性の時音と仲良くなりたいが、時音はちょっと恐い印象がある。しかも、昨夜自分は『元の世界に帰る』と言っていたのに、この学校に転校してきてしまった。

「どつやって説明すれば良いんだろう」

「何を説明すんだ？」

えっ？と顔をあげると、ちょうどはしごを登ってきた良守の顔があった。その手には枕が握られている。

「あ、ごめん。ここお昼寝の場所だったね。」

もう私行くから、と腰をあげて立ち去ろうとするネリ。

「待てよ」

だが、腕を捕まれて通りすぎることは出来なかった。

「…何？烏森の事でも聞きたくなっただ？」

ネリが横目で良守を見やると、彼は神妙な顔をしていた。

「お前…家に帰れないんだろ」

「………！」

ネリは啞然とした。直ぐ様レナモンを振り返ると、相棒はネリから目を反らして呟いた。

「ネリ…雪村の少女が駄目なら墨村の少年に助けを請うしか無いだろっ？」

「墨村君が下にいるの、気づいてたのね」

苦々しく言う少女に良守は慌てて言った。

「立ち聞きしたのは悪かった。でもお前、何か様子がおかしいし」

武闘派の術者である結界師の腕は、振り払おうにも振り払えなかった。

「まあ、その狐が妖じゃないなら俺は消すようなことはしない。時音も話せば分かると思う。」

それと、と良守は続けた。同時に、掴んでいた腕を離してやった。

「お前の言う通り、時音と三能が一緒にいたよ。多分今夜、時音ともし話さなきゃいけないーし。」

「……そう」

短くネリが返事をする、と、良守は結界を張り、ごろりと横になった。

「逃げんなよ、ネリ。」

少女は、無言ではしごを降りていき屋上を後にした。

(何か今夜は…やだな)

三能たつみとの戦闘が今夜なのはほぼ間違いない。

もう陽も落ちて辺りは真っ暗だ。今頃結界師の二人は早めの夕御飯をとり、仕事に行く準備をしていることだろう。

(そう言えば、警備員とかいないのかな……。いつも読んで不思議だったけど)

ぶらぶらしながら校庭を散歩してみる。すると、不意に何者かの視線を背後に感じた。

「レナモン」

「ここにいる、ネリ。」

隠形をといたレナモンが姿を表した瞬間、邪悪な気配が一層高まった気がした。

「三能が現れたようね」

「ああ。だが、まだ奴は校舎の中のようにだ。見晴らしの良い校庭にこのままいよう。」

「分かった」

ネリは気づいていないふりをしながら、また足を進める。何をすることもなく、変わらぬ速さで、散歩をしているかのような優雅さだ。

(…奴が動いた。気をつけて、ネリ。)

(アイツが狙うのは人間より、レナモンの方なの。レナモンは離れてて)

「分かった」

繋ぐ能力で、意志疎通をした後校庭にはポツリと一人、ネリだけが残った。

一拍の静寂の後、背後でジャリ、と砂を踏む音がネリに届く。

慌てずに振り返ると、蛇を三匹まとわせた背の高い男性がいた。三能たつみ 高等部英語科の教師である。その整った顔立ちから女子生徒に人気が高いようだが、今は酷薄な笑みを浮かべていた。

「夜を待ったかいがあった……こないのが来るなんて」
「……」

ネリは震えそうになるのを必死でこらえていた。自分とは別タイプの異能者に、臆病者のネリは恐れているのだ。

三能たつみ自身が悪い奴な訳では無い。この教師の異能である蛇に、別の妖が寄生して男性ごと操っているのだ。

だから、男性本体を叩く訳にはいかない。

「私の友達をそう簡単にはエサにさせませんよ、三能先生」

「え？… ああ、さっきの狐も良さそうだけど……」

三能がチラリと校庭の隅に落ちる建物の影を一瞥した。ネリの背中に緊張が走る。そこはちょうどレナモンが隠形しているであろう場所だったのだ。

だが、三能はさして未練も無さそうにすぐ、目の前の少女に視線を戻した。

「君の方が、良い養分になりそうだから、いいや」

瞬間、目にも止まらぬ速さで一体の蛇が少女に襲いかかってきた。

(嘘　　！？)

てっきり、人間には見向きもしないと思っていたネリは対応が遅れた。

ネリの原作知識はとことん裏目裏目に出ることが多いようだった。

(ん？異変！)

昼間、立ち聞きした内容をノートに書いて整理していた良守は、烏森の異変を感じ取った。

学校の敷地をすっぽり覆うように張られた結界は、妖が侵入した際結界師達に分かるようになっていた。

(いや、妙だな…侵入じゃない。変化にしても2、3段階すつとばしたような力の上昇の仕方……)

階段を駆け足で降り、槍の様な武器　天穴てんけつを担ぎ、学校へと走り出す。途中、斑尾がいつもの通りついてきたが、会話は無い。

(まるで敷地内に突然現れたような…)

そこで良守は、ハッと気づく。

(まさか、ネリの狐が　?)

いや、違つと直ぐ様打ち消した。彼女は『レナモンは烏森の力とは関係なく進化することが出来る』と言っていた。

お隣さんの時音の背中を見つけて良守の走る速度が上がる。

「時音！今日の少し変だぞ！」

「わかつてる！！」

時音と並んで走りながら、良守は言いづらそうに口を開いた。

「なあ、ネリのことなんだけど…」

「あたしもちようどあの子について話しておきたかったの」

時音は前を向いたまま、何でもないように言った。

「あの子が烏森を出ない限り、あの狐は滅した方がいい」

「はあ?! だってレナモンは妖じゃねーし……白尾だって！」

時音の相棒、妖犬の白尾はネリやレナモンのことを感知出来なかった。それが意味するのはつまり、レナモンが妖じゃないことの証明にもなる。良守がそう反論すると、斑尾が口を開いた。

『水を差すようで悪いけどね、アタシは一回もあの子達が妖じゃな

いとは言っていないよ』

乙女心を持った雄犬、斑尾がニヤリと笑った。

『昨日は、眠っていたネリって子や、狐からは邪気を感じなかった。けど今夜は、妙なんだよねえ』

「何がだ？」

学校の校門が見えてきた。

『レナモンは妖じゃないさ。それは確かだよ、だが』

斑尾が言い終わる寸前、結界師二人はあり得ないものを見た。

校庭の中央、二人の人影が確認出来る。一人は地面に倒れ伏し、もう一人はそれをただ眺めていた。

『小娘は、人間じゃないかもしれない』

結界師二人と妖犬二匹の視線の先には、倒れている三能を三匹の蛇が必死で守り

「嘘…だろ？」

両手にダガーを構えたネリが、つまらなさそうにたたずんでいる光景があった。

(4) あれね？でしゃばっちゃったかな

「あ、墨村君に雪村さん」

結界師二人がようやく到着して、銀髪の少女は安心したように笑った。持っていたナイフを異空間に放り込み、結界師二人の方へ歩き出す。

「遅いですよ。三能先生にとりついてた妖、私がとどめ差しちやいました。」

「お前！」

良守が怒気をあらわにすると、少女は怯えた顔をして足を止めた。その顔には『え、なんで？』とはっきりかいてある。

瞬時に、レナモンが隠形を解いてネリをかばうように姿を現した。

「ネリ。二人の怒りに気がついてくれ」

「え……ええ　！？」

あわあわとネリが意味もない動きをする。烏森を守る結界師達の仕事に横槍を入れてしまったことに、今まで気がつかなかったのだ。

「ごごご、ごめんなさい！だ、だってアイツがロクサーヌで攻撃してきたから……！」

「ロクサーヌ……？」

良守が、眉を寄せる。レナモンが言葉足らずな少女の為に、補足説明をした。

「三能たつみという教師は、攻撃・防御・癒し担当を三匹の蛇に振り分けて使う事が出来る異能者なんだ。……で、それぞれに名前を付けている。」

「そ、そうなの。攻撃担当がロクサーヌ。防御担当がシモーヌ。癒し担当が…ジヨセフィーヌ…だったかな？」

「そんなことを言ってるんじゃないの!!」

時音が脱線しかけた話を無理矢理戻した。

「あなた、本当に何者なの!?” “繋ぐ能力”なんて、人の範疇を越えてる!まるで未来が見えてるみたいじゃない!!」

嫌な静寂が辺りを包んだ。自分の言葉に時音自身、目を見開いた。良守が昼間のレナモンの言葉を思い出す。

少なくともネリには未来の先の先まで分かる。危険は回避できるだろう?

「え?じゃあ、あなた、予知能力も持ってるの?」

(ネリ。)

急な展開に一人、ついていけないネリをレナモンは心の中で話しかけた。

(「ここはひとまず、シフト云々は後にしよう。理解してもらえそうにない))

(……うん)

ネリがゆっくり頷く。

(結界師二人の事を事前に知っているのも、ネリが予知能力を持っていることにすれば、事が円滑になるのではないか?)

(そうだね……そうしよう!)

頷いた後、ネリは覚悟を決めた。

「そう。私、実は多重能力者なんです」

三能たつみは、その夜ついに目覚めず、翌朝保健室でベッドで寝ている所を発見された。

「さて、今後の身の振り方を決めていかなくちや、レナモン。」

「うむ」

夜が明けて次の日、ネリとレナモンは“鏡渡り”を発動させて、秘密の相談をしていた。

ネリには“繋ぐ能力”がある。簡単にいえば直接、空間と空間、人の心と心などを結び、移動や意志疎通を瞬時に行うことの出来る能力である。

だが、それらの発動には制約がある。目に見える範囲でしか『繋ぐ』事が出来ないのだ。

目に見えない場所と空間を繋げるには、目印を設けたり、反射物を利用した“鏡渡り”というのを発動しなくてはならない。

「この鏡の世界なら、誰にも盗み聞きされないし、安全だよね」

「ネリが体力を消耗するが……」

言外に、良いのか？と体調を気遣うパートナーに少女は微笑んだ。

「このくらい“世界渡り”に比べれば、消費は無いようなもんだよ」
それより、と切羽詰まったように少女は切り出した。

「やっぱり夜行シヤキョウに所属する方が良いかなあ………？」

夜行は裏会ウラカイという異能者統括組織の末端に位置する。突然変異で妖をその身に宿して産まれた者や、異能を持て余している者に仕事を与え、存在意義を与える組織である。

ネリが当初から気にかけている志々尾限という少年も夜行に属して

いて、通称『妖混じり』と呼ばれる体質の持ち主である。

「まあ、明日の夜には夜行所属の人に会えるから、その時正守さんに私の事を報告してもらえばいいか」

ネリは鏡の世界　　何もかもが左右反対になっている教室でふぁあと欠伸をした。

現実世界の教室では黒須先生が授業をしているが、鏡の世界ではレナモンが教卓の上に陣取っている。左右逆さまの世界では、教室はがらんとしていて、人はいない。本来なら空き時間には図書館にいらなくてはいらないのだが、あいにくそんな余裕は無い。

「夜行：とは、確か墨村の一番上の兄が頭領を務めていると言っていたな」

「そうだよ」

主人公・墨村良守は次男である。長男の正守は夜行の頭領であり、後には裏会最高幹部にまで上り詰める。三男の利守は、非凡な兄達に囲まれてあまり目立たないものの、立派な結界師である。

「その夜行の本部へ直接行った方が早いのではないか？明日の夜、夜行の構成員に接触するとしても、その頭領に会えるのはもっと後になるぞ？」

「それは大丈夫。どうせ頭領、一週間後には墨村君の家に来るから」

「そ…：そうなのか」

レナモンは感心しつつ教卓から飛び降りた。優美に金色の尻尾を揺らしながら、ネリに歩み寄る。

「ネリ。今夜は何が起きるんだ？」

「今夜？」

ネリは妖しい笑みを浮かべた。

「面白い人に会えるよ」

「裏会の御紹介？」

そろそろ日中も肌寒くなってきた時分、現代では珍しい古風な日本家屋に一人の訪問客がいた。

「そんなお話、伺っておりませんが……」

対応するのは生け花が趣味の、雪村21代目現当主雪村時子である。

「急に派遣が決まりましたもので……」

おかつぱの黒髪に黒い着物の女性は落ち着いた物腰で、スツと左手を横に出した。

「ご信用なさらないのも無理ありません……」

女性が微笑むと、地面から巨大な妖の手が生えた。尖った爪を持ち、気味の悪い暗緑色をしている。

広げられた手には裏会の紋が入った書状が乗っていた。

「本当はこの子を先に遣わそうと思ったのですが、この子、足が遅いもので…」

時子は驚いた顔をしたが、敵意が無いことは分かったので、辺りに目をやった。

昼間だからか、人はいないようでホッと息を吐く。

「緊急時の正式な書状です。お受け取りください。」

「確かに。でも往来で力を使うのはお控えを。」

時子が一応釘を刺しておく、女性は慌てたように口に手を添えた。

「あ、すみません。私ったら…」

おっちょこちょいでどこか抜けているこの女性。

名を、春日夜未、と言った。

「初めまして。春日夜未と申します。」

夜の学校で紅い敷物を広げてお茶をし出した夜未は、人懐っこく笑った。

「私、お菓子には目が無いのよ、でもお茶がないとね」

水筒からコポコポとお茶を注ぎ、時音と良守、ネリの前に置いた。良守が偶然（？）持っていたチョコレートケーキを3人で（良守は抜き）頬張りつつ、話に花を咲かせる。

「本当に時雄さんにはお世話になったんですよ！」

時音の亡くなった父親に、話が向いた時だった。妖の気配が三体、校内に侵入した。ネリは若干驚いていた。

（あれ？原作では何も起こらないはずなのに）

内心首を傾げていると、良守と時音は夜未とネリに待つように言い残し、去っていった。

二人きりになって、正直ネリは困った。何もかも知っているネリにとって、夜未は苦手な女性なのだ。

（だって春日さん…鬼使いなんだもん）

雪村と墨村の二人は気がついていないが、春日夜未は不正な方法でここ烏森に来ているのだ。

ネリが黙っていると、夜未が話しかけてきた。

「ネリちゃんは、二人といつ頃からお友達なのかしら？」

大人の女性、といった余裕のある態度である。ネリはボ口を出さな

い様に答えた。

「2日前からです。」

「あら！意外と浅いのね。てつきりもつと長いのかと思ってたわ」
「ふふふ、と意味もなく笑う夜未は表面上、優しそうなお姉さんである。」

「あなた達、仲が良さそうなんだもの」

「え？そんなこと無いですよ。今でも怪しまれてるくらいなのに」
思わず全力で否定すると、夜未は不思議そうな顔をした。

「でも、雪村と墨村の結界師は、烏森に部外者が入るのを極度に嫌うのよ？二人はあなたをそんな風に見てはいないようだけど」

「…本当ですか？！そうだと嬉しいんですけど」

第三者の意見を聞いて、ネリは緊張していた肩の力を抜いた。同時に、疑問がむくむくと頭をもたげる。
こんなに良い人が、どうして『明日の夜の様な』酷いことをするのか。

「春日さん…」

「夜未でいいわよ、ネリちゃん」

ニコニコしながらお茶をすすめる夜未に対し、ネリは湯飲みを静かに

置いた。

「私は予知能力があります……比較的はつきりとした映像を見るこ
とが出来るんです」

目をつむって美味しそうにお茶を飲む夜未。この姿が嘘だなんて、
実際目にしてもまだ信じられない。

「夜未さん……貴女はわざわざ烏森に来る必要無かつたんです」

「意味が分からないわ、ネリちゃん。何が言いたいの？」

夜未はまだ表情に出していない。だがもう、目が笑っていないかった。

「貴女の目的は、本当に強さなんですか？」

夜未はネリを静かに眺めていた。ネリの言葉だけが夜闇に響き渡る。

「親友と今、この時を一緒に過ごせるなら、もう何もいらないんじ
やないですか？」

「予知能力、ねえ」

はあ、と鬼使いの女性はため息をついた。

「大したこと。まるで、何もかもお見通しのようね」

仮面の下をさらけ出した春日夜未は、参ったわねえと額に手をやっ
た。

「分かった。鳥森から手を引けっというのね」

「簡単にいえばそうです。貴女も、大切な親友も傷つく事になりま
すから」

「脅してゐるつもり？」

ハツと鼻で笑う夜未。だが、良守達が遠くに見えたので、取り繕う
様に言った。

「明日には荷物をまとめて、ここを出ていく。それで良いでしょ」

「引き留めはしません。」

あ、そう。と夜未は腹立たしそくに、お茶をあおった。

(5) はい、ドジ踏みました

また仮面を被って時音達を迎えた夜未が、お茶を三人に勧めることは無かった。

帰り道。

「なあ、ネリって一人暮らし？」

「え、なんで？」

良守が何気なく言った疑問は、ネリを不自然に緊張させた。夜未と別れた後、校門で解散するはずが、そうはいかなかったのだ。

「なんでって お前、家に帰れないって言ってたじゃん。寢床とかどうしてんのかなって思っただけ」

「そついえばそつね。」

二人の視線にさらされて、ネリは適当に言い繕った。

「あ、ほら、あたし留学生だから奨学金出るし。宿代ぐらい稼げるからー!」

じゃ、そついうことで!とキュウビモンに乗り、空を駆けていく。ネリが星より小さくなった所で、良守がポツリと言った。

「俺達の家、部屋数あるから住んでも良かったのに」

「あれ？最初と随分反応違うじゃない。どうしちゃったの？」

時音のツツコミに、良守は顔を朱に染めた。

「べ、別に！」

（ちょっと心配になっただけだ！）

ズカズカと足音をたてて、去っていく幼なじみに、白い着物の少女はふっと頬を緩めた。

「あ…危なかった」

「ネリ。正直過ぎるのもどうかと思う。顔に出過ぎだ」

「え、そお？」

結界師二人が、校門の前からいなくなったのを確認した後、キュウビモンとネリは戻ってきた。

「まさか、墨村君の家に勝手に住んでるなんて、口が裂けても言えないもんね」

「鏡の世界で だけどな」

ネリは、一人暮らしではない。学校を出入り口として、『鏡の世界』

を寢床としているのだ。絶対安心かつ安全な、ネリだけの世界。空間をいじるといっ点については、ネリの能力も結界師に通じるものがあるのかもしれない。

「で、鏡の世界で墨村君と一つ屋根の下…って訳ね」

誰かに聞かれたら恐ろしく誤解を招きそうだが、ネリにその自覚は無い。

校舎の窓ガラスに右手を付く。

「“鏡渡り”発動」

目を開ければそこに左右対称の世界があった。レナモンに戻った相棒を伴い、学校を出る。

「そっいえば、明後日からの土日…予定はあるのか？ネリ。」

「うん、特にこれといった予定は無いかな。」

ネリは歴史を変えてしまった事に罪悪感を持ちながらも、後悔はしていないかった。

春日夜未は、鬼使いの一族として『ヨキ』と名付けた巨大な鬼を操る。操るといっても、契約を交わした大切な相棒である。

ヨキ、という鬼は賢くも無ければ足が速くも無く、その主人である夜未は一族の落ちこぼれとされてきた。

「強さ…か。確かに夜未さんの気持ちも分からなくはないんだけど…」

原作では、烏森の力に酔ったヨキが夜未を攻撃してしまい、契約が破棄される。そして、裏会から派遣された本当の構成員が、ヨキにとどめをさすのだ。

それを目の前で、見せつけられた夜未は、涙ながらに謝る。

自分のせいであなただを死なせてしまった、と。

ギユツと、ネリの手が制服を強く握る。レナモンは、少女の様子がおかしいことに気がついたので、黙って肩を抱いた。

「レナモン」

「なあに？」

自分の名を呼ぶ小さな呟きに、金色の狐も小声で答えた。

「レナモンは、いなくなったりしないよね」

「約束する。黙っていなくなりはない、絶対に」

トボトボと、二人は逆さまの表札がかかった、墨村の家へ足を踏み入れた。

(やはりおかしい)

墨村繁守は、闇も深い深夜に布団から起き上がった。

(何か家の中に入り込んでおる)

良守からネリのことを全く聞いてなかった21代目現当主、良守の祖父は部屋の中を見渡した。

「まあ、邪悪な気配では無いから良しとするかの」

わざと声に出してみる。幼稚な方法だとは思ったが、繁守は不思議な確信があった。

「さて、明日も早いから寝るとしようかの」

布団を被り目をつむり、規則正しく寝息をたててみる。感覚を探ってみると、2体いることが分かった。

(本当に邪気は無いようじゃが、位置が不自然じゃ。)

薄い氷の向こうで、こちらを伺っているような、妙な気配ではある。しばらく経った後、かすかな声が聞こえた。

『繁守さん、寝たかな?』

『もう大丈夫だとは思つ。もう3時過ぎたし』

『……眠くなっちゃった。私も寝ようかな』

『私が見張っているから、もう寝るといい』

『うん。おやすみ』

『おやすみ』

まるで座敷わらしのような気配じゃな、と繁守は感じつつ眠りにつ
いた。

「…またお前授業サボってんのか？」

「あ、墨村君」

中等部の屋上で、良守は枕片手に昼寝をする予定らしい。というよ
り、良守は昼夜逆転の生活なので、昼間はほとんど寝ているのだ。

「お前さあ…勉強するために留学生やってんじゃねーの？」

「授業真面目にきいたことの無い墨村君に言われたく無いな」

「んなっ……」

良守がのけぞると、ネリはフェンスに体重を預けたまま笑った。

「いつも式神に授業受けさせて屋上で昼寝するか、教室にいても、
寝るかお菓子の設計図書してるかのどれかでしょ？違う？」

「ち、違うない………な」

まずいという自覚はあるのか、良守は目をそらした。だが、ネリは青々と茂った森に目をやって、ポツリと言った。

「まあ、あなたには中学の勉強なんて意味ないけど。」

「……………え？」

良守は銀髪の巻き毛を見つめる。

「烏森の力を封印するのが墨村君の役目。それ以外に時間を割く必要は無いってこと。」

「お前……………本当に何でも知ってるんだな。」

どことなく照れ臭そうに頭をかく良守に背を向けて、ポツリと少女は言った。

「だって私、この世界限定の予知能力者だもの」

ネリは寂しく笑うことしか出来なかった。元の世界に帰ることも出来ず、この世界から出ることも叶わない。未来を知っているといっても、あまり口に出すことも出来ない。

「本当に、この世界は私に何を求めているんだろ」

小さな呟きに、結界師の少年が答えることはなかった。

(しくじった……！)

雪村家の一室で、夜未は唇を噛んでいた。昨夜の会話を何回思い出しても、今夜の事を知っているとしか思えない。

(まさか予知能力者が、烏森にいるなんて……！もしかして蛇の目？)

蛇の目 未来を扱う部署であり、裏会に属する予言者を抱えている機関である。構成員も不明で、本部の場所も不明。謎に包まれた部署なのだ。

(蛇の目が烏森に介入しているとしたら、妨害されるのは確実……！)

予知能力者は大いに邪魔である。

(あの子は……邪魔だ。)

夜未の目には暗い光しか灯っていなかった。

陽が落ちて烏森学園に、夜の静けさが舞い落ちる。学校に人がいなくなってもなお、ネリは屋上にいた。

ずっとずっと、肌寒い中夜空をぼんやり眺めていた。

「レナモン。」

「ここにいる、ネリ。」

給水塔の影から現れた相棒は、はしごを使わず、ひとつ飛びで少女の隣に座った。

「何を考えてる？」

「……両家に挨拶に行こうかと。」

レナモンが驚きの顔を銀髪の少女に向けた。

「この先、この世界がどういう風に回っていくか分からないけど、両家の当主と接触しないことはあり得ないし……。」

それに、とネリは続けた。

「部外者の介入を結界師4人は嫌がる。いつか私達と衝突する時が来るかもしれない」

「あの鬼使いの女性が言っていたのは事実だったのか……」

「そりゃそうだよ。400年先祖代々守ってきた土地だもの。部外者がこの土地で妖狩るのも、極端に嫌がると思う。」

ネリが胸を張って結界師のあり方について説明すると、金色の狐は呆れた顔をした。

「ネリ……。そこまで熟知していながらなぜ三能に寄生していた妖を狩った？二人に余計な敵意を持たせると分かっていただろうに」

「だ、だってあたしに攻撃するとは思って……いなくて……つい……」

段々尻すぼみになっていった少女の言葉に、相棒は藍色の瞳を心配そうに曇らせた。

「距離が離れていてもネリが呼んでくれさえすれば、私はそばに駆けつけられる。危ない時は遠慮なく私を呼んでくれ」

「うん」

行こうか、と一人と一匹は腰をあげた。

「2点の座標を固定。能力発動、“空駆け”」

ネリが何も無い空間に右手を突き出すと、空間に裂け目が現れ少女とレナモンは屋上を後にした。

なるべく結界師二人とレナモンを会わせたく無いので、レナモンは校舎の影を使って隠形した。

校庭の端のベンチに腰を下ろしていると、後ろから下駄の音がした。

「ネリちゃん。」

後ろを振り返ると、大きな風呂敷包みを抱えた、黒い着物の女性が笑っていた。

「こんばんは」

「……こんばんは」

一瞬の間の後、ネリは無難に挨拶を返した。夜未は荷物をまとめて、

烏森は諦めると言っていたのになぜまだいるのか。

ネリの表情を読み取ったのだろう、夜未は苦笑した後、風呂敷に手を入れた。

「そんなに構えなくてもすぐいなくなるわよ。最後にお茶、付き合っ
てくれない？」

「は…はい。」

(あ……まずいぞ、この展開)

ネリは原作・結界師を熟読している。歴史を少しいじったとはいえ、
本来なら今夜、夜未とお茶会をするのは良守なのだ。

(それで、良守君は夜未さんに人質にされちゃうんだ　お茶
に睡眠薬入れられて!!!)

なんの気負いもなく夜未はてきぱきと、赤い敷き布を広げ湯飲みを
2つ出す。

(飲むわけにはいかない　万が一ってのが無くは無いんだから!)

猫舌のネリを気遣ってか、夜未はぬるめのお茶をネリの前に置いた。
ありがとう、と言いつつもネリが口を付けることは無い。
敏感に感じ取ったのか夜未は、くすりと笑った。

「もう、やあねえ。このお茶に毒なんか入ってないわよ、ほら」

水筒からコポコポとお茶を自分の湯飲みにも注ぎ、一気に飲み干す

夜未。まったりとした顔になり、心底幸せそうな顔になる。
ハツとネリの視線に気がついて、表情を引き締める姿はやはり悪い人には思えなかった。

（まあ、ポーズだけならやってもいいか）

「…じゃあお茶、いただきます」

湯飲みに口をつけ、上唇をお茶が濡らす。だが、ネリのお茶が減ることは無かった。口は引き結んだまま、湯飲みを敷き布に置くこととして

「……え？」

湯飲みを持つ右手は、ネリの言うことをきかずに弛緩する。

（う、そ……）

すぐに視界は暗転し始めた。

ネリが最後に見たのは、夜未が美味しそうにお茶を味わう姿だった。

(6) ちょっと本性が…気にしないで下さい

静かな夜に、お茶をすすする音だけがしていた。

「お前…ネリに何をした！」

「ん？誰、あなた」

隠形を解いてレナモンはネリをかばうように、夜未の前に立った。レナモンは構わず、夜未を殺気もあらわに睨み付ける。

「女だとして容赦はしない。言え。ネリに何をした、鬼使い」

「あなた！……そうか、ネリちゃんの妖つてところね。良いわ、教えてあげる。」

夜未はネリの湯飲みを慎重に拾いあげた。

「この湯飲みにね、ヨキの毒を塗っておいたの。昨日まではやるつもりは無かったけど。ネリちゃん知りすぎてるみたいだから……」

レナモンが呆然としてネリを振り返った隙に、夜未の右手に黒く光る指輪がはめられる。

「いいよヨキ、出といで」

レナモンが見たのは、暗緑色の体を持つ巨大な鬼 だった。

「侵入者！？」

「しかもかなり大きいな」

時音と良守は、鍛えた足で学校に急いでいた。側にはそれぞれの主に白尾、斑尾がついている。

「白尾、急いで！」

『おつよ、ハニー！』

「斑尾！」

『分かってるさ　　急ぎな。何だか嫌な胸騒ぎがしてならないよ』

斑尾の言葉は、不吉な影を良守に感じさせ、訳もなく不安にさせた。

ほどなくして、二人と二匹が高等部正門をくぐると、白尾と斑尾が主人達を誘導した。

『あつちだ！』

白尾が叫んだ時だった。先頭を走っていた時音が、良守の視界から消えたのは。

「　　え？」

何とか踏みとどまった良守は、慌てて時音が落ちた穴を除き込んだ。

「時音！！大丈夫か！？」

「あたしは大丈夫　　って良守後ろ！」

先に気がついた斑尾が、慌てて良守の袖に噛みつき、後ろへ引き倒す。直後、良守の額を掠めて巨大な岩が穴をふさいだ。

「術者って簡単な罫には弱いよね…」

『あんだ一体…』

斑尾の呟きは、夜末には聞こえなかったようだ。

「変なものに鼻がきくせいからかしら…」

穴を岩で塞いだのは巨大な手だった。良守がその手の先を目で追っていくと、夜末の後ろに暗緑色の巨体があった。

頭の位置が校舎の屋上を越すほどの巨大な　　鬼。

『鬼…！？』

『夜末ちゃん、一体何を…』

目にも止まらぬ速さで、黒い矢じりの形をした細長いものが妖犬達を貫く。

『ぎゃあっ！』

『ぐうっ！っ！』

「斑尾！白尾！」

矢じりの元をたどれば、それは鬼の尻尾だった。串刺しの状態から、二匹がむしり取られる。

「あんた…！何してんだよ！」

昨日までとは別人のような顔で、鬼を使役する夜未に良守は叫んだ。それには答えず、夜未は自分の相棒　ヨキに黙って目を向けた。ヨキは無邪気に笑って、捕まえた二匹を口元に持って行く。

『いったただつきまーす』

『ぎゃあああ！！』』

パクリと食べられた二匹だったが、実際のところ問題は無いのを良守達、結界師は知っている。

だが、何度見ても相棒が死ぬのに慣れることは無い。たとえ明日の夜には自然復活するとしても、だ。

『夜未…。こいつら食べようとしたら消えちゃったよ…』

「あらあら…でも大丈夫。」

夜未が慣れた様子で鬼の手のひらに乗った。そしてそのまま、ヨキの右肩に飛び乗る。

「あんなもの食べなくても、この土地にいるだけであなたは強くなれるのよ、ヨキ。だからここを私達二人のものにしましょう…」

『ホントに…?』

「ええ」

良守は時音が閉じ込められた岩の前に立って、右手を構えた。

「包囲、定礎！」

正方形の結界で岩を弾き飛ばそうとする良守だったが、パシュン、と結界は形成されずに消えた。

「……!?!」

「無駄よ。その岩には呪力除けを念入りにかけたから。」

夜未は、ヨキの肩の上で高らかに宣言した。

「鬼使いの夜未、この烏森の地を乗っ取らせていただきます！」

ネリが変えようとした歴史の流れは、そう簡単には変わらないようだった…。

「鬼使い…?」

「あら?ネリちゃんから聞いてないかしら。」

そこで良守はハツとして辺りを見回す。時音は地中に横穴を掘り、何とか落とし穴から脱出した。

「そついえば、あいつらは!?!」

「良守…。今は目の前のあれに集中しな。早く片付けないと。」

慌てた良守に対し、時音は苦しそうに小声で言った。雪村の結界師として、誇りを持って仕事をする彼女としては、目の前の事に集中したいのだ。

たとえ、ネリやレナモンの姿が見当たらないとしても。

「だからってあいつらがいないのは変じゃねーか!」

「教えてあげましょうか?」

結界師二人が言い争うのを見て、面白がるように夜未が笑った。

「狐はヨキが吸収して、ネリちゃんとはある場所でお預かりしてるわ」

ああそついえば、とわざとらしく夜未がポンと手を叩く。

「あんまり遅いとネリちゃん、毒がまわって死んじゃうかもね」

「「……………!?!」」

結界師二人は目を見開いた。

「ネリをどこにやったっ!?!」

「毒なんて…!?!ネリちゃんがあなたに何したって…!?!」

悲鳴のような叫びに夜未は不思議そうな顔をした。

「あなた達、あの子とまだ3日ぐらいの付き合いでしょう？友達でも無いのに、なぜそんなに必死になるのかしら？」

スツと夜未の目が冷酷な光を帯びた。

「本当に甘ちゃんね。こんなのが正当継承者だなんて 世の中
理不尽だわ」

「レナモン…本当に喰われたのか!？」

「確か、妖じゃないって言ってたけど…」

ひとまず目の前の鬼を倒すか、追い出さかしなければヨキはいずれ変化してしまうだろう。烏森の力は妖を強くしてしまうのだから。小声で時音が良守に指示を出した。

「まずは、鬼とあの人を引き離す。あんたは鬼をお願い」

「分かった。」

二手に別れて、時音と良守は走り始める。

両足首を良守が潰し、ヨキの体勢を崩したところで夜未と引き離す。お互い細かいことまで、話し合っていないが息は合っている。

だが、目の前の大きな邪気の塊のせいで、二人はもう一つの邪気を見落としていた …

体が…熱い。

ネリは大きな振動を体に感じて、目を覚ました。息苦しく、体の四肢はかつて無いほど痺れている。

(真っ暗…縛られてるし…苦し…)

右手が自由にならないと能力が使えないのだが、こんな身体ではどちらにしても無理そうだった。

(毒を盛られたとしか…考えられない…うう、気持ちわるい…)

必死に、呼吸を整えるべく空気を貪る。熱に浮かされた頭でも、ネリには自分の場所の見当がついていた。

(きつとここ…ヨキの背中…甲羅の中だ…)

その証拠に戦闘の音が聞こえる。

人質役をネリがやっているということは、原作とは違いヨキの相手を結界師二人でやっているということだ。

いくらかは早く決着がつくだろう、とネリはひとまず息をついた。

「…レ、ナ…モン。私、は…ここ…だよ…」

すぐに相棒が来てくれる事を信じて疑わないネリは、目を閉じて相棒を待った。

「……………」

だが、金色の相棒が来ることは無かった。言い知れぬ不安にネリの心は引き裂かれそうになる。

「レナモン…？わた、し…：…呼んでるよ？レナ、モン？」

ハア、ハア、と毒のせいだけでは無い、ネリの荒い呼吸音が密室に響く。

その時、随分近いところから夜未の声が聞こえた。

「バカねえ。鬼と言葉なしでも通じ合えるのが、鬼使いなのよ」

（まずい！もうすぐヨキが変化する！体内にいる私はどうなっちゃうの！？）

「レナモン…！レナ、モン…：…！」

何も気配を感じられないのを認めたく無い少女は、苦しそうに相棒の名を呼ぶ。体から嫌な汗が吹き出るのをネリは感じた。

レナモンが、答えない。

（うそ…：…嘘だ）

「あなた達には分からないでしょうね。あのネリって子にも！」

夜未の叫びは、ネリの心をどん底に叩き落とした。

「強さが目的じゃないでしょう？」なんて、知った顔で私をバカ

にしたから相棒を亡くすことになるのよ！」

良守と時音が、苦々しい顔で夜未を睨み付ける。次の瞬間、新たな邪気が二人の背中を悪寒となって震わせた。

「な、何だ!？」

「これって、まさか……!!！」

子供二人の青ざめた顔には構うこと無く、夜未はヨキに指示を飛ばした。

「一気に潰すわよ、ヨキ！」

『よ、夜未……!』

ガクン、とヨキは突然片膝をついた。

バランスを崩した夜未は、何とか相棒の髪の毛に掴まり落下を防ぐ。

『背中が…背中が!!』

瞬間、ヨキの硬い岩のような背中が粉々に弾け飛んだ。

衝撃で夜未はヨキの右肩から転げ落ちた。運悪く甲羅の破片が、夜未の左肩に突き刺さる。

「痛っ!?!……な、何なの一体!!！」

『おのれ、許さぬ……!』

禍々しく、地獄の底を這うような声がヨキの後ろから聞こえる。三

人は同時に恐ろしいものを見た。

瞳孔が縦に割れた藍色の瞳に、ピンと立った獣の耳。漆黒と白銀に輝く九本の尾を背後に従えた少女の姿を。

『半身を失った辛さ、その身で味わうと良いわ、人間。』

もはやそれは、彼らが知っているネリではなかった。

(7) レナモン、あなたは私の中で…

ネリが烏森で九尾を持つ者へと変化をとげた時、雪村の当主は急いで烏森の地へと向かっている所だった。

半世紀以上結界師の任について培われた勘が、21代目当主雪村時に異変を教える。

「だいぶ、大変なことになっているようです」

時子に従うのは、裏会の紋が入った夜行の男性二人である。

「……申し訳ない。我らの到着が遅れたばかりに……」

菅笠すげかきを若干うつむかせ、一人の男性がすまなさそうに言った。

だが、時子はいつもの通り慌てることは無い。

「いえ、私達の仕事場で起こったことですから」

急ぎましよう、と時子が速度をあげようとした時、聞き慣れた声がありました。

「待てえい!!」

「む、墨村！何の用です！くそじじい！」

「お館様の一大事！黙ってられるかくそばあ！」

喧嘩腰の挨拶を交わした後、21代目当主墨村繁守は塀の上から降りた。速度は落とさず、そのまま時子と並走する。

夜未が嘘の派遣で烏森を訪れたのは、今日で2日目である。

緊急を要する出来事も無いのに、突然派遣されてきた夜未を不審に思ったのが夕刻を過ぎた頃だった。

(裏会に直接照会して正解でしたね。しかし妖が2体とは……?)

時子も繁守も、自らの孫を案じながら風のように駆けていった。

投げ出された夜未を上手く受け止めたのは良守だった。

「ヨキ！ヨキ、大丈夫!？」

「ネリちゃん、何なのその妖気は！」

時音が油断無く構えながらも厳しい声をネリにかけた。良守は、夜未をひとまず近くの木にもたれかけさせ、ネリをふり仰ぐ。ネリはまるで、死神の様に宙にたたずんでいた。

「ネリ……お前……」

良守の言葉に、獣耳が生えた頭が軽く傾げられる。

『誰だ、お主ら。』

「……………!」

「オイオイ、嘘だろ」

時音は息を呑み、良守は不敵に笑った。それが気に食わなかったのか、また少女の妖気が増す。

『私の邪魔をするな!』

「お前こそ俺の庭で、何やろうとしてんだ!」

完全に意識が飛んで妖と化しているネリに、良守は近づいていった。

「あの鬼はあの人にとって大切なものなんだよ。殺させはしない」

『…何だと…!』

「ちょっと良守!」

時音が止める暇も無く、良守は結界でネリを囲んだ後、ヨキと夜未を振り返った。

「……出てってもらおうか。」

「……嫌よ」

一族から『落ちこぼれ』と罵られ続けた夜未に半端な覚悟は無かった。

「この土地は、あんたの手に負えるもんじゃねーんだ!」
良守の声に夜未が答えることは無い。

(…心が通じ合うからこそ分かる。)

背中を破壊されたヨキは、烏森の力の恩恵で元通り再生していた。その大きくてつばらな瞳が夜未を心配そうに見つめている。

(この子がどれだけ傷ついてきたか……！)

「ヨキ！あなたは………」

夜未あゆみの言葉は、ヨキに鬼としての本能を呼び覚まさせる。

「…この烏森の地で強くなれるのよ……！」

ビキッ

『それは無いな、鬼よ』

ビキビキッ！！

動きを止めていた銀髪の少女は、今や火炎をまとっていた。

『なぜなら、お前は私が殺すからだ』

コヨウセツ！

ネリが両手を体の前で交差させ、真横に振り払うと無数の刃が良守の結界を貫いた。そのまま、ヨキの背中に針山の如く突き刺さる。

『……………』

だが、変化し始めたヨキは痛みを感じないかのようにたたずんでいた。

『わかった…わかったぞ…強いもの…増やして、弱いもの…減らす…！』

無邪気な様子で夜未を案ずる鬼の姿は、もはや無かった。夜未の左肩を手早く止血した時音が、ハツと鬼を振り返る。

ネリは不快そうに顔をしかめた後、良守の横に瞬間移動をした。そして爆発的に増した、おのれの妖気で自らの能力を強化する。

『“拒絶”』

短い言葉の後、時音と良守の前にビー玉大の漆黒の球体が出現した。

「な、何を…」

『構えろ。来るぞ』

直後、ヨキの尻尾が結界師二人に襲いかかる。

「うわっ！？」

（尻尾が二本に増えた！？）

反射的に後ろへとびすさつた良守だったが、すぐにその必要が無いことを悟る。

ネリは能力を使い、『繋ぐ』ことに発想の転換を取り入れたのだ。

『繋ぐ』のではなく、『繋がらない』という使い方を。

槍のような攻撃が結界師二人に近づいた途端、黒い球体はドーム状

に広がり攻撃を弾いた。

『ふむ…。成る程、こういう使い方も出来るな』

「ネリ。お前、少しは意識戻ったんじゃないの？」

『ん…。いや？点数稼ぎしておこうかと』

「は？」

何か思案しているネリに時音も横へ駆けつける。夜未は、ヨキの変貌ぶりに歓喜していた。

『…バランスも大事…たくさんありすぎても邪魔だ。ちょうどいい数…』

鬼の肉が隆起し、骨格までもが変わっていく。

『この体は大きすぎる…速く動けない…強く…速く…無駄をなくす…ムダ…』

「すごい、すごいわヨキ！」

（いける！この土地は、私達の味方でもある！）

なおも変貌を遂げていくヨキに新たな指示を出そうと、夜未が契約の指輪に力を入れた時だった。

ヨキが、今までしたことのない顔を主に向けたのは。

『契約…邪魔…！お前、もういらぬ』

「え？」

パキンと音をたてて、鬼と主を結ぶ契約の輪が砕け散る。木に寄りかかっている夜未にヨキの鋭い尻尾の一撃が迫り 良守が何とか間一髪、結界で弾いた。良守は夜未を抱え、4人はヨキから距離を取り、茂みへ入る。

少年が負傷した女性を地面に下ろすと、振動が響いたのか夜未が苦しそうな声をあげた。それを見て、ネリがフンと鼻を鳴らす。

『本来ならお前のその肩の傷は、今の攻撃でついていた。全く運の
良い奴だ』

「本来なら……？お前、今夜のことも予知してたのか！？」

良守の言葉に、妖狐の身にまとう火炎の勢いが弱まった。

『私が口を出したことで、未来は変わってしまった。レナモンは死
に、私に彼の能力が受け継がれた。もう……何もかも……遅い……』

「ネリちゃん…あなた夜未さんに思い止まって欲しかったのね」

時音が初めて、優しい目を銀髪の少女に向ける。良守は口を尖らせた。

「俺達になんて言うてくれなかったんだよ。お前他のことはよく喋
ってたのに」

『……………』

答えない少女に時音は肩をすくめた。

「何はともあれネリちゃん、助けられてくれてありがとう。で良守、これからどうする?」

「あの鬼を……追い出す」

ちらつとネリに目をやったが、少女は唇を嚙んで何かに耐えていた。よく見れば、顔色は青く額に脂汗がにじんでいる。結界師二人が口を開く前にネリは苦し気に言葉を吐いた。

『もう…時間切れみたい』

妖気や気力で毒を抑え込んでいたネリだったが、それも限界が近いようだった。苦しくなるに連れて人間の心が戻っていく。

(レナモン…仇…とれない…ごめん)

もう、すぐにでも本物の夜行構成員、白道はくどうと黄道おうどうが烏森に来るだろう。そうしたら、ヨキは『命が助かって』しまう。

『墨村…君。あの人に、鬼の形見を渡さないで。』

「ネリちゃん、あなた毒が…!」

ヨキの雄叫びが鼓膜を容赦無く叩く。朦朧としてきたネリの頭に浮かんだのは、ただ一つ。

相棒が自分に向ける優しい眼差しだけだ。

(レナモンが死んで、ヨキが生き残るなんて……)

『許さない…!』

一瞬だけ、ネリの妖気が跳ね上がる。

『ヨキを再生させたら、墨村君を許さない……!』

「ちょ、ちょっと待てよ!滅するなんて言って無いだろ!？」

「そんなことも言ってもらえないようね」

時音が草木の向こうに目をやると変化を終え、人間の2倍程まで縮んだヨキがいた。

(だいぶサイズがコンパクトになったな…なら、囲めるか?)

「時音、二人を頼む……：包囲!定礎!」

ヨキを追って良守は茂みの向こうへ消えていった。

妖狐の姿から人間の姿になった途端、ネリは血を吐いた。銀髪を汚し、地面に膝をついて咳き込む。その姿を見て、夜未がバツの悪そうな顔をした。

「ごめんなさいなんて…言えないわね」

左肩に手をやりつつ、顔を背ける夜未にネリは苦しい息の下、最大限に口の端をつり上げてみせた。

「あなたに、同情なんかしなければ良かった…でも、もういいの。あなたはこれから罰を受けるもの」

「え？」

「どういうことなの…？ネリちゃん」

もう何もなくなることのないネリは、もはや未来を語ることに抵抗を感じなくなっていた。どうにでもなれ、夜未（この女）が苦しめばそれでいい、と笑った。

その笑みは夜未の背筋を凍らせるのに十分な、恐ろしさだった。

「フフ…すぐに白道と黄道が、とどめをさしてくれる。あなたの相棒は…：月刃と炎陽玉で死ぬ！！」

ゴハツと盛大に血を吐いたネリに時音が付き添う。夜未はあまりにもはつきりと言い切る『予言』に、畏れを抱いていた。

（本当にこの子…何なの！？）

「ネリちゃん。もう喋らないで、毒が余計まわる！」

夜未が、不安に駆られてフラリと立ち上がった。時音があっ、と思っただけには夜未は足をもつれさせながらも、戦闘の音を追って走り出してしまった。

慌てて時音が立ち上がるうとすると、ネリの気配がまたもや変わる。フウ　と、銀髪の少女が静かに息を吐き、目を開く。その瞳は紫から藍色に染まり、妖気も徐々にその勢いを取り戻していた。

「ネリちゃん…！？」

『完全変化で私も行く。早くあの人を追おう。』

漆黒獣耳に、漆黒と白銀の九尾をもつ妖狐。口元の血を拭う姿は、
青白い顔色と相まって壮絶な美しさを醸し出していた。

(8) 夜行のみなさん、こんにちは

『素晴らしい…これが、俺なのか…』

校舎の屋上フェンスに手をかけてぶら下がり、ヨキは自分の力に酔いしれていた。自分が駆け抜けた後には破壊の道が続き、のろまたった頃が嘘のよう。

黒服の結界師が今やっと、ヨキに追いつき姿を見せた。人間よりも足が遅かった自分とは思えぬ、卓越した速さと強さ。

ヨキは、自分の力を無性に試してみたくなった。結界師の少年の前に自ら歩み出て、悠然と言葉をかける。

『一つ、確認したい。お前がここの番人か？』

「……………そうだけど？」

暗緑色の体が、喜びにうち震える。

『全くこの土地は素晴らしいな…』

この力を授けてくれた『何か』に、心から感謝したい気分だった。ヨキの拳に知らず力が入る。

『力を試す相手まで用意してある』

言うが早いか、暗緑色の体が弾丸の様に打ち出される。良守は想像以上の速さに、結界で防御するのが精一杯だった。

ヨキの剛腕が、容赦無く良守の結界を殴打する。だが簡単には破れず、鬼はひとつ飛びで少年と距離を取った。

オニビダマ！

毒におかされているはずの少女から、妖気がほとばしる。九つの尻尾の先から、それぞれ火炎の塊が放たれ、鬼の周りを高速で回転しながら取り囲んだ。

「ネリ、動くなよ！死ぬぞ！？」

良守が結界の中から怒鳴る。だがネリも負けじと怒鳴り返した。

『私のことはどうでも良い！早くそいつを囲め！……がはっ』

血を吐くネリが、苦しそうに藍色の瞳で鬼を見やる。鬼は炎の玉に囲まれているのに、笑っていた。

『さつきはよくもやってくれたな、狐』

『…お前は相棒の仇。だが、私が手を下すと後々面倒だからな。…裏会にまで余計な敵意を持たれたくは無い。』

話の流れから推察するに、あと3分程で両家の当主二人と、夜行の構成員二人が到着する。だが、その4人は妖狐の自分も、妖として始末しようとするかもしれない。

派手に動き回り結界師達に敵だと誤解されないためにも、もうそろそろ立ち回りは止めた方が良さそうだった。

『何を訳の分からないことを…。こんな火で俺が押さえられると？』

ヨキの妖気が爆発し、ネリの鬼火玉が消え失せる。悔しそうな妖狐の顔を見て、鬼は愉快そうに目を邪悪に細めた。

『つまらんな。こんな腑抜けた攻撃、俺には効かん』

興味を無くしたように、目線を外したヨキにネリは血が逆流するような怒りを感じた。理性も何もかも吹っ飛ばし、仇の首を捻切つてしまいたい衝動に駆られる。新たな攻撃を発動しかけたとき、右手に触れる物があつた。時音の白い手だ。

「ネリちゃん。あなたが手を汚すこと無いわ。それは私達結界師の仕事よ。」

ピン、とネリの周りに緑がかつた透明な結界が張られる。破ることはネリにとって造作もない。だが時音の目を見た瞬間、ネリの心に迷いが出来た。

あまりにも悲しそうな目で自分を見つめる、二歳年上の少女に。

「その姿で安静にしていれば、この土地が治してくれるわ。もうこれ以上、無理しないで」

『雪村さん……』

「時音で良いわよ。」

時音はネリを結界に閉じ込めたまま、じつと幼なじみを見つめる。防御面だけでもと能力を発動しようとして、ネリは膝から崩れ落ちるのを止められなかった。

『今度こそ、限界…か』

妖狐化を解くとかえって悪化するので、最低のラインはぎりぎり保つ。そのお陰か、暗転しかけた視界はまた明瞭になっていった。

(レナモン…ごめんね…)

『お前も、防戦一方のつもりか?』

「フン。お前こそまだ、俺の結界破れてないぜ。」

「……………」

契約が破棄されたとしても、ヨキとは10年以上の付き合いがある夜未である。今のヨキがどれだけ強くなれたか、手にとるようになる。だが、先程の悪魔のような宣告が頭から離れなかった。

「やってみるよ。その力で」

あなたは罰を受けるもの

『…いいだろう』

あいつにとどめをさしてくれ

「嫌…ヨキ…!」

『……………』

肩の傷を押さえつつ遠くの相棒へと、届かぬ手をのばす夜未。それ

を見てネリの顔が結界の中で曇った。

だが、刻限は迫る。

ネリと同じく、夜未は最愛の相棒を失うのだ。

(なぜこんなに私は苦しい?)

毒の苦しみはだいぶ引いてきた。だがネリは、胸を押さえて説明出来ない痛みを耐えていた。

良守が、防御しつつヨキを引き付けた所で、上から結界を張る。少年が、自分の結界から抜け出すと、ヨキだけが取り残された。

首だけが結界の上から出ている鬼は動きを止めざるをえない。

「おっと動くなよ。へたすると首とぶぜ」

良守が距離を取った後、右手の構えに力を籠める。

「さーて。おとなしく、俺の言うこと聞いてもらおうか。」

勝機を掴んだ事を疑わない少年に、ヨキはくつくつと笑った。

『ク…クツク…面白い…』

禍々しい妖気が跳ね上がる。

『面白いぞ小僧!…!』

「おい、コラ！」

『この程度の結界、破れぬと思うか！？おれに…このおれに…!!』

内側から激しく拳を振るうヨキに、良守は更に力を籠めた。鬼は狂ったように、猛り暴れる。

『そつだ…力を…もっと力を…!!』

「ぐっ!!」

緊張した良守の額に汗が伝う。

(すげえ、さらに変形しやがるのか!?)

だがこの場で、銀髪の妖狐だけは結末を知っている。ヨキの身体がさらなる力を求めた結果、どうなってしまうのかを。

楽になってきた呼吸を吐きながら、ネリは良守の左後方に目をやる。時音が、ネリの行動に気がついた瞬間だった。鬼の妖気が不安定になったのは。

ポトツ

「くくえ!?」「く」

三人分の驚く声がした。

『お…お』

オオオオオオ！！

身体の急激な変化に鬼の肉体が、崩れてしまったのだ。苦しげな悲鳴の如き叫びを聞いた夜未は、呆然とした。

「おい！お前……」

「……進化が急激すぎたのね……体の方がもたなくなっただわ……」

時音の言葉に夜未が、青ざめた。

「そんな……あの子、せっかく……ヨキ……！」

ネリの視界に白い着物の小柄な女性が入る。当主達四人が駆けつけたようだ。

（ああ……助かった……）

安心からか、ネリは時音の結界に背中を預けて脱力した。ネリの視線を追って、時音が目を見開く。鬼使いは、両腕がもげてしまった相棒　契約の輪は無いが　しか目に無かった。

「ヨキ！……ヨキ　！！！！！」

「月刃！！！」

ザンッ

ヨキの身体は、男性から放たれた三日月型の刃に、真っ二つにされ

る。そこまで見届けてネリは意識が急速に遠のいていくのを感じた。

(安心した…せいかな…)

ずるずると、身体が弛緩して結界の底辺が近づいてくる。今まで気がはっていたせいも、改めて九つのふわふわの尻尾が身近に感じた。制服の上からどうやって生えているのか定かではないが、黒々とした光沢のある尻尾と、月の光のような銀色の尻尾。

まるで、手触りが極上のビロードの様で

『レナ…モン…』

亡き相棒の毛皮のよう、だった。

(ネリちゃん…寝ちゃったのかな)

安心した様な顔をして、自分の尻尾に頭を埋め気を失ったネリ。それを目の端で見ながら、時音は刃の出所に注目した。

(あの着物の紋は…裏会!?)

良守が見慣れぬ男性達を見て、眉を寄せる。

「何だ、お前ら……」

「我らは裏会・夜行の白道と黄道。裏会総本部の命により、裏切り

者の春日夜未を捕捉しに参った。」

『オオオオ……』

真つ二つにされてもなお、再生しようとする蠢く鬼に、男性の目が険しくなる。

「おのれ、化け物め。まだ再生するか……月刃!!」

「うわっ、危ね」

良守が伏せた後、ヒュン、ヒュンと風を切って刃が通り過ぎる。鬼の身体はあっという間に細切れになっていった。

契約の輪が砕けてから、夜未の事を気にも留めなかった鬼は、そこで初めて主を見る。もはや原型が分からないほど切り刻まれたヨキは、それでもなお、生きていた。

そして、一言。

『…よみ……』

「いやああああ!!!!」

「黄道。」

「うむ」

女性の悲鳴が聞こえないかのように、別の男性　黄道が能力を発

動する。

鬼火玉とは比べ物にならない大きさの、炎の塊　炎陽玉が男性の頭上で、太陽の様に輝いていた。

「これぐらいでいいか、白道」

「やれ」

およそ直径１メートルの炎が無慈悲にも打ち出される。

「……やめて　……!!」

夜未の叫びも虚しく、太陽の塊は肉塊とかしたヨキにとどめを刺す。鬼がいた場所を中心に辺りを炎が包んだ。

「……後の始末をお願い出来ますかな？」

「……はい」

繁守と時子が天穴を構えたのを見て、時音も自分の物に手を伸ばした。

良守は、目の前の炎を見つめたままだ。

「……天穴!」

異界に、塵と化した鬼が吸い込まれていく。良守は先程のネリの言葉を思い出し、背筋に寒い物が走ったのを感じた。

「あいつが言ったこと……本当に当たったな……ん？」

空中の塵に、キラリと光る物を見つけ、少年は脚力に物を言わせて掴み取った。

手を開いてみて、また悪寒が体を駆け抜ける。

(やべ　　！！これ、立派なヨキの遺品じゃん！！)

最早未来を見るレベルを、越えているとしか思えない狐の少女に、良守はゾツとした。

闇の中、誰かの声がある。

自分を呼ぶ、優しい声が。

『ネリ……すまない。悲しませてしまっ』

上か下か、右か左か、全く分からないその声はネリの大好きな相棒の声。

(レナモン！！)

声を出したつもりでも、音になることはない。だが、相棒が闇の中で微笑んだ気がした。

『私はこれからもネリの側にいる。見えなくなっても、話せなくな

『 っっても……ずっとネリの側に、いる。』

(レナモン!!ごめん……ごめんね)

『ネリ…寂しい?』

姿の见えない相棒が自分の事を抱きしめた気がした。

(寂しい……あの鬼が憎い…あの女も!!)

『ネリ。もう彼らは報いを受けた…。許してあげて』

金色の、気高く美しい相棒は震えていた。少女の激情がみるみるしぼんでいく。

『ネリは目の前で私が、細切れにされたあと焼かれたら…どんな気持ち?』

(……………)

答えられない、ネリは素直にそう思った。そして同時に相棒の言いたいことも分かってしまった。

(ヨキは……やっぱり再生してしまうのね……)

『私だって死んではいないんだよ。ネリの中で生きてる。その狐の耳と尻尾がその証。』

だから、とアルトの声が少女の荒れた心に染み渡る。

『元気を出して…私のテイマー』

私はずっと貴女と一緒に……

去っていくぬくもりを消さない様に自分の体を抱きしめる。
ネリの心に一つの決意が生まれた。

(私…強くなる。心も体も、能力も強く使いこなしてみせる)

闇は、薄らいでいった

(8) 夜行のみなさん、こんにちは (後書き)

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。

(9) 黙っててすみません

裏会に夜未が連行された後、老人の怒鳴り声が夜の学校に響き渡った。

「こんの…バカタレがアア…!!」

「いてっ！チョップすんな、じじい！」

未だに雪村の結界の中で、丸まって寝ている狐少女を知らなかったのは、墨村の当主一人だけだった。その事を知った繁守は、孫の頭にチョップをお見舞いしてやる。ちなみに時音はすでに祖母に話してあったので、意外とすんなり受け入れられた。

「うるさい！少しは静かになさい、じじい！」

「なんじゃと!?!」

時子の邪険な対応に、繁守はまたもやつつかかるうとしたが、良守が止めた。

「静かにしてくれて。ネリが起きちまう。」

「む…だがな良守。なぜワシに話さなかった？そうすれば、この子がここまで疲弊することも無かつたらうに」

「……？どづいづことだ？」

「裏会に、もっと早い段階で引き取って貰えた、ということですよ」
時子が繁守の言葉を引き継いだ。

「この子…邪気が感じられないのに、完全変化しているわ。…純粋な妖気だけで変化しているのね」

手をかざして読み取る祖母に時音は、改めてネリの規格外っぷりに驚きを隠せなかった。

（おばあちゃんの言う通り…この子は他と随分違う）

「裏会…って、さっきの奴みたいなのか」

あまり良い印象を持たなかったのか、良守が顔をしかめる。時音もあまり詳しいことは知らないで、口を閉じていた。

「突然変異…というところ聞こえは悪いが、この子の様な異能者を引き取ってくれる組織でもあるんじゃない。正守はさっきの“夜行”の頭領でもある。」

「そうなの！？」

あまり親密とは言いがたい兄弟なので、あまり顔を合わせる機会がない長兄・墨村正守。

裏会は、もともとが異能者の取りまとめと、闇の事件の解決が目的で設立された組織である。まだ闇が深く人々の側で息づいていた時

代、妖から人々を守るため、異能者達が自治組織を立ち上げたのが始まりだという。

だが妖が減った現代では、裏会の仕事はもっぱら“人間”の管理が主である。その裏会に所属していた正守が立ち上げた末端実行部隊……それが“夜行”だった。

「力を持て余している者に居場所と、力を使う場を与えるそれが裏会じゃ」

「ふーん……。」

繁守の言葉に何か感じるものがあったのか、良守がネリを見る。だが、彼女は安らかな顔で何も知らず結界の中で眠りこけていた。

優しい朝日が少女の銀髪を照らす。まだ地平線から顔を出したばかりの太陽は、ネリを緩やかに起こていった。

「……ここは……」

体を起こすと服が違うものになっていて、どこにも血の跡は無かった。

「ああ……時音さんの家か。」

ピチュピチュ……と小鳥のさえずる声以外、何も聞こえない世界でネリは布団から出てみた。

「ちょっと…寒いかも」

自分専用の異空間を探って、カーディガンを取り出すと、羽織って外に出た。

伝統的な日本家屋には縁側というものがある。ちょうど庭に面していたのか、目の前には開けた空間が広がり、右の方には道場があった。

「さすがに雪村家の間取りまでは知らないな……」

唯一知らない事があった、とネリは人知れず笑う。靴はどこにあるのか分からないので、外におりることは出来なかった。

しばらく庭を眺めていると、不意に視線を感じてそちらに目を向ける。

そこにはちょっと驚いた表情をした、腰まで長い髪を垂らした時音がいた。

「おはよう、ネリちゃん」

「お…おはようございます…」

なぜか縮こまって挨拶する年下の少女に、時音は苦笑しつつ近づく。

「起きちゃったのね。身体は大丈夫そう？」

「え…あ、はい。大丈夫です」

妖狐化はいつの間にか解けていたが、身体の異常はみられない。安

静にしていれば治る程度の毒だったのだ。

「あの…ね、ネリちゃん。昨日のことなんだけど…」

時音がネリの横に腰をおろし、言いづらそうに口を開いた。ネリは多分、再生したヨキの話だろうなと思いつつ黙っていた。だが、時音の言葉は予想の斜め上をいくものだった。

「墨村家の方で、ネリちゃんが夜行に行けるよう、話つけてくれるみたい。…ごめんね、なんか追い出すみたいで……」

「あ、大丈夫です。むしろ御実家を通してもらえる方が、正守さんに信じて貰いやすいし」

だから気にしないで下さい、と銀髪の少女が微笑むと、時音は真剣な眼差しを自分に向けていた。

「ネリちゃん…一つだけ、教えてくれない？」

ネリがきよとん、とした顔を見ると時音がずい、と詰め寄った。

「あなたにとつての“平行世界”って何？あなたはこの世界をどこまで知っているの？」

「一つじゃないじゃん…とツッコミたかった少女だが、今後のこともあるので正直に話す。いや、話したいのはやまやまなのだが……」。

（だ・か・ら！最初っから話してるんだってばー！）

「ん…あ…えっと、ですな……」

内心では汗を滝のように流しつつ、時音が納得する答えを必死で考える。

(考える…考える、私！ここはお話の世界だなんて言えっこ無い！
！…ていつか、最初から嘘言っつて無いのに！！平行世界……平行？)

「あ、そっか」

嘘を必死で練り上げていたネリだったが、以外にも答えは自分の中にあつた。

「私の世界と、この世界って次元がすごく近いんです。」

「……何が近いって？」

理解していない時音に、ネリが身振り手振りで説明する。

「世界って案外しつかりしているようで枠が曖昧なんですよ。時音さん達が使う四角い結界術で考えてみるといいかもしれません」

ネリは落ちていた木の枝で地面に絵を描き始めた。

「二つの四角い結界。一つをこちらの世界、もう一つを私の世界としましょう。」

いつもはしつかり保たれている結界ですが…術者の心理状態や、性格、力量などで不安定になったり、柔らかくなったり、大きさが違ったりします。」

ネリは二つの四角が、ぶつかる絵を描いた。

「そういう時にこの二つの世界が重なったりすると、私の様に不運な者が違う世界へ移動してしまう。」

「……まあ、私の能力も関係しているとは思っているので、“不運”とまではないきませんね。自業自得です」

「……………」

あつげらかんと言う異国の 否、異世界の少女に、時音はどうにか頷いた。

「じゃあ……あなたが私達の事を知っているのは？どうしてそんなに烏森に詳しいの？」

「本ですよ」

ネリはピン、と得意気に人差し指を立てた。

「私、この世界の歴史が書かれた本にアクセス出来るんです。」

「この世界の…歴史…？」

「ええ。信じてもらえないとは思いますが。 “繋ぐ” 能力って、結構凡庸性高いんです」

アハハ、とネリは立ち上がった。時音はまだ理解が追いつかない様子で目を白黒させている。

太陽は、そんな二人を力強く照らしていた。もうそろそろ朝ごはんの時間だろう。

ネリは、自分に体当たりして接してくれた時音に感謝した。自分からネリを知ろうとしてくれる人は、今までいなかったのだ。

「時音さんなら、大丈夫です。お仕事も全うして、ちゃんと自分の役目を最後まで果たしますから」

じゃあ、また後で。とネリは部屋に帰っていった。

予備の制服に着替えて部屋を出ると、ちょうど時子が廊下を渡って来るところだった。

「おはようございます」

「おはようございます、ネリさん。毒はもう残っていないようですね」

「はい。昨夜は勝手に仕事場をお邪魔してすみませんでした。」

ネリが、しおらしく頭を下げると時子はふんわりと笑った。

「いいんですよ。ささ、居間まで案内しましょう」

「ありがとうございます」

思っていたほどの叱責は無く、ネリはホッとしながら小さなお祖母さんについていった。

「ええ！？ガスコンロの火が着かない？」

「そうなのよ…時音。あいにく火種のマッチも切らしていたみたいで……どうしましょう」

オロオロとする時音の母、静江に少女は唸ってしまった。これでは朝ごはんが作れない。

(コンビニで朝ごはん買ってくるしかないか……)

台所に諦めの空気が満ちてきた時、様子がおかしいことに気がついた、時子とネリが顔を出した。

時音に、名案が閃く。

「そうだ！ネリちゃん！昨日使ってた炎を出す技、使えない！？」

「ふえっ！？」

時音の鬼気迫る様子と、台所状況をきいてネリは嬉々として頷いた。

「えいつ！」

目を閉じて集中した跡、何となく掛け声を出してみる。

(なんか烏森じゃない方が…自分を保つたまま出来る感じだな)

何の苦痛もなく狐耳と尻尾が生えてきたことに、時子は驚いていた。

(自我を無くさずに完全変化をするとは…)

時音から言い出したので時子は止めなかったが、袖の中で当主は右手を構えていた。

『ええっと…オニビダマ、一つだけっ』

尻尾の先に灯った火炎の玉をガスコンロに置くと、火が灯る。静江が、ネリの手を両手で握り感激したように振った。

「ありがとう、ネリちゃん！待っててね、今すぐに朝ごはん作るから」

直後、物凄い勢いで腕を奮い始めた静江に、ネリは狐耳をピクピクさせていた。

(す…す…す…)

平和な朝はゆっくりと過ぎていった

(9) 黙っててすみません (後書き)

4人もお気に入り登録してくださって感謝感激です!!!

頑張ります!

(10) 烏森のみなさん、しばしさようなら

休日なので学校は無いのだが、制服でいると落ち着くので、自分の部屋でネリはくつろいでいた。

和箆^{わたんす}笥と三面鏡の化粧台、背の低い机が部屋に置いてあるだけで、何も無い広い和室である。焦げ茶色の大きな机には、ネリの数少ない持ち物が並べてあった。

小さなコンパクトと、デジバイスのみである。

血で汚れた制服は静江さんがクリーニングに出してくれたようで、礼を言っておいた。

「夜行から、誰が墨村君の家に来るのかなあ？」

実行部隊・夜行に所属するとなると、自分は何をするのだろうか、とネリはひとりごちた。

夜行は戦闘班、諜報班、運送班、救護班などの班に別れている。ネリの能力は応用がきくため色々な事が出来るのだ。

「戦闘は…変化すれば出来なくも無いし、諜報は…“鏡渡り”を使えば相手に見られずに盗み聞きできるし…運送は…目印さえあればどこでも空間繋げられるし…救護は…傷を“繋げば”いいんだから…？」

はたと気づく、妖狐のネリ。

(私、意外と何でも出来るんじゃない…?)

おおお…と人知れず感激していると、廊下から声がかかった。

「ネリちゃん、正守さんが墨村の方に来たって」

ネリは一世一代の大イベントが起こる気がした。

「初めまして、墨村正守です」

額に傷痕、頭を丸く刈り上げている出で立ちで、ネリと向かいあったのは墨村三兄弟の長兄、正守だった。

（頭領自らですか　！？）

「初めまして、ベアトリックス・ネリ・ユリカです」

夜行のトップ自ら足を運ぶとは思っていなかったもので、ネリは驚いていた。

正守は21歳とは思えないくらい老け顔で、苦勞が多かったんだろ
うなと銀髪の少女は観察する。

「良守と同じく、ネリちゃんって呼んで良いかな？」

「あ、はい。そう呼んで下さい」

低めの声で正守は嬉しそうに笑った。

「ネリちゃんさあ、妖混じりにしては邪気が無いよね。獣人型の統合型つてきいたんだけど」

「はい。なんか時子さんには純粋な妖気だけで変化してるって朝、言われました。」

「純粋な妖気、か……。それは追々花島に任せるとして……ネリちゃんさ、多重能力者なんだって？」

自分の情報はどれくらい知っているんだろう、と思いつつネリは素直に頷く。

「空間支配系の能力……と未来予知が出来ます。」

「未来予知ねえ……あ、じゃあ俺について何か見えたりした？」

正守が身をのりだし楽しそうにきく。その表情には歳の離れた妹をあやすような雰囲気がある。

少しムツとして、ネリは小声で言った。

「見えましたけど……結界張らなくていいんですか？多分、繁守さんに知られるとまずいと思いますよ」

「え、そっち関係なの！？」

どっちだ、と内心イラついたネリだったが、正守は素直に防音用の結界を張った。

「これで良いかな？」

何の行動も起こさずに結界を張る正守に関心しつつ、ネリは息を吸

った。

「裏会最高幹部、十二人会・第七客に就任される…とか」

「……………ふうん」

正守が面白そうに顎に手を当てる。

「成る程…凄いなあ。他にはある？」

「他には……………」

余り驚かれ無かったので、ネリは次のことを考えておらず、言葉が
つまる。

「無い…と思います」

「そうか……………じゃあ、今度は……………」

二人を困んだ結界が無くなり、外の世界が近くなる。だが、次の瞬間ネリだけが結界に封じ込められた。

「ありや？」

「空間支配系の能力とやらを俺に見せてくれる？」

「あ……………はい、分かりました」

きつと班決めや、教育係をどうするか決めるのに、色々知る必要があるのだろう。ネリはあまり深く考えず、コンパクトを取り出した。

正守が興味を引かれたように少女を見つめる。

「鏡渡り」及び「空駆け」発動」

右手の親指を鏡に押し付けると、ネリは難なく結界の中から姿を消した。そして、一拍置いて正守のすぐ隣の空間が歪む。そこからひよい、と銀髪が顔を覗かせた。

「これで良いですか？」

「……驚いたな」

今度こそ驚いたようで、正守はしばし言葉を無くしていた。

「……うちには、100人くらいの異能者がいるけど君ほど凄いの、初めて見たよ」

隣に舞い降りた銀の天使に正守は、期待をのせて言った。

「うちの夜行に、来てくれるかい？」

「喜んで」

わあい、やったよレナモン！とネリは心の中で、ガッツポーズをした。

ネリという異世界の少女は、一つの投石として世界に波紋をよんでいくのだった……。

「今までお世話になりました」

「気をつけてな」

夕飯を墨村家でご馳走になった後、仕事前の良守に見送ってもらった。隣には同じく時音がいる。両家の当主の姿は無かった。

「頑張つてね」

「はい！あ、そうだ…時音さん」

ネリはごそごそとポケットからロケットを取り出した。

「これ、時音さん持っていてくれませんか？」

「え？良いけど…」

よく分からないまま時音が受け取ると、良守が不思議そうな顔をした。

「これ、何なの？」

「御守りみたいな物です。いざというときに開いてみて下さい………
必要になるか分かりませんが。」

金細工の小さなロケットを正守も何か言いたそうに見つめていたが、結局何も言うことは無かった。

「じゃ、行こっか。」

「はい！」

ネリは正守と共に、暗い夜道を歩いていった。

「この先の空き地に、部下を待たせてあるんだ。彼の能力で裏会まで行くからね」

「はい」

ネリは何も荷物を持たず身軽なまま、足を進めていた。ネリの能力で、異空間に必要な物は全て揃えてあるから、わざわざ持ち運ぶ必要が無いのだ。

それを正守に見せたところ、またもやびっくりされて、ネリは気分が良かった。

「そういえば、さつき時音ちゃんに渡したやつ、何だったの？」

「ああ、あれですか？何の仕掛けもない、ただの鏡が入っているだけですよ」

「鏡？」

そこで正守は、昼間空間支配系の能力を使った時、彼女がコンパクト

トを手にしていたのを思い出した。

足は止めないまま、正守が首を傾げる。

「まさか、開いたらネリちゃん飛び出す……とか？」

「少なくとも、それは出来ますね。目印にはなりますから。」

「へえ……随分長距離でも移動出来るんだね」

関心した顔が良守そっくりで、ネリはくすりと笑った。

「裏会のお山にも、目印をおけば瞬間移動出来ますよ」

「……あれ？俺、裏会の本拠地が山にあるって言ったっけ？」

何処と無くピリツとした空気になったのだが、ネリが気がつくことは無く、適当に言い繕った。

「ええと、時子さんに聞きました」

「ふうん……」

それから会話は無く、すぐ空き地に到着した。そして案の定そこにいる正守の部下は

（蜈蚣^{むかで}さん、かあ。まさか本当に彼の乗り物に乗る日が来ようとは……）

運送班（ただし、彼一人しかいないので超多忙である）主任の、蜈

蚣だった。顔の下半分を布で覆い、長い髪に陰気な顔、ちよつと声をかけづらい男性である。

「ちよつと怖く見えるかもしれないけど、天然ボケしてる面白い人だよ」

ネリの躊躇を見抜いたのか、イタズラっぽく正守が笑った。

「頭領……?」

猫背な姿もやはり暗い雰囲気に一層拍車をかけている。気にしないで、と正守が彼に手を振るとムカデは首を傾げつつ口元の布を無言で下ろした。

フウウ…

彼の吐息が形を取り始め、巨大な黒い生物が創られる。それは彼の呼び名でもある、『ムカデ』に酷似した形状であった。だが、あまりにも大きい。

「噛みつきはしないから、大丈夫。さ、乗って」

「お邪魔します…」

ぼんやりした黒い霧の様な姿なのに、きちんと足に堅い感触が帰ってくる。わあ、とネリが目を輝かせると、蜈蚣が少しだけ嬉しそうに目を細めた。

空中に浮かび上がると、風が少女の銀髪を揺らし景色が遠ざかって

いく。

家の灯りがみるみる小さくなっていった、良守達が住む町が全て一望出来る。

(小さな町なんだなあ)

烏森という特殊な土地があるというだけで、ここに住む人々は知らず知らずの内に危険にさらされているのだ。

そして町の人達の命も、烏森の結界師達は預かっている。

400年もの長い年月の間、誰にも知られることなく。

「……凄いなあ」

「そうかい？夜行には、君ほどじゃないけどもっと特殊な能力を持つ人もいるよ」

「あ、いえ……そうじゃなく……」

ネリの呟きを正守が丁寧に返してくれたので、少女は訂正した。

「これだけ多くの人の命を、400年も守ってて…結界師って凄いなあって思いました」

「……そうかな」

暗い雰囲気をもといだした正守に、ネリはハツとした。

長兄にもかかわらず、正守には家を継ぐ資格が無いのだと思いついたからだ。

(正守さんには 方印が無い)

正当継承者の証である方印は、雪村家は左鎖骨の下。墨村家は右手の手の平に生まれつき刻まれている、黒い正方形の刻印である。

「家業とはいええ、こんな土地に400年、よく二家族を縛り付けたもんだよ」

「……………」

「毎夜毎夜、休み無く妖を退治してさあ。何なんだろうね、あの土地」

どこか憎々しげに聞こえたのは気のせいではない。正守は、憎んでいる。

継承者の方印が自分に出なかったことに。

すなわち、烏森が自分を選ばなかったことに。

「……………」

正守達、結界師達はまだ烏森の真実を知らない。あの土地もまた、悲劇を400年も抱え、『ある人物』を縛り付けているということに。

(さすがにお殿様について言えないもんね……………地下の異界で、子供のまま生き続けているなんて)

400年もの昔、霊なるモノを引き寄せる特異体質を持った一族

烏森家があった。

代を重ねることにその力は強まり、寄ってくる妖を退治するようになったのが正守達、結界師　　ということになっている。

だが、両家の結界師達に伝わる伝承には、語られていない真実がある。

烏森家の中で飛び抜けて強い力を持ってしまった、10歳にも満たない子供を、開祖・間時守が異界に封じ込め続けている　　ということ。

(…どっちにしても、両方可哀想…)

「　　ネリちゃん？」

「……え？あ、はい。」

「大丈夫？突然黙りこんじゃって…」

「あ、大丈夫です。少し考え事してました」

ネリが苦笑いすると、正守はそっか、と薄く微笑んだ。

(11) 限君、こんにちは

裏会までは、約2時間半で着いた。あたりは真っ暗で寒く、9時近い。能力でジャンパーを出していなかったら、上空で少女は氷漬けになっていただろう。

(遠かった…)

裏会本部の正面門を二人と共にくぐる。夜も遅いというのにそこには見知った顔が二つあった。

(白道と黄道か…：本当にこの二人、仲良しだよね)

何かというと常に行動を共にする二人組に、ネリはちょこんと頭を下げた。夜行の構成員には今後、お世話になるのだから仲良くなる必要がある。

紫の瞳に銀髪という異色の組み合わせの美少女に、坊主二人は一瞬動きを止めたが、会釈を返してくれた。

「随分遅かったんですね、頭領」

「いや、つい実家で話し込んでね…まだ皆起きてるかな？」

「勿論ですよ。酒樽開けない様に我慢してると思います」

そこで、眉毛の濃い方　黄道が、ネリの頭を優しく撫でた。

「良く来たね、ようこそ夜行へ」

「…よろしく願います」

緊張でガチガチのネリはそう言うのが精一杯だった。

始まった時間が遅かったせいもあって、自己紹介と子供同士の面通しを済ませたら、子供達は解散となった。

だが、11時過ぎである。中学生が休むには少し早かった。

「ねえ、能力なんか見して」

「ネリちゃん、多重能力者ってホント!？」

「せーふくかわいいー!!」

「銀色だー!!」

容姿の事から能力の事まで、揉みくちやにされつつもネリは一つ一つ丁寧に答えた。副長の刃鳥が、解散を命ずるまで質問攻めは続き、やっと解放されたのは深夜近くだった。

「今日はこの部屋で休んでね」

助けてくれた刃鳥に導かれて、一室に案内されたネリは一人部屋を与えられた。こんなに大所帯な組織なのに、個人部屋を与えられた事にネリは心底驚いた。

最悪、相部屋だろうと思っていたからだ。

「ありがとうございます。新入りなのに一部屋丸々頂いちゃって…」

「あら、気にすることないのよ。今日はゆっくり休んでちょうだい
ね」

明るく手を振る副長に、ネリは会釈した後部屋に入っていった。

（正守さんって、意外と気がきくひとなんだなあ）

良かったと、ネリは深く考えず布団に横になった。

「頭領、ただ今戻りました」

「入れ」

正守の執務室の扉が開けられる。そこから入ってきたのは、先程ネリを案内した副長だった。正守も刃鳥も、親睦会とは打って変わって真剣な表情をしている。

「彼女は寝たか」

「はい。余程疲れていた様ですぐに横になったようです」

「そうか」

腕を組んだまま、何かを考えている夜行の長に、刃鳥は黙って控えていた。

「刃鳥。」

「はい」

「頼みがあるんだが、良いか」

「何でしょう」

打てば響く答えに、正守は腕組みを解くと低い声で言った。

「ネリを可能な限り監視してほしい」

「……はい」

副長の返答に一瞬の間が入ったのは仕方の無いことだろう。入って早々の仲間、しかも14歳の少女を監視しろというのだから。刃鳥は目だけで疑問を返した。

「未来予知…にしては彼女、色々おかしいんだ」

「多重能力者と、聞きましたが」

「結界師に相等する空間支配の力も気になるが、未来予知……が少々引つかる」

正守が一段と声を潜めた。

「彼女は幹部入りの件を知っていた」

「……!？」

冷静沈着な刃鳥の目が大きく開かれた。正守がくつくつと笑う。

「心臓が止まるかと思ったよ。第七客、だってさ。」

俺だって知らないのに。」

身分秘匿の掟がある裏会幹部・十二人会は、予知するにしても内容が内容だけに、慎重になる必要がある。幹部入りの件は、ついこの間正守にも連絡があっただけだからだ。

それを正確に当ててみせた少女、ネリ。

正守が警戒するのも無理は無い。ただでさえ最近、夜行の情報漏洩に頭を悩まされているというのに。

「妖混じりといっても邪気は無く、完全変化しても自我を失わない。それに加えて上位の空間支配に、正確な未来予知……怪しむなという方が無理だろう」

「今までよくこちらに引き取り要請の連絡が来ませんでしたね。それだけの能力を14年も隠していられたとは」

刃鳥が関心したようにいうが、正守は実家で聞いた弟の話を思い返していた。

(良守の話だと、妖狐化するようになったのは相棒の狐が死んだ直

後……妖混じりとは言えない、か)

妖混じりは、寄生型にしる統合型にしる先天的な特徴である。生まれつき備わった物であり、ネリはそのどちらにも当てはまらない。

(まるで人間から妖になったみたいだな)

正守は、自分の想像で背筋が寒くなるのを感じた。

「ふああああ……良く寝たあ……あれ？」

とてつもなく爽やかな目覚めで身体を起こすと、すぐさまネリは異変に気がついた。まだ……陽があがっていない？

「あれ？私、そんなに早起きするタイプじゃないのに……」

むしろ寝坊するタイプだからこそ、相棒に毎朝起こしてもらっていたネリだったのだが、目を擦ってみても変わらない。

まだ太陽は顔をだす気配さえ見せておらず、携帯で確認してみればまだ4時前だった。

「うへえ……なんでこんな時間に？まあ……いつか。」

廊下に出てみると肌寒いので、ジャンパーを出したのだが、かさばって動きづらかった。どうにか我慢しつつ庭に出てみる。

都会で育ったネリにとって、そこは別世界だった。

「うわぁ…全部森だ……」

山の中腹にあるのだから当然なのだが、ネリは薄闇の中で初めて見る景色に感動していた。

「でもちよつと見づらいかな？屋根に登るか」

瓦が敷いてある日本家屋なので、細心の注意を払う必要があるだろう。足を踏み外すと瓦がずれて落ちるかもしれないからだ。

（上着…動きづらいから脱いじゃお）

モコモコのジャンパーを適当な木にかけて、ネリは何もない空間に右手を突き出した。

「二点の座標を固定、“空駆け”」

少女の右手の延長上に、空間の歪みが生じる。まるで布に一筋切れ目を入れたような入り口に、ネリは迷わず身体を入れた。

足を踏み入れた瞬間、そこは屋根の上である。風にあおられてバランスを崩しかけたが、何とか持ちこたえる。一瞬冷や汗をかいたせいか、寒気がした。

（完全変化しても、大丈夫かなあ？邪気は出ないし、きっと分からないよね）

もう何でも良い、寒い、とネリは屋根に座り目を閉じた。

フワリ、と九つの尾が生える。

『ん〜やっぱり自前の毛皮が一番あったかいや』

もふもふの尻尾は、こうして見てみると思ったより太くて大きい。九本を全て伸ばしきるとネリの上半身がすっぱり隠れてしまつぐらいいだ。

『一本一本自分の意思で動かせるなんて、変な感じ』

それともう一つおかしく感じるのが、妖狐化した時の声だった。変に反響して聞こえる気がしてならない。

『それに自分の声じゃないみたいな…』

まあいいか、と考えるのをやめて美しい山並みを堪能する。もしかしたら朝日を拝めるかもしれない、とネリは尻尾の一つを胸に抱いた。

夜行の朝は早い。子供でも毎日鍛練に費やす為に、自然と早起きになるのだ。

空が白んできた頃、一人の少年がむくりと起き上がった。数少ない一人部屋を使っているの、他人を起こすこと無く移動できる。ラニングをしようと、庭に向かっているのだ。

(今日も冷えるな…)

薄暗い廊下をきびきび進む様子は、長くこの場で生活していることがうかがえる。

靴に履き替え庭に目をやった時、視界の端にいつもとは違うものがあるのに気がついた。

ひとつ飛びでそれに手を伸ばすと、ギクリとした。少年にデザインなどは分からないが、五感は一倍感えている。

(嗅いだことの無い…女の匂いだ)

頭の中で、匂いと名前を照合してみても思いあたる異性はいなかった。

(新入りか…ん？でもなぜこんな所にこんな物が?)

何だか嫌な予感がしつつも誰もいない庭を見渡してみる。薄い群青色の空の下、少年は銀色が屋根の上でキラリと光ったのを見た。

距離は遠いが、妖混じりである少年には問題ない。変化しなくとも、ものの10秒で目的地の下についた。

勝手知ったる夜行の施設である。ほとんど音をたてないまま、屋根の上に飛び上がり　こけそうになった。

「なっ……」

(こいつ、妖混じりか!?)

ピン、とたった黒い耳と少女を包み込むように温める黒と銀の尻尾。少年と同じく獣人型の統合型。しかも寝ながら完全変化している。自分の尻尾を抱き枕にしたまま、団子の様に屋根の上で眠りこけているのだ。

(変化中なのに邪気を感じない…何なんだ、こいつ)

訳が分からず自分の髪をガシガシかくと、少女の耳がピクリと動いた。

『…あ、いつの間にか寝て…………た?』

バチ、と見事に少女の藍色の瞳と少年の黒い瞳がかち合った。

『あ…………えと、おはようございます?』

ネリが何とか寝ぼけつつも話しかけると、少年は一步後ずさる。そして少女は、目を数回しばたいてびっくりした。

(ツンツン頭に、三白眼、人を寄せ付けないこの独特の雰囲気!?)

「お前、妖混じりの禁止事項知らないのか?」

険の混じった声で、少年が銀髪の少女を問いたです。

少女よりも頭一個分背の高い少年　　志々尾限ししおが、ネリのジャンパーを片手に立っていた。

(実際に見ると、確かに相手を拒絶するオーラ全開だな…)

志々尾限は、友人も作らず常に一人で行動することが多い少年である。だが、決して独りが好きなわけではなく、自分を戒めているのだ。

他人を傷つけぬよう、壊さぬように。

「おい、お前、聞いてんのか？」

『あ、うん。一応頭領から変化していいって言われてるんだけど…』

「…そうか」

ならいい、と少年は踵かかとを返しかけて、止まった。少女のジャンパーを手にしていることを思い出す。

「これ、お前のだろ。ちゃんと持っとけ」

『あ……』

わざわざ持ってきてくれた少年には悪いが、ネリは焦った。

(ぎゃー、目印動かされちゃったー!?)

広い夜行の敷地を能力で転移するため、あえてしまわずに木にかけておいたのだが……少年を責める訳にもいかない。

用は済んだ、とばかりに少年は屋根から飛び降りる。ネリはとにかく礼は言っておかなきゃ、と聞こえる程度の小声で言った。

『ありがとう志々尾君』

少年は一瞬振り返りそうになったが、そのまま走り去ってしまった。

(12) 妖混じりの皆さん、よろしく

うるさい程自分の心臓が鳴っている。きっとそれは、思いがけず美しい人を見たせいだろう。

いや、嗅いだことこの無い甘い香りを吸ったせいかもしれない。

バババ、と寝間着を脱ぎ去ると、体に刻まれた青い火炎の紋様があらわになった。身体を一周するように腹や背に、蛇の如く刻まれている。

少年　　限は、薄闇の中で深く息を吸った。

(何だったんだ、あの女…。頭領に完全変化を許されているだと？ 戦闘向きじゃ無いからか？)

あまりにも無防備な異性の寝顔を初めて見たせいか、限の顔からはしばらく朱が抜けそうになかった。

(まあ、獣人型ならどうせアトラ達と組み手するだろうし…。その時にでも戦闘向きか、分かるだろ)

夜行の普段着に着替えると、少年は部屋の電気もつけずに瞑想を始めた。

『あぁびっくりした　まさか、起きて早々に彼と遭遇するとは』

異空間にジャンパーをしまい、ネリは朝焼けを眺めていた。

その瞳はどこか暗い。

(どうにか彼を死なせずに済む方法…無いかな)

志々尾限は、烏森で良守達の補佐をしている途中、ある妖によつてその命を散らす。唯一、原作の中で残酷な運命をたどる人物なのだ。

(何とか…助けたい。でも、どうすれば……?)

いつになく真剣に頭を悩ませていると、不意に後ろから声をかけられた。

「やぁ、早起きなんだね」

『あ…頭領。おはようございます』

狐耳を生やしたままの少女を見やって、正守は明るく笑った。

「今日は…急だけど訓練してもらってから、ちゃんと休んどかないと。」

『そう…ですね』

抱いていた尻尾に顎を乗せると、正守は獣耳ごと少女の頭を撫でた。

「ネリちゃんは今まで通りにしていれば良いんだよ。しばらくはこっちの生活になれることだけ考えて」

これからの生活に不安を感じているのかと、慰めてくれる正守にネリは、ふと気になることをきいてみた。

『あの…私、どこの班になるんでしょうか？』

「あ、もう班のこと聞いたの？実はね、まだ決めてないんだよ」

『え？』

てつきり人数不足の運送班か、救護班かと思っていたネリだったが、それを聞いて正守は『それはナイナイ』と、手を振った。

「君みたいに能力に多様性があると、迷うんだよね。どこだったら君の能力を最大限に活かせるか…ね。」

『あの…もし言っても良いなら私、希望があるんですけど……』

「え？」

早朝、正守と会えてこの話をする事が出来、ネリはこの世界の『何か』に感謝した。

震えそうになる喉を叱咤する。言葉に出したら、後には引けないのだから。

『私、戦闘班に入りたいですー!!』

夜行初、14歳女子の戦闘員が誕生した瞬間だった。

「……………ということに、なった」

「なぜ女の子を戦闘班に入れる選択肢が存在するのか、理解に苦しみます。」

「そう言うなよ、刃鳥」

執務室で正守は自分の額に手をやった。その顔には心配と、期待が半分ずつ現れている。

「実際どこに配属させるか、悩んでいたのは確かなんだ。本人の希望がそれなら…上手くいくんじゃないか？」

「ですが、まだ戦闘経験も無い14歳、しかも弱い女子ですよ？」

それなんだがな、と夜行の長の顔になった正守は額から手を外し、有能な部下を真っ直ぐ見た。

「意外と、そうならない気がする　勘だけど」

正守は訓練所の森に思いを馳せた。

「どーもオ、初めまして！私、花島亜十羅、専門は妖獣使いでっす」

「は…初めまして。ベアトリックス・ネリ・ユリカです。ネリって呼んで下さい。」

「了解。じゃ、ネリ。まずは変化してみてください？無理はしないでね」

「はい」

フウ ……とネリが、軽く目を閉じてまた目を開ける。すると紫の瞳は藍色に染まり、ザンツと9本の尻尾が出現した。

黒い獣耳も勿論健在だ。生来の耳は、見当たらなくなるのだから不思議である。

アトラが、おおくと拍手をした。妖獣使いの彼女は、初めて見るネリの変化がどれだけあり得ないことか重々承知していた。

(半信半疑だったけど……頭領が許可するわけね)

ネリの瞳には知性があり、周囲に発する妖気は威圧感すら与えるものがある。

純粹な妖気は、半端な妖混じりとは思えない強さを持ち、アトラは背筋がゾクゾクするのを感じた。

『あおう……次は何をすればいいんでしょうか？』

縦に割れた瞳孔は、どこからどう見ても獣の瞳なのに、姿形は人間の少女だ。

アトラは観察するのを一旦中止して、ネリに説明を始めた。

「まずはね、うちの子と遊んで欲しいの」

『遊ぶ？』

ネリは盛大に首を傾げた。アトラの妖獣達のことも、勿論ある程度は知っているが『遊ぶ』というのは、自分の指導にどう関係するの
か。

「カモン雷蔵！」

『うそ！？』

アトラが呼んだ名前にネリは目を見開いた。まさかと思いつつも、
一番聞きたくない名前だったのだ。反射的に辺りを見渡すと、突進
してくる巨大なクマが視界に入る。

『出たア』

『！？』

ネリの尻尾までもがアワアワと慌てた動きをするのを見て、アトラ
はにっこりした。

（さーて、雷蔵の『遊び』相手、出来るかな？）

久しぶりに羨しがいのある子が入ってきた、とアトラは目を輝かせ
た。

『ををををん!!』

新しい玩具を見つけた赤ん坊の如く、ネリに突進してくるのを、少女は何とか逃げずに踏みとどまっていた。

『いやいや、アトラさんこの子と遊ぶってまさか　　って居ないし!!!!』

クマと遊ぶ。

それはすなわち、体力と体術を身に付けろということだろうか。

『ええいやってやろうじゃないの!私は鬼ごっこで捕まったこと無いのよ!』

『をん!ををん!』

あと数メートル、というところになって巨大な白いクマは急停止した。衝撃で地面が抉れ、ネリは後ろに足を引いてなんとか踏ん張る。じい、と白いクマ　　雷蔵は小柄な少女を見つめた。ネリも負けずにその瞳を見つめ返す。

『こんにちは、雷蔵。私、ネリ。』

人語を解するのは知っているので、ことさらハッキリ言う。

『何して遊ぶ?雷蔵』

『ネル！ネル！あそぼ！はしろ！』

ベロンと雷蔵の長い舌が、ネリの顔を舐める。少女は嫌がらず、雷蔵の鼻面を優しくかいてやった。

だが次の瞬間、雷蔵の新しい友達はかき消えた。

『ネ、ネル！？』

『ネルじゃなくて、ネ・リ』

雷蔵が真後ろを振り返る。少女は木の枝に足の平を付けて逆さまになっていた。さながらコウモリのような体勢である。そのまま、パンパンと手を叩いた。

『鬼さんこちら、手の鳴る方へ！』

間髪入れず少女は木の枝を蹴って走り出す。まるで、ネリだけ世界が上下逆さまになったようだった。

雷蔵の目が、楽しみに細められる。

『ネル！ネル！おいかけっこー！』

巨体に似合わず俊敏な雷蔵に、ネリは舌を巻いた。その時、森にアトラの声が響く。

「あんまり遠くに行っちゃだめよう　　！！」

声からアトラの位置を割り出し、さらには空間を繋いで少女は愛用

のダガーを上空に投げた。

『帰るときに必要なので、持ってて下さあ　い!!--』

ダガーの刀身が鏡代わりになるので、目印になるのだ。

『さあ、行こつ!雷蔵!』

『をん!--』

二匹の獣はじゃれあいながら、森の中へ消えていった。

一方アトラは、自分の方へ飛んできた小刀を、驚きながら掴み取った。

(あの子の位置からは、見えないはずなのに!)

柄の方から飛んできたので楽に取ることが出来たが、彼女はダガーがあり得ない軌跡を描いて飛んできたのを見ていた。

「これが空間支配…ってことね」

一人と一匹をスタート地点の木の上から見守りつつ、飛び立とうとして　やめた。

アトラの隣に風が吹く。ギシ、と幹がたわみ、最近顔を見せなくなった愛弟子がそこにいた。

「あら、限!あんたから来るなんて珍しいじゃない?」

「……………」

黙ったままかと思いきや、夜行の普段着 戦闘服に身を包んだ
少年は、口を開く。

「あの女……………使えるのか？」

「もう、連れないわねえー。雷蔵と今遊んでるわよ」

「あんな細い奴、アホグマがのし掛かったら終わりだぞ」

「……………心配なら見てくれば良いじゃない？」

アトラがこのこのつと少年を肘でつつくと、限は顔をそらした。

「……………」

「あら？もしかして本当に一目惚れ？」

「ち、違う!!」

チツと舌打ちして、限は木から木へ飛び移り始めた。その姿をアトラの声が追いかける。

「昼までに戻ってきてって伝えてくれるう ……？」

限の乗り移った木が一回揺れを止めた後、ネリの方向へ続く木が順に揺れ始める。

アトラの顔に先程までとは違う、心の底から期待する笑みが浮かん

だ。

「ンフフフ…」

（頭領がきいたら喜ぶだろーなー）

ルンルン、と軽い足取りでアトラはその場を後にした。

「あの女…どこまで行くつもりだ」

引き受けなきゃ良かった、と後悔しつつも足は変わらず木の幹を蹴る。

「妖気が垂れ流しだから追いやすいが…」

（人間なのに、なぜこんなに純粹な妖気が出せる？）

同じ獣人型もあつてか、少年は気になっていた。そして、雷蔵に捕まる事なくこの距離を女の足で走った事に驚く。足だけ変化している少年が、未だに追いついていないのだ。

「本当に、何なんだあの女」

目にも止まらぬ速さで森を駆け抜ける少年は、イラつきつつもアトラの命令に従って跡を追っていた。

(12) 妖混じりの皆さん、よろしく (後書き)

8人もの方がお気に入り登録してくださいました!!!

ありがとうございます。

(13) やつと落ち着いて話せたね

『ここら辺でいつか』

ネリは木の幹を足の裏でしっかり踏みしめて、地面に降りた。直後、雷蔵が息を切らして少女に飛びかかる。

『ぎゃあっ!!死ぬから、死ぬから雷蔵さん!!』

『ををん!』

『乗るなあ!!息が出来ないでしょうがぁ　　って、あれ?』

一瞬で圧死するはずなのに、なぜ自分は喋れるのだろう。息が出来ないと言いつつも、楽に呼吸が出来る。

恐る恐る白クマと自分の体の間に目をやる。するとそこは一ミリも微動だにしない、9本の尻尾があった。500キロはあるうかという巨体を(少女の腕よりは太いが)ただの尾が支えているのだ。

『あれ?しかも　　伸びてない?この尾っぱ』

上半身を包む程度だったはずの九つの尾は、雷蔵の巨体を包めそうな程たくましくなっていた。

ふと、ネリは良いことを思いついた。

『雷蔵！！高い高いしてあげる！！』

『をっ？』

雷蔵が動きを止めた瞬間、その巨体が5メートル程宙に浮いた。

『をををっ！？』

いつもは限に『高い高い』をやっている白クマは、感動したように鳴き声をあげた。それに、少女がこたえる。

『おおっ！楽しいのね！？良いよ、もっとやってあげる！』

トランポリンの様に調子良く、雷蔵の体が宙に打ち出されては、少女に受け止められる。楽しい声は途絶える事が無く、さつき初めて会ったとは思えない仲の良さである。

やっとのことで追いついた志々尾少年は、その信じられない光景に言葉を失った。

『ををん！ををっ！』

『お〜お〜そんなに楽しい？じゃあ、頑張っちゃおっかな』

「……………」

あのアホグマと会話してる…………、若干呆れつつ限は、出る頃合いをはかっていた。

雷蔵が目を回したのか、少女の九尾が丁寧に白クマを地面に下ろす。今だ、と少年が木陰から、出ようとした瞬間だった。

『うつ…うつ…』

聞いたこともない、女の泣き声が耳に届いたのは。

(なっ…!?)

踏み出そうとした足は、木陰から出ることなく少年は動きを止めた。
(なぜこのタイミングで!?)

限は混乱しながらも、何とか息を整えて少女をうかがった。

『雷蔵…、私どうすればいいの…?』

『ネル!ネル!なみだ』

慌てた雷蔵が、少女の涙をなめ取ったが、ネリに笑顔は戻らない。

『どうすれば彼を助けられる?』

一緒に班になれば対策も見つかるかと思っただけど、新入りに任務なんてまわってこないだろうし…このままじゃ、変えられない! 何も変えられないかもしれない!! 雷蔵…』

『をををん!?!』

いつも、はしゃぎまくって少年にのし掛かる白クマは、初めて見る人間の涙に、戸惑っていた。

限もまた、混乱の極みだった。

(あの女、何を言っている?)

ネリが戦闘班に配属されたのを、少年は噂で聞いていた。

新入りの可愛い女の子、戦闘班に入ったらしいぜ

足手まといにならなきゃいいけどな

戦闘班のほとんどが（副長は女性である）男性で構成されている中に、紅一点の少女はどうするつもりなのか。

（噂が本当か確かめたかったが…どっちにしろ大丈夫だろ。雷蔵投げ飛ばす怪力があるし。あ、伝言…）

出るタイミングを失ってしまった少年は、いまだに動けずにいた。だが、この状況も盗み聞きのように非常に気分が悪い。

（出直すか）

あまりに強い妖気のお陰で、見失うこともないだろう。距離を取って様子を見ようと、少年は地面を蹴った。

『泣いても…仕方無い、よね。まだ入って1日目なのに』

『ネル？』

少女は、心配そうな顔をする雷蔵の腹に抱きついた。『をっ？』と白クマが小さな少女を見る。

『ちよつと…疲れちゃつた…』

少女の獣耳が、ペタンと力を失う。だが、ネリが手を離す様子も無いので、雷蔵は地面にゆっくり仰向けになった。

雷蔵のお腹の上で、静かな呼吸音だけが白クマの耳に届く。

『ネル…ネル…？』

獣同士だからか、雷蔵は新しい友達が悲しんでいるのを、何となく理解できた。

遊ぶのは後にしよう和白クマは、大人しく枕兼布団の役を務めることにしたのだった。

しばらく経って ガサリ、と葉が揺れる音がした。

言わずと知れた、限である。

「どこでも寝るんだな、お前」

『……………うん？』

パタパタと耳が動き、ネリが雷蔵の腹の上から滑り落ちた。

『うにゃっ!?!?』

「お前は猫か」

尻尾がクッションになったので、ネリは痛みも感じずに尻餅をついた。

そこで、声の主と目が合い体が硬直する。

『あ…ども。』

「あの女から伝言。昼までには戻れって。」

限がさっさと言うと、ネリは頭を下げた。

『ありがとう。じゃあ、もう戻るよ』

雷蔵を起こすべく、ネリが尻尾でユサユサ揺ると、限がはあ…とため息をついた。

「雷蔵は一旦寝ると、危険を感じない限りずっと起き無い」

『え…そうなの？』

「ああ」

言葉少なく少年が言うと、ネリは腕を組んで考え始めた。

限は自分が運ぶしかないか…と雷蔵に近寄る。その時、小さな弦音が耳をかすめた。

『通れるかな…？』

「何がだ」

それには答えず、ネリは右手を宙に突き出し　そのまま動きを止めた。

『ねえ、志々尾君。もし良かったら手伝ってくれない？そうしたら能力に集中出来るんだけど』

「……何をする気だ？」

少年が眉を寄せると、少女は銀色の尻尾で雷蔵を指した。

『この子を運びたいの。空間転移で』

ことも無げに言い切る新人りに、限は興味を引かれ 頷いた。

「それですなえ頭領！」

「花島、話がそれだけなら俺は行くぞ」

まだ仕事が残っているんだ、と席を立とうとした正守にアトラは、思い出したように言った。

「あ、そうだ。私、限の事を報告するために来たのに、やだあ」

「限がどうかしたのか？」

正守が聞き返すと、アトラはフッフ、と口に手を当てて笑った。

「限ったら、ネリに気があるみたいで、わざわざ森まで様子を見に来たんですよ？」

「ほう？」

嬉しそうな反応を返す正守と同様、アトラは踊り出さんばかりに嬉

しかった。

他人から距離を取り、任務遂行に命をかける彼には、友達がいない。同世代の男子達は、限の強さ故に反発も強く、喧嘩が後を絶たないのだ。

「限とネリがな……」

ん？と正守が訓練内容を思い返して、アトラにきいた。

「で、何でお前がここにいるんだ？……まさか、二人を置いてきたのか？」

「いいえ！一応、ネリと雷蔵には別の子も付けてます。あと……」

ごそごそと腰のポーチから、アトラは布に巻かれた小さな包みを取り出した。

「小刀を持っていて欲しいと言われて、これ預かってます」

「小刀……？」

布を開けると、そこには金色の柄を持つ抜き身のダガーがあった。良く磨かれていて、刀身は顔が映るほど反射している。

「なぜこれを花島に？結構年季の入った代物じゃないか」

「それが、私もさっぱりなんですよオ！なんか『帰るときに必要』だとか言っただけ……」

「なに！？」

正守は思わずそのダガーを放り出してしまった。畳に刺さる直前、結界で囲み落下は防ぐ。

「どうしたんですか頭領!？」

(これを目印に空間転移してくるつもりか!?)

自分の執務室にあの巨大なクマを入れたら、しばらく書類が裁けなくなってしまう。

正守は血相を変えてダガーを掴み、庭へ走った。訓練中の者が何事かと頭領に注目したが、正守は空間の歪みが近づいてくるのを感じていた。

(まずい、道が繋がる……!)

「皆離れろ!」

正守がダガーを投げて、それを囲むように特大の結界を張る。その瞬間、ダガーの上に歪みが現れた。だが、様子がおかしい。

(出口が……大きい!?)

「ネリ、どういっつもりだ!？」

『あれ?もしかして頭領の声?』

「…おい、気をつけて持て。重い…」

緊張感の欠片も無い少女の声に、限の低い声も聞こえてくる。

ひとまず正守はほつとして、雷蔵が飛び出して来るのに構えた。だが、空間の裂け目から出てきた白クマの頭は、ぐてっとしてギョツとする正守だが、向こう側の二人に分かるはずもなく、間延びした声が庭に届いた。

『頭領！。ちよつと下がって下さい。　　というか、どうして森に頭領がいるんだらうね？』

「普通に考えれば、森じゃ無いんだろ…多分庭だ。」

いつになく長く喋る限の声に、正守は頬を緩ませつつ一歩下がる。白クマの頭が完全に出た所で、限がその巨体の下にいることに、夜行の面々は気がついた。雷蔵を仰向けのまま背負う限と、黒と銀色の毛皮も見えてくる。

まるで腕の様に雷蔵を抱えている九つの尻尾に、正守は青ざめた。

（おい嘘だろ！？）

限に『重い』と言わしめるものを、少女が（尻尾とはいえ）持ち上げたまま現れたのだ。

少女が空間の裂け目から出て、雷蔵をゆっくり地面に下ろす。限も手伝ったかいあって、雷蔵の眠りを妨げる事なく済んだ。

そして、ネリは直ぐ様ダガーを手に取る。

『閉じる、ゴム』

は？という顔で、少年と正守が少女を見ると、空間の裂け目は陽炎のように揺らいで消えた。

『頭領、ありがとうございます。志々尾君もありがとうございます、お陰で助かったよー』

あの巨体を運びながらも、ネリは薄汗すらにじませていない。正守は彼女を見くびっていた自分を恥じた。

（何という　妖混じりの力も、これ程とは）

正守が言葉を失っていると、限が小さく言った。

「いや……良い。問題ない。」

息をつきつつ少年はポリポリと頬をかく。そんな様子をアトラはニコニコと見守っていた。

「ほー。意外とやりそうじゃん」

「閃ちゃん、あの子戦闘班に入った噂の子だよ！凄いなあ…」

遠くからでもひしひしと伝わる純粹な妖気。訓練が中断される形となった為に、二人の少年は庭の中央に目をやっていた。

「なに話してるか聞こえる？秀」

「うーん。結界が邪魔して聞こえないや…」

「なんだ、つまんねー」

任務で一緒になることを期待しつつ、少年
揺らしてその場を後にする。

かげみやせん
影宮閃は巻き髪を

「あ、待って閃ちゃん！どこ行くの」

そんな少年より頭一つ分大きい
かける。

あきつしゅう
秋津秀は、慌てて少年を追い

(何か面白そうな奴が入って来たな)

くくく、と女の子の様に端整な顔の少年は、物騒に笑った。

(13) やつと落ちて着いて話せたね (後書き)

ポイントをいれて下さって、ありがとうございます！……

ユニーク1100突破！

ありがとうございます！

(14) 代わりに怒ってくれる人がいたら、当人は満足するものですよ

「ホントにさあ、ネリちゃんって色々常識はずれだよな」

「あ…えと…すみません…」

無事だった正守の執務室で、ネリは身を縮ませていた。まさか、転移先が『人のひしめく』庭だったとは気が回らなかったのだ。すでに妖狐化は解き、外国人には辛い正座で、話をきいている。隣には何故だか限の姿もあった。

「まあ…転移先の状況が、把握出来ないって事は分かった。もう昼ごはんに行つて良いよ。二人とも」

「ハイ。」

「お騒がせしました……」

スタッと限が立ち上がるのに対し、消え入りそうな声でペコペコお辞儀する少女。

連れだつて二人は部屋から出ていった。

廊下を進むことしばらく。限が先に歩き、ネリが二歩下がって後ろについていた。会話も無く、二人分の足音だけが少女の鼓膜を叩く。決して大きい音では無いはずなのに、ネリは限に怒られているような感覚に陥っていた。

(どうしようー！？そりゃ怒るよね、尊敬する頭領に怒られたんだし。原因作つたの私だしー！？)

少女が悶々としているのを、少年はさりげなく横目で観察する。

(どう考えてもおかしい。あんな細え体のどこに、雷蔵を放り投げる力があるんだ？)

ああーどうしよー、という呟きがさつきからよく聞こえる。だが、少女に独り言の自覚は無いようだ。

(まあ、俺には関係無いがな)

「あの…志々尾君！」

「何だ」

少年が足を止めると、少女もつられて足を止めた。

「さつきは…手伝わせてごめんなさい。まさか頭領に怒られるとは思ってなくて…」

「……何を言っている？怒ってないだろ、頭領は。」

「へ？」

目をパチクリさせる新入りに、限は面倒くさそうに言った。

「頭領が真面目な顔してるからって、怒ってるとは限らないだろ。お前は下向いてたから、分からなかったかもしれないが」

「あ…え？あれ、怒ってないの？」

「怒って無いな」

「なんだ…：良かったあ！」

いきなりスキップし始めた少女に、限はギクリとした。少女は、さも当然と言わんばかりに限の腕を引く。

ネリの素早い動きと 彼のわずかな迷いで、少年の反応は遅れた。

「なっ…！？」

「早く行こっ！私食堂の場所知らないんだもん」

「…：お前なあ」

振り払おうとした少年だったが、鼻をかすめる甘い匂いに身体の動きが止まる。

心臓まで止まったかと思った。 朝のと同じ、甘くて仄かな香り。

「 離せ！」

「うぎゃっ！？」

限は、身体中の血が沸騰する感覚に戸惑い、思わずネリを突き飛ばしてしまった。反射的に妖狐化したネリに、怪我は無いが、藍色の瞳が困惑気に揺れていた。

『…どうしたの?』

「……………」

肩で息をする少年に、ネリは怒る様子も無く座り込んだままだ。

(同じ獣人型同士、仲良くなりたいのにな)

ネリがしょぼんとしていると目の前に、手が差し出された。思わず少女が見上げると、少し困った顔をした少年がいた。手を取ると、力強く引っ張りあげられる。

「食堂は突き当たりを右だ。俺は 部屋に戻る」

ごめん、と言ったが早いか、少年は歩いて行ってしまった。

(志々尾君……何か戸惑ってるみたい)

お人好しのネリは、尻尾をユラユラさせて、限を見送るしか出来なかった。

午後からは戦闘班の子達と合同訓練をするネリだったが、見知った顔は意外にも少なかった。

「こんにちはネリちゃん！僕は秋津秀、君のニコ上だよ。で、こっちが……」

「影宮閃だ。」

「……………」

そこには志々尾少年の姿もあつたが、言葉を発する事はない。戦闘班と言うから、もっと刺々しい雰囲気かと思いきや、そうでもないことに少女はホツとした。

そしてやはり物珍しいのか、数人の男子達はネリを囲んでワイワイ話に夢中だった。

「初めまして。獣人型の統合型、空間支配系の能力と、未来予知が出来まーす。完全変化しても、自我は無くならないので、安心して下さいね」

「すっげエー」

「頭領から許可もらってるって、本当だったんだ！」

騒ぐ少年達を見やって、ネリは少し心が痛くなった。

（この子達は全員、妖混じりで生まれたせいで、親から見捨てられてしまった）

能力の発現の時期は個人差があるらしいが、見渡す少年達は全員高校生以下だろう。ネリには、誰も彼もが幼く見える。

その時、若い男性の声空き地に響いた。

「よし！俺が見てやるから、ネリと数馬、手合わせしてみろ」

「ま、巻緒さん！！」

ちょうど戦闘班主任が、訓練用の空き地へ足を踏み入れた所だった。数馬、と呼ばれた少年は騒ぎの輪から、距離をとっていた男子である。

「ええ！？何でオレがこいつと？」

（あ、ちょっとガラ悪そう…）

何の能力を持っているかは分からないが、鉤ヅメのような物を手にはめていた。

その少年の顔にはハッキリと、『女とは勝負にならない』と書いてある。

「どうせ怖がってびーびー泣くのがオチですって！！」

瞬間、少女のまとう空気が激変した。

そういつた感覚に鋭敏な影宮は、思わず目を見張る。だが主任の巻緒は異能者ではあるが、妖混じりではないので気がついていない。ふてくされる数馬を、慣れた調子であしらっていた。

（あいつの妖気…半端じゃねえ！怒らせちゃマズイ！！）

閃がハラハラしている間にも、ネリの妖気はどんどん膨れ上がっていく。

「コラ、相手を見かけで判断するなといつも言ってるだろ」

『 そう、見かけに騙されてはならん。』

一呼吸の間に、そこには九尾の妖狐、ネリがいた。巻緒と数馬、周りにいる少年達が息を呑む程の、威圧感を放って。

『 ふざけるなよ、人間。泣くのはお前の方だ。死ぬ気でやらねば』

藍色の瞳が生意気な小僧を射抜く。

『 消し炭にしてやるぞえ？』

妖しい笑みを浮かべる少女に、巻緒は数馬の前に立った。

「お前：まさか意識が！」

巻緒が戦闘体勢に入ろうとした時、横を通りすぎた人影があった

限である。特に急ぐ様子も無くスタスタと、怒り狂っているネリの前に立つ。

「限！馬鹿、やめろ！」

「大丈夫です」

限が背中越しにこたえた。

「こいつ、普通に正気なんで」

え？と、巻緒の呪力　　影の動きが止まった。限は呆れたように少女に話しかける。

「お前なあ……意識飛んだフリなんてするなよ。しかもなんだ？」
ぞえ『つて』

今にも爆発する　　と、思われた威圧感は一気に霧散した。

『やだ〜ばれちゃった？語尾失敗したかな〜って一瞬思ったんだよね。』

「まったくお前は……」

「ちよ、ちよつと待て！お前、なんでそいつが正気だって分かったんだよ!？」

鉤ヅメを装備した少年が、遠くから怒鳴る。それには答えず、少年は巻緒の所まで戻った。すぐそばの少年にも聞こえるように言う。

「あいつ、妖気が無駄に高いですが、邪気も殺気も無いので…大丈夫です」

『無駄に高いは余計だつてば』

瞬間移動したネリが限の横に並ぶが、彼が驚くことはない。

「お前の妖気は、垂れ流しだから追跡されやすい。今に妖を引き寄せるようになるぞ」

『えー、それは面倒くさいな』

巻緒はネリ有能力に目を見張る以上に、少女とよく喋る限に驚いた。

(こいつ…こんなに喋るやつだったか?)

「じゃあ、大丈夫なんだな?ネリ」

『あ、はい!ただ単に、数馬君と本気で手合わせしたかっただけなので!』

アハハ、と笑うネリの耳に微かな声が響いた。

「……け物……」

『うん?』

目を向けると、鉤ヅメを持った少年は憎々しげに、少女を見ていた。限の表情が厳しくなる。

「お…お前は人間じゃねえ!化け物だ!」

「てめえ……!」

限の手首から先が変化し、禍々しい邪気を放つ。その右腕を止めたのは、ネリの銀色の尻尾だった。

ぐるん、と右腕を絡めとったまま、少女は反対の腕も抑える。

『良いよ、慣れてる。直接言葉で言われてるから……まだ楽。』

「慣れてるってお前！」

『だってさ』

ネリは寂しい笑みを浮かべた。それを見て、限の心にかつて無い痛みが走る。

『こんなの……石を投げられたり、家に放火されたり、駅のホームで突き飛ばされたりするのに比べたら……全然陰湿じゃないよ。言葉なんてもうへっちゃら。だって死なないし』

「……………」

戦闘班の少年達は、皆揃って声を失った。しん、となった空き地に限の低い声が響く。

「…死なないから、良いってもんじゃないだろ。何とも思わないのか!？」

『だって志々尾君が怒ってくれたし。』

しゅるる、と銀色の尾っぽが拘束を解いた。ネリの小さな手だけが、限の腕に残る。

『ありがとう。私のために、怒ってくれて』

「……………!」

一瞬壊れそうな笑みを浮かべた後、ネリは真顔で数馬を見た。ビクッと鉤ヅメの少年が、身体を震わす。

『んで？あなたは化け物を相手にする根性があるわけー？言っとくけど、空間支配使わなくても、あなたに勝つ自信あるよー？』

「な、なにを　　！！！」

妙に挑発的な少女の言葉に、カツと頭に血が上る少年。その少女の様子に、巻緒は感心した。

(さっきの事を水に流すつもりか？しかも、化け物呼ばわりされたのを逆手に取った　　？)

『さあ、どうするの？チキン君』

ムフフ、とイタズラっぽく笑う少女を、限は腕を組んで見つめていた。

(15) 初めての手合わせ

「ヨウセツ！」

雨のように降り注ぐ無数の刃。

オニビダマ！

9本の尻尾の先から放たれる火炎の玉。

「エンリュウ！」

ぐるん、と今度は回転させた尾が、炎の渦を形成する。辺りの空気まで焼き払いながら、炎の輪っかは鉤ヅメの少年に向かっていった。

「ひっ……っ！」

襲いかかる容赦の無い攻撃に、少年の足がもつれた。だが、ネリも殺すつもりではないので、きちんと処理する。

『「拒絶」』

黒い球体は炎よりも速く飛び、少年をドーム状に包みこんだ。

「うわあっ!?!」

また何か攻撃されるとでも思ったのか、少年が悲鳴をあげる。だが、巻緒は状況を冷静に分析していた。

(あれは空間支配の能力……。あいつが避けきれないと分かって、防御までしてやるか)

だてに戦闘班の主任はやっていない。攻撃か、防御かくらいの判断は出来る。案の定、黒いドームは盾となって炎を全て防いだ。

直後、砕けるように消え去る。

「そこまで！」

『ありがとうございます』

へたりこんだままの少年には言葉だけかけて、審判の巻緒には勢い良く直角のお辞儀をする。

『ありがとうございます!!』

「いやいや……。凄えなお前……。もう十分任務行けるよ」

『えっ!? ホントですか!?!』

途端に目を輝かせたネリだったが、試合を見ていた限が冷静に言った。

「だが、お前遠距離攻撃に偏り過ぎだ。懐に入られたら終わりだろ」

『むう……』

痛い所を突かれたのか、少女は尻尾をいじり始めた。

『どつせどつせ、接近戦は苦手ですよーだ。』

「後方支援に撤することだな」

(その方が怪我もしないだろ)

限が人知れず安心してしていると、鉤ヅメの欠けた数馬が立ち上がった。

「……さっきは、バカにして悪かった」

限の視線が鋭くなったが、ネリはまあまあと彼をなだめる。

『うむ、致し方あるまい、許してしんぜよう……ふふっ』

昔見た時代劇のセリフを真似て、少女が大仰に言つと、数馬は毒気の抜かれたような顔をした。

それから接近戦タイプの男子達と手合わせをし、陽が傾くまでネリは汗を流した。

ネリの能力に、最初はおっかなびっくりの少年達だったが、最後には警戒心もとけていた。いつもは距離を取るばかりの限も、帰る道すがら、ネリと戦闘について議論する。

「相手が炎を操る妖だったらどうする」

「ん〜、空間転移でナイフ投げる」

「そんな小さい物じゃ、はねかえされるか、溶かされて終わりだろ」

「じゃあ、空間転移で身体をバラバラにする！」

とっさにネリが口を滑らせると、限が苦虫を潰したような顔をした。少女もさすがに、食事前にする言葉では無かった…と口を閉じる。

「…出来るのか？」

「出来ません。……試したことはあるけど」

少女の最後の呟きを聞いて、周りが一斉に青ざめる。固まった空気に慌てて、少女が弁解し始めた。

「人間に直接手を下そうとすると、気分が悪くなって能力どころじや無くなるから!!」

だから大丈夫、と言おうとしたのだが限によって遮られた。

「有効な手段ではあるな。遠距離からでも直接攻撃が出来る。」

「あ…うん。そうだね」

てつきり深くきかれるかと、覚悟していた少女だったが、あっさりとした反応に驚いた。

余程間抜けな顔をしていたのだろう、少女を見て限がフツと頬を緩ませる。

(限が、わ、笑ったア

!?)

少年少女達の心の叫びが、当人に届くことは無かった。

「頭領、少し良いですか」

「巻緒か。入れ」

夕食の後、正守の部屋を訪れた人物がいた。戦闘班主任の巻緒である。

「どうだ？新入りは」

「……」

口を閉じたままうつむく主任に、正守は任務依頼の書類から目をあげた。

「どうした？なかなか規格外だろ、ネリは」

「頭領…知ってたんなら教えてくださいよ…。俺、間違っつて攻撃するところだったんですから」

「大方、彼女のプライドを逆撫でするような奴でもいたんだろ。」

まるで娘のじゃじゃ馬ぶりを笑うような物言いに、巻緒は肩の力を抜いた。

「数馬が、こてんぱんにやられてました」

「へえ…。あいつもあれで結構実力派だけどな、一応。」

「戦闘面も桁外れなんですけど…もう一つ分かったことが。」
「何だ？」

巻緒が真剣な顔をしたので、正守の顔も自然と厳しいものになる。
だが、出てきた言葉は意外なものだった。

「限のやつ、多分ネリのこと気に入ってますね」

「ぐふっ!?!？」

盛大に咳き込んだ頭領を見て、主任はしてやったりという顔をした。

「さっきのお返しです」

「お前なあ!?!？」

胸をさする正守は、ふと任務依頼の書類に目を向けた。

「そういえば、近場の山で妖退治の依頼が来てたな…」

「頭領？」

ガサガサ探すと、すぐに見つかった。中型で弱い、水棲の妖と書いてあるので問題ないだろう。夜行の長は、戦闘班主任に書類を渡して笑った。

「この依頼、ネリと限を含めた8人編成で頼む」

「……………了解しました」

夜行に入って一日目、ネリの初任務はこうして幕を開けたのだった
…。

『明日かあ…』

夕飯の後、明日の任務の事をきいたネリは屋根の上にした。勿論風が冷たいので、妖狐化して自分の毛皮を抱いている。巻緒の話によると、秋津秀、影宮閃、戸田数馬、志々尾限などがそろった、見知った顔と組むらしい。

『影宮君達とも縁が繋がるとは…。予想はしてたけど…』

あまり直接話す機会はないが、二人のことも少女は原作知識で知っている。

秀は見た目通り、心優しい少年だ。歳が一つ上のせいかな面倒見も良く、後方支援の戦闘員である。

(問題は影宮君の精神感応…だね)

閃は頭領にすら話していない秘密を抱えている。彼は妖混じりではあるが、精神感応の異能も持っているのだ。

人一倍妖気の気配に敏感で、昼間もいち早くネリの妖気に気がついていた。

『心を読まれたりしたらやっかいだな…。表面上しか読めないって

分かっても、やっぱり……』

尻尾がユラユラと忙しく動く。いつか機会があったら、それとなく脅しておこうと、ネリは部屋に戻っていった。

ありがとう。私の為に、怒ってくれて

「……っ」

良いよ。慣れてる

「ばかやろ……っ」

上半身裸のまま、限は布団に倒れこんだ。任務の前夜にここまで心が乱れたのは、生まれて初めてである。

言葉なんてもうへっちら。死なないもん

限は仰向けになって瞼の上に腕をのせた。ネリが自分と同じように迫害されてきたのを、少年は敏感に感じ取ったのだ。

ネリが化け物と呼ばれた時、自分に言われた以上に腹がたつた。ネリが止めていなかったら、数馬に怪我を負わせていたに違いない。

「あいつ……強いな」

言葉ごとくで我を失う自分とは、雲泥の差である。昼間突き飛ばしてしまった時も、ネリは怒りもしなかった。

「あいつ………すげーな」

寝返りをうつと、少年は眠りに落ちていった。

昼を過ぎて、ネリを含めた少年達は山を越えている最中だった。一般人に見つかる場合も想定し、ほとんどが私服である。

だが、限だけは夜行の戦闘服を着用していた。ネリがそれについて質問しても、限は一言も話さなかった。

『も、志々尾君、どうしちゃったの？』

「あいつのことは心配いらねーよ。」

後ろを歩いていた閃が、ネリの尻尾をつるさそうに払う。少女の心情を現してか、さっきから尻尾がワサワサ動いて、閃の視界をふさいでいるのだ。

閃が注意しても、少女はどこ吹く風である。

「一人で突っ走って、一人で突っ込むのがあいつだし」

「ちょっと閃ちゃん、よしなよ！！」

ネリの前を歩く秀が振り返って注意する。やはり歳上だからか、和

を乱したくないようだ。

「秀。あと二つ山越えんだから、ちゃんと前向いとけよ」

「失敬な、僕なら大丈夫だよ！……ネリちゃん疲れてない？大丈夫？」

秀がネリを気遣ったが、少女は首を振った。

『ゼーんぜん。変化してると、疲れって感じないもんだね』

狐耳をパタパタ動かす姿は、確かに元気一杯のようだった。

少女は気がついていなかったが、ネリの前と後ろは男子三人が固めていた。限は一番後ろ、少し離れた所を進んでいる。

本人の知らない内に、お姫様の如くネリは守られていたのだ。

『何か申し訳ないなー。新入りを一人入れてるだけで、中型の妖に8人もかけさせちゃって』

「まあ、中型だし。8人は妥当じゃないか？」

「皆強いしねー」

三人が話す以外会話もない8人組は、黙々と山道を攻略していった。計3つの山を越えた頃には、陽が大分傾いていた。

『ほ。意外と歩いたもんだね』

「よし、ここで休憩にしよう。見張りは15分交代で俺からな。皆

一塊になつて仮眠を取つてくれ」

昼間とは別人のように仕切り始めた数馬に、ネリは意外そうな顔をした。

それに気づき、閃がニヤリと笑う。

「アイツはな、あれでもプライドが高い仕切り屋なんだ」

お前が叩き壊したけどな、と閃が付け加える。乾いた笑みをもらすネリを、限は遠くの木の上から見つめていた。

さすがに、妖混じりといつても長距離移動の後である。話し声もすぐに小さくなつていき、終いには無くなつた。

『……………』

その中で起き上がった者がいた。ネリである。

尻尾を当てないように、雑魚寝の輪の中から出ると少女は茂みへ歩き出した。

『……………』

明るい彼女らしからぬ、深刻な表情で茂みを掻き分けていく。十分離れた所で、ネリは地面にへたりこんで息を吐いた。

『やっぱりおかしい……』

少女は自分の右手を見つめる。何かに我慢する様に目をぎゅっつむると、ネリは気合いをいれた。

『……………っはあ！』

小さな掛け声と共に、妖気がしほみ獣耳と尻尾が引っ込む。完全に人間に戻ったのを確認して、ネリは息を吐いた。

「はあ…はあ…」

(……………戻り辛くなった?)

地面に手をつき、息を整えると少女は土を握った。爪に砂利が入っても気にならない。血の気が引くような想像が、ネリの脳裏に走った。

「レナモン…。私、どうしちゃったの？本物の妖になろうとしてるの？答えてよっ……………！」

自分の中で生きているはずの相棒が、答えることはない。しばらく完全変化するの、止そう。少女は深く自分に戒め、汚れた手を洗おうとフラフラ立ち上がった。

空は深い群青色に染まり、さすが秋口なだけあって川の水は冷たかった。

(15) 初めての手合わせ (後書き)

21日から大学が始まってしまつので、毎日更新は難しくなります
m () m

月・水・土の23時を目指して更新いたしますので、どうかこれか
らもよろしく願いします…。

本当にすみません。

(16) 初めての任務

少女の指先から土が流れていく。汚れが落ちてもしばらくの間、ネリはそこを動かなかった。

「何してんだよ、そんな所で。」

気配も無く川岸に現れた閃は、腕組みしたまま木の幹にもたれ掛かっていた。ネリが動かないので、彼女の側まで歩み寄る。

「秀が探してたぞ。お前がいないせいで、俺が起こされたんだからな」

不満たらたらな少年に、ネリはやっと腰をあげた。だが、一言も発することは無い。閃を見ること無く、川上の方へ目を向けた。

「おい、聞いてんのかよ」

「ねえ影宮君」

いつものネリらしくない、抑揚の無い声音が少年の背筋を震わせる。訳も無く悪寒が走ったのを、閃は足を踏ん張って耐えた。

「な、何だよ」

「一つ良いこと教えてあげる」

「……だから、何だよ」

人間の姿なのに、純粹な妖気をまとうネリは、薄闇の中で無表情に言った。

「予知能力者の思考を読むのは、命を削るから止めた方が良い」

「　　っ!？」

閃は目を見開いた。彼の秘密は、指導者である細波こさなみという能力者しか知らないからだ。自然と少年の表情が険しいものになる。

「…誰に聞いた？」

「誰にも。私だから知っていること。これは警告。」

ネリの紫の瞳は凄みを宿していた。

「妖気の補足はしても良い。だけど、思考を私から読むことは許さない。」

「…なんで知ってんだよ」

一歩後ずさった少年は、警戒心もあらわにネリをにらんだ。沈黙がおりて、一触即発　　となりかけた所で、砂利を慌ただしく踏む音が響いた。

「　　閃ちゃん！ネリちゃん！こんな所にいたの!？」

近づいてくる秀に閃が舌打ちした。秀は妖混じりの体質故に、聴覚が異常に発達している。

二人が話を続けるのは不可能だった。だが、少女としては、目標は達成されたので満足である。秀が側に来ているにも関わらず、ネリは口を開いた。

「心配しないで。今度教えてあげるから」

「え、なになに？何の話？」

耳をピンと伸ばした秀に、ネリはイタズラっぽく言った。

「私のスリーサイズ知りたいんだって」

「おまつ！？」

「ええ　！？見損なつたよ閃ちゃん！女のコにそんなこと聞くなんて！」

「違う！変な誤解すんな！」

秀の言葉に、閃はケツと横を向いた。

（嘘をつくにも、もっとマシなもんにしるよ！）

口は固い様だが、閃は不安でたまらない。細波に報告しておかなければ、と少年は心に決めた。

「あ！そつだ、こんなゆつくり話してる場合じゃ無いや。目当ての妖と、数馬君が今戦ってるんだ！」

「それ早く言えよ！」

閃と秀が走り出す。ネリも後に続くようにしたが、ふと後ろを振り返った。

(なんか…気配が)

「何してんだよ、ネリ！置いてくぞー！」

「あ……うん。」

少年二人に急かされて、ネリはその場を後にした。

三人が川上に走っていくと、ここでは数馬が先頭に立って水棲の妖と戦っていた。全身が淡い水色で、人の2倍の大きさと凶悪な面構えである。数馬の鉤ヅメは順調に妖を消耗させており、ネリは自分が戦う必要が無さそうに安心した。

バックアップに何人かっているものの、実際戦っているのは4人だ。限は後ろで闘いの様子をじっと見ていた。

「良かったあ…この程度なら大丈夫そうだね」

ネリが言葉を発した時だった。

「……………！」

水棲の妖が、少女の方をまっすぐ見たのは。真っ赤な妖の瞳がネリを見て、ニンマリ笑った。

『……ミツケタ』

戦闘している4人組に緊張が走った。数馬が叫ぶ。

「お前の相手はこの俺だ!!」

肉を抉る音と共に、妖の絶叫が響く。だが、数馬達には目もくれず、妖は一歩ずつ動き始めた。

『ホシイ……ヨコセ!』

手を伸ばし血まみれになりながら、歩く妖。

ネリは、初めて見る妖の凄惨な姿に青ざめる。人間と同じ、朱色の血液を撒き散らしながら、進んでいるのだ。

ネリを指しているのは、誰の目にも明らかだった。

「ひっ……!!」

「ネリに何の用があるっていうんだよ!」

恐怖で足をすくませた少女の前に、閃が立った。秀もその横に並ぶ。

「せせせ、閃ちゃんだけに、ま、まかせたりしないからね!?!」

「それにしちゃ、びびってんじゃないの?」

数馬達の攻撃が、勢いを増す。限は加勢しようと思わず、ネリ達に駆けつけられる位置まで移動した。

自分が手を出すのは最後の最後、と決めているようだった。

『邪魔スルナ…ヨコセ……』

血に濡れた妖はネリだけを見ていた。苦しみ傷ついているのに、一心不乱に少女に向かってている。

その時、少女の脳裏に閃光が走った。

なぜ、このタイミングだったのかは分からない。でも、少女は想像してしまっただ。

(レナ……モン)

相棒が、鬼に引き裂かれ傷つき、血を流す様子を。

ネリは相棒の死ぬその瞬間、意識が無かった。毒を盛られて知らないままに、相棒の力を受け継いだ。

自分を守る為に、相棒はこうやって血を流し、自分の名を呼んだのだろうか。

「拒絶」……「拒絶」“拒絶”“拒絶”！！！！」

ネリが狂ったように叫ぶ。悲鳴のような叫びに呼応して、彼女の妖気が上昇していく。人間の姿にも関わらず。

「おい、どうし……何だよこれ」

閃が少女に声をかけた所で、辺りを見回した。秀と閃、そしてネリ

を囲むように、握り拳大の黒い球体が浮かんでいたのだ。裕に30個以上はあるだろう。

だが、ネリにそんな言葉は届いていないようだった。震える身体を、両腕で抱くように必死で抑え、目を固くつぶっている。

「……やだ私、まだ、だめだったんだ……。もう大丈夫だと思ったのに……！」

「しっかりしろよ！何言ってるんだお前！」

様子のおかしい少女に、限は決断した。

「数馬、どけ」

妖と距離を取った数馬の横を、戦闘服の少年が通り過ぎる。両手は既に部分変化していた。だが、ここまで妖を追い詰めたのは数馬である。

鉤ヅメから血を滴らせながら、数馬は限に噛みついた。

「お前！俺の獲物横取りするつもりかよ！！」

「俺は任務を遂行するだけだ。」

ダンツと地面を蹴る少年を、悔しそうに数馬は見送るしか無かった。

限の手にかかった妖は、ネリに届くこと無く力尽きた。地響きをたてて妖が崩れ落ちた瞬間、黒い球体も全て地面に落ちる。

球体が砂利に当たって、ぽっかり穴を空ける様子を見て、閃は顔を

強張らせた。

(この球体に触ったら、跡形も無くなるのか)

それらに今の今まで囲まれていたのだと思うと、生きた心地がしない。秀も同じ事を思っていたのか、顔色が悪かった。

バシャバシャと、返り血を流した限がネリに近寄る。少女は、地面にへたりこんで震えていた。限はその様子を一瞥した後、眉にシワを寄せる。

「お前、戦闘班やめろ」

吐き捨てる様に言う限の言葉に、ビクツと少女は身体を震わせる。秀が慌てて口を開いた。

「限君！いきなりなんで…」

「妖を傷つけるのを躊躇する奴に、戦闘員は無理だ」

少年が、二人を見た。

「今回お前ら二人は、こいつを守る為に、命の危険にさらされた。力があるのに使わない、こいつのせいだな」

「そんな言い方無いだろ！」

閃が限に言いつのつた。

「なんか訳ありっぽかったし、こんな状態でも防御はしてたんだぞ

季節外れの学校に咲いた桜騒ぎがあり、仕事が増えてしまったのだ。夜桜見物しようと、校舎に侵入する学生を追い払う良守は、疲れきっていた。

「彼女さ、転校してきてまた緊急帰国だろ？なんか事情知らないかなって。」

「……………知らん」

ボスツと持参の枕に顔を埋める良守に、田端はボソリと言った。

「墨村と彼女が屋上で密会していた噂があるんだけど」

「誰からだその情報!？」

ガバツと効果音付きで、良守は身体を勢い良く起こした。その様子を見て、市ヶ谷が読書を中断した。

「どうせデマなんだろ。」

「いや、目撃証言もあるんだぜ?どうなんだ、墨村」

「どうなんだって……………ネリとは…そんなんじゃない…」

しどろもどろの良守に、田端はフムフムとペンを走らせた。常に持ち歩いている電子手帳に書き加えるためだ。

「墨村とベアトリックス・ネリ・ユリカとは名前を呼び合う仲、と。」

あれ?彼女、自己紹介の時ユリカって呼んで下さいって言うてたよな」

そんなんじゃないって言ってるだろー！？と良守が抗議したが、聞きとげられることは無かった。
田端が首を傾げる。

「ん？なんとというか、不思議な子だよな。よく女子トイレで姿を消すらしいし」

「トイレ？」

良守が胡散臭げに田端に目を向ける。

「尾行がそこでいつもまかれるんだと」

「なぜ彼女をつける奴がいるのかにも疑問だが……」

市ヶ谷が冷静に口を挟む。だが、良守には心当たりがあった。

（多分“鏡渡り”ってやつだな…。）

今度戻ってきたら注意しとかなないと、と良守が考えていると、授業開始のチャイムが鳴った。

（これ…何なんだろ）

ハンカチに包んだロケットの鎖が、カチャリと音をたてた。唯一、ネリの事情を一番知っている時音としては、嫌な予感がしてならな

い。

（近い未来に烏森に何かとてつもない事が起きるってことかしら）

数学の授業を聞きながら、時音はため息をついた。

(17) 男性諸君。女性を殴ってはいけません (前書き)

ユニーク1600!!

ありがとうございます(*^o^*)

今更ですが、この二次小説はネタバレを含んでおります。オリ主が絡むこと以外の事柄は全て事実です。

単行本30巻までしか作者は読んでいないのですが、あと5巻ほどで原作は終了するそうです。

新刊31巻は10月18日発売です!!

皆さん、ぜひご覧下さい!!!

田辺イエロウ先生大好きです!!!

(17) 男性諸君。女性を殴つてはいけません

「なんつーデカさだ…」

数馬と共に戦っていた少年が呟く。先程より遥かに大きい妖
ちよつとした山ぐらい　　が、山と山の切れ目から姿を現した。

額に一本の角、顔の半分を占める一つ目、群青色の巨体は少年達の
恐怖を煽るには充分な大きさだ。

子供8人でどうこう出来るものではない。8人の指揮をとっていた
数馬の決断は早かった。

「これは俺達の手に余る。ここはひとまず戻ろう」

秀も閃も賛成し、ネリの両腕を引いてたたせた。だが、少女の動き
が止まる。

「志々尾君……？何してるの……？」

二人がネリの視線を追うと、限は両手両足を部分変化した所だった。
その目はじつと巨大な妖に向いている。

「俺が行く。お前らはそいつを連れて戻れ」

「あんなのになんう訳ねーだろ！ここは一旦引いて指示を仰いだ方

が良いって!」

閃が叫んでも、限は聞く耳を持たない。人を丸飲みに来たような妖を前に、低い声で言った。

「そいつがいたら、あれを殺せないだろ。早く行け」

返事も待たずに限は弾丸のように、一直線に妖へ跳んだ。爪を奮う限だが、相手にとっては八工程の小ささである。腕の一振り、少年の体は岩壁に叩きつけられた。ネリが叫ぶ。

「待って!戻ってよ!」

「限、戻れ!お前一人じゃ無理だ!」

数馬達の言葉もむなしく、限は一時も止まらず鋭い爪で妖を攻撃する。妖が腕を振り回し、周りの崖を殴る度、土砂崩れが起きた。

「マズイ!!!崖が崩れるぞ!!!おい限!」

数馬が再度呼ぶが、限はまったく躊躇せず突っ込んで行く。ネリがフラフラと足を踏み出した。

「私も…戦わなきゃ…」

「俺ら全員でもかなわない。ここは退くんだ。」

閃が少女の腕を掴んだまま言ったが、ネリは右手を宙に突き出した。

「…そ、“空駆け”!!!」

空間が縦に割れ、裂け目が現れる。ネリは二人の少年を振り払い、その淵に手をかけた。

「ちよつとネリちゃん!？」

「……ちっ!」

姿を消そうとしたその瞬間、ネリの左手を強引に閃が引っ張る。バランスを崩して少女が砂利の上に尻餅をついた。

「何するの!？」

憤り立ち上がったネリに、閃は苦り切った顔で向かい合った。

「お前が悪いんだからな」

「何」

何が、と少女は言えなかった。少年の拳がネリのお腹に入ったからである。息が詰まり、少女は思わず膝をついた。

秀。こいつ運んでくれ。途中で交代な

閃ちゃん!いくらなんでも女の口に手をあげるなんて!

仕方ないだろ!?

少年二人の会話が急速に遠ざかっていく。この感じには、覚えがあった。

レナモンを最後に見た時。朦朧とする意識の中、飛び込んできた金色の毛並み。自分を案じて、鬼使いの前に立った、あの背中。

「レナ……………」

少女の意識はそこで途切れた。

(予想以上に強い)

少年が崖に叩き付けられる度、確実に限の速度は落ちていった。妖混じりといっても所詮人間の身体には変わり無い。肉体自体が特殊な構造である妖と比べれば、ずっと繊細な造りなのだ。

(だからといって、任務を放り出すつもりは無いがな)

少しずつでも、妖に渾身の一撃を浴びせる。妖がバランスを崩した衝撃で、地を揺らす程の衝撃がこだまする。川辺ということもあり、地盤が元々緩かったのも災いした。

「わああああ!!」

少年達が土砂崩れに巻き込まれたのか、悲鳴が届く。普通の大人なら、死んでしまうかもしれないが、少年達は全員妖混じりだ。多少の傷では死なない。

(あいつが無事ならそれで良い。)

妖と闘いながら、限の心は少女に向いていた。

(知り合いの為に戦闘班に入るから、妖相手に躊躇なんかするんだ)

少年は雷蔵に泣きついていた少女を思い返す。

何も変えられないかもしれない！

(何の事を言っていたんだろうな)

妖に殴られ、振り払われても次の瞬間には向かっていく限がいる。
傷はどんどん増えていった。

(お前はこっちに来るな)

彼女が土砂に埋もれていないことを祈りつつ、己の鋭い爪をふるつ。

(こんな血生臭い所で、お前が汚れることは無い)

限の心中を知るものは誰もいなかった。

巨大な妖との戦闘で起こった土砂崩れが、5人の少年達を飲み込む。
だがネリは秀に抱えあげられたまま、彼の能力で巻き込まれずに済んだ。

秀！翼を出してこいつ抱えて飛べ！意識無い奴があれに巻き込まれたら死んじゃまう！

わ、分かったよ！

「閃ちゃん達……大丈夫かな…限君も…」

最後の最後まで『ネリを連れて退け』、と言っていた限の姿は、もう見えない。

「限君…変わったよね…。前はあんなに喋る子じゃ無かったし…」

ネリが来てからだと思う。いつもいつも独りである彼が、身近に感じられるようになったのは。

コウモリのような翼をためかせながら、秀は地上の様子をつかがった。

「……………ん」

お姫様抱っこしている状況で（しかも空中で）、秀は少女が身動きするのを感じた。

「ネリちゃん……大丈夫？お腹痛い？」

「あ…れ？こ…」

ぼんやりと夜空を眺めた後、少女はハッと身体を強張らせた。腹に残る鈍痛に、閃の拳を思い出す。

「あいつめ…思いつきり殴ったのね…痛つつ…」

「ごめんね…でも、ネリちゃんをあそこから遠ざけてって……限君にも言われたし……………」

秀の腕の中にいるのに気がつき、ネリはここが空中だと悟る。

「皆は…?」

「土砂崩れで…あ、でも大丈夫だよ！妖混じりだし、暗闇でちよつと見えづらいけど、すぐに見つかると思うから」

青ざめた少女に、秀は優しい言葉をかけた。

「ここは空中だから安全だし。窮屈かもしれないけど、もう少し我慢」

「私が探す」

ぶわ、とネリの身体が紫色の炎をまといはじめた。うわぁ！？と秀が情けない声をあげたが、彼が火傷することは無い。それどころか

(疲れが…無くなっていく?)

人を運ぶのは大きな負荷がかかるので、あまり長時間は出来ない。だが、紫のオーラは癒しの波長をもっていて、少年の疲れをほぐしていった。

『離しても大丈夫。一人で立てるから』

「え…ええー!?無理だよ!だってここ…」

『良いから。放して』

藍色の瞳が秀を見つめる。そこに嘘は無い。秀は覚悟を決め、徐々に腕の力を抜いた。

フワリ、と少女の体が浮き上がる。

紫のオーラをまとった妖狐は、何も無い空中で地表と垂直に立った。

イヅナ！

少女の9本の尻尾の内、一番外側を除いた7本の尻尾から7色の炎が放たれる。それらは、ただの火炎では無かった。

「炎の…狐？」

頭と前足は狐の形をしている炎が尾を引いて、少女に馳せ参じる。その小さな狐達を、ネリはいとおしそうに撫でた。

『あの土砂から、子供を見つけて頂戴』

キューン…と一声鳴いたあと、7色7匹の狐達が土砂めがけて急降下する。さながら、炎の虹のような軌跡に秀は口をあんぐり開けて見ていた。

「す…す」

『土砂崩れ…というより、地滑りって感じか…あれなら大した怪我は無い。』

いくらか刺々しい声でネリが言う。

『夜行までの道を作るから、そこからさっさと帰りなさい。』

だがネリに帰る気が無いのに気がつき、止めようとした時、水色の狐が戻ってきた。

二言三言、狐とやりとりした後ネリが秀を呼ぶ。

『皆無事ですつて。今案内するから』

河原で壊れそうな表情をしていた少女とは、別人のようである。横に並んでみると、やはり眉間にシワが寄り、美しい顔が台無しだ。きびきびと事務的に、空を駆けるネリに秀は恐る恐る口を開く。

「あの…ネリちゃん？」

『何』

「もしかして…怒ってる？」

『あなた達に怒ってる訳じゃ無い』

地面に着地し、秀は羽をしまった。ネリは尻尾を揺らしながら、歩き出す。

『自分の不甲斐なさに、腸煮えくり返ってんのよ………!!』

ゴウ、と熱くは無い紫色の炎　視覚化される程に強まった妖気が少女を包み込む。秀は改めてネリの桁外れの力に恐怖した。これだけ怒りをはらみながらも、邪気が混じらない純粹な妖気。

棒の様に疲れた足の痛みも、みるみる吹き飛んでいく。思わず、秀は呟いていた。

「…気持ち良い……」

『何が?』

足を止めたネリは、思わず振り返り 目を疑った。少年の頬の傷が、目の前で消えていったのだ。少女が駆け寄ると、その回復速度があがる。

『え!?!なに、どういう事なの!?!』

「成る程…妖が……お前を欲するのは、そういう……訳、なんだな……」

苦しい声にまた振り返ると、目の前には泥まみれに切り傷だらけの閃がいた。左足を引きずっている。

「閃ちゃん!!」

『……………』

ネリが黙って考えている間に、閃の傷も癒されていく。ホツとしたのか、閃が座り込んだ。続々と色とりどりの狐達が戻ってくる。それらによると他の4人も、命に関わる怪我は無いと的事。

「本当にお前…訳分かんねー…」

『何でも良い。妖気が妖を呼ぶなら、早くあなた達を夜行に返さなきゃ。秀君、手伝って』

「……あ、うん！」

名前で呼ばれてちよっぴり嬉しそうな秀は、赤い狐についていった。ネリは閃のすぐ側まで歩み寄る。

『何だか良く分からないけど、私の妖気で傷が治るなら早く治って。さすがに全員を治す暇はないから、あと一人終わったら帰って頂戴』

「帰るってなあ……ここがどこかも分かんねーのに……」

『空間転移で送る。そうすれば夜行には数秒でたどり着く。』

「……つくづく常識破りなんだな」

そうこうしている間にも、閃の生傷はほとんど無くなっていき、顔色も良くなった。

「ネリちゃん、数馬を見つけたよ」

「じゃ、今度は俺の番だな」

よっこらせ、と立ち上がる閃にネリは緑の狐を伴につけた。秀と入れ替わりに閃を見送り、すぐに治療（？）に入るネリ。数馬の怪我は戦闘もあってか二人の少年よりも酷かった。

『……………』

入れ替わり立ち替わり秀と閃が少年を運んでくるが、数馬は目覚めない。

ふと、尻尾で数馬の頬を優しく撫でてみる。すると、擦過傷は一撫

でで消え失せた。

『私の妖気って…妖混じりには回復薬になるのね…』

これは知って良かった、と少女は頷いた。あと一人少年が見つければ、夜行への道を開いて終わりである。9本の尻尾で数馬の傷を癒しながら、ネリは二人を待った。

少年6人が揃った所で、数馬の身体が起き上がる。頭を打っていたのか、痛そうな顔をしたので、ネリは尻尾でぐるりと彼の頭を覆った。

「んなっ！？何だ？」

「ネリの尻尾だよ。こいつの妖気に当てられてれば、傷が治る。」

「そ…そうなのか？」

それを聞いて視界を黒と銀で覆われたまま、数馬は動くのを止めた。気だるさが無くなっていくのを実感しているのだろう。身体に触れている部分から妖気が、勢い良く数馬になだれこむ。

「ありがとう、もう大丈夫だ」

『そっ』

するりと尻尾が解かれて、少年は自分が信じられない様子だった。

(18) なんつー怪我してるんですか、あなた!?

「すげえ…本当に楽になった」

『じゃ、三人には悪いけど、怪我人を夜行に連れ帰って頂戴。今開けるから』

ネリが右手を前に出した。

『二点の座標を固定…“空駆け”発動』

距離が遠いせいか、ネリが苦悶の表情を浮かべた。

『っー……。』

眉を寄せ、息は荒く、肩が上下し始めた。閃と秀、数馬が心配そうに見守る中、ついに空間が歪み始める。フウ、と少女が息を吐いた。

『何とか繋がった…。さ、行って』

意識の無い少年三人を、秀達三人が背負う。数馬、秀、閃の順に空間の裂け目に入っていき、閃が振り返った。

「お前はどっするんだ？」

『……限君を連れて帰る。』

ネリの迷いの無い瞳に、閃が不思議そうな顔をした。

「あんな事言われたのに、よくあいつに構う気になるな。」

お前、戦闘班やめろ

ネリにも彼の厳しい言葉が耳に残っている。だが、少女には彼の気遣いも届いていたのだ。

そいつがいたら、あれを殺せないだろ

足を引つ張るなという意味であり、妖の傷つく姿を自分に見せたく無いという意味でもある。

『だから、証明するの。私が戦闘班にいられるようにね』

「……………そうか」

閃が小さく呟く。もうこれなら大丈夫、と少年なりに納得したのでろう。ふと、今思い出したかのように閃が付け加えた。

「気をつけるよ。雑魚ばかりだが、数匹ここを目指して集まっているみたいだから。」

妖気の捕捉で調べておいてくれたのだろう。閃はじゃあな、と言つてくぐり、見えなくなった。

『……………ありがとう、閃君』

残る事に反対されなくて、ネリは安心しながら入口を閉じた。

「頭領！」

ボタン、と荒々しい扉の音で正守は飛び上がった。決済待ちの書類が衝撃で散らばる。

「どうした刃鳥、お前らしくもない」

いささか不機嫌な様子で書類をまとめようとしたが、副長の声の方が早かった。

「限とネリ以外の6人が、空間転移で帰ってきたそうです」

「なに？」

刃鳥に連れられて、正守が庭へ走るとそこには、全身泥まみれの（秀も背負った為に汚れた）少年達がいた。空間転移の入り口はすでに閉じているが、ネリも限も見当たらない。意識の無い泥まみれの三人を正守は救護室へ運ぶよう指示した。刃鳥が一番顔色の良い秀に事情を聞く。

「何があったの？後の二人は？」

「それが……数馬君が撤退しようって言ったのに、限君きかなくて……。」

「戦闘の余波で土砂崩れに巻き込まれた俺達は、ネリに助けられてここに送られました」

秀の言葉を閃が引き継ぐ。数馬は苛立ちを抑えきれずに、地面を殴った。

「限の奴……！あんな特大の妖に一人で行きやがって……危うくこっちが死ぬところだった！」

「その傷はもうほとんど無いだろ」

閃が冷静に口を挟むと、正守が聞き咎めた。

「……閃、それはどういうことだ？」

状況把握に適している閃は、頭で整理しつつ口を開く。

「頭領。あいつの純粋な妖気は、妖混じりもしくは、妖も癒す力があります」

「……！」

「何ですって……？」

正守が息を呑み、副長の刃鳥も驚きの声をあげた。

閃が自分の左脇腹を軽くさすった。

「俺、左肋骨2本と左足折れてたんですけど、アイツの妖気に当てられて完治しましたし。」

「ええっ！？閃ちゃんそんな状態で土砂から這い出たの!？」

秀が驚愕の事実には叫ぶが、閃は気にするなと手を振った。

「……………それで二人は？」

刃鳥の言葉に三人ともうつむく。彼女の提案にせよ、二人を見捨ててきたことに変わりはないのだ。

「ネリが…限を連れ帰ると、言っていました」

刃鳥が正守を振り返ると、彼はじっと考え込み……………低く言った。

「刃鳥、救護班を呼べ。この3人にも一応手当てが必要だ」

「二人はどうしますか」

「……………」

正守は、一拍間を置いて背を向けた。

「ネリを信じよう。……………これ以上人員を割くわけにはいかん」

「……………分かりました」

「……………」

三人の少年達に何も言葉は無かった。

『どこ行ったのやら……………』

妖気を適度に放出しながら、ネリは空を駆けていた。少女が空を飛べるのは、ひとえに相棒の力のお陰である。ネリのパートナーデジモンであるレナモンは、段階的に進化することが出来た。

レナモン（成長期）からキュウビモン（成熟期）へ。

キュウビモン（成熟期）からタオモン（完全体）へ。

タオモン（完全体）からサクヤモン（究極体）へ。

今は亡き相棒だが、彼の力はネリの妖気レベルに左右されるらしい。タオモンに　完全体に進化して、初めて彼は空を飛ぶことが出来た。

そしてサクヤモンに　究極体に進化した彼は、癒しの力を持ち、自分の力を他者に譲渡することも出来た。

『私の中で生きてるんだね…レナモン。』

分かっている、話すことも姿を見ることが出来ない、殺された親友。

知らない内に涙が少女の頬を伝う。

『いつもいつも…助けてくれて…ありがとう…ごめんね…』

にじんだ視界を乱暴に拭くと、少女は前を向いた。泣くのはこれで最後にしよう、自分は　実行部隊、夜行の戦闘班…なのだから。

雨が降り始める。

少女の代わりに、空が泣いてくれたようだった。

土砂の流れをさかのぼり、たどり着いたのは荒れ果てた川原だった。地面は抉れて、夕方の地形は見る影もない。一瞬、少女は場所を間違えたかと思った。

『いや…中型妖の腕があるし……』

だが、限の姿はどこにも無い。特大妖の姿も無いのだ。いつの間にか心臓の鼓動が大きく、打っている。

(どこに…いるの?)

真っ暗な森の中、雨も降り始めたため、あまりにも視界が悪い。耳を澄ましても戦闘の音すら聞こえないのだ。

イヅナ!

サクヤモン(究極体)の技のせいか、妖気の放出が激しく、ネリは虚脱感に襲われた。

7匹の小さな狐は、雨に濡れながらも主の周りに集まる。ネリは膝に手をつけて、意識を集中させた。

『大丈夫…。私に構わず限君を捜して……近くにいますはずだから』

もしかしたら、妖との戦闘はとっくに終わってしまったのかもしれない。

(助太刀には遅すぎたか…)

少女は唇を噛んだ。

(……冷たい)

少年は、瞼に落ちた小さな雫で目を覚ました。いつの間にか仰向けで気を失っていたらしい。

特大の妖をどうにか倒したは良いものの、少年が払った代償は大きかった。

(動けない、な)

足がちぎれたなどの、酷い怪我は無い。だが、両手足の感覚はまだ戻っていないかった。

散々痛め付けた身体はしばらく動きそうに無い。変に力を入れても余計疲れるだけなので、限は観念して力を抜いた。

(アイツは…)

少年の心は少女へと飛ぶ。月の光の様な髪をしながら、太陽のように明るい少女へと。

(あれだけ言えば戦闘班やめるだろ)

敵が傷つく姿で、自身のトラウマを呼び覚ますなど、本末転倒も甚だしい。あの太陽のような少女が、陰る姿など少年は見たくもなかった。

(嫌われたらどうなる)

少女は目的があつて戦闘班を選んだ。泣くほどに大切な目的があるのを知つていながら、限は彼女を突き放したのだ。

胸が、ズキリと痛んだ。

(もともと俺は一人だ。家族を傷つけた時から…俺を好きになる奴なんか、いない)

ギギ、と複雑骨折した右手に力が入る。

(俺の本当の姿を見れば…誰もが俺を嫌う)

それは、少年の暗い過去に由来する業くわという名の枷である。

己の鋭い爪で、三人の兄達を傷つけ、完全変化した時には、ただ一人の姉に瀕死の重症を負わせた。

それもまだ4年前　　限がわずか10歳の時の出来事である。

雨は少しずつ勢いを増していき、服は余すところ無く冷たくなっていった。秋口で山の中、陽も落ち、おまけに雨である。

限の体温は容赦無く奪われていった。

(死にはしないから、良いか)

意識が遠退いていく中で、限は黄緑色の炎を視界にとらえた。

閉じそうになる目を無理矢理こじ開け、首だけその方向に向ける。それは、小さな炎をかたどった犬に見えた。

(いや…狐?)

空中を泳ぐようにすいすい駆ける狐に、限はハッと気がついた。

「あいつ!……げぼっ」

反射的に身を起こそうとしたが、肺に刺さった肋骨のせいで、血を吐く。すぐに狐は限に気付いた様子だった。

(あいつと同じ妖気、だな)

まだ残っていたのかと、少年はげんなりした。すーっと、近づいて来た狐は握り拳大の大きさで、限の側をくるくる回る。妖だったら迎撃しようと構えていただけに、限の脱力もすさまじかった。

(何で帰らなかったんだろ…あいつ)

『……………』

じいーっと、限の顔を見つめて黄緑色の狐は口を開いた。

『対象を発見。右手を複雑骨折、左手にかぎ裂き傷、左肺を負傷、脊椎に重度の損傷、右腹部より出血、右足大腿骨に裂傷、左足アキレス腱に損傷。…極めて重症。ただちに主の^{あそし}治療を要する』

それは少女の声とは似ても似つかない声だった。

(あいつの治療…ってどういうことだ?)

訳が分からないままじっとしていると、小さな気配がまた近づいてきたのが分かった。その数は増えていき、最終的に6つの鮮やかな光が、夜闇を照らした。

6色の炎に囲まれた限は、喋ることもままならないので見つめることしか出来ない。

(紫があれば、虹なのにな)

しばらくして、大きな妖気の塊が近づいてくるのを感じた。真つ暗な闇の中、真上から紫の隕石が落ちてくる。その鬼気迫る気配に、限は顔がひきつるのを感じた。

怒りを感じる。

空気を焦がす様な威圧感と、圧倒される激しい炎をまとった少女が少年の前に舞い降りた。

『……………』

「……………」

妖狐のネリが黙って少年の所まで歩み寄る。限は大丈夫な事をアピールしようとしたが、さすがに肺に刺さった肋骨があつては喋れそうに無かった。

少女がゆっくり膝をつく。

『……………馬鹿でしょ……………!!?なんて怪我してんのよ!!!!』

泣きそうな叫びに少年の胸は、締め付けられたかのようにだった。だが、あの特大の妖は少年しか倒せない強さだったのだ。少年に後悔は無い。
だが、喋れない。

呼吸すら満足に出来ていないのだから当然だ。それに気づいてか、ネリが右手を限の胸の上に当てた。

『私の妖気って、妖混じりに効くみたいでさ……。早く治ってよ。死んじゃったかと思っただよ？』

9本の尻尾が少年の身体のあちこちを撫でた。紫がかったオーラが少年に触れる度、傷が物凄い勢いで治っていく。つと、少女が右手を離し後ろの草むらへ向けた。

『拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶” 拒絶”』

まるで器械のようにブツブツと、無機質に唱えるネリ。夕方とは比べ物にならない、200は越えている球体が空間を埋め尽くした。

『邪魔しないでよ。あんた達にあげるほど、私の妖気は余って無いんだから』

もはや、黒い球体一つ一つが集まって、ドームを形成している数である。

(……………)

癒しの反動か、限の意識はゆっくりと暗闇に落ちていった。

(18) なんつー怪我してるんですか、あなた!?(後書き)

明日から4日間軽井沢と、バイトと文化祭の応援と準備で更新が出来ないと思いますm(┌┐)m

まことに申し訳無いです...

10月18日発売の結界師31巻をどうぞよろしく)*^o^*(

(19) 怪我してる本人以上に、周りの人の方が痛い時もあるかもですね

(前

感謝1994ユニーク!

今日から週3日更新になります。

23時には投稿出来ているように、極力頑張ります!

お待ちいただいておりますありがとうございました!!

(19) 怪我してる本人以上に、周りの人の方が痛い時もあるかもですね

日だまりの中で昼寝をしている様な心地よさに、限の意識はたゆたっていた。まどろむ意識の中、天使の様な声が降ってくる。

まったく無茶苦茶なんだから…

少年の身体が宙にフワリと浮き、とても柔らかい絨毯の上にそっと置かれた。毛足が長く、身体が沈み込みそうな気持ち良さである。甘い香りは少年も良く知っている少女ひとの匂い。

やっぱり、私戦闘班にいたくちやね。

天使が、笑った気がした。しょうがないなあ、とでも言わんばかりに。

だって限君が怪我したら、こんなに早く治せるの私しかないじゃない。

ハッと、冷たい服で目が覚める。水をずっしりと吸った服は、冷たくて気持ちが悪かったが、何故だか身体はポカポカだった。夜空には星さえなく、塗り潰した様な黒さである。雨はもう少年には届かなかった。

「……………ん？」

身体のどこにも怪我の痛みを感じない。肺に刺さった肋骨も、元の位置に戻ったようで、普通に喋れる。

それに首筋を柔らかな動物の毛並みらしきものがくすぐる。自分の身体を寝たまま見下ろしてみると、黒と銀の毛皮が、すっぽりと限を包んでいた。

さながら、寝袋の中にいるようである。

「何が……………どうなって……………」

『気がついた？』

首を向けると紫の光をうつすらまとった少女が、少し離れた所から歩いてくる所だった。

『いや〜何がびっくりしたって、尻尾を切っても再生することだよね。癒しの効果をありったけこめたら、ブチッて切れちゃうんだもん。焦ったわ〜』

カラカラと笑いながら、自分の尻尾を揺らすネリ。確かに、限をぐるぐる巻きにしている尻尾とは別に、新たな九尾が少女の背後でうごめいていた。

「……………？」

だが少年は、ふと少女の顔色が蒼白になっているのに気がついた。

少女は元気そうに笑っているが、どこか無理しているように見える。そして近づいて来るにしたがって濃くなる、鉄の臭い。

それは少年と馴染みの深い、妖の血の臭いだった。

「お前…、妖殺ったのか」

『……………うん。まあ……………ね』

少女はぐるぐる巻きの限の側に、膝をついた。返り血は浴びて無いので、遠距離攻撃を用いたのだろう。だが、命あるものを自らの力で殺めたことには変わり無い。

「もう、傷は治った。……………お前が治したのか？」

『うん、そうみたい』

言葉少なに二人はぎこちないやり取りをする。

少年は、暗に『もう大丈夫だからここから出してくれ』と言ったのだが、ネリは首を振った。

『あれだけ身体を痛めたんだから、少しは安静にしてて』

「……………」

妖混じりの少年にとって、もう今の状態でさえ怪我には数えられないのだが……………限は黙っていた。

お互いききたいことは山ほどあったが、ネリがぼつりと言った。

『妖…ちゃんと殺せたよ。頭領の絶界をヒントに、絶界ごと投げたら……………皆、死んじゃった。』

少女の声が震えた。傷を抉るような行為に踏み切らせるために、少

年はあの時言葉をかけたのではない。
口を開こうとしたが、少女に先を越された。

『良いの。直接殺めたことが無かったただけだし…何か色々吹っ切れた』

「……………間接的に殺めた事はあるってことか？」

『……………そう、死んだ相棒にね。いつも私を守ってくれてたから』

汚れ役をいつも引き受けてくれた…と、少女は遠い目をした。

ネリの『拒絶』で創りあげた空間には、星もなく風も無い。きつとこの静かな世界の外には妖の屍が墨々と山になっているのだろう。

少年は、これ以上少女に死人の様な顔をして欲しくなかった。

腹筋だけで上体を起こすと、少女の目線とほぼ同じ高さになる。何を言おうか、じっと限が少女を見つめると、ネリはぷぷつと笑った。

「どっした？」

『いや…だって、ぷくっ……………イモムシみたい、なんだもん』

「これはお前の尻尾だろ！？」

少女が暗い顔から笑ってくれたことに、少年はどきりとする。

動揺したことを悟られたくなくて、限は頭しか出ていない寝袋を意味もなく揺すった。少女はツボに入ったのか、笑い続ける。

「くそっ……………抜、け、ね、え　　！！！」

『あはははっ！ごめんごめん、今解いてあげるよ』

少女が限の胸のあたりに手を置く。その何気ない動作にも、心臓が跳ね上がる少年である。

今まで同年代の異性と接したことの無い限にとっては、これだけ近い距離に人がいること自体、体温が上がる。少年の心の葛藤を知らないネリは、繭まゆのようだった回復寝袋を解除した。ほどけて空気に解けるように消えた尻尾を、限が目で追う。

複雑骨折していた右手は綺麗に治り、出血から何から全てが元通りだった。礼を言おうとして、限はギョツとした。

少女の蒼白な顔に相まって、妖気がしぼんでいつている。ふっと紫の光が消えた瞬間、ネリの妖狐化が解けた。辺りが闇に包まれる。

「大丈夫か？」

「……………」

今にも吐きそうな少女の声に、限は慌てて背中をさすってやる。幸いすぐ近くにいたので、位置は分かる。自分の力は強すぎるので、鳥を暖める様に、優しく優しく。ホウ、と気持ち良さそうに息をはいた少女は掠れた声で言った。

「ちょっと完全変化し過ぎたみたい……………反動が酷いや……………」

少女が、真っ暗にしていた『拒絶』を解除する。雨はやんでいて月明かりが、二人を照らした。

ふと、破けた服の隙間から覗く限の腹部に、ネリが目をやる。

「私も染木さんに炎縄印刻んでもらおうかな……………」

その声があまりにも弱々しいので、背中当てていた手が止まった。

「いや…女子なのに……俺みたいのを刻むのは……」

「……それもそうだね」

確かに体育の着替えの時は大変そうだとネリは自分で納得した。気分が大分楽になってきたのか、少女は立ち上がった。

「さて……と。夜行に帰らなきゃね」

せっかく便利な空間転移があるのだから使わない手はない。ネリは右手を出して……少年を振り返った。

「あの、さ。お願いがあるんだけど。」

「……何だ？」

少し照れくさそうに少女が頭をかいた。

「空駆け使つと…私、ぶつ倒れると思うの。だから…さ。…あの」

「……」

限は思わず目をそらした。夜闇に助けられてか、少年の耳まで朱色に染まったのがネリには分からなかったようだ。しかし少女本人も、恥ずかしいお願いをしている自覚はあるらしい。

「これから山を越えるのは、危ないし嫌だし疲れるし、夜行の庭に

目印置いてあるから……道を繋ぐまでは出来ると思う。」

「……気を失っても、その道とやらは閉じないのか？」

「条件を付けとく。人が通っている間は閉じないように」

「……………」

一瞬沈黙が二人の間に降りる。ネリは少年を見ているが、限は横を向いている。ネリが諦めかけた時、少年がおもむろに立ち上がって少女に歩み寄った。黙って背中を向けてしゃがむ少年に、ネリはきよとんとした顔になる。

「背負うなら右手使えるだろ」

「え、良いの？言っとくけど、重いよ？後悔しても知らないよ？」

「どつちなんだお前……」

呆れた声を出した少年に、少女はそれもそうか、と少年の首を抱いた。息がかかる距離に、一瞬緊張感が漂うが少女には別の緊張もあった。

さっきまで、限はまさに『身体が碎ける』大怪我をしていたのだ。自分のせいで悪化したらどうしよう、と今更ながらに心配になる。離れそうになった身体を、少年はひよい、と膝裏を抱えあげた。

「うえっわあ!?!」

「……………」

少年が顔をそらしつつぼそりと言った。

「傷は治ったと言っただる。妖混じりは回復力が元々高いんだからな」

「そ、そうだったね……」

相変わらず、素っ気ない限に少女は息をつく。気持ちを切り替え、右手を改めて前に出した。

「二点の座標を固定……“空駆け”…発、動…」

空間の歪みを確認した後、ネリの腕は力を失い、すんと落ちた。

トントン

「……………ん」

ゆるやかに意識が覚醒した少女は、寝返りをうった。窓からはさんさんと陽の光が、部屋に降り注いでいる。

「…いつの…間に…」

乱れた頭のまま、身を起こすと、つぶらな瞳と目があった。一瞬、ヒツと息をのむ。目の前に人形が首を傾げたまま、独りで立っていたのだ。蓮根を繋ぎ合わせたかのような、粗末な造りの人形である。

(あ……もしかして……)

「操^{みさお}ちゃん……？いるの？」

ネリには心当たりがあった。“友達”になることで物体を操ることの出来る異能者に。

すう、と扉が開けられてヒョコリとくせつ毛の黒髪が覗いた。

「ネリちゃんおはよう」

「おはよう。起こしてくれてありがとう、操ちゃん」

布団から出て伸びをすると、コキコキ身体を鳴らす。大分長い間寝ていたようだった。時計を確認すると、昼近かった。

「ネリちゃん、大丈夫？お腹空いてない？」

「あ……うん。大丈夫」

ネリが伸びをした瞬間、きゅるる……と可愛いお腹の音が響き渡った。

「大丈夫じゃないみたい、お腹減っちゃった」

「皆心配してたんだよ。全然起きてこないから」

早く食堂行こう、と急かされてネリは最速の着替えを終えた。今日は気分を変えて、制服である。

黒髪の少女に手をひかれ、銀髪の少女は自分の部屋を後にした。

(20) 言いたいこと分かりますか、ん？ (前書き)

レギュラー格以外説明する隙間が無い

(。 。 ;)

もし分かりにくいキャラクターや、能力などで質問がありましたら、
教えてください。

今のところ、登場人物全員のプロフィールだけの話を挿入するつもり
はありません。

原作を知らない方、わからないことがあったら教えてください。

(20) 言いたいこと分かりますか、ん？

「よう。遅かったな、寝坊助」

「こんにちは、ネリちゃん」

食堂に行くと、閃と秀が向かいあって昼食をとっている所だった。当然のように秀の隣にネリ、閃の隣に操が座る。操はネリよりも年下だが、小さい子供達のお姉さんの存在で、しっかりものである。それで、副長の刃鳥から、ネリを起こすように頼まれたとか。

「でね、ご飯食べたら頭領の部屋に来てって、副長が言ってたよ」

「そう……。」

いくらか沈んだ声で少女が答えると、少年達は心配そうな顔をした。妖力を使い果たして倒れたと聞いて、自分達にも責任を感じていたのだ。

「昨日は本当、ありがとな。救護の菊水さんが驚いてたんだぜ」

「そうそう。あれだけの傷を短時間で複数治す能力は、凄いつて絶賛してたよ」

少年達の褒め言葉に、若干の慰めが入っているのは十分分かっていて。ネリはありがとう、と短く言ってご飯を食べる。

「さすがに朝ご飯食べて無いから、お腹減っちゃった」

あまり食欲は無かったが、ネリは箸を持つ手を止めなかった。薄々、少年少女達は感じていたのだ。

妖をも癒すネリは、妖を抹殺する戦闘班にいられないのでは無いのかと。

だが、お互い口にするのは怖くて出来なかった。

「頭領。入ってもよろしいですか」

「あ、ネリちゃんどうぞ」

「失礼します」

礼儀作法のお手本の如く入室したネリは、正守が腕を組んで書類とにらめっこしているのを見た。

ネリが黙って正守の正面に座ると、夜行の長は隈くまの出来た目を少女に向ける。

「ど…どうしたんですか、頭領。」

「ちよつとさ、良からぬ噂を耳に挟んでね…、しょーも無い考え事だよ」

気にしないで、と正守はへらりと笑う。少女は、頭の中で原作漫画

をパラパラとめくってみた。
まだ、2巻、3巻の狭間のはずである。その時期に、夜行の長が思
い悩む噂は自然と限られる。

（烏森を組織的に狙う奴等の噂、かな？）

きつとまだ情報集めの途中だろう、と少女は何も言わなかった。

おもむろに、正守が部屋に結界を張った。いつぞやの墨村家の時と
同じである。少女が困惑顔で正守を見ると、青年はニヤリと笑った。

「あれからさあ、未来予知は無い？」

「……………それをきくために呼んだんですか？」

「まあ、それだけじゃないけど。」

一旦言葉を切り、正守は意味深にため息をついた。頬杖を付き、軽
く微笑みながら口を開く。

「ネリちゃん。この前、俺の幹部入りの件当てたでしょ？」

「ええ…まあ」

「他には何も見えなかった？他のメンバーは？」

やる気の無さそうな雰囲気醸し出しつつ、正守の目は真剣そのも
のである。だが、真剣さをやや逸脱していそうな、危険をはらむ瞳
だった。

嘘を許さない目で少女を見つめる、夜行の長。

少女の背中に汗が伝う。

「見ま……した」

少女の口が動くのは早かった。
すぐさま切り返される。

「何を」

怒りでも無い、畏れでも無い……正守に見つめられて、少女はいい加減な事が許されない事を悟った。

「幹部会の時の場景が、見えました。

第一客の夢路久臣。

第三客の竜姫^{たつぎ}。

第八客の扇一郎。

……が、頭領と話してました。」

嘘は言っていない、ただ全てではないだけ。ネリが震えながら正守を見つめ返すと青年は『ふうん』と、とらえどころの無い返事をした。

「やっぱり知ってるんだ。…本当に不思議な子だね、ネリちゃん
て」

「……」

どういった返事を正守が望んでいるのか分からず、少女は沈黙するしか出来ない。構わず、正守は話を変えた。

「来てもらったのは 君の治癒能力についてなんだ」

「……妖力制限ですか」

「うん、そう。話が早くて助かる」

夜行の長は頼杖を止め、結界を解いた。内緒にする話でも無いということだろう。

「君に呪印を刻んでもらう」

「限君みたいな、炎縄印ですか」

「……嫌がらないんだ？」

意外そうな顔で正守が驚くと、ネリは頷いた。

「戦闘班にいるのに、倒した側から妖治してたら効率悪いじゃないですか」

「まあ……そうだけど」

「それに、染木さんには色々お聞きしたいこともありますので」

少女が染木の名を出すと、正守は首を傾げた。

染木文弥は呪い班^{まじな}主任の、呪刻師^{まじな}である。呪いを刻印として刻む事に、天才的な才能を持つ17歳の青年だ。

(耳が早い……というより、よく短期間で夜行に順応したな)

仲間の少年達に聞いたとしても、周りは多種様々な異能者ばかりである。早朝、屋根の上で会話した時には、すでに少女は自分の進路を決めていた。

「文弥に何をききたいんだい？」

「妖気が漏れ出すのを、完全に遮断する方法です。……でないと、妖がよってきてしまうんです。私の妖気目当てに」

「そうか」

ふむ、と夜行の長は腕を組む。正守はひとまず安堵していた。

（癒す能力を封じたいようで良かった。この子を救護班に置くわけにはいかないからな）

理由は単純である。自分の目が届きにくくなるからだ。人手不足な上に多忙な救護班に入れたら、各地を飛び回るようになってしまう。善は急げ、と正守は刃鳥と染木を呼んで、ネリの呪印措置を頼むことにした。

「身体中から妖気が出る？」

「はい」

夜行の一室で染木と軽く挨拶を交わした後、刃鳥は少女から話をきいていた。刻印のイメージを練るためか、今文弥は目を閉じて二人の話を聞いている。

「妖気が炎のように身体を纏まとうんです。自分じゃ抑えがきかなくて……あと、攻撃的な思考になります」

「ネリが？想像つかないわ」

普段は肩を縮めて、物静かな少女が攻撃的になるなど刃鳥には信じられなかったらしい。少女はうつむいた。

「限君にも、妖気が垂れ流しって……言われました……。彼が、いつか私が妖を集めるようになるだろうって……。」

刃鳥は少女の言葉に、目を見開いた。内容ではなく、限が少女に助言したことについてだ。

(限……もしかして、結構前からネリのこと……)

「ネリちゃんさ、一回完全変化してみてくださいない？」

唐突に文弥が腕を解いて目を開けた。刃鳥は少女を見たが、ネリは自分の右手を見て……頷いた。

「私もお願いがあります。妖気が万が一噴き出すと、この場所に妖を集める恐れがあるので……場所を移してもいいですか？」

「僕はいいいよ。副長、良いですか？」

「場所にもよるわね」

二人が少女を見ると、ネリはコンパクトを取り出した。刃鳥達が不思議そうな顔を見ると、ネリがうつすら笑う。

「鏡の中です。」

「……!?」

二人は目を見開いて、少女に注目した。ネリが桜色の指先で鏡に触れる。

「二人の存在情報を捕捉、“鏡渡り”発動」

少女よりも歳上の二人は、未知の出来事に身体を固くしたが視界はずっと明るいままだった。息を吐く音は誰のものだったのか。文弥が口を開く。

「何も…変わって、無い？」

「頭領から聞いてはいたけど、まさか自分が来ることになるとは…」

刃鳥が部屋の掛軸に目を留める。日本画だったらきつと気がつかなかっただろう。だが、墨で書かれた文字は左右逆さまになっていた。部屋は何ら変わっていないのに、それだけが鏡の世界である証拠であった。

「大丈夫ですよ。左右対称になっただけで、何にも変わっていません

「なので」

「そ…そのようだね」

文弥は、一度深呼吸した後まっすぐネリを見た。少女が頷く。

「いきます」

少女が軽くうつむく。

妖狐化してすぐに3人は、鏡の世界に場所を移して良かったと思っ
た。

今までの比では無い、ネリの妖気に天井が揺れる。圧倒的な妖気が
文弥と刃鳥の肌をビリビリ震わせる。

少女が暴走しているわけではない。第1段階の変化にも関わらず、
妖気が凄まじいのだ。

『……………』

少女が目を開けると、藍色の瞳が覗いた。文弥が納得したように、
何度も頷く。

「確かに凄い……………」

『この妖気…抑えられますか？』

ネリが心配そうに言うと、文弥は逆に少女に確認した。

抑えつけないという苦痛に耐えることが出来るのか…と。

ネリは尻尾を抱きながら、青年をまっすぐ見つめた。

「耐えてみせます　　未来のために」

悲劇を起こさぬ様に。

歴史を変えても、誰もが笑って物語を終えられる様に。

殺される志々尾限を、救う為に。

（彼を救う為に……私は元の世界に戻る努力を止めたんだから）

少女の決意は、刃鳥と文弥にしっかりと受け止められたのだった。

(21) まっさん(正守のこと)って本当に限のこと気に入ってますよね

妖狐化を解き、現実世界に戻った3人は早速作業にとりかかった。

「じゃ、僕は後ろ向いてるから背中を出して、打ち掛けで前を抑えてくれる？背中に呪印やるから」

「……はい」

このために刃鳥を寄越してくれたのだ、とネリは正守の采配に感謝した。着慣れた制服を上だけ脱ぎ、少女は打ち掛けを胸に抱く。刃鳥が青年に合図すると、文弥が振り向いた。雪の様な白い肌に、文弥の顔がほんのり朱色になったが、少女は背を向けていたので知られることは無かった。

「それでは……始めます」

少女の背中中、青年の指が走る。触覚だけでは解らない複雑な図形に、ネリは頭の中で線を追うのを早々に諦めた。

(何か…背中がむずむずする…)

呪力を持った刻印が背中中の表面を這いずり回るのは、決して気持ちの良いものではない。少女には長い時間だったが、刃鳥には青年の動きがテープの速回しに見えた。

刻印の形が、着々と肩甲骨の拳1つ分下近辺で組み上がっていく。

手の平を広げた程の円の中に、少し小さい円が重なる様に5つ。

外側の円を縁取るように、棘のような突起がぐるりと一周。

呪印を刻んでいる時の、おどろおどろしい青年が、元に戻る。温和な表情の文弥に戻って初めて、青年は口を開いた。

「終わりました。服を着て良いよ」

少女は服を着る前、背中の刻印を自分の携帯カメラで刃鳥に写してもらった。

文弥はそれを見ながら、説明を始めた。

「5つの円は水の波紋をイメージしてみたんだ。ネリちゃんの妖気は、炎のようだったから相殺するようにね。」

妖気が跳ね上がったりとすると、冷水を被せられたように感じるから、怒りを鎮める効果もある」

「……成る程」

ネリが食い入る様に画面を見ると、文弥はどこか得意気に続けた。

「でもこの“水”は、外縁の棘を活性化させる役割もある。水で止まらなかつたら、バラの棘で身体中を締め上げられる痛みが襲う。これは強制的に妖気の放出を邪魔する仕組みになってるから、絶対に無理は駄目だよ。身体中を針で刺される様なものだからね」

「……はい、肝に銘じておきます」

要するに、完全変化した際に溢れ出そうとする妖気は、この刻印に阻まれるということだ。

体外に妖気を出さなければ、妖を無作為に癒す事もなくなる。

「染木さん、ありがとうございました」

だが、少女は『癒し』の力を手放したつもりは無かった。

ネリの能力の本質は“繋ぐ”ことであり、他者との距離をゼロにするのだから。

(これで、自分の思い通りに癒すことが出来る)

これからは、癒しの力を『意識の糸』で直接怪我人に送り込めば良い。

空間支配と併用すれば、妖混じりの仲間を治癒出来る。

心の中で、目標に一步近づいた喜びを噛み締める少女に気づく者は、いなかった。

「頭領！今終わりました！！」

ノックもそこそこに、勢い良く扉を開けたネリは正守が疲れた様に机に伏しているのを見た。

だが、ヒラヒラと手を振って起きていることをアピールしているの
で、寝てはいない。

「す…すいません、お休み中失礼しました」

「いいよ、入って」

おずおずと正守の前に座ると、夜行の長はハアア…とため息をついた。

「全く嫌になる…何でほっといてくれないかなあ……。噂止まりだし…俺が直接確かめに行くしか無いか……」

机に突っ伏しながら正守は独り言である。十中八九、烏森を組織的に狙う噂、であろう。

ネリは現段階、悲劇回避のために必要な『予言』は何か、必死に考えていた。

（やっぱり…情報漏洩の張本人、細波さんのことかな）

諜報班主任である細波は現在、夜行本拠地を離れ自由に日本を飛び回っている。

彼は、裏切り者。

彼が敵方に情報を流したことは、限が殺される一因にもなっているのだ。

だが、面識が無い相手のことを新人がとやかく言うのは不自然であり、細波は夜行第三位の実力者でもある。（ちなみに1位は正守、2位は刃鳥）

（だからなに？最初から怪しまれるようなこと、私はたくさんして

きたじゃない)

限の死の未来は、避けなければならない。
見殺しなんて、出来るわけがない。

「頭領。また、未来が見えました。」

「ん？」

上半身を起こした正守は、和服の袖の中で腕を組んだ。ネリの真剣な表情とは裏腹に、正守は天気予報をきくような様子である。結界を張るのも、ごく軽い調子で行なった…様に見えた。

表面上は。

「今度は何が見えた？」

「諜報班主任、細波さんが夜行の情報を外部に流しています」

正守の反応こそ、見物だった。ネリの言葉に覚悟はしていたが、正守は驚愕を顔に貼り付けていた。

「なん…だと？」

「情報を渡す相手は十二人会幹部、第8客の扇一郎です。扇一郎は、烏森を狙う妖の集団と密約を交わし、協力関係になります」

ネリは、最大の賭けに出た。

あまりにも踏み込み過ぎているのは分かっている。だが、もっと早くこの密約を知っていれば。

もし、扇一郎が烏森を狙っていると知っていれば。

もし、もっと早く対策を正守が練っていれば。

限の死は防げたかもしれない。

「いや、防いでみせる。ハッピーエンドを、私が創ってやるんだから」

意気込み新たにネリが正守を見ると、彼は底冷えする光を目に宿していた。

絶界を発動しそうな、危ういバランスの気配。

少女はそれが無言の“殺気”だということに気がつかなかった。

「ネリ。それをどうやって知った？」

「……未来予知、です」

冷や汗をかきつつ、ネリは正守から目をそらさなかった。正守が名前を呼び捨てる意味にさえ気がついていない。

「……お前、何者だ」

「……………」

「やっぱり怪しまれてる、よね。」

「私が本当の事を言ったところで、頭領は信じてくれるんですか？」

「内容にもよる。お前が嘘をついているかもしれないからな」

一瞬、間が空いて正守とネリは静かに火花を散らした。

「……………質問を変えよう。お前の目的は何だ。何のために異能を使う」

嘘は無しだ、と正守は結界にもう3重追加した。妖を結界で滅する以上の力を籠めて、人間さえ殺せるように。

意味は明白だった。

痛い程の静かな沈黙の後、少女はうつむいて、口を開いた。

「ある人の未来を変えるため。…私はそれだけの為に、この世界に留まる決意をしました。」

……………怪しむなら怪しめば良い。そんなの、私にはどうだって良い。」

「……………」

心配が変わったネリの様子に、正守は息を呑んだ。目の前の少女は、嘘をついてはいない。それだけは認めざるをえない、表情だった。

「私が助けてみせる…歴史を変える大罪を犯しても、……………誰も傷つくこと無く、誰も……………誰も、殺されること無く!!」

魂が叫ぶような少女の言葉に、正守は考えを改め、瞬時に青ざめた。

目の前の存在に、畏れを感じた自分に驚愕したのだ。

「お前、は……どこまで未来が見えているんだ……？」

「全て」

正守の消え入るような問いに、少女は即答だった。ネリの拳に力が入る。

「私は未来が『見える』んじゃない。」

正守が目を見開いた。

「私は未来を　　『知って』いるんですよ」

未来を『予知する』こと。

未来を『知っている』こと。

この二つの違いはごく僅かで、聞き流したら日本語を母国語とする人でも、気づかなかつただろう。だが、夜行の長は感じ取っていた。

「そうか…俺がネリの未来予知に違和感を覚えたのは　　」

不確定未来と、確定未来。

ネリは最初から、確定未来しか話していない。原作漫画を知っている彼女は、この世界において第三者の目線なのだから。

それは　　神の視点でもある。

「だから私は夜行の戦闘班に入り　　彼と行動を共にした。」

「……まさか」

正守はネリの言葉に悪寒が走るのを感じた。

今現在、ネリと一番仲が良い人物といえば

「彼を死なせない為に、頭領には間違った道を進んで欲しくない。
亜十羅さんにも泣いて欲しくない。」

戦闘班、彼、間違った道、亜十羅。

それらが指し示すのは一人しかいなかった。

「力を貸して下さい、頭領。　　限君を死なせたく無いんです」

「ネリ……お前」

正守は、不思議で怪しい少女の正体よりも、急遽確かめなければならなかった。

「限と仲が良いのは……嘘だったのか？」

「……」

確かに、最初は使命感があった。悲劇は見過ごせない、『幸せな未来』の実現に、彼の延命は不可欠でもあった。

「最初は…目的があつて…彼に接触しました。彼の人柄は既に知っていたし、同じ獣人系の妖混じり…近づくのは簡単でした」

「……」

少女の言葉に、正守は谷底へ叩き落とされた気分になった。

「でも、今は…正直わかりません。不器用で優しく、人一倍任務に一所懸命で…誰よりも、傷ついて。限君のこと…、私、どう思ってるのか……」

「そう、か……」

正守が座椅子の背もたれに、体重を預ける。同時に結界は、盗聴防止用以外を解除した。

「少なくとも君が、俺の敵じゃ無いつてことは分かったよ」

人助けのために、女の身で荒っぽい戦闘班に入ったのだ。外部からの諜報員である可能性は潰^{つぶ}えた。

薄く笑う正守に少女はジト目で言った。

「私よりも扇一郎や不死身の無道のことを心配してください。頭領が怪我しても妖混じりじゃないから、私の妖気で治せないんですよ」
ネリの言葉に、正守はまじまじと少女を見る。同年代の少年達からは聞きようが無い人物を、ネリが知っていたからだ。

不死身の無道。

かつて夜行にはそう呼ばれた男がいた。

呼び名の通り、殺されて火葬されても絶対に死なない男。
どんな酷い怪我をしても生き返る男。

彼はとても希少である、『魂蔵持ち』と呼ばれる存在だ。
他者の命を自分に接ぎ木エネルギすることで、生き永らえることができる。

「あの男のことまで知っているのか？」

「知ってます。でも、今の居所はどこか知りません。頭領とあの人との戦闘はずっと先のことですから」

それよりも、とネリは身を乗り出した。

「頭領。弟さんに絶界の基礎を教えてください！早い段階でものにしていれば、きつと」！

「それも、確定未来なのか？」

ネリはうつと詰まった。確かに、その未来は原作に含まれていない。だが、まだまだ技量が追いつかない良守に、仲が悪くとも結界術を教える人がいれば……

少女が考えた時間はほんの一瞬だったが、夜行の頭領が勘づくには十分だった。

「はあ…ネリちゃん。未来を知る君なら、あいつの行き着く先も知っているんだろう？俺があいつを手助けすることは、この先無いはずだ」

「直接は……確かにありません。でも、回り回って頭領は弟さんを助けてます。」

自分自身で自覚は無いかも知れないが、正守は烏森に選ばれた良守を、憎んではない。ネリには原作を読んでそう思わずにはいられなかった。

「本当に……たくさん助けて下さって。私には三人共、仲のよいご兄弟だと思えますよ。」

年寄り染みた物言いにネリ自身、少し驚き……クスリと笑った。

(22) 秘密の特訓にお付き合

予想以上に長くなった話の後、ネリは正守の部屋を後にした。これからもよろしくと言われたので、きつと執務室に入り浸ることになるだろう。

廊下を歩きながら、ネリはホッと胸を撫で下ろしていた。正守がひとまずネリの味方になったことで、今後の作戦は練りやすくなる。

「そつよ。あとは私がしつかりしてれば良いんだから」

正守に情報を与え、良守や時音に対処法を教えていけば、きつと悲劇は回避できる。廊下の角に近づいてきて、制服のポケットから愛用のコンパクトを取り出した。

「さて、異界で特訓と行きますか。」

歩きながら、鏡に右手を押しつける。

廊下の角に差し掛かったのは、ちょうどその時だった。

「“鏡渡り”発どごつ!？」

「!?!」

角からいきなり出現した少年が、ネリと正面衝突したのだ。目線が手元のコンパクトにいていたので、額を思いきり少年の顎にぶつ

けてしまう。

「……………!?!」

背中から倒れそうになったネリに、思わず少年が少女の手を掴むと、二人は鏡の世界に吸い込まれていった。

どくん、どくん、どくん

すぐ耳元で心臓の鼓動がきこえる。その力強く、どこか速い音にネリの意識は浮上していった。

「痛たたたた……」

ネリが額を抑えると、妙に身体と床の接地面が暖かい事に気がつく。それに堅い木の感触では無く、適度な弾力がある。

「お前…、道のと真ん中で能力使うなんて危ないだろ……」

すぐ頭上で聞こえた声に、少女は恐る恐る顔をあげた。少女が背中から落ちるのを防いだのは、他でもない志々尾少年だった。

身体が暖かいのは当然である。少年の身体を、ネリは下敷きにしていたのだから。

「わわわ!?!ごめんなさい!」

慌てて少女が飛び上がったので限の手は、ネリから離れた。

少年も身を起こし、ふと辺りを見回す。いつも通りの、廊下のままである。

「能力は結局発動していないのか」

「う、ごめんなさい巻き込んで。同じ場所に見えるかもしれないけど、ここは鏡の世界で、左右対称の異界なの」

「……………？」

理解出来ない目で少女を見返す限に、少女は説明しようとしてコンパクトを探し　　青ざめた。

「うそ……割れてる……」

床に散らばった鏡の破片にネリが手を伸ばすと、その腕を少年が止める。

「触るな。手、切るぞ」

呆然としたままのネリに限が冷静に指摘すると、少女はこの世の終わりの様な顔をした。祖母から譲られた、金細工の鏡は無惨にも粉々である。

それよりも、大変な事がある。

「出入口が……！！うそ

！！！！？？？」

突然叫び出したネリに、限は目を白黒させた。アワアワと狼狽^{うろた}える様子に、限はため息をつく。

「つまり、この世界から出られないということか？」

「いやいやいや、待て待て待て　　鏡があるところを捜せば大丈夫なんだから、そうよ、大丈夫よ！！！」

トイレとか、窓ガラスとか……ブツブツとネリが呟く。
反射するものさえあれば、限を異界から出す事が出来る。

「そもそもお前、なぜ異界に来たんだ？」

「……え？あ、うん。あの、特訓しようと思って。染木さんに呪印刻んでもらったから」

「そ……そうなのか」

思わず少女の身体に目が行きそうになったのを、少年は立ち上がって誤魔化した。

「……異界なのに、なぜこんなに夜行と似ている？」

「ああ、それは現実世界を左右対称にしたただけだから　　て言うても間取りまでいじってないけど。」

重なってる世界だから、鏡に映った向こうの声も聴こえるよ。同じ場所であって違う場所……みたいな感じかなあ？」

「疑問で返されても困るんだが」

ん、と限がネリに左手を差し出す。ネリは前回よりも嬉しそうな顔で、その手を取った。

「ありがとう。」

「……………」

ぶい、と顔をそらした少年の顔は若干赤かった。だがふと、その眉が訝しげにひそめられる。

「……………独りで訓練するつもりだったのか？」

「うん。外の世界で完全変化出来る自信がつくまでね」

少女が、少年の前方に立った。一番近い鏡まで限を連れていくためである。少女が数歩進んで、少年の足音が追ってこないことに気づき、振り返った。

だが、少年の足は動かない。ネリがまた側まで戻ると、少年は呆れた様子で口を開く。

「そんなに危険があるなら監督者が必要だろ、普通。一人で動けなくなったらどうするつもりだ」

「まあ……………それは……………」

考えないようにしていた可能性だったので、少女は口を濁しす。妖気を制限された状態では、自分を治癒することが出来ない……………かもしれないのだ。（完全変化している時に怪我をしたことがないから、確かめようがない）

「でも、私の妖気は強すぎるから、何が起こるか分からない。呪印は完全なストッパーにならないから、人がいるとかえって危ないんだよねー。」

痛みが身体を襲っても、抑えられないなら意味がない。自分で調節出来るようにならないければ、また任務地で妖を呼んでしまう。

「私なら大丈夫。夕食までしかやらないし」

もう3時過ぎだが、食堂が開いている8時まで、充分時間がある。だが、この場を離れるにしろ鏡をこのままにはしておけなかった。

「あ、そうだ。“拒絶”」

少女は何かを思いついたように、漆黒の球体を出現させた。その球体を圧縮して、フリスビーのように平たく形を操作する。持ち主を侵蝕しないか自信が無かったので、触りたくなかったのだ。限が興味深そうに少女を見守る。

「これで、特製ナイフの出来上がりっ」と

最後に円盤を楕円形に整えるとネリはおもむろに、床に突き刺した。

「……何をやっている？」

「床ごとひっぺがしちゃえば、細かい欠片同士繋げられるかもって。」

どうしても木目に入って取れない粒もあるので、ネリは少々荒っぽい手段に出たのだ。垂直の薄く黒い刃は、綺麗に欠片が乗った木の板を大回りに切った。

そして、切り出した木の板ごと修復用の異空間に置いて閉じる。

「同じ原子同士くっついてね〜っと」

まるでクッキーが焼けるのを、オーブンの前で待つかのような様子のネリ。そしてすぐにネリが限を振り返った。

「じゃ、トイレの鏡まで送るね」

「……いや、いい」

ネリが不思議そうに少年を見ると、限は腕を組んで顔をそらした。

「俺も特訓に付き合う。つい昨日なんだぞ、お前が妖力使っただけでぶっ倒れたのは」

「でも、自分の訓練は良いの？」

限の申し出は願ってもいないのだが、予定を邪魔する気までは無い。限は肩をすくめた。

「元々頭領にお前の面倒をみるよう、頼まれてるからな。連絡はしていないが、大丈夫だろ」

「え！？そうなの？……いつの間に。」

「午前中に副長づたいにな。理由を聞こうと頭領の所へ行ったがお前とぶつかった。」

危なっかしい少女を見て、一人で納得している限はネリを促した。同じ獣人系の妖混じりで、身体能力が桁外れの少年なら、ネリの監

督が務まるだろうと正守は判断したのだ。

だが、まさか『限とネリをさらに近づけよう』とする、大人達（正守、亜十羅、巻緒）の思惑もあるなど、当人達は知るよしもなかった。

連れだって夜行の庭に出ると、ざわざわと微かな声が聞こえた。意識して耳を傾けないと聞こえない程の人の声が、鏡越しに届いているのだ。

「……………」

「じゃあ、変化するね」

「ああ」

限とネリが同時に互いから一步下がる。意識を集中させて少女が目を閉じると、その背中からいきなり妖気が吹き出した。

『 …… つ！…！』

冷水というより、氷漬けにされたような痛みに、ネリは目を見開いた。叫ぶことも許されず、息を吸うことが出来ない。

『 …… はっ…………… かつ！』

何してる！！妖気を抑える！！

すぐ側で限の怒声が聞こえるが、少女には認知出来なかった。思考が麻痺する。正常な思考回路が焼き切れたかのように、何も考えら

れない、分からない。

ネリ！！お前には目的があるんだろ！？

(げん、く…)

肌をめつた刺しにされる激痛の中、『目的』という言葉だけが心の中で繰り返される。

力を支配しろ！自分を見失うな！

血のにじむような訓練を4年間重ねてきた少年が、叫ぶ。あの時山の任務地で、ネリを冷たく突き放した限は後悔していた。

(こいつは妖気を扱えるようにならないと、命に関わる。戦闘班など関係ない、こいつ自身の為に！！)

膨大な妖力を抑えるべく、呪印からすると黒い棘の蔓が首をもたげた。それを見て、限に緊張が走る。

「ネリ！！妖気を内側に向けろ！！」

少年の本能が、『あの棘はヤバイ』と警鐘を鳴らす。

一か八か、少年は自分の手足を部分変化させた。手首、足首より先が妖仕様になり、限は無我夢中で紫の炎の中へ飛び込む。

『目的』

少女の目的、それは未来を変えること。

『 限君 』

14歳で殺される少年を死の淵うんめいより呼び戻し、悲劇を回避すること。

『 死なせない 』

ネリ!!

身体を包み込まれる感覚と共に、ネリの妖気が急速に落ち着きを取り戻していく。棘の蔓は空気に溶けるように姿を消し、呪印に戻った。

うっすらと紫の妖気をまとうだけに留まらせたネリは、そこでようやく今の自分の状況を理解した。

『 限…君? 』

「……………」

少年がすっぽりと、ネリの身体を包んで抱き締めていた。限は無言だったが、小刻みに震えていた。その身体の震えが、少女にまで届く。

「どこも……………何とも無いか?」

『 うん…、大丈夫。 』

「……………」

今まで他者を拒み続けてきた少年は、4年ぶりに、全身の血が引い

ていく感覚に恐怖した。

姉の様に今にも少女の瞳孔が開いて、地面に倒れ伏すのではないか。糸が切れた人形のようになるのでは　　という恐怖に。

「お前の器かじが、壊れるかと思った」

『名前……さっき初めて呼んでくれたね』

ゆっくりと限がネリの身体を解放すると、少女の黒い狐耳がピクリと動いた。少女は、少年の呟きには答えず、にっこりと微笑む。銀と黒の尻尾も、以前と同じ輝きを放っている。紫から藍色に変わった両の瞳が、瞬またたいた。

『私も、“限”って呼びたいな。なんて思ったりなんかして……』
少し恥ずかしそうに、尻尾をいじる少女に限は顔をそらして呟いた。

「別に…俺は構わない」

『本当っ！？やったあゝ嬉しい！』

先ほどの緊張感が嘘のように、はしゃぐ少女に限は落ち着かない様子で頬をかいた。

まあ、名前で呼ばれるくらい良いか、と思っていると少女が口を開く。

『これからも、“ネリ”って呼んでね』

「……………!?!」

頬を染めて嬉しそうに微笑む少女に、少年は何も言えなかった。

(23) 名前で呼び合っていて案外、恥ずかしくないですか？ (前書き)

感謝2756ユニーク!!

13人の方がお気に入り登録してくださいました!!

励みになります!

ありがとうございます!!

(23) 名前で呼び合っつて案外、恥ずかしくないですか？

コヨウセツ！！

「操作が直線過ぎる！！全方位から狙え！！」

オニビダマ！！

「スピードが遅い！！火力が弱い！！」

鏡の世界でネリは全身全霊、己の技を少年に放っていた。最初はためらいもあつたが、限の本気にそんな甘い考えは吹っ飛んだ。

攻撃しなければ、自分が死ぬ。

弾丸の様に縦横無尽に飛び回る少年は、ネリの攻撃をもともせず逆に反撃していた。もちろん手加減はしていたのだが。

無数の刃をかくぐり、9つの火の玉を拳で撃ち落とす限はさすが、
戦闘班の要である。かなめ

「次の攻撃へ移るのが遅い！！敵に反撃の隙を与えるな！！」

『こりゃ、スパルタもいいところよっ！！』

コエンリユウ！！

炎の渦が3つ同時に襲いかかる。だが少年は一瞥しただけで、それらの火力の弱さを見破った。

少年は迷わず炎の円盤を踵落として碎き、少女に向かう。

「ぬるい！！お前の本気はそんなものか！？」

(限ってこんなに熱血キャラじゃ無いはずだよね！？)

もはや目で追えない限の強烈な蹴りは、ネリの尻尾が自動的に防御していた。そのまま尻尾に足を絡み取られそうになり、限はすぐに距離を取る。

「ちっ！」

『待て待てなぜ舌打ち！？今の完全に頭狙ってたよね！？』

少年は確かにイラついていた。ネリ自身の体術を鍛えようにも、攻撃は全て自動的に尻尾が防いでしまうのだ。

(これじゃ、尻尾を鍛えてるだけじゃないか)

「拒絶の技を出せ」

『はあ！？そんなことしたら限に孔あなが開くでしょ！？』

空間支配系の能力である“拒絶”は、肉体組織の繋がりに干渉すること、人体を蜂の巣にすることが出来る。組織の繋がる力を拒絶する、理論的には肉体ごと細胞を貫通させる凶悪な技なのだ。

『怪我したらどうするの！！！！』

「その攻撃が一番有効なんだから、一番使えるようになるべきだろ」

拳の雨を防ぐ尻尾の間から、ネリは叫び返した。

『妖の力が頼りないって言うの!?!』

「お前の欠点は、威力の無さだ。」

ガシツと尻尾を9本全て掴んだ限は、草をかき分けるようにネリに顔を寄せた。

「確かに攪乱や、奇襲には効果があるかもしれないが、比較的対策がたてられやすい。火力も弱い。動作の移りも遅い。」

肩で息をする限は、ゆっくりと尻尾を離す。

「唯一、変化で一番強い技が“イツナ”だろ。てっきり偵察だけかと思ってたんだがな」

『……………』

サクヤモン（究極体）の技である“イツナ”は、偵察しか使われたことがない。

だが、その本質は空間支配能力を融合させた、最強の炎である。

7つの色鮮やかな炎狐達は、意思を持った“拒絶”の塊。狐達が対象を貫いたが最後、後には何も残らない。

例えばかすっただけでも、世界から強制的に存在を拒絶され、消滅させられるのだ。

即ち、原子に戻る。

「呪印が発動しない程度に、“イツナ”が使えるようになるのが課題だな」

『そう、だね』

限の闘気が収まるのを感じ取って、ネリの尻尾は少女の背後に下がった。さっきまで勝手に動いていたのが嘘のように、『尻尾』になる。

「変化の方はこれくらいにしておこう。」

『うん。』

妖気が収縮し始め、狐耳が引っ込んだ後、ネリは縁側に腰をおろした。夢中になっていて気がつかなかったが、もう大分陽が傾いていた。

「後はやるなら空間支配能力の方だ。言葉無しで発動出来るようになった方が良い」

「やっぱりそうだよな……」

頭に手をやるネリも、自覚はあるのか苦笑いした。イメージが重要な異能の発動を言葉に頼るのは、他の異能者に遅れをとっている。言葉にすれば、戦う相手に構える時間を与えてしまう。自分の戦い方を相手に知られていたら、対策をたてられてしまうのは明白だ。

（ “拒絶” ）

心の中で呟くと、ネリの指の先に、漆黒の球体が出現した。ふよふ

よと浮かぶ玉は、見れば見るほど不死身の無道の技と似ている。

(まあ、頭領の絶界を無道のような形にアレンジしたんだけど)

意を決して人差し指で球体を軽くつつく。すると、軽く跳ね返される感触のみが残った。

「あれ？意外と怖くない」

「把握しないまま使っていたのか…」

呆れた様子の限も、つんつんと軽く球体に触れてみる。同様に弾かれただけで、侵蝕されることは無い。

「これはどういう力があるんだ？」

「最初は盾の役割だけで、攻撃を“繋がらない”ことに重点をおいたの」

ネリは球体を見つめたあと、盾の形に操作した。少女が拳を振りかぶったのを見て、限が止める。

「俺がやる」

「分かった」

少女が座っていた所に、限が座り右手を構える。鋭利な少年の爪が盾を抉ったが、傷ひとつつかなかった。だが一拍後に盾はパリン、と呆気なく砕け散る。

「一撃を防いでも、次の攻撃まで効力がもたない。だから、あらかじめたくさん球体を待機させておく必要があるの」

「……………」

なんと半端な能力…と少年の顔にかいてあった。攻撃は確実に防ぐせに、恐ろしく燃費が悪い。

「…………で、形状を操作すれば応用がきくな〜って」

「例えば？」

ネリが黒い球体を複数出し、それらはみるみる形を変えた。

1つを氷柱カピに。

1つを薄い円盤状に。

1つを網あみに。

大きさもバラバラな黒い影達は、限とネリの正面でふわふわ浮かんでいる。

「つららみたいにしたのは、貫通力を増す為に。」

槍のように尖った楔は、木の幹を貫通し壁に突き刺さった。だが、漆黒の楔は砕け散ることなく、打ち込まれたままだった。

「ん？壊れないぞ」

「圧縮したから……………耐久性が増したのかな？」

同様にネリは思いつく限りのアイデアを活用した。円盤状にしたものは、チェーンソーのように木を輪切りにし、網状のものは木を細切れにした。それらを見て、限の顔が曇る。

(殺傷性が高過ぎるな……)

限としては、どうにかネリを戦いの前線に出したく無かったのだが、これだけ確実な能力は他に例が無い。まず間違はなく、一番先頭に駆り出されるタイプの異能者である。

「イメージの形成に時間がかかりすぎるな……。あと、集中力に頼りすぎるのも心配がある」

「なんか、課題が山盛りだね……」

落ち込むネリに限は、『半端な』指導が出来ない自分を呪った。全力で少女の能力を高めてしまったら、ネリは今後夜行の最前線に出ることになるかもしれない。

(だが、こいつは強く成りたがっている。俺は、任務を遂行するだけだ)

頭領からの任務をこなすことは、限の最優先事項であり正守もそれを分かっている。

故に、限の任務出勤数は同年代の中で圧倒的に多い。

(自分の身を守るためにも、どっちにしろこいつは力をつける必要がある)

「限？」

「……ん？」

「どうしたの？考え込んだじゃって」

「……いや、問題ない」

ひとまずネリの能力をほぼ全て把握した限は、庭に飛び降りた。

「もう大分暗くなってきた。続きは明日やろう」

「明日も付き合ってくれるの！？」

「あ、ああ」

目を輝かせながら隣に立つ少女に、少年はほんの半足分だけ下がる。そんな少年にネリはふと、横を向いた。そして、思い出したかのようにならぬと頷く。

「どうした？」

「さっきの鏡の修復が終わったみたい」

つう、と細い人差し指が空間を縦に切ると、ぱっくり異界の口が開いた。

そこから板ごと取り出された鏡は、綺麗さっぱり修復されていた。美しい輝きも以前のまま、細かい金細工も欠けたところが無い。

「良かったあ……」

心底ホツとした様子のネリに限はそこまで大事な物だったのか、と鏡に目を落とす。

「鏡はただの目印じゃないのか？」

「これは特別だよ。目印用はこっち。」

また適当な空間を指先で撫でると、新たな異空間が出現する。

ちらつと覗いて、限は愕然とした。

おびただしい数の刀、剣、槍、斧、盾、鎖が、ところ狭しと集められているのだ。全て西洋風の武器であり、中世の城の武器庫に迷い込んだようだった。

「これは……なんだ？」

「まだ一回も使われていない新品の剣達。これだけ集めるのに、どれだけ骨を折ったか……」

どこか遠い目をした少女に、少年は思わずきいた。

「今時こんなに良い刀剣を作っている鍛冶屋はそういないだろ。よくこんなに集められたな」

「これは、ほとんどが依頼主に譲ってもらったの。報酬としてね」

ネリがレナモンと会ってから、数々の世界を旅した。

世界を渡るのはそう簡単に出来ることではなく、シフト先の世界が少女を必要としていることが第一条件である。

ある時は、魔獣退治だったり。

ある時は、暴君を排除することだったり。

世界の意志がネリとレナモンの力を欲して、二人を引き寄せるのだ。

「報酬つて……その歳でか？」

確かに転移先の人間達は、幼い少女に最初は驚いていたっけ。ネリは、亡き相棒との旅を思い出して儂く笑った。

「私がいたところは、物騒だったからね……。依頼もたくさん舞い込んできてて、さ」

依頼の数だけ恨まれることも増えていった。特徴的な容姿だということも災いして、狙われることも多い。

(でもまあ、世界を渡れば会うことも無いし)

報酬をもらったその時から、ネリは依頼主の願いを叶えることを己に誓い、最後まで全力を尽くす。

「大体の報酬を武器で払ってもらってたから、今じゃこんな量になっちゃった」

異世界の貨幣をもらっても、元の世界ではなんの価値もない。換金さえ無理なのだから、ネリは早々に金貨をもらうのを止めた。

限には1つしか見せていないが、他にも4つ同じく武器庫が存在する。

「そつだ！良いこと思いついた！護身用に、限も剣とか持ったら？」

「剣……」

限の実家は総合武術道場であり、忍術の流れをくむ総合格闘術を門下に教えている。

少年も一通りある程度の武器は使える…と言いたいところだが。

（道場に顔出したこと、ほとんど無かったからな）

一瞬、病院送りにした兄達の顔が浮かび、限の顔が強張った。

少女はそんな様子に気がつかず、次々と武器庫を開けていく。装飾が華やかな物から、武骨な物まで多種多様な武器が山のようにある。

「これで5つ全部だから、好きなのを……限？」

様子がおかしい限に気づき、ネリが少年まで歩み寄る。少年は少し冷や汗をかいていた。

もう4年も会っていない家族。

ちゃんとした別れもしない内に、唯一仲の良かった姉とも話をしないまま夜行に来てしまった。少年が瀕死の重症を負わせた姉は、何度も手紙を限に出していた。

しかし、限が返信することは無い。

（だが俺の居場所は夜行だけだ。任務以外に俺の出来ることなど…）

「限、大丈夫？」

少年の額をハンカチで拭う、白い小さな手。控え目に動かす感触に少年は我に返った。

「……………」

「鏡も治ったし、帰ろっか」

「……………ああ」

ネリは深くきくことなく、限と一日目の訓練を終えた。

少年にも、少女の気遣いがあった。

(24) 鏡の世界へご招待 (前書き)

早く出来たので、早めに投稿します！

これからもよろしくお願ひします！

ちなみに明日もちろん投稿します(*^o^*)

(24) 鏡の世界へ招待

それから6日間、限との訓練は続いた。そして、自分の周りに壁を張り巡らせていた少年の心は、ネリによつて徐々にほぐされていくのだった……。

「ネリ！！尻尾を使うなど言ってるだろ！？」

『いやいやいや、使わなきゃ死ぬから！！』

最早手加減の無い限の拳をさばくネリは、短期間で驚くべき成長を遂げていた。火力も飛躍的に増し、オニビダマも拳大だったのがバレーボール大になっている。

少年が撃ち落とすのにも一苦労な程だ。コヨウセツは一気に直線的に放つのをやめ、全方位から囲むように刃を配置してから、串刺しにすることにした。

勿論限に届く寸前に、止めてはいるのだが引つ搔けてしまう時もある。そんな時は、治癒の力を試していた。

『いつけええ！！』

少女の声に従つて炎の渦がうつ、少年に向かう。限が強烈な蹴りを放った後少女から距離をとるが、渦はしつこく少年の跡を追った。

「良いぞ！追尾出来るようになったな」

『よそ見していると、焦げちゃうよ？』

「……フン、よく見てる」

挑発的な少女の言葉に、限は炎の渦を己の爪で勢い良く抉った。踵落としを予想していた少女は唇をかんだ。他の4つも同様に呆気なく消え失せる。

『もー!!どうして分かつちゃったのー!!』

「中に能力隠すのは良い考えだな」

炎の渦の核に意識の糸の束を使い、触れたが最後、炎の糸が身体に絡み付くという仕組みである。限はその核を破壊したので、糸は碎け散った。

「大分応用も大きくようになったな」

『1週間みっちりやったからねー。本当にごめんね?特訓に付き合わせちゃって。』

「俺も良い経験になった。気にすることは無い」

汗を拭う少年に、ネリはちらりと時計を確認した。そして、にっこり笑うと限の腕に手を絡める。

毎日、昼ごはんに行く時の儀式と化しているので、もう少年がその手をはね除けることは無かった。

「じゃ、帰ろっか」

「……そうだな」

触れられている左腕がほんのり暖かく感じ、限はそっぽを向く事で、照れを隠す。

（“鏡渡り”）

およそ1週間、同じ時間を過ごした事は少なからず二人の距離を縮めていたようだった。

「お前ら付き合ってるんだって？」

「ぶはっ!？」

盛大にお茶を吹き出した限は、言葉の発信源を睨み付けた。その眼光をさらりとかわし、ネリは限の言葉を代弁する。

「閃君、主語が抜けてるって。ってというか私、訓練を見てもらってただけで……」

「それが、付き合ってるって言うんだよ。嫌いな相手と四六時中一緒にいられるわけねーじゃん。なあ、秀？」

「ん、うん…」

同意を求められて困った秋津は、視線をさ迷わせた。そして、結局影宮の爆弾的な話題を無理矢理変えることにした。

「毎日どこで特訓してたのかな」とは、思ってたけど…。二人の訓練ってほら、山の1つや2つ消えそうじゃない？」

「ま、確かに消えたけど」

「「はあっ!？」」

ネリが秀の言葉に頷き、閃と秀が身を乗り出した。復活した限も腕を組んで、会話に加わる。

「…だが、次の日には元通りになっていた。あれはどういう仕組みなんだ？」

「いい加減な世界だから、詳しくは知らないんだけど…、陽が登ると現実世界を投影するみたいだよ。夜までに壊した庭とか建物が、朝日で直っていくのを見たことがあるから」

「ふむ……。それならもつと大規模な訓練も出来るな」

「ちよつと待て!！」

閃が耐えきれずに二人の会話に割り込んだ。

「現実世界、ってまさかお前ら違う世界で訓練してるのか!？」

「うん」

「ああ」

さも当然のごとく受け入れている二人に、閃は目眩を感じた。

「それは、ネリちゃん的能力なの？」

秀がどこか心配そうに少女を見たが、ネリはけろりとした様子で頷く。

「だって、私空間支配系能力者だよ？頭領みたいな四角い結界術は使えないけど、異界を繋ぐのは得意だから。」

さらりと言つてのける少女に、初耳の少年二人は顎が外れたような顔をした。

限とネリの仲を気にする少年達も、聞き耳をたてていたのか、至るところからざわめきが聞こえる。

噂は本当だったのか！？

なんであの限が！？

聞こえていないのか、あえて聞かないようにしているのか、少女はずっとニコニコである。

『限と一緒にいて楽しい』と、顔に書いてあるのは明白だった。

そしてそのざわめきの中、食堂に入ってきた男性がいた。戦闘班主任、巻緒慎也である。

「おう！何だか賑やかだな！」

「巻緒さん……」

閃が声をかけると、巻緒は一緒にいる限の姿を見つけて、嬉しそうな顔をした。限が食堂に長居したことなど、4年間皆無だったから

だ。

「お。ネリも一緒なんだな」

「こんにちは、巻緒さん」

花のように愛らしい笑顔に、巻緒はさらに笑みを崩した。こんなに良い子が、限の頑なな心を開いてくれたのだと思うと、正守でなくとも嬉しく思う。

それだけ、限の半生が過酷なものであったから、余計に。

「聞いてくださいよ、巻緒さん。こいつら、ネリの異世界で訓練してるんですよ？周りの物壊し放題で。」

「ああ、それなら俺も知ってるぞ。そもそも頭領に提案したの俺だし」

「『ええ！』『』『』『』」

ネリ達のテーブル以外からも、驚きの声があがった。最初から、何かと限と共に行動している異国の美少女であるから、周りの関心は高いのだ。

閃の言葉に、何を思いついたのか巻緒はポン、と手を叩く。

「そうだ、午後はまた戦闘班で手合わせやるか！久しぶりに」

またもや驚きの声があがると思いきや、間髪入れずに高い声が、食堂に響いた。

「ぜひ、よろしく願いします！」

少女の凜々しい声に、戦闘班の少年達の動きが止まる。

限以外、ネリと個人で勝った者はいないのだ。実質、戦力でいえば1位が限、2位がネリである。

限がフツと笑った。

「ネリ。無茶するなよ」

「限こそ、油断してると火だるまになるかもよ？」

バチバチッと、二人の間で火花が走る。食堂の面々は、その時悟った。

二人は、一番の友であり、最高の好敵手ライバルであるのだと。

「集団を鏡の世界へ連れていく許可？」

巻緒は限を連れて、正守の部屋を訪れていた。昼食の後、ひとまず解散した戦闘班の面々は、午後の手合わせの準備をしている。ネリは、自分の部屋に戻って武器庫の剣でも研みがいているのだろう。正守は、軽く腕を組みつつ慎重に口を開いた。

「ネリちゃんの技術的には、出来るって？」

「試した事は無いそうですが、本人は出来ると言っていました。」

確認をとっておいた巻緒に続き、限も口を開く。

「俺も1週間、ほとんど一日中あいつとその異界にいましたが、全く問題なかったです。
むしろ、どんなに周囲を破壊しても次の日には再生しているので、気を遣わずに訓練が出来ました」

「ふう〜ん……。」

まだまだ謎が多い少女に戦闘班の少年達を預けるのは、少し迷う選択だった。

だが、他人を寄せ付けられない限にここまで言わせる少女なら、きっと問題ないのだろう。

顎に手を当てた夜行の長は早々に、許可云々では無いことを考えていた。

…か)
(異界を自由に行き来出来る……しかも、他人を招くことも可能…

空間支配能力者 結界師としても、非常にネリの異能には興味がある。

連続して長い間、異界との道を保持するのは、結界師でもそう簡単にはいはい出来ることではない。
連日異界を行って帰って来る技術は、根本的に結界術と何かが違うのかもしれない。そう考えずにはいられないほど、ネリの空間連結は負荷がかから無さ過ぎるのだ。

正守は、膝を叩いて立ち上がった。

「……よし。俺も行こう」

目を丸くした部下二人を気にせず、正守は軽い興奮を覚えつつ執務室を後にした。

(ぎゃー、頭領まで来るなんて聞いてないよー!!!)

ネリのすぐ側で正守が仁王立ちして、少女の一挙一動を観察していた。あの話し合い以来、頭領と話していないせいも、妙に緊張する。アワアワと不自然な動きをする少女に、限はスツと横に近づいた。

「大丈夫か？」

「お、おう！こんな武者震いさ！」

「……………」

訳の分からない事を口走る少女を、限がジッと見つめた後おもむろに肩に手を置いた。ネリが驚きの表情で少年を見る。

そこには、限本来の優しく穏やかな顔があった。

「いつもの通りやれば大丈夫だろ。」

「うんー！」

安心のせいも、ネリがすっかり元気に頷く。そんな二人の様子を正

守は、複雑な表情で見つめていた。

「じゃ始めますので、円の中に入ってくださいーい！」

あらかじめ引いてあった白線の中に第一陣が入ったので、限は手を離して少女の集中を妨げない様に二陣の中へ下がった。

正守は少女の横に立ち、10人程の少年達を眺めた。少女が武器庫Dより抜き身の短剣を5つ、円の縁に空間移動させる。本来普通に存在する、物と物の距離をゼロにする能力は正守にとっても驚異だった。

「円の中、12人の存在情報を補足。“鏡渡り”発動」

久しぶりに声に出して能力を発動させると、円の中の人々が段々と霞の様に分解されていく。少女も第三者の目線で見るのは初めてだったので、その様子に目を奪われてしまった。

原子に分解された側から、少女の持つコンパクトの中に、円の中の人間が全て吸い込まれていく。自分の身体が分解されていくのに、誰一人として動く者はおらず、まるで時間が止まったかのようにだった。

閃はこれから自分がああなるのだと思いながら、チラリと正守をうかがった。

(これは、結界師と同等かそれ以上の技術なんじゃ……)

第二陣の中で、閃がふと周りを見渡すと戦闘班の主力メンバーがほとんどを占めていることに気づく。限や数馬、巻緒や秀も第二陣である。

(まさか、頭領……)

恐ろしい考えが頭をよぎり、閃は慌てて頭を振った。

例え第一陣に何かトラブルがあっても、最低限の主力戦力を第二陣に残しているとしたら……。

一陣は、捨て駒ということになる。

(まさかな)

心の中で無理矢理馬鹿な考えを笑い飛ばし、閃は少女の小さな背中を見つめるのだった。

(25) 師匠と弟子の闘いです (前書き)

感謝!!!3000ユニーク!!!

お気に入り16件登録!!!

ありがとうございます!!!

更新すると、大体133人前後アクセスがあるんですよー

待っている方がいるだけで、筆が進みます!!!

多分、主人公とヒロインの恋愛方向でこれからもいきます。

それでも大丈夫という方は、どうぞお付き合いくださいませm(

m)

(25) 師匠と弟子の闘いです

第一陣を運び終わった後、ネリは第二陣に少し待つように言い残した後、自身も鏡渡りをした。

「皆さん、一端円の外へ出てもらえますか？第二陣を転移させるので」

異界ときいて少なからず緊張していた少年達は、ネリの指示に従い円の外へ出る。それを見送った後、少女の姿はまた掻き消えた。

現実世界と異界を行ったり来たりと、大忙しのネリだが疲労は特に感じていない様子だ。術者自身の転移方法が、他と違うことの原因を考えつつ正守は帰ってきたネリを見守った。

「では、円に入ってください」

ネリの指示に第二陣の足が一瞬鈍る。目の前で人間が、粒子になるところを見たのだから当然だ。だが、限だけは何も気にしていない風にスタスタと円の中に入った。

それに気づき、遅れまいと数馬が続き巻緒も足を動かした。

正守以外の全員が入った後ネリは円に向かい、先程と同じように能力を発動させる。

「 13人の存在情報を補足。“鏡渡り”発動」

限の転送されていく様子を眺めつつ、ネリは正守の気配をうかがっ

た。すぐ横に立っているの、表情が分からないのだが威圧感はいしひしと肌を刺した。

「……頭領は、私と同じ方法で行きたいんでしょう？」

「良くわかったね」

庭に二人だけとなって、妙に広くなった感覚に陥る。ネリは“服飾室A”と入口に書かれた異空間を呼び出し、巨大な姿見を意識の糸で引き寄せた。

「これは？」

「二人同時に、鏡に直接入るには入口が大きくないと。」

ドレスの仕上がりを見ることが出来そうな、大きくて幅の広い鏡である。ネリは正守の大きな手を握った。

「離さないで下さいね。バラけるかもしれないので」

「……本当？」

「嘘です」

クス、と笑った後、ネリは右手を軽く鏡面に押し付けた。

「今繋がりました。ここからでも異界を感じられるはずですよ」

「……………ふむ」

鏡面ギリギリまで手の平を近づけた正守は内心、舌を巻いていた。異界と繋ぐにあたって、“道”の構造自体は結界術と大差は無い。無駄が無く、揺らぐことなく道がしつかりしているのは、出入口に集中している力が関係しているようだった。

「出入口を繋ぐ力……これは……糸？」

「その通りです。道の枠組みは全て糸です。念糸みたいな役割をしています」

「……実はネリちゃん、結界師なんじゃない？」

正守は冗談半分で少女に言ってみたが、心の中では滝のような汗をかいている気分だった。

結界師なんてものじゃない、次元が違うネリの技術は正守も真似ようが無い。構造が同じなのに、これだけ簡単に繋ぐ技術は、結界術云々ではなく術者の特性といえる。

(雪村のおばあさんでも、こんなに簡単には繋がられないだろうな)まるで先祖返りのような能力を持つ少女は、首を傾げた。

「結界師ってそんなに流派多くないですよ？私が知ってるだけでも、2、3ぐらいしか……」

「ネリちゃんが結界師じゃないのは、俺が一番良く分かってるよ…これは、俺には出来ない。」

敗北したような声を出す正守に、ネリは良いことを教えてあげた。

「でも頭領なら、多分自力で出入り出来ますよ」

「…………え？」

結界師とは本来、ネリのように空間同士を繋げる力を持つ能力者である。

ネリは“繋げる”ことに特化しているため、結界師のような立方体直方体の結界を生み出すことは出来ない。

“他人の介入”を繋がないという条件を付ければ、正守でも破るのに時間はかかるだろうが、基本的に結界師なら出入りは可能だ。

「ちなみに時音さんは抜け師の才がおりなので、彼女も出来ると思います」

「そ、そうか」

何もかもお見通しの少女に恐怖を感じつつ、正守はネリを見做って鏡面に手を押しつける。

吸い付かれるような感触の後、正守とネリは鏡を潜っていった………。

「ここが異世界？夜行と全然変わらねーじゃん」

「もっと何か凄い所かと思ったのにさー」

期待外れだったのか、不満の声があがる。だが、閃は建物の至るところに妖力の残滓があるのを敏感に感じ取っていた。
(多分ネリの妖気が残ってるんだな)

「秀、ちよつと耳貸せ」

「なあに、閃ちゃん」

ゴニョゴニョ、と閃が耳元で何事かを呟くと、秀は心配そうな顔をした。

「そんなこと勝手にやって大丈夫？怒られるの僕なんだからね？」

「大丈夫だよ、こんくらい。お前だつてこんな得体の知れない所にいたくないだろ？」

「ん、うん……。」

丸め込まれた秀はそつと輪を抜け出して、庭を駆けて行く。頭領の執務室前の庭は遠ざかり、しばらくして裏会の正門が見えてくる。

「ここまで来れば大丈夫だよな」

いそいそと上着を脱いで、袖を縛り腰に巻く。上空は寒いが、背に腹は返られない。支給品である衣服を破るわけにはいかないのだ。秋津秀は、妖混じりの少年である。部分的な変化は、翼が出現するというもので、特に戦闘力は高くない。後方支援がせいぜいである。

誤って完全変化をすると、普段の倍のスピードで上空を飛び回り、うら若き乙女の血を欲する……いわゆる吸血鬼のようになる。

「よし！上から見てみますか！」

バサツとコウモリのような翼で空気を叩き、舞い上がる。聴覚が特に発達した秀は、すぐに異変に気がついた。

「動物の音がしない…？静かすぎる」

広大な森、山が広がっているのに鳥の声さえしないのだ。そして、さらに空高く飛ぼうとした少年は何かにも阻まれるのを感じた。

「何だろう？」

反発力が働いている様な感覚に、秀は堪らず高度を下げざるを得なかった。

裏会の建物がどんどん遠ざかり、今度は横方向に飛んでみる。

だが、いくらもしない内にまた進み辛くなる。それどころか、不思議なことに秀は気がついた。

「先が見えない…？」

霞がかかったように山波の先が見えない。そして、夜行の本拠地から離れていくにつれて、言い表せない不安が心にのしかかる。

もう霞に入ってしまうと思い、反転して戻ろうとした時、秀の身体がギシ、と固まった。

翼を絡めとられたかのように、前後左右動けなくなってしまう。

「え……ええ　！？なんで！？どうしよう！！！」

蜘蛛の巣にかかってしまった蝶の如く、何も無い空間でジタバタする少年。その耳に、ため息の様な声が届いた。

秀君、そんなところで何遊んでるの。

異界で勝手な行動はとるなと言ったはずだが……。分かった、閃だな。

どこからか、少女と頭領の声が聞こえる。首を巡らせると、ガラスの向こうに見えている状態で、二人が呆れた顔をしていた。

今からこっちに秀君を転移させるから、じっとしててくれる？

やれやれ……。困った奴だ。

ネリが右手をガラス越しに少年へ向けると、その反射面に秀の姿が写った。その姿を見て、動けないはずだと少年は納得する。

がらんじがらめに、翼から四肢に至るまで糸が絡み付いていたのだ。いつの間に飛び込んでしまったのか、全く分からなかった。

視界が一瞬ぶれた後、空気が変わる。

床に尻餅をついた秀は、自分がどこかの回廊にいることが分かった。正守が手を貸し、ネリはほつれた糸を直している。

「あんまり端っこに行くと、世界を保持してる糸に絡まっちゃうからね」

「その糸とやらは、どの程度の周期で取り替えているんだ？」

「夜行で初めて鏡渡りをした時にやっておいたので、取り替えは必要不需要ですよ。こつやって破れても、本当は明日には直りますし。」

すかさず質問を挟む夜行の長に、ネリも丁寧に返す。秀は勝手に偵察に出たことを、後悔し始めていた。

だが、ネリはそんな少年に笑いかける。

「秀君。閃君もだけど……、他人の異界でじっとしてられないのは仕方ないと思うよ。」

だって、皆の命私が握っているようなものだし。だから頭領も、今回参加したんだよ？」

だから、気にしないでというネリの言葉に少年は一瞬目を見開いた。

それはつまり、頭領がネリを信用していないということ。そして閃の懸念通り、異界を保持している少女はただ者ではない……ということだ。

おっかなびつくり、少年は口をつぐんで二人の後をついていくしか無かった。

正守に軽く絞られた閃と秀だったが、巻緒は秀の話をきいて唸った。

（やっぱりこいつらは諜報班の方が向いていると思うんだがな……）

用心深さと探索能力、探求心と好奇心。戦闘能力も並程度の二人は、諜報の仕事の方が自分の力を存分に発揮できるだろうに。

惜しいなあ、と思いつつ巻緒は手合わせが始まった林の空き地を見やった。

そこには限とネリが中央で向かいあっている。

1週間の特訓とやらを見てやるつと、少年達は後退できるギリギリの線まで下がった。

すでに妖狐化を終えているネリは、尻尾を従えてたたずんでいた。

『ルールはどうする』

「……………本気でやること」

限が静かに言うと、少女の黒い獣耳がピクリと動いた。

『どこまでの、本気？』

「殺すつもりの本気で来い、ネリ。」

限が手足首から先を変化させる。人間の手足から、妖の鉤爪に変わった限の闘気は本物である。

いざとなったら止めるつもりで正守も、術の構えを取った。

「……………二人共、死ぬような怪我はするなよ。良いな」

つまり、『大怪我』までは存分にやって良いということだ。ちなみに救護班も主任の菊水が来ているので、多少の怪我は大丈夫である。

「始め!!!」

手合わせという名目の闘いの火蓋が切って落とされた。

スピードで勝っている限が先手かと思いきや、最初に仕掛けたのは少女の方だった。

『コヨウセツ!!!』

身体の前で腕を交差させるのではなく、空中に掲げられた手により、全方位からの攻撃を狙う刃が待機する。遠くから見れば巨大な球体にも見えるかもしれない。

勿論、球の中心 刃の帰結点は限である。

『オニビダマ!!!』

避けられるのは分かりきっているので、少女はすかさず次の攻撃に移った。

一回に9個しか火の玉は放てないので、二回、三回と重ねて発射していく。その容赦の無い攻撃に、戦闘班の少年達は度肝を抜かれたいくらなんでもやり過ぎだ、と心配そうに正守と巻緒に視線を送るが、二人の青年は止めようとしなない。

「成る程……この前とはエライ違いです」

「妖気の質に磨きがかかったな……。攻撃の雑が消えている」

二人が感心したように言葉を交わしている内に、限が反撃に出た。全方位、逃げ場が無い刃の雨に自ら飛び込み、目にも止まらぬスピ

ードで道を切り開いていく。その間も、27個もの燃え盛る炎の玉が少年に襲いかかる。

どんどん近づいてくる限を見て、反射的に拒絶の盾を出そうとしたネリはハツとした。

今やネリは『拒絶』の力を自由自在に扱える。球の形状もいじれるし、発動に言葉もいらぬ。

だが一歩間違えば、少年の手足を斬り飛ばしてしまう。彼を傷つける訳にはいかないし、妖混じりとはいえ基本的に人間の肉体であることには変わり無い。

(拒絶は駄目だ。意識の糸だけにしよう)

コエンリユウを発動させて、その中に意識の糸の束を潜ませる。触れれば剥がれない、しかも見えない糸である。

カモフラージュに炎の渦を大量に放つ。20個作った所でネリは、様子を見ることにした。

(26) す…すんませんっした ! (前書き)

もうそろそろ、ネリとレナモンの出会いの始まりを入れようと思います。

閑話休題……という訳ではないですが、ネリの回想という形です。

そして、26話。

残酷な描写ばかりです。苦手な方は、お戻りください。

(26) す…すんませんっした !

ネリの反則的な疲れ知らずの攻撃は、限の体力を少しずつ削っていた。妖力を使い果たしたあの夜から、本人曰く『妖力の最大量が増えた』らしい。

(全く……ペース配分も今度叩き込んだ方がよさそうだな)

バカスカと、連射してくる少女に限は静かな目を向けた。

(少しは闘いのトラウマとやらを、克服出来たのか……?)

刃との距離がまだ遠い内に、疾風の如くそれらを避ける。この技の欠点は帰結点を動かせない所があり、どれだけ早く球体の中心から脱出出来るかにかかっているのだ。

半自動的に刃を避ける少年は、火の玉をもさばきながら駆けていく。

(空間支配……あれは厄介だな。)

避けるしか選択肢が無いのは、いささか心許無い。

切れ味抜群の“拒絶”技をくらったら、いくら限でも切り刻まれてしまうだろう。

(まあスピードで、あいつに負けはしないがな)

ぐん、と速度を上げると今度は平たい炎の渦が、物凄い速さで回転しながら迫ってきた。目の前を覆い尽くす炎の集団に、少年の身体が熱気で汗ばむ。

（来たか……だが、同じ攻撃が俺に通じるわけないだろ）

罨を仕掛けてあるのが明白な炎の渦は、爪で抉るように気流を乱せば簡単に消滅する。

特訓と同じように爪で抉ろうとして、限は野生の勘が警鐘を鳴らすのを感じた。

「……………っ！」

突っ込もうとしたのを途中で身を翻し、炎の軍団を睨み付ける。まるで隊列を組んでいるかのように、規則正しく限を囲んだ火の円盤は、少年をあざ笑っているかのようにだった。

「…何のマネだ。」

『や、やだなあー何にも企んで無いヨー？』

バレバレの表情に、軽く幻滅しつつ限は踊り狂う炎の輪を見る。スピードと火力を目算して、斜め上空に飛び上がるべく、少年は足に力を入れた。

（行ける。この速さなら抜けられる）

ダン、と土煙が舞うと同時に限の姿が掻き消える。一瞬後には少女のすぐ目前まで迫っており、その速さにネリは

『かかったね』

「……………!？」

ニタリと笑った。空中でつんのめる様にいきなり動けなくなった限が、慌てて爪を振り回す。だが、動きを止めた一瞬でネリの尻尾が、限の四肢を絡め取った。

「な、何だ?!」

『さっきの秀君で思い付きました。保険かけといて良かった!』

拒絶の球体を鞭の形状に操り、少女は炎の渦の1つを叩き切った。1つだけ切ったにも関わらず、その火の粉は炎の輪全体を連結するように燃え広がった。

もし、少年が炎の円盤の間を通り抜けようとしたり、爪で抉ったりしていたら、瞬間に炎の糸が身体に絡み付いていただろう。

隊列を組んでいたのは他でもない、電車のように直列繋ぎだったからだ。

「……………」

『見えない糸なら、そりゃ引っ掛かるよね。』

そして、炎の罨に気がついたものの自ら糸のジャングルに飛び込んだ限は、先程の秀のように空中で身動きを封じられている。少年の身体に引っ掛かっている糸を断ち、ネリは限に満足気な笑みを向けた。

『ありがとうございます！』

「……………」

磔刑の様にネリの尻尾に封じられた限は、剣呑な目付きで少女を睨む。その鋭さにネリが怯んだ。

正守が終了の合図を出さない意味を、少女はようやく理解した。

「まだ……終わっていない！」

絡め取られていた両腕の尻尾を逆に掴んで、少年は力任せに引っ張る。

『うわっ！？』

バランスを崩した少女は、たたらを踏んで何とか持ちこたえる。だが限は足の戒めを、弛んだ尻尾ごと己の爪で切り落とした。

『 …… つ！！！？？？』

声にならない悲鳴をあげて倒れ込むネリに、限は容赦しなかった。肉薄し、爪を振りかぶる。

少女の気配が、劇的に変わったのはその時だった。

『 にん……………ほん…お……………さん』

何かを呟いたかと思うと、ゆるりと顔をあげる。一瞬のはずなのに、

少年は自分の腕の動きを妙に遅く感じた。スローモーションのように、時間がゆっくり流れていく。

ニコオ、と笑ったネリは少年の左頬を右手で包み、振りかぶっていた少年の右腕上腕に左手をそえる。

時間が止まっているとしか思えない感覚に、限の額に汗が伝う。ネリの異能に時間操作など無かったはずだからだ。

(何だ?!これは!!)

自分だけ時の流れに取り残されて、泥沼の中を進む感覚にひっきりなしに警鐘が鳴っている。だが、思い通りにならないこの状況下ではなすすべが無い。

『面白い……』

どこか妖艶な響きで、ネリはうつとりと限を見た。今まで向けられたことの無い少女の眼差しに、少年の体温が跳ね上がる。

『楽しませて頂戴』

瞬間、周囲の音が戻り、限の右腕に激痛が走った。視界が真っ赤に染まり、少女の白い顔にも返り血が飛ぶ。

血を浴びて、少女が目を見開いた。さっきまでの妖艶さは姿を消し、

年相応の少女の顔である。

その目の前で限の右腕が宙を舞う。まるで枯葉が風に舞いあげられるかのように、血を噴き出しながらクルクル回る。

鼻につんとくる、血の濃厚な香り。ネリは左手も顔も鮮血に染まっていた。

正守や巻緒が何事かを叫びながら、こちらに走ってくる。

ネリが我に返るのは、意外にも早かった。

『つ……“繋がれ”!!!!』

尻尾で少年の腕をキャッチし、断面を押さえている少年を、別の尻尾で抱き抱える。妖気を最大限に放出し、切れた腕　　ネリが切った腕を意識の糸で縫い合わせる。

やったことはなかったが、ネリにはやり方がわかっていた。

『“繋がれ繋がれ繋がれ繋がれ繋がれ繋がれ”!!!!!!』

糸が包帯の如く右腕全体を覆い、少女は限の右半身に直接妖気をぶちこんだ。当然、氷で心臓を刺されたかのような痛みがネリを襲ったが、それどころでは無い。

『限!!!限!!!しっかりして!!!』

「ネリちゃん、落ち着いて!」

正守が少女の肩に手を置くまでネリは、青年が近づいたことすら気

がつかなかった。

『頭領！！限が、限が！！！！』

「 落ち、着け。」

荒い息の下、小さくともしっかかり言葉を発した少年は、無事な左手を少女の顔にやった。

とうに部分変化は解かれ、伸ばす指先は人間の肌の色である。

血まみれの少女の頬を手の甲で拭い、限は幾分呆れた声を出した。

「……………妖混じりは、手足を斬り飛ばされても、再生する。……………こんな怪我は、怪我の内にも入らん」

『ごめんなさい……………っ！』

ネリには何が何だか分からなかった。

ほんの一瞬だけ意識が遠のき、真っ赤な色でまた現実を引き戻された。自分の左手がいつの間にか、真っ赤な手袋のように血で染まっている。

その示す意味は、明らかだ。

自分が少年を傷つけた。

自分が少年を殺そうとした。

この少年の運命を変えるために、この世界に残ったのになんてザマなのだろう。

ネリの藍色の瞳から、止めどなく涙が溢れる。足下からぞわぞわと這い上がってくる恐怖に、ネリの身体は震えることしか出来なかった。

氷で貫かれようが、所詮は幻。ネリの治癒の力はたが籠が壊れてしまっただかのように、限に降り注ぐ。

正守もネリを下手に引き離すのは得策ではないと、後ろで見守っていた。

ネリが泣きながら限の怪我を治す様子を、救護班主任の菊水は食い入る様に見ていた。

(この少女……なんと純粹な妖気。これが噂の癒しの力か)

背丈は小学校低学年程の双子の兄、菊水は常識を覆す力の使い方に見入っていた。

潤沢な、それでいて荒い使い方。これだけ力任せに治癒を行えるのは、恵まれているとしか言いようが無い。

だがどんなに荒くとも、ネリの妖気は妖を引き寄せる程の治癒の力を持つ。みるみる少年の怪我は塞がっていき、終いには糸が空気に溶けるように消えた。

それでも、少女は治癒を止めない。

真っ青な顔のネリの方が、今にも倒れそうだった。限が身体を起すと、ネリが慌てて押し戻そうとする。その面前に少年は右腕を突き出した。

『……………！』

「もう治った。だから、泣くな」

『……………良かった…』

綺麗に治った腕を抱いて、ネリは涙を一粒溢した。健康な少年の腕に額を当てると、妖気は収束していく。

少年は感謝の意味もこめてぽんぽんと、左手でネリの右肩を優しく叩いた。

「もう、大丈夫だ」

妖が傷つき倒れるのでさえ震える少女である。戦った相手に怪我を負わせたとあれば、卒倒ものだろう。限は無理に腕を抜こうとせず、少女の気が済むまでじっとしていようと思った。

だが、限が倒れている周りに、戦闘班全員が集まっている。今更ながら少年は、この状況が恥ずかしくなった。

これでは『付き合っている』と誤解されても仕方がない。いつまでも泣いている少女に、限は声をかけた。

「……………ネリ、もう大丈夫だ。お前こそ休んだ方がいいんだぞ」

「限の言う通りだ。もう今日は休みなさい」

正守が少女の肩に手を置き、少年から引き離そうとする。だがそのままネリの手は限の腕を離れ、ガクリと力を失った。

「ネリ!?!」

慌てて少年が抱き止めると、だらりと血の気の失せた顔が目に入る。動脈血を頭から被ったせいか、少女の白い顔がやけに目立つ。だが、気分が悪そうに唸ってはいるので、意識はあるようだ。

『うう〜……………』

「ネリ。お前大丈夫か」

限が軽く背中をさすると、ネリは眉をしかめつつ口を開く。

『なんか……………酔った……………』

いつもはピン、と立っている獣耳が力無くへたっている。

尻尾は9本ともピクリともせず、限は仕方なく背中をさすり続けた。最早抱き合っているようにしか見えないのは重々承知なので、あえて限はしかめっ面のまま器械的に手を動かす。

「全く無理をする……」

『だって限の腕が、いきなり……………いきなり……………』

震え始めた少女を少年が武骨な手でぼんぼん、と叩く。ネリはこてん、と限の肩に血まみれの頭を預ける。

二人とも全身血まみれではあったが、穏やかな光景に正守は困った様に頭をかいた。

限の一匹狼ぶりを知っている閃や秀は、顎が外れたような顔で目の前の二人を見ている。

(し……信じらんねー……。本当に限か？こいつ)

(限君、良かったね！君にもようやく春が……！！！)

応援するよ！と親指をぐつと立てる秀に、閃は冷めた目線を送る。

馬鹿は放っておこう、と閃はまた中央に目を戻した。

限の左肩に、頭を預けている少女の表情は穏やかだ。限がネリを背負って帰ってきた夜と、同じ顔である。

背中をずいぶんさすってもらい、気分が楽になったのか、ネリの耳がまた起き上がった。直後に、少女もゆっくり目をあける。

『ありがとう……お陰で立てそう』

「次はペース配分に気を付けろよ。戦闘中に立てなくなったらどうする」

『……うん。気をつけるよ』

最後まで少女の師匠であり続ける姿は、少年らしかった。

(27) 甘える女の子って男にとってどうなんでしょうね(笑) (前書き)

感謝3469ユニーク!!

お気に入り登録20件!!

ありがとうございます、励みになります

(o^ ^o)

もうそろそろ、新章スタートとして一区切りつけようかと思えます。

(この分だと、80話ぐらいになってしまうので……)

題名だけ(1話のみ)いじりますが、内容は変わらないのでご安心ください。

分からない事がありましたら、一報くださいませ

(27) 甘える女の子って男にとってどうなんでしょうね(笑)

立てそうといっても、これ以上訓練を続けるのは事実上無理なので、少女だけ現実世界に帰されることになった。

もちろん送るのは、言わずと知れた限である。

少年が立ち上がって右手を出すと、ネリはその手を取らなかった。代わりに、幼子おみまこが親を欲するように、両腕を伸ばす。

『おんぶ』

「お前……立てるって言ったのは嘘だったのか……？」

『やろうと思えば、尻尾で歩けるけど……庭がボコボコになるし』
ん、と両腕を突き出して要求するネリに、限はため息をついた。一週間共に過ごしていれば、甘えて良い時も分かりそうなものだが、ネリの目に他の少年達は入らない。

少年には好奇の目に混じって、嫉妬の目線まで感じとっているというのに。

しかしネリは今、歩いたら吐いてしまいそうなのを、我慢している状況なのだ。実は、こうやって腕を上げているのも辛い。

冗談で言っている訳では無いのが、少年にも分かったらしい。ネリの顔は、確かに力を使い果たして真っ白ではあるのだ。

「仕方ない……」

ほら、と限が背中を向けてしゃがみ、少女がそれにへばりつく。二回目なのでお互い慣れてしまったのか、まごつく様子は無かった。

胸部を圧迫しないよう、尻尾をクッションにし、限は軽々と立ち上がった。

そこで少年の首が傾げられる。

「前より軽くなったな」

『うぶ……女の子に体重の話なんて……デリカシー無いね……』

「痩せたんなら喜ぶかと思っただが」

早々に色々諦めた限は少女を背負い、固定したままの鏡の中へ消えていった。

その背中を正守が見送り、他の少年達を振り返る。

「じゃ、俺達も訓練をやるつか」

「ハイ！」

妙に興奮した様子の戦闘班、若き戦力は威勢良く返事をした。

「いや、あの限がな」

「あいつのどこが良いんだ？無愛想だし、一人で突っ走るし」

「あんのやろう……チクシヨ　　！！」

至るところで、鬨いつつ興奮した様子のやり取りがなされる。妖混じりの戦闘班に、女子は一人だけ。件の少女は、なぜか最初から限と仲が良かった。

物好きな、やら、外国人の趣味はよく分からん、など勝手な意見が正守の耳にまでちらほら届く。

だが、正守は素直に限とネリの間係を喜べなかった。彼女を疑っているという問題ではない。

（ネリは……限の怪我に異常な反応を示す）

妖混じりとして、基礎が人間である以上、致命傷を放っておけば死ぬ。だが実際のところ、腕が飛んでも時間をかけ、しかるべき治療をすれば再生するのだ。

妖が欠片から再生するのと同じく、その生命力の強さは人間とかけ離れている。

ネリには、その境目が分からない。

どの程度の怪我は助からず、どの程度の怪我なら自然治癒出来るのか、まだ分かっていない。

（救護の訓練に回すか…？いや、どうせまた戦闘班に戻すのにそれはまずい…。）

ネリを救護班に移す選択肢は無い。彼女の『確定未来』を聞くのに、

救護では忙しすぎる。
常に目の届く所に置いておかないと、ネリは何をやらかすか分かったものではない。

だからといってこのまま何もせず、限の怪我の度に倒れられてはたまらない。

夜行の長は、大きな姿見を眺めつつ少女の今後の事を考えていた。

『ごめんね…私…』

「もう謝るな。俺もお前の尻尾切り落としただろ。それで痛み分けた」

黙々と足を進める限は、あの時人格が交代したようなネリの表情を思い起こしていた。

ネリであって、ネリでは無いあの眼差しは、少年を訳も無く不安にさせる。

少女曰く、あの瞬間の記憶は無いらしい。何かを呟いたことも、限に投げ掛けた言葉も全く覚えていないとのこと。

『本当に私は、“面白い、楽しませて頂戴”って言ったの？限に？』
薄気味悪そうにネリが言うと、限が頷く。

「その瞬間だけだが、時間が妙に遅くなった気がした。お前、時間支配系の能力は……」

『もちろん無いよ?』

即答するネリに、『まあそうだよな』と限は無難な答えを返した。そんな能力まで持っていたら、とうに使っているだろうし、無敵もいいところである。

お互い深く考え込めば、自然と口数も少なくなる。

限は、あの眼差しが頭から離れなかった。

ぞくりとするほど怖い、それでいて艶っぽい瞳に限はあの時、甘い痺れが身体中を駆け巡るのを感じた。

だが、あの藍色の瞳の向こうに、ネリの意識は無かったのだ。

ちよっぴり残念な様な、ホツとするような…初めて抱く感覚に、限は戸惑う。

(何なんだ、一体……。)

回廊の終わりが見えてきた所で、少女はしがみついている腕の拳に力を入れた。

(強く…なりたい。心も身体も技術も……全部全部、強くなって限を守りたい)

女性が男性に抱くには少々あべこべであるが、ネリは本気だった。

せっかく相棒から受け継いだ力を、治癒の力を使う度に倒れていては周りが良い迷惑であろう。

特に、守るべき少年の荷物になっている時点で失格である。

（頭領に頼んでみようかな……。烏森に派遣してくれるように……。）

振動が少なくなるように、少年は最大の注意を払ってくれている。優しく不器用で、寡黙な少年は何も文句を言わず、自分^にを背負って前を見据える。

だが、時間がない。

彼の歩みを遅めても、烏森襲撃は刻一刻と迫っているのだ。

それは、ネリしか知らない未来の悲劇。

（私が…止めなきや。私が…限を守らなきや）

少女の使命感で開き始めた運命の歪みは、原作・結界師の世界を少しずつ、広げていく。

死ぬはずの運命を覆し、避けられないはずの悲劇を回避する

それは、世界をも恐れぬ神の如き所業である。

その意味が、少女にはまだ、分かっていたいなかった。

夕食の時間になり、正守が開いた鏡の道で少年達は帰っていった。いつもなら後片付けをする時間があるのだが、ネリの異界なので必要ない。

そのまま食堂に直行出来るのは、何とも嬉しい限りである。

ネリを送った後、何事も無かったかの様に訓練に戻った限は、閃と秀から質問攻めにあっていた。

面倒くさそうな顔をしてはいても、限の顔に以前のような影は無い。そんな様子を眺めた後、正守は入口である巨大な鏡に目を移した。ネリの言う通り、正守ほどの結界師には入口を開けられるようだ。

自分が最後の一人になって、正守はポツリと呟く。

「…だが所詮、俺が作った道では無い。入口を開けるくらいなら、俺でなくともある程度の術者なら出来る。」

どう足掻いても、ネリが考え出す鏡の中の異界は、正守が創るうにも創れない世界である。

まるで、土地神のような。

「 決めた。」

鏡をくぐる正守の顔に、迷いは無かった。

「ネリちゃん。君に大事な話がある。」

「……………」

救護室で休んだ後、ネリは正守の呼び出しを受けた。ちょうど少女にも正守に話したいことがあったので、好都合である。

「君には烏森で、良守達の補佐をしてもらいたい」

「……………」

あまりにも丁度良いタイミングだったので、ネリは一瞬言葉に詰まった。正守がそのまま言葉を続ける。

「俺はこれから忙しくなる。あまり戦闘班ばかりに構っていられない。」

「頭領……。得体の知れない私を、あの烏森に置いて下さるんですか？」

ほんのついさつき、限を傷つけたばかりの、危険な少女を派遣するのは不可解。

逆にこちらから頼みたいぐらいであったのに。

理解出来ない様子のネリに、正守は優しくフツと笑った。

「あれだけ限の怪我に取り乱して、自分が倒れるまで治療する君に、もう怪しいところなんて無いよ」

「頭領……………!!」

感極まった声に、正守は笑顔のまま釘をさす。

「もちろん報告は逐一してもらおうからね。あとさ、目印は執務室に置いてくれる？」

「……………？頭領の使う道ですか？」

的外れの質問に正守は軽くすっこけた。派遣することに関して、少女に異論は無いらしい。

夜行の頭領は、『違う違う』と手を振った。

「君が、使う道だよ。限と離ればなれになるんだし、すぐこちらに駆けつけられる方が良いだろう？」

限の命を救う、という目的に正守は配慮したのだが、少女は今気がついたかのような顔をした。

少年が、烏森へ行かないなら未来の悲劇が起こる可能性はゼロに近い。

すっかり胸を撫で下ろしていた少女だが、ネリは恐ろしい事実に気がついてしまった。

「あ……………そっか、私が代わりに限の道をたどってるのか……………」

「ってそれ不味いじゃん！！」

原作では、烏森に派遣されるのは限である。そこで妖と闘い、良守達との友情も芽生え、学生生活を経験するのだ。

このままでは、悲劇は回避出来ても良守達との出会っ運命まで消えてしまう。

「頭領……！あ、あのですね。限は………」

「限が烏森に行くまで、君に一人で実戦経験を積んでもらうつもりなんだけど。」

「……どっちにしる限は烏森に行くんですね………」

ネリの言葉に重ねるように答えた正守は、着物の懐の中で腕を組んだ。青年は何を企んでいるのか、にやにや笑っている。

「相思相愛の二人を引き裂くなんて野暮な真似、出来るわけ無いよ」

「そっ……そうしっ！？限とはそんなんじゃ……！！」

ぶんぶんと首を振る少女の言葉が、聞きとげられる事はない。使命感がどののと言っていたネリだったが、少女の限に対する信頼度を見れば一目瞭然。

当人達が自覚していないだけで、周囲にはもうすでに認識されてしまっている。

「俺の方でネリちゃんの話から、烏森を狙う奴らの事を調べているからさ、学校生活を楽しみなよ」

せつかく転校してきたんだし、とニコニコ笑う夜行の長に少女は銀色の頭を抱えた。

腕を斬り飛ばす様な自分を、少年が好いている訳がない。それを訴えようとしたが、無駄だとネリは判断した。

正守の顔ときたらもう、ウキウキという表現がふさわしい様子で笑っているのだ。

(駄目だこりゃ)

限が、烏森に来るのがいつになるのか分からないが、少なくとも1週間以上はある　原作通りなら。

(限が来るまでに、ふざけた敵を倒しておこう)

烏森を狙う妖の集団。

その名を、黒芒楼こくぼうろうという。

“姫”と呼ばれる老いた狐の妖を筆頭に、7人の妖が組織を形成しているのだ。

白、火黒、紫遠、牙銀、江朱、藍緋、碧闇。

ほとんどが戦闘力も高く、生きた年月も長い、高い知能を持った妖である。

人間から妖に道を踏み外した者や、人間を好きになってしまった妖様々な物語を持つ敵の妖達だが、もちろん全て少女は知っている。原作の中で、限を殺す一番危険な敵が　火黒。

(限に会う前に、私が……決着をつけてやる)

正守の部屋から退出し、ネリは廊下を静かに進む。限と一週間前、ぶつかった曲がり角に差し掛かり思わず足を止めた。

「頑張ろう……。私が、変えてみせる。何を代償にしても、私が……絶対。」

決意を新たに、ネリは自分の部屋で最後の夜を過ごすのだった。

(28) 亡き相棒との出会いは、ちょっとした偶然だったんです という、

28話・29話が続いているので、金曜日と土曜日に投稿すること
にしました。

お気に入り登録21件!!

感謝感激です!!

頑張ります (-^O^)

(28) 亡き相棒との出会いは、ちょっとした偶然だったんです

という、

部屋に戻ったネリは、唯一部屋に置いていた身の回りの物を片付け始めた。

目覚まし時計はもう、時間を見るだけの物に成り下がっている。

少女が複雑な表情で時計　　もはや卓上時計　　を異空間に放り込む。いくらもしないうちに殺風景になった部屋で、ネリは布団すらひかなかつた。

「今夜も長いなあ……………」

パチン、と電気を消す少女は何をするでもなく、窓から見える夜空を眺めた。

窓に身体を傾け、外気の冷たさを頬から感じる。

ネリが最後に睡眠をとったのは、妖気を使い果たして倒れた夜である。

それ以降、一睡もしていない。

不眠症という訳ではない。翌日に前日の疲れを引きずる事は無いし、寝不足になることもない。

一週間布団を押し入れから動かしていないので、いい加減太陽の光に干した方が、良かったのかもしれない。

「まあ、明日には時音さんの家に行くし……………いつか。」

眠気を感じなくなつて初めての夜、ネリは自分に恐怖した。以前から兆候はあつたのだ。

朝に弱かつたはずが、陽の昇る前に起きたり。

女の足で山を越えた時、疲れが全く無かつたり。

人間が当たり前にとる、『睡眠』の欲求が無くなつてしまった。

目をつむれば、翌日が始まる　…　今となれば、それがどれだけ素晴らしいことが分かる。

眠らなくても、なんの問題も無い。だが、静まり返つた夜は、少女にとつて拷問以外の何ものでもなかつた。

疲れ知らずの体。

昼間気分が悪くなつたのは、限の血の香りに酔つたせいだ。
濃厚で芳醇ほろ酔い。

限の血を、良い香りだと感じた時、ネリは自分がもう人間ではないことを悟つた。

（完全変化に自我を失わない時点で、おかしいとは……思つてたけどね）

手慰みに空間支配の『拒絶』を発動させて、練習する。毎夜毎夜この永遠に続くかのような時間、ネリは自主訓練に費やしていた。

だからこそ、少女はこの1週間で目まぐるしい成長をとげたのだらう。

夜行の一日は、夜も早く朝も早い。

まだ9時だというのに、物音ひとつしない。

「（レナモン、私…もう人間じゃないみたい）」

オランダ語も堪能だった亡き相棒に、語りかける。少女の口から紡がれる、異国の言葉に答える者はいなかった。

オランダの中学で、少女はいつも一人だった。

孤児院で育ち、両親の顔は知らない。

実際、オランダ人かも分からない。

『オランダ人と日本人のハーフ』という肩書きは、自分で考えたものなのだ。

物心ついた時には、年老いたシスターが母親がわりだった。

「（世界渡りを初めてやったのは………5歳の時だったね）」

夜行で理解出来る人はいないだろう言語を話し、ネリは殺風景な部屋を見渡す。

「（あの時、貴方に会えたのは奇跡だった。）」

不思議な能力に戸惑い、気味悪がられ居場所が無かったあの頃。容姿が極端に整っていただけに、寄ってくる者も多かった。

同じくらい、去っていく者も多かった。

友達が欲しい。

自分を拒絶しない友が欲しい。

わずから歳で欲するものとしては、あまりにも哀しい願いであった

だろう。

デジタルワールド。

ネリが夢の中で出会った金色の狐は、日本で生まれたアニメの登場人物だった。

美しく気高いデジモンの彼は、幼いネリにとって大好きなキャラクターだった。

夢で会えただけでも、少女はとても満足だったのだ。

君は誰だ？

荒野で出会った彼は、人間であるネリを見て驚いていた。幼いのに静かな目をしていて、年相応のあどけなさというものが皆無な少女に。

粗末だがこざつぱりとした寝間着に裸足の少女は、砂が吹き荒れる大地に不釣り合いだった。

私は、ユリカ。シスターがそういつてた。

では、ユリカ。君はなぜこんな所にいる？パートナーはいないのか？

パートナー…？あなたのパートナーみたいなの？

英語吹き替え版で見たアニメの中で、この金色のデジモンはリカと

いう少女のパートナーになったはずなのだ。

(原作・日本アニメではルキ、という名前であったのは後々知った)
つぶらな瞳で金色の彼を見上げると、当人は困った顔をした。

私にもうパートナーはいない。ずっと前に、リアルワールドで別れたきりだ。

そう…なの？

あまりにも悲しそうな顔をするので、少女も悲しくなった。
すると金色の狐は、ハッと周りを見渡しす。

まずい、夜が来る。近くに洞穴があるから、ひとまずそこに
行こう

え?……わっ!

軽々と抱き上げられたネリは、真っ昼間なのに夜が来るという意味
が分からなかった。

ふわふわで、暖かくて力強い彼は、走りながら思い出したように言
う。

君の名前を訊いたのに、私の名を言っていなかったね。私は、
レナモンだ。

それが、少女とレナモンの出会いだった。

「（洞窟で寝たはずの私は、翌朝ベッドの中にいた。夢かとも思ったけれど……私の足は土で汚れてた）」

フツと14歳のネリは、嬉しそうに笑った。5歳児に、荒野の夜は寒すぎる。相棒の暖かい毛皮は、夢のはずなのにとても柔らかく、朝までぐっすり寝られたものだ。

奇しくも、目覚めた朝はクリスマスだった。枕元にはデバイスがあり、少女の銀髪を撫でていたレナモンは目を細める。

君の願いを叶えよう。こうやってリアライズ出来たのも、きっと君に会うためだったんだ。

パートナーさんは良いの？

心優しい少女に、レナモンはそっとネリの頭に手をのせた。

ルキもきつと分かってくれる。君のように、賢い子だから。

藍色の瞳の相棒は、いつまでも少女を優しい瞳で見ている

……

「（レナモン）」

膝を抱えると、少女は小さく縮こまった。10年近く一緒にいた相棒は、もう、いない。

「（やだな。嫌な事思い出しちゃった。ちょっと、外に出てようか

な」

トボトボと、暗くても進めるようになった廊下を、少女が歩く。約10日いたただけの夜行本拠地だったが、ネリにとっては暖かい時間だった。

同年代の異能者達と共に過ごした関係は、無理に『繋ぐ』ことなく、自然体の自分でいられた。

「（もつと早く…会いたかったな。私の、世界で…）」
そうすれば、“あの子”だって……。

言葉にしかけたのを飲み込み、ネリはある女の子の顔を頭の隅に追いやった。

「…オランダ語を使うから、良くないんだよね。日本語を使おう。」

少女は“ユリカ”から、“ネリ”に気持ちを切り替え、庭に出た。夜風が少し寒いので、完全変化して屋根に飛び上がる。

淡い紫色に発光しながら、少女は屋根の上に立った。銀色の尻尾を胸に抱くと、そのまま屋根づたいに歩き始める。

『最後に探険したって良いよね？』

軽く節をつけつつ、るんたつたと屋根の上を走ると、風が気持ち良かった。

どうせ、朝まで眠れないのは分かりきっている。朝日が昇るまで駆け回ってやるうと、ネリはイタズラっぽく笑った。

「……………」

きつと寝ぼけているのだ、と少年は目をこすった。疲れが溜まって、自分にはあり得ない物を見ているのだと。

「何をやっているんですか…?」

「お、限起きてたのか?」

「………… 自分の部屋の前に人が立てば、気配で起きますよ……………」

今まさにノックしようとする格好で現れたのは、夜行の頭領だった。限が尊敬する、ただ一人の人物である。

「何かあつたんですか?」

深夜に起こされた限は必死で欠伸を噛み殺す。正守は、夜闇の中でニカツと笑った。

「いやそれがさあ、ネリちゃんの様子がおかしくて。」

「ネリが?」

思わず気配が変わった少年に、正守は困った様子で頭をかいた。

「屋根の上を……走り回ってるんだけど。」

「……どうして俺に言うんですか？」

止めるようにいうなら、こうしている間に正守が彼女に注意すれば良いことである。

曖昧な笑みを浮かべて、正守は軽い調子で切り出した。

「ネリをさ、明日中に烏森任務へつけることにしたんだ。」

「……………!?!」

目を見開いて立ち尽くす様子に、正守はすまないと思いつつ、言葉を続けた。

「限にもいずれ烏森に行ってもらうことになると思う。……今、烏森は妖の集団に狙われていてね」

「ネリだけで、大丈夫なんですか？」

「今のところは……大丈夫かな。」

とらえどころの無い表情を浮かべた正守に、限は何も言うことが出来ない。それよりも、と夜行の長はニヤリと笑った。

「ネリちゃんの話し相手になってあげてくれない？彼女の気が済むまでさ」

明日の午前中の訓練は免除するから、と言い残した正守は扉の向こ

うへ消えていく。

限は、軽く息を吐いた。

(そうか…あいつ…明日発つのか…)

そうになると、しばらく会えないということである。毎日くるくると変わる太陽が、見えなくなってしまう…ということだ。

(……?なんで頭領がわざわざ…?)

あまり深く考えるのは止めて、限は肌の上に直接羽織りを引っかけて、外へ出た。

いつも、上半身裸のまま寝るので、パーカーをわざわざ出すのが面倒だったのだ。

(屋根の上を走り回って…踏み外したらどうするつもりだ、あいつ)

困った奴だ、と限は小さく笑った。

(29) 寂しくても、泣いちゃ駄目だよ(笑)

『小鳥はとっても歌が好き♪母さん呼ぶのも歌で呼ぶ♪』

日本で初めて覚えた歌(童謡)は、ネリの一番お気に入り曲だった。誰もいない夜闇で、控え目に歌いながらネリは走る。

足音をたてない様、爪先立ちで軽やかに宙を舞う。空を飛べる最低限の妖気に抑えつつ、少女は屋根をスキップしていた。

烏森に行けば、夜も良守達がネリと一緒にいてくれる。もう、こんな退屈な夜とはおさらばなのだ。

『うっれしっいになった〜ら、うっれしっいな〜』

「おい」

『……………うん?』

少女が振り返る。バチ、と呆れ顔の少年と目があってしまった。なぜか風呂上がりの様な格好で、羽織りが風になびいている。鍛え上げられた身体が目に入り、ネリは慌てて背を向けた。

『ど、どうしたの?こんな夜中に!』

「……………それはこっちの台詞だ。お前こそ、こんな深夜になぜ飛び回っている」

カタ、と瓦が微かな音をたてる。少年が、少しずつネリに近づいてきているのが、気配で分かった。

『ちよつと、風に当たりたくつてさ。ほら、こんなに澄んだ夜風は味あわなくちゃね!』

「……頭領に、聞いた。お前、あの人の実家に行くんだつてな」

どこか暗い声に聞こえるのは、気のせいだろうか。限は、羽織りが夜風になぶられているのに、気にも留めない様子だった。

腹や胸、背にまで及ぶ炎縄印が、月の光に照らされる。

『だ、大丈夫だよ。妖も倒して、頭領の弟さんと協力すれば、烏森は安泰だから』

「だが、今までとは戦う頻度が違う。毎夜毎夜……何匹も妖が来るそうさ。」

手を伸ばせば届きそうな距離になった所で、限は止まった。

少女は、相変わらず背を向けたままである。9本の尻尾がゆらゆらと動き、月の光を跳ね返す。

顔が見えないことに感謝しながら、少女は薄い微笑みを浮かべた。

『限……。限があれだけ特訓してくれたから、私はここまで強くなれたんだよ?』

「……本当に、感謝してる。言葉に出来ないくらい。」

ネリが振り返り、二人の間の空気が動く。

甘い香りが少年の鼻腔をくすぐり、月よりも明るい銀色で、限の視界が覆われた。

「……………！」

『1つだけ、お願いきいてくれる？』

限は、すぐ耳元で聞こえる少女の吐息に、今度は心臓が止まったと思っただ。

彫像の様に両腕は空中に止まったまま、少年は少女の微かな声を聞く。

『絶対に、任務で死なないで。次会う時も、笑ってハグしようね』

「……………ああ。約束する」

おそろおそろ、少年は少女の背に手をそえた。細くて冷たい身体は、長時間外にいたことを示す。

「お前……………眠れないのか？」

『……………うん。最近ちょっと、寝付きが良くなってさ。』

久しぶりに布団の中にいるような安心感に、ネリは目を閉じた。直接限の身体に抱きついていてるせいか、人肌は驚くほど暖かい。4年間、任務と訓練で鍛えられた身体は、14歳とは思えない程がっしりとしていた。

限は、太鼓を連打しているような鼓動が、少女に悟られないか、気がでない。

結果的に少年の体温は、今までにないくらい跳ね上がり、カッと熱を持つ。

限は、緊張で満足に息が吸えない中、なんとか口を開いた。

「お前も、約束しろ……………困った時は、俺を頼ると」

『……………いいの?』

「ああ」

少女の背を、限はぼんぼん、と優しく叩いた。銀と黒の尻尾は、主の後ろで夜風になびいている。

「剣……………」

『え?』

「剣を、くれないか。そんなに長くないやつが良い」

限は、1週間前にネリが言いかけたことを覚えていた。うやむやになっってしまったが、ネリは嬉しそうな顔で、その話をしていただ。

『……………うん、分かった。ちょうど良い剣がいくつかあるよ』

ゆっくり身体を離すと、その間を冷たい風が吹き抜ける。今更ながら少女は、自分の大胆な行動に赤面した。

『武器庫から探索、中型の片刃。』

照れを隠すように、あえて少女は言葉にして、武器庫を全て開いた。意識の糸を活用し、条件に合う刀剣を手元に引き寄せる。限の前に並べられた刀剣は、全て日本製の物だった。

ネリの世界の、日本である。

ジツと刀を一つ一つ見た後、限が選んだのは漆塗りの鞘が特徴的な刀だった。肘から指先までの短さで、鐔は無く、懐刀よりは幾分長い片刃である。

「もらって良いか？」

『どうぞどうぞ。あ、そうだ。ちょっとそれ、貸してくれる？』

ネリは慣れた様子で鞘を払うと、刀身を二本の指で撫で上げた。刃元から刃先に向かって、紫の光が一瞬で刀身を纏い、少女は満足そうにそれを見つめる。

『うん、上手くいった』

「何をしたんだ？」

限が訝しげに少女を見ると、ネリは胸を張った。

『拒絶の力をのせて、結界でも何でも切れるようにしてみました』

「……………つくづく凄いな……。鞘まで切れなければ良いが。」

鞘に納めた刀を、ネリが少年に渡す。限が刀を受けると、ネリは欠伸をする。真似をした。

『ふあゝ……。さて、と。限に暖めてもらったし、何だか眠くなっちゃった』

お休みーと、ネリが今出来る精一杯の笑顔のまま、背を向ける。まだまだ半分くらい残っている夜を、どう潰そうかと少女はほんの少しだけ、息を漏らした。

そして、女子の寝所方面へ飛ばうとした時、ネリの手を限が掴んだ。少女が振り返る前に、限が自分の胸元に細い身体を引き寄せる。

『むぎやっ!?!?』

「…………俺に、」

『…………?』

さっきとは逆の、包み込まれるように抱き締められたが、限の鼓動は速くなかった。

その代わりに、いつぞやのように体が小刻みに震えている。

「…………俺に…………、嘘はやめろ」

『……………!』

あちゃー、と少女は自分の額に、手を当てたい気分だった。両腕が身体に挟まれているので、出来ないのだが。

(バレたかー・・・むう)

『だって……。限はちゃんと睡眠とらないと、体調崩すでしょ。私
がここにいる限り、ずっと話しちゃうし……』

「……まるで、お前は睡眠とらなくても大丈夫、みたいな言い方だ
な」

『……』

凶星をつかれて、少女が苦い顔をする。
だが、少年に少女の顔は見えないので、沈黙が答えだった。

「嘘は…止める。 姉を思い出す」

『………！』

4年前のあの夜を 限は、昨日の事のように思い出していた。
守ってくれろと。

兄達の暴力から守ってくれろと、限の姉 涼は約束してくれた
のに。

(姉ちゃんも、おふくろや親父と同じだ。俺のことを、心のどこか
で疎んでいたんだ)

ギリ、と少年は歯ぎしりした。壊れそうなくらい、少女を抱きしめ
ていることにも気がついていない。
息が苦しかったが、ネリは獣耳さえ動かさず、じっとしていた。

家族に裏切られた少年と、家族を知らない少女では、どちらがより哀れなのだろう。

原作を知っているネリは、少年の心の闇がどのようなものか、わかっていた。

『……ごめん。そう、私ね……もう1週間くらい寝てないの。眠気も無いから、夜は……長すぎる。嘘ついて……ごめんね』

か細い少女の声に、限はハツとしたように腕を離した。
少女は軽く咳き込んだ後、胸をさする。

『ケホツ……もう潰れちゃうかと思ったよ。一瞬お花畑が見えたかも』

「……すまない。」

重い空気を、どうかかしようとした少女の試みは、失敗に終わったようだった。

うつむく限に、ネリは『じゃあ』、と切り出した。

『私のわがままに付き合ってくれたら、許してあげる』

「……？」

限が不思議そうな顔を見ると、ネリはニヤリと笑った。

『少して良いから、話し相手になって』

「……ああ」

御安い御用だ、と言わんばかりに限は頬を弛める。

退屈な夜が、暖かくて優しいものに変わった瞬間だった。

そして、ネリと限が屋根の上に腰をおろした頃。

正守は、離れた所からその様子を微笑ましそうに眺めていた。今夜は月が美しく輝いて、二人の姿が良く見える。

そして、正守は誰にもなく口を開いた。

「もう心配ないんじゃないか？限もネリも、お互いに想い合っているのは自覚しただろう」

一見独り言のようだが、明らかに目に見えない人物に話しかけている。こそ、と動く二つの気配に、正守は再度言った。

「夜が明けるまで見てるつもりか？

花島、巻緒」

「あれ〜やっぱりバレちゃいました〜？」

「だから止めとけつつったのに……」

屋根から降りてきたのは、妖獣使いの花島亜十羅と戦闘班主任、巻

緒憤也であった。

限の事を心配していたアトラが、巻緒を巻き込んで見守っていたのだろう。

夜行の長には、きかなくてもわかっていた。

皆考えていることは、同じなのだから。

（“人間なんか大嫌い”…か。4年かかったな、限。）

10歳で完全変化し、兄達三人を爪で襲い、姉に瀕死の重傷を負わせた少年。

何もかもに絶望した幼い少年は、喉から血を吐くように正守に訴えたものだ。

大ッ嫌いなんだよ……！！人間なんか……！！！！

（もう、お前にも好きな“人間”が出来ただろう？……限。）

仲良くなりたい気持ちを、無表情の仮面に押し込んで、常に口をつぐんでいた少年。

唯一信頼していた姉に『裏切られた』という思いが、限の心を蝕み、頑なにした。

人間と馴れ合わなければ、裏切られることもない。

少年の心の闇は、他者を寄せ付けない絶壁を作り上げてしまっていたのだ。

（説明のつかない、不可思議な少女だが……きっと、限と会うため

に夜行へ来たんだらうな)

初めて少女と会った時、印象的だったのがネリの瞳だった。外国でも珍しいだらう、紫の瞳ということもあったが、それだけではない。

彼女の瞳は宝石の如く輝き、正守のことを緊張した面持ちで見ているのだ。

失敗しないようにしなくては、と張り切る少女に、正守は心底驚いた。

最愛の相棒を亡くしたと聞いて、どれだけ荒んだ人生を送ってきたのかと、正守は身構えていたのに。

きつと限の様に、他者を拒むような寂しい目をしているのだらう、と勝手に思っていた自分を恥じたものだ。

(本当に……不思議な子だよ。真っ直ぐで、明るくて)

部下二人の気配が遠ざかるのを確認した後、正守は踵を返した。懐には、ネリから『目印』として預かった、西洋風の短剣がある。

「長いようで短いもんだよ……夜なんてものは……」

自分の独り言に、自嘲染みた笑みをもらしたあと、夜行の長はその場を後にした。

翌朝、まだ太陽が顔を出したばかりの早朝。

見送りに来てくれた戦闘班の面々を見て、ネリはその数の多さに驚いた。

亜十羅は雷蔵まで連れてきていたし、なぜだか呪い班まじなの染木までいる。

「ネリちゃん、頑張ってるね。」

「限がないからって、泣くなよー？」

秀と閃が、眠い目をこすりつつ言葉をかける。巻緒や亜十羅もこやかに笑みを浮かべていた。

「頑張れよ」

「私もその内行くからね、待っててちょうだい」

ぎゅう、と豊かな胸に抱き締められると、ネリはまたもや花畑が見えた気がした。

心暖まる夜行は、既に少女にとって『帰る場所』に納まっていたのだった……。

行ってきますー!!

夜行の庭に、少女の元気な声が響き渡った。

(29) 寂しくても、泣いちゃ駄目だよ(笑) (後書き)

はい。これで、第1章は終了という形になります。

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございます!!

お気に入り登録22件!!

本当に励みになります!

(1) 新たな学校生活スタート (前書き)

感謝4003ユニーク!!

お気に入り登録23件!!

ありがとうございます!!

ここまでお付き合い下さり、ありがとうございます!!

(1) 新たな学校生活スタート

「え、あいつ戻ってくんのか？」

「うん。ついさっき、正守さんから連絡があつてね。ネリちゃん、明日からあんたのクラスに戻るみたいよ」

ネリが、限と月夜に語らっていた頃。

良守と時音は、雑魚ばかりくる妖を退治しながら、少女の話をしていた。

てつきり少女は夜行で、これから過ごすのだと思っていた良守は、フムフムと頷く。

「そうか……だから兄貴の奴、緊急帰国ってことにしといたんだな……」

『おや、あの子帰ってくるのかい？』

白銀の妖犬　斑尾が、桜に群がる雑魚妖怪をくわえたまま、すう…と主の側へ来た。

むしゃむしゃと、美味しそうに妖を食^はんで、目を細めている。手を休めることなく、墨色の着物をまとう少年は、別の妖を滅していた。

「俺、てつきり帰ってこないかと思ってた」

「あら、あたしは帰ってくると思ってたけど？………白尾、変なもの食べるのはよしなさい」

時音の見えないところで、食事をしていた紺色の妖犬　　白尾は、
ギクリとした。

いつもと変わらない、烏森学園の夜。

相棒を亡くして、少女はどんなに辛かっただろう。

ほとんど追いつくように夜行に引き取られた少女だが、元気にして
いたのだろうか。

積もる話　　夜行について　　を色々きかせてもらおう、と二人は
思いつつ、夜は更けていった。

蜈蚣むかでに送ってもらった少女は、雪村家の門の前に立つ。

陽が昇ったばかりの住宅街は、ひっそりとしていた。

良守も寝ているだろう時間に、雪村家の門がゆっくり開く。

朝の修行をしていた時音は、連絡を受けていたので、ネリを笑顔で
迎えた。

「お帰りなさい、ネリちゃん」

「……お久しぶりです」

導かれるままに、敷居をまたぐ。

ペコリと頭を下げるとネリは、既に中等部の制服を着ていた。

その格好に、時音の方が驚く。てっきり、昼過ぎから学校に行くと
ばかり思っていたからだ。

「疲れたでしょうっ？ネリちゃんの部屋はそのままにしてあるから、ゆっくり休んでね」

「……すみません。修行のお邪魔しちゃって……」

袴姿はかまの少女を見て、ネリはすまなさそうな顔をした。だが、年上の少女は『何言ってるのよ』と、笑い飛ばした。

「そんなこと、気にしなくて良いの。本当にネリちゃんって、中身はまるつきり日本人よね。」

「そ…そうですか？」

時音の後を着いていくネリは、内心ひやりとしながら、足を動かしていた。

(中身は日本人……か。)

時音の背中を見ながら、ネリは薄く笑みがもれるのを抑えられなかった。

(そりゃ当然だよ。人生の半分を日本で過ごしているもの。……日本語も、たくさん教えてもらった……)

脳裏に甦るのは、記憶の片隅で微笑む、黒髪の少女。

あなたもユリカっていの？あたしもだよ！！よろしくね。

(……“百合香”……)

じゃあ、ネリって呼んでも良い？あたしには、百合番って名前しか無いんだもん〜えへっ

「ネリちゃん？」

「……は、はい！！」

思考の渦に飲み込まれそうになったネリは、時音の声で我に返った。いつの間にか見慣れた庭にいて、少女は軽く目を見張る。そんなネリを見て、時音は心配そうな顔をした。

「ネリちゃん：今日は休んだ方が良いんじゃない？顔色が悪いわよ？」

「い…いえ、大丈夫です。わざわざありがとうございます」

靴を揃えて縁側にあがり、異空間にそれをしまつ。それを間近で見ると、時音の目が点になった。

三能たつみとの戦闘の時も、聞きそびれていたのだが、ネリは何もない空間にダガーをしまっていたのだ。

「ネリちゃん……それは、何なの？」

「あ…、時音さんは初めてでしたっけ。これは、私の能力で……」

異空間についてざっと説明すると、時音は目を丸くした。食料が、異空間の中で永遠に腐らないことを聞いて、さらに驚く。

「便利ねえ……」

「フフ、話し込んだじゃいましたね。」

ネリの言う通り、太陽がすでに顔を出しており、もうそろそろ朝食の時間になりそうだった。

「あ、ごめんね、ネリちゃんが休む時間を！」

「大丈夫です」

バタバタと、廊下を曲がって行く時音を見送り、ネリは自分の部屋に入っていた。

「あら、ネリちゃん！お久しぶりねえ」

「お早うございます」

時子や静江に朝食の席で挨拶を交わすと、ネリは正守に渡された書類を雪村の当主へ差し出した。

静江も分かっているのか、朝食を並べるのを待ってもらっている。

「この度、烏森の警護と、結界師の補佐を務めることになりました。」

時子は、裏会の紋が入った蛇腹じょうはらの書類に目を通した。その顔が一瞬

曇るが、次の瞬間には冷静な目で、少女を見る。

「この書類には、烏森に関する不穏な噂がある……と書かれています。が。」

鋭い視線がネリを貫いたが、少女はぐつとこらえた。時音は初めて聞く情報に息を呑む。

「……私の未来予知で、見ただけなので確かな事は言えないのですが……烏森に潜入すれば、もっと確実な予知が出来るかもしれない、という上の判断です」

半分以上、嘘である。

予知の事実は正守しか知らず、裏会幹部達は“噂”の段階なので、戦闘班実力1位（限を負かしたから）の少女をよこしたただけなのだ。

正守に、黒芒楼くくぼうろうの名前は教えていない。

訊かれなかったし、ネリだけで決着をつけると決意していたからだ。全て教えてやれば、少女自身が動きづらくなる。

「そう……ですか。分かりました、ネリさん。時音の補佐、お願いしますね」

「はい！」

「では、朝ごはん並べますね」

静江がふと、娘の顔色が優れないことに気付いた。

「時音?どうしたの?」

「う、ううん。何でもない!」

時音はせつせと箸を動かし、自分を落ち着かせることに努めた。ネリの『予知』は『未来』と同義語なのだ、知っているのは、この場で時音だけだから、だ。

「お久しぶり〜ユリカちゃん!」

「すぐオランダに帰っちゃったから、本当に驚いたよ〜」

2年2組のクラスメイトは、気さくに話しかけてくれて、少女の心を軽くした。

親族に不幸があつて、お葬式に行っていたのだと、適当に言い繕つておく。

授業が始まって、久しぶりの学校の風景に、少女は自分が癒されるのを感じていた。

(たとえ元の世界に戻れなくても……良いよね。この世界が私を必要としなくなるまで……こっちにいても、大丈夫だよね)

数学の教科書を開きながら、ネリは平和を噛み締めるのだった。

「なあ、ちよつと良いか？」

「ん、なあに？」

珍しく起きている良守は、昼休みになつてすぐ、銀髪の少女に声をかけた。

毎日の様に彼の兄、正守と顔を合わせていたので、何だか変な気分である。

だが少年がそれに気づくことはなく、少女を屋上に呼んだ。

「時音が聞きたいことあるって言うからさ………ていうかお前、何か………分かんねーけど、変わったな」

「そっかな？」

少女は首を傾げつつ、良守と連れだつて廊下を進む。さすがに目立つせいか、鈍い少女でも視線を感じた。

良守は、『時音が呼べつていうから……』と、しかめっ面を保っている。

この学校を守っている結界師の彼は、日中目立たない生徒なので、ネリと歩くのは、酷と言えば酷であった。

屋上について開口一番、時音は朝の話題を口にした。

良守は、『烏森に不穏な噂』と聞いて、眉をひそめる。

「で、ネリちゃん。裏会が言ったのって何なの？」

「……………」

どこまで言うべきか、少女は紫色の瞳を伏せて考えた。この二人に、危機感を抱いてもらうためにも、情報は与えるべきなのだ。

「ある妖の集団が、烏森を狙っているかもしれないんです。」

「妖の集団……………？」

「で？何なんだよ、それは？」

ネリの言葉に結界師二人が、話の先を促す。だが、ネリは『分からない』と言った。

「あまりはつきり見えなかったんです……………。ごちゃごちゃしてて……………」

思わず目をそらしたネリに、時音は厳しい目を向ける。

「ネリちゃん。この世界の歴史が分かるんじゃないの？前に言ってたわよね？」

ぐっと詰まるネリに、時音は一步近づいた。だが、少女が口を開くことは無い。

「何？何の話？」

良守の疑問には答えず、時音はネリを見据えた。

話すわけにはいかない。二人には、強くなってくればそれでいい。ネリは顔を上げて、時音の視線を真正面から受け止め、返した。

「不確かな情報は混乱を招きます。“私”という異物が介入したことで、この世界の歴史は改変されてしまった。

でも、今の私に、今の世界の歴史を知るすべは、無いんです。」

勢いで言ったネリだったが、自分の言葉に自身が驚いた。

確かに、歴史がそのまま進んでいく保障は、どこにも無いのである。

話についていけない良守が、声を荒げた。

「一体何の話だよ！！訳分かんねーよ！」

「あなたには理解出来ないだろうから、いいの」

「なにい！？」

噛みついた少年だったが、ネリは最後に付け加えた。

「お二人とも、夜の行動は監視されているのを、お忘れ無く。ですから、私は緊急時以外、夜に完全変化はしません。」

「……………」

真剣なネリの表情に、二人は同時に感じたものがあつた。

10日前には無かつた壁。

ネリは知らず知らずの内に、結界師達と距離をとっていたのだ。

一人で黒芒楼こくぼうろうを潰し、誰も涙を流さない未来を創る。
並々ならぬ少女の決意に、時音が怯んだ。だが、良守は 笑った。

「へえ？お前、夜行でずい分修行したみたいだな」

「……………！」

少年の笑みに、ネリは言い知れぬ物を感じた。まるで怖いもの知らずの少年は、腕を組み面白そうに笑う。

「どんな奴が来ようと、俺が倒してやるよ」

烏森に封印された殿様 宙心丸ちゆうしんまるが、鼻屑ひいせにする少年は、確かに時音とは違う何かを持っている。

認識を改めた、妖狐のネリだった。

「そついえば、鋼夜は来た？」

「あ？……………ああ、ついこの前来た。」

「そつかあ……………」

夜になり、三人で暗い学校を見回る。ネリがまとう夜行の戦闘服に、

二人は『忍者みたい』と同じ感想を漏らした。

「そうですか？」

ひょい、と木の上に飛び上がり、ネリは漆黒の球体でお手玉を始めた。

その呑気な様子に、良守達はガクツと力が抜ける。

「お前なあ……」

良守が口を開きかけたところで、ピン、と結界師二人の感覚が、妖の到来を告げる。

『来たみたいだね』

『ネリリンも行こうぜ』

白尾に不思議なあだ名をつけられた少女は、仕事に頭を切り替える。お手玉は、一瞬にして氷柱こほりのようになった。

「はい」

遅れて走り出すネリ。

眠れない少女にとっては、なんとも嬉しい妖の存在だった。

(2) 月地ヶ岡さんの成仏? ……それは、良守に任せます

「なあ、限。元気出せよ」

「……………」

閃が夕飯を食堂で食べていると、限がちよつと訓練を終えて入ってくる所だった。

食堂が閉まる、ギリギリの時間である。

料理長の愛川が、甲高い声で最後であるうお客を迎えた。

「いらつしゃ〜い!いつもので良いかしら〜?」

口ひげに、丸太のような腕を持つ男性は笑顔を振り撒いた。だが、限の表情はどこか暗い。

「まだあいつが行って一日目だぜ?何つー顔してんだよ」

「……………はあ……………」

まるで恋煩いのようなため息をつく少年に、影宮の方が驚いた。それだけ、限はあの少女のことを必要としているのだろう。

「お前らしくねーな。」

「……分かって、いる」

ドサツ、と力尽きた様に椅子に座る限は、影宮の斜向はすかいの席に
いた。

以前までなら、考えられない距離である。

「お前、今日数馬のこと訓練でボコボコにしてた。八つ当たり
は止せよ」

「……ああ。」

何とか返事はするが、閃の忠告も右から左状態の限は、ポツリと咳
いた。

「……あいつ、大丈夫かな」

(本当にこいつ、今までと別人にしか見えねーよ!!!)

うどんが喉に詰まりそうになりながら、閃はフォローにまわった。
今更ながら、少女の存在が、どれだけ大きかったか分かる。

特に、限にとっては。

「お目付け役も、すぐ出発するんだろ？ 亜十羅さんに、色々と様子
きけるんじゃないの？」

「……」

だが、何を言っても限の心は晴れないようだった。

1日目の夜が終わり、ネリは退屈しない夜に感謝した。いつもなら永遠に感じる拷問が、日の出まで数時間である。

「本当に最高だわー!!」

んんー、と身体を伸ばして畳の中央で大の字になる。日付はとうに変わっていたが、まだまだ太陽の気配は無い。

(限…。何やってるかな…限の身体は温あつたかったなー)

ひつついてると、最高に気持ち良かったのに…と、的外れな事を考える。

あの温かさなら、眠れそうなのに。

(さすがに抱き枕になって、なんて言えないし)

そんなことを言ったが最後、限は抱きつかせてくれなくなるだろう。どこまでもずれた考えの少女は、黙々と技をみがく。

目標は、完全変化をせずに妖狐の技が出せるようになること。

奇襲に長たけている少女の技は、相手の意表をつかないと成功率が低いのだ。

限が来るまでに、敵を叩く。すくなくとも、火黒かぐろは倒しておかないと、運命の齒車が噛み合ってしまう気がする。

(白羽児つばひが来た時に、白しろの後あとを着きいていこう。)
原作の流れ通りなら、1週間後に黒芒楼からの刺客が烏森に来るはずである。

問題はお目付け役として派遣されるであろう、翡翠京ひすい一や、花島亜十羅だ。
彼らに後をつけられたら、少女の計画は全ておしまいである。

(尾行をまく方法も考えなくちゃ…)
ノートに案を書き留めていくと、徐々に陽の光が地平線に近づいてくるのだった。

陽が昇り、学校

「ユリカちゃん! …… ちょっと良いかな! ?」

「あ、神田さん…?」

神田百合奈 靈感がある彼女は、意を決した様子で口を開いた。
何か呼び出されるような事をしたか、と思いつ返すが、特に心当たりは無い。

「なあに?」

「あ、あのですね…その…」

「？」

口ごもる彼女にネリは気をきかせて、場所を移すことを提案してみた。

「昼休みに屋上とか…？」

「あ、はい！じゃあその時に！」

授業の開始を告げるチャイムと共に、神田はネリの席から離れる。神田の様子を見守る彼女の友人達の目に、ネリが気づく事はなかった。

（あ……そっか。私が妖混じりって分かったのかな？）

古典の教科書の上で、トントン、と少女のシャープペンシルがリズムを刻む。

神田百合奈　　彼女は良守達の夜の仕事を知っている数少ない一般人である。

霊感が高く、感覚も鋭敏なのだ。

『狂い桜』と呼ばれる中等部の桜が、秋口という季節外れに咲いている。

そこで、桜によってくる雑魚妖怪を良守達が退治しているところに、百合奈が出くわしてしまったのだ。

(まあ……事情を知ってる子だから、私の事は、かいつまんで説明するか)

面倒だなあ、と頬杖をつくネリは、ぼーっと窓の外を眺めるのだった。

「ユリカちゃん！単刀直入にきいて良いですか!？」

意気込んでネリに詰め寄る少女に、銀髪の狐少女は紫の瞳をぱちくりさせた。

「あ、はい。どうぞ?」

「す……墨村君と付き合ってるんですか!？」

「え?」

ネリは目が点になった。話の脈絡も無いし、一瞬手の込んだ冗談かと思った。

だが、百合奈は尚も興奮した様子で、言葉を続ける。

「墨村君と二人でよく屋上にいるとか、昨日も一緒に歩いてたし……どうなんですか!？」

「どうも……墨村君とは、特に何も無いよ?」

“付き合う”という単語に、ある別の少年が浮かんだが、言わない

でよく。

(だって、限は……………)

「あれ?……………そうなんですか……………?」

「そうそう。誤解だよ」

ことさらはつきり断言すると、神田の顔が晴れる。その無邪気な笑顔に、ネリは心のどこかに亀裂が走るのを感じた。

なあんだ、ネリも外の人なの?あたしもだよ!!

(思い出すな、思い出すな!!)

頭の中で、着物姿の少女が自分に笑いかける。

何故だか、常に白い狩衣かりぎぬをまとった、黒髪の少女が。

お互い、一人は辛いよね。

「……………あ」

「ど、どうしたんですか?!」

頭を押さえてふらつくネリに、神田はオロオロと視線をさ迷わせる。屋上に誰かいないか　と考えると、彼女の脳裏に閃くものがあった。

「　　」

「……………かん、だ、さん。」

給水塔の上にいるはずの良守に、靈感少女は呼び掛けようとするが、ネリがそれを止めた。

「……………大丈夫…だから。少し休めば治るよ……………」

立っていらなかったのか、ネリがその場へたりこんだ。そして、深く息を吐く。

(楽しいことを考える……………！)

暗い世界ではなく、明るい世界を。

その時、ネリの心の中から聞こえたのは、低い少年の声だった。

約束しろ……………困った時は、俺を頼ると。

「……………あ……………」

死なないから、良いってもんじゃないだろ。何とも思わないのか！？

「……………そっか……………」

ネリは、蒼白な顔に笑みを浮かべた。

……………ネリ、もう大丈夫だ。お前こそ休んだ方がいいんだぞ

「ユリカちゃん……笑ってるの？」

床に膝をついて、神田はネリの目を覗きこんだ。その宝石の様な瞳に、みるみる涙が盛り上がる。

「え、ええっ!?!」

どうしよう、私が泣かせちゃった!!--と百合奈は、かつて無い程に慌てた。だが、生きた人形の様な美少女は、微笑む。

「ありがとう、神田さん。私、自分に嘘ついてた……」

(ユリカちゃん……?)

訳が分からない様子の神田に、ネリは涙を一粒こぼした。

「私……限が、好きなんだ。ははっ……離れてから気づいて、良かった……」

少年の言葉の一つ一つが、ネリの心を軽くする。

異世界(平行世界)に一人きりの少女を守り、強くし、鍛えてくれた少年は、ネリにとって

「限……会いたいよう……」

かけがえのない存在になっていたのだ。

「ユリカちゃん……ごめんなさい。私、ユリカちゃん気持ちも知らないで……」

「…ううん。神田さんのおかげで、自分の気持ちに気がつけた……
ありがとう」

涙をふき、二人は屋上を後にする。

ネリは、つくづく夜行を離れた後で良かったと、ホッとしていた。

(心置き無く、黒芒楼を潰せるもんね……限の為に)

迷いは絶ちきれた。

どんな手段を用いても、火黒を倒し危険分子を排除する。
深く自分の心に刻み付けたネリだった。

夜の帳とほりが烏森学園に落ちる。

人っ子一人いないはずの学校で、良守達は妖の対処に追われていた。
そして問題は……

『ギヤアアアア!』

「白尾!？」

「どうした斑尾!？」

…妖犬二匹が、号泣しながら転げ回っていることだ。

『鼻が曲がりそうに臭い……』

白尾は天を向いて泡を吹き、斑尾はぐったりと力尽きて、地面に伸びている。

ネリも、嫌な臭気が漂っているのが分かった。

(ひそりがま 蠍鎌……かな?)

原作漫画を記憶の中で呼び起こせば、時期的には合っている。

この嫌な臭いの妖は、原作の中では、正守が多重結界で滅することになっているのだ。

だが…おかしな点があった。

(頭領が来るには早すぎる)

ネリが来たのが昨日の朝である。

昨日の今日で、多忙な正守が烏森にわざわざ来るのは、腑に落ちない。

「ふざけんなコラ！いいから探せ！！」

『ひど非道い！この人でなしっ！！』

斑尾がヨロヨロと、飛んでいく姿は哀れ以外の何物でもない。鼻のきく犬にとって、過酷な臭気なのだ。

(まさか……歴史が早まつてる?)

「墨村君、変なときいていい?」

「何だ？」

走り出した良守をネリも追いかけてつ、声を張り上げた。

「月地ヶ岡さんってもう成仏した？」

「何だよいきなり……」

「良いから答えて！」

時音も怪訝な顔で、少女を見るが、ネリは真剣な表情である。何か感じたのか、良守が一瞬考えた後口を開く。

「そうだな……5日ぐらい前に成仏したな、あの人」

「……………！」

予想以上の歴史の前倒しに、ネリは目を見開いた。そんな様子を時音は、注意深く観察している。

『良守、あれ！あれ！』

斑尾が、校舎の壁に張り付いていた、遠目には蜘蛛の様に見える物体を示す。

3階と4階の窓の間に張りついたまま、それはピクリともしない。

『おおお……早く！早く！！』

鼻を押さえて、身をよじらせながらも、きちんと仕事をこなす妖犬

の姿は、なんとも立派である。

「おう、まかせとけ！ 方囲、定礎！」

ネリは、黒い球体を10個ほど待機させた。言わずもがな、少女は、校舎の黒い蜘蛛が、偽物であることを知っている。

今の良守には、蠍鎌が脱皮した後の抜け殻さえ、一撃で倒せないのだ。

「結！！滅！！！」

そして案の定、滅されたはずの黒い物体はまだ、そのままだった。

（確か蠍鎌は……屋上にいるんだっけ）

ネリは早々に、拒絶の球体を靴の裏に、薄く取り付けた。

空いた時間に考案した、『空を駆ける』拒絶技の応用である。

『なんか効いてないよ。』

「くそっ、んじゃもう一回だ！」

「……………あれは偽物です」

ボソツと言ったネリの言葉を、時音が聞き咎めた。良守はそれに気がつかず、再度妖を滅しにかかる。

「どっぴいびいとっ？」

「あれは、抜け殻………本体は別にあります。」

ガスツと、地面に落っこちてくる抜け殻を見もせず、ネリは言い切った。

そして間髪入れずに走り出す。

「ネリちゃん!？」

少女の走る後ろ姿に、時音はあんぐり口を開けた。銀髪の少女は、まるでそこに階段があるかのように駆け上がったのだ。

空気を踏みつけて。

(空間を拒絶する　　本当に凡庸性が高いな)

他人事のように思いながら、ネリは屋上に向かう。そして、地上の人に笑いかけた。

「私が奴を校庭に誘きだします、待ってて下さい!」

そう言い残し、ネリは屋上に姿を消した。

歴史が早まっているのは、異分子^{ネリ}のせい。

そして、正守が介入しないのを知っているのはネリだけ。

(私が……倒さなきゃ)

使命感に突き動かされるネリは、誰にも止められなかった。

(3) 蠍鎌と狐 (前書き)

最初は半分ずつ分けていましたが、つなげちゃいました

(3) 蠍鎌と狐

屋上にたどり着き、ネリは辺りを見回した。月明かりだけが頼りの夜は、あまり遠くまで見渡すことが出来ない。

(“空駆け”)

指で目の前の空間をなぞり、はるか上空と空間を繋げる。目の前の裂け目に飛び込むと、すぐそこは学校の上空だった。落下し始めた所で、少女は空間を踏みつける。

(いた！しかも、大きい……！)

屋上の影になっている所に、それは潜んでいた。

さそりがま
蠍鎌

強靱な身体を持ち、左右の鎌は最強の硬度を誇る。動きも俊敏な、サソリ型の妖である。

一直線に目当ての妖に近づくと、ネリは意識の糸を数十本絡めさせた。そして校舎の壁を蹴って、一気に屋上から引きずり下ろす。

身動きが出来ないように、空中でがらんじ絡めにしようとしたが、校庭に落下する寸前、蠍鎌は少女の糸を全て断ち切ってしまった。

『 ……フン、あの二人の他にもいやがったのか………』

「……………」

ネリは目の前の凶悪な妖を、ひたと見つめた。蠍鎌は何回か変化したのか、脱皮した抜け殻の、今や数十倍の大きさである。

大型トラックと対峙たいじしているようだった。

『お前もここの結界師か？』

「……………」

少女の周りで、漆黒の球体が形を変えていく。

剣に、槍に、盾に、網に、巨大な手裏剣に。

「すぐ消える貴方に、答える必要は無いよ」

今まで味わったことの無い、闘いの高揚感に、ネリは妖しく微笑んだ。

結界師二人は、まだ来ない。

「まずいなア…私一人で倒したら、怒られちゃうかも」

その不気味な笑みは、巨大な妖さえ震えあがらせる、圧倒的強者の威圧感を放っていた …。

「何だっただよ、あいつ！」

「一人で妖を校庭に誘い出すって……妖の場所が分かってるってこ

とよね？」

両家の若き22代目達は、意見を交換しながら全力疾走していた。

良守は、先程の抜け殻を合計7回滅することで、完全に粉々に出来た。

それが意味するのは、今夜の妖が相手手強いということだ。

「あいつ、完全変化しないんだろ！？能力だけで太刀打ち出来る奴じゃねーぞ、これ！」

「ネリちゃん……なんで一人で……」

一人で突っ走ってしまった少女に、時音は唇を噛む。
その時、大きな邪気が校庭の方から発せられた。

「これは……！」

「まずい、始まったみたいね……」

校庭の入口にたどり着いた二人は、同時に信じられない光景を見た。

『あり、えねえ……』

「そお？器わすが無くて、生き物である限り細胞はあるから、私の攻撃は有効だよ」

鎌を二つとも切り落とされた蠍鎌は、無意識の内に後ずさっていた。そして恐ろしいことに、烏森にいるにも関わらず、切られた足の再生が働かない。

『聞いてねえぞ！お前、何者だ！』

「私？私はあなたと同じ」

ネリが今度は、全ての足を付け根から切り落とした。蠍鎌が、地響きをたてて転がる。

「化け物、だよ」

『やめろ！！ま、待て！！やめてくれ！！』

ネリは、薄く笑って頷いた。命乞いを聞き入れたのかと思いきや、それは大きな間違いである。

笑顔のまま、ネリは蠍鎌に近づき、しゃがんだ。

「大丈夫。私がとどめをさすのは、貴方なんかじゃないから。」

『……………！！』

文字通り手も足も出ない状態の妖を前にして、ネリはニッコリ微笑んでいたのだ。

「……………おい、お前！！」

良守が耐えきれずに声をあげる。すると、ゆるりとネリが入口に顔を向けた。

「あ、二人とも。良かった〜間に合って。」

(間に合って?)

白い着物の少女が眉を寄せると、銀髪の少女は蠍鎌を指差した。

「この妖、再生出来ないように細胞の結合力を“拒絶”しておいたので、変化しない限り安全です」

だから頑張って早くとどめを刺しちゃって下さい、とネリが離れると、良守が怒鳴った。

「お前、そういう問題じゃねーだろ!!」

「良守、今はやめな。妖を滅するのが先だよ」

天穴を片手に時音が蠍鎌オソリがまを滅しようと、構える。邪気が膨れ上がったのは、その時だった。

『コケにしゃがんでエエ……!!ぶつ殺してやる!!!!』

ほんの少し、ネリの攻撃から逃れられた蠍鎌は、その隙に変化を始めた。脱皮し、鎌が2本だけだったのが、全ての足に適用される。

「なっ……!!?」

「時音エエ!!!!」

蠍鎌が一番近くにいた、黒髪の少女に己の鎌を振り下ろす寸前で、止まった。

時音の結界が、受け止めたのではない。

良守の結界でも、ない。

「……ハア。敵の言葉に、活路見出すって虚しくならない？」

拒絶の盾で受け止めたのは、ネリの力だった。

瞬間的にはった二人の青と緑の結界は、溶けるように消える。

「ネリ…、お前今正気なのか？」

「うん？私はさっきからまともだよ？……どうしたの墨村君、幽霊見たような顔をして。」

和やかに会話している間も、蠍鎌は力を籠めていたが、びくともしなかった。

そして、拒絶の盾が砕け落ちる前に、別の球体が鎌を穴だらけにする。

『このやるオオ！！！！死ねエエ！！！！』

崩れ去った鎌は見捨てて、蠍鎌は別の鎌を繰り出すが、3人に届く事はない。

全てネリが防いでいたからだ。

『くそっ…くそおおおおお！！！！』

「懲りないなあ」

若干眉を潜めたネリは、不快そうに口を尖らせた。

「もう……いいや。面倒くさい」

それは、あまりに怠惰な死神の宣告。

（“拒絶”）

少女の背後に円盤が多数出現し、不気味に回転を始める。
チーンソーのような稼動音が夜の校庭に響き渡った。

「時音さんを狙ったこと、後悔させてあげる」

紫の瞳のまま、残酷な託宣を下す少女は、腕を上げて
振り下ろした。

時音達が立ち入る隙間もない、呆気ない最期であった。

蠍鎌は、数えきれない残酷な刃の前になすすべ無く、細切れになる。

10日ぶりの、少女の圧倒的強さを目の当たりにして、結界師二人は、呆けたように立ち尽くした。

先に我に返り、天穴を構えた結界師は、時音の方だった。

「天穴！！」

「……天穴！」

良守も、遅れて異界の扉を開く。

ネリにも、二人と同じ事が出来るのだが、特に興味も無いので、試していない。

（あゝあ、結局私が倒しちゃった。まあ、本来は頭領が倒すんだし、いっか）

あまり深く考えず、ネリは、クレーターのようになってしまった校庭を直し始める。

これも、空いた時間に考えておいた物だ。

「物質結合」

頭の中のイメージを現実に投影させると、それは直ぐに変化し始めた。

砕かれた校舎の壁が元通りに。

抉られた地面が平坦に。

移動させられたものを元に戻す、同じ物質同士を繋げる。

結界師でもこれだけ速く直せないだろう、和服の二人は目を見張った。

「ネリちゃん……あなた、結界師みたい」

「いやもうこれ、結界師以上だろ……」

魂が抜けたような少年の声に、ネリは可愛らしく首を傾げた。

「私は、ただの狐ですよ」

フフ、と口元に手を当てるネリのは笑顔は、どこか不自然であった。

「もう1時間見回したら、今日はあがりましょう」

時音が声をかけると、ネリは木の上で伸びをした。

「ん、ついに頭領来なかったな」

やはり今夜は来ないのか、と銀髪を揺らしながらキョロキョロする。なぜ歴史が早まっているのか理由は分からないが、このずれは確実に危険だ。

(今日頭領が来ないなら、明日が『走る森』にならないってこと……?)

原作を読み込んでいるが故に、ネリはおおいに混乱していた。

「ああもう!!来るか来ないかはつきりして欲しいな全く!!」

ぐしゃぐしゃと、頭をかきむしるとその肩をポン、と叩かれた。

振り向くと同時に絶叫する。

「うきよおおおお!!???

って頭領!??」

「2日ぶり、ネリちゃん」

「正守さん!」

あわや落っこちそうになったネリを置き去りに、正守は地面に降り立つ。

「あ　　ッ!!!」

良守は、兄を視界に納めた途端嫌な顔をした。対照的に、時音は尊敬する人に会えて、嬉しそうである。

衝撃から立ち直ったネリも、木の上から空気を踏みつけて降りた。

「いつ戻って来たんですか?」

「今さっき」

「ため　　、何しに来やがった」

相変わらず目の敵の様に、眉を吊り上げる良守を、兄は華麗に無視した。

「そつだ!紹介するよ。俺の相棒　　黒姫だ」

正守の足元から跳びはねて出現したのは、真っ黒な鯉だった。赤ん坊よりも大きく、つぶらな瞳が少年少女を見ている。

「可愛い！」

「うるせ　　何しに来やがったってきいてんだ！！」

なぜ兄弟でこんなにも仲が悪いのだろう、ネリは理解できなかった。家族がいるのに、なぜそれを喜べないのか。

「そりゃあ、ネリが心配だし、前はゆっくり出来なかったしね」

捉え所の無い笑みを顔に浮かべる青年は、後ろにいるネリを振り返った。

「元気してた？ネリちゃん」

「あ、はい。お陰様で……。」

無難な返事を返すと、正守は満足そうに微笑んだ。

「それは、良かった」

（何だろう、何か違和感……）

正守は微笑んでいるのに、目が笑っていない。妖を怯ませた少女が今度は、怯む番だった。

（いつから来てたんだろ……頭領）

一抹の不安を抱えつつ、ネリは三人の様子を少し離れた所から見

のだった。

翌日、学校の授業も終わった後。

「何だろうなー話って」

学校から戻ったら墨村の方に来るよう、夜行の長から連絡があった。だが、学校から帰ってくると、ちょうど良守が正守と話をしている所だった。

大方、良守の甘い考え方に兄が説教をしているのだろう。昨夜も、ネリが間に入らなければ、時音は危なかった。

(頭領の多重結界……時音さんに見せたかったんだけどな)

また歴史を変えてしまったなあ、とため息をつき、少女は部屋から離れる。

盗み聞きのような真似はしたくなかったのだ。

少女が離れてしばらく、正守は口を開いた。

「……もう行った。」

「……ああ」

兄弟のいる部屋は、重苦しい空気が漂っていた。いつもは深く物事を考えない良守も、真剣な表情をしている。

「で？どうせネリのことなんだろう？」

「兄貴は、知ってたのかよ……あいつが……」

異世界から来たやつだったこと。

良守の言葉に正守は、静かに茶をすすった後、答えた。

「ああ」

「知っててあいつを烏森に寄越したのっ！？そんな良く分からねー奴を……」

「そうだ」

少女が時音だけに打ち明けた話は、誰も知らない。

正守の答えは、推測から全て行き着いた物だった。

「異界を繋ぎ、拒絶する彼女の能力のデータは、裏会に無かった。今回初めて登録したが……彼女には元々、戸籍も無い。」

家族構成、住んでいた場所を、諜報に長けた者が血眼になって探したが、何一つ得られなかった。

「日本の入国記録も無い。無い無い尽くしだ。それであの力を見せてられてみる、この世界の人間じゃ無いかもしれない、と想像ぐらいつく」

正守には隠し通すつもりだった、ネリの素性が少しずつ明らかにな

つていく …。

それは、結界師達に多大な影響を与えていくのだった。

「なんであいつを烏森^{くし}に寄越したんだ」

「……ネリが、ここに必要な存在だと判断したからだ」

正守は湯飲みを置いて、弟に厳しい眼差しを向けた。

「昨日の夜、ネリはあの妖相手に、手加減してたんだぞ？それでお前は、いったい何をしていた？」

「それは …」

悔しそうに唇を噛む良守に、正守は容赦しない。

烏森は、今現在何者かに狙われているので、尚更だ。

「ネリの空間支配は、結界師の本質を体現した能力だ。派生的な物は一切削ぎ落とした、無駄の無い力。………時音ちゃんだけだぞ、ネリを警戒していたのは」

正守は、全て見ていた。

それこそ夜が始まってから、全て。

どうしても倒せない場合は、助けに入るつもりで校舎に潜んでいたのだ。

「でも、あいつ……変だ。戦闘中とそうでない時の気配が違いすぎる。なんつーか……魔性……みたいな」

「滅多な事をいうな。今は、仕方がない」

良守も、未熟とはいえ結界師である。気配や雰囲気を感じ取るのに、一般人とは比べ物にならない感覚を持つ。

…そして、正守の微妙な言い方にも、気がついた。

「今は……ってどういうことだ？」

「じきに分かる。」

(その事についても、ネリに話しておかないとな)

限とネリの関係も、少なからず彼女の精神状態に、関係しているのだろう。

多少不安定になったとしても、正守としては目をつぶるつもりである。

「ネリの事は心配ない。あの子はその子なりに色々考えているから……問題はお前だ。」

「俺？」

不意打ちを食らった良守は、顔をしかめた。

「お前、相変わらず勢いで力まかせに戦ってばかりいるようだな」

「…説教か？」

「説教だ」

良守に足りないのはひとえに、思慮深さである。

行き当たりばつたりの戦法では、いつか必ず、解決出来ない問題にぶち当たる時が来る。

正守は改めて、正当継承者たる弟に、活を入れにきたのだ。

加速度的に機嫌が悪くなっていく良守に、正守の苛立ちの意味が分かることは、無かった。

話が終わり、良守が出ていった後。

正守は部屋に一人、腕を組んで目を閉じていた。しばらくして、口を開く。

「出てきたらどうだい、ネリちゃん」

知ってて私に全て聞かせたんですか？頭領

障子にはめられたガラスから、少女の声だけが部屋に響く。

その声は、緊張と怒りを半分ずつ含んでいた。

「あいつが大声出すもんだから、気になったんでしょ。」

そりゃそうですよ。それに弟さん、昨日は私のこと、射殺し
そんな目で見てましたし。

相変わらず、ネリは姿を現さない。そして、どこか諦めたような声
で言った。

知ってたんですね、私のこと。

「半信半疑だったんだけどね…。決め手は、君から預かった西洋剣
だ。」

ゴト、と少女が目印にと渡した剣を、青年は机の上に置いた。

「夜行に、物や場所の記憶を、映像化出来る術者がいてね。この剣
は、随分と色々な物を見せてくれた」

……………そういえば、いましたね。

原作の中で名前が出ることはついに無かったが、確かに正守はそう
いう術者を抱えていたはずだ。

「君が旅してきた場所をこの世界で、探してみたが……一致する場
所は無かった。」

正守は目を閉じたまま腕を組み、何かに耐えるような声を出した。

「……君は、いつか元の世界に帰ってしまうのか？」

……だったら、どうします？

今の段階で確かなことは分からないので、少女が言葉を濁すと、青年は沈黙した。
まるで少女の言葉から、真意を見出だそうとしているかのようなのである。

「勝手な事を言わせてもらえば、君はもう夜行の一員で、家族だ。

……この世界と、縁を切つて欲しくは無い。」

……かぞく。

障子のガラスから、唐突に少女が現れた。正守の正面まで行き、良守が座っていた座布団に座る。

「家族、ですか？」

「そうだ」

正守が目を開き、顔をあげる。ネリの表情には鬼気迫るものがあった。

「君は、もう夜行つゆの家族だ。」

言われた瞬間、少女は心の中に爽やかな風が通った気がした。

常に、根無し草のように平行世界を旅してきたネリにとって、定住

はあり得なかった。

依頼をこなせば、憎まれることがほとんどで、一ヶ所に留まるのは不可能だったのだ。

結界師の世界では、具体的な“世界の願い”も示されないまま、少女はただ闇雲に、力を奮ってきた。

「私……ここにいても……いいんですか？」

少女は、泣きそうな顔をしていたのだろう。正守は軽く目を見張った後、優しく頷いた。

「もちろん」

くしゃ、と少女の頭を軽く撫でた後、正守は剣を懐にしまった。幾分場が和んできて、正守が息を吐く。

「言っておいてなんだけど……俺自身、未だに信じられないよ」

「そう思って、ずっと黙ってたんですよ」

笑顔が戻った少女に、正守はふと表情を引き締めて、盗聴防止の結界をはった。

「で、本題に入りたいんだが」

「……妖集団の、裏が取れたんですか？」

先手を打ったネリだったが、空振りに終わる。

「それは、まだ噂止まりだな。亜十羅の妖獣が、式神を狩ったそうだが、痕跡をたどれなかったらしい。」

すでに亜十羅が監視役としてネリの側にいる、ということをごわぜる言葉だった。夜行の長は未来を知る少女をまっすぐ見る。

「教えてくれ。これから、何が起ころう？」

「……………」

ネリの頭の中には、この世界の行く末が全て詰まっている。大きく息を吸った後、ネリは一気に言い切った。

「私の知る歴史では……………頭領が東北地方の妖退治に足止めを食らい、夜行の人員がそれに割かれた隙に、烏森が襲われます。」

少女の言葉に、正守は息を呑んだ。それはつまり、裏会幹部が妖集団と手を組んでいることの証明だからだ。

ネリは、出来るだけ詳しく、そして夜行の長がとるべき道を指し示す。

「細波さんを、早く回収してください。彼が扇一郎に話したことは、妖集団の長に筒抜けになっています」

「細波……………、奴が裏切るか……………」

手を額にやる正守に、少女は何も言えない。

言えるはずがない。

(……それは貴方のせいです、頭領。貴方が心を開かず、隙を見せなかったから……)

腹を割って話す、とは良くできた言葉だと思う。

正守はそれをしない。相手に考えを読ませず、自分の思惑通りに運ばせる。

策士として、夜行の長として、信頼のおける頭領ではあるだろう。

だが、精神感應能力を持つ細波にとって、『心を見せない相手』は、脅威なのだ。

さすがにそこまで話すのは気が引けるので、ネリは頭を切り替えた。

「この世界の歴史は、もう変質し始めています。私の知識もどこまで通用するか分かりません。」

ですから、とネリは身を乗り出す。

「頭領はいつも通り、自分の考えの通りに、行動してください。」

「……………」

沈黙が舞い降り、正守が静かに口を開いた。

「今日の事まで、知っているのか？」

「……はい。」

何もかもお見通しのネリに、正守は一言釘を刺した。

「言っておくが、ネリ。烏森にいる人間全てを、君一人で守れるな
どと思うなよ」

気配が変わった夜行の長に、少女はごく、と唾を飲み込んだ。

「そんな甘い考えは、良守だけで十分だ。皆、君に守られるほど弱
くない」

「……そ、そんなの分かってますよ!!」

自惚れたつもりは無いというネリに、正守はずばり切り込んだ。

「君、一人で行く気だろうか？」

「……っ！」

慌てて目をそらした少女だが、その態度がネリの心を現していた。

「未来を知る君だけで、その妖の集団を潰そうとも思っているん
だろうか？」

「……」

胸に秘めた覚悟を言い当てられて、ネリは唇を噛む。

それを見て正守は、少女が馬鹿な事をする前で、安堵した。

「君が傷つくことで悲しむ奴が大勢いることを忘れてもらっては困る。……君が限のことを想うように。」

「……限には、頭領の弟さんがいます。私よりもずっと……仲良くなって、学生生活を楽しみます」

「未来に、君も入っているのがどうして分からない……！」

正守が指摘すると、ネリは泣きそうな顔で笑った。

ネリにとって、限は大切な存在。それは少女自身、自覚している。

（でも、私は血の香りに酔う化け物……人間の限は、帰る場所があるんだもの）

いつになるかは分からない。

だが、限の家族は　　少なくとも限の姉、涼は、弟に会える日を待ちわびている。

14歳の子が死ぬ仕事って何ですか……！！

私　、あの子に一言、謝りたかったのに……！！

原作の中で、涼は弟の死を嘆き悲しんだ。

その悲劇をたどってはならない。

正直に打ち明けければ、正守はネリを烏森任務から外すだろう。少女は、自分の揺るがぬ決意を隠し、一芝居打った。

「じゃあ、約束します。無茶はしないって」

「……絶対だぞ」

「はい」

少女の笑顔に、何も言えない正守だった。

「ネリちゃん。昨日なんで最初、妖にとどめ刺さなかったの？」

軽く走りつつ、時音は隣で空中を駆ける少女に話しかけた。

ネリは、律儀に答える。

「私は結界師の補佐ですから……出過ぎたマネをしないように、注意しただけです」

「そ…そうだったの」

それはつまり、ネリがお膳立てしてやったということだ。改めてネリの常識はずれの能力に、時音は舌を巻いた。

(ネリちゃん余裕ね……)

滅却することはできないようだが、妖を粉微塵に出来るのだから、結果は同じだ。

「でも、無理はしないでね。」

「…はい」

正守と全く同じことを言う2歳年上の時音に、ネリは嘘をつくしか出来なかった。

夜道を走っていると、良守の後ろ姿が視界に入った。斑尾と共に、少年の墨色の着物がはためいている。

「良守！今日は正守さん来ないの？」

「うるせえ！知るか！！」

兄の名を聞いた途端、ぐんと走るスピードをあげた良守に、少女達は揃ってため息をつく。

「本当にガキねえ……」

「……同感です」

空間を踏みつけながら、ネリは正守の用意した『試練』に近づいていく。

「」「………！！」

ネリには分からなかったが、結界師一人には妖の気配が分かったよ
うだ。

和服の二人の顔つきが変わる。

「来た！」

「急ぐぞ！！」

「……はい」

どの程度介入しようか思案する、銀髪の少女。

眠らない自分には、全くもって退屈しない夜の世界だと、ネリは心
の中でほくそ笑むのだった ……。

(4) 走る森 まだ原作4巻だっていう、この遅さ……!?!なぜっ!?!

(前書

この遅々としている小説……まことに話が進みません。

白羽児イベントで大きな展開があると思います。

どうか、お付き合い下さい

(4) 走る森 まだ原作4巻だっという、この遅さ！！！なぜっ！？

先に学校に着いた少年は、校庭に足を踏み入れていた。斑尾が、首を傾げながら主の周りを飛ぶ。

「おい待てよ。校庭のど真ん中だぞ、何がいるってんだよ」

少年は、天穴を持ちながら腕を組む。

『うん…でも確かにこの辺りから臭いが…』

その時、良守の足元の地面が不自然に盛り上がった。

バランスを崩す少年を押し退けて、『それ』は顔を出す。

「ぎゃっ！！」

出てきたのは、一本の木だった。

そして直ぐに、まるでタケノコが早回しで成長するように、至る所から木が生える。

植物の成長スピードではありえない力強さに、少年は尻餅をついた。

「な！？な、な !？」

あっという間に、森に早変わりした校庭に、良守の叫び声が響き渡った。

「なんだこりゃ!?!」

みるみる夜空が、木々に覆い尽くされていく。

何とか立ち上がって、良守は相棒の妖犬に思わず確認した。

「斑尾、これ……妖か?」

『ああ。珍しいね、植物系の妖だ』

(植物系なんて意思の無い奴ら……偶然か作為でもなきや、こんな所に現れないはずだけど……)

「くっ! 訳わかんねーなちくしょう! 結! 滅!」

焦った良守がとりあえず、手頃な木を一本囲んで滅する。案外簡単に滅却出来たことに、少年は小さくガッツポーズをした。

「さっすが木だな、動かねーから楽勝……」

大口を叩いた矢先、滅却した木の根元から、小石を弾き飛ばす勢いで木が再生した。

そして運悪く、弾いた小石は少年の額に命中する。

「へぶっ! つっ……」

あざ笑うかのような木の成長に、良守の頭に血が昇った時、少女二人が到着した。

ネリが思わず手を引つ込めても、もう遅い。少女が触れていた木は、みるみる枯れていった。

まるで、妖気を吸い取られたかのように

「何、この声…！」

「くそ、頭がガンガンする！」

断末魔の叫びにふさわしいだろう、妖の大音量に大地が揺れた。

「ネリちゃん、大丈夫………ネリちゃん？」

銀髪の少女は、ガクガクと震えていた。

「うそ……嘘でしょ？」

ネリは自分の右手と、枯れて地面に横倒しになった木を交互に見ていた。

真相を確かめるべく、少女が別の幹に触る。

『……………！』

今度は少女の周りだけ、悲鳴が強くなった。

そして、ネリに触れられた幹は、先程と同じようにシワシワになり、音を立って横倒しになる。

「ネリ！！お前、何やってんだよ！」

尋常では無い少女の様子に、結界師二人は必死で呼び掛けた。だがその時、斑尾が強烈な毒の臭いを嗅ぎとる。

『良守、小娘は後にしな！もっとマズイのが』

ビキビキッ

「何だ！？」

「あっちな」

斑尾の言葉に、二人がその邪気に気がついた時、それは生まれ落ちた。

原作ではいち早く良守が滅した、毒の木の実。

『……………』

生き物の様に蠢いていたそれは、殻を破り

『あ……………う……………』

烏森の大地で産声をあげる。

『いた！！あれだ！！』

「よし見えた、結！」

『…………あ…おう…』

生まれたばかりなのに、もう小学生程の背格好である。

水色の髪の少年は、結界に閉じ込められて、青みがかつた透明な壁をじっとみつめていた。

「め」

「良守！」

良守の後ろに枯れた大木が迫り、時音がそれを結界ではね飛ばす。

その一瞬が、仇^{あた}となった。

『…………や…だ』

金色の瞳が見開かれ、少年の妖気が増す。良守が振り返った時には、少年は変化^{へんげ}し始めていた。

『ま…ずい…』

「変化しやがるのか!？」

『ハニ―離れろ!!そいつは』

少年のむき出しの背中から、蛾のような昆虫の羽が現れる。

あっという間に、良守の結界は毒でぐずぐずに溶かされてしまった。

「結、結、結、結、結、結！」

結界を形成したそばから、毒で溶けていく。未熟な結界師二人の結界では、薄すぎてすぐに溶けてしまうのだ。

水色の髪、金色の瞳。一糸いっしまとわぬ姿の小学生程の少年は、あらゆる恐怖に脅えていた。

死の恐怖。

人の恐怖。

未知への恐怖。

『…ひ、と……こわい……くるな』

そして、裸の少年が毒の霧をまとわせたまま、駆け出した。

「あ、コラ待てー!!」

『……変だな……』

「何が変なの、白尾？」

呟いた相棒に、時音は目を向けた。

『あの妖…生まれた時から人形ひとがたって、相当高位の妖だぞ』

「えっ？」

『生まれたばかりでもう人語を操るんだ、物凄い成長スピードといつていい。……………ネリリンを一人にしない方が良くもしいれない』

白尾の言葉に、時音はハツとなった。先程まで木が倒れる地響きがしていたのに、森はしんと静まりかえっている。

「ネリちゃん！」

さあつと青ざめた少女は、鼻のきく相棒を促した。

「白尾、お願い！」

『こつちだ！』

少女と一匹が駆け出す。

だが、それはネリにとって遅すぎた。

ネリ！

暗い闇の中で、誰かが自分を呼ぶ声がした。毎日聞いていた声である。

しっかりしろ、ネリ！

だが、少女は皮肉気に笑った。

微かな、弱々しい呟きが少女の口から溢れ落ちる。

(妖気を渡す事も出来れば、奪う事も出来る……か。
火黒攻略の糸口は見つかったけど、これで限との未来は……なくな
った)

癒すだけなら良かった。だが、奪えるともなれば話は別だ。

(黒芒楼に行くにしても、まだ1週間はあつても……限が来る前に、
あつちへ行こう。限の顔を見たら、決心が鈍るかもしれない)

闇の中、少女は儂く息を吐く。

(限……ごめんね、でも……涼さんには会わせてあげるからね)

ネリ……!!

ガクガクと揺さぶられる感覚で、ネリはハツと我に返った。

直ぐ目の前には、夜空と正守の顔があつた。だが、彼の表情は暗い。

「ネリ……戻ったか」

「はれ……？頭領、なんでこんなところに……」

「上から見てたんだよ、お前達がこの森をどう対処するかとな」

青年に言われて初めて、ネリは周りを見渡した。少女が寝ている場
所を中心に、枯れ木の山になっている。だが、増殖する力は衰える
ことなく、端からじわじわと再生しつつあつた。

「ネリ。君は昼間、俺と約束したな？絶対に無茶はしないと」

「え？あ、はい」

いきなり何を言い出すのかと、ネリは正守を見上げた。その目は険しく、少女を射抜く様だった。

「他の妖気を自分のもの出来るというのは、確かに……君には荷が勝ちすぎるかもしれない。だが、それは限の隣にいられない理由にはならないはずだ」

「え？なんで頭りよ……」

ネリの消え入りそうな声は、正守の力強い腕に遮られた。

「わぶっ！ー！」

胃袋がおいてけぼりにされる感覚の後、ネリは正守に抱かれて空中に飛び上がる。

正守の肩越しに、濃い青色がかった毒の霧が見えた。

「え……？あれ、何？」

月明かりに照らされる、白い身体。

透き通る様な水色の髪に、金色に光る瞳。

少年の背からは、ギョロリと目のような模様の、一対の虫の羽が生えている。

『見つけた……見つけた!!』

「待てエ　　!!」

良守の結界が、妖を何度も囲むが、形成し終える前に毒で溶かされる。

正守はその様子を見て、目を見張った。

(結界が通用しないだと?)

空中の結界の上に逃げた正守は、ネリを　抱き上げたまま妖を見た。ちなみに、妖の少年は小学生程だったが、中学生程に成長している。

「あの子……今夜登場するはずの無い存在……見たこと無い……誰なの!」

「……なに?」

妖は、正守の腕に抱かれたネリをまっすぐに見た。そして、舌足らずな言葉を操り、懸命に口を動かす。

『見つけた、待って、僕、見て』

瞳孔が縦に割れた金色の瞳は、不安でたまらない子供の目だった。

すがりつくように、ネリを見ているものの、自分の毒を気にしてか一定の距離を保って、滞空している。

高い知能を持っているのは、明らかだった。

「……頭領。絶界を使う前に、私に試させてもらえませんか」

「奇遇だね。俺も同じことを考えていた。あの妖は…話が分かりそうだ。まだ幼いようだが」

結界がきかなくても、ネリの拒絶の盾ならば、閉じ込めて烏森の敷地外に出すことも可能だろう。

「気をつけるよ、ネリ。」

「はい。」

近づきたいけど、近づけない、といった風に切ない目で、妖はネリを見つめている。

『聞いて、行かない、で』

「分かった分かった。まずは、あなた服着てよ。」

服飾室から、適当に着物を出すと少年に放る。毒の拒絶を施したお陰で、和服が溶けることは無かった。

『これ、服、着る？』

「そ。着るの。裏山行くよ、着いておいで」

『行く、行く！！！！』

ぱあっと、明るくなった少年の顔を見たネリは、空気を踏みしめて
駆けていった。

(5) 『蛾』って『ひむし』って昔は読んだらしい。新キャラ出してすみません
どうしましょ…

バッドエンドにしたくないのに、何だか嫌な予感がしてなりません。

今私が体調悪いせいでしょうか……？

(5) 『蛾』って『ひむし』って昔は読んだらしい。新キャラ出してすみませ

「おい兄貴!!なんであいつら裏山に飛んでっただよ!!」

「正守さん!!ネリちゃんは……」

時音と良守が、上空にいる正守に近づいていく。

ジャンプするタイミングと、結界を形成するタイミングがまだ慣れないせいか、少し時間はかかったが、なんとか合流した。

「何考えてんだよお前!!」

「落ち着け、良守。今はネリに任せるしか無い。それに……あの毒では、結界で滅するのにも時間がかかる。」

妖が烏森にいればいるほど、土地の力は妖を強くしてしまう。

時間との戦いである結界師に、立ち止まることは許されないのだ。

正守の表情から苦悩を読み取って、時音は口をつぐむ。

(あの妖……成長スピードが速かったから、心配だけど……)

足元に広がる、樹海の如き森は、未だに増殖を続けている。

ネリが妖気を吸いとして枯れた大木はそのままに、空いた空間には新たな木がよきよき生えていた。

こちらも、何とかしなければならぬ。

「正守さん！あの……」

「二人は、烏森を頼む。俺はネリを追うから。」

「……分かった。まかせろ」

時音は喉まで、『手伝ってもらいたい』と出かけたが……幼なじみの顔を見て、やめた。

「すぐ戻る」

正守は、二人に優しい眼差しを向けたあと、漆黒の羽織を翻した。

420

案外すんなり烏森から出た妖の少年を連れ、ネリはひとまず裏山の中腹に降り立った。

「“拒絶” 空間創造つと」

ネリと妖を囲むように、真っ黒のドームが形成されていく。

何もかも 監視の目さえも拒絶する漆黒の壁だが、月の光は通すように設定した。

わざわざこの空間を作ったには訳がある。

(久しぶりに…変化しますか)

若干緊張しつつ少女が意識を集中させると、すぐに狐耳と尻尾が出現した。

純粹な妖気で、少女の体が淡く紫に発光する。

『 …… !! 僕、同じ!! ！』

何故だか目を輝かせて喜ぶ少年に、ネリは藍色の瞳を向けた。

『さて、と。貴方が成長してくれないと、私が困るの。烏森から力はもらえないけど、私の力を与えることは出来る……… だらうし』

少し自信が無いようだが、ネリに迷いは無かった。

着物を引っかけたままの少年を、糸でぐるぐる巻きにして、繭のようにする。

へたに暴れられると困るので、ネリは不本意ではあったが、彼の心と接続しておいた。

あなたは幼い。だから、私の力を分けてあげる

人、怖い、ドコ、僕、死ぬの？

まるで赤ん坊の様な思考で、この妖はただ一点だけを求めている。

同族を …… 仲間を求めている。

怖い、怖い、殺さ、ないで

根源的な恐怖が少年を支配していて、ネリは彼が可哀想になった。

『大丈夫。話ができる位まで、成長してもらっただけだから』

湯水のように繭へ力を送り込む。多少ふらついたが、少女の妖気が衰えることはない。

（さっき、妖の木からたくさんもらっと思ったから、ちょうど良かった。）

人……怖い。

私は怖い？

少女が優しく話しかけると、繭が静かになった。

怖く、無い。ここは、暖かい、から

少年の恐怖の感情が、徐々に薄れていくのが分かる。

烏森にいた人間の中で、妖混じりがネリだけだったのもあるのだろう。同族だと認識されていたらしい。

『なついでるなら、それはそれでいいか。この子多分……原作じゃ生まれる前に殺されたあの妖だし……』

だから、これほど『死』への恐怖が強いのだろうか。

たった一人で、生まれることなく散った命だったからか。

『なんか：私と似てるんだね、あなた』

親を知らず、人を恐れ、仲間を求める。

種族は違うが、境遇が驚くほど似通っている。

純粋な妖気に包まれて、少年の妖気レベルはどんどん上がっていった。

妖を強くするために自分の力を使うなんて、夜行の長に知られたら処罰ものだ。

早く、終わらせる必要がある。

『同じ死ぬにしても、妖なら戦って死にたいでしょ。最期まで付き合ってあげるよ……！』

少女が妖気をさらに籠める　すると、繭が青白く発光した。
一際強い光がネリの目をさした後、唐突に男性の声が聞こえた。

『氷蛾……………』

『え？』

パキ、と繭にひびが入る。裂け目から白い手が出てきて、少しずつ穴を広げていく。

『我の名は、氷蛾。氷の蛾と書く……主よ。我は、主の様な存在を欲していた』

『ん…ん？えくと、あなた、氷蛾っていうのね。』

繭の中から出てきたのは、二十歳程の青年だった。水色の髪はそのままだに、背中を覆うほど流れ、六甲紋の着物を着ている。

紺の地で、袖口と裾に白抜きの六角形が規則正しく並んでいる。

その六角形は、結晶の中心部分のように三重になっていて、外側から白・紺・白に染め上げられていた。

夜の雪原を切り取った様な着物である。

『まずね、あなたは烏森に近づいちゃ駄目なの。あそこには結界師がいるから、あなたは殺される。分かった？』

『承知。……して主よ、我に主の名を教えてくれ。』

真面目な顔をして、銀髪の少女を見つめる青年は、繭から完全に姿を現した。

まっすぐ立つと、少女の背は、青年の胸までしか届かない。

ほんのついさっきまで、同じ目の高さだったのに、ネリは見上げなくてはいけなくなった。

『……ねえ、主って私のこと？』

『うむ。我は主の妖力でここまで変化出来た。あの地で殺される所を救ってくれた。』

よってこの命、主のものだ』

ザツと氷蛾が、片膝をつく。

あまりにもふざけた芝居に、ネリはこめかみに青筋が立つのを感じた。

意識の糸を氷蛾の首に絡めて、妖狐は震える声で言う。

『氷蛾、あなた誤解してる。命をかけるなんて、簡単に言っちゃいけないことなの。そして私は、相棒など欲しくない。』

『……………』

『あなたは生まれたばかりで混乱しているだけ。……………帰るべき場所へ帰りなさい!』

『……………我のいるべき場所は、主の側だ』

己の首にかかった見えないはずの糸を、青年は左手で掴んだ。青年の紅い血が、糸を伝っていく。

逆に手繰り寄せられて、ネリは右手を掴まれた。

『なっ……………!?!』

『……………主。主が望むならばこの首、主に捧げよう。だが、主は我を逃がすつもりで力を与えた。主に殺すつもりが無いのは、我が一

番良く分かっている』

近距離で見る青年の金の瞳は、少年の時と変わっていない。
孤独に脅えた、寂しい目。

『我は主に仕えたい。相棒になれずとも良い。 我を側においてくれ、主。』

『なんでわざわざ自由を捨てるの？このままあなたが逃げれば、私は跡を追ったりしないんだよ？』

理解出来ない小さな少女に、生まれたばかりの青年は、なおも言葉を重ねた。

『自由とは、独りになることだ。独りは、嫌だ。 ……主も独りだから、それほど悲しいのだろうか？』

『 ……氷蛾！？あなた……！』

ネリは手を振り払おうとして、ビクともしないことに気づき、焦った。

意識の糸で繋がれた状態では、思考や感情が筒抜けになる。

少女しか扱えないはずの糸で、青年は逆にネリの感情を見ていたのだ。

慌てて突き離そうとしたネリだったが、青年の心が少女の胸まで届く。

見捨てないでくれ。我は、世界に一人きり。仲間も親もおらぬ。主と同じ、異界の生き物なのだ。

少女は、ハツとして青年を見た。

原作でも、謎のまま滅却された不思議な存在。ネリの暴走によって時間がずれ、氷蛾は生まれた。

お願いだ、主。

青年の心に嘘は無い。ネリは、ハアとため息をついた。

『ベアトリックス・ネリ・ユリカ　それが、私の名だよ』

金色の瞳が歓喜にうち震えた。

『感謝する、主。我を僕しもへとして、存分につかってくれ』

少女の手の甲に、氷蛾が口づけを落とす。もちろん、ネリは手を引っ込めようとしたが、氷蛾はそれを許さなかった。

『うわー、ガラじゃ無い、ガラじゃ無いよ！？こんな主従関係、今の時代やったりしないからね！？』

アワアワと頬を赤くする少女に、青年は水色の髪を満足気に揺らした。

その時だった。

「ネリ　！！！！！！」

和やかな空気を、正守の叫びが切り裂く。だが、直ぐにその声は遠くなった。

正守が上空を駆け回って、地上を探しているからだろう。

『やばっ、頭領が探してる！！氷蛾^{ひむし}、とりあえず今は私の異界に入ってきてくれない？』

『我は、主の意のままに。契約の刻印が呼ぶ限り、我は主の元に馳せ参じよう。』

新たに作られた、『氷蛾の部屋』という名前の異空間に、青年は入っていた。

青年の言葉に、何か引つかかる物を感じたが、今は時間が無い。

直ぐ様、少女は妖狐化を解き、拒絶の空間も解除する。

妖気を絶つ為に、存在情報もいじった為、人間の正守が素通りしてしまうのも無理はない。

案の定、ネリが外の空気を吸った瞬間、正守が上空から降ってきた。

「ネリ、無事か！！」

「はい。大丈夫です。ちゃんと納得してくれました。」

きちんと笑顔で言えただろうか。少女は心苦しいと思いつつも、自分の上司に嘘をつく。

「ちゃんと言いきか…」

「なぜ、気配を絶っていた！？ゆうに15分は経っているんだぞ！？」

ネリの言葉は、正守の激昂した声に掻き消された。思わず、少女の肩が跳ね上がる。

「あの…えっと…」

「君の独断専行が、どれだけ周りを危険にしているか、分かっているのか？」

正守の脳裏には、ネリを烏森任務から外す選択肢が、浮かんでいた。

(だが、この子は一人にしたらきつと、“黒芒楼”とやらに行ってしまうだろう。……それは、まずい。是が非でも、この学校に縛り付けておかなくては)

ネリが悲しみに暴走し、木々をなぎ倒していた時。正守は、ネリの呟きを聞いていた。

少女が話そうとしなかったので、きけないままだったのだが、成り行きで夜行の長は全てを聞いてしまっていたのだ。

妖の集団が“黒芒楼”ということ

少女が、限の過去を知っているということ

(限を…早めにこちらへ寄越すか…?)

だが、少女が暴走した元々の原因は、志々尾少年である。それは、さすがに拙い。

「すいま、せんでした……。」

ネリは震える声で、うつむいた。氷蛾が例え牙を剥いても、少女には彼を倒す力がある。

一人でも何とかなると、たかをくくっていた。

「私……もう、限の側にいられないんです。彼の妖気をもし吸い取ってしまったら……どうなるか、想像もつきません。」

大切だからこそ、傷つけたく無い。

未来が見えないからこそ、怖い。

ネリは、顔を上げて正守を見た。

「皆の未来の為に、私は自分の力を使います。私を信じてください……頭領。」

「……君の決意は、分かった。今度は周りをもう少し頼れ。二人も心配してたんだからな」

「……はい」

少女の決意と、夜行の長の決断。

正守の決断が、ネリに明かされることは無い。

夜間に、爆音が響き渡った。

(6) 正守の決断(前書き)

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

(6) 正守の決断

烏森から正守が出ていった後、良守と時音は作戦を練っていた。

「白尾、根っこの範囲分かった？」

『いや、これはかなり嗅ぎ分けが難しい上に、どうもその位置がチヨロチヨロ移動しているような気配があるな』

白尾が苦く言う。時音は、生い茂った木々を見上げて息を呑んだ。

(木の枝が…連結してる…！？これじゃ…どこを切っても再生してしまう…)

良守は、さっきから木の幹をじいつと見つめたまま、動かない。

意を決して、時音は幼なじみに声をかけた。

「良守！応援を呼ぼう。不確定要素が多すぎる。これはあたし達だけじゃ無理だ。」

正守はネリを追ってしまったし、すぐには戻れないだろう。あてには出来ないのだ。

時音が、良守から目をそらす。

「早い方がいい。あたしはおばあちゃん呼ぶからあんたも…」

「やだね!!!」

良守の声が、少女の言葉を掻き消した。
少年は意地になって、叫ぶ。

「俺がなんとかする!!!」

もはや小さな子が駄々をこねているように見えたので、時音は声を荒げた。

「なんとかってどうすんのよ!?!」

「この森全部囲む!」

言い切った良守に、時音は啞然とする。

「な…こんな大きいの滅却すのにどんだけ力があると思ってるのよ…!?!」

歳上の少女は、わなわなと身体を震わせた。対して、墨村次期当主は顎に手を当て、木を睨み付ける。

「そりゃー滅する自信まではないけどさ、囲むだけならイケると思うんだよ。」

「囲んでどうすんのよ!!!」

要領を得ない問答に、時音が無意識に拳を握りしめる。

良守はそれには気がつかず、幹に手を置いた。すべすべとした、普

通の木の感触である。

「ずっと考えてたんだけど…これって、燃えるんじゃないか？」

白銀の妖犬が口を挟む。

『ああ…燃えるだろうね。こいつ、現世の木に、寄生するタイプの妖だから…それはもう、木のように燃えるさ』

「だろ。結界の中で燃やせば校舎も大丈夫だし。」

そこで、少年の頭にいつぞやに見たテレビ番組がよぎる。

「アレできねーかな。何かで見たんだけど…なんていうんだっけ、えーと、バ…バ…？」

こうして、原作通りに進む歴史もある。

氷蛾こむぎという不確定要素が加わり、歴史の大変化が行われるかと思いきや、世界はそれを良しとしなかった。

まだ…未来が変わるのは先の話である。

正守とネリが、裏山で話を終えた時。

真っ暗な夜に、大きな火柱が立った。

「何だ!？」

(ああ…もうあっちの妖は、片がついたんだな…)

バックドラフト現象。

良守が思い付いた、なんとも派手な方法である。

森全体を良守の結界で囲み、あらかじめ森の中心部には火を放っておく。

火が結界の中の酸素を使い尽くした頃、時音が合図と共に、良守の結界の天井に穴を開ける。

中でくすぶっていた炎は穴から酸素を得て急激に燃焼　　爆発する。

木の成長スピードを上回る勢いで、良守の結界内で木が燃え上がっていた。

爆音は対遮音を兼ねた、妖感知用の結界で防いでくれる為、付近の住民に音は届かない。

「全くあいつも無茶をする……目立つだろうが」

やれやれ…といった風に正守が息を吐き、空中に結界で足場を作る。少女も、手伝いに行くべく地面を蹴った。

「バカタレがあ！！何をどうしたらこーなるんじゃ

！！！」

「うっせ　！！こうするしかなかったんだっつ　の！！」

21代目墨村家当主、墨村繁守の怒声が夜の学校に響く。

めちゃくちゃの校庭には、墨村三兄弟の末っ子、利守の姿まである。

陽があがるまでに元通りにしなくてはならないので、人手が足りないのだ。

ネリは、熱風と爆風で損壊した校舎の窓を直していた。

「物質結合」

少女が視認できる範囲の窓ガラスが、時間を巻き戻すかのように直っていく。

良守達は、既に昨日見ていたので驚きは無かった。

だが、雪村時子と墨村繁守は目を見張った。

（なんじゃあれは！！）

（ネリさん、あなたの能力は一体…）

ネリの能力を横目で見ながら、両家当主も修復に入る。

正守は、ネリから事の顛末を聞いて、良守に近づいた。

「本当にメチャクチャだなお前は…」

「む」

口を尖らせる良守に正守は、それ以上声をかけなかった。

（まったく…森を囲む程の結界を張ったというのに…大して疲労の色が見えない…）

良守が5枚ほど、式神の札を取り出す。不機嫌そうではあるものの、いつもと変わらない様子である。

対して、正守は式神の札を15枚ほど取り出した。

式神は、術者の力量を表すものでもあるので、実に良守の3倍である。

誇ることに、夜行の長の表情には影があった。

（まだ有り余る力を操作しきれないだけか…）

ポウン…と、等身大の人形がわらわらと生み出され、正守の指示の下、さっそく動き始める。

銀髪の少女は、兄弟の様子を見ながら四方八方に己の糸を伸ばしていた。

壊れた物を修復できても、場所を動かされた備品は元の位置に戻さなくてはいけないのだ。

ネリは式神を使うことは出来ないの、到着地点と備品を糸で繋いで、いちいち動かすしかない。

「これ……朝までに終わるのかな……」

小さくぼやきながらふと、糸を操る右手に何か付いているのが目に入った。

(何こ……これ……?)

「あっ」

思わず叫びそうになって、少女は自分の口を手で塞いだ。

直径2センチ程の黒い太線の円。

上と下(指先と手首)方向に、円の縁から1センチほどのトゲが伸びている。

まるで入れ墨のようなその刻印に、ネリは慌てて結界師達に背を向けた。

「何なの……これ……?」

いつの間に……と思い、少女は先程の氷蛾の行動を思い返した。

手の甲に、誓いの口づけ。

契約の刻印が呼ぶ限り……

(ぎゃ) ……!!…こんな見えるところに印つけるの普通!…?)

ワタワタしながらも、教室の汚れを一ヶ所に集めて外に出す。
その時、繁守の声が響いた。

「コラ！！手を休めるなバカタレ！！」

「チョップやめろくそじじい！！」

「やかましい！お前は常に瀬戸際、一步間違えりゃ大惨事じゃ！少しは反省せい！！」

少し場所が離れているのに、一字一句聞き取れるほどの大声である。

とても、68歳の老人には見えない。

「よいか良守。自覚がないようじゃから言っておく。」

繁守が厳しい顔で、孫の良守を見た。

「こんな無茶を続けていれば、いつか周りに甚大な被害を及ぼす。そこの所よつく考えておけ！」

一生懸命考えて行動しても、良守のやり方は、裏目裏目に出るのであった……。

（墨村君、まだまだ成長途中だもんね）

仕方ない、とも思いつつも、ネリは早く良守に強くなってもらいたかった。

歴史が早まっているなら、尚更である。

「早く直さなきゃ……」

銀髪の少女は、さらに異能で校舎の外壁も直していくのだった。

陽が昇り、ネリは鏡渡りを発動して校舎の影に移動していた。

繁守や正守が、鏡の世界のネリを感知することが出来るので、念を入れておいたのだ。

良守は常に教室か、屋上にしかいないので植木の隅まで来ることは無いだろう。

陽の光に妖は弱いので、少女は拒絶の空間を創造し、光を遮断した。ランプを床に置き、小さく呟く。

「 出ておいで、氷蛾^{こむぎ}。」

『 主。』

空間の裂け目から出てきたのは、金の瞳の青年だ。

その青年の眼前に、ネリはずいっと右手を突き出した。

「あなたねえ、こんな見えるところに印つけなくても良いでしょ？ 今日ずっと手にサポーターしてたんだからね!？」

『む……。すまない。だが、一度交わされた契約印は、僕の消滅か、
主の消滅無くして変更は出来ぬのだ』

「うそお!？」

蛾の妖からもたらされた事実には、少女は啞然とする。

(わあ……。やっぱり気軽に名前を教えるんじゃないか……)

『して主よ。主は、我に仕事を申し付けてくれるのだろうか?』

「あ…うん。少し考えてただけど…」

ネリは、一瞬言いよどんでから、一気に言った。

「あなたに潜入捜査して欲しいんだよね……。今すぐじゃないけど」

『……。?急ぎではないと?』

「うん…私も場所が分からないから、動きようが無いんだけど…、
近々烏森に黒芒楼の手先が来るの。」

少女の考えでは、歴史の前倒しが起こっている。それは、ネリしか
知らないことだ。

近日中に、黒芒楼が動く。

偵察に4体の妖が烏森に派遣されるのだ。

『その者の跡をつければ良いのだな』

「あ、でも……1つ問題があつてね……」

派遣された妖の3体は結界師二人に倒され、もう1体は黒芒楼幹部に殺されてしまう。

捨て駒として、見捨てられるのだ

「それに、その幹部っていうのが虫使いだから、ひよっとすると氷蛾、操られちゃうかも」

『それは避けねばならぬな』

腕を組む背の高い妖を他所よそに、ネリはポン、と手を叩いた。

「そつだ、白に殺される妖に道案内させよう！私の妖気で治せるでしよ」

『それは主が危険すぎる。我は同意出来ない。』

眉を潜める氷蛾に、ネリはイタズラっぽく笑った。

「大丈夫よ。氷蛾にもついてきてもらうから」

うん、それが良い！と一人で納得する主に、僕は心配しもんそうな眼差しを送ることしか出来なかった。

陽が落ちて、結界師達の夜が始まる。

正守は烏森の遙か上空で、結界師両家を縛り付ける忌まわしい土地を、見下ろしていた。

（ネリには監視を付けた…：翡翠と花島をつけていれば、昼間に打ち漏らしは無いだらう…：問題は…）

ネリの空間転移である。

出所が分からない限り、尾行も簡単に撒かれてしまうからだ。

（あいつを…：つけるか…：）

何もかも、少女が馬鹿な真似をしないためである。夜中は雪村家が面倒を見ているし、正守は時音にもそつと耳打ちしておいた。

ネリが一人でいなくならないか、見張ってて欲しい

時音の祖母、時子がすぐに引き離してしまったため、あまり詳しく伝えられなかったが、聡明な時音なら大丈夫だろう。

（騙すようで気が引けるが…：仕方ない。）

彼女を、信じる信じないの問題ではない。

彼女を死なせない為の処置なのだ。

（昨日の妖も気になるところだが…）

昨夜、ずっと正守は裏山の上空でネリを探していた。

だが少女は、妖を烏森から遠ざけたという。

正守の、気づかない間に、ということになる。

(何かを隠している……?)

「コラア！そこで何やってんだ！！」

良守の声が、寒い夜空に響いた。

(7) 良守の決意(前書き)

他の二次創作を読んでて思いました。

新キャラは、たくさん出しちゃいけませんね!!

ですので、3人も出してしまったことをお詫び致します。

P・S・体調不良で大学休みました(笑)

(7) 良守の決意

良守と正守が上空にいた頃。ネリは、木の上でぼんやりとしていた。

(目下の目的は、氷蛾と離れた場所でも、連絡が取れるようになることかな)

異界にあるという黒芒楼は、『姫』と呼ばれる狐の妖の領域である。今まで他人の支配する世界に、足を踏み入れたことの無い少女にとって、未知の異界。

潜入捜査をしてもらっても、白に操られたり、蟲を入れられて監視下に置かれたらお手上げだ。

(あと、出来れば藍緋も助けたいなあ……)

人間を好きになってしまった妖、藍緋。

彼女は、白に蟲を入れられて協力させられている、哀れな植物系の妖である。

最期は、火黒に殺されてしまう、何とも可哀想な女性なのだ。

(蟲を取る手段は……考えてある)

そして、ネリが完全変化するようになってから、くすぶっていた疑問。

(私……なんで、『姫』様に似てるんだろっ……?)

原作・結界師の中で登場する『姫』は、相当な高齢で妖力が底を尽きかけている。

黒芒楼が烏森を狙うのは、姫の先が長くないのも影響しているのだ。姫の妖力を回復し、姫の住まう城を保持する為にも、烏森の力を欲したのである。

銀色の髪に、黒と銀の尻尾を持つ九尾の狐。それは、ネリと外見の特徴が酷似している。

違うとしたらそれは獣耳ぐらいの物だろう。姫に狐の耳は生えていない。

「はぁ……」

(烏森の監視をどうやって撒こうか……さすがに時音さんには一言言つてからの方が良いかなあ……)

「ネリちゃん、どうかした?」

見回りしてきたのか、時音が校舎を木の上にいるネリに声をかけた。良守は、一緒に無いようだ。

「い、いえ。何でも無いです」

「……ネリちゃん、何か隠し事してるでしょ」

高校1年生の少女は、さすがにめざとい。2学年の差は伊達ではないのだ。

「あなたがとても遠い所から来て、烏森のことを良く知っているのは分かってる。でも、あたしと良守が、小さい頃から烏森（こゝろ）を守ってるのも事実なの。」

時音は、心に壁を作った少女に歩み寄った。

「話してくれない？ネリちゃん、最近夜も寝ずに修行してるみたいだし」

「あ……バレてました？」

「布団を使ってなければ、すぐ分かるわよ」

なめないでくれる？と時音は腕を組んだ。ジト目で銀髪の少女を見ると、ネリは視線を地面にすとん、と降り立った。

「時音さん、自分勝手な事言っても良いですか？」

「……………良いわ、聞いてあげる」

一瞬間を開けた歳上の少女は、ごくりと唾をのんだ。

「……………近日中に、手強い妖が来ます。攻撃に3体、監視に1体……その時、私は別行動を取らせてもらいたいです。」

「……………!?!?」

全く予想だにしなかった少女の答えに、時音は息を呑んだ。そして、剣呑な目付きでネリを見る。

「それは……任務を放り出すってこと？」

「違います。…時音さんの『矢』があれば、攻撃担当の妖はちゃんと倒せます。問題は…監視担当の妖なんです。」

「どづいづこと？」

鋭い切っ先の様な雰囲気をまとわせたまま、時音は詰問した。

「監視担当の妖は……墨村君が追いかけますが、逃げられてしまうんです……私の知る未来通りなら。」

良守、時音、ネリの3人で白羽兎を倒すまでにはいい。その後の、ネリの単独行動を時音に認めて欲しかったのだ。

氷蛾には、今夜から裏山に潜んでもらっている。尾行に抜かりは無い。

「そづいづことなら、私達だって…」

「いえ。尾行は複数でやるとバレます。それに、私の方が慣れているので」

時音の反応も予想の範囲内だったので、ネリは直ぐ様言葉を返した。

「時音さん、この事は墨村君には言わないで下さい。」

「どっして？」

「……これ以上未来が変わったら困るからです。」

歴史というものは、打たれ強く見えて案外脆い。

世界の意思が、どこまで歴史を自己修正するか定かではないが、『限の死』を作らない未来に持っていかなくてはならない。

死因である、火黒の消滅。

すなわち、黒芒楼の消滅。

歴史の大改変を、世界が望んでいるかなど、ネリには分からない。

ただ、大切な者を守るだけだ。

「時音さんなら、未来を知っても、いつも通りの力を発揮出来ると思いますから。」

「……………分かった。でも、無茶は絶対にしちゃ駄目。」

良いね？と時音が念を押す。それに、ネリは笑顔を向けることが出来た。

「はい」

『嘘』という名の仮面を、徐々に覚えるネリに時音が気づくことは無かった。

「お、良守。」

「…何やってんだよ、そんなところで」

はるか上空、良守と正守は自分の結界の上で向かい合っていた。

「別に。…懐かしんでいたただけだよ」

「何だそれ」

良守が呆れ顔で返す。正守は、軽く笑った後話を切り出した。

「ネリは、学校を楽しんでるかな」

「…ま、クラスの女子とは良い感じみてーだけど？」

「それは良かった」

ビュオオ…と肌寒い風が吹く。正守は胡座をかいていたのを崩して、立ち上がった。

「じゃ、俺やることあるから」

「ま、待てよ！」

踵を返した兄が、弟を振り返る。良守は、その瞳に決意をのせていた。

「俺…ずっと考えてたんだ。最悪の事態なんて考えたくもない…」

「…?」

「だから…」

14歳の少年、正当継承者である良守は、後に引くことが出来ない、己の使命を兄に宣言した。

「全ての元凶の、この烏森の力、俺が永遠に封印しようと思う。」

「なんだって?」

正守は驚きに、軽く目を見張った。冗談かとも思ったが、弟の表情は真剣そのものである。

「方法も決まってるねーけど…俺がもつともつと強くなって…この訳わかんねー烏森の力も、くだらねーしがらみも全部俺がねじふせる。いつか、必ず。」

「なるほど、ね…」

顎に手を当てて少し考えた後、正守は朗らかに口を開いた。

「良いんじゃないか?やってみるよ。」

烏森に愛されている良守ならば、いつか出来るのかもしれない。

（ネリが何か知ってるかもしれないな）

烏森の地を完全封印する、それは並大抵の力では遠く及ばない。

神に近づいた者は、必ず咎とがを受けるのだ。

この時は、夜行の長でも未来を見通す事は出来なかった。

正守は、仕事があると言って早朝に生家を後にした。父の修史は、勿論早起きしてお弁当を、正守に持たせて見送った。

空が白んで来る。

この時間になると、もう結界師達はそれぞれの家に帰っている。もちろん、ネリも例外ではない。

（少なくとも、ウロ様が帰るまで白羽しろは児は来ないよね…）

畳に寝そべりながら、ネリは黒い球体をもてあそぶ。その時、ふと思いついた。

（要は氷蛾から、私に連絡が出来れば良いわけで…）

服飾室Aと名付けた異空間の、さらに奥、少女は黒い金庫から翡翠の腕輪と足輪を取り出した。

（この2つを空間越しに糸で繋いでおいて……うん。氷蛾が空間を開けられる様にしておこう）

彼はネリの糸を逆に使うことが出来た。

蚕^{かいこ}だけに、糸の扱いには慣れていられるのかもしれない。

「さて、頑張るか」

眠れない夜は、長すぎる。

眠らずに修行をしていると言われたが、眠れないから修行をしているのだ。

太陽がゆっくりと昇っていった。

『ふむ。対になった足輪で、我から主に言葉を届けることが出来る』

「そついつと。」

鏡の世界で、氷蛾とネリが今後の為の作戦を立てる。

助けた妖に黒芒楼への道案内をさせたら、そのまま藍緋の所まで案内させること。

そこで、氷蛾はしばらく藍緋の側で待機。

渡した足輪で、ネリに黒芒楼の内部状況を伝えること。

「白には、絶対に近づいちゃ駄目だからね。」

『承知。……だが主よ。死んだはずの部下が生き返ったと知れば、
我は白とやらに目をつけられるのではないか？』

足を出して、と少女が青年の足元に屈む^{かが}。

「まあ、その時はこの翡翠の足輪を目印に、私が完全変化して氷蛾
の所へ飛ぶよ。もし蟲を入れられたら、私が取ってあげる」

氷蛾の白い足に翡翠の足輪をつけると、青年はフツと笑った。

『うむ。主の力の残滓^{ざんし}を感じる。これならばきっと大丈夫であろう。
……主を危険な目に合わせぬよう、我も努力する』

「氷蛾が黒芒楼にいてくれれば、私は格段に動きやすくなる。……
だから、死んじゃだめだよ」

『承知。』

どことなく、青年は嬉しそうな顔をしている。少女と同じ意匠の翡
翠を身につけているのが、誇らしいのだろう。

それに、意識の糸を繋ぐことが出来るなら、ネリの妖力も頂戴する
ことが出来るのだ。

『感謝する、主。早くこの恩に我は報いたい。』

「…まあ、数日中には働いてもらうだろうから。準備しといてね」
少女が青年に別れを告げ、壁を垂直に歩く。

2階の窓を開けて入り、階段を昇ると出入り口にしている女子トイレが見えた。

ネリは、鏡の世界を後にした。

そして太陽が中天に差し掛かった頃、それは烏森の地に足を踏み入れた。

『なつかしいのう……』

暗い抹茶色の体に、丸い網笠を被り、白地に水玉模様の着物を着ている。

口ひげが口元を覆うほどに蓄えられ、着物の上から狸のような、長くて丸みを帯びた尻尾が揺れている。

ここ一帯の土地神、隣街の無色沼に住み、自然物を司る 神様。

ウロ様、だった。

時音は、4限の授業が終わって友人のまどかと食堂に来ていた。

いつもと変わらぬ騒がしい食堂。

菓子パンコーナーで、ガサガサと目当ての物を探している男子がいたり。

「おばちゃん、焼きそばパンもうないの？」

「そこに無かったらもう無いよ　よく探してみな　」

「え　じゃあもう無いのかな　…」

特に変わったことも無い、高等部の食堂。

だが、視界の先に昼間はいないはずの存在を見つけて、時音は思わず弁当のおかずを取り落とした。

「おばちゃん、袋だけあったよ　」

「え　？」

「　　用事思い出した！」

少女が、慌てて弁当をバツクに放り込み、紙パツクのコーヒー牛乳を一気に飲み干す。

「　　どうしたの、時音？」

「ごめん、先行く！！」

まどかの声を後ろに聞きながら、時音は『不審な存在』　　ウロ
様を追って、食堂を飛び出す。

だが、昼時で混雑しているせいか、すぐに見失ってしまった。

（見失った…でも変ね…妖なら敷地内に侵入した時に気づくはずだけど…）

見逃してしまったことに焦燥を感じながら、銀髪の少女にきいてみるか…と、時音は仕方なくその場を後にした。

同じ頃、夜行本拠地では。

「……俺に、ですか？」

「限しか頼めないんだ」

夜行の長の部屋は、丸窓から光が入っているにも関わらず、どこか暗かった。

座卓に、正守と限が向かい合っている。

「それならあいつをどうして烏森任務から降ろさないんですか……？そんな危なっかしいヤツを……」

「お前があの子の側にいれば、ネリも馬鹿なことはいらないだろう…この処置は、あの子の為でもあるんだ、限。」

正守の顔は苦く、少年の目は困惑で揺れている。

それは、当然だろう。

なぜなら限は

「俺に、ネリを監視しろって言うんですか、頭領……！」

『少女の監視』 任務を言い渡されたから、である。

(8) ウロ様登場!!……面倒事は1つずつ来て欲しいものですネ

(前書き)

感謝!!4501ユニーク!!

お気に入り登録26件!!

とても、嬉しいです!

一人でも楽しみにしてくれる方がいる限り、書き続けます!!

原作を読んでいなくても分かるように、かといって説明がくどくならないようにしているつもりなのですが……

わかりづらい所など、ありましたら御一報よろしくお願いします)

o ^ ^ o)

(8) ウロ様登場!……面倒事は1つずつ来て欲しいものですネ

(楽しい給食の時間のハズが……)

良守は給食を食べながら、睡魔に襲われていた。

(眠い……すげえ眠い……)

口に運ぶスプーンの手は、今にも止まってしまいそうである。思春期の青少年は何かと眠いもの。夜中も家業をこなしている良守にとって、昼の日差しは殺人的だった。

(こりゃ 昼休みはいつもの場所で昼寝決定だな……)

スプーンをくわえたまま、なんととはなしに良守が廊下に目を向ける。すると、磨りガラスにあり得ない影が映った。

およそ人の影ではない大きなモノが、廊下を通っている。

ガタツと勢い良く立ち上がる良守。

ネリはその時お喋りに興じていたが、音のした方に顔を向けた。

(墨村君どうしたんだろう……?)

いきなり駆け出す良守に、担任の黒須が慌てて声を上げる。

「墨村、どこへ行く!?!」

「トイレ!」

少年がすぐに廊下に出たが、そこにはもう何も無かった。

クラスメートは特に良守の行動に関心が無いのか、何も変わらない。ネリと話していた生徒の方が、少女の返事がない事に、食事の手を止めた。

「ユリカちゃん?」

「あ、ごめん。何でもない。」

変なの、と銀髪の少女は深く考えず日本の美味しい給食を楽しむのだった。

昼休み

(良守に頼るのもな…ネリちゃんなら何か知ってるかしら…)

中等部の昇降口で、時音は壁に寄りかかっていた。式神を使っても良いのだが、なるべくなら人目のあるところで使いたく無い。

その時、銀髪の少女が心ここにあらずといった様子で、歩いてくるのが見えた。

「ネリちゃん!」

「わっ!?!…あ、時音さん…びっくりさせないで下さいよう…」

「ごめんごめん。ちょっと聞きたいことがあって」

時音が謝ると、ネリはきよとんとした。

「何かあつたんですか？」

「それが……学校の結界で感知出来なかった妖が、学校に入り込んだみたいなのよ……」

声を潜める時音に、思わずネリもつられて、小さい声になった。

「……それ、どんなのが見たんですか？」

まさか、と思いつつもネリは半分以上確信していた。

時音が自ら中等部に来るのは、後にも先にも『これ』以外無いのだ。

「ん チラツとしか見えなかったんだけど、大きくて丸くて……浴衣みたいのを着てたかな」

ネリは、ふう……と小さく息を吐いた。ついに来たか、という気分である。

「それ……ウロ様です……」

「ウロ様……？」

何それ、と時音が詰め寄ると、ネリは慌てて言った。

「全然害の無い、ここら辺の土地神様です。無色沼って所に住んでるんですけど……墨村君とお祖父さんで対処するはずですから、何

も心配いりませんよ」

「……でも、普通に食堂でパンを漁ってたんだけど」

時音が心配そうに言うが、銀髪の少女は気にも留めていない。

「逆に言えば、それくらいしかしませんし。今日は墨村君の家に帰るはずですから、ウロ様は放っておいて大丈夫です。」

「そう……」

感心した時音だったが、その分納得が出来なかった。

これほど物知りな彼女が、なぜ烏森を狙う妖の集団に関しては、だんまりを決め込むのか。

(何か訳があるのかしら……)

首を傾げつつもネリに礼を言い、時音は高等部に帰っていった。ネリも一人、教室に戻る。

時音のお陰で給食の時、良守の行動が変だったのにも納得がいった。ウロ様 came ということは、少なくとも3日後には黒芒楼から妖が来るはずである。

(ああ……頭領が今日までいればな〜私一人じゃ心配……)

いやいや、と少女は銀色の頭を振った。正守が近くにいたら、身動きが取れない。

それに、正守に火黒との決着を邪魔されては大変なのだ。

(本当に…寝る間も惜しんで修行しなきゃね)

烏森を守るために 限を守る為に。

授業だけは、平和に過ぎていった。

夜の帳しほが、烏森学園に舞い降りる。

氷蛾は裏山にある神社の境内で、夜空を眺めていた。

『今宵も主は烏森か…我も側に行けぬものかな……』

人型もとることが出来る氷蛾ひむぎは、確かに高位の妖であり知性も高い。だが、生きてきた年月は主君の少女よりも短い為、子供っぽいところがあった。

寂しい、怖い、というおおよそ妖とは思えぬ感情がある。

昼間にネリと話せるだけで、とても嬉しいのだ。

『はあ……。む?』

ピクリと、頭から伸びる2本の触覚が震える。頭をその方向に向けると、水色の髪がサラサラと肩からこぼれ落ちた。

『主が言っていたよりも早い……。』

感覚で探ればネリから聞いた通り、妖が3体と人間の臭いの妖が1体、来たようだ。

『主に報告せねば……。』

忠実な僕は、主君から与えられた足輪に力を籠めた。

夜の裏山に、黒いスーツで全身を包んだ一人の男が舞い降りた。黒髪の男の周りを、白い羽根がふわり、ふわりと舞っている。

「あれが烏森の地だ。今は学校になってるがね」

低い声は、確かに人間のようだったが、夜にも関わらずかけているサングラスは、異様だった。

「状況は話した通り、あそこで時間さえ稼げば、力は君達のものだ。」
舞っていた羽根が、3のつむじ風を起こし、それは3体の妖になった。

額に1つのほくろを持つ一月。2つのほくろを持つ二月。3つ持つ三月。

額のほくろ以外は判別出来ないほど似ている、三つ子のような妖で

ある。

少女には程遠い、かといって獰猛な瞳は老婆でもない。

サングラスの男の腰に少し届かない程度の身長なのに、三つ子の一人は凄みを乗せた声で言った。

『暴れていいんだな。』

「構わないよ。私の言ったことさえ守ってくればね」

群青色に染まってきた空で、小さな白い蛾が羽ばたいていたが、誰も気がつくものは無かった。

夕飯を食べ終わって早々に、結界師達は烏森の異変を感じた。

「お、今日は早いな」

「一度に数匹来よったか」

繁守の言う通り、こんな早い時間に複数一度に来るのは、少し珍しかった。

そして、雪村家で時音もまた、急いで着物に着替えていた。

「ネリちゃん、まだかかりそう？」

「すみません！直接行くので、時音さんは先に行ってください
！」

「…そう？分かった、先行くわね」

タツタツと、時音の足音が小さくなって消えていく。

一方ネリは、背中に冷や汗をかいていた。氷蛾から早速連絡があったのだ。

(嘘でしょ……？まだウ口様の寝床直しさえ終わっていないのに……)
歴史の順番まで前後しかけている。これでは、ネリの知識もそろそろ通用しなくなるかもしれない。

「早く私が黒芒楼に行って…火黒をどうにかしなきゃ……」

ブツブツと、自分でも知らない内に口に出していたネリだったが、本人にその自覚は無い。

空間を繋いで、学校へと直接向かう。

空間の切れ目が閉じた後、扉の前にいた人間も……長い髪を翻して、静かにその場を後にするのだった。

「いたか？斑尾」

『……妙だね、違う方向から同じ妖の臭いがする』

一足先に烏森に着いた良守は、相棒の言葉に眉を寄せた。

「そりゃ一体どういう……」

ちょうどその時小学生ほどの、着物を着た妖が、すい…と空中を横切る。

「あー!!」

『良守、他にもいるからね、さっさと仕留めな!』

「わかってる!」

修行は怠らない良守は、結界を使って空中に飛び上がった。

形成のタイミングをいじれば、トランポリンの要領で、身体を空中に打ち出すことが出来るのだ。

「待ちやがれ! 結!」

だが、大きな結界は妖にかすりもしなかった。

「……」

『うわあへたくソ。あんな大きな結界でかすりもしないよ。』

斑尾が呆れた声を出す。

ネリが校舎の窓から現れたのはその時だった。運悪くちょうど、妖と正面に向かい合う形で鏡渡りをしてしまったのだ。

「あ……………ども」

『……………』

何故だか挨拶してしまったネリに馬鹿にする様な目を向けて、妖は長い髪をなびかせて飛んでいってしまった。

「あちゃー……………」

「おい、ネリ！！」

すぐ側まで来た良守は、眉をひそめて少女を見る。

「……………もしかして寝ぼけてる？」

「ち、違います……………あ、そうだ。あの妖は身体を細分化して攻撃してくるので、一応盾をつけときますね」

ポポン、と10個ほどの漆黒の球体が、少年の頭上に滞空する。

「……………分かった」

「じゃあ私、時音さんの方に行ってますね。気配消しますけど、心配しないでください。」

「おう」

(“ 拒絶” 空間創造)

少女を中心に、漆黒の立方体が現れる。

人間は光が無ければ、対象を知覚出来ない生き物だ。少女に反射する光を全て “ 拒絶 ” すれば、誰にも知覚されることは無い。

「消えた!？」

『つくづく常識破りな子だね』

立方体の中にいるまま、斑尾と良守の声を聞いた後、ネリはその場を後にした。なるべくなら、どこかで見ている監視者に、見られなくなかったのだ。

「……………で、氷蛾。監視は今どこにいるの?」

私は、蛾の姿で学校の上空にいる。主の言っていた『人間』は、体育館横の屋上におるぞ

「……………ありがとう、助かったよ。」

やはりすぐ近くにいたらしい。今、良守は高等部の校舎裏、住宅街と山に面した所で追いかけてっこをしていたのだ。

「その『人間』の後ろを取るよ。…………一応マーキングしていた方がいいかもしれないし」

分かった。我也見ているが気を付けよ、主。

水蛾と腕輪越しに意志疎通した後、空駆けを発動した。

校庭に現れた後、息をひそめてゆっくりと屋上の高さまで飛ぶ。

(さて……気づかれないようにしなきゃ……)

妖は総じて感覚が鋭い。目線を合わせたり、余計な感覚　驚き、恐れ、興奮　などを発すれば、まず間違いなく気配を悟られるだろう。

(怖いから距離を取ろうっと)

人影を視認できる角度まで高度を上げると、次いで斜め左下にゆっくり進んだ。

これで、スーツ姿の『人間』と同じ屋上にいることになる。

幸い男は結界師の術に興味があるようで、ネリに気がついていないようだった。

ネリはごくりと唾を飲み込み、実験済みの“マーキング”の行動に移った。

手順は簡単。

意識の糸を男の革靴の裏に貼り付けるだけである。

(人皮越しだから、気づかないことに祈ろう)

さすがに直接触れるのは怖いので、男の足下に輪にした意識の糸を

ばらまく。
直径1センチ程の輪っかは無色透明、チューイングガムの様に離れない代物だ。

500個ほど散らしたので、まず間違いなく踏むだろう。

(じゃあ次は時音さんかな)

ふわり、と舞い上がった時、男がくつくつと笑った。

気づかれたかと思い、ネリの体が縮み上がる。

「これは面白い。……まあいいだろう。お許しを出してやるよ」

男は屋上のフェンスから距離を取り、花火玉を上空に放り投げる。

烏森学園に花火が上がリ 開戦の合図となった。

(9) ちなみに私はフクロウ大好きです (前書き)

感謝!! 5680ユニーク!!

お気に入り登録30件!!

本当に励みになります。大学の授業が21時30まであるので、今の内に投稿しちゃいます!

簿記講座……ああ、疲れるなあ……

(9) ちなみに私はフクロウ大好きです

妖は、理性的な考えを嫌う。

壊したい物を壊し、喰らいたい物を喰らう、本能的な生き物だ。

地中・地上・空中の持ち場内で、攻撃はせずに逃げ回ること。
合図があれば、その後は自由に行動して良い

三つ子 白羽児（はいつい）に課せられた任は、妖にとって考えられない行動だった。

くだらん、と吐き捨てる三つ子だったが、お目付け役には逆らえない。

『…こんな人間の餓鬼にナメられて黙っているほど……俺は気が長くない。』

良守の結界で、左腕と両足を潰され、三つ子の一人、一月（いちげ）は怒り心頭だった。

再生するにしても、痛覚はある。そして、こんな非力な“餓鬼”にコケにされたこと自体が、妖は許せなかった。

一月の顔に、ビキビキと紋様が浮かび上がる。変化が始まったのだ。

烏森の情報収集に来たスーツ姿の男は、それを見て興味深げに笑う。

「これは面白い。」

男の予想では、烏森に近いほど力を得られると考えていた。だが、上空にいる見張りの妖は、地中と地上の白羽児が未だ変化していないことを表している。

時間でも、距離でも無い。何か別の条件が、妖に力を与えているのだ。

「まあいいだろう。お許しを出してやるよ。」

およそ人間とは思えない腕の力で、男の持っていた花火は空高く上がった。

ネリが気を引き締める。

(いよいよ始まる………！)

だが急に銀髪の少女は、言い知れぬ不安に襲われた。

時音は、多重結界の存在をおそらく知らない。すると、今回の戦法が大きく変わるといふことにはならないだろうか。

(時音さんの弱い結界じゃ、妖の攻撃を防げない………！?)

大変だ！とネリは慌てて立方体ごと飛び上がった。だが、慌てたせいでフェンスを少し揺らしてしまう。

「誰だ……！」

(わ、やばー！)

思わず屋上に戻ってしまい、ネリは舌打ちしたい気分だった。スーッ姿の男は、油断なく辺りに目をやる。

「そつえばさつきから、妖混じりの娘が見当たらなかったな……」

男の視線が、何度も少女を素通りする。カツ、カツ、と屋上に足音が響き渡る。

(やばいやばい！！　　つてか私、落ち着け！！)

こんな狭い所では、見つかるのも時間の問題である。早く逃げたいのに、目の前の敵が怖くて目をそらせない。

その時、少女の頭の中で、何かが囁いた。

殺してしまう方が、楽しげかしら。

(……！？)

己の思考に、自分自身で悪寒が走る。こんな物騒な考えを、いつから自分はするようになったのか。

「出てこい。近くにいるのは分かっている。」

『……これはこれは……すまぬなあ』

瞬間、ネリの目の前で青い煙が収縮した。

「……………妖か？」

『邪魔をするつもりは無かったのだがな。……………面白そうでつい見に来てしまった』

青い煙はすぐに人の形を取り始め、純白の羽を広げた姿になった。言わずもがな、主の危機に飛び出した氷蛾である。

（ひ、氷蛾！？）

「……………何者だ」

『ただの通りすがりだ。邪魔はせぬ。それよりもお主、その皮はどこで手に入れた？』

「貴様には関係ない。」

てつきり戦闘が始まるかと身構えたネリだったが、男が刃を向けることは無かった。

少女は知らない。

氷蛾の持つ妖気がどれほど強く、放つ毒がどれほど危険か。

明らかな格の違いに、人皮を被っている妖の男は攻撃を諦めたのだ。氷蛾に攻撃の意志が無いなら尚更、無用な争いは避けるべきでもある。

そういう考えをするように、教育された妖であった。

『良いではないか、滅るものでも無し。邪気も全く感じない、優れたもの。我も欲しい』

(何言ってるの、氷蛾!?)

氷蛾の真意を図りかねて、ネリが拒絶空間の中で固唾を飲む。スーツ姿の男は、横目で三つ子の一人が倒されたのを見て、苦い顔をした。

だが、目の前の蛾にも少し興味を持った。

「なんだ、お前も人間になりたいクチか」

『うむ。昼間に学校へ通ってみたい』

氷蛾の本心に少女は、逃げることも忘れて口をあんどぐり開けた。

(はあっ!?!何考えてんの!?!)

氷蛾の背中しか見えない少女だったが、彼が嘘をついていないのは、手にとるように分かる。

第一、嘘がつけるほど心が成長していない。

「お前を上司に推薦しておこう。それで良いだろ、もう邪魔をするな」

『うむ。頼んだぞ』

氷蛾は後ろ手で、ネリがいる立方体にそっと触れる。それは安心し

てくれ、というサインのようだった。

氷蛾の助けで何とか自分を取り戻したネリは、今度は慎重に屋上を後にする。

ちようど二体の妖が合体するところで、ネリは急遽時音の背後の茂みで空間を解除した。

いきなり現れた少女に、雪村の妖犬　白尾が振り向く。

『ネリリンじゃねえか！どこにいたんだよ今まで！！』

「え、ネリちゃん！？」

「すみません、遅くなりました。」

時音のすぐ後ろまで駆け寄り、ネリは攻撃を防ぐドーム状の盾を展開した。もちろん、20個ほど待機させてある。

「監視の方は印をつけました。見失うことはありません。……時音さん、多重結界はご存知ですか？」

妖の妖気がどんどん上がっていき、見上げるほど大きな一匹のフクロウになった。胸に二重のV字があるのが、合体する前の名残であるろう。

そしてフクロウはおもむろに両翼を広げ、突風を巻き起こした。

だが、結界師二人にはネリの加護がある。

「ええ、合体する前の妖はそれで倒したわ」

意外な答えに、ネリが驚く。自力でたどり着いたのか、と少々失礼な考えが浮かんだ。そんな気持ちが表情に現れていたのか、時音が苦笑いする。

「あたしだって強度をカバーする方法、毎日考えてるわよ」

ドガガガッ！と、今度は羽一枚一枚を尖った楔に変えて打ち出してきた。

斜め方向からなので、結界師二人が動けるように、半球状の盾は背面を少し開けてある。

『…………ふ。』

巨大なフクロウは木々を軒並みズタズタにした後、邪悪に目を細めた。

『やっと見晴らしが良くなった…………次はしっかり狙ってやろう。』

ネリは、ここまでお膳立てしておけば大丈夫と分かっているのに、後ろに下がった。

「時音さん。私、監視の方を見張ってます」

「…………分かった。別の妖がうるついでるみたいだから、気を付けてね」

「…………はい。」

それは私の部下ですと言いたかったが、結局何も言わずに下がる。隠れる場所がないので、そのまま学校外へ空間転移で、少女は姿を消した。

「あの娘…消えた？」

フェンスに掴みかかる勢いで、スーツ姿の男は攻防戦を見ていた。銀髪の少女は遠目からでもよく見える。だが、その少女は、突然現れた裂け目の中に消えたのだ。

「妖混じりの娘……あの盾は何だ？あれだけで攻撃を全て防いだのか……？」

銀の娘はほんのわずかしかなかったが、また別行動を始めたようだ。

まるで自重しているかのような動きに、男は訳が分からなかった。そんな男をよそに、巨大フクロウは人間二人を攻撃し始める。

良守は、攻撃を自分の結界で防ぎながら、幼なじみに話しかけた。

「あいつ結局、飛ばしてきてんの体の一部だろ？羽を戻したとこ丸ごと叩くしかないと思うんだけど……」

どう思う？ときかれて、時音は瞠目した。

「そりゃ…それが一番手っ取り早いけど……」

「じゃ、ちょっと手伝ってくれる？」

地上に刺さった無数の楔が、羽根となってフクロウに戻り始める。

男は、冷静に分析しながら銀髪の少女のことを考えていた。

（妖混じり……それほど戦闘力は高くない娘だったのか……。そうではなくては別行動の意味が通らない。）

まさか、自分を捕まえる為とは夢にも思わない男は、結末の見え始めた勝負にほくそ笑む。

所詮、人間の小僧と娘なのだ。力の底はたかが知れている。

（上が慎重になる理由がわからんな。土地は我々の味方じゃないか……）

「結！」

その時、3重の小さな結界が、フクロウの頭を空中に縫い止めた。時音である。

『……………ぐ…何を…小賢しい！』

フクロウが動けない隙に、良守の結界が形成を始める。

「方囲、定礎、結！」

『!?!?』

させまいと、フクロウは身体を羽根に細分化し始める。だが、良守の方が早かった。

「滅!」

『!?!?』

バタバタと、首無しのフクロウが空中で羽を動かす。

妖は、体の一部が残ってさえいれば再生出来る。白羽児も、頭を再生させようと、攻撃に変じていた羽根を回収し始めた。

そして、それが良守の狙いだった。

「方囲、定礎……………結!!!」

頭ごと目を潰されて周りが把握出来ないフクロウを、体ごと全て結界で囲む。

屋上で男は息を呑んだ。

(何!?!あの小僧、まだあんな力が……………!!)

もちろんフクロウも、身の危険を察知し、結界を破ろうと暴れ始めた。結界は、安定した状態でないと、滅することは出来ないのだ。

「ぐっ……………!時音!あれどうやんだ?」

「え？」

「あの三重のやつ！あれ、結界強くなんだろ？」

少年の額に汗がにじむ。暴れる妖をねじ伏せるのは、術者に多大な負荷がかかるのだ。

（今いきなりあれを教えても…それよりあたしが多重結界で援護して…でももう力が…）

フクロウが、両翼を細かな羽根に変えて、楔を形成し始める。それはまるで一つ一つが、『矢』のようであった。

時音さんの矢があれば、妖は倒せます

ほんの昨日、交わしたネリの言葉がよみがえる。

（……………矢？）

「良守！あなたに小細工は必要ない。1つの結界に集中しな！援護する。タイミングを逃すんじゃないよ」

（分かった、私に出来るのは鋭く研ぎ澄ませること…………）

方囲、定礎

暴れるフクロウの周り　上下、左右、前後に、十数個の小さな四角が浮かび上がる。それらは、全て対面上に向かい合っている。

力だけが強さではない、時音はそのことに気がついたのだ。
パワー

(研ぎ澄ませて……………貫く!!)

「結!!」

『!?!』

良守の結界の中で、フクロウが細い結界で串刺しにされ、動きを止める。それが、白羽児の命取りとなった。

良守の結界が、ピン、と安定する。

(いける!!)

「 滅!!」

屋上で男が驚きの声をあげるが、誰もそれに気がついた者は、いなかった ……

(9) ちなみに私はフクロウ大好きです (後書き)

もちろん明日も投稿しますけどね (*^o^*)

(10) 氷蛾はネリと一緒にいたい、甘えん坊です

「 出ておいで、氷蛾」

『 主！』

裏山の神社に現れたネリを迎えた氷蛾は、満面の笑みで主に近づいた。

『主。我は、初めて主の役に立てただろうか？』

「 ……うん、そうだね」

触覚を震わせて、目を輝かせている妖に、ネリは頭を抱えた。お説教する気も失せたのだ。

「さっき言ってた、昼間に学校通ってみたい……って、どういう意味？」

『 ……？ああ、あれはだな。 ……我は主の側に少しでも長くいたいのだ。だが、我はあの場所へ入ったら結界師に殺されてしまうのであるっ？』

少し悲しそうに言う氷蛾に、ネリは肩の力を抜く。結局の所、ただそれだけなのだ。

本気で人間になりたい、というのではなく主の側にいたいというだけ。

昼間の学校で、人間を喰らいたい……とかでも無いのだ。

(でもこの子は妖。それを忘れてはいけない)

『……して学校の方は良いのか？何やら梟ふくろうが暴れておったが……』

「ああ、あれ。いいのいいの。時音さん達でちゃんと退治出来るから。それよりも、問題は私達の方だからね」

誰もいない裏山の神社で、銀髪の少女と水色の髪の青年が今後の打ち合わせをする。

心がまだ十分に発達していない氷蛾にとって、とても心踊る一時だった。

(娘の力をみくびっていたか……細長い結界で串刺し……そんな使い方をしてくるとは……そして小僧の底知れぬパワー……)

スーツ姿の男は、地上の少年少女をじっと見ていた。

あと一步の所で烏森が制圧出来たのに、未熟とはいえ結界師の力は侮れないらしい。

400年の歴史は、伊達ではなかった。

（フン、まあいい。あいつらは捨て駒だからな……間近で観察して十分な収穫は得た。全く問題ない）

物足りないのが妖混じりの娘だが、積極的に戦闘に参加しない所を見る限り、驚異ではないのだろう。

（今は少しずつ……だがいずれ、この地は我々のものになる……）

上司に報告するまでが、この男の仕事である。貴重な現地情報は、目標達成の為に必要なのだ。

男が己の成果に満足して気が弛んだ時、後ろで羽音がした。

「……！！」

驚異的な反射神経でその男は、鳩　　雪村家の白い式神を真つ二つに切った。

男が被っている『皮』を突き破って出てきたそれは、鞭のようである。

考えるよりも先に体が動いた男は、焦りと驚愕に顔を歪ませた。

（話が違つ、この結界は、人間を感知しないはずじゃなかったのか！？）

右手の中指付け根辺りから飛び出た、鋭い鞭のような爪は、男の『本体』である。穴を開けてしまった今となつては、外に邪気が漏れてしまっただろう。

(そうか、あの妖犬が……単純なミスだ、まだ正体まではバレてないだろうが、なんにしる今ので気づかれた……早くここを出なくては……)

めまぐるしく頭を回転させ、男が足を踏み出した時　　顔の右半分がドロリと溶けた。

「……………!?ばかな……………!」

カラン、とかけていたサングラスが音を立てる。

人皮　中に入っている妖の邪気、妖気を閉じ込め、昼間でも活動できるように開発された、人口の器^{からだ}。

妖がこれを着れば、人間の中に紛れ込む事が出来るのだが。

(リミットまではまだ間があるはず……………!これも烏森の力の作用なのか!?やはりもう少し調べる必要が……………)

「そこで何してる」

男の思考は少年の声で中断させられた。地上で戦っていた結界師、良守である。

「……………」

男の決断は早かった。

目にも止まらぬ速さでフェンスの上を駆け上がったかと思うと、腕を『本物の』腕を体育館の屋根に伸ばした。

「おい！」

伸縮自在の腕で、屋根の縁を掴むと、男の体が宙に打ち出される。

「待てコ……！？」

男の右肩を突き破って出てきた『腕』に、良守は目を見張った。

「あいつ絶対人間じゃねーだろ！？」

結界を足場に空中を駆け抜ける良守。スーッ姿の男は、体育館を飛び越えプールサイドを走り抜けた。その目の前には 裏山。

「待ちやがれ！！ 結！！結！！」

何とか捕まえようとするが、細かい座標指定は良守が苦手とすることだ。

男の足が止まることは無い。

「だ もう！！ヘッタクソ！なんだよ、俺！？」

プールサイドのフェンスに飛び上がった男は、『腕』をくくつと後ろに引いた。

明らかにタメが長いを見て、良守に緊張が走る。

案の定、男は田んぼも畑もある山までの長い距離を、腕一本で飛び越えた。生い茂る木々の中に消えていく男に、良守は目を見開く。

(どこまで伸びるんだよ、あの腕!?)

対して、男はとてつもない疲労を抱えつつ、木に寄りかかって息を整えていた。

(距離は取れた、これですぐ撒けるはず……)

だが、男の考えは甘かった。

「逃がすかよ

結けえつううう!!!」

「なっ……!!」

巨大フクロウの時とは比べ物にならない大きさの結界が、男ごと木々を囲んだ。

男の位置からでは、結界の端が視認出来ないほど巨大な、結界。

「く…あの小僧、あれだけやってまだこんな力が残っているのか…!?!」

荒い息の下、男が舌打ちする。男は　この妖は、知能が高いことを買われて黒芒楼に所属していた。戦闘は専門外なのだ。

男の任務は、烏森の情報を上司に　白ちやくに届けること。ここ捕まるわけにはいかない。

(調べでは、奴らの結界は斬撃に弱い……ならば…)

スーツ姿の肩から飛び出る妖の腕が、ミシミシと音をたてて隆起す

る。

（最大限に尖らせた切っ先に、渾身の力とスピードを乗せる……！）

妖の腕が周囲の木ごと、結界を横に輪切りにする。

地面が揺れ、地響きが起こる。

結界師の少年は、慌てて新たな結界の中に避難した。

「フ ……あぶねーあぶねー。」

土煙をあげて倒れた木々を下に、良守は空中で息を吐く。その後ろで、妖がその姿を表した。

黒髪でスーツ姿、ネクタイまで律儀に締めた格好はまさに人間。だが、右腕があるはずの場所にあるのは、気色悪い妖の腕だった。

人間とも妖とも言えない、何とも不気味な姿に良守は、その表情を険しくさせた。

「……お前、何者だ」

「……」

妖が答えることはない。返事の代わりに言わんばかりに、妖の腕に力が籠められる。

（来る！）

良守が右手を構えるのと同時に、男の右腕が伸びる。少年は咄嗟に、

攻撃を邪魔すべく、軌道を結界で逸らした。

スーツ姿の男が、こんな場合でも冷静に分析する。

（自身の防御よりこちらの動きを止めに来たか……だが）

結界で軌道を変えられた腕が、しなる。

（この腕は、いくらでも伸び、曲がる！！）

本来関節がある腕は、軌道を変えられた時点で引つ込められるはずである。だが、不穏な気配に良守は結界を解除して背面から倒れ込んだ。その目と鼻の先を、男の爪が薙ぐ。

男は、本日何度目か知れない舌打ちを漏らした。

（はずした！！とっさに結界を崩して逃げやがった…）

空中で身体をひねり、猫の様に地面に降り立った少年は、その場に止まらない。

さらなる妖の腕の追撃までかわしてみせた。

（この小僧、反応が早い…戦いのテンションが上がるほど強くなるタイプか…？）

戦闘は専門外の妖にとって、最悪の相性である。こういう敵を相手取る場合は、奇襲が最も適しているのだが、状況がそれを許さない。

人皮のリミットも迫っているし、何より疲労感が男を想像以上にむしばんでいるのだ。

男は、一か八か、最後の力を振り絞った。

「オオオオオオオオオオ!!!」

嫌な音を立てる右腕。今にも止まりそうな疲れた身体。

男は、戦いに無理矢理終止符を打った。

良守の顔が青ざめる。

「うわあああ!?!木を蹴散らして向かって来るう!?!」

派手に空を舞う木々に紛れて、男が姿を消す。距離を取って空中に避難した少年は、土煙がおさまってからハツとした。

「……………って、あれ?あいつ……………どこ行った?」

まんまと結界師から逃げおおせた男であった。

だが、この戦いを遠くから観察していた存在に、男も良守も気づくことはとうとう無かった……………。

「行くよ、氷蛾」

承知、気を付けよ、主

ネリは黒い立方体の中、姿が見えなくなった男に意識を集中させた。男の革靴に貼り付いた『印』は、きちんと役割を果たしているよう

だ。

「速度はゆっくりだけど……動きに迷いが無いね」

うむ。山の中…枯れた川原を目指しておるのではないか？

蛾の姿で、違う角度から男を追う氷蛾は周囲にも気を配っていた。万が一にも、主の少女が危険な目に合わないよう、絶えず目を光らせている。

「夜が更けてきたな……」

町の明かりもはるか遠くで、見渡す限りの山である。

白羽兎が来たのが早かったので、まだ真夜中にすらなっていないのだ。眠れない少女にとっては、なんの問題も無いのだが。

関係の無いことをつらつらと考えていると、氷蛾の緊張が伝わって来た。

待ち人（妖）の登場である。

男は、だらしなく伸びた右腕を地面に引きずっていた。少年を撒いたは良いものの、疲労感が凄まじい。獣道がこんなに歩きづらいだなんて、久々に思い知った気分だった。

（力を使いすぎたか…）

「その状態では城まで保たんだろう」

「白様！」

疲労困憊ひんがうこんぱうの妖の前に、もう一人スーツ姿の男性が立った。

白髪を長く伸ばし、前髪を左目が隠れるように寄せている。この男こそが、黒芒楼幹部の一人　　実質組織を動かす要かなめの人物だった。ネリが危惧している、虫使いである。

「白様！も、申し訳ありません！奴ら意外にやりました…しかしなかなか面白いデータが採れましたので、ぜひとも早くご報告したいと…」

「いや、いい。」

白は、何でもないことのようにのたまった。顔の半分が溶けた男が、間抜けな顔をする。

「え？」

「蟲に聞く」

白の左目が露になる。そのおぞましい眼球から不可視の力が、部下に発せられた。ただでさえ疲れて動けないのに、男の体がギチッと固まった。

「！？」

白が、部下の額をとん、とつつくとそこから、長い尾の蟲がキュルキュルと出てくる。それは、直ぐに禍々しい左目に吸い込まれた。

続いて、極めて事務的に、小さな箱を開けて部下の人皮を回収する。男の中身 妖の本体が露になったが、それはピクリともしなかった。

目の前の上司を、信じられないという風に見るだけである。

「ああ、お前に打った増強剤だが、まだ開発中でね。極限まで力を使うと、体に修復出来ない程のダメージを負う。」

ドシャ、と妖が地面に倒れ伏す。白は、振り返りもせず一言、労いの言葉を口にした。

「研究への犠牲、感謝する」

非情な虫使いは、その場を悠然と後にするのだった。

(11) 原作から外れた子と死ぬはずの妖 ちよつと可哀想ですよね!?! 白ひび

感謝!! 6000ユニーク!!

お気に入り登録32件!!

本当にありがとうございます。

今回時音が腹黒い……

でも、人間だったらこう考えるかなと思いました。

もうそろそろ、懐かしい人が登場します~

(11) 原作から外れた子と死ぬはずの妖 ちよつと可哀想ですよね!?! 白ひび

「とりあえず手がかりになりそうな物は……」

裏山から降りてきた良守は、時音と合流した。地面に今日の成果を並べる。

時音が屋上で拾ったサングラスと、斑尾が上空で捕まえた偵察用の妖。

そして ……

「ねえ…それすごく気持ち悪いんだけど」

「俺だつて気持ち悪いよ!でもこれが一番有力な品だろ」

良守は『それ』を手にとつた。外見は人間の手……先程の男の右腕である。

中指から、まるで脱皮したかの様に綺麗な皮だ。

「あいつ…人間じゃないと思う。でも、今までの妖とは何か違う…」

「人の姿をしてたんでしょ?」

「うん、大体は。でも中身は違うものが入ってそうな感じ。ホラ、

「コレの皮みたいだし」

時音は直接見ていないので、男の事は知らない。だが、ネリの言う通りに良守が、生きた手がかりを捕まえ損ねた事を考えていた。

「今はネリちゃんに任せましょう。確かな事が分かったら教えてくれるわよ」

「……………」

良守は、正守の言葉を思い出していた。異世界から来たという、浮世離れたネリの話を。

そんな胡散臭い存在が、大事な時音の家で寝起きしているのだ。

正守から口止めもされていないし、良守は恐る恐る幼なじみを仰ぎ見た。

「あいつさあ……………その……………兄貴から聞いたんだけど……………」

「何を？」

きよとん、とした時音にかける上手い言葉が見つからない。

到底信じられない話を、どうやって伝えれば良いのか分からなかった。

言葉を待つ時音に、良守は意を決して叫ぶように言った。

「あ、あいつが世界を越えて来たって言うたら……………信じる？」

「……」

時音の反応は驚愕でも無く、呆れでも無く……無表情だった。

「そう……あんたも知ったのね。確かにネリちゃんは、この世界の人間じゃない……本人がそう言ってた」

「知ってて家に泊めてたのかよ!？」

「ええ」

時音は事も無さげに頷いた。白尾と斑尾は、初めて聞く事実を目を丸くしている。

「あの子の未来予知は、あたし達に有利に働く。あの子がこちらにいる限り、敵に先手が打てるの。この意味、あんたにも分かるでしょ?」

時音は、やはり雪村時子の孫だった。冷静に、私情と割りきって物事を見ることが出来る。完全ではないが。

その真剣な表情に、良守は緊張したように唾を飲み込んだ。

「ネリちゃんがこちらにいる限り、烏森くしんが負ける事は無いのよ」

この不安定で、計り知れない力を持つ烏森にとって、これほど心強い存在は無い。

身元が不確かという致命的な欠点を、補って余りある利点である。

だから、正守はギリギリまで良守に、少女の事を隠した。
なぜなら、良守はどうしようもなく優しいから。

「そんな…、あいつを利用してしようと最初から思ってたのか…？」

「利用じゃない。交換条件よ。私達があの子の事を追求しない代わりに、あの子に未来を話してもらおう。」

未来を知っているネリを味方につけるのは、この世界の命運を手に入れたのと同じ意味である。だから、時音は目をつぶった。

少女の行動をそれとなく見張り、言動を注意深く観察することの意味を理解したからだ。

だが、14歳の良守には酷な内容だった。

「あいつをただのデータバンクとして見てたってことか!？」

「良守、そりゃ違う。」

斑尾が口を挟んだ。

「未来つてのはね、そう簡単なモンじゃない。人間の生き死にを握るのと同じことなのさ。あのネリって子は、それを最初分かっていなかった。」

500年生きてきた化け犬は、遠い目をした。

「あの子が自分の立ち位置を決めた瞬間、この世界はどっちにも転ぶんだよ。」

破滅の未来か、或いは平穏な世界か。

『だから、こっちに繋いでおかなきゃいけないのさ。どんな手を使ってもね』

ネリ自身が、自分の価値に気がつくのはまだまだ先だった…。

「うわ…酷いや…」

白に見捨てられた妖の前に降り立つと、氷蛾はそれを挟んだ反対側に立った。

状態を確認して、ため息をつく。

『主……これはもう無駄だ。もう完全に細胞が痛みきっている。あと幾ばくももたぬだろう』

だが、ネリは無言で妖狐化した。紫の炎が少女の気持ちを表す様に、燃え上がる。

『死なせはしない。全力を尽くす』

少女の両手から束になった糸が伸びて、妖を包む。ネリの藍色の瞳は妖を見ていかなかった。氷蛾の言葉が、ある“毒使い”のものと重なって聞こえたのだ。

妖混じりと言ってもベースは人間だ。妖に比べりゃ痛みやす

い。完全変化が禁止されている理由の一つだ。

『……………主？』

一番活性化するはずの傷周りの細胞がやけに鈍い。……………助からねえぞ。

『死なせない……………死なせるものか。』

起こるかもしれない最悪の未来に、目の前が見えなくなる。その余裕の無い主の様子に、氷蛾の方が面食らった。まるで魂を削るように、少女が妖力を与え始めたからだ。

『主！？力を抑えよ！！このままでは……………』

『……………私に指図するな』

『……………！？』

底冷えするような少女の声に、青年が固まる。その間にも、ネリの妖力が男に流れ込む。

『周囲を見張れ。私は集中する。話しかけるな』

『……………。』

無言で羽根を広げ、飛び立つ氷蛾をよそに、銀髪の少女が妖に妖力を注ぎ込む。

少女は怖かった。

未来を変えると言いながら、未来あいたが読めなくなるのが。寸前まで変えるべきでは無いのか、烏森襲撃の夜に限を隔離でもする方が良いのか。

火黒を、自分ごときが倒せるのか

『たとえば嫌われたって ……』

嫌われても、蔑まれても、志々尾限は殺させない。どんな手を使っても、助けてみせる。

『私の治癒能力の、実験台になってもらうからな……!!』

ドン、とありつたけの妖力を、死にかけの妖にぶちこむ。

氷の海に飛び込んだかの様に、肌がひきつり感覚が麻痺する。

それでも、ネリは勢いを弛めなかった。

すると死の淵に足をかけていた妖に、生氣が戻り始めた。

『……………』

ビクッ、と体が震え、特に痛んでいた右腕が動き始める。

そこまで確認した所で少女は、妖力の勢いを少し抑えた。妖の目がうつすらと開かれる。

『気がついた?』

優しく声をかけると、妖の瞳がゆるゆると少女に向いた。紅い瞳である。

『おま…えは、』

『喋るな。……さっきまで死にかけてたんだからね』

荒々しい言葉遣いを引っ込める。妖狐化すると、性格や言動が荒っぽくなるのだ。まるで、自分ではないように。

『なぜ……助…けた』

『ん〜実験？あと、可哀想だったし。』

そうこうしている間にも、妖の肉体は細胞レベルで妖力が満ちていく。まだ体はそれほど動かせないのか、妖は横倒しだったのを、ごろりと仰向けに転がった。

『敵に、情けをかけたと……仲間に知られれば……まずいんじゃないか……？』

『まあ……確かにね。でも良いの。あなたにやってもらうことがあるから、交換条件。』

妖は、やはりかと内心冷めた笑みを漏らした。拷問にでもかけるつもりなのだろう。誰が口を割るか、と鼻で笑った。

だが、銀髪の少女の言葉は妖の予想の斜め上をゆくものだった。

『藍緋さんに、渡してもらいたい物があるんだけど……彼女に届けてくれない？』

『な……！？』

ガバツと跳ね起きる。少女の言葉に耳を疑った。まるでおつかいを頼むかのような軽い調子である。

『お前……なぜこちらの……』

『質問は良いの。藍緋さんの蟲をとってあげただけなんだよ、私は。だって可哀想じゃん』

けろりと言う少女に、妖は言葉を失った。まるで千里眼を持っている様な物言いである。

烏森でデータが取れなかっただけに、この妖の性さがか、少女に興味が沸いた。

『お前が要求するのはそれだけか』

『ん……最初はあなたに黒芒楼まで案内してもらおうと思ったんだけど……必要無くなっちゃったし』

理由は、白が回収してしまった人皮である。あれには、ネリの意識の糸がついているのだ。

『もう白は……入口をくぐったね。気配が追えなくなったし、不自然な所で消えたから』

目を伏せて集中したネリは、若干血の気が失せた顔で妖を見る。

もう大丈夫だと判断し、ネリは繋いでいた糸を切った。同時に妖力の譲渡も途切れる。

座ったままの妖を見て、ネリは漆黒の飴玉のような物を2つ、作り出した。

『あなたが白にこれまで通りの忠誠を捧げるといふのなら……まあ止めはしないけど。それは、バカだと思っよう？』

『 ツー！』

まさに今、それを悩んでいたのか妖が顔を背けた。たてがみが揺れる。

『だってさ、知能も高くて藍緋さんの教育を受けたエリートを、白羽児と同じく捨て駒にしたんだよ？それでもあいつに仕えるの？また蟲を頭に入れられて？』

畳み掛けるように言うと、ネリは妖の目の前に、指に挟んだ小さな球体2つを突き出した。妖の目がそれに吸い寄せられる。

ネリはニンマリと笑った。

『蟲を取る、特效薬だよ。口に含むだけで、蟲を身体の中から引きずり出す事が出来る』

多分痛いけどね、と言いつつもその2つを妖の手に落とす。呆然とそれを受け取る妖に、ネリは尚も言葉を重ねた。

『味方になれとは言わない。敵になっても良い。……あなたなんて、私の敵じゃ無いしね。』

辛辣な言葉に、妖が唇を噛む。少女の妖気で、既になわなないと思いつていたのだろう。頭の良い妖なら尚更である。

『ただあなたにやってもらいたいのはその飴を藍緋に届けて、彼女を蟲から解放すること。私が外に連れ出してあげても良い、と伝えて。』

『なぜそこまで……』

妖が、傍らに立つ少女に目を向ける。藍色の瞳は、どこか遠くを見ていた。白い顔が夜闇に浮き上がっている。

『皆が笑える未来を創るために。人間も妖も、皆……』

ぐらり、と少女の体が傾ぐ。それを支えたのは、紺の着物の袖だった。

妖の目が見開かれる。

『貴様は……さっきの』

『お前といると面白いことばかり起きるのだな。この人間は我がもらって良いだろう？』

氷蛾は軽々と少女の膝裏を片手で抱えると、腕に座らせるように抱き上げた。絶えず笑みを浮かべたその端整な顔は、少しだけ強^{こわ}ばっ

ている。

『その娘の知り合いか？』

『通りかかったただけだ。旨そうな女の匂いがしたものだからな。』

氷蛾には、判断がつかなかった。少女の配下であると妖に言うべきか否か、黒芒楼に『今』潜入するべきか否か。

指示を仰ぐべき少女は、己の腕の中で人事不省に陥っている。

『では、人皮の件頼んだぞ。』

早くその場を後にしたくて、氷蛾は純白の羽を広げる。

蛾とはいえ、不快な羽虫のように飛んだりはしない。一対の羽を広げたまま、風をつかんで夜空に消えていった。

(12) 氷蛾、結界師達とご対面 (前書き)

感謝!!! 6198ユニーク!!!

お気に入り登録33件!!

本当にありがとうございます。

簿記試験が11月21日(日)にあるので、土曜の更新が出来なくなります…。

本当に遅々としていてすみません…一回の更新が4ページのくせに……。

なので、6日、13日、20日の更新はお休みさせていただきます

月曜、水曜のみの更新となりますので、ご了承下さいませ

m (((((((

(12) 氷蛾、結界師達と対面

『主、主……起きよ、主。』

『……………』

9本の尻尾は、だらりと力無く風になびき、藍色の瞳は閉じられている。

黒い獣の耳も、へたりと力を失ったまま氷蛾の首をくすぐっている。

『主！！起きよ！！！！』

『……………』

死んだようにピクリともしないネリに、青年の顔が青ざめる。今はちょうど夜が最も深い時間。日の出までまだまだ時間があるが、寒空にこんな薄い戦闘服でいていい訳が無い。

主君を、『氷蛾の部屋』空間に連れ帰るべきか、青年は迷った。

さすがに、年頃の娘　しかも主を、僕の部屋で寝かせることに抵抗があったのだ。

『人間に……頼むしか無い、か……』

顔を合わせれば、問答無用で殺されるかもしれない。雪村の家は知っている……だが、絶対に雪村の敷居はまたぐなど、ネリに言われて

いるのだ。

『烏森も、雪村の家も入ってはならぬとなると……残るは墨村の家か……』

消去法でいうなら確かにそうなのだが、結界師の家に足を踏み入れるのは、妖にとって自殺行為である。

『我は、どうすれば良いのだ…主…』

ぐったりとするネリからの返答は無かった。妖狐化が解けていないということは、妖力を使い果たしたという訳でも無い。

疲れがたたったのか、或いは具合が元々悪いのか……人間ではない氷蛾には分からない。

ただ寝ているだけのようではあるのだが、あれだけの妖気を放出した後だ。とても心配である。

あつという間に裏山に着いてしまって、氷蛾は取り敢えず神社に降り立った。翡翠の足輪に力を籠めて、『氷蛾の部屋』を開ける。そこから羽織を取り出して、少女が寒くない様にくるんだ。

神社に、静寂が舞い降りる。

『何の用だ。』

枯葉が舞う音しかしなかったが、氷蛾の感覚は誤魔化せなかったようだ。それとも、同じ“毒使い”だからか。

「それはこっちの台詞だ、妖」

コートが翻る。ブーツが砂利を踏み、本殿にいる二人に少しずつ近づいてきた。

「……………その子に何をした。」

『……………』

殺意を隠そうともしないキラキラと光る目が、氷蛾を見据える。その人間の男は、左腕が妙な事になっていた。植物系の妖が、とり憑いているのだ。左肩の付け根から無数の木の蔓が伸び、一つ一つが細い毒ナイフを持っている。

『妖混じり……………主の仲間か？』

その呟きを聞いて、コートの男が怪訝な顔をした。

「……………翡翠京一。夜行の者だ。……………お前、その子と主従契約をしているのか？」

男が、夜行の紋が入った手甲を見せる。

まだ目は険しいものの、ネリを『主』と呼ぶ妖に、殺気が皆無なのを感じ取ったらしい。

『我は、この娘の僕。主には休息が必要だ。早く雪村の家に運びたい。』

「……………」

何とも奇妙な必死さを与える妖に、翡翠は左腕の力を抑えた。

(妙だな……妖のくせに邪気が薄い……。土地神級クラスに少し届かない位か……)

戦闘が不得手な男一人では、絶対に倒せない相手である。それだけの力を持っていながら、少女を離さない姿はまるで人間のようだ。

「……分かった。烏森に雪村のお孫さんがいるはずだ。彼女なら話
が分かるだろう。」

『……もう一人の仲間には連絡しなくて良いのか?』

氷蛾が、片手抱きを両手抱きに変えながら、さりげなく口を開く。
翡翠は片方の口の端をつり上げた。

「知ってたのか」

『当たり前だ。我はこの裏山にいつもいるのだから。』

顎で『先に行け』と合図するので、氷蛾は白い羽根をしまつて、石の階段を降りていく。

翡翠と同じく派遣されている花島に、正門前で結界師2人を待たせるよう、男は携帯で連絡した。

翡翠は烏森という“力の塊”を目の前にして、目の色を変えない妖を、不気味に思った。

普通の妖ならあり得ない。

前を歩く得体の知れない存在に、翡翠の左腕が蠢く。

「お前、烏森の力が欲しくは無いのか？」

『そんなもの』

鼻で笑う妖は、壊れ物を抱く様に少女を見た。

『母さえおれば、何もいらぬ』

「……………母？」

理解出来ない様子の翡翠が、眉を寄せる。

男は知らなかった。

前を歩く氷蛾が今、どんなに儂い表情をしているか。

『主は私の主君であり、母。この世界でたった一人、私の存在を認められた者。』

長い石段が終わり、学校の校舎が見えてくる。

腕に抱いた少女は、妖の青年の気持ちを何一つ知らず、目を閉じていた。尻尾ごと羽織にくるまれた姿は、年相応の少女の顔だ。

本能剥き出しの、荒々しい妖しか今まで見たことの無かった翡翠は、

目の前の存在が信じられなかった。

「お前……本当に妖か？」

『うむ。蛾^がの妖だな』

少年の頃は毒々しい目のような模様があった羽だが、今は新雪のような純白である。

その顔に笑みさえ浮かべて、氷蛾は歩みを進めた。毒のナイフを男がコートに仕込んでいるのを知りながら、妖は背中を無防備に晒しているのだ。

両手も塞がっている今、翡翠の攻撃を受けたら防ぎようが無い。

分かっているながら、氷蛾は何もしようとしない。そしてあれほど近づいてはいけないと言われた結界師に、自ら歩を進めている。

『我は……最後まで主を守る。途中で主を独りにしたりせぬ。』

「……！！」

ネリの死んだ相棒の事を意識している発言に、翡翠が息を呑んだ。

その時、校門から走ってくる人影があった。

「こつちよ〜！」

「ネリちゃん!?!」

「あ、妖がなんでいんだよ!？」

手を振る亜十羅と、氷蛾に驚く結界師二人。警戒するなという方が無理だろう。

そこで初めて翡葉は、妖の横に並んだ。

「初めまして、夜行所属の翡葉です。……………花島、突然悪かったな」

「……………そいつが、例の妖ね。何者なの？」

亜十羅は腕を組んで、ネリを抱く人型の妖を真っ直ぐ見た。

良守と時音も右手を油断無く構える。

そんな人間達に、氷蛾はまず頭を下げた。全員が息を呑む。

『烏森に近づくなと主に言われていたのだが…すまぬ。先程妖力を使ったせいで、主は倒れてしまったのだ。』

「ある…じ?」

良守が妖の腕に抱かれたネリを見る。顔色は悪く、薔薇色だった頬は青白く、月の光に照らされていた。

「あなた……………どこかで会った？」

時音はじつと氷蛾の顔を見て、何かが頭に引っかかる違和感を覚えていた。そんな少女に、氷蛾は金色の瞳を細める。

『我は、お前達を良く知っている。生まれて初めて見たのは、少年

と少年の兄君だった』

「あ　　！！お前あん時のー！！」

「なんであたしの方が先に気づくのよ……」

やれやれと頭を振る時音は、右手の構えを解いて両手を妖に差し出した。氷蛾が目を見張る。

「私がネリちゃんを背負って帰るわ。今から家までいったら、空が白み始めるかもしれないし」

そうなったら妖である氷蛾は、不味いことになる。若干悲しそうな顔をした青年は、主を少女に託そうとし……腕の中で、動きがあったのを感じた。

『主？』

「ネリちゃん、起きたの？」

『……………』

藍色の瞳がゆっくりと顔を覗かせる。数回瞬きした後、唐突に少女の体が紫色の激しい妖気に包まれた。

ネリがガシツ、と氷蛾の襟に掴みかかる。

『あいつはー？あいつはどうなった氷蛾！？』

『あ……主……ー』

周りにいる人間が見えていないネリに、口を閉じる様に言いたかったが、主は混乱したまま口を開く。

『ちゃんとあいつはこ』

『主!!』

堪えきれずにネリの言葉を遮った氷蛾は、周りに目を向けた。つられてネリも目をやり……固まる。

『あ……あれ?……なん……で?』

「ネリちゃん、ちょっと良いかしら。」

気のせいではない凄みをのせた時音と、オロオロする氷蛾、ネリ。

(あちゃー……またやっちゃった……)

長い夜はまだ、明けそくに無かった。

「監視者の傷を治してた!？」

「……………ネリ、それは背反行為だぜ。分かってんのか？」

上司である翡翠に物凄い目で怒られ、時音には呆れられ、散々だった。

めちやくちゃになつた校舎裏を直した後、両家当主と翡翠・花島が顔合わせをし、お説教タイムである。

ちなみに、氷蛾を早々に『部屋』へ戻すよう、全員一致（ネリ以外）でネリに言った。

「まったく頭領はなんで新入りのお前を寄越したんだか……」

苦々しく言う翡翠に、ネリが縮こまる。

「すみません……。まさか尾行した妖が上司に殺されるとは思ってもみなかったので……」

嘘である。

妖を捨て置いても良かったのだが、『こちらに抱き込めれば良いな』と思つたのだ。

黒芒楼に味方が増えれば、それだけ情報も集めやすくなる。

「で？生かして帰したのですか？」

時子も若干怖い目で、ネリを見た。良守以上に無茶をやる子だと、認識を改めた様子である。

「…はい。氷蛾によれば、その妖は来た道に戻っていったそうです」

黒芒楼の名はまだ出していない。ギリギリまであちらの情報は伏せて起きたかったのだ。

だが、時音の目は誤魔化せない。

(それが、『こくぼつろつ』っていう所から来た奴だったのね)

ネリの呟きを聞いていた時音は、内心頷いていた。そして確信する。

(ネリちゃんは、全てを話していない。)

妖を使役していることさえ言っていなかったのだ。叩けば埃がまだたくさん出てきそうである。

(ネリちゃんのいない時に、おばあちゃんには話しておこう。)

時音がネリの行動に注目していることを悟られれば、余計な警戒心を煽る可能性がある。

それは避けなければならない。

「その氷蛾という妖は……失礼だけど、信用出来るのかしら？」

時子が最もな質問をすると、ネリは右手につけていたサポーターに手をかけた。

そこには、氷蛾につけられた刻印と翡翠の腕輪が隠してある。

「契約の印は刻みました。対の足輪を彼に付けてあるので、ある程度の位置と行動は把握出来ます。普段は私の異界に住まわせていますから……いつでも呼ぶことが出来ます」

「そいつのこと、頭領に報告はしたのか？」

翡翠の言葉に、ネリは首を振る。だがそれは怒られないと思っただからだ。

斑尾が倒した綱夜を、使役することになる正守なら。

はああ……と翡翠は大きなため息をついた。それは、ネリ以外の人間全員の心情を現している。

「……………荷物まとめて覚悟しとけ、新入り」

「はい、分かりました」

いたって普通の反応を返す少女に、青年のこめかみに青筋がたった。ピリツとした空気が二人の間に流れる。

「どうぞ。全部報告して下さい。それならそれで、おとなしく私は消えますから」

（頭領が私を引き上げさせるなら、私は黒芒楼に行こう。早く火黒をなんとかしないと）

別に、烏森にこだわることは無い。むしろ黒芒楼の場所が分かった今となつては、烏森警護の任務は邪魔でしかなかった。

そんな思いを知ってか知らずか、翡翠は口の端をつり上げる。

「……………フン」

言葉にしなかったが、青年の目は殺気だっている。

2週間で随分したたかになんて変わってしまった少女に、結界師達は啞然とするのだった……。

(13) 限君、久しぶりです (前書き)

感謝!!!6404ユニーク!!!

多分更新は、月曜日と木曜日になるとおもいます。

あまり間は開けたく無いので…。

これからもよろしく願います

(13) 限君、久しぶりです

「ほつ……意外だったな。まさかあの状態から生きて帰るとは。」

「……私の持たせていた薬が効を奏したらしい。気を失った後、服用したそうだ」

広い中華風の室内に、藍色の髪的女性が白衣姿で男性に報告をしていた。

小柄で、髪は肩にギリギリつかない程度。サンダルを履き、左上腕に十字の腕章をつけている。

研究部の藍緋だった。

そのほつそりとした手は、ポケットの中で拳を作っている。

「……ふむ。まあしばらくは使えないだろう。適当に研究の手伝いでもさせておいてくれ」

スーツ姿に白髪の男　　白に軽く頭を下げた後、藍緋は執務室を後にする。

拳を握っていたのは、やったことのないことをして緊張していたから。

研究室に戻って初めて藍緋は、握り締めていた拳を開いた。

緊張で強張っていた体は、今や心の底から溢れる歓喜で震えている。

（やった…やっとな私は自由になった！！）

蟲を入れられた妖は、嘘をつくことが出来ない。行動は制限されるし、首輪をはめられているのと同義である。

（これで心置き無く、自由な研究が出来る。）

藍緋が見つめる先には、黒い球体を入れた箱がある。烏森から帰ってきた部下に渡された物だ。

藍緋さん。俺、分からなくなりました。

妖特有の紅い瞳をうつむかせて、部下は小さな声で言ったものだ。

白様を信じて来たのに……人間にはなれないし、捨て駒にされるし……もう、分からないです。

（あいつは一番頭の良い奴だからな……他よりも知能が高くて、教育しがいがあった）

椅子に座り、顔も知らない妖混じりの娘の伝言を思い返す。

私が外に連れ出しても良い、と藍緋さんに伝えて。

「心当たりは……無いな。」

妖に『知り合い』という概念は存在しない。

一人一人が『個』であり、両親も子供も無いのだ。

藍緋の記憶の中に、そんな近しい存在はいなかった。

「いや、知り合いなら一人だけいるか……」

もう、大分昔に別れた人間ならいる。だがそれは男だ。

なぜ見ず知らずの娘が自分を知っていて、しかも自分の望みまで把握しているのか。

(一度、会ってみたいな……その娘に)

以前よりも美しく見える空を、藍緋はいつまでも眺めていた。

陽が昇って、ネリの学校生活が始まる。

翡翠の助言通り、部屋の荷物をまとめて時音と共に学校へ行く。良守はネリが真ん中にいることで、大好きな時音と登校出来るのでニコニコだ。

そんな分かりやすい良守には気づかず、時音はネリにそれとなく話をふった。

「ネリちゃん。昨日の妖はなぜ人間の皮を被っていたの？」

「あ　それはですね。人間になりたい酔狂な奴がいるからです」
他にも多々理由はあるのだが、一番どうでもいい情報を与える。だが、結界師二人は驚きの声をあげた。

「な、そんな変な奴がいんのか!？」

「まあ、数は多くないと思うけど…そういう条件で烏森の情報を妖に流してるらしいよ」

「昼間でも油断出来ないわね……」

ネリは、昼間は変わらず大丈夫なことを伝えようと思ったが　やめた。

(そうしたら、人皮の説明まですることになっちゃう。)

ネリはぐっと堪え、3人は校門をくぐるのだった。

「墨村、今日は一段とよく寝てるな。ワックス持ってない?市ヶ谷」

「おいおい…そこら辺でやめといてやれよ……」

机で突っ伏して寝ている少年の髪を、オモチャにしている田端ヒロム。自称、情報の魔導師である。

髪を色々な形に遊ばれているにも関わらず、良守は微動だにしない。ネリはそれを見て、哀れに思った。

(熟睡するにも程があるよ……)

何だかその平和な光景に既視感を覚えたのだが、似たような事は何度も見ている。少女は大して気にすることもなく、次の授業の用意をしていた。

神田とキヨウコ、アヤノの話し声が遠くに聞こえる。ぼつつとネリは窓を眺め始めた。

(藍緋さんはちゃんと蟲取れたかな……信じてくれると良いんだけど……)

「 ……でしょ、……のクラスよ! 」

平和で適度に騒がしい教室と、晴れ渡った空。正守から任務を下ろされたら、すぐ去ることになる烏森学園中等部。

(いつ『 切ろう』かな、この糸。)

少女の指先から伸びる、『 縁^{えん}』という名の糸は、細く長くたくさんの人間と繋がっている。

「 ……見に行つてど…るの? ……」

「 ……うわ ノリ悪いな ……」

微かに意識の外で聞こえる、級友達の声をネリは嫌ってはいなかった。

た。ただ、全てが『幻』なだけである。

ネリがクラスメートに『ユリカ』と呼ばせる理由もそこにあった。

（“ネリ”と呼ぶ前に、“ユリカ”と呼んだ人間とは糸だけで『縁』が繋がっている　その糸を切れば……………）

『ユリカ』の記憶が無くなる。

つまり時音や良守といった結界師、夜行の人間以外、ネリの事を忘れてしまうのだ。

異世界に来るときの、偽名を使う感覚である。

名はね、すごい力があるんだよ！認識するのに初めて使うのが、名前だもの

「……………っ」

ネリは堪らず頭を抑えた。最近良く『百合香』の記憶が頭をよぎる。扇を片手に、まるで絵巻物から飛び出したかのような少女を。

「……………参ったな…」

思い出したくない記憶は、なかなか消えてくれそうに無い。

下手をすると、白い狩衣が視界をちらつきそうである。

ネリは早々に次の授業をサボることに決め、教室を後にした。

懐かしい気配が、すぐ側にあることを、頭を抱えるネリは気づくよしも無かった。

「え？どこに？」

「決まってんでしょ、隣のクラスよ！」

「転校生来たんだって」

ふっくらしているキョウコが、はしゃいだ様子で神田を誘う。そういう事に全く興味の無い百合奈は、あまり乗り気では無かった。

「見に行つて……どうするの？知らない人でしょ？」

「うわ　出たよ、ノリ悪　。」

「気になるでしょ、それなりに」

キョウコの言葉にアヤノも言葉を加える。ピンと来ない様子の百合奈に、キョウコはわざとらしく言った。

「そりゃ　ユリが気になるのは墨村君だけだもんね〜！」

「や、違っ…いい、行く！行くよ！…！」

ガタツと慌てて二人についていく、神田であった。その時、すぐ近くのネリも立ち上がって教室から出ていく。手を額に当てて気分が悪そうである。

「ユリカちゃん……？」

「ユリ　行くよ　」

キョウコがじれったそうに呼ぶので、霊感少女は教室を後にするしか無かった。

「どんな人かな　」

「あんまり期待しすぎない方がいいぞ」

わくわくしているキョウコに、冷静なアヤノ。神田はあまり我^がを張らない、流されやすい自分が少し嫌になった。

そして、隣のクラスである2年1組に向かう。たった10歩も無い、短い距離だ。

男子生徒が、3人の横を通り過ぎる。

二人の背中を何となく見ていた神田は、その瞬間何とも言えない、生臭い気配を感じ取った。

（…えっ！？）

思わず足を止めて振り返ると、その男子生徒の後ろ姿が目に入る。キョウコとアヤノの声が遠い。

(何だろつ今の……)

「え　　いないの!?!」

キョウコの残念そうな声だけが辛うじて、百合奈の耳に届いた。

(血の……臭い……?)

サアツと血の気が引いた靈感少女に、アヤノもキョウコも気がつく事は無かった。

「高等部の屋上にするか…中等部じゃ、墨村君が来るかもしれないし……」

鏡渡りをしても良いのだが、嘘の太陽光と分かっているだけに、自然光の方が心地よく感じる。拒絶の床板を作った後に、空間から枕とブランケットを取り出した。

「眠れないとは思うけど……、暖かい所の方が気分が良いや……」

制服がシワになるのも気にせず、ネリはヤマネの様に丸く縮こまって、目を閉じた。

そして、静かに時間が流れていく。

屋上で、銀髪の少女がうつらうつらしていた頃。

靈感少女、神田百合奈は国語の教科書そっこのけで、猛烈に悩んで

いた。

(どうしよう…やっぱり気になるな…あの感じ…)

チラリと一番後ろに目をやる。墨村少年は相も変わらず、熟睡中なのか、顔をあげる気配すらなかった。

(また墨村君に相談してみようかな…いや、でも…何度も行くのは…)

散々迷った結果。

授業が終わった後、神田は夜中に人知れず走り回って疲れている少年に、相談してみることにした。

「ああああの墨村君…！しょ、少々お時間いただけないでしょうか！」

どもりながら、そしてなかば引きずる様に、百合奈は少年の手を引いて屋上に連れていった。10分休みなので、時間に余裕は無いのだ。

屋上に着いて早々、百合奈は口を開く。

「じ、実はまたもや、怪し気な奴が…！」

「悪いけど、」

そこで初めて少年は口を開いた。前髪を髪ゴムで角の様に結ばれ、とても滑稽な頭である。

「また今度にしてくれないかな…?」

「あ…ごめんなさい…」

そのまま行くこととするので、慌てて神田はイタズラされた前髪を元に戻してやった。

「でもコレは取っという方がいいよ…」

「ん　?」

何だか違和感を与える少年は、髪ゴムが外される間もじっとしていた。終始、表情は眠たそうに目を細め、感情を読み取ることが出来ない。

「じゃ。」

そのまま、何事も無かったかの様に立ち去る少年に、神田は首を傾げた。

(墨村君、疲れてるのかな…?)

前と違い、覇気というか活力といったものが感じられず、まるで空気のようである。仕方無く、少女は後日また相談することにしたのだった。

少年は、眠そつな顔を擦るでもなく廊下を歩いていく。

だが階段を降りて曲がった時、いきなり襟を後ろから引っ張られた。

「
」
そのまま言葉も無く、外に連れ出され、校舎の壁にダン、と押し付けられた。

少年二人が向かい合う。

だが、眠そうな少年はさつきと同じことしか口にしなかった。

「悪いけど…また今度にしてくれないかな…?」

「……………」

対する髪を立てた少年は、剣呑な目付きで睨んだかと思うと、拳を思い切り叩き込んだ。

顔面に。

まともに当たれば、顔の骨が粉碎するだろう。だが、良守は否、良守の形をしている『式神』は、耐えきれない衝撃に紙切れに戻った。

同時に、中等部屋上で情眠を貪っていた『本物』が飛び起きる。

(んな!?)

物騒な午前中は、ネリの知らない所で始まったのであった。

(14) 鈍る決心、つかの間の安らぎ

(式神が消えた…いや、消された!?)

良守は、眠気が吹っ飛ぶほどの嫌な感覚に若干動揺した。

いつもよりも精巧に、かつ強度もそれなりに上げて作ってあったのだ。足を踏まれたやら、階段から落ちたなどでは消えない程度にしてある。

目の前で人間が紙切れになったら、とんでもないことになるからだ。

(事故じゃない… っ!?)

その時、物凄い邪気が結界師二人の感覚を揺さぶった。

(…邪気!?)

太陽も高い、こんな昼間に考えられないことである。急いで良守は(途中結界も使いながら)邪気の発信源に向かった。

そして、言葉を失う。

雪村の結界師、時音は校舎の裏路地に入る所で立ちすくむ幼なじみを見つけた。

「良守!さっきのは…っ!?!」

二人の目線の先には、無惨に抉られた壁にくつきりと残った爪跡がある。

銀髪の少女は何も知らずに、高等部の屋上でまどろんでいるのだ
た …

「人間……じゃ、ねえよな…邪気あつたし…」

「少なくとも普通の人間じゃないわね」

妖は、肉体を持たないため太陽光に弱く、昼間は活動が大きく制限される。よほど高位の妖でもないかぎり、十全の力を振るうのは難しいのだ。

良守が自分の式神がこの場所で消されたことを話すと、時音は目線を厳しくした。

「侵入した際に感知しなかったから…何か器を持っているか……」

「問題は、何が目的なのか… ことだよな」

そこではたと、良守は状況を整理して気がついた。

(邪気を感じたのは、式神の消えた後…わざわざ力を振るい、あからさまに痕跡を残した)

感知されるのを見越して、わざわざ爪跡を壁面に残した
の意味するところは、明らかである。 それ

(これは…挑発だよな?)

「…上等だ」

「え?」

修復術 烏森の土地を直す術 をかけていた時音は、少年がい
きなり駆け出したのを見て、目を見開いた。

「時音!あとは頼んだ!式神置いてくから!」

「え、ちょっと!?!」

『緒突猛進』がピッタリの勢いで、良守の姿がみるみる遠ざかる。
少年は走りながら、式神用の札を5枚ほど放った。それらは5羽の
鳥となる。

「いけ。異変があれば知らせろ」

飛び立つ鳥達には空から、そして墨村の結界師は地上から、侵入者
を探し始めた。

「うーん…やっぱり眠れないかあ…」

高等部の屋上で、ネリは観念して起き上がった。ブランケットは肌寒いのでそのまま体に巻き付け、枕は空間に放り込む。

「妖力が減らないと寝られないってことなのかな」

それならば、氷蛾に毎日妖力を注いで眠りを手に入れることが出来るかもしれない。

「うん、今日から試してみよう」

独りごちると、ネリは黒い拒絶の板の上で体育座りをした。

（今夜、発とう。もし烏森に残ることになったとしても）

烏森の情報が黒芒楼に渡れば渡るほど、白の計画は確固たるものになっていくのだ。

黒芒楼の場所がまだ結界師達に知られていない今が、ネリにとってチャンスである。翡翠には反抗的な態度をとってしまったて申し訳無かったが、彼は限を嫌っているため、そもそも好きではない。

「今日の仕事が終わったら、そのまま……行こう。」

最後まで真面目に授業出なかったな、とネリは苦笑いしながら青い空を見上げた。

その頃、髪を立てた少年は校舎の外を気ままに歩いていた。そして、たむろしている高等部生達が少年の道の上にいる。

迂回すればいいものを、少年は悠然と行きたい道をそのまま進んだ。

当然、ガラの悪い歳上の青年達が、少年をとり囲む。

「おい中坊、授業中だろ？何か用か？」

「……別に。ここ通りたいただけ」

6対1では、少年に勝ち目は無い、はずだった。だが、むしゃくしやしていた少年は 関わってはいけない人物。

肉の打つ音、骨が軋む音、それらは一方的だった。太い悲鳴もすぐに聞こえなくなる。

裏路地を抜けたのは、もちろん中等部2年1組の転校生ただ一人だけだった。

「大丈夫か！？何があつた！！」

良守がその場にたどり着いた時は、もう台風じゅうふうに蹂躪じゅうりゅうされた後だった。タバコの吸い殻を構わず踏みつけ、良守は意識があつた青年を抱き起こす。

大柄な青年は、唇の端から血を流しつつ、何とか口を開いた。

「髪を立てた…中学生が…人間じゃねえ…速すぎて見えなかった…

…」

「中学生！？」

てつきり昨夜の様なスーツ姿の男性かと思いきや、妖が中学生の形と分かり、良守は驚いた。

物騒な鬼ごっこは、終わらない。授業中だったのがせめてもの救いである。

(早く見つけねーと……)

その時、式神のひとつが条件に該当する景色を術者に見せた。髪を立てた少年が、男性教師の胸ぐらをつかんで 持ち上げている。

邪悪な気配に、良守は植物園の方へ駆けていった。

「お前、誰だ？」

「知ってるかい？そういう時は自分から名乗るのが…」

体格差があるにも関わらず、少年は腕力だけで男性教師 三能たつみの全体重を支えていた。驚異的な臂力りよりよぐである。

この男性教師、以前傀儡虫という妖にとりつかれたことがあった、異能者である。3匹の蛇を操り、攻撃、防御、治癒に振り分けることができた。

一応、異能者ということ、結界師二人が人皮の妖について注意を促しておいたのだが……。

早速、不審な少年によって宙吊りになっている。

「お前、普通の人間じゃないな」

「！？なんだって？」

「臭うんだよ」

低い声は、教師を震え上がらせるには十分な迫力を持っていた。三能は、息が詰まりながらも、異能は発動させなかった。

結界師二人と約束していたからだ。

「じゃ、じゃあまず自己紹介だ。僕は高等部の英語科教師、三能たつみさ！さあ、君の名は？」

「……………」

無言でぐいぐいと拳の力を入れていく少年。足をばたつかせて、抵抗を試みるが教師の視界は次第に暗転していった。

「俺の名は、」

最後まで聞くことなく、三能はあえなく意識を手放すしかなかった。

決して細身というわけではない三能の体が、どさりと音をたてて地面に落ちる。

とどめをさすことなく、少年はその場を後にした。

微かな、甘い香りに誘われて。

「三能！」

ピクリともしない教師を必死で揺さぶると、三能は息を吹き返した。喉を押さえ、痛みのせいか目には涙がにじんでいる。

「大丈夫か！？やっぱりあれか、髪を立てた小柄な中等部男子……」

「ぐ…ケホツ、うぐ、…そ、そんな感じで、目付きの悪い、子だつたよ」

三能に事情を聞いていたその時、鳥型の式神の消滅を少年結界師は感じた。

その感覚に、目を見開く。

「悪い！式神置いてくから！」

「ちよ、墨村君！そっいえば君、授業は！？」

三能の言葉が追いかけてきたが、良守は足を止めない。

鳥型の式神は、当然ながら空を飛んでいる。翼を持つモノを消滅させるという事は

(飛び道具でも持ってやがんのか！？)

拳銃、弓矢、昨日の妖の様な伸びる腕。何にしてもまともではないことは確かだ。

ッ！

式神の最期の光景が、次々と術者である良守に届けられる。

それは、目の前の視界と徐々に一致していく。

バサバサと鳥がもかく羽音に、良守は背の低い建物を見上げた。その屋根の上に 髪を立てた少年の背中がある。

「遅えよ」

半分くらい振り返った顔は、獰猛な獣のようである。少年は、これ見よがしに鳥を掴んだ両腕を水平に掲げ 握りつぶした。

そして次の瞬間、見慣れぬ中学生は校舎のわずかな凹凸を足掛かりに、屋上のフェンスまで跳び上がった。

体操選手も真つ青な、人間の筋力を超えた脚力である。フェンスに腕一本で掴まり、その少年はチラリと下に目をやった。

「……………あの野郎……………」

明らかな挑発。

(あいつ自身が飛び道具って訳かよ…………)

「上等じゃねーか！」

真っ昼間ということも頭から吹き飛び、良守は結界を活用して空中へ跳び上がった。

高等部屋上。そこには、うつらうつらしていたネリがいた。

細いフェンスが揺れて、髪を立てた少年が屋上を駆ける。遠目に光る銀の輝きに良守は、息を呑んだ。

よりによってこんな時に、寝起きとは。

それに、前を駆ける少年はこともあるように、その少女へ一直線に向かっている。

「……させるか！結結、結、結、結、結、結、結……！」

距離があつて、ただでさえ練度が落ちる術に、結界はかすりもしない。良守は、叫ばずにはいられなかった。

「ネリ！！逃げる！！！！」

「ッ！」

追っ手の声に、弾丸の様なスピードの少年は、急に壁を蹴って折り返した。一呼吸の間に良守と肉薄する。

頭狙いの蹴りを繰り出され、反撃する隙もない。避けるのが精一杯である。

今までとは桁違いの『敵』に、良守は頭に血が昇り冷静な判断を失

った。

「ちよ、待て！」

結界を展開しようとして右手を構える。その愚かな一瞬を、少年の強烈な蹴りが叩いた。結界師の右脇にいつそ清々しい位に命中した蹴りに、良守は横に吹っ飛ぶ。

その時だった。

「……限……？」

ビクッ、と侵入者の肩が動いた。そして、ゆっくりと振り返る。

「……………」

たった五日顔を合わせていなかっただけで、これほど恋しくなるとは。

「……………ネリ」

毎日毎日、彼に引っ付いてその度に顔を赤らめる彼が面白くて、癒されて、愛おしくて。

なのになぜ、今会ってしまったんだろう。

ネリが今さっき決心したばかりだった、このタイミングで。

「限……限……！！！」

抑えられない喜び、その気持ちの影で鈍る決心。ダン、と少女が地面を蹴って屋上に着地する。

限は、久しぶりの甘い少女の香りに、直ぐ様抱きしめたい衝動に駆られた。だが、何かが邪魔をする。

手を伸ばせば届く距離。戻ってきた元気な銀色の太陽。

もう随分と長い間、待ちわびていた限の太陽は、隕石の如く少年に衝突した。

少年　　志々尾限は、少女に抱きつかれるまま、その場に立ち尽くした。

別れた時と同じく、胸に抱きつくネリの顔は、腕の良い彫刻職人が彫った様な美しさである。

だが、少し違和感があった。

「…………ネリ？」

「なあに？」

安心した、という風に限の胸に頬擦りする狐少女の頭に、少年は両手を添えてゆっくり上を向かせた。

無骨な手の中で不思議そうに紫色の瞳が、ぱちくりと瞬く。

「お前…………顔色が悪いぞ。それに、妖気に輝きが無い。……………まだ寝れてないのか？」

「……！」

驚きで目を見開くネリを、限はじいっと見つめる。良守が復活したのは、その時だった。

「いつつ……　　って、え？」

バン、と屋上の扉が勢い良く開いて、時音も到着し　　目を見開いた。

おかしい状況　　侵入者がネリと抱き合って今にもキスをしそう
を見て呆気にとられる。

ネリは嬉しい様な、限が背中に手を回してくれなくて残念なような、複雑な気持ちだった。嘘をつくほうが傷つけるのは分かっているの
で、ネリはおずおずと頷く。

身長差に首が辛かったので、手を外してもらった。

「実は…あんまり寝れなくて…夜は暇だから訓練してるよ」

「お前なあ…」

「おい、コラー!!」

無視されて耐えられなくなった、良守の怒声が響き渡った。

(15) 通い合う心に、任務という名の鎖

「お前！ いったい何なんだよ！！」

「……」

邪魔され少し機嫌が悪そうな限は、しかめっ面のまま結界師に向き合った。

「裏会・実行部隊“夜行”所属構成員、志々尾限。烏森の地の警護及び結界師補佐役として派遣された。」

ようやくと名乗った少年に、結界師二人はそろって怪訝な顔をしてネリを見た。良守が呟く。

「あれ？ どっかで聞いたような……」

「あ、あ、あのですね！ ほら、前に話したことあったでしょ？！」

レナモンと初めてこの世界に来たときに、少女は自分が口走った内容を思い出したのだ。

良守は、『志々尾限』という少年を知っているか？ という質問だけが記憶に残っている。一方時音には、かなり突っ込んだ内容まで限の事を少女は話したのだった。

世界渡りですぐに帰ると思っていたので、あの時は後々のことまで考えていなかった。

瞬時に意識の糸を時音に伸ばし、言葉を届ける。

あの夜のごとは、彼に話さないで下さい。未来がこじれてしまっているので

時音から頷く雰囲気の返答と、何かに対する確信が帰ってきたが、後回しにした。

「俺のこと、こいつらに話してたのか？」

限が意外そうな顔でネリを見たので、少女はなるべく嘘をつかないようにした。

「まあ、名前ぐらいしか話してなかったから、分からなくても仕方無いかも」

「ふむ……」

何か考えている様に、顎に手を添えている少年に、時音は声をかけた。

「どうして裏会から二人も来ることになったの？」

「俺も詳しくはきかされてないが…敵の規模が大きくなった。今、ある妖の集団がこの地を狙っている。」

いきなり今日明日、大挙して現れることはないが、双方とも状況見の段階、とのこと。

「……そうだ、ネリ。お前、残留決定らしいぞ。頭領から伝言だ。

“ちゃんと周りを頼れ”……だと。」

思い出したように言う限に、ネリはげんなりした。やはり、任務を降ろされることは無いらしい。

限の存在も、おそらく烏森に留める為の処置だろう。

「じゃあ、昨日の事も聞いてるの?」

「ああ……全くお前は無茶ばかりだな」

限は目を細めて苦笑する。

良守は、初めの印象とのギャップに面食らっていた。侵入者だとはかり思っていた少年と、先程戦ったばかりなのだ。

それなのに、この見えていて、こそばゆいのは何なのだろう。

同じ男だからか、良守は何となく分かってしまった。

限がネリに向ける眼差しが、ただの後輩（もしくは仲間）だけではないことを。

「お前、何でこんなことしたんだよ」

「……」

チラッと非力な少年に目をやった限は、呆れをにじませた。

「お守りする相手がどれほどの力量か知りたかった、ただそれだけだ。結果は言うまでもなかったが」

「ちよつと限！言い過ぎだよ！」

ネリが諫めるが、限は冷静に良守の力量を測って、評価にマイナスをつけていた。

「問題への対処も遅えし、とんだ見込み違いだ。……お前、本当にあの人の弟か？」

（あゝあ、言っちゃった）

もう少しマシな言い方は、出来ないものなのだろうか。良守にとつて兄の名前は禁句である。

幼い頃から、常に術の優劣を見せつけられてきたのだ。男子にとつては、プライドを逆撫でされてきたたようなものである。

ムツとした様子で良守は限を睨んだ。ガシツと限の胸ぐらを掴み、見えない兄まで見据えてる様な表情で口を開く。

「確かに俺はまだまだ力不足だが……あの野郎はいつか必ず越える。」

「……」

一触即発の空気を止めたのは、年長の少女だった。

「結！！」

「おしッ……」

少年二人の頭上から、緑がかつた透明な結界が振り落とされる。脳を容赦なく揺さぶる攻撃に、たまらず二人は仲良く頭を抱えてうずくまった。

「あんたら何考えてんの！？昼間っから学校で暴れてんじゃないよ！！」

「んだよ時音！男同士の話に水差すんじゃないよ！」

14歳の少年らしい、反抗期を体現したような言葉に、時音は静かに術を振るった。

「黙りな。」

「ゲフツ！」

右側から食らった結界に良守が沈没した後、時音が限に歩み寄る。

「人知れず動くから『夜行』なんでしょう？力を使う時と場所は選びなさい。」

「……………」

限は、相変わらず無言である。ネリはしょうがないな、と苦笑しつつ限の後ろへ歩み寄った。

ポン、と肩に両手を軽く置く。

「時音さんも、墨村君も良い人だよ。そんなに緊張しなくて大

丈夫。」

「…………！」

目を見開いた限は、息を吞んで銀髪の少女を振り返った後、うつむいた。その反応にネリが首を傾げていると、時音が限に手を差し出す。

「自己紹介しとくわね。私は雪村時音。」

「…………」

だが限は、一瞬戸惑ったような表情をした後、スツと立ち上がって時音の横を通りすぎた。

そして、ネリのことも置いて屋上を後にしていった。

「ちょっと……！」

「あ………まだダメかあ……」

頭に手をやるネリと、憤る時音。良守は計2回も結界で頭を叩かれたので、まだ床に伸びている。

「悪い子じゃないので、長い目で見てあげて下さい。」

一応限のためにネリがフォローしておく、時音は矛を納めて銀髪の少女を見た。

「さっきの子が、ネリちゃんの探していた人？」

「ん〜とですね……。何というか……。まあ、そんなものです」

煮え切らないネリに、時音は今は追及しない方が良いかと考え直し、口をつぐんだ。

限の心は、言い表せない苦しみに襲われていた。

（“良い人”だと……！？）

ネリの言葉が信じられなかった。何度も人間に裏切られたたどろろ女は、なぜあんなに澄んだ目で他人を見ることが出来るのだろう。

限は、人間が怖かった。

上辺だけ仲良くなっても、本性を見せれば手の平を返した様に嫌われるのが、分かりきっているからだ。

（どうせ皆同じだ）

完全変化でさえ、ネリには見せていないのだ。禁止されているので、故意に変化することは認められていないのだが。

（頭領が変化の許可を出すだけのことはある。）

柔軟な精神、そして他者を信じる心。だが、それを限は任務の為に

はいえ利用するのだ。

(……………っ！)

ネリの監視が“任務”である以上、少年に手を抜くという考えは生まれない。尊敬する正守にも、苦しい決断だったのが分かっていたからだ。

それほど、ネリを気にかけているのだろう。昼間にネリを見張っている翡翠と花島のことを限は知っているが、逆に彼らは知らない。

少年がただ単に、烏森の警護と結界師の補佐として来たのだと思っている。

そして、限はネリの行動を直接正守に報告することになっていた。

「……………ハア」

考えただけで気が滅入る。

限は、とぼとぼと2年1組の教室に帰るのだった。

(あんにやるめ……っ！)

ガタガタと少年の苛立ちを表すように、良守の机が揺れる。

良守は、ウロ様の寢床を直す約束があるので、午後を早退する予定である。昨日の仕事が夜明け間近までであったので、午後からにして

もらったのだ。

午前中は、安眠しようと思っていたのに。

(あいつめえ…兄貴と比べやがって…)

腸はわたが煮えくり返って、全く眠れそうに無い。

良守の前に座る市ヶ谷知則は、そんな様子を背中で感じ取り、話しかけない方が良くと判断した。

だが、田端はそんな雰囲気には気づかず(あえて無視し)、良守に話しかける。

「お、墨村が珍しく起きてるな。地震でも来んじゃないか？」

「…小さいのならもう来てるぞ」

ボソツとメガネ少年の市ヶ谷が呟く。良守は、眉を寄せたまま、自称・情報の魔導師に顔を向けた。

「田端、志々尾って奴知ってる？」

「ああ、1組に転入した奴だろ。」

パラパラと天然パーマの少年が手帳をめくった。

「志々尾限ね。本人が割りと無口らしくてさ 謎が多いんだよね
」。住んでる所あたりからどーも一人暮らしらしいところだな」

「中学生で一人暮らし？」

市ヶ谷も興味をひかれたらしく、読書の手を置く。良守は、チラリと銀髪の少女に目を向けた。

ぼうつと窓の外を眺める彼女の横顔は、どこか憂いを帯びている。

他人の恋路に首を突っ込む気は無いし、限は『気に食わない奴』として認識してしまったので、教えてやる気も無い。

「1組の担任に直撃したら、他人の家庭の事情を詮索するんじゃないじゃないって。」

「まあ、そうだろうな」

他人事なので、別段良守が同情の念を抱くことはない。裏会の存在さえつい最近知ったのだから、無理は無かった。

平和で騒がしい日常が、始まるうとしていたのだった。

「新たに部下を？」

「はい。人間になって昼間に学校へ通ってみたいと言っていました。」

直属の上司である藍緋に、妖ネリに傷を癒されて妖気の質が上がった。は、氷蛾の話を持ち出した。

この妖、名を黄河わうがという。

内緒にする話でも無いので、特に二人とも構えて話したりはしていない。日に日に膨らんでいく集団に、人手はいくらあっても良いのだ。

『蛾の妖なんです、人型なので…。見たところ、知能も能力も高いと思います』

「そうか……うむ、良いだろう、連れてこい。学校か…懐かしいな」
『行ったことがあるので？』

伸縮自在の腕で水差しから水を注ぎつつ、黄河は驚いたように言った。

藍緋はニヤリと笑う。

「随分昔、学校の保健室というところに潜入したことがあってな。それを思い出したのさ」

くるくると変わる表情豊かな人間は、見ていて飽きない。
男、女、子供、両親、老人が手をつないで帰って行くのを見て、憧れたものだ。

人皮の許可を白に取りに行く為、藍緋は黄河に待つように言った後、研究室を後にした。

独りになった後、黄河がコップの水を一気に仰ぐ。

妖気の質が上がり、より強靱で素早い動きが出来る肉体を手に入れた結果、黄河の地位は大きく向上した。

実質、藍緋の部下の中では知能・諜報において右に出るものはいない。戦闘は専門ではないといいつつも、増強剤を摂取した時と同等の力を発揮できる為、並以上の実力はある。

（あの娘…本当に人間なのか…？）

後から考えてみても、不審な点ばかりが浮かんでくる。

まず、結界師の存在意義と反していることが腑に落ちなかった。妖を抹殺するのが仕事のはずなのに、死にかけの妖を助けるのはどう考えてもおかしい。

しかも、見返りも求めていないのがより一層不気味である。

（また接触してみるか……）

黄河は、藍緋に言われた通り部屋で待ちながら、思考を巡らせていたのだった。

白の執務室にて。

藍緋が人皮の許可を求めると、白髪の男は少し考えた後口を開いた。

「……あいつはもう動けるのか？」

「偵察程度なら問題ないだろう。戦闘はそこそこだが、心配は無い。」

「以前よりも妖力が増し強くなったことは、おくびにも出さない。黄河も立派な研究対象なのだ。白に任せたらまた捨てられかねない。幹部全員をまとめる男は、手の甲に顎をのせたまま藍緋を見た。両者共、藍緋が蟲の支配を逃れたことに関して、まだ触れたことはない。」

「良いだろう、許可する。ついでにお前も行ってみるか？」

「…構わないのか？」

今、藍緋を縛るものは何も無い。逃げようと思えばいつでも逃げる事が出来るのだ。

約50年、この城に拘束されて以来初めての白の言葉だった。内心動揺した女性を見透かして、スーツ姿の男性は面白そうに笑う。

「問題は無い。お前も一度、城を出て烏森を実地調査してみたいだろうっ。」

「……………」

男の真意が掴めず、藍緋は狼狽していた。だが、これで大手を振って烏森に行く事が出来るのだ。

逃せば二度と機会は無いかもしれない。

「分かった。私も烏森の情報を持ち帰ってこよう」

ネリの存在は烏森の人間だけでなく、黒芒楼の妖の心まで動かし始めていた。

(16) 昔語りと垣間見える真相の欠片(前書き)

感謝!!7350ユニーク!!

お気に入り登録35件!!

ありがとうございます。20話くらいから限とネリの日常を差し入れると思いますので、甘々無理　!という方はご注意ください

(16) 昔語りと垣間見える真相の欠片

限が早退したと聞いて良守が肩すかしを食らった後、ネリも早退すべく荷物をまとめていた。

限とたくさん話したい事があったのに、彼がさっさと帰ってしまったので、授業を受ける気が萎えてしまったのだ。少女の小さな口から、ため息がこぼれる。

「はあああ……」

烏森を明日の早朝に離れようと思っていたのに、とんだ邪魔が入ったものだ。

黒芒楼に行くべきだと思う自分と、限と一緒にいたいと願う自分が、少女の中で戦っている。

少し頭を冷やそうと、ネリは教室を後にして、出入口の女子トイレから姿を消した。

行き先は、裏山である。

限は、裏会からの書状を持って雪村の当主に、挨拶を済ませてきたところだった。

油断の無い様子は、さすが雪村の結界師。言葉の端々に、それとなく不満をにじませる様子は、注意深く聞いていなければ分からなかつただろう。

だが、ネリと雪村家の仲は問題ないようで、少年は少しホツとした。

（次は墨村の家か…）

尊敬する正守の生家に、若干緊張しつつ扉に手をかける。応対に出てきたのは、三兄弟の父、修史だった。

「あ、こんにちは。良守のお友達かな？ごめんね　良守、今、学校に行つてて…あれ？」

「当主はご在宅ですか？」

暗青色の書状を目の高さまであげ、限は再度口を開いた。

「裏会の使いの者です。こちらの当主にお会いしたいのですが」

（裏会！？）

修史はびっくりして息を呑んだ。

「ねえ氷蛾。あなた昼間、外に出るのは無理そう？」

『やってみたことが無い故、分からぬが…。主が望むなら、昼間で

も外を飛んで見せよう』

裏山の中腹、鬱蒼と繁った森の中でネリは氷蛾に妖力を譲渡していた。睡眠を取った後は、妖気が満タンに戻っているのが分かったので、暇を見つけたら氷蛾に分ける事にしたのだ。

急激にやり過ぎると、氷蛾が苦しそうな顔をするので適度な加減を保っている…つもりである。

「ん〜多分、土地神クラスになれば外も歩けるんじゃないかと思う　うあ…」

『主!?!』

突然バランスを崩したネリを氷蛾が支える。

少女を切り株に座らせると、ネリは手を握ったり開いたりを繰り返した。

完全変化していないと、どうにも妖気の操作が甘くなるようだ。出し過ぎたと分かるのが気持ち悪くなってからなのは、どうにもいだけない。

「ん〜まだまだかな…」

『主の妖力は…烏森とは随分違うのだな』

少女の真似をするように、手を握ったり開いたりしていた氷蛾が、ふと思い出したように言った。

『烏森は、一方的で圧倒される力がこの身に押し寄せ、己を保ち続けるのが難しくなる。だが、主の妖力は緩やかで温かい。』

氷蛾の妖気の質が、また飛躍的に上がったのだが、ネリには今ひとつ分らない。自分の力さえ分らないのに、他人の感覚が分かるはずも無かった。

「そういえば、烏森で完全変化するのって、私も何か違和感があるんだよね…。1回しかしたこと無いけど」

レナモンが死んだ、あの夜一回きりである。

眠たくなってきたのか、ネリが久しぶりに大きなあくびをした。

『主。夜まで休んだらどうだ？』

「…うん…。わあ嬉しい。眠たいや……」

氷蛾に別れを告げると、少女はフラフラと鏡の世界を後にする。

空間の切れ目から顔を出し、畳に倒れるように眠りにつく。

氷蛾には、彼の部屋を自由に開け閉め出来るようにしてあるので、放置しても大丈夫だ。少女は心置き無く、久しぶりの夢の世界へ旅立つのだった。

そんな少女の様子を雪村家21代目当主は、扉の隙間から見ていた。家の中に違和感が生じたので、客人の部屋を覗いたのが、ちょうどネリが倒れたのと同時だった。

いきなり裂け目からこぼれ落ちてきたネリに、時子は血相を変えて扉を開ける。

また無茶なことをしでかしたと思ったのだ。

「ネリさん、大丈夫ですか!？」

「……す……」

穏やかに眠るネリを見て、時子が肩の力を抜く。この家に生じた違和感の正体は、時子の目の前にあった。

空間が開きっぱなしになっていたのだ。

徐々に閉じていくその裂け目の向こうから、妖気の残滓がネリまで漂っている。

「これがネリさんの…空間支配、ですか」

寝ながらにして、空間を繋いでしまう少女に恐れを抱きつつ、時子は結界を張って裂け目が閉じるのを防いだ。

時音から昨夜、言われた言葉が頭をよぎる。

ネリちゃんは『黒芒楼』という所に行こうとしているみたいなの

家の一番端に位置する当主の部屋で、盗聴防止用の結界を張るように言った孫に、時子は驚いたものだった。

聡明で真つ直ぐに育ち、思慮深くあれという教育は、きちんと結果を出しているようだ。

（ネリさんはまだ我々に話していないことがあるようですね）

烏森が妖の集団に狙われているのは、限が来る前に知っていた。ネリの言動を、孫である跡取りが逐一報告してくれたからだ。

時子が空間の裂け目に手を当て、目をつむる。意識を集中し道の構造を把握していくに従い、皺が刻まれた顔が驚愕に染まっていった。

「こ、これは…何という…」

正守と同じ驚きにたどり着いた最巧の結界師は目を見開き、ぐーすか眠る少女を思わず振り返った。

本人は、久方ぶりの安眠を昼間から貪っている。

時子はハツとして、結界を解除した後押し入れから枕を出して、少女の頭の下にひいてやった。ついでに毛布もかけておく。

「ネリさん…あなたは、いったいどこから来たんでしょうね…」

老いた白髪を揺らして、時子はネリの部屋からそっと出ていった。

ネリは、夢を見ていた。

随分昔の、遠い記憶である。

彼女が7歳で、レナモンと会ってから2年が過ぎていた、2回目の世界渡り。^{ソフト}

『呼ばれている』を感知し、初めて人助けに行った異世界は日本に良く似ていた。

だがそこは、闇の力がネリの世界よりも強く、どちらかといえば結界師の世界に近かったかもしれない。

闇の力が強いのは、その国にはびこる『鬼』のせいだった。

闇を統べる『鬼』の一族。それは、人間を恐怖に陥れ、喰らい咀嚼し、力を増大させていく凶悪な存在であった。

そこに、ネリが呼ばれた。世界を飛び越えて、『世界』の助けに答えたのだ。

いきなり降って沸いた銀髪の少女、しかも幼くして特級の実力を持つ存在に、『組織』は狂喜乱舞した。

鬼を殺す自治組織、その名も『刹寡（さつか）衆』

少数人数でグループを組み、鬼を一对複数で討ち取ることを戦法とした、血生臭い組織。

ネリの身元保証人となってくれた女性剣士には、血の繋がっていない娘がいた。

その子が、『百合香』

白い狩衣に烏帽子を被り、時間操作を得意とする黒髪の彼女は、中級能力者だった。

ネリ自身は、レナモンと共にティマーとして戦い、しかも空間転移が出来たので特級能力者。

同じグループだったお陰もあり、彼女達が仲良くなるのにそう時間はかからなかった。

（嫌だ…見たくない!!）

心の奥底にしまったはずの、進んでいく悲しい記憶に、ネリは覚醒しようともがいた。

見たくない!!

あんな光景は二度と見たくない!!

覚める覚める覚める覚める!!

目をつむり耳をふさいで、ネリは抵抗した。だが鮮明な夢は、幸運なことに突如現れた女性によって遮られる。

それは、黒芒楼の『姫』だった。

（え……?）

『……お願い、早く来て頂戴。あなたのお友達だったんでしょ?』

銀髪に藍色の瞳、黒と白の着物を着ている美しい女性は、暗闇の中

でネリだけを見ていた。

光も何も無いが、『姫』の姿だけははっきり見える。

悲痛な眼差しが少女にすぎるように向けられ、見ていて痛ましくなるような表情をしていた。

『白は私の意識が乗っ取られていることに気がついていないのよ。伝えようにも偽者の傍では私の力が使えないの』

だから、と闇の中で『姫』がネリの手を包み込んだ。

『お願い。私の身体を返して頂戴。じゃないと私、このまま死んでしまっわ』

(本当に真っ直ぐな女性ひとなんだな…)

意識が覚醒していくに従って、女性の顔が不安で歪む。ネリは安心させたくて、手を握り返した。

「必ず、戻して見せます……姫様」

『ありがとう……』

ありがとう、私の

「ネリちゃん!!」

「……………!」

最初に目に入ったのは、木目が素晴らしい天井だった。部屋は暗く、大分陽が傾いているだろう。

気づけば、全力疾走した後のように滝の汗をかいていた。

息も荒く、呼吸を整えるにも追いつかないくらいである。

「なんで…姫、様が…?」

「ネリちゃん、大丈夫? 晩御飯の時も起きられなかったみたいだけど…」

目を向けると、“白い着物”に着替えた“黒髪の少女”がいた。その姿に、『百合香』を思い出しネリは息を呑んだ。

頭では分かっている。もう彼女がいないということは。だが、駄目なのだ。身体が拒否してしまう。

毛布を蹴飛ばす勢いで時音から距離を取ったネリは、肩で息をしていた。そして大きく息を吐くと、ペタンと腰を畳に降ろした。

時音はその素早い動きを追うことが出来なかったのか、目を見張っていた。ネリの尋常ではない様子に、結界師の少女は恐る恐る口を開いた。

「ネリちゃん……あなた、今日の仕事休んだ方が良いわ」

「……すみません。」

大丈夫、と言って仕事に行くのは簡単だ。だが、今夜からは烏森に限が来る。こんな状態では彼を余計心配させてしまつたろう。

ネリは大人しく、歳上の好意に甘えることにした。

「そうか……あいつは来ないのか」

「ええ。……あんたこそ大丈夫なの？ウロ様の寢床直したんでしょ？」

「まあな」

地上で結界師二人がネリの話をしていた。その会話を、木の上で聞いていた限はそつと息を吐く。

報告することが無さそうで、安心したのだ。だが、顔を見れないのはやはり寂しい。

「はあ……」

何か物足りないものを感じる、限であった。

(17) 大首車、アニメでは『キヨ』って言ってるのかなあ？ (前書き)

ここまで読んでくださって、ありがとうございます。

第2章がとても長くなる気配がしてきました。

話がなかなか進まなくてすみませんm (((m

(17) 大首車、アニメでは『キヨ』って言ってるのかなあ？

眠ったらまたあの夢が追いかけて来るのではないかと、ネリは縁側で夜風に当たっていた。

足をぶらぶらさせて、夜空を見上げる。今夜は月に雲がかかってあまり明るい夜では無かった。

「(もう…来ないですよ。私は夢を見ないで眠りたいのに)」

誰に言うでもなく、異国の言葉は雪村家の庭に溶けていく。

限達は、今頃『大首車』を倒してる最中だろうかと、ネリは膝を抱えた。

「ほう…これが烏森か。思ったより小さいんだな。」

「はい。…妖混じりの娘は学校にいないようです。その代わりに、新顔の小僧がいました」

偵察用の妖を腕に止まらせて、黄河は上司に報告した。藍色の髪の女性は、興味深そうにまだ学校を眺めている。

部下はそんな様子を見て苦笑すると、また偵察を空に放った。今日の様子見は本当についてなので、偵察は1匹だけなのだ。

「じゃあ俺は木の上で例の奴を待っていますので、御用があればお呼び下さい」

「分かった。気をつけるよ」

一気に部下の気配が遠ざかると、藍緋はポツリと呟いた。

「出てこい、火黒」

「…なんで分かった？」

部下の黄河が被っているのと同じタイプの人皮が、藍緋の隣に現れた。まるで瞬間移動のようだが、この妖ならおかしいことではない。

姿が捉えられない速さで移動するのが『火黒』なのだから。藍緋はため息をついた。

「美味過ぎる話だと思っていた。白が見張りをつけずに私を外に出すわけがないからな」

「ま、そうゆうこと。アンタず　と城から出たがってんだもん。分かり易いったらありゃしないぜ」

ケラケラと笑う火黒に、藍緋は銀髪の少女と会うことを早々に諦めた。こんな危険な奴がいたら、ゆっくり話も出来ない。

「これから新しい部下を迎える。殺すなよ」

「分かってるって。何にも手は出さねえよ」

疑った目で女性が戦闘狂を睨むと、火黒は肩をすくめただけだった。

『良かった。これで我も人皮というものが被れるのだな？』

「…そこまで、コレに興味を示す妖も珍しいな。そんなに人間になりたいのか？」

木の上にいる黄河と羽を広げて滞空する氷蛾は、藍緋に会う前に少し話をしていた。

氷蛾は目を輝かせて、頷いた。ちなみに演技では無い。

『うむ。人間に混じって昼間、学校に通ってみたい。陽の光の下でな』

「それは、あの妖混じりの娘に影響されたのか？」

『……………』

何を言っているのか分からない、という風に氷蛾が首を傾げてみせると、呆れた顔をされた。

「お前、気づいてないのか？あの娘の妖気がまだ、お前の中で消化されていない。俺と同じく妖力をもらったのは明らかだ。」

『……………ふむ……………』

毒の気配が強まった氷蛾に、黄河は『落ち着け』と苛立ったように言った。

「あの娘とお前が知り合いであろうが無かるうが、俺には関係ない。ただ、俺の上司がその娘に会いたがっている」

『藍緋…という名だったか。植物系だが高等な、力も強い妖だと聞いている』

「そこまで知ってるなら話は早い。上司は、その娘の話次第で協力を申し出ると言っている。

お前達の目的が何かは知らないが、黒芒楼を潰そうというのなら力を貸しても良いそうだ」

一気に言った後、黄河は水色の髪を持つ青年を伺う。氷蛾は逡巡^{しゆんしゆん}した後、足輪に力を籠めて主に指示を仰ぐことにした。

『少し考えさせてくれ。本人に聞いてみる』

「連絡手段まで持っているのか」

感心したように言う男の前で、氷蛾は空間の切れ目から姿を消していった。

『主、主！』

「……………どうしたの」

ぼんやりしていたネリは、顔を上げて空中を見上げた。しおれた花の様なネリに、青年はギョツとして直ぐ様庭に降りる。

『気分が優れないのか、主。』

「少しね…夢見が悪かったもんだから……。そっちは？何かあったの？」

『それがだな……。藍緋という妖が、今夜裏山に来ているようなのだ。僕の言葉に、主である少女は目を見開いた。それが意味するのは、藍緋が蟲の支配から逃れる事が出来たということだ。』

「わあ、良かった！藍緋さん、自由になれたんだ」

『それで、主と話をしたいとこの前の妖に伝言を頼まれた。主との話し合い次第では、協力するとも言っておったぞ……。どうする？』
体調が万全でない様子のネリに、氷蛾は心配そうな顔をした。だが少女は気合いを入れて立ち上がると、急いで部屋に入って着替え始める。

服は オランダの中学で来ていた、清楚な制服にした。
夜行の戦闘服で行くのははばかられたのだ。

烏森学園中等部の制服を、座卓に置いて少女は自分の部屋を後にした。しよつとした。

「ネリさん。どこに行くつもりですか」

「時子さん……。」

世の中、そう甘くは無かった。

「もう戻ってこないつもりですか」

「……」

空間支配系能力者は、自分の周りの気配に敏感である。家の敷地内に侵入した妖に、気づかないはずもなかった。

時子は既に結界師独特の構えを取り、いつでもネリを結界に封じ込める事が出来る。

銀髪の少女は　深く礼をした。

「すみません。私、行きます」

「いけません。そんな危険な所へ、一人で行かせると思いますか」
最巧の結界師はネリを直ぐ様結界に閉じ込め、たくさんの呪符を目にも止まらぬ速さで貼った。

空間転移が出来ないよう、呪力を封じる札である。

だが、銀髪の少女は困ったように笑った後　変化した。

「……………っ!？」

凄まじい妖気に耐えられず、時子の結界がビリビリ震える。

呪符によって強度もあげられた結界で、何とか持ちこたえられる程度。

時子の額に汗がつつた。だが少女の顔は涼しいものだった。

『すみません。』

ネリはなおも謝る。そして、一言呟いた。

イツナ

尻尾の先から、7色7匹の狐が放たれて結界を食らった。それだけで、時子の結界は呪符ごと砂の様に分解された。

存在を拒絶され、原子に分解する無情な7つの炎狐。意思を持ち、主人の命に従う狐達はネリの周りを守るように飛び回った。

抑えることを止めた、紫色の炎。それは少女が進む度に天井や障子、床板をガタガタと揺らした。

ゆっくりと、庭に続く扉を開け少女が部屋から足を踏み出す。

ネリの背中を呆然と見ていた時子に、妖狐は顔を向けずに口を開いた。

『黒芒楼の幹部の一人に会ってきます。もしかしたら、仲間を引き込めるかもしれせん。……大丈夫、会うだけですから。必ず戻ります』

彼女の表情は見えない。

どうしても何か言わなければと、古いさらばえた身体を叱り飛ばし、
時子は立ち上がって叫んだ。

「貴女がそこまですることは無いのですよ!!!」

『……………!』

一瞬歩みを止めた後、ネリは床を蹴る。

紫色の光をまとわせて、少女は氷蛾を従えながら雪村家を後にする
のだった。

「先日はどうも」

「……………藍緋さんは、あの玉を試してくれたんだね。正直意外だった
よ、信じてもらえないと思ってたから」

妖気を撒き散らしていたらすぐに気づかれてしまうので、早々に少
女は妖狐化を解いていた。

今は、空気を踏みつけることで空中に浮かんでいる。

「ま　藁にもすがるといっつか……………あの人も複雑な事情のようだが
らな、とにかく蟲を取ってくれたことは礼を言う」

いうことがわかったはずだが、少年に分かるうはずもなかった。

『一つ…おたずねしたいんですけどねイ……』

廊下では障害物が無い為、少年結界師が教室に逃げる。すると、大首車は車を軋ませながら教室に入ってきた。

『結界師ってエのは…あんたかイイ?』

「だったら?」

キヨ、と不気味に笑った顔は、車輪を直角に方向転換すると教卓側に向かつて走り出した。まるで木の葉を蹴散らすように、生徒の机が宙を舞う。

防御の為に結界を展開した良守は、思わず毒づいた。

「この…学校の備品になんてことしやがる!」

机に埋まらない様に、結界で道を作り廊下に戻る。すると、ガラスが盛大に割れる音がした。

「今度は何だよ!?!」

顔を音がした方向に向けて 良守は顔をしかめる。窓が施錠されていたから仕方が無かったのだろう。だが、妖混じりの少年は自分が割ったガラスなど、目に入らない様子だった。

「てめえ…それ直すの誰だと思ってるんだ?」

ジト目で指摘する良守に、限はどこ吹く風である。

廊下の壁を重力に逆らって駆け上がり、限は己の鋭い爪を振りかぶった。危険を察知して、妖が駒のように高速回転する。ガキイン、という音と共に少年が弾かれると、彼の右手の指が反対方向に曲がっていた。

「ちっ！」

『あんたは……』

無理矢理ベキバキと元通りの位置に戻す少年の様子は、手慣れたものであった。

『結界師イ……じゃないようだねイ……』

年増女の目が凄みを増した。

『じゃあ用は無い』

攻撃しようにも、駒のように回るので手の出しようが無い。限は、天井や壁を卓球の玉の様に高速で蹴った。

もはや、良守には動きを追うことも出来ない。

「くそ　速えなあいつら……」

若干呆れをにじませつつ、良守は見守ることしか出来なかった。一方、限は妖の回転スピードに慣れてきていた。どの瞬間にどちらを向いているか分かれば、攻撃出来ないことは無い。

何回か壁と天井を蹴った時に、自分のスピードを調整すると、一直

線に蹴りを顔面に叩き込んだ。

校舎のガラスといわず壁ごとぶち破った大首車は、そのまま空中で回転を始める。

「オイ！それ一体誰が直すと　コラ！」

修復する箇所が増えたことに不満の声をあげる良守だったが、無視する限。床を蹴って空中に踊り出ると、向かって来た妖に取りついて回転ごと動きを止めた。

「すげえ……あいつ回転止めやがったぞ……」

そこではたと気づく。一番最初、結界を破られたことを思い出したのだ。抉られた廊下はまるで、鋭利な刃物で傷をつけられたようだった。

そこから考えられるのは……

「駄目だ志々尾！離れろ！そいつは　」

だがその言葉は一瞬遅かった。お齒黒をさした口がニィとつり上がる。木製の牛車の車輪には本来ついていないであろう、仕込み刃が顔を出す。

妖混じりの少年がのけぞったが、もう遅い。

車輪の縁を両手で掴んでいた限は、回転する刃に袈裟懸けに切られた。

「志々尾　　！！」

良守の声が、夜の校舎に響き渡った。

(18) 会いたかったけど会いたくなかった存在

「藍緋さん、連れてきました。」

「ああ、」苦……………」

白衣姿の女性が振り返ったが、銀髪の少女を見て言葉が止まった。だが、暗闇ということもあり、ネリが藍緋の表情を把握するまでには至らない。

ネリは内心首を傾げつつそのまま、フレンドリーに挨拶を試みることにした。

「…どうもこんばんは。ネリといいます」

ペコリと、ネリが軽く頭を下げると藍緋は苦虫を潰したような顔をした。そして視線が一瞬だけ隣にいる男に移る。

ピリピリとした空気に気づいて、女性の目線の先を追ったネリは、黄河と同じ顔をした人皮に目を向けた。

黒髪に黒スーツ姿の人皮は、当然中身は違うのだろうが黄河と瓜二つだった。ただ、黄河は目を見開いて固まっているのに対して、藍緋の横の妖は終始気味の悪い笑みをたたえている。

先に口を開いたのはその笑みを浮かべた方だった。

「あれ　藍緋。あんた敵と内通してたんだ？」

「……！」

ネリは訳もなく震えた自分の身体に、思わず1歩下がってしまった。

初対面なのは当然だ。だが、原作漫画の知識が、ネリに警鐘を鳴らしていた。少女の中で『まさか』という思いがどんどん膨らんでいく。

「まずいだろ、今度は蟲を頭にぶちこまれるだけじゃ済まねえかもよ？」

「あ……あ……かつ！」

ネリは、恐怖にわなわたと震え始めた。“その名”を口にするのが、怖い。

いつかは会わなければならない存在、だが怖くて会いたくなかった存在。

限の天敵、である。

死んだ相棒の力を己の身に宿した時、ネリは『きつとなんとかなる』と、今思えば何の策も無いまま思っていた。

だが、この男はそんな生易しい存在では無い。今、少女はようやく理解していた。

（駄目だ。怖がっちゃ、駄目。限を殺させない為に私は　！！！！）

緊張と恐怖で倒れそうになりながら、ネリは勇気を振り絞って呟いた。

「……………かぐ、ろ…」

「……………へえ。俺の事知ってるんだ？」

クツクツと笑う男性は、さも面白そうに少女を見た。

そして空気が時間を吸ってしまったかのように、少なくともネリにはそう感じた。停滞した。

男の肩がほんの少し下がり、右足の靴底にかかる圧力が消え、右膝が前に出る。大腿部が僅かに服の皺を伸ばし、反対に膝下の服の皺が深くなる。

たった、右足を一步動かそうとするその男の動きが、ネリの命を脅かす。少女はその恐怖に耐えられず

「「「「！」「」」」」

瞬間的に九尾の狐へ変化していた。

まるで地上に隕石が落ちたかのような、まばゆい光源。

紫色の炎の柱と化した少女を見て、黄河は火黒を警戒しつつ、少女の桁違いの妖気に恐れおののいた。

(人間とは思えない……！)

火黒は感心した様に、のんきに口笛を吹いている。人間の身に余る妖力、威圧感^{プレッシャー}、そして気高さを併せ持つ少女に興味が沸いたようだ。

「美しいな」

火黒の咳きは、黒芒楼側3人の心を表していた。

藍緋はというと、少女の姿を凝視したまま、喘ぐように言葉を絞り出した。

「その、姿は……」

研究部である藍緋はこの中で一番姫に会う機会が多い。姫の延命装置を手掛けているのは、主に研究部の藍緋だからだ。

ネリの目は、瞳の虹彩が縦に割れた獣仕様になり、自身の身長を軽く越える尻尾の一本一本が、背後で蠢いている。

姫と同じ、『藍色の瞳』。

姫と同じ、『銀色の髪』。

姫と同じ、『黒と銀の九尾』

外見的特徴が似過ぎてている。藍緋が衝撃から立ち直れないでいると、火黒が舌舐めずりせんばかりに、妖気を発する少女を見た。

「あなた　俺が怖いのか？」

『……そんなこと無いですよ』

震える声に説得力は無い。

蛇の如き尻尾は少女の後ろでうねり、跳ね、のたうつ。漆黒の球体も少女の本能からか、少女が心の中で呟く前に発現していた。

主の過剰ともいえる反応に、氷蛾は火黒と呼ばれた相手に目をやった。

人皮を被っているせいか、妖気の類いが全く感知出来ない。分かる
とすれば

(勘…もとい本能か……?)

対峙しているからこそ分かる。敵が目の前にいるのに、ここにはいないような感覚。

自分の首に刃が突きつけられているのに、身動き一つ取れないような
な圧迫感。

命を握られているのだ。ここにいる全員が。敵味方関係無く。

ネリの獣耳を興味深そうに眺めながら、火黒は両手をズボンのポケット
にしまった。

「ひっでえな。なーんにもしてないだろ、まだ。」

『……………』

やれやれ…と首を振る火黒が、藍緋を振り返る。硬直したままだった
女性は、慌てて火黒の腕を掴んだ。

「勘違いするな。私はその娘と話をしたいだけなんだ」

「話、ねえ？」

チラリ、と男の視線がネリを刺し、少女は背中に悪寒が走った。藍緋がすまなさそうに口を開く。

「…すまない。話がこじれたが、私と黄河に敵意は無い。火黒は、私の『監視なんだ』」

『……いや、それでこの状況はまずいですよね？』

認識の齟齬に、ネリは目を白黒させる。監視の前で密会する馬鹿がどこにいると言うのだ。藍緋が火黒を伺うと、男は観念してため息をついた。ネリから目をあっさり外して、藍緋に顔を向ける。

「……つまり見逃せって？」

「お前は蟲を入れられていないのだから、嘘の報告も出来るのだろっ。」

「それやって俺に何の得があんだよ」

監視と交わしているとは思えない会話を、ネリは緊張しながら聞くことしか出来ない。

藍緋がとどめにとんでもないことを言った。

「彼女が姫の延命に役立つかもしれないんだ。協力しろ、火黒。」

『なっ……！？』

飛び出した本音に、ネリが言葉を失う。藍緋はネリにすぎるように言った。

「ここ数週間で、姫の妖力がいきなり低下し始めたんだ。私の見立てではあと1週間もちそうに無い。黄河を治した時の様に姫のことも治してくれないか？」

「まあ、確かにさっきの妖気があれば、助かるかもしれないな」

あっけらかんとした火黒から目を外し、ネリは女性を睨んだ。

『最初から私を利用するつもりだったの？』

丁寧語も抜ける程の怒りが、少女を突き動かす。お陰で火黒への恐怖は紛れたのだが。藍色の髪を揺らして、白衣の女性は必死に頼んだ。

「利用では無い。あくまで『お願い』だ。黄河の肉体損傷を回復させ、しかもレベルアップさせたその妖力。是非、姫にも分けてやって欲しい。」

ネリは、藍色の瞳を困惑気味に揺らした。藍緋の性格は原作を知っているが故に、熟知しているはずだった。本人は、『お願い』と言っているが、火黒が目の前にいる時点でこれは『脅迫』である。

(ど……どっしょ……)

夢の中で姫に頼まれたのを抜きにしても、ネリには黒芒楼に行かなくてはならない『理由』がある。だが、時子に約束したのだ。

必ず、戻ると。

ネリが口を開いて言葉を紡ごうと息を吸った瞬間、5人の間の空気が動いた。黄河が舌打ちを漏らす。

「人間がこいつの妖気で気づいたようです」

「そのようだな。退くぞ、火黒。」

「はいはい」

お預けを食らった火黒は、状況に追い付いていないネリを一瞥して目の前から掻き消えた。

『ええ！？』

そしてすれ違いざま、ネリの顔に息がかかるような距離で、震え上がるような言葉を残す。

「また、来るから」

『！！？』

至近距離まで接近を許してしまった妖狐は、見事に彫像のように固まった。慌てて彼女が振り払った時には、もう4人　氷蛾も含めて　はいなかった。

祖母から式神でネリの行動を知った時音は、サツと青ざめた。引き留めた時子も、既に式神を多数放ったとあり、時音には『烏森のお務めを優先させるように』と締めくくられていた。

白尾に、良守と限が戦っている場所へ誘導してもらいながら思案する。

(二人にいつ言おうか……。戦闘中に気を散らすのは危険だし…) かといってネリを放っておくのは論外だ。だが時音の思考は校舎が破壊される音で、目の前に引き戻された。遠目に車輪の妖が確認出来る。

「あれは……」

「志々尾　　!!」

そこで良守の絶叫と共に夜行の戦闘服の少年が、妖から弾き飛ばされた。間一髪、時音の結界が限を受け止める。

すぐに駆け寄ると、少年の左肩からへソにかけて痛々しい裂傷が一直線に走っていた。内臓までは届いていないようだが、重傷であることには変わり無い。

「限君…！限君！」

身体は揺すらず、すぐ傍で声をかけ続けると、少年はゆっくり目を開けた。ほんの短い間、気を失うだけで済んだようだ。

「良かった…声は聞こえてるみたいね」

「……ぐっ！」

少年が身体を起こそうとしたが、歳上の少女は慌てて止めた。すぐに動けるような傷では無いし、下手に動けば出血も酷くなる。

妖と交戦中の良守を負傷した少年が見ているのに気がつき、時音は『大丈夫』と微笑んだ。

「あの程度なら、あいつにまかせて問題ないわ」

「……」

始終無言の限は、ジッと戦いを観察している。墨色の着物の袖をはためかせ、良守は“何かを狙って”結界を繰り出していた。

高速回転する妖は、バカ正直に困んで滅することが不可能なのだ。少年結界師の企み顔が気になり、限は寝ていられなかった。

おもむろに起き上がる少年に、時音は注意しようとして　息を呑んだ。

（傷が…塞がってる！？）

跡は残っているものの出血はピタリと止まり、傷口は細いピンク色の線となっていた。

驚異的な回復力である。

自分の背中に限の視線を感じたのか、良守は背中越しに地上へ声をかけた。

「志々尾オ、まだくたばってていいぜ」

不敵な笑みを投げ掛けた後、妖に向き直る。飛び回っている大首車が良守に向かってきた。

（来いよ…！）

少年が中にいる防御の結界を、大首車は破ろうとする。だが、良守は慌てることなく結界に力をこめた。

堅くも無く、軟弱でもない絶妙な力加減で大首車の回転を一瞬だけ受け止めることで封じる。

間髪入れずに横から別の結界が、年増女の顔面を叩いた。

『ッ！　このガキが！』

口汚く悪態をつく妖は、良守が自分の速度に慣れてきたと見るや否や、逃げ回り始めた。

烏森の力を吸収すれば、人間の小僧など敵では無いのだ。そして少年結界師に、大首車を独りで捕獲する実力は無い。妖の狙いを敏感に感じ取った良守は、唇を噛む。

（攻撃してこなくなった…力を溜めるつもりか…）

焦りの表情が浮かぶ良守。地上にいる限には、目の前の状況と自分のやるべきことが分かっていた。

尊敬する正守の“弟”とは信じられないくらい弱い結界師だが、限は良守の戦い方を見て確信した。

自分と同じタイプだと。

戦いの中で成長し、戦うことでさらに高みに登る者。

時に周りの人間が驚くほどのスピードで強くなり、数段を一気に跳ぶ者。

(時々いるんだ…こつこつ奴が…！)

正守の言葉が思い出される。

きつと合つと思つてた…お前と。

限は、正守の思惑の一端に触れた気がした。

(18) 会いたかったけど会いたくなかった存在(後書き)

きゃーー！

明日簿記試験です！！

受かる気がしません。でもこの小説だけは絶対に完結させますので、ご安心下さい。(たとえ、試験に落ちてもです)

12月に結界師新巻発売です！！

田辺イエロウ先生に年賀状書こうか迷い中……m(´)´(m

(19) 周りが、見えない。

思考は一瞬。

限は空中にいる良守の結界に、その脚力だけで跳び上がりたどり着いた。

ガシツと片手で、結界の端に限が手をかけると、良守が不満の声をあげる。

「あ　！！俺の結界、何勝手に使ってた　！！」

「お前じゃあいつの速さに追い付けないだろ。」

カツと目を開いて妖の動きを捕捉し、限は弾丸の如く飛び出す。その人間離れた少年の動きに、良守はネリとの違いを感じた。

(ま　ネリは、まだ本気を出してねーみたいだけどな…)

攻撃力とスピードで良守に勝る限は、接近戦型である。反対に銀髪の少女は、結界師と並ぶ空間支配系能力者。防御に関しては、ネリの力がこの場にいる誰よりも強いだろう。

攻撃の概念自体を“拒絶”出来るのだから。

戦いに手を出そうにも限の速さに追い付けず、良守は焦りの表情を浮かべた。

地面と妖の間を、流星もかくやという勢いで“気に食わない”少年が、行き来する。

その時、唐突に昼間の会話が良守の脳裏を走った。

時音さんも、墨村君も良い人だよ。そんなに緊張しなくたって大丈夫。

悪い子じゃないので、長い目で見てあげて下さい。

良守は、ハツとした。

あの場で、少女はそれとなく結界師二人と限の仲を取り持とうとしていた。

時音さえ声を荒げた程の失礼な態度を、ネリだけが『困ったなあ』と、母親のような表情をしていたのだ。

(こいつと協力しろって……ことなのか?)

戦闘中にあるまじき、思考に沈んでいた良守は、妖のイラついた声で我に返った。

『邪魔くさいねイ……あんななんか殺したって何も出やしないのに……お呼びじゃ無いってんだよウ!!』

遠心力にものを言わせて、妖が限を振り払う。轟音と共に、盛大な土煙が着弾地点でもうもうと上がった。ネリから、妖混じりは打た

れ強いと聞いているものの、あまりのやられっぷりに良守の額に冷や汗が伝う。

妖の言葉が引っかかり、良守が大声を上げた。

「どういふ事だ！結界師を倒せばお前になんか良いことあんのかよー！」

『アンタ等はねー…賞金首みたいなもんなのさ…それにこの土地！奴等、良いこと教えてくれたねー……』

(賞金首?)

どこか人間染みた妖の考え方に、少年は違和感を覚える。そして、確信した。大首車に烏森の情報を渡したのは、『烏森を狙う妖の集団』だということに。

(こりゃ本格的に、ネリに未来を見てもらうしかねーみたいだな)

夜の教室で出会った異世界人、ネリ。

不思議で妖しくて美しい彼女は、今やこの烏森の命運を握っていると言っても過言ではない。

未来みらいを見るのがこれ程戦いを左右し、たくさんの人の運命を動かすことを実感した良守であった。

良守も、いつまでもぐじぐじと昔のことを引きずる餓鬼ではない。時音にいつもバカだ、考え無しだと笑われてきたが、もう14歳なのだ。

(協力しろってんなら…してやるーじゃねーか)

覚悟を決め、頭に戦略を思い描き、良守はニイと不敵に笑った。

「志々尾！」

地面を蹴ろうとしていた限は、少年結界師の今までとは違う声に、上を見上げた。

「感謝しろよ……これでどうだ　　結、結、結！」

複数の青みがかった中くらいの結界が、校舎の壁面に沿ってあちこちに形成される。

明らかに、妖を滅する為のものではない。妖の行動を制限するものでも、無い。

それらは、一つの限が動くべき道筋を示していた。

(俺の…ため?)

考えるより先に直感で理解した限は、良守の狙い通りに結界を足場として活用させた。より短い距離で行き来出来るようになり、それだけ妖への手数も増える。

先程までの倍以上の攻撃数に、年増女の顔から余裕がどんどん消えていく。力を溜めるのが全く追いつかず、仕込み刃も限によってへし折られていった。

妖が足場を轆いて消しても、限の動きに合わせて良守が新たな足場を作るため、効果は無い。

『1』、この…!』

動作が遅くなった妖に、限の痛烈な蹴りが大首車の顔面に直撃する。痛みに顔を歪ませながら、慣性に従って地面と平行に飛ばされる妖に、良守は新たな結界を追加した。

「結!!」

『ぎゃあッ!!』

巨大なハンマーの如く、真上からの衝撃に大首車の顔がひしゃげ、そのまま地面に叩きつけられた。

地響きと共にクレーターの中央で、ダメージを殺せなかった妖が憎々しげに口を開く。

『く…そ…!!』

「結」

静かに良守が大首車の動きを封じる。車輪の中だけ囲み、回転できないようにした後、良守は妖の前へ降り立った。

「答える 奴等って何だ」

凄みをのせる良守の横に、服がもはやズタボロの限が立つ。遅れて時音も駆け寄ってきた。

無言の敵に囲まれて、妖は慌ててお齒黒の口を忙しなく動かした。

『あ、あたしもまた聞きでよくは知らないのさア！そ、そうだ！なんなら今からひとつ走りして』

途中から、妖の命を握る良守の顔が無表情になっていく。それは、結界師として14年間、育ってきたが故の面^{おもて}だった。

「滅」

価値ある情報を持って無いと判断し、良守は最後まで聞かず妖を滅する。耳に残る断末魔の叫びと共に、大首車は車輪を残して消え去った。

一拍の空白の後、時音が口を開く。

「初めてにしては連携取れてたわね。幸先良いわ」

微笑む年長の少女に、少年二人は一瞬顔を見合わせ、物凄い勢いで顔を背けた。

二人とも恥ずかしさ半分、気まずさ半分といった表情である。

良守が譲歩した形になったのは、限も良く理解していたのでなおさら恥ずかしそうだった。

昼間のことは、ほんの少しでも二人の間で消化できたようで、時音はくすりと笑う。

場の緊張が緩み、時音がネリのことを話そうとしたその時、烏森の大地が震えた。

「「「!?!?!」」」

ただの地震と表すには生ぬるい、大地の叫びのような 異様な揺れである。

突き上げる様な縦型の揺れに、とても立っていられず、三人は同時に足を取られて倒れた。

「な…んんっ!?!」

時音は舌を噛んでそれ以上言葉を続けることが出来ない。咄嗟にジヤンプと同時に平たい結界を形成させ、地面から数十センチ上空に逃げた。限も時音の結界に便乗する。

「良守!何やってんの、早くあんたも……」

「……………」

地面に両手をつく良守には、『何か』の感情が手から自分に流れ込んでいるのを感じていた。

言葉で表すなら 歓喜の叫び。

最初はただの地震だと思っていたが、『違う』と良守は直感した。

(これは……烏森の感情?)

心を遠くに置き忘れてきた様な幼なじみの表情に、時音が眉を寄せた。だが限は違うことに気を取られていた。

夜行本拠地では毎日のように傍で感じていた波動が、限の本能に“

異変”を知らせていた。

「これは……あいつの妖気か!？」

辺りを見回すと、校舎の向こう側から紫色の光の柱が立っていた。校舎を囲む結界を通してまなお、限達の所まで届く濃密で純粋な妖気。

(この妖気の放出量は半端じゃ無い…!何かあったのか!?)

だが、地面の揺れは一向に収まっておらず、この場から動くことが出来ない。

いくら身体能力が優れていようと、こつも足場が揺れていては感覚が鈍ってしまう。ならば空中から、と考えた限だったがその案も自分で却下した。白い着物の少女に目を向ける。

「良守!しっかりしなさいよ、大丈夫!？」

唯一の結界師である雪村の少女も、良守の様子に気を取られている。それなのに、『空中に足場を作れ』とは言えないし、墨村の少年をこの場に残す訳にはいかないのだ。

あくまで、ネリも限も結界師補佐役である。正統継承者を連れ回すことは出来ない。

「……ネリ……!」

ギリリ…と限は、奥歯が砕けそうなくらい噛み締めた。

『何か』は至上の存在に歓喜していた。気が遠くなるほどの長い長い年月は、“退屈”という名の毒でじわりじわりと己の身を腐らせる。

それを取り除いてくれるかもしれない、最高の存在がすぐ近くにいるのだ。

最近、めっきり“楽しいこと”が減ってしまい、退屈で退屈で『何か』は爆発してしまいそうだった。

面白い!!何者じゃこの娘は!!

わしの知らぬ世界の匂いがする!!もっと、もっとわしの近くに来い!!

『何か』は、子供のようにはしゃいで喜んでいて。目を輝かせ、身を乗り出せるものなら飛んでいきたかった。

溢れんばかりの喜びの波に、良守は困惑気味に『何か』へ話しかける。

(何がそんなに嬉しいんだよ、お前…)

面白いことが起きるからに決まっておろう!!

姿も見えない相手だが、『何か』は興奮したように跳び跳ねていた。まるで小さい子供が、新しい玩具を買ってもらえて喜んでいるように。

良守、早くネリをわしの城まで連れてきてくれ!!

(……………え?)

城って?と問いかげようとした瞬間、鼓膜を震わす大声で引き戻された。

「良守!!!!!!」

「あ!?!」

目は開いていたはずなのに、いきなり視界に地面が迫ってきて、慌てて良守は手を突っ張った。地面の揺れは収まってきている。

「今の、は…烏森なのか…?」

「どつという意味?」

呆然とする良守に、時音は地面に降り立って彼の身体を支えてやった。少しふらついたものの、良守は頭を振って霞を頭から追い出す。限がさつさと光の柱があったところに行こうとすると、良守がポツリと呟いた。

「烏森が…ネリをここに連れてこいって…言ってた。」

「…何だと?」

「あんた烏森と会話してたの!？」

“ネリ”という単語に反応する限と、土地と会話したと聞いて驚く時音。話を聞かない訳にはいけなくなつた限は、逸る心を抑えつつ結界師達の話聞くことにした。時音が思案顔になる。

「おばあちゃんからさつき連絡があつて……あの子、妖の集団の幹部と今会つてるんだつて」

「なつ……!？」

「オイオイ、マジかよ……」

もはや呆れた顔を隠さない良守が限の様子を伺つと、彼はワナワナと震えていた。手足は変化したままだったので、端はたから見ると、とても恐ろしい。

『え?』と結界師二人が注目する中、低い声が漏れた。

「ネリのやつ……どれだけ……俺に……心配かければツ……
気が済むと思つている……!?!?!?!」

それは、怒りと心配が行き場を無くした故の“震え”だった。邪気が跳ね上がると同時に、限の姿が掻き消える。

地を這うような限の声に、目が点になる二人。それには構わず、妖混じりの少年は校舎の壁を垂直に跳んでいき、すぐに見えなくなつた。

初めて限が己の心情を吐露したのを見て、良守は呆気に取られている。

「へえ…あいつ、ちゃんと喋んじゃん」

「……あの子、ネリちゃんが絡むと性格が変わるのね…」

お互い口に出すことは無かったが、考えていることは手にとるように分かった。良守が代表して、ため息混じりに口を開く。

「志々尾は、ネリのことが好きなんだな」

「分かりやすいわね。」

微妙な雰囲気になった、良守と時音だった。

(20) 無茶×お説教Ⅱ刹那の平和

昔からネリは周りに上手く馴染めない子供だった。だが、決して少女に非があるわけではない。

どうして私は他の子と違うのだろう、と幼くして寂しさを抱えながら5年間を過ごした。

ネリにとって不幸だったのは、生まれた時から異能に目覚めていたことだろう。離れた物体を引き寄せたり、世話をしてくれた人間の心に“直接”意思を伝えたり、とにかく『普通』ではなかった。

輝く銀髪に、^{アメジスト}紫水晶の瞳を、誰もが褒め称えた。だが、一度でも少女が自分らしく振る舞えば、たちまち同年の子供達は怯えた。

なまじ、容姿に惹かれて人が寄ってくるだけに、去っていく姿を見るのは少女の心を抉る。

レナモンに会ってからは、少女は他の人間に期待するのをやめることにした。

レナモンさえいればそれで良い。自分は間違つて“人間”に生まれてしまったのだ。異種族と仲良くなれなくても何も不思議は無いと、自分を納得させてしまった。それでもしないと、悲しくて耐えられなかったのだ。

宝石の瞳は輝きはすれど、暖かみは無い。銀糸の巻き髪は、陽の光を反射はすれど、彼女の顔に笑みが浮かぶことはない。

レナモンと会ってから2年経ち、以前よりかは笑えるようになったネリは、7歳の誕生日をどうにか無事に迎えた。

「レナモン。」

「……ここにいる、ユリカ」

長い冬が去って春の陽射しが大地を照らす季節。ネリは孤児院の裏の林から、空間転移をするところだった。もちろん、金色の相棒も後ろに控えている。

誰にも邪魔されない遠く離れた丘に道を繋いで、ネリはレナモンと切り株に腰を下ろした。少女が口を開く。

「あのね、あたし……“世界”に呼ばれたみたいなの。あと1週間以内に、違う平行世界に飛ばされちゃうと思う」

「……世界に呼ばれた？」

動きが止まったレナモンの目は説明を求めていたが、ネリは困った顔をした。

世界を渡る能力があるネリなのだが、本人にも漠然としか分からないらしい。

「ん　必要とされてる……みたいな、切羽詰まった感じ？何かか呼んでる気がするの」

「…それはユリカに選択権は無いのか？」

「…無いと思う…多分だけど」

だんだんと尻すぼみになっていく少女の言葉に、相棒は難しい顔をした。7歳の少女を必要とする世界に対して、呆れの表情さえ伺える。

藍色の瞳を少し険しくさせて、レナモンは当然の質問をした。

「院長殿にはどう伝えるつもり？1日で帰れる訳では無いのだろうか？」

「…置き手紙じゃ、だめ？」

「唯一の理解者に心配をかけてはいけないよ、ユリカ」

孤児院の院長、ベアトリックス・ネリ・ユーディは、よわい 齢70を越えた老婦人である。シスターとしても、教育者としても度量の深い人物だ。

後々、ネリの名は彼女からもらうことになる。

「でも院長先生は、あたしが世界を渡れるなんて知らないし…。」

「ユリカ。それでも正直に話すべきだ。彼女しかユリカ的能力を知らないのだから」

この頃は漠然と、“繋ぐ”くらいしか、ネリは自分の能力を把握し

ていなかった。

壊れたお人形を補修したり、欠けた壁を元通りにくつつけたり、ネリは目につく所を直して回った。それくらいしかやることがなかったのだ。

そしてある日、その行動を偶然見かけたユーディ院長はネリと話を
する。

あちこち直してくれてたのはユリカだったのねえ。ありがとう。
う。浮いた補修費でお腹いっぱいご馳走を食べましょうね

先生。あたしのこと、怖くないの？

能力のせいで散々つま弾きにあっていたネリは、レナモン以外の存在に好意を寄せなくなっていた。

愛らしい容姿のお陰で、養子の引き取り手は少なくなかった。だが最後には、皆一様に顔をひきつらせ、逃げ帰る。

化け物だ！！心を読む化け物だ！！

オランダ語以外で話す人間と、“直接”意志疎通しようとする
と、大抵の人間は恐慌状態に陥った。

美しく濁りの無い紫色の瞳は、7歳の少女が持つには冷たすぎる光を放っている。どうせ、人間は“違う”モノを嫌い、除け者にする。それならばもう、期待することさえ馬鹿らしいではないか。

先生、別に怖がっても良いんだよ？あたし、もう慣れてるし

ユリカ。先生みたいなおばあちゃんになるとね、怖いものなんてなあんにも無くなるのよ。

深く皺が刻まれた顔を、くしゃりとさせて笑う院長。別れ際に枯れ枝のような腕で、力強く抱き締めてもらったのをネリは鮮明に覚えている。

少女がスキンシップ 特にハグを好きになったのも、この頃からであった。

初めて抱き締められた少女の感想は、『先生の体って薄いなあ』だった。

「でもなあ……あんまり人間に関わりたく無いんだよね」

「ユリカ……」

7歳の少女が口にするには悲しすぎる言葉に、レナモンの顔がくもる。天使のように可愛らしいのに、その心は氷に覆われているように冷たい。同じ“人間”というのに、まるで“自分は違う種族だ”と言っているようだった。

「やっぱり黙って行こっかな。いつ飛ばされるかも分からないんだし」

『目の前で人が突然消えたら驚くでしょ？』と寂しげに笑うネリに、レナモンは“この世界”を呪った。

7歳の少女がしていい表情ではない。

生まれてから5年間、『愛』が一番必要な時期にネリは親に捨てられて育ってしまった。ネリが唯一所持していたのは、赤ちゃんの時包まれていた産着とコンパクト、のみである。金細工のコンパクトには、文字が書かれていたが、その時のネリには読めなかった。

親に捨てられるだけなら、まだ許せる。親と過ごす時間は、人生の半分に満たないのが人間の命だからだ。

だが世界さえ“繋ぐ”ネリは能力のせいで、同年代の子供と仲良くなるすべてを奪われて育った。

“世界”がネリに与えたモノは、少女から友人さえ奪ったのだ。

（なぜこの子に異能を授けた？どうして私をもっと早くこの子と会わせなかった……！！）

多くの人の心に触れてきたせいで、ネリの精神は歳のわりに随分と成長していた。毛を逆立てて憤る金色の相棒が、何に対して怒っているのか、少女は正確に理解していたのだ。

「ごめんね。でもあたし、この力には感謝してるんだよ？」

金色の相棒が、ハツとして銀髪の少女の方を向く。氷漬けにされたネリの心は、ほんの少しずつではあるが、レナモンの存在でほぐされてきてはいた。

それでも、“人間”と“自分”は違う生き物であると思いついてはいたが。

「だって、デジタルワールドでレナモンに会えたもの」

心からの少女の笑顔に、レナモンは目を見開いた。そして優しく目を細めると、『そうだね』と囁く。

……だが、かつての相棒はもう、いない。

『レナ……モン』

木々の間から、烏森学園の校舎が見える。肌寒さに14歳のネリが自分の身体を抱くと、9本の尾っぽが少女を包み込んだ。

相棒の毛皮とよく似た感触が、ネリの素足に触れる。制服だったのでスカートなのだ。

疲れは感じなくせに、寒さには敏感らしい。もしくは、周りに誰もいないからか。だからこんなにも心のすきま風が、辛いのだろうか。

『……寒い……寒いよう……』

守る為に距離を取って烏森に来たつもりだった。自分が駆け回って危険な芽を摘んでいけば、助けられるはずだった。

だが、それでもまだ足りないらしい。

黒芒楼は、ネリの妖力で姫を回復させるつもりである。そして、ネリは姫の城に行かなくてはならない理由ができてしまった。

『独りに……しないでよう……』

細い肩が震える。

この世界に来て初めて、“大切な存在”が出来た。最初はただ、どんな子なのだろうと興味があつて彼に近づいた。

原作で唯一、救われなかった哀れな存在。なぜ“世界”が少年の死を望んだのか知るために、出来るだけ傍にひつついてみた。

……次第に、彼の暖かさがクセになった。

不器用で無愛想で、自分の力と常に戦っている彼はいつも苦しそうだった。

一緒にいる内に、その苦しみを軽くさせてあげたいと、強く思うようになった。

でも、慰められていたのは自分のほうだ。いつの間にか興味は好意になり、信頼となった。

少女の小さな呟きが、狭い空間に響く。

『独りで城に行つて、もし死んじゃつたら？…火黒に挑んで、もし敵わなかつたら？』

ヒタヒタと忍び寄る恐怖の影に、ネリの心は千々に乱れる。分かつて、しまったのだ。火黒の強さがどれほどのものか。

人間に毛が生えた程度の妖混じりに、どうにか出来るような存在ではないということが。

『戦つたつて……』

その瞬間、百年も聞いていなかったような声が、ネリの耳に届いた。

「ネリ！！無事か！？」

ガサガサツと草が揺れる音がした後、髪をツンツンに立てた少年の頭が覗いた。

ネリを視界に収めると、途端に表情が険しくなる。少女の妖気が不安定で、それが『恐怖』からくるものなのがすぐ分かったからだ。

「……………何をされたんだ、ネリ」

『だ、大丈夫。…………話したただけだから…………』

静かに燃える炎の様に低い少年の声に、ネリの目が泳ぐ。

少女の言葉に嘘はない。

だが全てを話しているというわけでもない。

嘘をつきたくはないが、詳しく話せない少女の様子に、限の眉間にさらにシワが寄った。しゃがんでいる少女の前に限が膝まづくと、視線を同じ高さに合わせる。

そして、ことさらゆっくり口を開いた。

「脅されたのか？」

『た、頼まれ…………たんだよ…………』

「何を、頼まれたんだ」

ネリは必死に頭を働かせ、嘘を言わずに済む方法を考える。だが、話せば話すほど少年は質問を詰めていくだろう。

ふっつりと黙ってしまった少女に、限はため息をついた。

そして、さらりと驚くべきことを口にした。

「お前が、異世界から来たってことはもう知っている。未来が見えるってこともな」

『…………へ！？…………あ、え！？』

口をぱくぱくさせた少女の様子を見て、少年は表情を少し弛ませる。逆にネリは緊張に顔を徐々に強張らせ始めた。正守がまさか、『あの事』まで少年に話したのかと思ったのだ。

「お前が未来を見たことで、何とかしようと独りで行動してるのは分かる。だがな」

すう、と限がゆっくり息を吸って吐き、気持ちを落ち着かせた後口を開いた。

「困った時は…俺を頼れと、言っただろ？」

『限…………っ』

口をへの字に曲げて、ネリは涙が溢れそうになるのを必死で堪えた。

彼に頼れる訳がない。

彼を巻き込んだら、死の運命が彼の背後まで近づいてしまう。なんとしても限を遠ざけて、黒芒楼の問題を解決しなくてはいけないのだ。

ネリの葛藤を知ってか知らずか、限は一端目をつむった。そしてまた目を開ける。その黒い瞳に、並々ならぬ覚悟をのせて限は口を開いた。

「俺は……死なない様、努力する。だから、お前は一人で抱え込むな」

『……………！！！』

目を見開いて、彫像の様に固まる少女には、言葉を忘れてしまったかのようにだった。

(20) 無茶×お説教Ⅱ刹那の平和(後書き)

はい。

ややこしくなってきたかもしれませんが。

ネリの過去話を並行して挿入しているので、わかりづらいかもしれません。

どうしよう、どうすれば良いんだろう?どこまで説明すればくどく無いんだろう?...?

精進します

(21) 世界に喧嘩を売ろう

限がネリの情報を正守から与えられた時、少年は驚愕のまま固まった。

時間が止まった様な感覚に、少年は自分が息をしていない錯覚に陥った。正守の声さえ遠くに感じる程である。その正守は、腕を組んだまま重い口を開いた。

「限に教えるべきなのか、最後まで悩んだんだ。……けど、ネリは一人で妖の集団を潰そうとしている。……あの子は……自分の事を二の次にしても、未来を変えようとしているんだよ。」

正守の執務室に呼ばれていた限は、防音用の結界の中で夜行の長から重大な秘密を聞いていた。

少女が最後まで限に隠し通そうとした、最悪の事実。

限の死の未来である。

4年間限を間近で見してきた正守は、少年を信頼している。戦闘班の主力戦力に入る限が、『死』の未来に怖じ気づく事が無いと、確信していたのだ。そして 彼が『死』を望むことが無いことも。

(限は…ネリに会って、変わった。)

人との繋がりを作ろうとせず自分の心を押し殺し、任務だけに己の

生き甲斐を限は見出だしていた。だが、今は違う。

遠く離れた烏森に想いを馳せ、少女の身を案じている。自分以外の大切な者の為に、無事を祈る。

大切な何かを“守る”時、人間は自分の想像を超える力を発揮する。もう限は、その強さを発揮できる段階まで、近づいているのだ。

「ネリは、お前が傷つくことを何よりも恐れている。異世界から来た彼女を繋ぎとめているのは、お前なんだよ、限。」

「あいつ……」

月明かりが差し込む和室に、何かに耐えてうつむく少年の姿がある。膝の上で握り締められた手は、血が通わなくなるほど白くなっていた。

「俺の…未来を…変えるためにあいつは…戦闘班に…？」

「……そうだ」

腕を組んだまま重く頷く夜行の頭領に、初めて限は声を荒げた。

「なぜもっと早く教えてくれなかったんですか、頭領！！」

「話す時ではなかったからだ。」

静かな声に少年はハツとなる。

鏡の世界で戦闘班の面々が手合わせをした時、正守が限とネリの様

子を気にかけているのは知っていた。大方、危なっかしいネリを見ていたのだと少年は思っていたが、違ったらしい。

ネリと行動を共にする、限の様子を見ていたのだ。

100人もの特能者を率いる頭領として、正守は少年に任務を言い渡した。

「ネリが心配なら、お前の手で守ってみせろ。未来を知るネリは本当の意味で誰にも頼れないんだからな。……ネリに伝えてくれ。」

“新しい未来は、皆で創ろう”と

「頭領に教えてもらって、良かった」

正守の言葉を伝えた限は、目を見開いているネリの肩に手を置いた。紫水晶の瞳は、今にも涙で決壊しそうである。

その瞳を真っ直ぐ見つめて、限は自分の思いを打ち明けた。

「お前が傷つく未来なら、俺はいらない。それで俺が生き残っても、何の価値も無いからだ」

真剣な響きに、少女の瞳から涙が一筋こぼれた。さながら、流れ星の様なきらめきである。

くしゃり、とネリの顔が歪んだ。隠していたのに、よりによって頭

領自ら本人に言ってしまうとは。

『……………とっ……………頭りよの、馬鹿あ……………バラすなんて…ヒクツ…信じ、らん、ないい…』

「馬鹿はお前だろ」

呆れたような少年の言葉に、肩を掴まれたままネリは顔をうつむかせた。嗚咽が漏れ、不規則な呼吸に体が震える。

そんな少女を、限はいつかのよう己の胸に抱き寄せた。

立て膝を着いたまま、しゃくりをあげる彼女の背中をさすってやる。限の戦闘服は、もはや大首車のせいで無惨な状態になっていた。ほとんど半裸に等しい。

直接感じる人肌の温もりに、またネリは泣きそうになった。

背中に当てられた手は優しく、それでいて荒々しいまでの力強い抱擁は、ネリが長い間望んだ暖かさだった。

（あつたかい……………）

少女がゆっくり目を閉じれば、行き場を無くした涙が溢れ落ちる。それは、限の剥き出しの右肩を濡らした。

「俺はここにいる。お前も、ここにいる。なら、出来ることを一人より二人でやる方が効率が良いだろ」

なぜそんなことも思い付かないんだ、と苦笑する限。ネリは、全身

の強張りが抜けていくのを感じ、限に体重を預けた。

「ネリ？」

限の存在がこんなにも、少女を癒す。もう人間に期待はやめたつもりだった。ましてや人を“好き”になるなど、もう永遠に無いのだとネリは諦めていた。

（好きでいて……良いんだ）

一人より二人で。

二人より四人で。

ネリが限の事を好きなように、限もネリの事が大切なのだ。そして、大切な存在が傷つく辛さは少女が一番よく知っている。

（意味のある世界じゃないと、ハッピーエンドには……ならないんだ…）

自惚れではないが、ネリは限の気持ちを感じ取っていた。こんなに思ってくれているのに、少女は命を救うだけしか考えていなかったのだ。

大切なモノを失いたくないのは、少年にとっても同じなのに。正守が言っていた。

『君一人で全ての人を救えると思うな』と。

未来を知っているのは己だけ。自分だけが頑張らなくては、と結界

師全員、夜行全員を救うつもりでいたことに少女は気付いた。

それは、傲慢。

『全部…話すよ。黒芒楼のことも、未来の事も……私の、ことも。』

未来を恐れるあまりに、未来に振り回されていたネリの瞳にもう涙はなかった。

「……あ、えー…オホン。お取り込み中、悪いんだけど…」

『あ、墨村君』

耳だけパタパタ動かしたネリは、限の腕の中から返事を返した。良守が近づいていたのを少し前から限は知っていたが、彼女を離す気はさらさら無いようである。

つんつん、と少女の尻尾でつつかれて初めて、限は腕の力を緩めた。もうもはや恋人同士にしか見えない二人に、時音も良守も居心地が悪そうである。そんなある意味平和な雰囲気の中、ネリはスツと立ち上がると、深く礼をした。三人が目を見張る。

『勝手に…黒芒楼の妖と会ったりして……相談もしないまま行動して、すみませんでした』

「ネリちゃん……」

「本当だよな。まったく、水くさいじゃん。俺たちそんなに頼りねー

のか？」

良守が口を尖らせる。時音はそんな幼なじみの様子に同意しながら、ネリに笑いかけた。

「もう、良いのよ。……すごく心配したけど」

「お前明日大変だぜ、きつと。質問攻めだな。特にばあなんて、結界破られて怒り狂ってんじゃねーの？」

意地悪く笑う良守に、ネリは頭を抱えて呻いた。

『ああ…：そうだ、時子さん達になんて説明しよう…：私の話信じてくれるかどうか…』

さらに、明日の夜だけでは話し終わらない程の情報をネリは持っている。

異世界から来た彼女が知り得ぬことを話したら、そう簡単に皆は信じてくれないだろう。しかも、ネリが存在以外にも不確定要素

姫に憑いている“鬼”があるだけに、この世界はもう原作通りではない。

(百合香のことも話さなくちゃ…：黒芒楼の姫様を助けられないよね……)

『うー頭が痛いー…』

「悩むのは明日にしてお前は横になって休め。……：眠れないとしてもだ。」

ネリの表情で、彼女が眠っていないことが分かった限だったが、軽く睨んで封じた。布団に横になるだけでも、身体は休息出来るものなのだ。

ネリを“不眠症”だと勘違いしている限は、その為あえて厳しい口調になる。

『限にひつついて寝たい』と、喉まで出かかっていた少女だったが、辛うじて飲み込んだ。

(抱き枕はさすがに悪いよね……。限は夜ちゃんと睡眠とらなくちゃいけないし……)

どこまでも、感覚がずれているネリであった。

結論から言えば、ネリは大目玉を食らった。時子に必ず戻ると約束はしたものの、死ぬほど心配をさせたのには変わり無い。

罰として、時音の修行にしばらく協力することになった。といっても、休日どちらかの2時間だけでいいと言われたのだが。

雪村家の台所から朝食を食卓へ運び、女性4人は席についた。

朝日が溢れんばかりに室内まで降り注いでいる。日本家屋特有の足に心地よい畳と、深い色合いの座卓での朝食だ。

もちろん座布団の上に正座だが、ネリも毎日やっている内に慣れてしまった。食べ始めてしばらくたち、時子が口を開く。

「で、ネリさん。昨日の夜は何があったんです？」

「んぐ！？……ん、…えーとですね……氷蛾ひごを、あちら側に託す交渉をしてきました」

「…！？」

飲み込んでからネリが話すと、時音が驚いたように目を丸くした。時子はさすがに取り乱しはしなかったが、眉をひそめる。そもそも、正規の主従契約を結んでいるわけでも無いので、時子は氷蛾のことを良く思っていない。

「彼を……密偵としたのですね」

「はい…。そもそも、氷蛾はその目的だけの為に置いていたので。今の黒芒楼の情報を流してもらうつもりです」

「そうですね…」

あくまで氷蛾を部下として扱う少女に、雪村の当主は少し安心した。前のレナモンのように、心の拠り所にもされた日には、またネリが傷ついてしまう。最愛の者が亡くなる辛さを、時子も知っていた。彼女の息子であり時音の父親、時雄は正統継承者では無かったものの、雪村の結界師である。その彼は、時音が幼い時に妖との戦闘で致命傷を負い、亡くなった。

（ネリさんにも乗り越えてもらはなくては…。）

悲痛な表情を即座に消し去り、時子はネリを見た。

「詳しい話は、時音にも話して下さいね。……………ネリさんは墨村の孫とも同じクラスのようにですし、二人に話す時間はあるでしょう」「
渋々という風に時子は、良守との協力を促す。墨村と雪村の仲の悪さは折り紙つき…のはずなので、ネリは目を見張った。時音も驚いたのか、箸が止まっている。

そんな少女二人をみて、70歳の老女はぷいっと横を向いた。

「あんなオマケの一族でも、いないよりはマシですからね」

「ごちそうさまでした、と時子は膳を下げさっさと部屋を出ていってしまった。

時音の母、静江は嫁という立場だが墨村家に敵対心はない。腰まで垂らしたポニーテールを揺らして、時音はため息をついた。座卓に肘をつく。

「……………あゝあ。なんでこんなに仲が悪いんだか…」

「ここでもネリは、言わなくてもいいことを口にしてしまった。

「まあ…仕方ないと思いますよ？私も詳しくは知りませんが、雪村家と墨村家のご先祖同士で殺し合いまであったらしいですし……………」

「「ええッ!？」」

サラッと朝食に投下された爆弾発言に、時子と静江がのけぞる。2代目次期当主（見込）である時音といえど、初耳であった。

（それなら確かに恨み骨髓…なのも頷けるわね）

ネリの言葉に青ざめた女性達だったが、学校に遅れてしまうので気持ち急ぎ気味で朝食を胃袋に収めた。

(22) 説明 + 説得 II 姫の嫌がらせ

その地の鬼は、古くから続く一族だった。

詳しい年月の記録は残っていないが、1000年以上蓄積された闇はその世界の『日本』にとって常に存在するものだった。

光に対する闇、太陽がつくる影の如くその『鬼』は、現代社会を脅かしていたのだ。

陽が落ちれば家々の扉は閉ざされ、深夜以降出歩くことは禁じられる。電気が煌々とした通りでさえ、深夜以降の出歩きをしたせいで死んだ者が数多くいた。

ネリが初めて人助けにきた世界は、文明社会とは思えないほど『闇』の濃い、日本だった。

7歳のネリを喚^よんだのは、藁を掴む思いで術を発動させた一人の女性である。名は、無花果^{いちじく}。勿論、本名ではない。

「自分の名前というのはね、ここでは命よりも大事な意味を持つ^よ

ネリの後見人として少女を引き取った無花果は、刹^{さつ}寡^か衆^{しゅう}の『い組』所属で、優秀な 欧州でいう所の、魔法使いだった。

長い黒髪を高く一本に結い上げ、忍びのような格好をする彼女は、細い剣も使う凄腕の魔法剣士。

戦う為に生まれてきたような、凛々しく美しい女性だった。

そんな女性には、血の繋がりは無いが娘があった。ネリより3つ歳上の10才女児。

「名はね、すごい力があるんだよ！認識するのに初めて使うのが、名前だもの！」

「こら、百合香。私が良いと言っただけで部屋から出るなど言ったでしよっつ。」

困ったように笑うも、そこに咎める響きは無い。いたずらっ子を叱るようなものだ。面白いことに、その世界の日本では服装が逆行していた。特に、鬼を相手にする人々は伝統なのか、古めかしい和服を戦闘服としていた。

百合香もその例に漏れず、白い狩衣姿に烏帽子というおよそ子供がするには似つかわしくない格好である。艶やかな黒髪はピヨピヨピヨこと、至るところが跳ねていて相当なくせっ毛だった。

ネリには元々名前が無い。ユリカという呼び名が辛うじてありはするが、目の前の少女だって百合香である。

物凄い確率ね、と無花果は目を丸くしていたが、同じ名前が二人もいるのは呼びにくい。考え込んでしまった母に向かい、黒髪の百合香は銀髪のネリ　ユリカの手をとった。

「ネリって呼んでもいい？あたしには百合香って名前しか無いんだ

もの」

必死な表情に、ネリは否とさえ結局最初に名乗った名前の真ん中を取るようになった。

ベアトリックス・ネリ・ユリカ。

この世界で名乗った仮の名前が、本当の名前になるとはネリ自身想像できなかっただろう。

時間支配系の能力を持つ百合香は、敵の動きを遅くする能力を持っていた。

だが、その他の戦闘能力が皆無なため、扇片手に舞を始めそうな格好をしている。本人曰く、扇で狙いを定めるのが一番上手いという。

射程距離は訓練の成果もあり、中距離まで伸ばすことが出来た。

「百合香は、囿役をやってもらってるの。攻撃されても、時間を遅くして防げるから」

異能を持つ者は、組織に所属することで自分の存在意義を見出す。異能の強さによって低級、中級、上級、特級の4つに分類された異能者は、違う級の異能者と組む。「い」組から「を」組まで12の組に振り分けられ、実力は語順から「い」組が1位であった。

一組に3人が定石で、多くとも4人である。無花果は最初、ネリを自分の班に入れようとしたのだが、百合香たつての希望で「と」組に入る事となった。

『と』組は、ネリと百合香、それにもうひとり男の子であり、その少年は接近戦タイプの能力者だった。

(……………つんがああ　　!!!)

気合いを入れて起きたネリは、授業中に居眠りをしていたようだった。心臓がばくばくと打っていて、気を落ち着けるべく深呼吸する。

(もう…こんなの見たくない)

また進み始めた夢にげんなりする。眠った気がしないばかりか、この夢の最後には思い出したくも無い惨劇が待っているのだ。

(なんか…姫様に見せられてるみたい)

黒芒楼の姫には時間が無い。姫の身体をのっとなっている“偽者”が、老いた彼女の妖力を喰らっているからだ。

結果、姫の老化が早まったのだろう。原作には無い展開である。

(助けてあげたいけどさ…私が正直に言ったって限達は行かせてくれるわけ無いもんね…)

はあ…とため息をつき、窓の外を見る。その時、妖しげな女性が頭の中で囁いた。

じゃあ、助けてくれるまでこの記憶でも覗いていようかしら…
…退屈で朽ちてしまいそうなもの

「……………っ!?!」

思わず目を見開いた。教科書が手から離れ、派手な音をたてて背表紙から倒れる。

「っぞ…:…:でしょ?」

小さな呟きは幸い、誰にも聞こえなかったようだ。

ぶるり、と寒気が走る。原作の『姫』の能力を思い出して、ネリの心に嫌な仮説が浮かび上がった。もう、授業の音など少女の耳に届いていない。

(姫の意識だけ私の“中”にいるの……………?)

黒芒くろむぎという名の異界に楼閣を構える姫は、狐の妖。他者の潜在意識や、潜在能力を把握することができ、人間に少なからず興味を持っている。

長命な存在は退屈が嫌いなのか、お付きの部下である白びやくに“楽しいお話”を毎日ねだるのが日課だったはずだ。

よく知っているのね。さすがだわ

「……………っ!」

意識の糸で氷蛾と意志疎通するのは違う不快感に、少女は頭を両手で抱えた。

頭をごちゃごちゃにかき混ぜられるような感覚に、吐き気が込み上げる。少女の反応を見て、頭の中の『姫』は満足したのか、それっきりネリに話しかけることはなかった。

つまり、姫を助ける手だてを講じない限り、これから毎日悪夢を見せられるということだ。

「はぁ……………はぁ……………」

頭痛と吐き気が去った後、ようやく満足に呼吸が出来るようになる。自分自身が人質となってしまった少女は、己の心臓の上に手を置いた。どくどくと、太鼓を叩いているかのように振動が手のひらに響く。

（正直に話して……………行かせてくれるかなぁ……………）

今日も満足に授業を受けられなさそうだ、とネリは早々に3時間目と4時間目をサボることに決めるのだった。

氷蛾は新入りとしては異例の、蟲を入れられずに黒芒楼に入ることが許された。

言わずもがな、氷蛾は白よりも強く、白が蟲を入れようとしても毒で完璧に溶かしてしまったのだ。

今現在は、藍緋の元で研究の手伝いをしている。機械をいじくる藍緋とは、専ら話すことが氷蛾の主な仕事だった。

「白の蟲が効かないとはな。お前、結構やるじゃないか」

『…我は、主以外の妖に仕える気は無い。あの男が妖ですらないなら尚更だ。』

気分が晴れたような顔の藍緋に、しれつと無表情に答える氷蛾。藍色の髪の女性は、半世紀近く閉じ込められて鬱憤が溜まっていたのだろう、白が敗北して嬉しかったようだ。

「ある程度自由に行動出来るのは、幹部級では火黒と私ぐらいなものだからな。……まあ、あいつは別か」

白衣の女性は、自分で言った傍から自身の言葉を否定した。火黒は、戦いに生き甲斐を見出す一種の戦闘狂である。自分の強さを高めることや、新たな玩具を斬ることしか頭に無い。

彼自身の“美学”も相当歪んでいるようではあるが、少なくとも搦め手を嫌うのは確かである。

『主の話と少し違うな…蜘蛛を操り、傀儡を創る妖は蟲の支配下にないと聞いたのだが。』

「ふむ…。紫遠しおんのことか。あいつにも蟲が入っていないのか」

蟲が入っているかどうかは外側から判断できない。それ自体が小さい上に、受信機のような役割しか無い簡単な造りだからだ。

「お前の主は、姫を助けてはくれないのだろうか…？」

藍緋がぼつりと呟くと、氷蛾は軽く首を傾げた。

『主は、この場所を既に把握している。主が自ら来ない限り、この

場所へ来る予定は無い。』

何をわかりきったことを、と言わんばかりの言葉に藍緋がため息をついた。つまり、銀髪の少女に姫を助ける気は無いということだ。

姫の意識が入れ替わっていることに気がついていない藍緋に、少女のことを理解するのは土台無理がある。

（だが、姫ももう永くない…。この城が落ちるのも時間の問題だ…）
50年傍にいたからこそ分かる。姫がどれだけ純粹で、外の世界を見たがっているか。

ついこの前までの己と同じなのだ。姫と藍緋の状況は。

籠の鳥同然の軟禁生活の苦痛は、研究部の藍緋が一番良く分かる。白に蟲を入れられ、研究に没頭することで己を保っていた辛さは。

（私はまだいい。やることを与えられて、健康な身体を持っているからな。だが姫は …）

最近めつきり喋ることの無くなった姫君は、歩くことも出来ない。身体中に機械を取り付けて、何とか生き永らえている状況だ。

時間は、無い。

（白に話したら…いや、駄目だな。恩を仇で返すような真似はしたくない）

もう一度説得しに行くか、と藍緋は研究室を後にした。

中等部の屋上は良守のお昼寝場所なので、ネリは高等部の方で寝ることにした。万が一にも高等部生が屋上に来ることを考え、給水塔の上に登るまで分からないように細工をする。

具体的には、くつろぐスペースの側面だけ、存在情報を拒絶する板で囲った。真上から覗かない限り、ネリの姿は見えないということである。

「さて…寝ない程度にぼんやりしてようかな」

睡眠を取らなくても平気なネリにとって、昼寝は必要ない。ただ、授業中に居眠りをした挙句、悪夢で飛び起きる醜態はさらしたくないのだ。

「どうしよう…どうしたら火黒に見つからずに、黒芒楼に行けるかな…」

あの妖が視界に入ると、心が休まらない。唯一の救いは、奇襲で殺される可能性がゼロということだろう。

彼は、元・人間の妖である。人間の時の名は黒田源一郎といい、とある名門道場では第二位の実力だったそう。第一位の存在が、彼を妖にしてしまったのだが。

「彼が妖になって、少なくとも…150年ちょっと。……なんで自分より弱い白の組織に入ったんだろ？」

万が一にも眠らないように戒めながら、独り言で考えを整理していく。見上げた空は、高く澄みきっていた。

「秋の空は高いって本当なんだなー」

妙に納得したが、首が辛くなり仰向けに寝転ぶ。視界の端に黒い壁が見えるが、気にしなれば美しい昼前の空である。

「放課後…どこから皆に話そうかなー…」

…あ…じ。き…えるか、主。

「あ、氷蛾？どう、そっちは？」

空間を越えて繋がった意識の糸が、氷蛾の思念を伝える。距離があるのと、間に“世界の境界”を挟んでいるせいか最初はノイズが入っていた。腕輪に手をやり、少女のほうから糸を補強したので、声が直ぐに明瞭になる。

主が既に知っていた情報は、全て藍緋に確認した。……しきりに主のことをきいてくる故、少し煩^{わづ}いが。

「そっかー…。まあ良かった、これで皆に話せるよ」

自分の知識が間違っていないと分かっただけでも御の字である。労いの言葉をかけると、突然氷蛾から緊迫した雰囲気伝わってきた。黒芒楼で何かがあったようである。

…主よ。面倒なことになったようだ。

「どうしたの？」

数拍の沈黙があったが、藍緋と話しているのが伺えたのでネリは部下の言葉を大人しく待つ。彼の方から憤りの感情が押し寄せてきたのを感じ、ネリは緊張に身を固くした。氷蛾は、怒りを何とか抑えて情報を伝える。

主。…すまぬ。白が主を拉致せよと、火黒に命じたそうだ…
…！

「……………え？」

手首に巻いたサポーターが、ぱさりとお腹の上に落ちた。

(23) 重なる世界出しすぎてすいません 後半軽くシリアスです…

黒芒楼にて

「良い治療法を見つけたそうじゃないか、藍緋」

「…？何の話だ」

藍緋が烏森の調査の許可をとろうと執務室に行くと、そこにいたのは火黒と白だった。

殺風景な部屋で椅子に座る白と、懷に片腕を入れて立っている火黒。

火黒はスーツ姿ではなく、真っ黒な生地にも袖と裾で火炎が荒れ狂っている紋様の着物を着ていた。頭から四肢に至るまで包帯でぐるぐる巻きであり、まるで全身大火傷を負ったかのような出で立ちである。

包帯の隙間から大きな目がギョロリと覗き、大きな口はニヤニヤと嫌な笑みを常に浮かべている。手首から先と、足首から先だけが唯一浅黒い肌が出ている部分であった。

これが、本来の火黒の姿。

黒芒楼がある異界は常に薄闇の空なので、妖は人皮を被らなくても大丈夫なのである。

嫌な予感に藍緋の背中を汗が伝った。

（この二人で何の話を……）

白は手の平を絡めた上に顎を乗せると、ゆっくりと口を開く。

「烏森で良い素材を見つけたそうじゃないか。姫の妖力を回復させる程の、妖気を持った妖がいたのだろう？」

「……………！」

妖……？という疑問が彼女の頭を掠めたが、それは今考える問題ではない。

なぜネリの話を、と言つ言葉を何とか飲み込んだ藍緋だった。答えなぞ分かりきっている。火黒が白に報告したのだろう。ギンツと、白衣の女性が睨むのを、戦闘狂はさらりとかわした。

（こいつ……あの娘に興味を持ったのか……！！）

基本的に、火黒は忠誠心といった類いを持ち合わせていない。面白いことが起こるなら、それに突っ込んでいく性分なのだ。

だが、誘拐や人質といった汚い手段は何よりも嫌う。良く言えば正々堂々1対1の勝負を好み、悪く言えば誰でも構わず戦いを仕掛ける戦闘狂。

火黒はそんな男だった。

「知り合いだから黙っていたのか？……姫に一刻の猶予も無いのは、君が一番良く知っているだろう？」

「それは……」

『そいつをここに連れてきたら、白が蟲を入れないか藍緋は心配なのさ。大切なお友ダチみてえだからなア？』

口ごもる藍緋に、クツクと口の端を吊り上げて笑う火黒。白は薄く笑った。

「心外だな。君達には蟲が入っていないというのに。」

「……それもそうだな」

苦々しく、だが若干平静を取り戻した藍緋は、白衣のポケットに手を突っ込んだ。無表情の仮面を被り、座る男に目をやる。

「常に私の傍に置くことと、蟲を入れないことを承諾するなら……その者を連れてこよう。」

「うむ。問題はない」

白が了承したことに安堵しながら、踵を返す藍緋。だが、火黒の言葉が彼女を立ち止まらせた。

『いや、問題大有りだぜ？藍緋、まだあんた大事な事言っただろ？』

心当たりが多すぎて藍緋の顔が強張った。だが振り返るまでに、なんとか無表情を繕うことに成功する。

動揺を悟られぬ様に、目だけで火黒に疑問を返す。その視線を真っ向から受け止めた火黒は、そのまま白に顔を向けた。

『その知り合いってのは、この城に来るわけねえんだ。なぜなら…』

その先は言つな！という女性の無言の叫びは、戦闘狂にまで届かない。

そして、彼は言ってしまった。ただ、玩具が手元に欲しいばかりに。

『その知り合いってえのは……人間。それも、小娘なんだからな』

様々な思惑が入り乱れる中、そうとは知らず限は中等部の屋上で仮眠を取っていた。途中で良守に邪魔されたが、結局仲良く並んで寝るという奇怪な構図となった。

「……………」

「……………」

お互い何も喋らない。

隣に、会ってすぐの他人がいて寝られるほど、少年達は平和な生活をしていない。最初に口火を切ったのは良守の方だった。

「お前さ……昨日あれだけ傷だらけになって、大丈夫なのかよ」

少年結界師の言葉に、限は片目をそつと開ける。良守に背を向けたまま、限は律儀に答えた。

「問題ない。この土地にいれば、あの程度の傷はすぐ治る」

「……それってヤバいんじゃないの？」

烏森が妖に与える力は、目を見張るものがある。烏森は、神佑地

力ある土地としては、最上級に位置付けランクされている程のだ。妖混じりである限も、自分に与えられる力の危険性を充分理解していた。

「烏森の力についてはさんざん注意を受けた。気をつけていれば、むしろプラスに働く。」

「ふーん……」

気が抜けたような良守の声に、限は頭の後ろで腕を組んだ。何となく良守に、同情されているような気分になる。

良守はというと、ネリや限の“妖混じり”について考えていた。

（すっげー能力だとは思っけど……ネリの能力は、相棒の狐が死んだから使えるようになったんだよね……）

速く跳べたり、火炎を生み出したり出来るのは、魅力的ではあるが代償も大きい。間近でネリを見てきた良守には、単純に羨むことが

出来なかった。

（大変なんだろうーな……妖混じりってーのは……）

何となくしんみりとなった良守だったが、唐突に午後の予定を思い出した。

「あ。そーいや今日の放課後、裏山でネリから話聞くんだったな」

「ぐふっ!？」

軽く不意打ちを喰らった限がむせる。おもわず起き上がったツンツン髪の少年に、昨日の夜のことが鮮やかに蘇った。

今までさんざんおんぶしたり、抱き合ったり、腕を組んだり、涙を拭いてやったり……と数えあげたらキリがない程、ネリと限は体が触れあった仲である。

そうでもしないと、ネリはすぐどこかに飛んでいってしまいそうな存在だったのだ。

だが、昨日は違う。

（あいつを、“離れたくない”と思ったのは……初めてだったな）

良守に顔を見られないよう、そっぽを向く限。良守は相変わらず寝転んだままだったのだので、朱に染まった限の顔に気がつくことは無かった。

「ネりってさあ……周りに気を配りすぎて、自分が潰れるタイプだよ

なー……」

「……………」

激しく同感、と思った限だったが口には出さないでおく。良守はポツリポツリと、言葉を重ねていった。

「あいつ…やっぱり家に帰りてーのかなあー…」

良守の呟きは、限の心を容赦なくえぐった。それは、ずっと少年が考えないようにしていたことだったのだ。

ずいぶん前に、正守がネリにその質問をしたのだが、答えは得られなかったらしい。

ネリは異世界に帰るのか、否か。

(あいつは…いつかこの世界からいなくなるのか?)

考えるだに恐ろしい未来に、限の心が冷える。みぞおちに氷の塊を押し込まれたような気持ち悪さに、限は勢い良く立ち上がった。良守が驚いて上体を起こす。

「どうしたんだよ?」

「何でも…無い。」

己を落ち着かせるべく、深呼吸すると　優れた限の五感に何か
が引っかかった。

「…ん？」

甘い香りに混じって微かな妖気の“匂い”がする。それは、呪印で封じられているはずである女性の妖気だった。限の顔が強張る。

「……何でもないって感じじゃねーだろ絶対。」

気にくわないと言いつつも、根本的な所がお人好しの良守は、限と同じく立ち上がると彼に近づいた。

また何か少女の妖気を不安定にさせているのかと思い、限の表情は険しくなっていく。

(なぜ呪印が…！？染木さんに刻んでもらったハズじゃ…)

限が隣に立つ良守を、バツと振り返る。眉を寄せる少年結界師は、訳が分からないというように限を見ていた。この土地で何かしらの異常が起こったのなら、結界師達が気づかないはずがないのだ。良守の表情を見るに、侵入者の線は消える。

(こいつに妖気を認知されていないということは…ごく僅かのみ妖気が漏れ出している、といったところか)

結界師の感覚は、妖気より禍々しい邪気の方が鋭い。限でさえ、妖気を嗅覚で微かに感じられる程度なので、大事ではないのだろう。

ただ、少女のことが気になる。

限は良守から視線を外すと、短く言い残した。

「用が出来た。じゃあな」

「あ、オイ！」

変化していないにも関わらず、驚異的な脚力で屋上を駆けていく。そしてあっという間に、限は校舎の向こうに消えていった。

良守だけぽつんと一人、取り残される。

「何だよ、あいつ……」

ビュオオ…と、寒い風をことさら強く感じた少年結界師だった。

「ネリ!!」

「……あ」

少年が妖気と匂いを追って高等部屋上、給水塔の上にたどり着いた時、少女はぺたりと座り込んでいた。漆黒の囲いの中で振り返ると、ネリは慌てて立ち上がる。サポーターが床に落ち、翡翠の腕輪があらわになった。

「……今度は何があったんだ」

「……よくここが分かったね」

質問は、疑問ではぐらかされた。良く見れば、ネリの体が僅かに紫色の光を帯びている。瞳も妖しげな光を発していて、間違っても

普通』ではない。無自覚の少女に対し、限が小さく息を吐く。

「お前から…妖気が微かに漏れている。その程度なら染木さんの呪印で、抑えられるはずだが」

「あ……あれ？ほ、本当だネー？」

指摘されて初めて気がついたのか、ネリの目が泳いだ。沈黙が流れ、限の機嫌が急下降していく。

このままではまずい、と銀髪の少女が慌てて口を開いた。

「う、裏山でちゃんと言おうと思ってただけど…ね…？え」と…何から話せば良いのやら……」

「そんなに溜め込んでいるのか？」

冷静で容赦の無い切り返しに、ネリの背中を汗が伝う。ジト目で腕を組む限は、さながら仁王像のようであった。

だが、ネリはいつまでたっても話そうとしない。

（俺に……話せないことなのか…？）

徐々に限の顔がくもっていく。最後に少年の口から、かすれ声が漏れた。

「ネリ……。そんなに俺は頼るに値しないのか……？」

「ち、違うの！……言ったら絶対怒ることだから……」

尻すばみになっていく少女の言葉に限は、心が掻き乱される。昨夜の妖に『頼まれた』ことが関係しているのは明らかだ。

「……怒らない。約束する」

絞り出すように言うと、少女がゆっくり顔をあげた。その瞳は、苦渋に満ちている。

「限……」

少女の口が言葉を紡ぐ。そしてそれは、限が予想だにしない内容だった。

「……私、友達を殺しに行かなくちゃいけないの」

「!?!」

少女の言葉が、少年に理解されるまでには時間がかかった。

「なん……だと?何を、言っている……?」

「黒芒楼にね、私が殺した友達がいるの。……友達だった、女の子

が

ネリの目は苦しそうだった。こんなことを少年に打ち明け無ければならない惨めさで、悔しさで、潰されそうである。だが、これを話さなくては何も始まらないのだ。

（これは私の罪……。私が、犯した事がこの世界に変革をもたらしたんだから……）

ネリの歴史 『百合香』を巻き込んで、結界師の世界に新たな未来の一つが生まれようとしていた。

(23) 重なる世界出しすぎてすみません 後半軽くシリアスです… (後書き)

ええっと……なんだかすみません。

重くならないようにしたかったですけど、ネリの背景はもともと重かったんで…過去話を2話ほど挟みます。

もう本当に分かり辛くてすみません。

疑問、質問、ここが意味不明など御意見 ございましたら教えてくださいませ。

今後の参考にいたします

(24) 昔語り+説明"……? (前書き)

36人の方、お気に入り登録ありがとうございます。

長々と続けてしまつて、そろそろ飽きてしまつた方も多いと思ひます。

年末までに完結しようと思つてはおりますが、第3章があるため難しいかもしれないです。

申し訳ございません

(24) 昔語り+説明……？

それは、遠い遠い昔。

ネリにとっては忘れ難い、初めての異世界。7歳の時の冒険である。

「そっちにいったぞ!!」

「了解。沈め!!」

黒装束に身を包む少年と、白い狩衣の少女が鮮やかな手並みで“鬼”を翻弄する。

一直線に百合香へと襲いかかろうとした鬼は、体感時間を遅くさせられて動きが鈍った。

その隙に百合香の白い衣が建物と建物之間に逃げ込むと、異形は彼女を追っていく。

今さっきまで鬼に喰われそうになっていた男性は、少年の足元で泡を吹いて失神している。命知らずな男性に、適当な守護をかけると少年は身を翻して、標的おにの跡を追った。

短い黒髪が乱れるのも構わずに、囃役の少女が逃げ込んだ場所へ駆けける。少年はチラッと上空に目をやり、舌打ちを漏らす。

その目線の先には、大きな獣。

レナモン、見失わないでね

無論だ

夜空の下、軽やかに駆けていく黄金の毛並みと銀の煌めき。異世界人である、ネリとレナモンだ。

もともと、組織の上層部以外ネリが異世界人であることを知る者はいない。余計な混乱を招くからである。

召喚した本人である無花果は勿論ネリが異世界人だと知っているが、百合香や少年らには伝えられなかった。

少年にしてみれば、『余所者の新入りのくせに美味しい所をとっていく、気に入らないヤツ』という認識なのである。実力が高いのは認めるが、だからといって受け入れられる問題ではないのだ。

(百合香もなんであんな胡散臭い奴を…!!)

両手に一本ずつ、逆手に持った愛刀は抜き身のままで、ひたすら地面を蹴る。だが、人間である少年がキュウビモン(成熟期形態)

黄金の狐に追い付けるはずがなかった。

オニビダマ!!

まだ視界に入らないどこかで、戦闘の音が聞こえる。ギリ、と無意識に歯ぎしりを漏らした少年自身、それに気づくことは無かった。

「ちよろかったねー！！レナモンさんありがとー！」

「いや、無事で何よりだ。」

黄金の狐が、傍にいるネリに『大丈夫？』と声をかける。その言葉は異国の言葉だった。

当然だが、ネリはまだ日本語を完全に会得していなかった。オランダ語と英語しか使ったことはなかったし、レナモンが少女の使う言語を話していたのである。覚える必要も無かった。

「（ちょっと疲れたけど、大丈夫）」

「（まだ巡回がある…もう少しの辛抱だ）」

会話の内容が分からない百合香だったが、別に気分を害した様子もない。聞いたことのない異国の言葉の響きを、ただ音楽のように楽しんでいた。

そんな様子を盗み見ながら、12歳の少年は刀で鬼の身体を切り刻む。腹いせにやっているのではない。

「くそっ……無いな」

彼は、鬼の死体の中から“ある物”を探しているのである。ひとしきり焼死体を調べた後、ため息をついた。

「駄目だな、これも外れだ。始祖じゃない。」

「そっかあ…ま、当たり前だよな」

苦笑する狩衣の少女と、肩の力を抜く少年
隣に立つネリに目をやった。

やぐるま
矢車は、百合香の

ネリは、目立つ長い銀髪を器用に編み込んで、膝丈の黒いドレスを着ている。和服に慣れていないため、戦闘服は動きづらかったそう
だ。可愛らしいことは確かなのだが、少年の目には『人形』のよう
にしか見えなかった。

表情が、無いのだ。

(薄気味悪い奴…)

愛刀についた血を払って鞘に収めると、少年は懐から真紅の呪符を
取り出した。無花果特製、鬼滅却用の炎符である。この呪符があれ
ば、そこそこの魔法使いでも、鬼の後始末をつけられるのだ。

矢車は、日本人特有の黒い瞳を閉じて、己の呪力を指に挟んだ炎符
に籠めた。

直ぐ様呪符は紅く燃え上がり、鬼の体の上に落ちる。そしてあつと
いう間に、元々焼死体だった鬼は塵も残さず消え去った。

「完了だねー！よっしゃ、次行こ次ー！！」

「百合香…それ、酔っ払いのセリフみたいだぞ」

「…うるさいな！別にいいでしょ！！」

長い付き合いでお互い仲が良さそうな二人からは距離を取り、ネリは巨大な黄金狐の背に跨がる。まるで稲荷天神のように神懸かったキュウビモンは、僅かな風の音を残してビルの上屋上に跳び移った。

月が綺麗な夜である。

「（キュウビモン……。始祖っていつ見つかるのかな…？）」

「（……なるべく早く片をつけたいものだ。）」

夜闇に目を凝らしながら、キュウビモンは空を駆ける。

鬼の『始祖』。

ネリが異世界に呼ばれたのは、『始祖』の存在が関係していた。身体の中に、人間の怨嗟を吸収した深紅の結晶体を持ち、全ての『鬼』の頂点に座する存在。

それを殺すことが出来れば、この世界の『鬼』は消えるのだという。住民の誰もが、夜中に歩けるようになるのだと。

（でも、表おもての人は『鬼』について知らされていないらしいし……）

少女の紫水晶アメジストの瞳が、そっと閉じられる。

眉をひそめるでもなく、疲れたため息をつくでもない。

そのままキュウビモンの毛皮に顔を埋めると、彼の首にある紅白のしめ縄を握った。たすき掛けのように張られたしめ縄は、首のすぐ後ろで蝶結びになっている。ネリを背中に乗せて運ぶには、成熟期

形態が一番便利なのだ。

黄金狐は、少女が寝入っても大丈夫なように、振動を最小限に抑え空を滑るように駆ける。連日夜遅くまで鬼退治に駆り出されるのは、7歳児にとってあまりに酷こくであった。

せめて、より有意義な夜を　　例えば同じ組の子供と楽しくお喋りなどして　　過ごせれば、もう少しネリの疲労も意味があるというもの。

7歳児にして精神的に成熟しているネリは、子供らしい笑みというのが苦手である。表情筋が上手く作動していないのではないかと、キュウビモンが心配する程だ。

(百合香という少女と……仲良くなってくれば良いのだが……)
キュウビモンはまだ2年程の付き合いだったが、ネリのことには誰よりも把握しているつもりである。常に影から見守り、彼女自身の異能力向上にも力を貸した。

黄金狐がそっと、己の背に乗る少女に首を向ける。

少女は、出会ったばかりのルキ　　キュウビモンの最初のテイマーに似ていた。心を閉ざし、他者を遠ざける悲さしい性さがが。

(でもルキは、仲間と出会って変わった。ネリだって……)

黄金狐の心配は尽きない。鬼退治の夜は、更けていった。

異世界組が夜空に消えていった後、百合香と矢車は地上を歩いていった。お互い無言である。

百合香の扇がパチン、パチン…と音をたてるのみでそれ以外は静かな夜。『鬼』が徘徊するために、普通の民家は固く戸を閉ざし誰も外を出歩いたりはしないのだ。先ほど喰われそうになった男性は、脛に傷持つ類いの人間なのだろう。少年が口を開く。

「なあ百合香…。あの子のことどう思ってたの？」

「とつても大好きなお友達よー!!」

無い胸を張って宣言する少女は、扇をパンツと広げた。そのまま、でたためにスキップしながら舞い始める。

「可愛らしくって、もー大好き!!見てて飽きないもん」

「…なんで? たった7歳のガキじゃねーか。」

少年が馬鹿にしたように言うと、ピタリと百合香の舞が止まる。振り返らないまま、狩衣の少女は静かに口を開いた。

「何が言いたいの」

「特殊な異能とはいえ、余所者には変わり無い。無花果さんはなんであんなチビを特級に認定したんだよ!!」

『と組』最年長の少年である矢車は、やぐるま上級能力者だった。接近戦夕

イプで、なおかつ術もそこそこ使える。筋力強化の術を己にかける事が出来たから、12歳の限界以上の剣撃と速さを生み出す事が可能だったのだ。

少年にとつてずっと憧れである、特級能力者。その称号を、7歳の少女はいと容易くかつさらったのである。少年の怒りもひとしおであった。

百合香がため息をつく。

「さつきから妙に刺々しいと思ったら…ネリが原因だったのね」

「お前は悔しく無いのかよ！あのチビ、自分で戦わなくせに特級なんだぞ！？」

少年の憤りも、もっともである。ネリは一度も手を下していない。全て相棒の黄金狐にやらせているのだ。

烏帽子のズレを直しながら、百合香は扇を懐にしまった。そしてそのまま歩き出す。

「おい、何とか言えよ！！」

少年が百合香の肩を掴むと、くせっ毛の黒髪が跳ねた。顔を背ける少女は、矢車の手を払うとぼそりと言う。

「……あたしだって、余所者なんだよ」

「ッ！……それは……！！！」

「あたしも無花果に拾われたんだもん。……立派な余所者でしょ？
余所者ごときに遅れを取るのがそんなに嫌？」

少女の声色には、なんの起伏も無い。それが、百合香の心情を現していた。百合香と長年一緒にいた少年には、もう彼女が『余所者』という認識が無かったのだ。だが、勿論少女自身は違う。いつまでも、自分は『異物』という感覚が当然付いて回る。

少年は、自分が仲間を傷つけてしまったことを悟った。

「……ごめん。考え無しに言って」

「いいよ。気にしてないから」

背けていた顔を少年に向けると、百合香はいつもと同じく笑った。10歳なのに、こういうところはネリに負けず劣らず智い子供である。

「さあ、行こう！おちおちしていると、手柄また取られちゃうよ！」

「……！フンッ、させるかよ！……！」

少女にも筋力強化の術をかけ、二人は黄金の狐を追いかけるのだった。

赤い体、緑の体。

黒い体に、青い体。

黄色の瞳、白い瞳。
橙の瞳に、薄茶の瞳。

鬼にも色々な種類があつて、『始祖』の鬼はそのどれでも無いという。末端の鬼をその血统と結晶で統括し、人間の怨嗟は『始祖』にとって最上の供物になる。

それ故か、鬼は人間の憎しみを煽るような殺し方、喰い方を好む。子供を親の目の前で喰らつたり、恋人同士に自分の命乞いをさせたり。

恨みが、憎しみが『闇』を深く濃くしていく。そしてそれは、始祖の力になつていく。

年齢も性別も外見も分かつていない『始祖』は、鬼達にとって本能に刻まれた『従うべきモノ』。

その者のためなら、どんなことも実行をいとわない。鬼の一族とは、その世界の日本を闇に染め上げるだけに生まれた、影そのものだった。

そして、ネリはまだ知らない。

己のすぐ側まで魔の手が伸びていることが。

(25) ≡ 裏切りと悲劇(前書き)

37人の方、お気に入り登録ありがとうございます。

増えたり減ったり……うん、40人まではいかないようですね？

皆さんを飽きさせないようにしたいのですが…限とネリのイチヤイ
チヤはまだ先になりそうです。

過去編3話まで膨らんじやいました……いつそ繋げる方がいいんで
しょうか……？

(25) 裏切りと悲劇

ネリが異世界に来て1ヶ月が経ち、事件が起こった。

無花果が、死んだのだ。

死因は胸の病。突然胸を押さえて倒れたかと思っただら、帰らぬ人となつたのだ。しかも

「大丈夫か…？百合香……」

娘である、白い狩衣の少女の目の前で。

「……………」

血が繋がっていないとはいえ、無花果と百合香は親子である。赤ん坊の頃に拾われたのだから、真の親子同然だ。

百合香の悲しみは凶り知れなかった。

顔は能面の様になり、何の感情も表に出てこない。お気に入りの扇を手にとる気力さえ無くなってしまったようだった。

剝寡衆さうかしゅうの本部で寝起きしている百合香は、最早任務に出られる状態ではなかった。毎日毎日ぼっと、花瓶に生けてある花を眺めるのみである。

矢車も、これには参ってしまった。これでは毎夜の仕事は勿論、百

合香の健康が危ぶまれる。無花果の葬式がしめやかに行われ、墓地の冷たい土の中に置き去りにされても、百合香は墓標の前を動かなかった。

何も食べず、何も飲まず、壊れた人形のような有り様。

「ゆりか、けんこう悪い。へや戻る？」

1ヶ月で大分日本語が喋れるようになったネリは、百合香のことが嫌いではなかった。お人形さんの様に、優しく髪をすいてもらった話し相手になってもらったりして、誰だって悪い気はしない。

銀髪の少女本人に自覚は無かったが、確実に二人の少女の距離は縮まっていたのだ。

「……………」

ネリの言葉に百合香は何の反応も示さない。ただ、壊れたように墓標の前で膝をつくだけだ。

励ましの言葉を探すネリは、結局黙って隣に座るしか出来なかった。親がいないネリに、親を失う悲しみは分かりようが無い感情なのだから。

（院長先生も…いつかは死ぬんだ…）

無花果よりも高齢な孤児院の院長なら、死の気配はより切実な問題なので、心構えも多少はしているつもりである。

だが、死神がいつ鎌を振り上げるかに、老若は関係ないのだ。

老齢である院長と、若い育ての母を失うのでは悲しみの度合いが違
うだろう。ネリは、ポツリと言葉を漏らした。

「いちじく……」

「……違う。」

百合香が唐突に口を開いた。

彼女の目は墓標に刻まれた“刹寡衆の長、最巧の術師であり、最強
の剣士。無花果”を睨み付けている。

ネリは、くたびれた漆黒の狩衣をまとった少女を見た。百合香は、
無花果が死んでから白い狩衣を一度も着ていない。

「違う……無花果じゃない。彼女の名前は一条芥生……やっと本当
の名を交換したのに……親子の誓いを立てたのに…………なんで
……」

「……あざみ。名前が、花。百合香も、花」

朗らかなネリの言葉に、百合香がハッと年下の少女を見た。ネリが
指で空間を撫でると、細長くぱっくりと口を開ける。6歳で使える
ようになった自分専用の異空間には色々な物が入っていた。

「あざみ。これ、あざみ、ね？」

ネリの白い手には、小さな鉢植えで赤色のあざみの花が、風に揺れ
ていた。

喪服の少女が目を見開く。

「ネリ……！」

「悲しむ、悪くない。しかし、矢車、百合香心配、思ってる」

たどたどしい日本語だが、ネリは自分が言うべき言葉を一生懸命伝えようとしていた。悲しみは乗り越えなくてはならない。百合香の傍には、百合香を心配する仲間がたくさんいるのだと、ネリは教えなかったのだ。

芝生の上に鉢植えを置き、小さな白い手が墓標の前の土を掘り始める。その手より少し大きな手も、長い袖を捲り一緒になって掘り始めた。

小さな鉢植えなので、そこまで深く掘る必要はない。あざみの花を土ごと穴に移すと、優しく土をかけてやった。

言葉は必要ない。少女達の間を、暖かな春風が通り過ぎる。

漆黒の狩衣を着た百合香は、土が着いた手をパンパン、とはたく。もう彼女の顔には、微かな笑みが浮かんでいた。

「ありがとう、ネリ……。ごめんね、心配かけて……」

「良かった。元気？」

「うん。……もう、平気。」

憑き物が落ちたような顔で百合香が、懐から扇を取り出す。ゆつくりと地紙を広げると、朧月夜の絵が顔を覗かせた。それを眺めながら、百合香が口を開く。

「いつまでも私が落ち込んでたら…やつ君も…困っちゃっよね。」

「矢車、ずっとそば、見守ってた」

「そうなの？」

『それじゃ、もう行かなきゃね』と百合香とネリは墓地を後にするのだった。

歯車が狂い始めたのは、無花果が死んで1週間程経ってからだった。特級能力者ばかりが相次いで事故や病気で、亡くなったり戦線を離脱せざるを得なくなってしまうのだ。さすがに『偶然』で片付けるには出来すぎている。

ネリ自身も特級能力者だけに（本人にとってはどうでもいい称号なのだが）レナモンは、気がかりだった。

夜の任務をこなしながら、ネリとレナモンは百合香や矢車と話し合う。黒い狩衣に身を包んだ百合香は、扇の先を顎に当てて考え込んだ。

「んー、『闇』が強くなってきたのかなー？」

「それなら普通、倒れるのは下っぱからじゃねーの？『闇』って詰まる所、瘴気みたいなもんなんだろ？」

「だが、一番危険な役回りをしているのは特級ばかりなのだろう？『闇』の影響をより多く受けやすいのでは？」

レナモンの言葉が、百合香の弁を支持するが、矢車は首を傾げている。ネリは、黙って3人の会話を聞いていた。

3人と1匹が歩く大通りは街灯で煌々と照らされているが、人っ子一人いない。車が時々通る程度である。

ネリも7歳の頭を回転させながら、言葉に出来ない違和感を見つけて出そうとしていた。

不幸が重なるのは、確かにおかしい。そして、それらのもともとの始まりは百合香の母、無花果の変死。

(何か…引つかかる……)

どうかした？ネリ

すっかりこの名前に慣れてしまったレナモンは、少女に心の中で呼び掛けた。ネリもこの呼び名を気に入っているのを、相棒は知っているのだ。

意識の糸で常に繋がった状態にしてあるので、二人はいつでもどこにいても互いの感情を把握出来る。

そして、いつでも会話が可能であった。

レナモン、何か感じない？何かこう……世界が勝手にずれて
いつてるような……変な感じ。

少女は言葉にはせず、不安そうな瞳を黄金の相棒に向ける。レナモンは、少女が“世界”に対して敏感なのを知っているので、表情を若干険しくさせた。

世界がずれる、か……。すまない、私にその感覚は分かりそうもない。だが……

レナモンが、黙ったまま満月を見上げた。ネリもつられて、夜空に目をやる。

今宵の風は、何やら生ぬるいような……嫌に胸騒ぎがしてならない

そう二人が意志疎通を終えた時だった。配給されている式神の人形から、声がしたのは。矢車の懐から飛び出した白い紙の人形が、けたたましく叫んだ。

「応援要請！ 応援要請！ 刹寡衆全ての人員は大至急七ノ宮公園に向かわれたし！ 現在交戦中である！！ 繰り返し！ 応援要請！ ……」

「だとき。何かは知らねーが、急ごう」

矢車が式神に触れて大人しくさせると、そのまま懐にしまう。ネリは右手を前に出して、開門の呪文をオランダ語で早口で言った。

「（七ノ宮通り北、郵便局前に位置情報をつなぎます。）」

何も無い空間に布を縦に裂いたような亀裂が走る。七ノ宮公園は、ネリが以前置いた目印の近くなので、“空駆け”で行く方が早いのだ。

「これ、行こう、通って」

一番手にキュウビモンに進化した黄金狐と、銀髪の少女が亀裂の中に消える。抜刀した矢車が後に続き、最後に扇を取り出した百合香がぐぐつた。

だから、百合香の口元に笑みが浮かんだのに、誰も気がつく者はなかった。

「柊さ　　ん!!!!!!」

「あれは……矢車の『と組』か。早かったな」

七ノ宮公園で交戦していたのは『は組』『に組』『り組』の面々だった。柊と呼ばれた敵つい男は、4体の鬼を相手に巨大な斧を振るう。

公園、といっても国営の大きい敷地である。築山もあれば池もあり、緑豊かな自然公園だ。黄金の狐は遠くても闇夜に目立った為、よわい年齢40を過ぎる柊にもすぐ確認することが出来た。

柊が回り込んで鬼の腱を断つと、2体の鬼は地響きと共に膝を付く。体が大きいだけで、動作は鈍いのだ。

(だが……数が多いッ！)

ブン、と唸りをあげて振るわれた大斧が、別の鬼の脛を切断する。毎回手入れを欠かさない柎の商売道具だが、数多の鬼の血と脂で曇り、切れ味も大分悪くなってしまった。もはや押し潰す戦法になっている。

柎の『は組』がいる場所まで合流しようとしている子供達だったが、わらわらとわいてくる色とりどりの鬼に手こずっていた。

これはまずい。ネリの陶磁器のような顔に、焦りが浮かぶ。今現在、主力戦力として残っている特級能力者はそれほど多くない。打撃、斬撃で右に出る者がいない柎が倒れば、戦況はかなり厳しくなるだろう。

ネリの決断は早かった。

「キュウビモン、完全体に！」

「分かった。一旦、下ろす……気を付けて、ネリ。」

背中に乗せていた少女を地面に下ろし、二人の周りを矢車と百合香が囲み、援護する。カッと閃光が走った。

キュウビモン進化！！ タオモン！！

百合香の黒い狩衣とは正反対の、白銀のそれをまとったタオモンがそこにいた。人間に似たその姿は、古の陰陽師いんしょうのようだった。

レナモンを成熟期より上の段階に進化させたことが無かったので、

この姿は刹寡衆にとって初めてである。

『 …… ！！… 』 『 …… ！！… 』 『 …… ！！… 』

鬼達が新たな敵に咆哮する。空中にふわりと浮かび上がった彼は、膨らんだ両の袖を横に一閃させた。

コウサツ イッセン
狐封札、一閃！

袖の中から数えきれない程の呪符が放たれ、鬼達の体に貼りつき爆発する。

(なっ …… ！？)

あまりの破壊力に、ネリ以外の人間達は呆気にとられた。腕が飛ばされたり、腹に風穴が空いたりと殺傷性の高い技に鬼の歩みが鈍る。鬼達がひるんだその隙に、タオモン達は柎達の元へ合流することが出来た。

「柎さん、他の組の人達は!?!」

「 …… まだ到着していないクチだろう。お前らだけでも来てくれて助かった よっと!?!」

疲労がみえる柎だが、攻撃の手はゆるめない。身体を捻って繰り出した斧で、鬼の体に押し込む。血しぶきをあげて倒れる巨体には目もくれず、直ぐ様次の獲物に取りかかる。

一つ一つの個体はそれほど強くない。だが数が多いのが問題である。

矢車も加勢し、百合香やネリを背に庇いながら愛刀を振りかざした。カマイタチの如く一時も止まらない矢車は、切れ味重視の中型刀剣を愛用している。素早さと身軽さを売りにする彼の剣撃に、終程の重量は無いのだ。

「…くそッ、刃が潰れてきやがった!!」

結果、数回斬りつけた程度ではダメージを与えられなくなる。

ネリが、ここでも本領発揮した。

「本部武器庫：検索、類似、矢車の剣」

無花果に黙って、もともと空間に目印を付けてあった武器庫を呼び出し、ネリは青紫と淡い紅色の刀の二振りを手にとった。

鞘にはどちらも『矢車』と名前が書いてある。ネリが声をあげた。

「矢車、新しい刀!!」

「…うお!? いつの間に ありがとう よっ!!」

青紫の鞘から一つを引き抜いて、振り向きざまに緑色の鬼を横に薙ぎ、腹を切り裂く。刃こぼれした愛刀は地面に突き刺し、淡い紅色の刀も引き抜いた。

「よっしゃ …!!これで仕切り直しだぜ!!」

筋力強化の術を施した矢車が、鬼の群れの間を燕のように低く飛ぶ。柘も代わりの大斧をネリに出してもらい、鬼達に大打撃を与えていく。

そして、百合香は公園に入ってから初めて口を開いた。

「ネリ」

「……？何、ゆりか」

スツとはるか遠く……築山の頂上を指差して、百合香は震える声で言った。その顔は異様に白い。

「あれ……何に……見え、る……？」

百合香が指した方向に目をやり、ネリは息を飲んだ。『り組』の中级能力者が、目を見開いて叫ぶ。

「い……無花果さん!？」

死んだはずの、無花果だった。

(26) 悲劇の先には

束ねた黒髪を風に揺らし、その女性は部下達を見下ろしていた。葬式の際の白装束ではなく、刹寡衆の戦闘服である。

闇に溶け込むようにたたずむ姿は、よく百合香が見つつけられたと思う程の黒装束だった。

だがなぜ分かったかと言われれば、簡単である。無花果が、額から禍々しい赤い光を放っていたからだ。

その場にいる人間誰もが、生き返った無花果を『馬鹿な』と疑った。そして同時に『まさか』と戦慄した。

「『闇』の……結晶体が…無花果に……？」

終もおかしな空気に気づき、かつての戦友を築山の頂上に認めた。注目されている女性が右手をゆっくり掲げると、鬼の動きが止まる。遣伝子に刻まれた本能が、鬼達を一斉に膝まづかせた。

『……………』

静かになった鬼達を見て、総攻撃をかける案が浮かばないはずがない。だが、刹寡衆さつかしゅうの誰も、それをしなかった。

全ての『鬼』を統べる『始祖』。

それが誰か、片手を上げることで証明されたのだから。

薄した。

「な、くそッ!!」

柊から、抑えられない怒りの声があがる。青い体の鬼が、目にも止まらぬ速さで拳を繰り出した。咄嗟に大斧を盾代わりにして直撃を防ぐが、衝撃は殺すことが出来ずに男性は吹っ飛ぶ。

「ぐああッ!?!」

「柊さん!!」

矢車の剣が、ベテラン剣士の劣勢に一瞬だけぶれる。それは無意識の内に、カマイタチの切れ味を鈍なまらせた。ガキン、と鬼の大腿骨を切断するまでに至らず、愛刀が止まる。

「しまッ!がはっ!!?!」

敵にとっていくら凶悪なカマイタチでも、立ち止まればただの小さな子供である。柊と同じく少年は枯れ葉のように吹っ飛ばされた。着弾地点が池だったのが、せめてもの救いだらう。

百合香は常時、異能を使ってなんとか持ちこたえている状況だった。その目はじっと、育ての親に注がれている。

ネリは、混戦になって早々相棒の手に掬われて、空中に逃れていた。もう少女の異能でどうこう出来るレベルではないのだ。だが、自分だけ高みの見物はしたくなかった。

「(タオモン…!!)」

「（早まっではいけない、ネリ。さつき連続で3回も異能を使った
だろう？）」

ネリを地上から救い出してすぐ、タオモンは高い木の上へ少女を下
ろす。黄金の相棒は、藍色の瞳で紫水晶の瞳に語りかけた。唇を噛
む少女を、困ったようになだめに入る。

ここに隠れていて。……元凶を除いてくるから。

…気をつけて、無茶しないで

銀髪を黒い布で覆い、見つからないように気を配る。戦場に戻った
タオモンは、刹寡衆の人間に目もくれなかった。彼が倒すべきは『
始祖』である彼女一人。

（人間達が持ちこたえている内に、一刻も早く…）

タオモンは、空を飛んで築山まで一直線に向かう。他の組の者達も、
ようやく到着し始めたようだった。黄金の狐は、女性と同じ大地に
衣擦れの音をさせて降り立つ。常に冷静沈着な彼とは思えない程、
タオモンは憤りを感じていた。

「無花果。あの子を喚び出したお前が、我らが討つべき『始祖』だ
ったというのか？ならば、なぜ我らを喚んだ。あの子に血を浴びさ
せて、何を求めているのだ！！」

『……………』

無花果は何も答えない。黙って刀に手をかけ、左下段に構えるだけ

だ。

倒すしかないか、とタオモンが覚悟を決めて袖の下に手を忍ばせた時、突然無花果の顔が歪んだ。

彼女が口を開こうとすると、額の赤い光が揺らめいて弱まる。同時に、タオモンの鼻を腐った水草と土の臭いが突いた。

（これは……人間のの、死臭…！？）

肉体から生命の輝きを感じられない。まるで操られているかのような、無機質な気配しか分からないのだ。タオモンの目が見開かれた。

「お前、もしや……！」

『死ナセテ。私ヲ、殺シテ』

か細く懇願する声は、先程のモノとは別人のようだ。掠れているし、その吐息も死者の腐臭しかない。

墓土の、腐った臭いである。

「……では『始祖』はどこだ。先程鬼を従えたということは…近くに
いるのか…？」

『殺…コロ、シ…』

自我が戻ったのは、その一瞬だけだった。刀を構える両手に力が入り、左下から右上へ一閃する。のけぞったタオモンの服が斬られて、白銀の布きれが宙に舞った。

タオモンの手が袖の下へ伸びる。そこから先程と同じ呪符を取り出し、勢い良く放たれた。

狐封札！

黄金狐は、屍しかほねを爆発させずに力を封じるだけに止めた。

額に埋め込まれた紅い宝石が、輝きを無くしていく。そして点滅した後、ふつりと光らなくなった。

すると、混戦していた戦場は歯車が軋むように止まり始めた。大斧で鬼の拳を防いでいた柊も、池の中で奮闘していた矢車も、その他人間達も皆、驚きに目を見開く。完全に止まったのを見届けて、屍餅をついた矢車の水音が響き渡った。

「はあ……はあ……やった、のか？」

少年は息も絶え絶えに、築山の方へ目を向ける。無花果は膝をついて沈黙し、白銀の狩衣をまとった狐の貴人は、それをじっと観察していた。

「無花果さんは……本当に……？」

「そんな……長が、『始祖』だなんて、間違いじゃないか……？」

呆然と築山を見上げる刹寡衆の面々は、頂上にいるかつての長と、余所者の片割れを見る。タオモンは進化を解くと、頂上から声を張り上げた。

「この者は『始祖』ではない……操られた屍に過ぎない！！本物は別にいるぞ！！」

レナモンはそう言い残すと、高い木の上に残したネリを連れてくる為に、その場を後にした。残された場が騒然となる。

「本物が別にいる！？」

「どういう意味だ！！あれは本物の『闇』の結晶体じゃないのか！？」

長である無花果や指揮官だった特級能力者達を多く失い、統率が以前より崩れてきた刹寡衆。恐怖からくる疑問の叫びを鎮めたのは、一人の少女だった。その小さな細い肩を落とし、ため息混じりに咳く。

「はあ……。全く……。役に立たぬ女よ……」

小さな10歳児の少女の声は、驚くほど周りの人間の耳に届いた。少女は、自分の烏帽子を取り去り、まとめていた髪を下ろし始める。

その姿が掻き消えたかと思うと、次の瞬間には彫像のように固まる鬼の肩に乗っていた。

混戦になってからは矢車に余裕が無かった為、彼女に筋力強化の術はもうかけられていない。

少年が池の中で目を見開いたのに気づいたのは、黒い狩衣の彼女だけだった。

そのまま、ケンケンをするように鬼から鬼へ飛び移る。その先にあるのは　　彼女の母、無花果である。

異様なほど静かになった、国営の七ノ宮公園。

タン、と屍の前に降り立った百合香は己を育てた母に、言った。

「つまらぬ。お前の『闇』はその程度か」

パンツと朧月夜の扇を開き、そのまま横に一閃すると骨と肉を断つ音が響いた。数拍後に、ゴトリと重たい物が落ちる。

それは、背中に流れる髪ごと切断された操り人間の首だった。

「はひっ　　ひい…！」

池の中、少年の言葉は恐怖で空気の漏れる音しかしない。瞳は極限まで開かれ、目の前の光景を拒絶するかの様に首を横に振っている。少女は転がりそうになったそれに、時間遅延をかけて髪を踏みつけた。そして無造作に髪ごと頭を持ち上げ、額の結晶体を掴んで捻り取る。

「ふむ…思ったより育たなかったのう。まっこと使えぬ女じゃ」

結晶体を取られた瞬間、無花果の体がポトポトと崩れ落ちる。それはまるで泥人形だった。

「まあ…無いよりはマシか」

舌なめずりする百合香の狙いに気づいた柊が、斧を握りしめ走り出す。彼が動いたのは、さすがに修羅場を経験していただけに誰よりも早かったが　　あまりにも、動くのが遅過ぎた。

「（大丈夫、ネリ？）」

「（うん）」

木の上で小鳥のようにとまっていた少女を確認し、安堵するレナモン。だが、黄金の彼に焦燥の色を認めて、ネリは身体を固くした。

「（何があつたの？）」

「（無花果は『始祖』ではなかった。……あれは傀儡だ）」

紫の瞳が不安気に揺れる。ネリは話の先を促した。

「（この近辺に本当の『始祖』がいる。その者はまだこちらを窺っているはずだ。）」

ネリは目を見開いた後、落ち着かせるように右手を胸の上で握りしめた。そこにはもう、恐怖心など無い。

それじゃあ、早く行こう

太い枝の上で銀髪の少女が立ち上がる。黄金の狐はゆっくり頷き、少女を肩に乗せて跳躍した。

地面に降り立ち、物凄い速さで走り出す。振り落とされないように必死でしがみつきながら、ネリは前を睨み続けた。

(ごめん百合香……！傍にいてあげられなくて……！！)

中級能力者には過酷な戦場に置き去りにしたことを、少女は後悔していた。レナモンの静止を振り切っても、自分は残るべきだったのではないかと、百合香の身を案じる。

そこで少女は、はたと気がついた。紫色の瞳が瞬く。

「私、百合香を……心配？……友達？」

同年代の存在と極端に接していなかったネリには、初めての感情だったのかもしれない。

百合香に無事でいて欲しい。

百合香に笑っていて欲しい。

それは、なんと暖かくて優しい気持ちなのだろう。心の奥底から沸き上がる焦燥とは別の、穏やかでほんわかとした気持ち。

意識の糸で繋がっているレナモンも、ネリの心境の変化に頬を緩めた。

自然公園の中央である、池が見えてくる。そして木々が開く直前に、柀の腹に響く声が上がった。

「おおおおお！！！！」

なんだ！？

レナモン！あっち！

置物のように動かない色とりどりの障害物、鬼達の隙間からネリは見た。

柊が大斧を振り上げ、鬼神のような顔で百合香に迫るのを。

「！！！！！！」

ネリが息を飲む暇も無い一瞬のはずなのに、物凄く遅く見えた。

実際、遅くなっていったのに気がついたのは、百合香が口を開いてからである。彼女は、可笑しそうに口の端を吊り上げて笑った。

「あはははッ！！お主の名も知っておるぞ 『みかみそうれん三神霜廉』！！

！ 邪魔するでないわ、これからじゃというに！！」

言霊として力を持った『名前』が、柊の動きを縛る。大斧は振り上げたまま固まり、鬼神は憤怒の形相で額から玉のような汗を流した。

30年以上鍛えた、ベテラン戦士の筋肉が盛り上がる。

だが前にも後ろにも引くことは叶わず、鬼達と同じく柊は彫像になる他無かった。

ネリとレナモンはお互い言葉を失い、築山の上を凝視することしか出来ない。

血のように赤黒い結晶体を月にかざし、百合香は口を大きく開けた。鋭い牙が覗く。

ぱくっ……………じゅっくん。

喉を鳴らしてそれを飲み込むと、変化は直ぐに現れた。禍々しい瘴気と赤い瞳の光が、黒い霧の中でチラリと見える。

2本の角がによつきり生え、黒髪が月の光で艶やかに煌めく。

10歳とは思えない　　実際、見た目通りの年齢ではないのだから百合香は、感極まったように息を吐いた。

『ああああ！！何と心地よい……………たまらぬ……………たまらぬのう……………！』

陶然とした様で虚空を見つめる百合香は、人間の存在など忘れてしまったかのようだった。

小さな赤い唇が、言葉を紡ぐ。

『　　もつと、よこせ』

開幕の合図だった。

(27) 『始祖』の告白(前書き)

章管理がやっと理解できたので、取り入れました(笑)

少しでも読みやすくなっていただければ幸いです。

すいません・・・謝ってはばかりで恐縮ですが29話で過去話説明が
おわり、やっと現代の話に戻ってきます。

わー、結界師の新刊17日に販売です!!!!!!

(27) 『始祖』の告白

百合香が黒い霧に包まれた瞬間、レナモンはネリの手を引いて走り出した。ネリのショックが大きすぎて、彼女はその場に根が生えてしまったように突っ立っていたからだ。

相棒に手を引かれて少女はハッと我に帰る。

レナモン！どこ行くの！？

一番疲労が酷い矢車の所へ。あの少年と行動を共にした方が
良い。でないと彼を守れない。

冷静さを取り戻しているレナモンは最善の道を進む為、おんけい隠形でネリ
もろとも己の姿を消した。

水の中で腰を抜かしている少年は、呆けたように築山の瘴気が膨ら
むのを見ている。バシャバシャと水が音をたてるのにも構わず、レ
ナモンはネリを抱えて池に入った。

「矢車、大丈夫か」

「ひっ！？あ…あ、ね、レナ、モン…？」

息が上手く吸えないのか、酸欠状態のように顔が白い。周りの能力
者達は魅せられたかのようにまだ、築山を見ていた。

刀を支えにしてなんとか少年が立ち上がると、レナモンは彼の肩を

片手で支えてやった。

身体的疲労も矢車はとっくに越えていたのだ。そこで同じ組の少女が……あんな風になってしまっただけは、打ちのめされない者はいない。

黒い霧を纏わせたまま百合香は　　否、『始祖』は築山の頂上で
呟いた。

『もっと、よこせ』

囁きのような微かな声だったにも関わらず、『始祖』の声はその場
にいる者一人残らず届いた。

ビクツと、ネリの肩が震える。レナモンに、百合香のことを訊ねる
のは簡単だ。

ただ一言『何があつたのか』と聞けばいい。だが同時に、ネリはそ
の答えの先を知っていた。

百合香は、『始祖』なのだ。それは厳然たる事実として、銀
髪少女を打ちのめす。

悪夢のように鬼達がまた、動き出した。『始祖』自らの命令を受け
て、『闇』を献上すべく暴れまわる。大部分の呆けていた人間達は、
当然反応が遅れてしまった。

ギヤアアア!!!

離せ離せ、離せええええ!!!

助けてくれ!!!誰か　　!

阿鼻叫喚の地獄が再現されたかのような有り様だった。悲鳴、怒号、命乞いの叫びが戦場を満たしている。

ある者は肩を砕かれ、ある者は足を擦じ切られ、ある者は逆さに吊るされていた。すぐに死は与えられず、拷問のような苦しみをなんとか遠ざけようと必死である。

戦闘訓練を積んでいても、痛みに耐える訓練をしていても、生半可な痛みでは無いのだ。人間の生存本能は、容易く誤魔化せるものではない。

レナモンが進化するほんの30秒程をネリは、その異能で稼いでいた。

即ち、空間支配。

周りにいた鬼の目に、刹那衆本部貯蔵の武器をこれでもかとお見舞いする。“繋ぐ”能力で刃物と目標の距離を実質ゼロにし、あり得ない軌道でも必ず到達させているのだ。

7歳のネリが一度に操れる糸の数は、25。右手しかまだ扱えなかったので、25本の武器がネリの生命線である。

目を潰された鬼は、痛みを身に捻りさらに狂暴になる。腕を振り回し、池に立つ水音で子供二人の位置を割り出そうとした。

その巨大な腕が、真上から振り下ろされる。それを受け止めたのは、タオモンの結界だった。

「すまない、ネリ。手を汚させてしまった」

「大丈夫。覚悟、ある」

矢車にも分かるように、日本語で言葉を交わす。味方と意志疎通が出来るといふことは、それだけで気を落ち着かせるものだ。

ようやく自分を取り戻してきた二刀流の剣士は、タオモンが張ったドーム状の結界を改めて観察した。池の底にさっきまで足をつけていたのに、いつの間にか水面の上に立っている。

水面には、タオモンを中心に太極図があった。陰と陽が互いを追いかけて飲み込もうとしているような、白と黒の円である。

タオモンが着ている白銀の狩衣にも、胸に大きな太極図が描かれていた。

「この結界、中、安全。矢車、休んで」

「分かった…と言いたいところだが、皆を助けないと。……特に柊さんが一番危ない」

二振りの刀を構え直し、少年は築山の方向を真っ直ぐ見た。『始祖』は、柊の斧を軽々と持ち上げて遊んでいる。

得物を簡単にとられてしまった柊の顔は、睨み殺さんばかりの形相だ。その様子を黒い狩衣の少女は、ケタケタ笑いながら眺めている。

あまりにも、今までの百合香とはかけ離れた姿に、ネリも矢車も言葉が見つからなかつた。

短く、少年が礼を言う。

「ありがとうな。……お前は、ここにいろ。潰されるぞ」

チャキ、と日本刀の柄が音を立てる。少年の両手は、血が通わなくなる程の力で己の武器を握っていた。

疲労のピークはとうに越えている。少年の足は疲労と恐怖でガクガクだし、未だに頭は長年の仲間を『始祖』だと認識出来ない。

矢車は、いつも百合香を守ってきた。上級能力者の自分が最前線に立ち、愛刀を振るって中級能力者である彼女を背中にかばってきたのだ。

その記憶が、目の前で儂い泡となって消えていく。『なぜ』という思いが消えなくて、刀を持つ手が訳もなく震えてしまう。

7歳のネリは、少年の緊張を正確に読み取って薄い笑みを浮かべる。それは、死神の微笑のようだった。

黒い膝丈ドレスからは細い足が覗き、銀色の頭は月光を反射している。紫水晶の瞳は友達だった少女に向けられているのに、何の感情も映し出していない。

その姿は、完璧なまでに美しい。表情に、酷薄な笑みを浮かべてさえいなければ、だが。

「ゆりか、理由聞きたい。なぜなのか。二人、きく。私、援護する、矢車」

結界の中から、意識の糸が四方に伸びる。目をつむった少女は、眉に皺を寄せて苦痛に耐えた。

「（“周囲の5体。鬼の体内に、転移の門を開きます。”）」

「（ネリ！？そんなことをしたら……！）」

異国の言葉をただ一人分かるタオモンが驚きの声をあげる。ネリは中央で結界を張っているために動けない相棒へ、真剣な瞳を向けた。黄金の相棒だけに、汚れ役をやらせる訳がない。それ相応の覚悟を、少女は戦場に来る前にしたつもりである。

心に呼びかける相棒の静止を切り捨てて、ネリは実行した。

“空駆け”！！

異国の言葉の効果は絶大だった。中級能力者を逆さづりにしていた緑の鬼は、その腕を無くし、絶叫する。

ぱっくり口を開けた漆黒の歪みは、既存の空間を押し退けて生じたのだ。実行された座標に腕があるうが、体があるうがお構いなしに、空間転移の門はその牙を剥く。一瞬にして消え去った漆黒の裂け目は、その爪痕だけを鬼達の体に残していった。

恐ろしく奇つ怪な光景に、矢車はそれをただただ凝視するしかなかった。

首が切断される鬼、腕を無くす鬼、内蔵を断たれる鬼、上半身が滑り落ちる鬼、縦一直線に分断される鬼。

体の色は目にも鮮やかな鬼ばかりだが、流す血は全て赤い色。人間に流れているのと同じ、赤い血だった。

「……くっ！」

異能を直接、殺傷目的に使ったのは今回が初めてである。その負荷は計り知れなかった。

ネリの五感全てが、良心に反する行為に悲鳴をあげる。結界の中で床に手をついた少女に、矢車は刀を構えることで応えた。今出来る最大限で筋力強化の術をかけ、安全地帯から飛び出す。

少女が敵に与えた大打撃を生かして、そのまま少年は緑の鬼に止めを刺した。途中逆さづりになっていた男性を助け、結界の中へ連れ帰り、また戦場へ舞い戻る。

少年が負傷者を二人助けたところで、夕オモンが己の立っていた所に呪符を貼り付けた。そして、銀髪の少女の元へ駆け寄る。結界の場所を動かせなくなったが、代わりに夕オモンが動けるようになったのだ。

「……大丈夫？ネリ」

「大丈夫。まだ、行く、できる」

少女の顔は蒼白で、唇も青い。だが目だけは言葉通り、闘志を失っていないかった。普通の子供なら右も左も分からない年齢であり、血を見たら悲鳴をあげて目を背けるのが普通の反応だ。

ましてや、己の手で他者の血を流すことなど出来はしない。その術すべ自体が無い、年相応の7歳児ならば。

ネリは違う。

…ネリ。体力をとっておいで。

分かった

少女の覚悟を甘く見ていたタオモンは、自分を恥じた。ネリはその小さな白い手を、血で染める覚悟をしていたのだ。守られるだけの非力なお姫様では断じて無い。

「……林の中を迂回して、築山を後ろから回り込もうと思う。」

矢車が、ネリを気遣いながらも作戦を話し始める。12歳の幼い少年剣士は、恐怖を精神力で必死に押さえつけていた。

（7歳の…こんなチビ助が戦場に立ってんのに…俺が逃げれるかよ！！）

勇気を奮い立たせ、タオモンに協力を依頼する。あの赤い結晶体の力を封じられるのは、この狐の貴人しかないのだ。

「俺が囷になる。刺し違えてでも、1分は柵さんから目を外させてみせる」

闇を統べる鬼の『始祖』に、近距離まで近づいて命の保証はない。だが、タオモンなら人間離れた能力で空を飛べるし、何より呪力が並外れている。

自分より確実に、生き残って主戦力足り得る柊を救うことが出来るだろう。

12歳、疲労困憊の少年が最期にやるべきことといったら、ベテラン戦士を救うことを置いて他は無い。

少年の壮絶な死の決意に、タオモンは圧倒された。まだ12歳。タオモンから見れば、7歳も12歳もまだ子供であり、庇護を必要とするか弱き者達である。

(なぜ、世界はこんなに過酷な運命を与える!?なぜ、次世代の若者に死ぬ決意をさせる……!!)

しかしそれが現実であり、覆りはしない。くつがえどんなに待っても、百合香が以前の百合香に戻ることは無いのだ。

ネリを置いて行くのは心苦しいが、百合香の止めを刺すのは何かなんでもタオモンがやるつもりだった。

友達だった少女と戦わせるなど、させられる訳がない。

「行くぞ、矢車!」

「おつよ!」

威勢良く白銀の狩衣と漆黒の戦闘服が、結界を飛び出す。少年の刀を握る手はまだ、震えていた。

「なぜだ、百合香……。どうしてお前が『始祖』なんだ？」

地上より高い場所で40過ぎの男と、10歳の少女　　鬼が対峙していた。だが、その関係は対等とは程遠い。

何かを振り上げたままの格好を余儀なくされている男性は、自分の斧で遊んでいる少女に語りかけた。

『どうして、とな。私の存在理由を問うているのかえ？』

ふざけたように笑う少女は、己の身長と同じ大きさの大斧を肩に担いでみせる。

鍛え上げられた大柄な男性でないと、持ち上げることさえ出来ないはずなのに、一見非力そうに見える少女はそれを軽々と扱っていた。

それは、あまりにも不自然な光景である。

柊が質問を変えて、一番彼が知りたかったことをきいた。見下ろしたまま、慎重に口を開く。

「一つだけ教えてくれ。……無花果　　芥生あひみは、お前が殺したのか？」

男性の鋭い眼光に『始祖』の目が一瞬だけ泳いだ。その反応に柊の方が驚く。百合香はそんな自分を恥じるように、柊を強く睨み返した。　　まるで、目の前に生きた無花果がいるかのよう。

『……………そうじゃ。我が殺した。我が……………我が、息の音を止め

てやったのじゃ！！」

百合香は赤い瞳を邪悪に光らせて、黒い狩衣の袖を握りしめる。まるで、己に言い聞かせているような少女の様子に、柊は元の『百合香』の片鱗を見た気がした。

揺さぶりをかければ、『名前』の縛りも解けるかもしれない。微かに現れた勝機の光に、柊は強張った筋肉に力を入れたのだった。

(28) 続く悲劇…そして、終焉(前書き)

正直に言います……。

ストックがなくなりました……。

29話を投稿したら一週間ほど時間をください。第三章という形で
始まりますので。

追伸。簿記試験落ちました……。
まずい、勉強する時間が……

(28) 続く悲劇…そして、終焉

「違うな。お前は、あいつを殺そうとして殺したんじゃない……そうだろ？」

『……何じゃと』

少女の眉が跳ね上がる。低く凄みが増した鬼の声に、柊が怯むことは無かった。笑みさえ浮かべて、男性は口を開く。

「あいつと10年一緒にいて、情でも移ったか？」

『……ふん。情が移った？……我はこの女に殺されかけたのじゃ！』

ゴウ、と少女を纏う瘴気が強くなった。泥人形の体からちらほらと見えていた骨格が、ぐずぐずに溶けていく。それは、一瞬のことだった。

『この女が死んだ日、こいつは“名”の縛りで我もろとも葬り去ろうとした！！己の死期を悟ってな！！』

柊が驚きに目を見開く。それはつまり、無花果が

「あいつは…正体を知っていた……？」

組織に排反行為をしていたということだからだ。

歯車はゆっくりと軋みをあげて歪み、こぼれ落ち、やがて噛み合わなくなっていく。

『始祖』の概念は、無花果が刹寡衆を設立した20年前からあった。設立時18歳だった無花果は、能力者を集めて自治組織を結成する。数は少ない能力者。虐げられ、化け物と蔑まれた者同士肩を寄せ合い、夜に生きることを己に課した。影から、昼に生きる者達を助けようと、皆で誓いあったのだ。

政府も彼らの献身的な行動を喜びこそすれ、解散させるようなことはしなかった。昼の人間には極力組織の情報は伏せ、鬼達の対処を刹寡衆に一任した。

その時期に『始祖』だった鬼は長い黒髪に黒いローブを被った、性別は不明、外見も闇に溶けてしまうような人物だった。

身体能力は桁外れで、能力者と比べるのも馬鹿らしくなる程の実力の持ち主。それでも死闘の末、無花果はなんとか『始祖』を倒したのだ。胸を一突きにした瞬間赤い結晶体は砕けて霧散し、彼女はそれを見届けて意識を手放す。

意識不明の重体から回復して2年が経ち、刹寡衆は能力者の管理集団として成り立っていた。

やっこのことで平和を手にしたのだ。皆思いもよらなかつたし、信じたくも無かつただろう。

鎮静化したはずの『鬼』騒動が、またぶり返してきたのだから。

しかも悪いことに、鬼達に以前のような規律は無かった。破壊の限りを尽くし、人間を蹂躪し手当たり次第に食らいつくした。

刹那衆の存在意義が世界によって再度与えられた時、無花果は百合香と出会った。

無花果は、百合香が『鬼』であることを知っていた。知ってもなお、額に赤い結晶体を持つ赤子を殺すことが出来なかった。力を封じ、鬼の破壊本能に目覚めぬよう嚴重に術をかけるに留める。何故なら、その瞬間悟ったからだ。

『闇』を消滅させることは、不可能なのだ。

『我は、死を超越した存在。光あるところに闇が出来ない道理は無い……諦めよ、人間。』

新しい肉体を得て、まだ10年とは思えない『鬼』は勝ち誇るように笑った。

『お主らがどのように足掻いても、我を滅するは理に反する。我は、世界になくってはならぬ存在なのだからな!!』

身体を思いつきり捻って、百合香は大斧を後ろに構える。柎の顎から汗の雫が落ちた。“名前”で縛られたのを解くには、対抗する術が必要である。柎に呪力を扱う才能は無かったのが災いした。

「くそっ……！」

首の横に腕がある状態なので、左上腕筋に力を徐々に籠める。腕を無くしたとしても、首が落ちるよりマシだからだ。止められるとは、柀自身思っていないのだが。

『あの世で……再会でもするのだな、芥生の戦友よ!!』

『始祖』が後ろで踏ん張る足に力を掛けた瞬間、風を切る音が少女の耳に届いた。本能が警鐘を鳴らし、男の首は後回しにする。

大斧を後ろ手に構えたのとほぼ同時、交差した日本刀と大斧の刃が高い音を立てた。

矢車が少女の背後から、その首を切り落とそうと全体重をかけて飛びかかったのだ。

ギチギチ、と鍛えられた名刀が悲鳴をあげる。無理な体勢にも関わらず、百合香の右手は震えもしなかった。

『ほほう……先程まで腰を抜かしていたかと思っていたが……、何ぞ決心でもついたかえ?』

「百合香……。お前が、なんで……」

心の整理もつかないまま少年が思ったままの言葉を溢すと、2歳年下の少女は不快そうに眉を寄せた。

『……ふむ、同じことを二度も言うのは我でも怒るぞ』

真後ろにいる少年は、百合香の空いた左手が扇に伸びたのを見た。

時間遅延をかけられる前にありつただけの力を籠め、反発を逆に利用し離脱する。一回転して地面に着地すると、矢車は油断なく構えた。

『幼なじみの背を足蹴にすることは…酷い男よの』

「……その口調やめろ」

苦い声を絞り出すように少年が、刀を持つ手に力を入れると百合香は柎に背を向けた。動^ま動的を相手にするほうが、興味^まが勝つたのだろつ。

巨大な斧を肩に担ぎ、対峙した『始祖』は不敵に笑う。血のように赤い唇、墨を溢したような漆黒のくせつ毛髪、そして爛々と光る赤い目はまさに『鬼』だった。

頭から二本の角が生えているのだが、少年にはどうしても悪い冗談のようにしか見えなかった。『鬼』が軽く首を傾げる。

『お主の名は知らぬなあ……？無花果の記憶の中に無^{ゆえ}かつた故な』

「無花果さんの、記憶？」

眉を寄せて疑問を返す矢車に、百合香は扇を懐にしまった。時間遅延をかけたなら簡単に勝負がついてしまうので、しばらく“遊ぶ”ことにしたのだ。

『特級ばかりが死んだのを不思議に思わなんだかえ？あやつらは、無花果の戦友であり“名”を交わして誓いあつた同志なのじゃよ』

未だにピンと来ない少年だったが、少女の肩越しに柎が目を見開い

たのが見えた。三神霜廉と呼ばれた男は、20年前の設立当時から無花果と肩を並べていた豪傑だ。

その鋼のような男は、絶望したように『始祖』を見ている。男から掠れた声が漏れた。

「お前…まさ、か」

『我がこの女に引き取られたのは、今考えてみれば何らかの作為があったのやもしれぬ。……この女の脳には、主軸となる特級達の“名”が納められているのだからなあ!!』

舌なめずりして、『少女』はその味を思い出しているようだった。

矢車にもその意味するところが分かり、顔を青くさせる。それは、『鬼』というよりもはや『悪魔』の所業であった。

『始祖』は、刹寡衆長の脳を喰らったのだ。育ての母の脳から記憶を得て、百合香は重要人物達の情報を知る。

そして、“名”の持つ呪力で特級能力者達を戦闘不能にしていた。斧の切っ先をかつての幼なじみに向け、少女はニタリと笑う。

『なかなか悪くない味であった。28歳の女にしてはな』

ハハハツ、と高く笑う少女の声に、矢車は視界が怒りで真っ赤に染まるのが分かった。少年は、無花果と同じ日本刀の使い手であり、同じく呪術も修めている。

憧れていた。彼女の在り方に、その強さに。

目標だったのだ。修行も一番多く彼女につけてもらった。己が長と同じ型の異能者タイプであることが誇りだった。

「てめえ……………！！！！よくも！！！」

それを、目の前で踏みにじられた。高く笑いながら、そこら辺の食事の良し悪しを言うような調子で鬼は、のたまったのだ。

何もかも忘れて百合香に斬りかかろうとした時、背後から鈴を転がすような声がかかる。

「人間、多分、美味しくない」

矢車の後ろから歩み出たのは、黒いドレスのネリだった。

『おお、確かにまともな人間ほど不味いものは無い。恐怖と悲鳴、恨みと絶望で味付けせねばな』

百合香の背後でタイミングを図るタオモンは、小さな少女の登場に度肝を抜かれた。あの結界には、ネリが出ないように術をかけてあったからだ。

空間転移で来てしまったか……………！！

黄金狐が内心舌打ちを漏らすと、少女から謝罪の念と決意が帰ってきた。

ごめんね…でも、私の攻撃が一番有効だよ。

紫水晶の瞳は、何の感情も映してはいない。耐えられない感情を内に秘めている時、ネリがこうして仮面を被るのをタオモンは知っていた。

「百合香。私きく、しない。それは無駄、分かった」

いつそ冷酷にも聞こえる年下の少女に、百合香は面白そうに目を細めた。

『……ならば、我を殺すかえ？我は、世界に欠かせぬ存在』

「違う。」

『始祖』の言葉を遮り、ネリは目を閉じた。そして意識の糸を、友だ…た存在に繋げる。不慣れな日本語を扱っては、正確に意思を伝えられないと思ったからだ。

私とレナモンは、異世界から『始祖』を倒す為に来た。世界はお前をもつ必要としていない！！

『……な、何を言っ…』

「世界は、人間、味方。……私は、『始祖』倒す！」

その瞬間、百合香の前後左右に漆黒の顔あきとがその深淵を覗かせた。全てが異世界へ続く門である。ネリがタオモンに目配せすると、彼は柵の救出に動いた。

ブラックホールに4方向から吸い込まれるような感覚に、百合香は歯を食いしばって耐えていた。4つの門は平等の力ではないため、ともすれば一瞬にして世界から追放される。柊の斧を地面に突き刺さなかつたら、残像も残さず消されていただろう。

『ぐううおお、おのれえええ!!』

世界を渡れない者が、世界と世界の狭間に落とされたらどうなるか。それは即ち、永遠の拒絶である。

どの世界からも侵入を拒絶され、狭間から出ることは叶わず、果てはネリ自身さえ知らない。

光と対^{つひ}を為す存在として、何度も不死鳥のように蘇っていた『始祖』。だが、百合香はやってはならないことをしてしまった。

人間に闇の結晶体を埋め込み『始祖』である証を、一時的に他者へ譲渡した。

無花果が己の死期を悟り、百合香を道連れにしようとしたのも実は“世界”の意思である。

光と闇の均衡を乱した罪は、重い。

世界の狭間で、朽ち果てるが良い。

ネリの意思是、そのメッセージを最後にぶつつり断たれた。

『我は、死なん!!こんな所で……!!こんな、とこッ………』

赤い目だけがキラキラと光り、助かる道を必死で模索する。
紫の瞳を真正面から見た時、ある方法が天啓のように百合香に舞い降りた。

（その手があった……！）

大斧がじわじわと動き出す。百合香は『今』助かるのを諦め、『未
来』に助かる方法を編み出した。

つまり

『ガアアアアアアア！』

強制的に体内から闇の結晶体を一ヶ所に集め、練り上げ 放出
した。唯一空いていた上空へと発射された真紅の欠片は、その大部
分がネリへ降りかかる。

柎を支えていたタオモンも、二刀流の剣士も反応出来ない速さであ
り、数の多さであった。

だが、ネリは百合香を真っ直ぐに見つめる。顔を庇かばいもせず、その
場を動かうともしない。

ただ、静かに言った。

「ばいばい 『鬼百合』」

驚愕を顔に貼り付けたまま、百合香は真後ろの漆黒へと消えていっ
たのだった……。

一度に4つもの異界の門を開いた代償は、大きかった。記憶が、消えてしまったのだ。この処置はあるいは世界からの温情だったのかもしれない。友を世界から永久に追放したのは、殺したのと同義である。

7歳のネリにこの記憶はあまりに辛過ぎたのだ。

成長するにしたがって断片的に思い出していくネリは、この世界のことを記憶の奥底に沈め、自ら鍵をかけた。

“ユリカ”と“ネリ”の名を使い分けることで、異世界の住人の記憶に残らないように渡り歩いていく。

友も作らず、仲間も作らず、ましてや好きな人など 出来なかった。

結界師の世界に足を踏み入れるまでは。

(29) 過去話は、ネリが説明してました あれッ今更!?

「 という感じで、その鬼と私は浅からぬ縁があるわけ」

限への説明から始まった昔話は、良守と時音も結局巻き込み、5限目を丸々潰す形となった。部活動を終えた生徒達が、もうそろそろ帰る時刻である。

夕陽が傾き、世界はルビー色だ。

壮大な冒険譚、もとい過去を聞いた3人の少年少女達は複雑な表情をしていた。

(初めて出来た友達を……手につけなきやいけねーなんて……)

良守がチラリと、ネリを伺う。だが14歳のネリに、もう暗い翳りは無かった。どこか吹っ切れたような、清々しい表情である。

それは少女にとって喜ばしいはずなのだが……良守の心に、言い知れぬ不安がよぎった。

「『闇』の欠片を浴びちゃったせいで、私とその子の縁は切れてないの。それで、その子が今」

「 黒芒楼の親玉にとり憑いている、という訳なんだな?」

腕を組む限は、ネリの言葉を引き継いだ。そして銀髪の少女は頷いた後、己の頭を指差す。

「そ、そうだな」

良守と時音が、急ぎ足で屋上のドアに向かう。限とネリが動かないのが気になったのだが、結界師二人はその場を後にした。両家の当主にも早く伝えなくてはならないからだ。

ボタン…とドアが閉まる音が反響する。

まだ握ったままだった限の携帯に、ピシッとビビが入った。少年の抑えられない激情のせいだ。

「最初から…行く、つもりだったんだろ。ネリ」

「……うん、そうだよ。」

低く唸るような少年の声に、ネリはうつむいた。事情を説明するのは後でも良かったのだ、本当は。

ネリが黒芒楼に“行く”という選択肢を潰すには、氷蛾ひむしから連絡があった時、すぐに正守へ電話すれば良かった。だが、少女はそれをあえてしなかった。

事情を説明することを優先し、3人を 特に限を納得させる為に、最初から最後まで話をしたのだった。

「姫様が元気になってくれれば、烏森を狙う話自体潰せるかもしれない。……姫様に協力してもらえれば、その部下達もいうことを聞いてくれると思うし」

ネリの視界には、限の足元と赤く染まった屋上しか無い。心の内で

荒れ狂う嵐を抑えた少年は、はあとため息をついた。

「あいつの言ってたことは正しかったな……」

「？」

つい昼間に良守が言っていた。ネリは周りに気を遣ってばかりだと。そして同時に、正守の言葉までもが限の脳裏に走った。

（本当の意味で頼ることは出来ない　って、こういう意味か）

未来を知っているが故に、周りの人間が危険な目に遭わないように行動する少女。周りに相談することさえせず、勝手に自分を切り売りしてしまうのだ。

自己犠牲も甚だしい。

怒らないと約束した手前、限は驚くべき精神力でもって声を荒げたりしなかった。

「……とにかく、頭領に連絡はするぞ。黒芒楼の奴らが今夜来るにしても、話が急すぎる。せめてもう一日欲しい……万が一あっちに行くにしてもだ。」

唸るように低い声で言うと、少年はヒビが入った携帯を操作しようとして　その手を止めた。ポケットにしまい、ネリに歩み寄る。

「……限……？」

「……………」

ネリまであと一歩の所で、限は足を止めた。そして、くしゃりと銀髪
の頭を武骨な手で撫でる。

「お前は俺が守る。そう簡単に諦めるな」

かつて姉に言われた“守る”という言葉に、限はどこか不思議な気分
になった。記憶に傷を抉られるでもなく、姉を傷つけたあの夜の
苦しみでもない。

(姉ちゃんは……こうやって俺を…守ろうとしてくれてたんだな…
…)

何かされたら姉ちゃんにすぐ言いな。姉ちゃんが守ってやる
から。

暑い夏の日に、姉の涼に言われた言葉がよみがえる。

暖かいような、くすぐったいような気持ちで限が撫でていると、ネ
リはきょとんとして少年を見上げるだけだった。

「姫には時間が無い。もってあと一週間…ギリギリといったところ
だろう。」

「オイオイ、それって結構ヤバいんじゃないの？白」

黒芒楼の幹部が一同に集まり、とある塔の一室で会議をしていた。
盗聴防止も兼ねて、側面の壁は吹き抜けであり、ちよっとした東屋

のような作りになっている。話の主導権を握るのは、勿論白であった。

緊迫感の欠片も感じられない男の単調な口調に、突っ込みをいれた女性がいた。

名を、紫遠しゆんという。

髪をお団子にしてかんざしを差し、女郎蜘蛛が人間の形をしたような姿である。蜘蛛の巣が背に描かれた白い上掛けを羽織り、男勝りな口調が板についた女性であった。

「解決策が無いわけではない。その為には皆に集まってもらったんだからな」

男の癖なのか、白は指を組んでその上に顎を乗せた。そのまま幹部全員を見渡す。長い白髪がはらりと肩からこぼれおちた。

「姫の妖力を回復させられる存在が、烏森にいる。」

「…………ツ」

普段無表情の藍緋に不満の色が浮かんだが、それに気づいているのは白だけだった。構わず、男が話を続ける。

「妖混じりと呼ばれる人間の娘で……………藍緋とは知り合いらしい。」

「ほほう。それは興味深いデスナ」

諜報部の碧闇が興味をそそられたように、藍色の女性に目をやる。

だが、白衣の女性は説明することはせず、白に噛みつくように言った。

「人間だろうが妖だろうが関係ない。あの子を傀儡にするのも、蟲を入れるのも私が許さん。城にいる間は私の傍に置く。勝手に手出しする奴は……」

「約束は守る。姫さえ持ち直せればそれでいい」

もう何度目か知れない程釘を刺す藍緋に、白は苦笑した。

感情をそんなに表に出さない藍緋なので、逆にこれ程人間を守ろうとするのは異常と言える。

(ふーん……。何か面白そうじゃん?)

頬杖をつく紫遠は、白衣の女性に見えないように口の端を吊り上げた。

そして、白はやっと本題に入る。

烏森にて妖混じりの少女を連れてくること。その手段は問わない、と。

「藍緋と紫遠。行ってくれるか？」

無理矢理連れて来ることはほぼ確定事項なので、人海戦術に特化した紫遠が適任だと白は判断したのだ。

火黒を行かせても良いのだが、少女に並々ならぬ関心を寄せている風だったので、近づけるべきではない。白の穏やかな頼みに対して紫遠は、やる気の無さ全開で答えた。

「言っても良いけどさ　なんつーの？穩便に？そうゆづのあたし
苦手なんだよね」

「…説得は私がする。無理だった場合は　…仕方がない」

苦々しく言う藍緋を横目で見ながら、紫遠は注意深く幹部達の反応を伺った。

（藍緋から蟲が取れたのは確定だな。白にこれだけ強気に出られるわけねーし。）

ふむふむ、と怠惰な仮面の裏で蟲の支配を逃れた人物を特定していく。

久々に楽しい夜になりそうだと、紫遠はフツと笑うのだった。

頭領である正守は、携帯電話で限と話しながら頭を抱えていた。少年が簡単に黒芒楼について報告すると、夜行の長は唇を噛む。

「確かに時間が無いな……。せめて、染木の呪印だけでも外してやりたかったが…」

『あ、頭領。そのことなんですが……』

電話の向こうで少年が、ネリから聞いた話をそのまま伝えた。

『呪印はもうほとんど消し飛んでしまったらしいです。…あいつの

妖気に耐えられなくて』

「 ツ！？また妖力が増したのか！？」

驚愕の事実にしぼし言葉を失う正守。人間の身で妖力がそれほどまで増加するのは、あり得ないことであり危険でもあった。

あまりに安定した変化をする少女に正守自身忘れがちだが、完全変化は身体に負担がかかる。人間の細胞では妖の力に耐えられないのだ。

人間の、細胞ならば。

「そう、か……。出来ることなら俺が行きたいが……」

正守は明日、裏会の幹部会。それも正守のための顔合わせを控えていたので、今は身動きが取れない。何と間の悪い……と眉をしかめながら、正守は限に指示を出した。

「ネリが行こうとしているなら、無理に引き留めなくて良い。ただ、連絡を絶やすなと伝えてくれ」

『 頭領。あいつが行くのを、許可するんですか？』

電話の向こうで限が、必死に激情を抑えつけている。まさか正守が、ネリの黒芒楼行きを承諾するとは思わなかったのだらう。

少年の気持ちが痛いほど分かる夜行の長は、安心させる様に語りかけた。

「あちらにはネリの味方が少なくとも一人いる。土地神級に匹敵する氷蛾がな。それに、あの子ならいつでも烏森に帰って来られるはずだ」

世界を渡ることが出来る少女である。それに、ネリが向こうに行くということは、確固たる足掛かりが出来るということだ。

(親玉の妖を救うんだ、恩を売れるかもしれないしな)

秘かに考えを巡らせると、限も正守の言い分にくらか納得出来たようだった。空間支配系、しかも上位能力者を一か所に繋ぎとめるのは、なるほど確かに簡単なことではないのだ。

電話を切ると、執務室に静寂が舞い降りる。血のように赤い夕焼け空は、どンドン藍色へと表情を変えていく。

正守の文机の上では、西洋風の短剣が光っていた。

「じゃあ、あっちに行ってもネリちゃんは自由に帰ってこれるのね？」

『ええ。時音さんに以前渡したロケットを目印にしても良いですし、私の部屋の中にも目印を置いてあります』

狐の耳を生やし、黒と銀の尻尾を従えているネリは、校門の前で時音と話をしていた。良守と限はまだ来ていない。今までだって黒芒楼にはいつでも行けたことを伝えると、時音は呆れた顔をしたものだ。

「あのロケットって、目印だったの？」

『ん……目印にもなりますけど……。本当の役目はちょっと違います。あれは、切り札なんです』

「……………」

頭の上に盛大なハテナマークを飛ばしている時音は、疑問を返す。小さな巾着に入れたロケットは、時音の懐にしまつてあつた。

ネリは、獣耳をピクリと動かした。もうそろそろ、限と良守が到着するようである。

回りくどいことはせず、少女はズバリ言った。

『それを妖に投げつけたり、妖が飲み込んだりすると……………異界の門が開きます。』

「……………ええっ!？」

天穴^{てんけつ}を取り落としそうになって、時音は慌ててそれを掴み直した。とんだ切り札、もとい爆弾を渡されたものである。

『……………世界の狭間に落とされた者は、どの世界からも拒絶され未来永劫暗闇の中をさ迷い続ける……………』

はずなんだけどなあ……と、ネリは頭をかいた。実際に百合香という狭間から抜け出した存在がいるだけに、最早切り札には成り得ないのかもしれない。時音が改めて再確認するように呟いた。

「もう結界師の域を越えているわね……」

畏怖を抱いたかのような表情の時音に、ネリはくすりと笑った。そもそも、世界を創るといっのはネリだけの専売特許ではない。

黒芒楼の一件が片付けば、今度はもっと複雑な結界術を、良守と時音は会得することになるのだから。

(私は、それまでここにいられるのかなあ……?“異物”である私は、いつかこの世界からも追放されるのかなあ……)

限の顔を思い出して、心のどこかがズキリと痛んだ少女だった。

「おーい!!--」

良守がリュックサックを揺らしながら、校門に近づいてくる。緊張感の欠片も無い良守の様子に、時音はジト目で幼なじみを見つめた。

「あんだねえ……」

「ネリ!あいな、繁じいがこれ持っててくれってさ」

『……………?私に?』

良守がごそごそと取り出したのは、ひとがた人形に切り取られた和紙の欠片だった。

それが5枚ある。

「伝令にも身代わりにも使える優れもんらしいぞ。連れ去られそうになった時の、一応保険な。」

ニカツと笑う少年にネリは、心が暖かくなるのを感じた。

自分を心配する人がいる。あまり話したことも無いのに、墨村の当主までもがネリの身を案じている。

自分から黒芒楼に行こうとしているだけに、とても申し訳なかった。

『ありがとう……。連絡はこの子達を使うね』

「…ん？ああ」

認識の齟齬に良守が眉を寄せる。それを見た時音が、説明し始めた。

「ネリちゃん。黒芒楼に行くことに決めただって。」

「…んなつ、自分から!？」

尻尾をゆらゆらさせながらネリは肩を竦めて見せた。緊張はあるが、どっちにしろいつかは行かなくてはいけないのだ。

『闇』を統べる鬼を野放しには出来ない。

『連絡は絶やさないとつもりだから、大丈夫。あっちのこともある程度なら状況知ってるし。』

妖といっても皆、悪者ではないのだ。きっと話せば分かってくれる、と原作知識を持つネリは考えていた。

だが、結界師二人はそうもいかない。彼らはこの平行世界で生きていて、自分たちがこの世界の主人公であることも知らずに生活しているのである。

ネリがいかにも知識を持っているからといって、『ハイそうですかと送り出せるわけも無かった。』

「ネリちゃん……絶対無理しちゃだめよ。」

「……ヤバくなったらすぐ帰ってこいよな」

口々に少女の身を心配する二人に、後ろめたい気持ちになるネリ。良守から遅れて数分後、限が民家の屋根から飛び降りて3人に合流した。

ネリが変化しているので、校門の所にいるのが分かったのだろう。夜行の少年の顔は、固い。

『限……。』

「……頭領から、『連絡を絶やさないうで逐一烏森と夜行に報告を入れること』……と、言われた」

正守の伝言を伝える限の顔は、端はたから見てもやるせない思いで溢れていた。

守ると、約束したのに。

為す術すべもなく見送らなくてはいけないなど、少年には酷であった。

拳を握りしめて耐えている少年に、ネリはその手を取る。強張った指を懸命に解すと、細い指を絡めた。限の体がギシ、と固まる。

「大丈夫。……必ず帰ってくるから。……だから、待ってて。ね？」

「……………」

藍色の瞳に、嘘は無い。妖が蠢く城に行って、帰ってくるつもりでいる。

だが、危険でない訳がない。一緒についていきたいのはやまやまだが、自分はきつとあちらで暴れ回ってしまうだろうと、限は冷静に考えていた。

(俺は……壊すだけ、なのか)

限とネリの視線が切なく絡み合った瞬間、結界師二人は烏森に“客”が訪れたのを感じた。

獣人化しているネリにも分かる。妖力の質を覚えるように以前から訓練していたからだ。

気配は、二つ。

一つは見知った者だった。

「藍緋が来てくれたのか……それならまともな話が出来そうだな」

幾分か荒い口調に戻りながら、ネリは限を見てにっこり笑う。

『話の分かる幹部が来たよ。私の味方だから』

「……気をつける、ネリ。簡単に妖を信用するな」

緊張をはらんだ眼差しで限が忠告すると、4人は校門を潜っていた。

「へえ〜ここが烏森か。小^{ちい}っせんだなー」

「……妙だな。既に変化しているのか…？」

校庭のと真ん中に降り立った二人の女性は、己の身にゆるゆると降りかかる力を感じていた。烏森の殿様 宙心丸、という魂蔵持ちの子供から得られる力は、ネリの妖気の比では無い。

ネリ以外の誰も、烏森の秘密については知りようが無いので、二人はただの神佑地として認識している。

白衣をはためかせて紫遠から距離を取った藍緋は、子供達が現れるのをじっと待っていた。

どうか、抵抗してくれるなと祈りながら。

（出来る限り守りたいが…変化後の容姿のことが気になるな。姫様とも…まさか知り合いなのか）

校舎の間から小走りに登場した4人に、藍緋は怪訝な顔をした。突

然の侵入者を前にして4人の反応がバラバラだったからだ。

結界師二人は警戒心半分に、藍緋を見極めようとする姿勢をとっている。妖混じりの二人は一番極端だった。

緊張してはいるが警戒はしていない少女に、警戒心に輪をかけて殺気を漂わせている少年。

口火を切ったのは、銀髪の少女だった。

『昨日ぶりですね、藍緋さん』

「……ああ。」

何とか返事を返すと、ネリは紫遠の方に目を向けた。当然知っているのだが、一応初対面である。

ぺこり、と軽く会釈をした後藍緋に視線を戻した。妖に対して対等に接するネリに、紫遠は内心驚いていたのだが顔には出さない。

藍緋は、藍色の髪を一瞬うつむかせた後、一気に言った。

「すまない、ネリ。お前に姫様を助けて貰いたくてこうして来た。私達と一緒に黒芒楼まで来てくれないか」

『……まあ、断ったらその用心棒さんが無理矢理連れていくんでしようけど?』

九尾を揺らめかせながら、ネリは藍色の瞳を不気味に光らせる。戦闘になった場合は容赦なく倒す気概で限は、ネリのすぐ傍に待機し

ていた。

『一つ、確認して良いですか？』

「何だ？」

ポケットに両手をつっ込み、藍緋は姫と似た容姿の少女を見つめる。銀髪の頭を可愛らしく傾げて、ネリは微笑んだ。

『白はいつもと変わらず姫と話したりしてるんですか？』

「……ああ。その筈だが……？」

何か引つかかるものを感じた藍緋だが、紫遠がいる手前あまり滅多なことは話せない。一人でふむふむと頷いている少女に、白衣の女性には焦る気持ちを抑えてネリを見つめる。

手荒な真似は出来るならしたくないのだ。自分を蟲の呪縛から解き放ってくれた、命の恩人なのだから。

「ネリ。お願いだ……姫を助けてくれ」

『……分かりました』

仕方ない、といった風のネリに藍緋はほっと胸を撫で下ろした。少女が返事をした瞬間、妖混じりの少年から一際強く殺気が放たれたが、女性に気にする余裕はない。

最早頼み込むしか出来なかったのだが、ネリは抵抗もせず大人しく紫遠の蜘蛛の糸に巻かれていった。毛糸の糸玉のような状態であ

る。任務があっさり終わってしまったことに、紫遠はチツと舌打ちをした。

「はーっ、何か拍子抜けだな。何でこんなガキに藍緋はビクビクしてんだよ。ただの異能者じゃん」

烏森に来て何も面白く無かったせいも、紫遠が盛大に愚痴る。遠くで結界師二人の顔が、不快そうにしかめられた。

ぐるぐる巻きにされたネリは、もう見えない。

藍緋は鋭い視線を向けて同僚を黙らせようとしたが、紫遠は構わず糸を操りながら言った。

「あいつらも何か普通に行かせるつもりみたいだしさー？あたしの出番ないじゃん」

飛び出しそうになる限の腕を、良守がガシツと掴む。藍緋は凄みをのせて、紫遠を睨んだ。

「これであの城も救われるんだ。つべこべ言うな」

ネリが入った糸玉を紫遠の部下達が持ち上げる。地面から浮いた、その時だった。

『随分となめられたものだな、紫遠？』

糸の隙間から、禍々しくて黒紫色の光が漏れだす。それは易々と糸玉を砂のように溶かし、消し去った。

そこから白い足が覗き、烏森の地を踏みしめる。

『私は争いが嫌いなだけなのだがな……？それほど“出番”とやらが欲しいか、紫遠？』

「てめ、人の名を何度も呼びやがって……！」

紫遠の指先から無数の糸が放たれる。それらは様々な角度からネリに襲いかかったが

『面倒臭いな。そらッ！』

ネリの周りに突如現れた7色の狐達に、全て防がれた。ふつくと形の良いの赤い唇が、ニイとつり上がる。

『お望みとあらば、腕から何から消し飛ばしてやるうか？』

「何なんだよ、てめ……！！」

憎々しげに口を歪ませる紫遠は、心の中で動揺していた。人間の身に余る妖力に、背筋をぞくりとさせる雰囲気。それら全てが無抵抗だった人間のものではなかった。

そう、例えるならば“姫”が本気を出した時のような。

そんな禍々しい気配に煽られたかのように、烏森の力がネリだけに降りかかる。だが、少女は矛を収めると恐ろしい笑みを浮かべた。

『もうなんか面倒になったよ。直接藍緋さんの研究室へ行きましょうか』

怪訝な顔をする幹部二人にネリは構わず、空駆けを発動して空間のひずみを生成する。そこからネリは裂け目に向かって呼びかけた。

『黄河く、そこにいないの？勝手に入るからね！』

ぎよっとする女性二人を置いて、ネリはスタスタと裂け目に入っていく。呆氣にとられた紫遠と藍緋は、一瞬顔を見合わせた後結界師たちを振り返った。

「なんだ。行き来自由なのか。白を脅すまでもなかったな」

「あいつ…。本当に人間かよ？」

妖にそこまで言わせしめる少女の姿は、すでに烏森にはなかったのだった。

(29) 過去話は、ネリが説明してました あれッ今更!?(後書き)

はい、30分遅れてしまいました。申し訳ございません。

英語で300レッスンやらなければ単位をもらえないということに
気付きました、最近それに時間を取られている涙の女王です。

言い訳がましいですね、多分性格です。

年末に終わらせるといいながら、3章は来年に持ち越しです。
単位かかっているので、無理です。

でも、ストックは尽きないように作っておくので……。

明日発売の新刊を読みながら、黒芒楼での八チャメチャを書くこと
思います。

では、みなさんこんな雑作を読んでくださって本当にありがとうございます。
ございました。

(1) 黒芒楼の皆さんこんにちは (前書き)

ずいぶんおまたせしてしまいました。

第三章開始です。

少しドタバタしているので、不定期更新になると思います。

火曜日と金曜日に更新できるように勉強もがんばります!!!!

(1) 黒芒楼の皆さんこんにちは

「……………おい」

『ん？何だ、おつが黄河』

「……………どこから出て来たんだ、お前…」

ネリがあっさり黒芒楼に足を踏み入れた時、氷蛾と黄河はちょうど藍緋の研究手伝いをしていた。

ずらりと並ぶ人皮のサンプルに、耐久テストをしたり人間の皮膚との相違点を洗い出したりと、“仕事”をしていたのだ。

そこに突如現れた狐少女。人間ではないと思っていたので、妖姿になっても黄河にさほど驚きはない。

勿論氷蛾にいたっては数日ぶりの少女に、満面の笑みを向けている。ただ単純に、己の母に会えたのが嬉しいのだ。

『おお、良く来たな』

こんなに早く来るとは思わなかったぞ、あまじ主。

口に出して『主』とは呼ぶなど、打ち合わせてあったので氷蛾も特に問題は無いようだ。

一応、氷蛾とネリは表面上は初対面の扱いになっているからである。黒スーツ姿の黄河は、額に手を当てて『参った』とばかりに口を開いた。

「はあ…そうか、あんたが消えてたのはこういつからくりだったわけだ」

『まあね。紫遠が喧嘩売ってきたから、烏森に捨てて来ちゃった。』
てへっ、と笑う少女に男の顔が強張る。そして、まだ開きっぱなしの漆黒の裂け目を振り返った。それを指差して、黄河は藍緋の椅子で寛いでいる少女を見る。

「これは、烏森に繋がっているのか？」

『うん。だけど、私の認証が無いと通れないから。』

「……………」

異界を繋ぐことがまるで朝飯前と言わんばかりの少女は、椅子に胡座をかいて座っている。夜行の戦闘服を着ているから出来る芸当だ。いつまでたっても姿を現さない紫遠と藍緋に、ネリは業を煮やして大声を出した。

『藍緋さん、紫遠ー！！早く姫の所へ案内してよー！！』

姿が見えなくても声だけは届いているのでネリは催促するのだが、

向こうからは何の返事もない。

黄河が呆れたように言った。

「……お前、馬鹿か。こんな得体の知れない物に飛び込む妖がどこにいるんだ」

『えー。しょうがない……じゃ、黄河あっちに行って大丈夫なんだから証明してきてよ。』

パチン、とネリが指を鳴らす。すると、漆黒の裂け目はアーチ状に姿を変えた。これでこちらからも、通れるようになったらしい。

だが、それでもスーツ姿の男は通ろうとしない。

知能の高い者なら普通の反応だろう。

見かねた氷蛾が男の襟首をむんずと掴むと、そのまま門の中へ消えていこうとする。

「何をする！？ 離せ !?!」

黄河の叫びが聞こえたとか、聞こえなかったとか。どっちにしろ、妖狐のネリには関係ないことだった。

「……どうすんだよ、藍緋。あいつ逃げちまったぞ」

「いや…私の研究室へ行ったのだろう。あの子は空間支配系能力者

らしいからな」

布を縦に裂いたような空間の歪みを前にして、藍緋が冷静に分析する。まさか、自分から黒芒楼に行ってくれるとは思わなかったのだ。

「だーからー。これが藍緋の部屋に繋がってるなんて保証がどこにあんだよ。異界なんだぞ？アタシ達の城があんのは」

技術的にかなり高度なことは素人でも分かるので、紫遠は表情を陰しくさせた。

何せ漆黒の闇しか見えないのだ。そのまま地獄に続いているような、得体の知れない恐ろしさを醸し出している。

だが、藍緋は力強く断言した。

「あり得ん。あの子は嘘はつかぬからな」

そのまま足を踏み出そうとする藍緋を、紫遠が止める。隠そうともしない呆れ顔で、白衣の女性の腕を掴んだ。

「なんだってあのガキをそんなに信用してんだよ!？」

それは良守達の疑問でもあった。ネリを守ろうとする、そして信じきっている藍緋の姿勢が、解せなかったのだ。

紫遠には蟲が入っていないと氷蛾経由で知っていたので、藍緋は結界師達にも聞こえるように言った。

「あの子は、私に自由をくれた。……それだけで充分だ」

「……それって、どういう意味だよ」

良守が先程の場所から歩み寄る。妖まであと3メートルの所で、一応の距離を取った。

結界師は空間把握に特化した能力者故か、周囲の気配に敏感である。黒芒楼からの妖二人の邪気が、氷蛾のように凪いでいるのが解るのだ。

紫遠も好戦的というわけではなく、居心地の良い場所で面白い暇つぶしが出来れば満足な、温厚な妖なのである。

見かけによらず聡明な紫遠は、同僚の言葉の意味を正確に理解した。

「まさか…白の蟲を取ったのって」

「そう、あの子だ。私の部下も助けてもらった。白に殺されかけた所を、自らの妖力で癒してな」

数日前の出来事と繋がり、納得した良守達は空間転移の歪みを見る全てを　妖でさえ守ろうとするネリを、連れ戻した方が良いのではないかと思い始めていた。

他の二人が同じことを考えていることに気がつき、結界師二人は苦笑する。

限はしかめっ面で裂け目を睨んでいた。

その時だった。

『藍緋さん、紫遠　！！早く姫の所へ案内してよー！！』

「……………」

5人全員が沈黙する。敵地に単身乗り込んだ人間の出す声ではなかった。

駄々をこねる幼子おさなの様な。

限には、銀髪の少女が口を尖らせてむすつとしているのまで、手にとるように分かった。

緊張感が程よく粉々になったところで、氷蛾が“荷物”をぶら下げて登場する。

水色の髪の男が烏森の地を踏んだ瞬間、漆黒の裂け目はアーチ状に姿を変えて等身大の門となった。

「降ろせと言うのが聞こえないのか！！」

『…………喚くな。もう着いたぞ』

あっさりと手を離されたが、さすがに黄河は無様に着地したりはしなかった。何とか地面に立て膝をつくと直ぐ、目の前の状況を理解する。

ピシッと立ち上がって、シワが伸びるような直立姿勢をとった。

「藍緋さん、紫遠様。確かにこの道は研究室に繋がっております。

「ご安心下さい」

馬鹿馬鹿しい状況だがきちんと己の職務を果たすところ、黄河という妖である。

水蛾は良守達に視線を向けはしたが、何も話さないまま黙って門の中へ消えた。

中立派の紫遠に、まだあまり情報を与えたく無いのだ。

「はあ…何かもうバカらしいから考えんのやめるわ。じゃ、アタシは先行くからな、藍緋。」

周囲から部下達を回収し、先に門を潜らせると意外とあっさり紫遠はその後に続く。藍緋も行こうとしたところを限が口を開いた。

「妖は信用しない。お前の言葉に嘘は無い…と思う。だが、ネリに何かあったらただじゃおかない…！」

「……………借りは返す。あの子を守るのが私の義務だからな」

踵を返した女性を、今度は誰も止めなかった。

陽が昇り、一日が始まる。流石に留学生の身でこれ以上休む訳にはいかないのです、時子は式神をネリに化けさせて登校させた。

自ら黒芒楼に乗り込んだ少女の負担を、少しでも軽くしてやるうという配慮である。

「数日で済むと良いのですけれど……………」

祖母の言葉に、黒髪の少女結界師がうつむく。

「お祖母ちゃん……私、やっぱり行かせない方が良かったのかな」
諸々の事情を理解していた雪村の当主は、自信を無くしている孫を
優しい目で見つめた。

「あなたは間違っていますよ。ネリさんの行動は烏森を考えての
ことだと、肝に命じていれば良いのです」

ささ、学校に遅れますよ、と促されて時音はようやく家を後にする
のだった。

途中、幼なじみとも合流する。いつもなら並んで登校するなどあり
得ないのだが、今朝は二人とも自然と足を揃えていた。

「あいつ……大丈夫かな」

「……心配だけど、毎日連絡するって言ってたし……。信じるしか
ないじゃない」

毎日コーヒ―牛乳を飲みながら登校する良守も、今日ばかりは持っ
ていない。暗い顔の良守に、時音はパンツと少年の背中を叩いた。

活を入れられて、年下の良守がたたらを踏む。

「あたし達が信じなくてどうすんのよ！わざわざ身体を張って異界
に行ってくれたんだから！……信じて、待ちましょう」

「……ああ。そうだな」

生意気に片方の口の端を上げて、良守が笑う。いつもの表情に戻った所で、時音はスカートを翻した。

「じゃ、あたし先行くから着いて来ないでね」

「……………え？……………え　！？」

パツと走り去ってしまった時音を追いかけてようとしたが、タイミン
グ悪く赤信号になりそれは叶わなかった。

（くそ　　！！ネリがいりゃ、時音とも一緒に　　！！）

ダンダン！と地面を殴って悔しがる少年は、幸いにも目撃者がいなかったお陰で不審者扱いされなかったとか。

ネリが異世界に行ってしまった、どうしようもなく心が荒んだ者がいた。言わずもがな、志々尾限である。

黒い学ランの下にオレンジのＴシャツを着て、小さな鞆を斜めにかけている。

身体に鞆が密着するように長さを調節してあるので、跳び跳ねようがずれ落ちることは無い。

鞆を支える太い布の帯には、ある『もの』を仕込んであった。固く平たい上に、意外と長い感触を胸と腹に受けながら、限は住宅街を平然と歩く。

中学生が昼間から銃刀法違反をしているのだが、大切な人からの贈り物なので限にその自覚は無かった。

（刀の訓練もしておかなくてはな）

夜行では武光という異能者に基本を教えてもらい、何とか刀を握れる様にはなっていた。

だが、圧倒的に時間が足りない。素振りやジョギングを毎朝已に課しているものの、まだ『使える』段階までには至らなかった。

結界を斬ることが出来る、というネリの言葉は本場で、正守の結界はいとも簡単に切れる。もっとも、夜行の長が落ち込むので数回しか試していない。

（ネリ……。早く、帰ってこい。）

刀に残った僅かな妖力の欠片を抱き、少年は無言で学校へ行くのだった。

(2) わがママが二人(前書き)

え〜プロットからどうして離れていくのかなあ…？

(2) わがママが二人

『え、どうも初めまして。』

「……………」

藍緋を伴って白の執務室へ現れたネリは、妖狐のまままで挨拶を果たした。白の反応は予想通りといったところで、『姫』と特徴が似ている少女に目を奪われていた。

「……………驚いたな。君はまるで」

『姫様のようでしょう?』

くすくすと可愛らしく笑う少女に、白がもつと近くで見ようと立ち上がる。ネリは身構えるかと思いきや、いたって自然体のままだった。

「…我々が恐ろしくはないのか?」

『私が何を怖がるんです?』

疑問が疑問で返される。尻尾をユラユラさせながらネリは、ニッコリ笑った。

『白さんはまだ私と同じ人間じゃないですか』

「……………ほう？」

片眉を上げて白髪 of 男性が意外そうな顔をする。面と向かって彼の事を人間と言う妖は居なかった。

すでに身体 of 半分以上が蟲で構成されている白。もう70過ぎのはずだが、その姿は20代後半から30代前半の成人男性といったところだ。

本人が気に入っているのか、彼は常にスーツ姿で過ごしている。

『大分改造してますけど、ベースはまだ人間なんですよね？……………
良いなあ』

はあ…とため息をつくネリに、藍緋が怪訝な顔をする。少女の言葉に白も興味があいたので、彼にしては珍しく聞き返した。

「君こそ私より人間だろう？妖混じりな訳だが」

『……………』

曖昧な笑みを浮かべながらネリは、首を振る。だがそれ以上少女が口を開くことは無かった。

代わりに白衣の女性が二人を促す。

「話はそれくらいで良いだろう。ではネリ、そろそろ姫の延命についてなんだが……………」

『…それについては、ちょっと話を聞いてもらいたいですけど…
…。特に、白さんに』

「……………」

眉をひそめる白に対し、ネリは大盤振る舞いした。

烏森の友人達に知られたら、大目玉を喰らうこと請け合いである。

フツとネリの身体力が抜けて、地面に倒れ込んだ。

「ネリ！？おい、どうした！！」

藍緋が身体を起こして揺さぶると、すぐに瞳が開いた。心配そうに抱き抱える藍緋を素通りして、銀髪の少女は隣に立つ男を見上げる。

「……………」

藍色の瞳に見つめられた瞬間、白の身体に雷が落ちたような衝撃が走った。慌てて膝について視線を合わせると、少女がニコオと笑う。

『…私が誰だか分かる？白』

イタズラっぽく微笑む少女に、男性は目を見開いていた。半世紀仕えていたからこそ分かる、白の魂は目の前の存在を『主』として見ていた。

頭では否定しているのだが、白自身の心が叫んでいる。

らしくもなく、声が震えて抑えられなかった。

「姫…なのですか？」

「!？」

白の言葉に藍緋の身体が固まる。女性の腕の中にいる少女は、その白い手を男性に伸ばし満足そうに頷いた。

もしこの場に限がいたら、きっと少女をガクガク揺さぶって呼びかけていただろう。

『戻ってこい』と。

少女の身体を借りた黒芒楼の主は、久しぶりに自分を見てくれた男性に抱きついた。

『正解よ。白、会いたかったわ』

目を閉じた姫君は、安心したように白の首に腕を絡めるのだった。

姫が帰還の喜びに浸っていた頃、肉体の主であるネリは意識の奥底にいた。少女も黙って身体を貸したわけでは無い。姫とある約束をした。

すなわち、白を説得すること。

百合香を倒すにあたり、邪魔をしないよう部下を説得することを要求した。

何せ偽者の外側は紛れもない『姫』の身体なのだ。それを痛めつける可能性がある以上、きちんと説得してもらわなくてはならない。

（わぁ…変な気分…）

何を話しているのか何となく分かるのだが、記憶に残る前に消えてしまう。夢遊病のように自分の体だけが勝手に動き、喋っている状態なのだ。

（つまらないなあ…限の所に行きたいなあ…）

しょぼん、と少女がうつ向いたがそれはただの錯覚である。実際の体は白と楽しそうに話をしていた。

（限……大丈夫かなあ……？）

ねえ、ちょっとあなた！

身体を貸した相手が自ら話しかけてきた。その思考は喜びに弾んでいて、満ち足りた風である。

ありがとう。これで白も協力してくれるわよ。

夢から覚めるようにネリの意識が、緩やかに浮上していく。

パチ、と目を開けるとすぐ目の前に白の顔があり、思わず少女はのけぞってしまった。

『わぁッ!?!』

思いつきり後ずさると、藍緋の白衣にしがみついてしまう。その様子を見て、白は小さく肩をすくめた。

「やれやれ…姫も困った御人だ。」

『言っとくけど、もう私は姫じゃありませんからね!?!』

慌てて叫ぶネリを女性が立たせる。流石に妖なだけあって、その腕力は人間の女性ではなかった。

男性も立ち上がり、白衣の女性に指示を出す。

「……藍緋。君は部下を数人、姫の部屋の警護に当たらせてくれ。妖気に酔う恐れが少ない者を頼む」

「…うむ。氷蛾と黄河にやらせよう。あいつらなら大丈夫だ」

本当に短時間で説明を終えていたらしい。あれよあれよという間に準備は整っていき、1時間後にそれは行われることとなった。

『まさかこんな短時間で話を信じて貰えるなんて…』

藍緋の研究室へ帰る道すがら、ネリが思わずもらす。白衣の女性は研究者の顔になって、ネリを熱心に見ていた。

「まあ姫の話で大方の筋が通ったからな…いつからだっただ？」

『ん〜。3日前に姫様とは初めて話をしましたけど、随分前から私の意識の底に逃げ込んでいたらしいですよ?』『鬼』に身体を乗っ取

られて、妖力が激減してしまい焦ったんですって』

赤い炎狐を用心棒として従え、木造の廊下を進む。女性のサンダルがパカパカと音をたてる以外は、不気味な程静かな城内だ。

「その“鬼”だが……どうやって殺すつもりだ？」

『ん……今のところは、姫から切り離して私が保管するくらいしか考えてません……』

あまり有効な手だてでないのを自覚しているのか、ネリの獣耳が垂れる。

己の肩ぐらいしか身長が無いネリの頭を、藍緋は優しく撫でてやった。考える前に、手が自然に動いていたのだ。

藍緋自身、自分の行動に驚きを感じながらもその手を引っ込めることはない。

「私も研究者の端くれだ。対処法を考えてみよう」

『本当ですか！？ありがとうございます。』

目を輝かせて礼を言うネリに、藍緋が眩しそうに目を細める。

そして、ちょうど吹き抜けの回廊に出た時だった。

『よお……楽しそうじゃねえか、お二人さん』

姿よりも前に男の声が聞こえた。すぐに袖と裾に火炎模様が荒れ狂

う、闇色の着物が現れる。

人皮を脱いでいたので、その禍々しい姿が露となった。

全身を覆う包帯が襟元や袖、裾から余すところなく覗き、黒髪が頭頂部から所々飛び出している。

顔面までぐるぐる巻きなのだが上手い具合に目元と、僅かに唇の周りのみが確認できた。

元々は人間だった妖　火黒である。

『ど…どうも、こんにちは』

ネリがおずおずと挨拶をすると、包帯の奥が笑ったようだった。

『ご丁寧にも、自分から来たんだって？物好きな奴だねえ、あんたも』

「色々と準備があるんだ。話は姫が回復してからでいいだろう」

さりげなく女性の手がネリの手を掴まえて歩き出す。恐怖に支配されかかっていた妖狐は、その柔らかな感触で我に返った。

進行方向にいた火黒の側を通り過ぎ、藍緋はスタスタと行ってしまふ。半ば引きずられながら、少女はその場を後にするのだった。

ぽつん、と置いていかれた火黒は二人の後ろ姿を黙って見送る。そして肩をすくめた後、反対方向へ歩き出した。

常に薄闇の空では、時間の感覚が狂ってしまふ。藍緋の机に置かれたネリの目覚まし時計だけが、唯一時間を知っている存在だった。

眠りが必要ないネリにとっては、いつでも烏森に連絡することが可能なのだが、向こうは朝である。

『3人は学校に着いたぐらいかな。さすがに邪魔しちや悪いよね』
本人達が聞いたら物凄い勢いで否定しそうだが、結局ネリは一応の上司と雪村家だけに連絡を入れることにした。

藍緋は気を遣って席を外し、黄河と共に隣の研究室にいる。実際、人皮の研究が忙しいのだろう。

黒芒楼の妖達に外部と連絡出来ることがばれるとまずいので、奥の小さな部屋を使うこととなった。これからはばらくネリの自室となる部屋である。

目の前にコンパクトを置くと、世界を隔てた目印の一つを糸で知覚した。正守の持つ西洋剣である。

(…結構遠いな…。意外と負荷がかかるかも)

少しだけ眉をひそめながら、ネリは鏡の世界から大空を越えて正守の西洋剣まで糸を繋ぐ。繋がった瞬間、正守の焦りの感情が流れ込んできた。

ネリ!!!大丈夫なのか?

『あ…はい。無事に黒芒楼の主と会うことになりました。今のところ問題は全くありません』

糸電話のようだが、相手方の感情は見えても、こちら側の感情までは伝わらない。もし伝わっていたら、身体を一時的に妖へ貸したことで、雷が落ちていたことだろう。

安堵しつつも、疑っている正守は少女の身を案じていた。

連絡は絶やさないでって限から聞いた？

『ええ、聞きました。ただ、これからしばらく連絡出来なくなるかもしれません』

妖にとり憑いた鬼の対処にまだ不安が残るので、一日で終わるかどうかが微妙なところなのだ。

最悪、戦闘になるかもしれないので、呑気に連絡する時間は無い可能性が高い。それを伝えると、葛藤する上司の心が見え隠れしたが、口から出てきたのは違う言葉だった。

…分かった。ネリの言葉を信じよう。無茶はするなよ

しっかり釘を刺された後、正守に墨村家にも伝える様に頼んでネリは通信を終えた。

雪村家の方では、時子がネリの部屋に生じた歪みに気がついてくれたので、問題なく意思疎通が出来た。

しばらく連絡が取れなくなることを伝えたと、やはり“心配”とネリを行かせたことの“後悔”が伝わってくる。

色々な人にわがままをきいてもらっているのを、実感したネリだった。

ネリさんの目印は、私の部屋へ移動しておきましょう。……深夜でも構わず連絡して下さいね

『はい……。時音さんにも大丈夫だとお伝え下さい。』

糸を解除すると、軽く倦怠感が身体を襲う。氷蛾を腕輪で呼び見張りを頼むと、ネリは寝台に横になった。

急ごしらえなので、低めの机に布団を敷いた簡素なものである。妖は昼間眠り、夜に活動するのだが体力を回復させることが目的ではない。

太陽の下ではやる事が無いから、眠るだけなのである。つまり、黒芒楼の妖に眠りは必要ないのだった。

『安心して眠ってくれ。我が目を光らせておく故な』

『うん……じゃーよろしくー……』

布団にくるまってすぐに、寝息をたて始めるネリ。そのあどけない顔を眺め、氷蛾はその金色の瞳を嬉しそうに細めるのだった。

(3) 反撃は突然に

早く…私の元へ来い。

闇の中で、小さな少女が蹲ひざまっている。

その赤い唇からは、老婆の様なしわがれた声が漏れていた。

気が遠くなるほどの年月を、我は暗闇の中で過ごした。

顔を上げると黒髪のくせつ毛から、2本の角が覗く。

クルリと曲がった黒い角は、小さな闘牛のようだった。

我が何をした？闇の頂点、鬼を統べる我に……あの時の我に、どうせよと言うのじゃ

ギリ、と音が出るほど噛み締められた口元から、鋭い牙が覗く。

母のように慕っていた！赤子の我を育て愛してくれたからこそ、鬼を操らなかつたというに

メラメラと燃える憎しみの炎は、少女の胸の中でどす黒い赤を放っていた。

我を、道連れにするじゃと？笑わせるな、女。

少女の本当の肉体は、とうの昔に形を失っていた。

だが『闇』は無くならない。赤黒い光が、最早幻影である少女の胸あたりで明滅を繰り返している。

光が強ければ強いほど、闇もより濃くなるというもの。

許さぬぞ、小娘。

『我を愚弄した罪、その身をもって償え!!!』

「ッ！はあっ、はあ………」

最悪な夢見のせいで飛び起きたネリは、寝台の上で胸を押さえた。ドツドツと、外に聞こえそうなほど心臓が荒れ狂っている。

(何か嫌な夢……?)

氷蛾が心配そうに湿った手拭いを握って、傍に立っている。悪夢にうなされていた少女の汗を、甲斐甲斐しく拭ってやっていたのだ。

うなされておったぞ、主。何ぞ悪い夢でも？

冷たくて大きな手が、ネリの乱れた前髪を整える。透き通るような水色の長髪が、カーテンのように少女の頭上で揺れていた。

『ああ…嫌な夢を見た気がする…けど、忘れちゃった……』

映像を頭の中で結ぶ前に、それらは霧散してしまい嫌な感覚だけが身体に残る。思い出さないとまずい気がするのだが、考えれば考えるほどネリの記憶はあやふやになっていった。

考え込む主に、僕が口を開く。

『もうそろそろ時間になる……遅らせるように我が交渉してこよう』

『いや……いいよ。さつさと終わらせて、限……じゃなかった、烏森に帰りたいし』

部屋を出かけた男の袖を掴み阻止すると、ネリは寝台からゆっくり降りた。部屋から出ると、黄河と藍緋が何やら話している所だった。氷蛾と共に小部屋を出たところで、二人が揃って振り返る。ネリは、精一杯の笑顔を浮かべた。

『おはようございます』

「……いや、ネリ。大丈夫か？体調が悪いようだが……」

だが、伊達に藍緋はネリの『守護』を義務としていない。バレバレだったようだ。

女性の心配そうな視線から逃げるように、ネリがカリカリと獣耳をかく。

『大丈夫、問題ないです。姫様助けて、私早くあつちに帰らなきゃいけないので』

さ、行きましよと足を進めるネリに藍緋は、黙って白衣を翻した。

「二人は入口を張ってくれ。ネリの力が外部に漏れ出すと、妖を集めるからな」

研究部の藍緋はネリの妖力譲渡を見たことが無かったが、黄河の身体を調べることで同等の結果を得ることは出来る。

他者に妖力を分け与え、対象の妖気レベルを強化する能力。

それは妖にとって垂涎のものである。歩く神佑地のような存在だからだ。

「はい。了解しました」

『承知』

人皮を着た黄河と、紺地の着物を身にまとう氷蛾が廊下で待機し、入口の脇に立った。

あれだけ人皮を欲していた氷蛾だが、彼が欲しいのは『少年』タイプのそれである。

黒スーツの旧型なぞに用は無いだ。

なので、未だに彼は人皮を試していない。

部屋に入ってまず目に入るのは、特大の天蓋付きベッドであった。綺麗な直方体は和風で、高貴な者が顔を隠せるように御簾まで下ろ

せるようになっていた。
それを中心に機械が生き物のように広がり、天井にまで張り巡らされていた。

コポコポと、静かな水音があちこちの機械からしている。現代でいう特大の点滴が、十数個も天井から吊り下がっているのだ。

空中には雫型の行灯らしきものが浮かび、薄紫の光を放っている。じめじめとした、それでいて薄ら寒い空間にネリは身震いした。

その中央、寢所の中に姫　　偽者の姫は、いた。

『あらあら…懐かしい気配がするわあ…』

くつくつと、笑い声だけが寢所から漏れる。中が薄暗くなっている。でどんな表情をしているのかまでは、少女に分からなかった。

ネリの背中に悪寒が走る。

『藍緋さん…出来るだけ、下がって下さい。』

「……………」

今までの姫とは違う雰囲気、藍色の髪の女性が指示通りに後ずさる。

藍緋は、芝居を止めた『偽者』の声に唇を咬んだ。

今までなぜ気がつかなかったのか、というぐらいの違和感が女性を襲う。

薄暗い寢所の中、寄生する以外生き永らえることが出来ない『偽者』が口を開いた。

『お久しぶり…とでも言っておきましょうか。』

『確かに。長い間、しばらく見なかったもんね　　百合香』

その瞬間、寢所の屋根が吹っ飛んだ。帽子を取り去るような、無造作にして荒々しい幕開けである。

真っ赤な唇はそのままに瞳は赤く光り、黒と銀の九尾が蠢いている。こうして相對してみると、ネリと姫は驚くほど似通っていた。

だが一方は掴み所の無い笑みを始終たたえ、もう一方は緊張に顔を強張らせている。

ネリが口を開く。

『回りくどいのは無しに言う……姫の身体を返して。』

『……変てこりんなこと言うのねえ？あなたが妖の為にそこまでのるなんて』

口元を上品に袖で隠し、クスクスと笑う。だが、赤い瞳がスツと冷たい光を帯びた。

『私を地獄に突き落としておいて…虫が好すぎるのよ！』

魂が叫んでいるかのような　　その迫力に、姫の『身体』がひび割れ始めた。爪先や踵かかとから乾いた土の様に、無惨な亀裂が入る。

ネリの意識の底で、『本物』が悲鳴を上げた。いくら魂が肉体と引き離されたからといって、自分の身体である。

音声というには生ぬるい、ネリの肉体が引き裂かれたような痛み、少女は硬直した。

『我が…何をしたというのじゃ。……………世界は我に何をした？母親に子殺しをさせるが正義というか！！』

それは、咆哮と言っても過言ではない。『姫』の尾が放射状に伸び、もはや身長の数倍の長さになっている。

辛うじて生き永らえる為の機械が、無惨にも引きちぎられた。これでは、助ける前に『肉体』が死んでしまう。

自殺行為ともいえる百合香の行為に、ネリは慌てて叫んだ。

『止めて 止めなさい、“鬼百合”！！』

『ッ！？』

名前の持つ呪力が『偽者』の動きを縛る。結界師の世界でも有効なようにネリはホッとした。

『またか…？また我を常闇に葬り去るのか！！……………神でもなくせに……………！！』

身動き一つ出来ない『偽者』に、ネリは一步步近づいた。百合香の赤い瞳は、恐怖と憎悪で毒々しく彩られていて睨み殺さんばかりである。

ネリは目を伏せて首を振った。

『…違う、違うよ。私は友達だと思ってたのに……百合香が無花果さんをあんな風にしなれば…する“未来”が無ければ、死者を宿主にすることも無かった……!!』

百合香が無花果に拾われた時から、血の繋がらない親子の悲劇は始まっていたのだ。

闇を滅するのが不可能であると悟った無花果が、その愛でもって百合香の力を封じ育てる。

百合香は鬼達を率いることなく、好き勝手に行動させることで『闇』の長である責務を放棄する。

そして先代の『始祖』のように、軍隊を率いて人間を殺したりしなかった。

だがそれは逆に、無差別な殺戮を招く。

ネリは今まで誰にも言わなかった本心を、数ヶ月友達だった存在に吐き出した。

『私が真に憎いのは……“世界”だよ!!』

『偽者』が目を見開いた。その赤い唇がわなわなと震えるが、言葉は出てこない。

『百合香に“始祖”の役目を与えた世界が憎い!最後の最後で私に

異能を使わせて、友達に止めをささせたあの世界が憎い!!」

世界をその手でかき回す存在　　神がもし目の前にいたならば、
ネリは盛大に唾を吐きかけてやっただろう。

なぜよりによって、ネリと百合香なのか。

なぜあの世界にネリを喚び、この世界で会わせたのか。

『私は百合香と戦いたく無い。だけど、この世界を壊させる訳にも
いかない。』

『……………志々尾限……………がいるからか?』

今度はネリが目を見開いた。なぜ、という言葉の前に赤い瞳の妖が
笑う。

『我とお前は繋がっている。闇の結晶は未だ、お前の中に生きてい
るからな。色々な物が見えたぞ?例えば……………』

背後で、ピシツという音がした気がした。

「ネリ!!危ない!!」

藍緋の叫びにネリが振り返る。その瞬間、少女の視界は真っ黒に塗
りつぶされ　　何も分からなくなった。

その光景を一部始終見ていたのは、藍緋だけだった。漆黒の尻尾が

床を押し退けて、地中から少女の背後に出現したのだ。

ネリが振り向いた時にはもう遅く、藍緋は走り出して　その腕を何者かに絡め取られた。

振り返れば、感情を殺した白髪の男が、女性の腕を抑えている。

「　離せ、白！ネリが…！！」

漆黒の尻尾が少女の頭をぐるぐる巻きにすると、カクンと白い腕から力が抜けた。

そしてすぐに……悪夢の様に動き出す。

『もう良いぞ、白。終わった』

背筋が寒くなる声音だった。ネリの声なのに別人のような　似ても似つかぬ口調。

逆に、偽者に乗っ取られていたはずの姫がゆるゆると目を開けた。

『私……元に戻ったの…？』

「姫。お気づきになれましたか？」

白の手が弛んだ隙にその腕を払いのけ、藍緋はネリに駆け寄った。見るからに少女は様子がおかしく、薄い笑みを浮かべて佇んでいるのだ。

少女の肩を掴み、白衣の女性はその瞳を覗き込む。

「ネリ…どうした！？何が起きた！！」

「……我に 触れるな！！」

女性の細い身体を、銀色の尻尾が薙ぎ払う。咄嗟に腕で庇った藍緋だったが、壁に叩きつけられた。

「がっ ……！！？」

銀髪の少女の激変ぶりに、藍緋は回転の速い自分の頭脳を呪う。

今、確かにネリは自分の事を『我』と言ったのだ。

「嘘だよな…？お前は…『ネリ』だよな…？」

割けた白衣を払う藍緋は、厳しい表情の裏で血の気が引く思いがしていた。

藍色の瞳の少女が、小首を傾げて女性を見る。小悪魔のような笑みを浮かべて少女は口を開いた。

「我は…私はベアトリックス・ネリ・ユリカ。闇を統べる鬼の始祖……ふふふ、ふははははは！！！！」

少女の背に辛うじて残っていた染木の呪印が、跡形も無く布ごと消し飛ぶ。その中心には、赤い結晶体が集まっていった。

「やっと…やっと…手に入れた！！世界を渡る娘を手に入れた！！」

狂った様な叫びをあげ、銀髪の少女は剥き出しになった背から真紅の寶石を、尻尾で取り出した。

それをそのまま飲み込む。

『お前が愛したこの世界、私の深い闇に沈めてやろう』

天に向かって呪詛する『ネリ』を、藍緋は呆然と見ているしか出来なかった。

(4) 悪夢(前書き)

一応偽者バージョンの時は、名前で描写しないように心がけてます。

分かりづらかったらすみませんm | | (m

(4) 悪夢

『ネリ』の身体を乗っ取った『百合香』が高らかに笑う。それは、しばらく耳から離れそうに無い嫌な笑い方だった。

『いよいよ化け物になってきたのじゃなあ？ネリよ。やはり宝石は、お前に預けて正解じゃった！』

銀髪の少女が誰にともなく語りかけると、白が姫に寄り添いながら口を開いた。

「……………次はそちらの番だ。約束を果たしてもらおう」

『ああ……そうじゃったかの』

至極面倒臭そうに寢所を一瞥すると、銀髪の少女はスツと右手を向けた。視覚化された妖力は、乱気流のようにその掌から巻き起こり、横向きの竜巻となる。

その先には　　ひび割れた姫。

『協力、感謝するぞ。白沼よ』

白が人間だった時の名前をわざとらしく呼ぶと同時に、妖力が姫を包み込んだ。

男性の白髪が乱れ、周囲の機械がさらに遠くへ吹き飛ばされる。荒々しくかつ優しさの欠片も無い妖力譲渡だが、目に見えて姫の妖気

は満たされていった。

枯れかかっていた大地に、水が染み渡るように。

弱りきっていた土地神の足が治った所で、銀髪の少女は妖力譲渡を中断させた。

反動の為か姫の意識が落ち、白がその手を取り身体を支える。

『……これであと100年は生きられるぞ。少しでも長く、余生を過ごせば良からうて』

ではな、と踵を返す小さな妖狐に藍緋が立ち塞がった。呆れた顔を隠しもせず、銀髪の少女は白衣の女性を見つめる。

女性の後ろでは、水色の髪の男が控えていた。だが、ただ黙っているのではない。

主を侵略した狼藉者に　　殺気をぶつけているのだ。

人皮によって主との^{あまじ}昼間を夢見る表情豊かだった青年は、今や能面のよう。

怒りが臨界点を超えると、誰もが無表情になるという証明である。

『人間好きの妖と、未だ乳離れしておらぬ妖か。我に齒向かうとは見上げた根性よ』

どう料理してくれよう…と物騒な笑みを浮かべる少女に、藍色の髪の女性は必死に呼びかけた。

「“ネリ”！中で聞こえているのだろう！？反撃しなければ、烏森が大変な事になるぞ！！」

『……………主あなから即刻立ち去れ』

大噴火直前のマグマの如く、不気味な程落ち着いた氷蛾は黄金の瞳を妖しく光らせる。その体からは、抑えきれない怒りを表すように青い霧状の毒が漏れ出していた。

夜行の戦闘服を着ている少女は、わざとらしくため息をついた。

『…馬鹿め。主の身体を毒で溶かすつもりか？そこを退のけ』

『…溶かさずとも出来る。』

氷蛾の動きは、さすが土地神に匹敵する妖だった。彼が操る毒は、全てが致死性というわけではないのだ。

神経性の麻痺毒をのせた青い鱗粉が、氷蛾の手掌に合わせて銀髪の少女を包み込む。だが、黒と銀の尻尾は回転させるだけで全てを払いのけた。

尻尾が巻き起こす風圧で、藍緋の破れた白衣がはためく。藍緋の決断は早かった。

「あまり好きでは無いのだがな…！」

藍色の髪の女性が、グツと全身に力を入れる。白い煙が藍緋の身体から立ち上ぼり　木の蔓が、至るところからよきによきと首

をもたげる。

一輪の藍色の花の周りから放射状にがくが伸び、木の蔓は人型の名残か四肢の様に束ねられている。

さながら、花の頭を持つ巨人が現れたかのようなだった。

花の巨人 藍緋の真の姿である。

植物系の妖は、種族的には最下位に属する強さしか持っていない。だが、藍緋は知恵も力もある高等な妖であった。

目にも止まらぬ速さで、少女の四肢と尻尾を蔓で絡めとる。得意の幻術を放とうとした藍緋だったが、藍色の瞳を伏せた『ネリ』が言った。

『痛いよ…。なんでこんなことするの、藍緋さん…』

『ッ!?!』

苦しいような声音に、脆く壊れそうな表情。

攻撃を躊躇ったその一瞬が仇となった。

イツナ!!

少女が鋭く叫ぶと、7色の炎狐が放射状に放たれる。木の蔓が見る間に砂と化していくのを見て、藍緋は慌てて身体を再生させ始めた。

だが、圧倒的に消されるスピードの方が速い。まるで水の中を泳ぐ

様に凶悪な狐達は、花の巨人に風穴を開けていくのだ。

藍緋が捕まえておくにも限界が近い、と氷蛾が羽を広げて主の元へ飛び上がる。至近距離で眠り粉を浴びせようとして 出来なかった。

意識の糸が、蜘蛛の巣の如く氷蛾を絡めとったからだ。

『“母”に殺されるならば本望であろう？……異界の妖よ！！』

背後から迫った緑の炎狐に頭を貫かれ、氷蛾の意識は呆気なく暗転した。

ドサツと音を立てて落ちる蛾の妖からは、血が流れる暇も無い。炎狐が代わる代わる喰らっていったからだ。

首、右翼、右足、腹、胸、右腕、左腕。

カウントダウンのように、少しずつ氷蛾の身体が無くなっていく。他ならぬ、主の手によって。

耐えがたくて、藍緋は思わず叫んだ。

『やめろ！！それ以上は ……』

『なら藍緋。私に従う？』

『ネリ』の顔をした偽者は、イタズラっぽく笑った。

『あなたが白の蟲を受け入れるなら、これ以上貴女達を攻撃しない。

受け入れないならこの場で貴女を殺し、その蛾も貴女も肉体を残さず滅する。』

どうする？ときかれて、藍緋は言葉を失った。

『ネリ』の声と顔が、おぞましい…およそ妥協案とはいえない脅迫をしてくる。

だが、頭の良い藍緋には分かってしまった。どんなに足掻いても届かない、圧倒的な強さというものに。

彼女に選択肢は無かった。

その頃、良守達は給食の時間だった。牛乳をちゅーちゅー吸い、少年結界師はもそもそとカレーを食べていたのだ。

「ああ…ねみー……………ん？」

唐突に背筋に悪寒が走り、良守は眉を潜めた。侵入者を感知した時とも違う、冷たい風が胸を吹き抜けていった感覚が残る。

教室を見回すと、視界の端で何か引っかけり首を止めた。

すると、間髪入れずに式神のネリに異変が起こった。

「　　んなッ！？」

ノイズが走るように、式神の体に亀裂が走ったのだ。思わず立ち上

がった良守に、担任の黒須が声をかけた。

「どうした　墨村？」

「え、あ、いや……」

そうこうしている間にも、式神の体はどんどん薄れて細かくなっていき　ボウン、と消えた。

息を飲む良守。

その時ちようどチャイムが鳴り、クラスメイトは何事も無かったかのように食事をやめた。

日直が『ごちそうさまでしたー』と言えば、食器を片付けにかかる。

何も無かったかのように、いつも通りに皆動く。

とても異様な光景だった。

（人が消えたつてのに　！？）

良守はクラスメイトをかき分けて、ネリが座っていた席までたどり着いた。両隣の女子が怪訝な顔で少年を見たが、さっさと自分の食器をかたしに行ってしまった。

式神が座っていた場所には、長方形の和紙に墨で正方形が描かれた紙が落ちている。

墨村や雪村　　間流結界師が使っている式神生成用の呪具、もとい紙だ。

「どうなってんだよ」

訳が分からず途方に暮れていると、ネリの横に座っていた女子が戻ってきた。すぐ隣で人が消えたというのに、別段変わった様子もない。

ネリの机の上にあるトレーを見て、彼女は首を傾げた。

「あれ？おかしいな、これ誰のだろう？」

良守の目の前からネリの昼食を取り、首を傾げながらも片付けに行く。

良守は、背を向けた彼女の言葉に耳を疑った。

「この席、随分前から空席なのに……」

（　　！！　　）

顎が外れそうになった良守だが、黒須の言葉で我に返った。

「墨村？どうした、顔色悪いぞ？」

「先生！今、出席簿持ってる！？」

「うおッ！？何だいきなり……」

焦りすぎて怖い顔になっているが、少年は気がつかない。引ったく
るように出席簿を取り、机に広げると
…

「嘘、だろ…?」

そこに、ネリの名前は無かった。彼女自らが書いた『ベアトリックス・ネリ・ユリカ』の文字だけが、綺麗に抜けている。

「墨村君…どうしたの?」

混乱の極みであった良守にただならぬものを感じたのか、神田百合奈　霊感少女が横から話しかけてきた。

良守が夜の校舎で家業をこなしていることを知る、ただ一人の一般人である。

「　そうだ、神田!」

「は、はひっ!?!」

鬼気迫る少年の表情に、百合奈が飛び上がって驚く。だが少年に構っている余裕は無い。

「ネリ　ベアトリックス・ネリ・ユリカって奴知ってるか?オランダからの留学生で、このクラスに来てただろ!?!」

「え?えーと…」

困った様に眉を寄せる百合奈に、良守は愕然とした。ある仮説が、少年の頭の中で浮かんでは消えていく。

霊感少女の言葉が、止めをさした。

「あの……誰のこと言ってるんですか？」

烏森学園中等部2年2組から、ネリが存在が
跡形も無く消えたのだった。

式神が消えたのは、雪村家21代目当主・雪村時子にもすぐ分かった。

陽当たりの良い趣味用の和室で、当主は静かに花を剣山に差し生けていた。

だが、式神の異常な消え方に生け花をしていた手が止まる。老女の背に冷たいものが走った。

「まさか……ネリさんの身に何が……」

まさか、ではない。

心のどこかで、分かっていた。ネリを一人で行かせて、無事で済むはずが無いと。片道切符を彼女に渡して送り出してしまったのだと、時子は後ろめたい気持ちを抱えていたのだから。

(……私が、行くしかありませんね)

鉢を静かに置いて、70歳の老女が立ち上がる。ネリの部屋にあった“目印” 金色の鞘に入ったダガーを手にとり、懐にしまつとそのまま時子は自室へ戻るのだった。

“縁”という名の糸が、一般人の元から消え去る。もし世界を渡る少女が、最初から“ユリカ”と名乗っていたら、誰の心にも跡を残さず消えていただろう。

『ネリ』を騙る偽者、百合香の復讐劇が黒芒楼と烏森、結界師の世界を巻き込んで始まったのだった。

(4) 悪夢(後書き)

わーわーテストでございます(ー；)

勉強頑張らなければ(；)

ブリーチの映画『Fade to Black』を見ていたら、主人公をこの世界に飛ばしたくなってきました。

漫画手放さなければよかったなあ…と少し後悔。

でも、Dグレはあるのでちょっと画策中ニヤリ

(5) 宣戦布告

良守からそれを聞いた時、限は無意識にバックを握り締めていた。袈裟懸けで背負うタイプの、小さなカバンである。

帯の所に仕込まれた刀からは、愛しい少女の妖力を感じることが出来た。

ネリは生きている、それは確信を持って言える。

(消えた、だと ……?)

存在が、まるで最初からいなかったかのように消え去ったらしい。

なぜ今このタイミングなのか、少年には訳が分からなかった。

「…それが起こったのって、もしかして1時ちょっと過ぎじゃない？」

時音が良守に確認すると、少年は驚きながらも頷く。屋上を通り過ぎていく風が、少女の長い黒髪をゆらしていった。

「あたしも何か…胸騒ぎがしたのよね。妖じゃないことは分かったから、あんまり気に留めなかったんだけど……」

中等部と高等部は、当然だが昼休みの時間が若干ずれている。短い時間集まったので、あまり悠長に話している時間が無かった。

予鈴に急かされるようにして、少年結界師が口を開く。

「一応式神しんの紙は回収しといた。志々尾、兄貴に電話するから携帯貸してくれ」

「ああ」

良守に携帯を渡して、限は目線を下に落とす。最年長の少女は、うつむく少年を心配そうに見ていた。

「限君、大丈夫？」

「……………」

唇を噛んで黙りこんでしまう少年に、時音も暗い表情になる。常に側にいた存在が、本人の意思だったとはいえ妖の巣窟にいるのだ。

そして今、まるで世界から抹消されたかのように、烏森学園から彼女の存在が消えてしまった。

良守や時音、限の心にはしっかりと記憶が残っていたのがせめてもの救いだろつ。

今夜も早めに集まることにして、その場は一端解散となった。

血のように赤い夕陽が、山の向こうへ消えていく。住宅街は段々と静けさと共に、闇色へ染まっていった。

既に夜行の戦闘服に身を包んだ限は、ネリからもらった刀を眺めていた。
任務に持って行くため、地面と平行になるように刀を腰にくくりつける。右に鯉口がある形となった。

「ネリ……。」

一体何が彼女の身に起こったのか、皆目見当がつかない。腰から刀を逆手で抜くと、刀身が鞘から顔を出した。そこには、一際強くネリの妖気が残っている。

邪気の無い純粋な妖気は、月夜に語らった愛しい少女の顔を思い出させた。

(ネリ……)

結界さえ切れる、ネリの力が宿った白銀の煌めき。カチン、とそれを鞘に戻すと少年はベランダに出た。

そして、いつものように民家の屋根を足場に、学校への最短距離を跳んで行くのだった。

誰もいないはずの夜の校舎に、5人の人影が舞い降りる。内4人は黒スーツ姿なのに、最後の一人は漆黒のドレスを着ていた。服装からして女性である。

「……配置に着きなさい」

「「「「はっ」「」」」」

指示を出したのはその小さな女性。だが、不気味　　というより
異質な出で立ちの女性だった。

全身が闇に溶けるような“黒”で統一されているのだ。

髪留め兼帽子である小さな黒い丸帽子から黒い布が垂れ、女性の顔を半分隠している。

典型的な、西洋人女性の喪服姿としか思えない。

赤い唇と、繊細な陶磁器のように可愛らしい顎が見え、細くて白い足が膝下から覗いていた。

並みの人間とは思えない素早さで、4人の男達が消える。取り残された女性は、これまた黒い扇子を取り出した。

ザッと開いては閉じ、ザッと開いては閉じる。

「ここが烏森……。さてさて。どう攻めるか、じゃな」

ふむ、とひとつ思案顔になってその女性はドレスを翻した。

烏森に侵入者が来た、と分かったのは3人が学校に入ってからだった。

『アラ？』

乙女心を持った雄の妖犬・斑尾が首を傾げた。その様子に墨村の結界師が問いかける。

「何だ？斑尾」

『うん…？いや、違う感じもするねエ…？』

『何がだよ』とせつつく良守をよそに、雪村に仕えている妖犬・白尾が時音に囁く。

『ハニー。ネリリンに似た匂いの奴がいるぜ』

「……………」

「似た匂い…ってどういう意味？本人じゃないの？」

息をのむ限に対し、長い付き合いの時音は相棒の言葉に違和感を抱いた。白尾は難しい顔をして口を開く。

『前と 僅かだが匂いが違う』

とにかく行ってみよう、ということになり妖犬二匹は子供達を誘導するのだった。

そして、校庭。

中等部と高等部が合同で使うグラウンドには、普通なら人っ子一人いないはずである。

だが、小さな人影がひっそりとたたずんでいた。

月光に輝く銀髪で、3人はすぐにそれが誰だか分かった。

「ネリちゃん！」

「ネリ！」

警戒を解いて、時音と良守が嬉しそうに走り出す。だが、限だけは眉を寄せて足を止めた。

「……………？」

何故かは分からない。だが、野生の勘か第六感が妖混じりの少年に警鐘を鳴らしていた。

駆け出して少し距離が開いた結界師の前に、限が立ち塞がる様にとっ飛びする。

限の背後で、良守が困惑したように口を開いた。

「な、何だよ志々尾？」

「待て」

真っ先に少女に向かうはずの限が動かない。その異常に気づいた時音は、『ネリ』を少年の肩越しに見た。

その彼女が口を開く。

「あれ、どうしたの？この格好やっぱり変だった？」

いつもと変わらない、鈴を転がすような綺麗な声。
だが、限の心はざわついていた。

「……………」

嫌な、予感がする。

「もう、何か言ってよー。私一人喋って馬鹿みたいじゃーん」

ふうっと、顔の上半分が見えない『ネリ』が頬を膨らませる。なぜ限がこれ程警戒心を露にしているのか、良守も時音も分からなかった。

いつまでたつても埒が明かないので、良守は限の肩に手を置き、身を乗り出した。

「帰ってくるならくるで連絡くらい寄越せよ。心配してたんだぞ。

で、あつちは片付いたんだろ？ 姫様治すって話」

「ああ、それね」

扇で口元を隠すと、『ネリ』はムフフと笑った。

「うん、治したよ。でも、私は帰ってきた訳じゃない。」

赤い唇の端が、三日月のようにつりあがった。困惑の色を一層深めた結界師二人と、毛を逆立てて警戒する限。

「私、烏森をもらいに来たの」

その瞬間銀髪の少女が立っていた場所で、光の柱が爆発した。

「なんっ……きゃあ！」

ほとぼしる妖気の渦に、時音の足が浮く。驚異的な反射神経を発揮した限は、結界師二人を小脇に抱えて光の柱から距離を取った。

生身の人間があんな純粹な妖気にのまれたら、大変なことになる。妖混じりや妖でも、妖力譲渡が可能な少女の力を急激に浴びれば、最悪体が破裂しただろう。

間一髪だった。

「…どういっつもりだ、ネリ」

押し殺すような声が、限の口から漏れる。いまだ混乱している二人に対し、限はまだ冷静といえた。

妖気を一気に解放し、『ネリ』は腰から黒と白の九尾を生やしている姿へ変化していた。黒い獣耳はそのままの、ドレス姿である。

『どうもごうも、最初から私は人間側じゃない。黒芒楼なんだよ』

「何を言っているのネリちゃん！」

時音が悲鳴の様な疑問を投げ掛けると『ネリ』は、はあとため息をついた。

内心では、喜びにうち震えながら。

『私は、元々烏森を手に入れる為にここに来たってことだよ。』

ニタアと笑う姿に、以前のネリの面影は無かった。

「え…？え、な、意味わかんねーよ！何言ってるんだネリ！！」

ふざけるのも大概にしろ、と良守が声をあげる。逆に時音は銀髪の少女に、恐ろしい程厳しい目を向けた。

「今までのあなたは……全て嘘だったっていうの？」

『そゆこと。黒芒楼に烏森の情報を流すために、わざわざ学校まで通ってたってわけ。』

『ネリ』はケラケラ笑いながら、限をチラリと見た。その少年の顔は驚愕、憤怒を通り越して、蒼白である。

だが瞳だけは、抑えきれない激情を表していた。

すなわち、絶望。

少女に裏切られたと、存在自体全てが“嘘”だったのだと。

それは、繊細で心優しい妖混じりの少年の心を抉った。

「お前は…お前だけは…」

膝から崩れそうになる限に、さらに少女は追い討ちをかけることにした。

ベアトリックス・ネリ・ユリカが大切にしたもの、それをギタギタにして引き裂く。それは、『ネリ』に憑依した百合香の一番の望みであった。

大打撃を与えて、有頂天になった『偽者』は歪んだ欲望のままに口を開く。

だが、それが逆に小さな墓穴を掘ることになった。

『私が憎いでしょう、限君？その刀でも使って私を殺してみたら？』

「……!？」

違和感の正体に3人が『あっ』と気づいた時、斑尾が叫んだ。

『良守、囲まれてる!』

「なに!？」

黒スーツの男達が、校庭に姿を現す。夜だというのに皆サングラスをかけ、学校には不釣り合いな存在だった。

短髪二人に長髪と、スキンヘッド。見ただけでは、妖気も何も感じられない不気味な男達だった。

『ネリ』は、バイバイと良守達に暢気に手を振る。

『これからはこの人達が遊んでくれるってさ。じゃ、皆さんさようなら〜』

空間の亀裂を一呼吸の間に生み出した『ネリ』は、踵を返す。限は全身の力を総動員させて、己をその場に押し留めた。

(違う、今は動く時じゃない …!!)

腕に爪が食い込む勢いで、飛び出さないよう己を律する。銀髪の後ろ姿が闇に消えるのを、3人は黙って見ているしかなかった。

違和感の正体。

いつもは呼び捨てにする限に“君”付けしたこと。そして、妖犬達という『匂いが変わった』という事実。

3人は一般人でないが故に、違和感の正体を推測することが出来る。あり得ないことも可能にしてしまう、異能が存在するこの世界なのだ。

(ネリは…洗脳か、もしくは操られている…)

3人の脳裏に、小さな希望が灯った瞬間だった。

(6) 反乱の兆候：主人公何やってんの！？(前書き)

もう原作を木っ端微塵にしています。

残酷な描写がこれから数話続きます。

ご注意下さい！

本当に気をつけて下さい！

(6) 反乱の兆候：主人公何やってんの！？

かつて主は言った。

なんでわざわざ自由を捨てるの？このままあなたが逃げれば、私は跡を追ったりしないんだよ？

泣きそうな顔で、早く突き放さなくてはという顔で、我を見ていた。

銀色の太陽は、優しい。

寂しいと手を伸ばせば、我を振り払うことは到底出来まいと、確信していた。

その優しさに我はつけこんだ。

独りにしてほしくなくて。

一緒にいさせてほしくて。

あの潤沢な妖力も魅力的ではあったが、我にとってそれは二の次だった。

(すまぬ…主…。身体の感覚が、もう無い。)

白濁する意識の中で、我はもう死を覚悟していた。後悔は無い。

ただ、出来ることなら ……

……主の為に、死にたかった。

主に殺されることに、毛ほども抵抗は無い。

だが、主を最後に光の中へ戻したかった。

愛する者達がいる、日だまりの中へ帰したかった。

（主を残して死なんと誓ったが……このザマか）

自嘲気味に吐息を漏らすと、命までもが零れていく気がする。実際、幾ばくも保たんだろう。

不甲斐ない気持ちで頭を垂れると 金色の光が近づいてきた。

そこで初めて我が、暗闇の中にいたことと目を開けていたことに気がつく。

光はどんどん近くなって来たのに、我自身の身体は視界に入らない。床に臥せっているはずなのだが。

君はそれでいいのか？

金色の光は、静かなアルトの声で我に語りかけた。

中性的な、例えるなら男装した女騎士のよう。気高くて誇り高い様相が、目に浮かぶような声だった。

聞き覚えがあるのだが、記憶に埋もれてしまって探し出せない。

こんな所で死んで良いのか？

言われずとも、我とて何の役にも立たずに死にたくは無い。
だが、どうせよと？

妖力さえ欠片も残っていないこの死に損ないに、何をどうせよと？

黄金の光がフツと笑った気がした。

目を開けてくれ。もう君は、死なないはずだ。彼女が助けてくれたからね

音が…聞こえてくる。

水中で動く気泡の音と、機械の音だ。

同時に身体感覚が戻ってきて 物凄く重かった。

あなたは一体誰なのか。

光を良く見ようとしても、逆光が眩しすぎて分からない。

あの子を、頼む。

金色の光の中に……ふさふさの尻尾を見た気がした。

「さて。あの方も行かれたし、始めるとしようか。烏森の諸君」

先に口を開いたのは、黒スーツの一人だった。斑尾や白尾は、敵全員が人皮を被った妖であることを告げる。

そして、微妙な顔で耳打ちした。

『ネリ』は黒芒楼に帰った訳ではなく、敷地内のどこかに潜んでいると。

「我々は何も人間が嫌いな訳じゃない。むしろ好きと言ってもいい。大人しく烏森を明け渡してくれば、余計な危害は加えないと約束しよう」

気味の悪いことをつらつら言う妖は、本気で良守達がその言葉を信じるんでも思っているようだった。

良守が鼻で笑う。

「お前らみたいな訳分かんねー奴のことなんて、聞けるわけねーだろ。それより一つ教える」

「なんだい？」

まるで教師が生徒に話しかけるような、優しくて　不気味な声音だった。

だが、生憎良守は生徒でもなければ無力な一般人でもない。妖を滅殺する、結界師の正当継承者である。

「　お前ら、ネリに一体何したんだ！！」

それは3人が一番聞きたかったこと。限にいたっては、拷問してでも聞き出そうと決意している。

そんな子供達の予想に反し、その男は素直に口を開く。

「あの方は、元々我々の頂点に立っていた御方。もう、人間の間で御身を煩わせることもない。」

男 茶南がサングラスの下で、魔性の赤眼を細めた。

「あの方は、我々に力を与えてくださった。そして烏森を御所望でね。我々を試していらっしゃるのさ。」

『ネリ』に心酔している様子の男が唄うように言うと、限の何かがブツンと切れた。

限の抑えきれない歯ぎしりが、結界師二人にまで届く。限の殺気に煽られたかのように、彼の手足が瞬時に妖のそれへ変化した。

少年の低い声が、響く。

「ふざけるな……！」

弾丸の様に飛び出した限が男に肉薄し、爪を振りかぶる。それは怒りと絶望がない交ぜになった、渾身の一撃だった。

なる、はずだった。

『……………くっ、おの、ね……………』

高等部校舎の屋上で、黒いドレスの少女が荒い息をつく。目元は漆黒の布で隠されているので、垣間見ることは出来ない。

だが、端から見ても胸を押さえる姿は苦しそうだった。九本の尻尾が、苦痛にのたうち回っている。

『出て…くるなっ…この死に損ないめ…!』

「あらー…何か苦しそうだな」

どこからともなく現れたのは、元人間の妖・火黒だった。地上で戦っている妖と同じく、人皮を被っている。

だが、火黒が着ているのは旧タイプの人皮なので、4人のものとは随分外見に差が出ていた。

地上の4人 茶南^{さなん}、波緑^{はろく}、赤亜^{せきあ}、灰泉^{はいせん} はカツラも色とり

どりで長短好きなものを身に付けている。

灰泉などは、スキンヘッドに幾重にも重ねられた菱形のタトウを入れていく程だ。

皆、人間になりたいと思っている酔狂な もとい、どこか狂ってる妖だった。

『……………うる…さいっ!』

「おお怖。そんなに怒んなって。」

おどけてみせる火黒に、黒い布の下から鋭い眼光が飛ぶ。

だが、フウツと息を吐くと少女の雰囲気か幾らか落ち着いた。どうやら、“痛み”が過ぎ去ったようである。

妖狐化を解くと、忌々しそくに喪服の少女が舌打ちした。

「仕事はどうした、火黒。さっさと妖混じりの小僧を戦闘不能にする。」

「……………」

ジツと少女を見つめる男の視線に、銀髪の少女が扇を取り出す。火黒は首を傾げながら口を開いた。

「やっぱりアンタ、一昨日の奴じゃねえな」

「……………だったらどうした。お前には関係ない」

顎でしゃくり、『さっさと行け』と合図すると男は肩をすくめる。

「一つ、当ててやろうか」

夜風に火黒のざんばら髪が揺れた。長めだが、切り揃えている訳では無いので風に遊ばれると、表情が見えなくなる。

そんな中火黒は、口元だけが気味の悪い笑みを張り付けていた。

「アンタ、烏森なんて本当はどうでも良いんだろ。狙いはあの小僧なんじゃないのか？」

『俺が殺しちゃうかもよ?』と言外に含ませる男に、『ネリ』は少しうつつむいた。

お？と火黒が注目すると、小さな赤い唇が言葉を紡ぐ。

「殺すのは……いつでも出来よう。お主はただ、あの小僧をいたぶればいいのじゃ……黒田源一郎」

「……へえ。懐かしい名前知ってんだな。だが……」

ヒュン、と風を切る音と共に少女の帽子が斬り飛ばされ、まとめていた銀髪が留め具を失う。

そして、細い首に日本刀の切っ先が突き付けられていた。男が抜刀したわけではない。

火黒の手のひらから、にゅっと刀身だけ突き出ているのだ。

「他人の過去に土足で踏み入るのは、感心しないぜ？」

口は笑っているが、目が笑っていない。常人でも感じられるであろう剥き出しの“殺気”を向けられて、銀髪の少女は軽く目をしばたかせた。

そして、暢気に口を開く。

「ほほう。我でも見切れなんだ。というよりこの娘の身体能力は低いからの。お主と戦えばこの娘はすぐ死ぬじゃろうな」

さも他人事のように笑う少女に、火黒は眉を寄せた。本気で言っているのならば、随分と投げやりな態度である。

死を死と思っていない、おかしい存在だった。

ふと気になって、火黒が口を開く。

「アンタ…その額のやつは何だ？」

刀を突き付けたまま、男はチラリと少女の額の中央に目をやる。そこには、第三の目のごとく深紅の宝石が火黒を見返していた。

見ていると、引き込まれる様な妖しい輝きに、火黒が瞠目する。切っ先が引っ込む気配がしたので、『ネリ』は迷わずその刀を素手で掴んだ。

火黒が目を見張るが、勢い良く刀を引いたりはしない。そんなことを心配するあたり、火黒はまだ少女に甘かった。

刀身を伝って、少女の赤い血が火黒の手のひらまで届く。

「この結晶体は、人間の怨嗟の塊。憎しみが形を持って成され、闇の力を増幅させる物。これで、我は小娘を抑え込んでおるのじゃよ」
表面に出して常に闇を使っていないと、本物のネリの意識が目覚めしてしまう。しかも先程分かったことだが、妖狐化するとレナモンの力が強まるせいで闇の支配が弱まるらしい。

下手に長時間変化すると、ネリの意識が勝ってしまうようである。

「お主に殺されようと我は一向に構わぬ。我の肉体は既に朽ち果てた故な。

じゃが、この小娘に地獄の苦しみを味合わせてやらねば、我の気が収まらぬわ」

ニヤリと少女が笑えば、彼女の紫色の瞳が細められる。蛇のような笑みに火黒は、悪寒が走るのを感じた。

（オイオイ嬢ちゃん…。アンター一体『コイツ』に何したんだよ……）

偽者の恨みは生半可なものではない、それは部外者の火黒にも良く分かった。だが、虫も殺さなそうな少女がこれ程までに恨まれるのが理解できない。

（ま、俺には関係ねえな）

あっさりと刀を下ろし、少女に背を向けると火黒はくつくつと笑った。

「まあいい。面白そうだから付き合ってやるよ。顔隠してたってことは、ガキ共に教える気ねえんだろ？」

「勿論じゃ。教えてしまっつては元も子も無い」

右手から流れ落ちる鮮血を屋上に垂らしながら、『ネリ』は軽く手のひらに妖気を籠める。

すると、裂傷が綺麗に無くなり出血も止まった。

「協力の代わりと言ってはなんじゃが、良いことを教えてやるうか。」

踏み出そうとしていた火黒の足が止まった。だがそのまま、革靴の音を響かせて歩き出す。

「いや、アンタからは何も聞きたくねえや。貸し一つにしようてくれよ」

後ろ手に手を振ると、残像も残さず火黒は屋上から消えたのだった。

(7) 原作よりも厄介

タイミングも速さも申し分ないものの筈だった。今まで生きてきた中で、限の速さを越えるものはいなかったのだから。

だが、限の渾身の一撃は

「あの方が力を与えてくださったと、言ったはずだがね」

防がれてしまった。限の鋭い爪は、男の腕に弾かれたのだ。

男の“中身”が、限の爪より硬いことの証明である。

ベロン、と剥がれた皮膚の中からは、銀色に光るモノが見えた。

「…これなら僕達でも手が足りる気がするな。妖混じりとはいえ、やはり半端者ということか」

「何だと…!」

『興ざめだ』と言わんばかりの表情に、限の瞳孔が怒りで縦に割れる。攻撃を仕掛けようとした限だったが、向けられた殺気に頭が冷えた。

四方向からの殺気である。

「茶南ー。いつまで話してんだよ、俺達すっげえ暇なんだけどー?」

赤い短髪の男が、ポケットに両手を突っ込みながらかつたるそうに口を開いた。

「こいつら話す気無いみたいだしさー、もういい加減次行こうぜー？」

「まあ待て、赤亜。僕達は話し合いに ……」

ブンツ、と空気を切る音に茶南の声が途絶える。だが、それは限の攻撃を食らったからではなかった。

「 ……来たのだから」

限の目が見開かれ、信じられないかのようにのろのろと視線が下にいく。

「志々……！？」

息をのむ声は、良守から。

時音は、自分の口を手で押さえなければならなかった。

限の背中から、銀色の突起物が生えていたから。

「志々尾……！」

(ばか、な……)

力を失っていく少年の体から、勢い良く銀色が引き抜かれる。スーッ姿の男の側には、人間の“左腕”がへタリと萎んで落ちていた。皮を一部分捨てた妖からは、コウモリのような翼が生えている。

爪というより最早槍としか言い様が無い銀色の先端は、真っ赤に染まっていた。誰の血かは、言うまでもない。

「がっ……!!」

引き抜かれた反動で、前につんのめり少年は膝をついて倒れ込む。右肺を傷つけられたことにより、限の口から血が溢れた。

冷酷な光を目に宿す茶南は、軽く血を振った後血溜まりに沈む少年を見やる。

「首を狙うとはね。まあ、飛ばされたとしても僕はそう簡単に死にはしないが」

うつすらと男の首から血の線が浮かび上がるが、体を捻ったことで避けたらしい。致命傷でもなんでもない。

良守が思わず足を踏み出すと、瞬時に包囲網が縮まった。男達が勝手に事務的な確認をし始める。

「さて。作戦の第二段階だ。あの方の言う通りやれよ」

「分アってるよ」

「では……」

少年結界師の声をきかずに、血まみれの限を肩に担ぐ茶南。

それに二人が気を取られていると、背後で妖犬達の悲鳴が聞こえた。あっと思った時には、もう遅い。

『ギヤツ!?!』

「斑尾!」「白尾!」

赤亜の指先から放たれた赤い光線によって、2匹が消滅する。

「……散!」

それを見届けた妖が、一斉に散った。

全員、結界師達も含めて知るよしもないが『原作・結界師』よりも悪い方向に、物語は進んで行くのだった。

「ちょっと待ちなさい、良守!!」

雪村の少女が、天穴片手に幼なじみを追いかける。だが、良守にそんな声は届いていないようだった。

「志々尾が持つてかれたんだ!黙ってられるかよ!!」

早く助けなければ、限が死んでしまう。ネリともまだ話がついていないのに、限までもが敵の手に落ちてしまった。

相棒の妖犬達はいとも簡単に消され、何もかもが後手にまわっている。

「くそっ！何でだよ、ネリ！！」

操られていると信じたいが、やはり憤りが先に立つ。全力疾走で木の間を駆け抜けると、空から岩が落ちてきた。

「うおっ！？」

「無闇に突っ走らないで！！」

右に左に岩やら木やらを避けながら、時音は幼なじみの跡を追う。

だが、ふと攻撃に統一性があるのに気がついた。良守も時音も障害物を避けるあまり、真っ直ぐに走っていないのだ。

校舎を抜けた所で、右へ。木々が生い茂る敷地の端に向かって誘導されている。

「良守！！何かあたし達 ……」

「時音、後ろ！！」

雄叫びをあげながら立方体の石を 自動販売機の2倍ぐらいの石を 持ち上げる緑髪の男。

それを間一髪後ろに跳び退く事で回避した時音は、その瞬間気がついた。

「「!?!」」

良守も息をのむ。地面に引かれた黒い正方形、その四隅に先程と同じ岩が置いてあるのだ。

4人の刺客は、それぞれ一人ずつ岩の上で待機している。

誰も口を開かない。

静寂を破ったのは、少女の声だった。

「じゃあ、始めましょうか」

銀色の髪を夜闇になびかせ、今度は夜行の戦闘服に身をつつんだ異界の少女。

ベアトリックス・ネリ・ユリカだった。

「その石には呪力封じの術が施してあるの。だからその結界の中では、あなた達はただの人間ってこと」

「……………」

良守と時音が背中合わせで、呪力封じの結界の外にいるネリを見る。

少女は、はちまきの様な黒い額当てをしていた。夜行の戦闘服はあまりに見慣れた姿であり、結界師二人の心にさざ波が立つ。堪えきれずに良守が叫んだ。

「ネリ！いい加減目エ覚ませ！！お前の居場所は志々尾の側じゃねーのかよ！！」

紫の瞳が強ばる。その反応を見て、時音も呼び掛けた。

「こんなこと間違ってる！！あなたは限君を守る為にこの世界に来たって言ってたじゃない！！」

陶磁器のような滑らかな体が、震える。訳の分からない恐怖に銀髪の少女の身体は、ぶるぶると震えた。

「あ」

百合香の意識がぐらぐらと揺らぐ。ネリの存在の根幹を揺さぶる二人の言葉に、本物の意識が強くなってきたのだ。

それを見て、結界師二人の顔に希望が見えてくる。

「思い出せ！ネリ！！」

血を吐く様な叫びに少女が、震える唇で言葉を紡ぐ。

「……………ペンダント、を」

カツと紅く禍々しい光が、少女の額から漏れた。紫の瞳は強制的に閉じられ次に開かれた時……………そこに揺らぎは存在しなかった。

小馬鹿にしたように、銀髪の少女が口を開く。

「ばかばかしい…何を言うのかと思えば！貴方達とお喋りする時間がもつたないわ。4人共、もう本気でいいからやって。」

早口でまくし立てる『ネリ』は不機嫌そうに、部下に指示を出した。

良守達を殺せるとは期待していない。本当にピンチの時は、墨村良守が烏森の力を借りて覚醒するだろうからだ。

（今の段階で真界を発動されたら、火黒が使えなくなるやもしれん）

真界　平成の世では良守だけに与えられた、間流結界術最終奥義である。

そんなものを、こんな早い段階で会得して欲しくは無いのだ。

（妖混じりの小僧をいたぶれば……翡翠が出てくるじゃろうなあ？）

くくく、と笑い『ネリ』は身を翻す。どこに限を置いておくか、きちんと指示を出してあったので彼がどこにいるのか知っているのだ。

「待て、ネリ！！」

良守の声だけが、少女の背中を追う。時音は、先程一瞬だけ正気に戻ったネリの言葉を思い返していた。

ペンダント、確かに彼女はそう言った。

何を示しているかは明白である。

「ちえー、コレ気に入ってたのに」

「つべこべ言うな。あの方の言葉は絶対だ」

時音が倒れそうな程青い顔をしているが、敵は待つてくれる訳がない。

ネリが闇の中に消えると、4体の妖が偽りの人皮を脱ぎ去る。

何とかその隙に呪力封じの結界から出られたのだが、波緑がまたもやあの岩を投げた。

『ウオオオオ!!』

自動車よりも大きい体躯で、軽々と巨石を放り投げる。結界で囲むのも出来ないなので、飛び退くしかない。時音も良守も地面にめり込んだ巨石に、厳しい表情になる。

「あの人皮…中身は何だって良いのね」

「大きさも中身もバラバラかよ!!」

舌打ちする勢いで、二人が防御用の結界を張る。ゴリラの様な姿の灰泉が、白い煙を吐き出した。

どんどん視界が悪くなっていく。

硫酸の雨が降る。

「結果が溶け出した!？」

「良守、こつち!」

とりあえず先程の岩の下に避難した二人の間には、嫌な沈黙が流れていた。

「さあてさてさて。限君は何処かな？」

舌舐めずりしながら、『ネリ』は歩を進める。植物園の中に放り込んでおく様に指示を出しておいたので、それまでの道を拒絶の球体でお手玉をして遊ぶ。

ジャリ、と砂を踏む音がした。

「本当に奇襲しか能がないようですね、翡翠さん。まあ、私には成功しなかったようですけど」

「……………」

厚手のコートに本来左腕があるべき場所には植物の蔓。寄生型の妖混じり、冷徹で敵には容赦しない男・翡翠京一がそこにいた。

切れ長の瞳は、怒りと殺気しか発していない。

「てめえ…最初から俺達を騙してたんだな。」

「皆して同じことを何度も確認しないでくれませんか？本当に頭領も

馬鹿ですよ、何のためにあなた達をここに置いたんだか。全然意味無いじゃないですか。私が間者だってちよつと考えれば分かりそうなもんでしょくに」

やれやれ、とわざとらしく頭を振ってやる。すると男性の気配がまた一段と殺気だった。

“百合香”は内心ほくそ笑む。

これでいい。

これでネリの世界は壊れていく。

もう踊り出したいぐらいの気持ちで、『偽者』は必死に抑えていた。

「あいつはどうした…！」

「ああ、限君ですか？私も今探してるところですよ。ここら辺に置いてく様に指示したんですけど、あの子達もどこか抜けてるからな」

分からないです、と言いかけると細身のナイフが飛んできた。言わずもがな、全て二次効果のあるナイフである。

簡単に拒絶の黒い盾で弾くと、『ネリ』はニッコリ言った。

「甘いですよ、昏睡させる毒なんて。ここで私を殺さなきゃ、限君が死にますよ？あ、そっか。あなた彼のこと大嫌いでしたね。初対面でこてんぱんにされれば、誰だって良い気はしないですよね？」

「

「……………」

目の前の男は喋らない。だが、一瞬後ろに目をやった後ニヤリと笑った。

自分の役目は終了だ、と言わんばかりに。

「偽者にしてはよく知ってたなア？何つつたっけ、“鬼百合”だったか？」

ギクリ、と少女の体が名前の縛りで一瞬強ばる。だが、表情だけは無を保ったまま、男を見ていた。

翡翠の後ろから、もう一人男性が近づいてくる。漆黒の羽織をなびかせた男は、短く坊主に刈り上げその額には三日月のような傷痕があった。

「翡翠。後は俺がやる」

月明かりに照らされて、黒曜石の瞳が紫水晶の瞳を射抜く。

「初めまして。異界の鬼さん？」

不気味に笑うのは、夜行の頭領・墨村正守その人だった ……。

(8) 原作では絶対に会わない二人をちょっと会わせてみました (前書き)

今さらですが、もうほとんど原作の面影を残しておりません。

ヒロインと少年の幸せな日常が書きたかったのに……！
いつまでも横槍が入る…なぜッ！？

まあ、こんな感じですがストックがたまってきたので調子にのって
早く投稿してみます。

(8) 原作では絶対に会わない二人をちょっと会わせてみました

時間は、百合香の意識がネリの体をのっとり、夜の計画を練っていた頃にまで遡る。

幹部会の顔合わせを終えた正守は、どっと疲れた体を引きずって夜行まで戻っているところだった。

もう昼過ぎで昼食はまだであつたが、とても食べる気にはならない。

裏会最高幹部・十二人会、第七客の座は本当にネリが言った通りだった。

「今度はもつと詳しく訊かないとな…まさかここまで一致するとは…」

そら恐ろしくなりながらも、夜行の門を叩く。すると、副長の刃鳥が慌てた様子で駆けてきた。

「頭領。すぐに限の電話にかけ直して下さい。烏森で一騒ぎあつたようです」

「……分かった。しばらく俺の部屋に誰も通すな」

「はー」

短いやりとりの後、顔を引き締め道すがら携帯を取り出す。

かけると果たして、10回目のダイヤル音で繋がった。

『よっしゃ　！これが、このボタンか！！』

「良守……。お前とるの遅いよ。っていうかさ、電話……。限から借りたの？」

繋がった途端に聞こえてきた弟の声に、正守は苦笑いした。

緊急だときいて電話してこれでは、肩の力も抜ける。

ただ、幹部会で吸い込んだ重い空気を一気に取り去ってくれて、どこか癒された気がした正守だった。

『そつだ、こんなことしてる場合じゃねーんだ！ネリの記憶が……』

話を聞いている内に正守は納得した。限は1組で、良守とネリは2組。同じクラスの弟は、目の前でその“記憶が消えていく光景”を見せつけられたのだろう。

確かに異常事態だった。

『兄貴、ネリからはあの後連絡あったのか？』

「……一応な。しばらく音信不通になるかもとは言っていた。」

『……！それって！』

「ああ。……恐らく黒芒楼で戦いを始めたんだろう。ネリの、最

後の戦いを」

概要だけは限から報告を受けていた正守なので、推測ぐらいたてられる。黒芒楼の主にとり憑いているモノが絡んでいるのは確かだった。

大勢の人間の記憶を一度に消すのは、並大抵の力で出来るものではない。

そして、所謂『裏』社会に属する結界師や夜行から記憶が消えていないという事実。

それらから導き出せるのは ……

「おそらく…ネリが自分で記憶を消した可能性が高い。」

『そんな…なんで』

正守には見えないが、良守の携帯を持つ手が震えた。

自分を抹消するなど、技術云々の前に壮絶な覚悟がいる。

そんな決意を同じ14歳が出来るなど、少年結界師には想像できなかった。

「俺の方でも手は尽くす。お前は烏森を守れ…じゃあな」

『お…おう』

プツン、と終話ボタンを押すと静寂が訪れる。はあ、とため息をつ

くと正守は自分の執務室の扉に手をかけた。

結局自分の部屋に着くまでに用事が済んでしまい、刃鳥には二度手間になるなぁと考え……室内の光景に目を剥いた。

正確には自分の机の上だ。

「なぜ…道が…!?!」

幹部会に行くからと、ネリから預かったダガーは置いていったのだ、何となく。

道が　空間転移の門が、ブラックホールの様に開いている。マ
ンホールぐらいの大きさで、地面と垂直に口を開けていた。

「ちょっと待ってくれよ…。俺に黒芒楼まで来てくれって?そういうことなのか?」

さすがに良守じゃあるまいし、21歳の正守にそんな軽率な行動は許されない。

夜行の長であり、裏会最高幹部である彼の存在は、最早彼だけのものではないのだから。

「どつやって塞…」

そこにいるのは結界師か?

バツと右手を構え、正守は直ぐ様臨戦体勢をとった。嫌な確信に背中を汗が伝う。刃鳥に“入室厳禁”と言っておいて心から良かった

と正守は思った。

盗聴防止と、被害を押さえる為に部屋ギリギリの結界を張る。そこ
までするのに一呼吸とかかかっていない。

「黒芒楼の者だな？」

そうだ。こちらに戦う意思は無い。というより戦う程力が回
復していないからな。

もう何を言っても信じてもらえないだろうが……頼みたい事がある。
女性の声には、やるせなさ若干の投げやりな態度が含まれていた。

正守が答えずに漆黒のマンホールに向かっていると、女性が続ける。

氷蛾ひもじを引き取って欲しい。彼をいつまでも重体のままここに
置いておくのは、危険だ。

この者だけでもそちらに帰したい。

「……………！？黒芒楼で一体何があったんだ！！それに君はどうやっ
てこれを……」

事態が悪い方向に進んでいる気がして、正守は嫌な汗をかきっぱな
しだった。

女性が、静かに宣告する。

ネリは…あの子は、負けた。私と氷蛾も戦ったが…死ななか
ったのが不思議なくらいさ。

有事の際は、このコンパクトを開くとネリが言っていた。

もう私だけではどうにも出来ん…勝手に呼んでおきながら…す

『すまない』と言おうとした女性に、正守は当たりをつけて念糸を放った。手の平から10本分を放ち、放射状に投網の要領でかかることを祈る。

多分かからないだろうと思っていただけに、手応えがあつて逆に驚いた。

……………っ！

女性の息をのむ声が聞こえたのだが、抵抗は皆無のようでした。

「ちよつとこつちに来てくれる？」

見えない相手に、夜行の長は物騒に笑った。

「全く手荒にも程がある。言ってくればこちらからくぐつたものを」

念糸で縄の様に縛られた後、何やら札を数枚貼られた白衣の女性

藍緋は、顔をしかめて男を見ていた。

正守は信じられない様子で藍緋からの話を反芻し、頭を抱えている。

「だから言わんこつちや無い……………！あれほど無茶はするなと言つたのに」

「……………」

藍緋は縛られた上に、結界の中に閉じ籠められつつも目の前の男を観察していた。

仲間を想い、部下を案ずる感情は妖には遠いものだ。それを变だとは思わないし、妖は個の存在であるから仕方の無いことだと藍緋自身思っている。

(それにしてもネリは、その範囲が広くないか?)

黒芒楼の幹部として言わせてもらえば、姫を助けてもらったことは感謝している。

だが、人間のネリは黄河に以前言っていた。

“皆が笑える未来を創るために。人間も妖も、皆 ……”

“皆”に妖まで入っているその言葉を知って、藍緋は呆れたものだ。同時に部下が無傷で帰ってきて安堵したのだが。

「それで…どうするつもりだ、お前は。」

正守の動きが止まり、藍緋の方を向いた。烏森にいた小僧と似ている、と思いつながら女性は口を開く。

「あの子を助けるのか、または 切り捨てるのか」

「……！」

目を見開いた正守に、縛られたままの藍緋は静かな目を向けた。

「あの子の知識は常軌を逸している……というより、おかしい。知るはずの無い我々の事情まで知っていた。それが今や烏森の敵……早く手を打たねば」

「そんなことは分かっている!!」

藍緋の声を遮り、正守は声を荒げた。

そんな大声を出して他の者が来たらどうするのかと藍緋は思ったが、無用な心配のようだった。

「ネリを自由にするのがどれ程危険なことか、俺だって気づいていた。だが、その前にネリは ……夜行の家族だ。」

『見捨てることなど出来ない』と言う男性に、藍緋は内心驚いていた。

人間同士が作る“繋がり”というものは、一方が絶ちきろうとしてもそう簡単に切れないものらしい。

素直に羨ましい、と白衣の女性は思った。

「ではどうやって救う気だ？言いたくは無いが、土地神級二人と幹部一人でも止められなかったんだぞ」

姫と氷蛾、そして藍緋のことである。

その質問には答えず正守は無言で結界を解除した後、藍緋の力を封じる呪符と念系を取り除いた。

盗聴防止用の結界はそのままである。

意外そうな顔をした女性に、正守は薄く笑った。

「ネリが君を助けた訳だ。それだけ妖気が高いのに、邪気が薄い。それに…人間の在り方に興味を持っているようだし」

観察していたことに気づかれていたようで、女性はウツと詰まった。

確かにネリにはもう既に2度蟲から助けてもらった。

一度目は黄河と共に。

二度目は黄河が持っていた漆黒の球体で。

藍緋の分の球体は没収されていたのだが、ネリは黄河にも同じ物を渡していたのだ。

白も銀髪の少女の言う通りになるのが気に入らなかったのか、藍緋が支配を逃れても何も言わなかった。

何と言うか、『偽者』は何処か詰めが甘い。藍緋の研究室を搜索すれば、氷蛾の存在も分かりそうなものなのだが。

よって、藍緋が黒芒楼や烏森に協力する義務は全くもって無い。

「ネリは…会ったこともない私を、最初から助けようとしていた。……理由を聞くまでは、あの子に死んでもらっては困る」

「じゃあ、共同戦線といこうか…藍緋。」

正守が武骨な手を差し出す。その意味が分からない女性では無い。無表情が常である藍緋は、不敵に笑った。

「是非とも“さん”を付けて欲しいものだ。これでも数百年は生きていく妖だ。」

フン、と笑いながら手を取る藍緋に正守が頷く。

「俺は、墨村正守。烏森にいる良守の兄で夜行の頭領をやっている。協力感謝するよ、“藍緋”」

「……私は黒芒楼幹部、研究部の藍緋。人間とつるむなど云^{うん}十年振りだがよろしく頼む、“正守”」

さん付けは無理そうだと悟った藍緋がお返しとばかりに夜行の長を名前で呼んでやる。

怒るかと思えば、男はきよとんとした後、嬉しそうに笑った。

その後、1時間も音がしなかった執務室を心配した副長・刃鳥が、珍しく混乱したのはご愛嬌である。

(9) よじやつと鬼とサヨウナラ

「あ、言っとくけど限はもう救護班に預けたから、今頃学校の外だよ」

正守が丁寧に『偽者』へ教えてやると、銀髪の少女は小首を傾げた。

「へえ……。随分と行動が早いですね。意外でした。頭領は自分の手に負えないことがあると、歩みを止めてしまおうと思ってましたから。」

弟さんと違って。」

正守の顔がほんの少しだけ引きつる。どちらの弟を指しているかなど、言われるまでもなかった。

「俺に売り言葉は通じないよ。君が偽者だと知っているからね。」

「なあんだ、つまんない。」

こつも早く知られてしまったのは予想外だったが、百合香はまだ諦めていなかった。

たとえ結晶体の一部が結界術で壊され天穴で異界へと吸い込まれたとしても、ネリさえいればまた帰ってこれる。

ほんの一粒ほんの一片でもいい、ネリの体に残ってさえいればい

いのだ。

「…お喋りはもう良い。ネリの体を返してもらおうか。」

スツと鋭い目になった正守は、結界師独特の右手の構えを取り

絶界を発動した。

触れるものは例外無く消し飛ぶ、漆黒の結界。球体の中にいる術者を攻撃から守り何者にも侵食されない、正守にとって最強の術である。

「　　なあんだ、絶界ですか。」

あまりの物言いに、少し下がっていた翡葉も発動している正守も呆気に取られた。

ネリ自身の異能　　握りこぶし大の漆黒の球体を生成する。

無道の戦い方を知っている『ネリ』としては、絶界もあまり脅威に映らないようだ。

「この子の身体は厳密に言えば妖混じりじゃない。人型の時に私を消し飛ばせば、二度と再生はききませんか？」

喋りながら、球体は車のタイヤ程の大きさになった。それを圧縮し、フリスビーよりももっと薄く円盤状にする。

かつて蠍鎌をミンチにした、凶悪な刃をまずは一つ。

両手を触れない程度に挟むように添え、頭の後ろから体ごと反動を

つける。

「食らえ!!!」

「!?!?!」

何者にも侵食されないはずの絶界は、無惨にも縦に切られた。まるで果物をざっくり斬ったような呆気なさである。

正守が一步左へ避けていなければ、彼の右腕は落ちていただろう。

ギュルルル、とブーメランのように戻って来る刃を塊から解除する。背後から手裏剣大に分解された刃がいくつも正守に襲いかかり、夜の羽織がズタズタになった。

「くっ!」

絶界でいくらか威力は削られたものの、正守の顔にいつもの余裕は無い。

「…全く皮肉なもんだ。ネリちゃんがこんなに強いなんてね」

右肩を押さえながら、正守が苦笑をもらす。

すると少女の背後で青みがかった結界が形成された。地面と平行に伸びハンマーの如く少女をどっこうとして、正守は妙な感覚に陥った。

いつだったか、感じたことがあったような認識のズレ。

その証拠に、結構な速度で打ち出された結果は、いつの間にか少女が踏みつけていた。

その手にはさっきまで無かった扇が握られている。

「気絶させようって魂胆ですか？無理ですよ、遅過ぎます」

「頭領！」

後ろで戦いを見守っていた翡翠が、声を張り上げる。

「時間を操っているようです！頭領の動きがいきなり遅くなりました！」

「なっ…！？」

「ッ！まあ良い。対策などありませんからな」

空間支配に、時間支配おまけに妖混じりの特殊能力も兼ね備えた『偽者』は、歪な笑みを浮かべた。

圧倒的強者。

それを無傷で無力化しようとするのは、さすがに無理があった。

正守の心に考えない様にしていた選択肢がよぎる。

（絶界で … いや、それはまずい。ネリが純粋な妖混じりじゃないのは事実だ）

変化でもされたらもつと手がつけられなくなってしまう。

そこまで考えて、はたと正守はおかしな点に気がついた。

(そういえば…何故ネリは変化しない？黒芒楼では変化して攻撃した筈だが…)

「…つもらん。」

正守の結界に腰掛けた少女は、銀髪をいじりながら不機嫌そうに呟いた。

「なぜ我を殺さん、なぜ本気を出さん。」

烏森に手を出すまで、お前らはこの娘を殺すことも出来んのか」

「……手を出してるから俺がここまで来たんだよ」

繕う気も失せたのか、ネリの顔をした百合香がくくく、と笑った。

正守の視線がチラリと周りに向く。もう少し、あともう少し時間が必要なのだ。

時間稼ぎでなければ、こんなお喋りに付き合う正守ではない。

「我が一体いつ手を出した？城にさえ入っておらんというに」

(城……烏森の城のことか…?)

少女の言葉に、正守が怪訝な顔をする。どうにも少女の知識量と、結界師達の知識量が違いすぎるせいで話が噛み合わないのだ。

ザッ、と突然翡翠が動く。

植物園へ続く道に彼は立っていたのだが、もう時間稼ぎの必要は無くなっただけらしい。

まじな
呪い班の準備が整った合図だった。

「烏森の話はもうちょっと慎重に扱って欲しいものだね。まあ、口の軽い君に何を言っても無駄のようだけど」

「ほう…？ならば、もう話はやめにして 殺してやるわ」

結界から飛び降り黒い額当てを外すと、少女は額の結晶体を露にした。

そして、拒絶の球体を集めて纏い始める。

「間流結界術の絶界と、世界すら拒絶する異能の力 どちらが強いか…」

喋りながらも『ネリ』の腕が、足が、腹が漆黒の球体で覆われている。

終いには、『ネリ』の全身が球体に飲み込まれた。

「…試してみようではないか」

中身がもう何も見えない、塗り潰された黒の球体が正守に迫る。

自分に突っ込んで来てくれたのは計算通りなのだが、正守に本気で

戦う意思は無い。

壁のように透明な結界を生成し、進路を邪魔しつつ後ろへ後退していった。

「君がネリを恨むのは分かる、自分を殺した相手だから当然だ。」

呪いの罫が仕掛けてある植物園が見えてきて、正守は姿の見えない少女に話しかけた。

ひっきりなしにカマイタチのような三日月型の黒い刃が飛んで来るので、それを避けながらである。

正守の頬が斬られ、羽織の袖が飛んでいく。

「だが、君は俺の部下なかまを傷つけた。部下を守るのは頭領の仕事だ。」

後退しながら植物園 薔薇の生い茂るアーチを潜ると、正守は少し入った所で歩みを止めた。

結界の障害物を刃で斬りながら、『ネリ』を飲み込んだ球体もアーチの直前まで来る。

そこで一旦、少女が球体を解除した。

「“部下を守る”？フン、笑わせるな。この娘に頼っていた人間がよく言っわ」

一歩、少女がアーチに近づいた。

正守は気取られぬ様に、その場を動かず絶界も発動させたままにする。

もし呪いましなが失敗すれば、この至近距離で攻撃を回避することは出来ない。

地を這う『ネリ』の声に、正守はさっきまでの少女とは違う何かを感じた。

「“責務”を終えない限り、この世界から出ることも叶わず……ネリがこの世界でどれ程窮屈な思いをしてきたか……」

ゆっくりと歩を進める『ネリ』は、畏も知らずに足を踏み出す。

そして、『本物』も今日の朝まで知らなかった事実を、『偽者』は吐き出した。

「妖まじなの血をひく者として、この世界に組み込まれてしまったネリが、お前達をどれ程恨んだことか……!!」

正守が息を飲んだのと呪いましなが発動するのは、ほぼ同時だった。

地面が跳ね上がり、六ヶ所から青白く光る柱が立ち上がる。

「なっ!?!」

幻だったアーチが消え去り、鳥籠の様に屋根を形成して少女を封じ込める。

「小癪な真似を……………なにッ!?!」

異能の力で脱出を試みる少女だったが、元よりそれを封じる為の処置である。

あらゆる“力”を無効にする結界もとい透明な鳥籠は、少女の異能与妖混じりの力を禁じたのだった。

呆然とする『ネリ』に、まずは上手くいったと息を吐く正守。

絶界を解くと、頭領は隠れていた呪い班まじなの二人に労いの言葉をかけた。

黒髪の青年、染木文弥と金髪をツインテールに垂らす少女、織原いと絲である。

「二人ともご苦労様。最後の仕上げよろしくね」

「ハイ」

文弥が返事をし、絲は笑顔で大きく頷いた。彼女はほとんど喋らないのだが、その分表情が豊かである。

二人は、少女の前後に立つと“最後の仕上げ”にかかった。

「ごめんねネリちゃん……。痛いかもしれないけど、我慢してね」

沈痛な面持ちで、文弥が結界の前で両手をつき、第二段階の準備をする。

絲は祈る様に両手を合わせると、目を閉じた。

すると彼女のすぐ側に古めかしい木製の糸車と、小さな骸骨がぬいぐるみの服を着たような可愛らしいモノが現れる。

異能の種類にもよるのだが、このぬいぐるみは絲にとっての“管理者”と呼ばれるモノである。

術を行使する際に、補助をする存在であり正守が連れている黒い鯉・黒姫も“管理者”だ。

「絲、今だ！」

集中のためか、織原絲の眉がきつく寄せられる。

同じくして、小さな“管理者”が持っていた指揮棒で糸車に号令を出した。

ガラガラツ、と勢いよく車が回ると細長い縦縞模様の布が『ネリ』の手足に絡み付く。

内からの“力”は封じられているが、外からの“力”は通す仕組みの鳥籠なのだ。

「ええいおのれ、離れんか!!」

引きちぎらんばかりに力を籠める『ネリ』だが、鳥籠の柵を折り返して布が少女の動きを絡めとる。

直立を余儀なくされて、銀髪の少女は一分も動けぬ状況に苛立っていた。

さながら癩癩のような鬼の咆哮に、正守達の表情が厳しくなる。

鳥籠の屋根が、今度は3つの輪に形を変えた。1つは大きく、2つは同じ大きさで小さくだ。

文弥が叫ぶ。

「絲!頭を!!」

コク、と目を閉じたまま頷いた絲は、布で『ネリ』の頭まで覆う。額の紅い宝石が危険を察知して禍々しい光を放った。

「ああああああ!!!!!!!!」

頭の周りを大きな白い輪が回り始めると、額の宝石が吸い出されるように輪へ入っていく。液体のように入っていくに従い、それは紅に染まり始めた。

「ガアアアアアアアアア!!!!」

百合香の痛みなのか、ネリの痛みなのか判別がつかない叫び。

己の持つ呪力を全力で注ぎ込んでいる二人も、ネリ自身が強い力を持つだけに抑え込むのが辛そうである。

永遠にも思えたその作業は、ネリの叫びが止まったことで終わりを迎えた。

滞空していた小さな白い輪が少女の両手を体の前で拘束し、もう一つは足を拘束する。

紅に染まった輪が少女の頭から浮かび上がると、ネリの額にもう結晶体は無かった。

正守から安堵の吐息が漏れる。

絲と文弥がお互い達成感に満たされ、力尽きて座り込んだ。

「はあ、はあ…い、一時はどうなることか…」

「（コクコク）」

正守がネリの側まで駆け寄るのを見て、絲と文弥はそれぞれの術を解き、支えを失ったネリは頭領の腕に帰った。

正守の腕の中にいるネリは、呪いの反動が憑依まじなされていた反動が目を覚ます気配が無かった。

物騒な紅い輪はまたもや形を変え、握りこぶし大の球になって地面

に転がっている。

だがそれは二色に分かれ、外側が透明で中心に紅い結晶体を閉じ込めていた。

文弥が興味深そうにそれを見つめる。

「へえ…やっぱり球体の形を取るのか…余程この形を好むのか…？」

「文弥。俺の勘だが、これは触らない方が良い。」

好奇心で手を伸ばしかけた呪いまじな班主任に、夜行の長はやっぱり制した。

薄く身に纏うタイプの結界を発動させると、やや大きい球体に正守がこれでもかと呪符を貼りまくる。

「ふ　　っ。ま、こんなもんかな」

念には念をと言わんばかりの張り方に、若干沈黙が降りるが正守は気にせず懐にしまい、片膝を立てる。

腕に抱いていたネリを左膝に寄り掛からせ、正守は懐から携帯を取り出した。

「　　あ、花島。そっちはどう？」

雷を操る妖獣・雷蔵を従えた花島亜十羅は、良守達と共に4匹の妖と交戦中であつた。

烏森やネリの監視に亜十羅と翡翠を派遣していたのだが、戦力として今回のみ参加してもらったのだ。

だが、それもそろそろ片が付きそうとのこと。

「油断はするなよ。ネリも元に戻ったし、限も保護した。あとはそっちが片付けば」

「俺のことは、良いのかねえ？」

（（（（！？））））

瞬間移動と言うのも生ぬるい、いきなり正守の目と鼻の先に現れた男がいた。

黒いスーツ（実は髪から靴まで外側は全て人皮の一部）に身を包んだ男は、残像にも残らない速さで左手の刀を正守に突き出す。

反射的に絶界を発動させようとした正守だったが、それでは膝に寄り掛かっているネリまで消し飛んでしまう。

携帯は既に放り出していたのだが、油断と一瞬の判断ミスが男の攻撃を許してしまった。

「ぐあっ！」

正守の右肩に、刀身が吸い込まれる様に深々と刺さっている。

あまりにも速い男の動きに、元々疲弊していた文弥と絲も咄嗟に反応できない。

「じいつアもらってくぜ」

男は無造作に自ら刀を折り、そのままネリの腰に左手を回してかっさらう。

まるで重さを感じさせない勢いで、後ろに跳んだ。

刀を折られた衝撃で肩の肉が裂け、正守は痛みで意識が飛びそうになつた。

「アイツを取ってくれてご苦労さん。やくせいせいしたよ」

意識の無いネリを小脇に抱えた男は、脂汗を流す正守に向かってにこやかに笑いかけた。

「俺の名は火黒。死ななかつたらまた会おう、バアーイ」

地面を蹴ると、人間離れした脚力で塀に跳び、すぐに姿が見えなくなる。

現れてから、まだ30秒と経っていない。

一番最初に我に帰ったのは、それなりに場数を踏んでいる翡翠だった。

「ツ頭領!」

「!そ、そうだ。早く救護班にね、連絡を…」

遅れて解凍されたらしい染木が、震える指で救護班に電話をかけ始

める。

正守に駆け寄る翡翠はこの中で唯一の妖混じりだ。それ故か、正守の状態がおかしいことにいち早く気がついた。

(ただの刀傷じゃない!?)

尋常ではない邪気が、正守の右肩から漏れ出している。異能者といえど純粋な人間である正守にとっては、猛毒でしか無い。

そして不気味なくらい、正守はさっきから一言も喋っていない。

「頭領、今救護班を手配しています。しっかりしてください!」

「蜈蚣さんも今呼びました!」

まさか意識が飛んでいるのかと翡翠が正守に呼びかけ、染木は携帯で連絡をとった後、治療に入る。

「……………」

右肩に刀を突き刺したままの正守が、ガクリと地面に手をつく。

今まで何者にも屈したことの無い夜行の頭領が、部下の前にも関わらず荒い息を整えることが出来ない。

正守がどうにか震える左手で懐を探ると、掴み取れずにバサバサツと式神用の紙が落ちた。

その中の1枚が、等身大の白い人形ひとがたとなり、刀を慎重に抜いて傷を止血し始める。

だが、正守の顔は土気色に変わり目は虚ろで、焦点が合っていない。文弥が声を絞り出した。

「……………つだめだ、傷が深すぎて僕だけじゃ応急措置にさえならな
い……………」

呪いまじなを扱う者として、救護の菊水を手伝うくらいなのだが、いかにせん特殊な傷だ。

深い（貫通している）だけではなく、禍々しい邪気と火黒固有の能力が混ざり合って治癒を邪魔している。

夜行の頭領は、フツと薄く笑った。

「すまん…少し落ちる」

ドサツ、と正守が烏森の大地に倒れるまでそうかからなかった。

「気がついたか、限」

「…きく、水さん…？」

右肺を貫かれ、失血死しかけていた限を助けたのは救護の菊水だった。

まるで見た目は小学校低学年なのだが、これでも救護班主任。妖混

じりの限は烏森にいる方が治りが速いので、校庭の片隅で治療を行っていた。

もう内蔵の傷はほとんど塞がり、見た目ほど酷くは無くなっている。

「俺……………ッ、そうだ、ネリが！」

「逸るな。まだ全ては繋がっていない。今動けばまた血を吐くぞ」

身を起こしかけた限を軽い力で押し戻す菊水。難なく押し負けて、限は地面に横たわるしかなかった。

「あの…俺、どのくらい寝て…？」

「……………かれこれ40分位だな」

『起きます』、と間髪入れずに腹筋に力を入れ掛けた限は激痛に顔を歪めた。堪えきれず傷口を押さえて、もんどりうつ。

右肺と胃、肋骨も貫通していたのだから当然だ。妖混じりでなければ即死ものである。

「少なくともあと10分は寝ている。今頭領達が新入りを対処しているところだ」

新入り　　即ち、ネリのことである。

少女の事を聞いた途端、限の胸に不安がよぎった。

頭領がネリの顔をした『偽者』を把握していなかったら、彼女は離

反者として始末されてしまつたろう。

そして、良守達の戦いも気になる。

(寝てられるか…！)

早く戻らなくては、という焦りは烏森に届いたらしい。

引きつる痛みが徐々に薄れていき、ゆっくり10数える間に限の体細胞は修復されていた。

菊水が目を見開く。

「俺、行きます。ありがとうございます……」

「……ああ」

土ぼこりをあげて走り去る限を見送った後、菊水はおもむろに地面に手をついてみた。

神佑地として特級認定されている烏森は、彼にとって興味の対象と成り得る。

「不思議な土地だな…烏森というのは」

フム…と考えに沈んだのを引き戻したのは、染木からの悲鳴の様な電話だった。

(10) 茶南達VS良守達&亞十羅(前書き)

コロコロ場面が変わってわかりづらいかもしれませんね(汗)

春休みに入りましたので、ハイペースでいきたいと思っています。
多分週3で。

以前のように月、木、土になるかな？

こんなに長くお付き合い下さり、ありがとうございます。

(10) 茶南達VS良守達&亜十羅

硫酸の雨を口から吐き出す灰泉は、敵の攻撃中枢である。

時音と良守はまず、ソイツを潰すことにした。

時音が背の高い3重の結界で硫酸から身を守り、良守がエレベーターの如く足場を空高く押し上げる。

敵が目標を定めて攻撃する前に、時音が細い結界で灰泉を串刺しにした。

この戦法は原作通り。

そして原作通りということは 『ネリ』があらかじめ知っていることに他ならない。

この攻撃は既に敵が把握していたのだ。

コウモリのように飛んでいた茶南は、掴んでいた灰泉を白い煙の中へ投げ捨てる。

その迷いの無い動きに、良守達の反応が一瞬遅れた。

それに、煙幕の中に紛れられては正確な位置が分からない為、結界術も使えないのだ。

『さアどうした!?!』

良守達が捉えきれない速さで滑空し、二人を守っている結界を傷つけて崩す。

茶南が二人を相手にしている間に、地上の煙幕の中で灰泉をキャッチした赤亜が結界の杭を引き抜いていた。

『しっかりしろ灰泉!』

『ぐ…………お…………』

結界を潰したり抜いたりして取り除いた後、側に来た怪力の波緑にその場を任せた。

タコのように柔軟で多くの足を持つ赤亜は、その足先から光線を出すことが出来る。

『灰泉が回復したらお前も加われ、いいな!』

そう言い残すと、煙幕の中を泳ぐ様にスイスイ進んでいった。

原作には無かった、4匹の連携。

それは一重ひつえに茶南以外の3匹の知能が低かったせいであり、串刺しにされた灰泉を原作では早々に殺されたせいで成し得なかった。

妖に仲間をフォローするだの、時間稼ぎして戦局を有利に保つといった思考は本来存在しない。

全てネリの知識を横取りした百合香の思惑通りであり、“闇”を統べる力を最大限奮った成果である。

詰まる所今の4匹は、闇の結晶体を持つ『百合香』の力で洗脳されている状態なのだ。

かつて鬼にかしずかれた存在は、今やその能力で妖さえも従えている。

「あいつ飛び回って結界崩すだけで、全然攻撃してこねーぞ!？」

「さっきのが治るまで時間稼ぐつもりね」

良守が茶南を捕まえようと、やたらめったらに結界を生成するが力の無駄遣いに終わっている。

その間に障害物にしなければならない結界を、茶南は翼の先にある爪で切り裂き消していく。

茶南は忠実に少女の助言を活かしていた。

caujun
一所に留まるな。

邪魔な結界は可能な限り、消していけ。

結界で囲まれた場合、絶えず壁を安定させるな。そうすれば滅されることはない。

『あの方の言った通りだな…結界師も所詮ただの人間…』

ニヤリと邪悪な笑みで、嘲笑うかの様に飛び回る茶南。

それに、良守が力チンときた。

「だああああ！もう面倒くせえ、調子にのんな！結^{けっ}ウウウ！！！」

気合いと根性だけで、今までとは比べ物にならない大きさの結界を生成する良守に、茶南は慌てなかった。

すぐ近くの面に体当たりをかまし壁を揺らした後、槍のような爪で破ろうとする。

だが、一瞬にして驚愕の表情になった。

『なに、破れない！？』

「お前らにいつまでも付き合ってられつかあ　　！！！」

三重の背の高い結界を作った時点で、時音にもう力は残されていない。固唾を飲んで彼女は、幼なじみを見守るしかなかった。

初めて本当の焦りを浮かべた茶南が、死に物狂いで爪を奮う。その彼を助けたのは、赤い光線だった。

『お前らしくねーじゃん、そんな焦ってよお！』

『助かった、赤亜』

レーザーの様に結界に穴を開け、そのまま焼き切った赤亜は直ぐ様白煙の中に戻る。

「くっそおお！妖つてこんなに頭まわんのかよー!!」

「確かに…なんでこんなに連携取れてるのあいつら…?」

今までの妖とは違うと認めざるを得ない、鮮やかなチームプレー。
実質今は二対二なのに相手は烏森の力を得ながらで、時音はもう力が限界だ。

その時、だった。

ピシヤアアアン!!と黄色い閃光が茶南を直撃する。

「え、雷!?」

「ちょっと待て、さっきまであんなおかしな雲無かったぞ!?」

モクモクと丸っこくて綿あめの様な積雲が、至るところに出現しそこから雷が落ちてきているようだった。

『何だこれは!!聞いてないぞ!!?』

右翼に雷が的中してバランスを崩した茶南だったが、なんとか持ち直し雷雲から距離を取る。

白煙の中で波緑が叫んだ。

『茶南、上だ!』

『ばっ!?!? 逃げろ、波緑!?!』

「雷蔵！声がした所に落として！！」

『をん！！』

上空から威勢の良い女性の声が降ってきて、すぐに雷が白煙に落ちる。

絶叫は結界師達にとって幸運なことに、波緑のものではなかった。

負傷して動けなかった灰泉のものである。

『灰泉！！』

ぷすぷす…と白煙の中から黒い煙が上がった。ニヤリと、少年が笑う。

「そこか、結！ 滅！」

確かな手応えに笑みを深める良守。

まずは一体。

時音と良守がそこで上空を見上げると、見知った女性が手を振っていた。

「助けにきたわよ う」

色黒の、おまけにグラマーな24歳・妖獣使いの花島亜十羅が、雷蔵と共に参上する。

「あんだ確かネリの…」

「アトラさん!!」

とうつ、と間抜けな掛け声と共に亜十羅が髪をなびかせて雷蔵の背中から降りる。

良守は『え、落ちる!?!』と身構えたが、その心配は杞憂だった。

腰から黒いコウモリのような羽を使って、女性は優雅に空を飛んでみせたのだ。

雷蔵はその間、至るところに置かれた積雲　己の分身から、茶南を雷で狙う。

「あの人妖混じりだったのか…?」

「いや、違う。良く見て。腰に小さい妖が引っ付いてる」

魔耳郎まみみろうという三つ目の妖獣が、彼女の翼として腰にしがみついているのだ。

すっ、と降りてきた彼女が良守の作ってくれた足場に舞い降りる。

「どうもオ、頭領に頼まれて助っ人に来ました」

「え、じゃあ正守さん今来てるんですか!?!」

『そつよう〜』と軽い調子で返す亜十羅は、上空にいる白い熊を指

差した。

「あれは私の可愛い妖獣で、雷蔵っていうの。威力は弱いけど、雷を落とせるわ。」

それに、と腰に引つ付いたまま大人しい魔耳郎の頭を撫でる。

「この子はリーダーみたいに敵の場所が分かるから、姿が見えなくてもどうにかなるんじゃない？」

亜十羅がニカツと笑う。

その背後で雷蔵の雷が地上に炸裂し、木が音を立てて倒れた。白煙が舞い上がり、チラリと波緑の姿が見える。

「そこか、結！」

話の途中でも少年が間髪入れずに結界を繰り出す。何故だか抵抗の素振りを見せなかった波緑は、呆けた表情のまま潰された。

良守達は、知らない。

ほんの一瞬前、ネリから闇の結晶体が取り除かれ、鬼の始祖が封じられたことに。

このタイミングで洗脳が解かれたのは、妖達にとって最悪だった。

茶南がその場で滞空し、赤亜が勝手に白煙から飛び出して良守達に光線を発する。

『作戦通りにやれといたただろう！！灰泉をなぜ波緑に任せた！？』

『何だよ、さつき助けてやったじゃんか！！それに放り投げたのは茶南だろ！！』』

先程までとは別人の様な醜態を晒す2匹に、3人とも目を見張る。

「何だ何だ？いきなり仲間割れか？」

「雷蔵、今よ！！」

空に向かって亜十羅が白熊の名を叫ぶと、黄色い閃光が赤亜に放たれる。

良守達の方しか見ていなかった赤いタコは、避けることも出来ずに呆気なく電撃を浴びた。

連続で数回直撃し、フラフラ状態の赤亜を良守が結界で囲む。

何処からかピリリン、と着信音が鳴った気がしたが、そんなことは後回しだ。

「これで3び」

『させるか！！』』

ザンツと結界を槍の様な爪で切り裂き、茶南は赤亜を足で掴む。

結界師達の後ろにいる女性は、今までの軽い調子から一転丁寧語混じりの口調になった。

「はい、大丈夫です。残り2体まで来ました。」

携帯を取り出すことなく、襟に付けたマイクに返事を返す亜十羅。

茶南はビチビチと力無く身を震わせる赤亜を一瞥した後、何を思ったか勢いよく良守達に投げ捨てた。

「うわ！？何すんだよ！」

『アトラ、まずいゾ。』

魔耳郎が、警告を発する。

反射的に良守が目の前の赤いタコを結界で囲むと、茶南はその下から突如現れた。

仲間を隠れ蓑として、放り投げた赤亜に隠れて接近したのだ。

『終わりだ』

限の体を貫いた銀色の槍が、3人に迫る。だが、結局それが人間3人に届くことはなかった。

スピードで右に出る者はいない妖混じりの少年が、赤亜が入った結界を足場に爪を真下へ振り抜いていたからだ。

一拍の空白の後、ピシッと茶南の体に一本の赤い線が出来上がる。

トンッ、とその肩に降りた限が低い声で言った。

「……借りは返した」

『ばか……な……』

ずる、と滑り落ち始めた妖には目もくれず軽く跳び上がって、赤亜が入った結界に降り立つ。

良守と時音に笑顔が戻った。

「志々尾、お前元気そうじゃねーか！」

「良かった…無事だったのね」

階段の様に良守は結界を作った後、赤亜を滅して真っ二つになった茶南も滅した。

限が結界を軽やかに跳んで、3人と合流する。

亜十羅が電話をかけたっぱなしだったことに気がつき、襟元に喋り始めた。

だが、応答が無く首を傾げる。

「あれ？切れちゃったのかしら」

『おい』とイヤホンをいじったりする彼女に、振り返った時音が近づく。すると、視界の端で何か銀色に光るものが走った気がした。

（あれ……？何だろ）

山の向こうに消えていった銀色の星に時音も首を傾げる。

その時、やっと繋がったのか亜十羅が嬉しそうな顔をした。

「ああ良かった繋がった〜！こっちは終わりましたよ、とう……？
って翡翠？」

しばらく怪訝な顔をした後亜十羅は、懐に入れていた携帯電話を取り出した。翡翠からオープンマイクにするよう指示があったらしい。

「3人とも落ち着いて聞いてくれ。」

翡翠の声は、固い。

「頭領が意識不明の重体。」

ネリは正気に戻ったんだが

火黒と名乗った男に拉致された。

(11) 歪められた事実(前書き)

はい。

これからは月、木、土に更新することになります。

夜の23時を目標に更新する予定です)

こんなに長い話をここまで読んで下さって、ありがとうございます。

(11) 歪められた事実

「んう…ぐえっ……」

お腹と胸が苦しく、ネリは思わず息を詰まらせて咳き込んだ。痛みで涙がにじむ中どころか目をこじ開けると、景色が霞むような速さで上へ流れている。

誰かの左肩に荷物のように担がれているようだ。

「…あ、あれ……？こじは……？」

「目エ覚めたかい？お姫様」

ギクツ、とネリの体が強張る。よりによって一番聞きたくない声が、物凄く近くから聞こえたからだ。

まさかと思いつつ顔を向けようとしたが、体勢的にキツイものがある。

体をばたつかせようにも、手足は自由にならない。

男が少女の腰の上あたりに左手を添え、右手でふくらはぎ近辺を押しさえているからだ。

今の自分の状況に血の気が引いた少女が分かったのか、火黒がくく

くと笑った。

「だア〜い丈夫。俺が殺すつもりなら、君はとっくに死んでるよ」

「え、あの……」

風を切って駆ける火黒に、恐る恐るネリは口を開いた。

「なんで私は火黒さんに運ばれてるんでしょうか…？ってか、苦し
いんで降ろしてえ……おえ」

騒ぐでもなく火黒を攻撃するでもない少女に、男は少し驚いた。
もつとも異能も妖力も封じられて、火黒にかなうなど夢のまた夢に
過ぎないのだが。

「おいおい、俺の背中では吐くんじゃねえぞ？もう少し先で下ろすか
らさ、我慢してよ」

「わかり、ました……うぷ」

氷蛾と契約した際の呪印が刻まれた右手で、ネリが口を押さえる。
頑張って首を反らせると、周りは山ばかりだった。

（姫の体に入った百合香と喋ったのは覚えてるけど……、なんでこ
んな所に…？）

ネリに、体に乗っ取られていた間の記憶は無い。

闇の結晶体の力で、始祖が宿主の意識を押さえつけていたからだ。

黒芒楼の姫の様に勝手に出歩かれたら、すぐ偽者だとばれてしまう。それに、ネリが持っている原作・結界師の知識も手放す訳にはいかなかったのだ。

徐々に男のスピードが落ちていく。そして川原に着いた後、火黒はネリをゆっくり地面に降ろした。

てつきりどすん、と放られると覚悟していたので、紫色の瞳がぱちくりと瞬く。

足が地面に着いた後、今度はお姫様抱っこで大きな岩の上に座らせられ、火黒は正面に立った。

ポカン、とした表情のネリに男は心外そうな顔をする。

「俺だつて人並みの配慮は持つてんだぜえ？まあ、今後も続くか保証出来ねエけどな」

あたりはまだ真っ暗で、川面に反射する星月の光と淡く光る二つの輪が唯一の明かりである。

綺麗だなー、と見とれていたネリは『あ』と気がついた。

「あれ、そういえば何で火黒さんが人皮被つてここに？姫様はどうなつたんですか？」

そしてなぜ手足がこんなことに…とネリが言いかけた所で、火黒がジッと少女を見つめていることに気づく。

『うん？』と首を傾げる少女に、火黒は恐ろしい程静かな声を出し

た。

「俺が人間だった時の名前。なんで君が知ってるの？」

「え？」

あまりに唐突な話に少女の反応が遅れる。少女が逃げられない様に男が岩に両手をつくくと、衝撃でヒビが入った。

それを見て、少女の顔が引きつる。

「答えろよ」

訳が分からず状況も理解していないネリだが、たった一点だけは嫌と言うほど分かった。

早く答えなければ　　殺される。

『秘密』とか、『歴史に影響が』とかは一瞬にしてネリの頭から吹っ飛んだ。

「わ、私は…こっこの世界の人間じゃ無いんです!!」

「……………」

感情が伺いしれない火黒の赤い瞳は、無言で先を促していた。目と鼻の先に迫る戦闘狂の顔は、ネリにとって恐怖以外の何物でもない。

「せつ…世界というのは一つだけじゃなくて、数えきれない程あって、私は偶々たまたまこの世界の歴史を知っていて　…」

「つまり？」

真顔のまま軽く火黒が首を傾げる。『ひいつ』と息を飲んだネリは、何とか最後まで言い切った。

「火黒さんの過去も世界の歴史に刻まれているので私は勝手にそれを知ってるだけなんです！
すいませんでした！！！」

謝らなくてはいけない気がして叫んだネリだったが、誠意はきちんと伝わったようだ。

岩にめり込んだ手をあつさり外すと、火黒は顎に手を当てて考える。

「ふうん？世界、ねえ……？あ、だからアイツが『異界の鬼さん』って呼んだのか。成る程な」

「異界の、鬼？」

ざわ、とネリの肌が無意識に粟立った。ネリにとってそれは一人しか該当しない。

そしてよくよく思い返せば、最後の記憶が“百合香”との会話である。

とてつもなく嫌な、予感がした。

不安で混乱している少女を見て、火黒の頭に『面白い事』が閃く。

(記憶が無いなら…いけるか?)

妖を率いて烏森を攻撃し、友人達を知らぬ間に傷つけたと知ればネリは間違いなく自分を責めるだろう。

おまけに上司に重傷を負わせたと知れば、人間世界に自分の居場所は無くなったと思うだろう。

実際に決定的な一撃を与えたのは火黒だが、そんなのは臥せてしまえる些細な事。

火黒はポケットに手を突っ込み、ニヤリと笑った。

「君の意識が無い間に、異界の鬼 鬼百合とか言ってたっけなあ？が、君の体を使って暴れてたんだよ」

「……え？」

正常な思考が出来ないままのネリに、火黒が畳み掛ける。

「藍緋と氷蛾、妖混じりの小僧殺しかけてさ、君なーんにも覚えて無いワケ？」

「嘘…そ、そんな」

ネリの瞳が恐怖に見開き、わなわなと唇が震えた。体の震えを押さえようにも、手が拘束されているのでそれさえ出来ない。

悪魔が宣告するかの様に歪んだ笑みを浮かべ、火黒は片手を出して少女の腕をとった。

「この腕輪も、足のやつも、君の力を封じるためのもんだ。君の上司はこれを君に無理矢理はめたから、大怪我負ったンだけ？」

君に、半殺しにされたんだ。今頃死んでるかもなア？」

にゅっ、と火黒が手の平から刀を取り出した。

ネリは目を見開き、火黒の手から逃れようと身をよじる。だが、男の手はビクともしなかった。

「ま、自業自得じゃない？君の上司も何とか君を正気に戻そうと躍りになってさア。部下の為に、部下によって死ねるんなら本望でしょ？」

「はっ、離して下さい…ッ！」

ザンツ、と火黒の刀が手足の拘束を斬る。カラン、と高い音を立ててそれらは川原に転がった。

そして、火黒がトドメの一言を言い放つ。

「信じられないならさあ、自分の目で確かめてみなよ。その勇気が、君にあるんなら」

封印が解かれて妖力が発現し、ネリの瞳が妖しく光り始める。

真っ赤な嘘というのはすぐにはれるものだが、火黒は今のところ何一つとして嘘を言っていない。

ただ、誤解を与えるような言い方をしただけ。

最初に事実を伝えたのが火黒であったことは、ネリにとって不運としか言い様が無かった　　…。

火黒と共に黒芒楼の城へ入ったネリは、まず藍緋の研究室へ向かった。火黒は白に用があるとかで、途中で別れる。

逸る気持ちを抑え、ネリは廊下を全速力で駆け抜け、部屋の前に辿り着いた。

そろりそろりと室内に頭だけ突っ込み　　あんどりと口を開ける。

藍緋は自分の机に突っ伏したままぐったりしていた。

入り口がある壁面に向かう様に、彼女の机は置かれている。

藍色のはね気味だった髪は、どこか荒れているように見えた。

「藍緋さん…？」

微かなネリの声に女性は、即座に身を起こし入り口から飛び退いた。白衣の右手から白い煙が立ち上ぼり、みるみる臺に変化し始める。

ネリを見る女性の瞳に、今までの暖かみは皆無であった。

「……………！」

その様子を見て、ネリは自分が彼女にどれ程酷いことをしたか悟った。ポロリと、宝石のような涙が少女の頬を伝う。

藍緋はハツと気がつく、慌てて警戒を解いてネリに駆け寄った。

「本物なんだな！？すまない、私はてっきりまだ…」

「あい、ひさん……」

ガシツとネリが白衣にしがみついた。体温が低い藍緋にとって、人間の身体はとても暖かい。

そんな太陽のような少女は、涙で息を詰まらせながら声を絞り出した。

「ごめんなさい……本当に、ごめんなさい……」

「構わん。私はちゃんと生きてるだろう？」

安心させるようにポンポン、と背中を叩いてやると藍緋の心にさざ波が立った。

今まで自覚したことの無かった、他人を思いやる気持ち。

それは半世紀以上前出会った男に抱いたのと、酷く似ているように感じた。

ぐすぐすと鼻をすするネリの肩に手を置き、奥の部屋に少女を促す。

「氷蛾に会ってやってくれ。さつき意識が戻ったところなんだ」

タイル張りの白い部屋に無数に並んだ、太くて大きなガラスの筒。その中には、人間の上半身を象った皮が静かに入っていた。

人皮の試作品だろうそれらに紛れるようにして、氷蛾が入ったソレはあった。

透明な液体の中に浮かび、純白の翼で己を包み込む　　小さな蛾。

藍緋によれば、人型を取れる程妖力は回復していないとのこと。

弱々しいその姿に、ネリはまたもや絶句するしかなかった。

人の気配を感じてか、小さな虫がピクリと触覚を震わせる。

「起きろ、氷蛾。　　お前の主が帰ったぞ」

スツと金色の瞳を開いた氷蛾は一瞬固まった後、バタバタと羽を動かした。繋がったチューブなどが、液体の中で大きく揺れる。

『……………あるじ！！あるじ！！』

体を退化させることにより、妖力の消費を抑えた結果氷蛾は一命を取り留めた。

欠片から再生させる場合、能力は引き継がれるものの記憶は戻らない。

その点、体が退化しただけの氷蛾は人型こそ取れないものの、記憶もそのままで知能も高いままだ。

そっと、ネリがガラスの面に手を触れる。

「ごめんね…私がやったんだもんね…？本当ごめん…。」

「ネリ。妖力を譲渡する方法で治せないのか？」

氷蛾を治す方法として、藍緋はそれを頼みの綱にしていた。銀髪の少女が首を振る。

「ダメなんです。さっきからやろうとしてるんですけど…。妖力が体の外に出ていかないんです」

泣きそうな顔でネリが口を歪める。『ん？』と眉を寄せた藍緋が少女に近づいた。

ガラスの面に置かれた白い手を取り、まじまじと見つめる。

外面上別に変わった所は無いのだが、研究者の勘というか『人の皮膚』を専門にしてきた女性は、ある違和感に気付いた。

「ネリ。ちょっと試してみたいことがあるんだが、良いか？」

困惑するネリに、藍緋は真剣な表情で口を開く。

それで得る事実、ネリをさらなる絶望へ叩き落とすとも知らず、少女はおずおずと了承してしまうのだった。

(12) まっさんの扱い酷いッスよね…ごめんなさい…

メチャクチャにされた学校を黙々と治す良守と時音は、時子が心配になるくらい一言も喋らなかつた。

確かに墨村の者と口をきいて欲しくは無いのだが、ここまで皆無だと逆に調子が狂う。

(まさか、こんな事態になるなんて…明日からでも遅くはありませんね)

時音の話によれば、“火黒”というのはネリが黒芒楼で一番危険視していた人物だという。

力も封じられた状態で連れ去られたのだ、命の危険がある。

時子が物凄い数の式神を空に放つたが、見つかるかどうか際どいものがあつた。

「良守…。後はあたしやるからアンタ家に帰りなよ。」

見ていられなくて時音が口を開くと、良守は背を向けたまま答えた。

「……俺が行って、兄貴が治るわけじゃねーし…。ちゃんと仕事してからにする」

表情の暗い良守はしかめっ面で、式神達に指示を出しつつ自らも手を動かす。

復旧作業に、限の姿は無かった。

翡翠の電話があった瞬間、弾丸の様に飛び出していったのだ。無理も無いことだと時音は思う。

結局日の出の2時間前位に作業は終わり、良守は取るものも取りあえず夢中で駆け出した。

重体といっても救護班が付きつきりで手当してるから、心配いらない。

頭領の懐にあった短剣が邪気を中和してたみたいだね。

説明してくれた灰色の髪の男性は、以前良守も会ったことのある翡翠京一だった。

心配させまいと彼は繕っていたが、付きつきりで治療している状況は『大丈夫』と言わない。

そのくらい良守にも分かったが、何も出来ないのも事実である。

夜行の要である正守が人事不省の為、副長の刃鳥は正守の代わりに裏会と夜行を飛び回っているらしい。

正守が眠る部屋の入り口には怪しげな呪いをのせたしめ縄が張られ、邪気が外に漏れないようにしてある。

当然、面会謝絶状態だった。

正守の命を繋ぎ止めた黄金の短剣は、含まれていた妖気を独りでに使い果たした後、ただの短剣に戻った。

その短剣は、ネリが正守に渡したものだという。

ネリちゃんがいってくれたら…側にいるだけでも、きっと頭領楽になると思うんだけど……

連続で呪い^{まじな}を正守の周りに施した文弥は、治療部屋の隣でぐてつと力尽きていた。

人間にとって邪気は猛毒。かつて時音も妖に右手を切り裂かれ、そこから邪気に当てられた。

時音が幼かったこともあったのだが、彼女は1週間も高熱を出したのだ。

あの時と違うのは、妖が故意に邪気をぶちこんだところ。それに人間達が詳細を知るすべは無いが、火黒の刀には彼固有の能力がある。

自分の“思い”を刀に乗せることでその威力を増幅させ、斬った対象に甚大な被害をもたらすのだ。

“殺す”つもりで刀を振るえば、対象の自然治癒力を阻害し刀傷が軽くても死に至る。原作の限は、それで死んだ。

菊水も双子の妹・白菊と共に全力で治療を行っているが、正守の意識は一向に回復しない。

「らしくねえよ……！バカ兄貴……！」

自室で良守がボス、と枕を殴る。

靈感の無い修史が息子の看病をしようとしたが、息子の部下達に丁重に断られた。

予断を許さぬ状況の為、治療に専念したいのが正直な所である。それに、しょっちゅう妖の相手をして、ある程度邪気の耐性がある正守でさえ昏睡状態なのだ。

修史まで倒れられたら目も当てられない。

いつ起きても食べれるようにと、父親は目が覚めぬ息子の為に食事の用意をするしか出来なかった。

「あんな父さん…初めてだな……」

エプロン姿で台所に立つ父親が祖父に料理を託す姿は、良守にも感じ入るものがあった。

それが手をつけられないまま返されると分かっているだけに、なおさら悲しい。

良守が考えに耽っているとコツン、と唐突に部屋の窓ガラスに小石が当たった。

『え？』と少年が顔を上げて近寄ると、屋根の上で背を向けて座っ

ている限がいた。

泥だらけであちこちに切傷があり、おまけに葉っぱまで頭にくっ付けている。

「志々尾、お前どこ行ってたんだよ！」

「……ネリの匂いを追った先に、これが落ちていた。」

低い声で限が真つ二つに割れた、何の変てつもない輪を取り出す。取り外した時に切ってしまったのだろうか、少しだけ血が着いていた。

サッと、良守の顔が青ざめる。

「血が無かったら多分見つけれなかっただろうな。……コレを呪^{まじな}い班の人に渡してくれないか」

「何なんだよ……それ」

「俺にも分からん」

後ろに目があるかの如くぽいぽいっと輪を部屋に投げ込む限に、良守は『はあ!?!』と眉を寄せた。

「自分で持ってけば良いだろ、自分で！」

「……お前の家が泥だらけになるぞ」

「洗ってから来りゃー良いだろ!?!」

「空を見てみる。そんな時間あるか」

確かにいつの間にか空は白み始め、太陽の気配が近づいていた。秋も深まり、冬が近くなってきた空である。

少年達の『表』の生活が始まるうとしていた。

「屋根汚したな。すまん」

最後まで顔を見せなかった限が、声をかける暇もなく去っていく。その忍者のような夜行の戦闘服は、ネリを思い起こさせた。

ネリが洗脳された上に拐われて、限が平気なはずがないのだ。

泥が乾く前に雑巾で拭こう、と良守は窓を閉めて一階に降りていく。

いい加減疲れてフラフラになりながらも（途中階段を踏み外したが）、良守は限の言う通りにした。

「すみません。志々尾からコレ預かって来たんですけど。」

半円状の白い棒となってしまうた輪を染木に見せると、彼はガバツと起き上がった。翡翠も真剣な表情で、血のついたソレを凝視する。

「これをどこで!？」

「志々尾が見つけたんで俺は知らねーけど……ネリの血の匂いの先に、これがあったらしいです」

良守からそれらを受け取った染木は、『ああ……』とこの世の終わりの様な声を出した。

「これを追跡する呪いまじなを作ろうとしたのに……!!」

全て無駄になった…と文弥が畳に置かれた机で突っ伏す。翡翠は限の勝手な行動に苦い顔をしたが、詳しくは本人に聞くことにしたよ
うだ。

「とにかく、学校が始まるまで君は少し休んだ方がよい。一睡もしてないんだろ？」

「ええ…まあ」

チラリと兄がいる部屋に目をやる良守に、翡翠は強張っていた顔を緩めた。

正守は兄弟仲が良くないようなことを部下に言っていたが、こうして見ると良く似た顔立ちの弟である。

普通の、兄を心配する弟の顔だ。

そんなことは露ほども知らない良守は、欠伸をしながらも部屋を後にするのだった。

黒芒楼にて。

「ネリ。変化してみてくださいないか？」

「え？あ、はい」

“試す”と言われて薬でも投与されるのかと思っていたネリは、早々に肩の力を抜き目を閉じた。

変化をしようとしたネリだが、やっている内に違和感に気づく。一呼吸の間に終わるはずなのに、それが終わらないのだ。

重心が重くなり、耐えきれず両手を床につく。

顔がむず痒く、服がビリビリと破ける音がした。

さすがに変だ、とネリが目を開けると　銀色が視界に飛び込んでくる。

手をついているはずなのに、そこにあっただのは輝く銀毛に覆われた前足。指を動かそうとすれば手の平ごと動いてしまう。

『なんで　…？』

「やはりな」

藍緋が組んでいた腕を解き、視線が低くなってしまった少女を見た。言うより見た方が早いのだが、研究室にそんな大きな鏡は無い。

何を思ったかネリが黙ったまま、服飾室Aと札がかかった異空間を呼び出す。

いつも指でなぞっていた為、前足で手招きするような仕草になった。

大きな鏡を意識の糸で繋ぎ、引き寄せる。

『ああ……………』

鏡に映ったのは、今までの“変化”が些細に見えるほど変わり果てた、ネリの姿だった。

黒が混じっていた箇所は無くなり、全身余すところなく月の様な銀色。

耳はピンと立ち、まるで斑尾の様な山犬を思わせるが、それにしても胴体がほっそりくびれている。

九尾の狐、としか言い様がない。

人間だった頃の面影はまるで無く、紫水晶の瞳だけが少女の特徴を静かに主張していた。

自分の姿を見て絶望するかと思いきや、ネリは感極まった様な声をあげた。

『キュウビモンだあ……………』

所々違うが、ネリが変化した姿は確かに成熟期形態のキュウビモンに似通っていた。

藍緋には勿論そんな事情は知らないが、少女が正気を失わなかったので良しとする。

「私の推測だが……ネリはまるで、妖そのもののような気がする。」
そつと藍緋が銀狐の頭を撫でると、ネリが気持ち良さそうに目を細める。触れてみて初めて、藍緋はネリの状態を把握することが出来た。

ネリの妖力は、ごく近くに寄るまで外に流れない。膨大な妖力が今までと違って、安定しているようだ。

外に流れるといってもそれほど多くは無く、今までが蛇口全開だとしたら現在はチヨロチヨロ程度だった。

それを少女に伝えると、ネリは『それなら』と奥の研究室に鼻先を向ける。

『今の私ならあの子を治せますよね?』

「それはそうだが……さして驚かないんだな、その姿に。前とは随分違う変化だろう?」

藍緋の疑問ももつともである。ここまではすんなり適應するネリがおかしいのだ。

尻尾を寂しげに揺らしたネリは、近くなった床を見つめながら言った。

『私……もう分かったんです。自分が何なのか。』

紫の瞳を伏せ、少女は悲しげに口を開く。

『私、姫様の血縁ってことになってるんです。』

「……はっ?!」

とぼとぼと研究室に入っていくネリを慌てて藍緋が追う。

世界を渡るネリが、なぜその地での“任務”を見つけることができるか。

ネリの今の状態を説明するには、そこから説明しなくてはならない。

液体に浮かぶ小さな虫を手元に空間転移させたネリは、その豊かな銀毛で抱え込む。

そして、ゆっくり話し始めるのだった。

(12) まっさんの扱い酷いッスよね…ごめんなさい… (後書き)

正守さんの扱い酷かった〜m (|) m

正守さんファンの方ごめんなさい (|) (|)

(13) 結界師の世界に組み込まれたということとは、もう元の世界に戻れないと

世界がネリを欲する理由は、彼女自身ずっと分からなかった。

親も無く親類もない自分は、なぜこんな“仕事”が与えられるのだらうと、誰にもきけない質問はいつしかネリの中で埋もれていく。

別に良い。

どうでも良い。

普通の人が一生涯をかけても出来ないことが自分は出来る。それで良いじゃないか。

5歳でデジタルワールドへ。

7歳で異世界へ。

それから7年間 短くて数日、長くて2ヶ月程度の世界渡りを、小旅行気分で楽しんだ。

おとぎ話の様に魔術師に召喚されたり、世界に着いた瞬間厄介事に巻き込まれたり。

世界が抱える“悩み”は、ネリが何をしなくても向こうからぶつかって来るものだった。

だがネリが世界を渡る度に、狭間で何かを集めている気がしていた。

回を重ねる毎にその不快感は蓄積していき、結界師の世界を訪れた時にそれは一番強くなった。

『その不快感っていうのは……闇の結晶体だったんです』

尻尾で氷蛾を撫でながら、銀狐は語る。

結界師の世界がネリに求めたもの。

それは“百合香を完全に抹殺すること”だった。

いつかネリの中で完全に意識を取り戻すだろう鬼を、どの“世界”が受け入れて始末するのか。

原作・結界師の世界ではそれを対処出来る環境があった。

そして　その方法は身の毛もよだつ、恐ろしいもの。

『今の私が、烏森の地で結界師と出会ったら……どうなると思います？』

すうすう、と人型をとれるまで回復し、寝息をたてる氷蛾を少女は優しく暖めてやる。

3歳児ほどの男の子になったので、もう命の危険は無くなったようだ。

小さな手が豊かな銀毛にしがみつき、狐はふさふさの尻尾で背中をさすってやる。

それは話にそぐわない、和やかな光景だった。

藍緋はネリの言う『世界』が、『創造主の意思』のようなものと解釈する。

「侵入者にまずは…警戒するだろう。だが、完全な妖でもない者を問答無用で滅するものなのか？」

慎重に口を開く藍緋は、まだ分かっていないようだった。

ネリは藍緋と視線を合わせぬまま、遠くを見つめた。

『今回の様に、私の意思が無いまま百合香が暴れまわったら？結界師や異能者達には、どう映りますかね？』

「！？まさか……」

穏やかな笑みのまま、ネリは淀み無く口を開いた。

あまりに酷い、世界の意味を。

『 ……結界師達を使って、私もろとも鬼を殺そうとしたんですよ。この“世界”は。』

「……………」

白衣のポケットの中で、女性の拳に力が入る。人皮サンプルが入ったガラスの筒に寄りかかり、藍緋はやつとのこと言葉を発した。

「そんなことの、為に……？」

『実際には、百合香の意識は偶然黒芒楼まで弾き飛ばされ、命で死にかけていた姫様にとり憑いたんでしょね。』 寿

どうして被害者であるネリに分かるのか、といえば彼女の体から完全に鬼が消えたからだ。

姫の体に入っていた百合香と再会した時、ネリは『世界』が自分に何を望んだのか悟った。

そして、体の中にあつた不純物が取り除かれたお陰で、ネリは世界の願いを正確に理解することが出来る。

理屈ではなく、心にすんと事実だけ落っこちて来るのだ。

ズラリと並んだ牙が覗く程、ネリは壮絶な笑みを作った。

『だから私。反抗してやることに決めました。』

天を向いて、銀色の狐が目に見えぬ『世界の意思』に宣戦布告する。その横顔には、今まで隠れていた狂気が見え隠れしていて。

『死ぬ善人を生かし、生きる悪人を殺す。私が正しい世界を創る。今までもそうしたように、皆皆みーんな救ってやる。』

……世界がたとえ殺そうとしても、全力で抗ってやる。皆が幸せに、皆が当たり前前の人生を送れるなら私は歴史だろうと運命だろうと“拒絶”してねじ曲げてやる……！』

紫水晶の光が妖しく光り、常人が遭遇したらまず間違はなく気絶するであろう獣の顔で、少女は嗤う。

それなのに、唱うは世界平和。
願うは仲間の幸せ。

だが相対する藍緋は、ネリの歪んだ考えに戦慄した。

善人、悪人の判断がネリの裁断如何いかんでどちらにも傾くとは、なんと傲慢な考えか。

（神にでもなるつもりなのかこの娘は……！？）

そんな女性の動揺を見抜いてか、ネリがぐるんと鼻先を藍緋に向けた。

一対の紫水晶が女性を射抜く。

『藍緋さん。あなたも幸せになる権利がある。自分の人生を自分の手で作って、生きたいように生きてください。それが、貴女を助けた理由です』

「……！」

知能が高い藍緋に、ネリの言わんとすることが分からないはずがない。

自分の運命が既に“曲げられて”いたのだと、女性は悟った。

寿命が伸びて嬉しいかというと、藍緋には良く分からない。正直、何かがおかしい気がする。

ただ、たとえネリが狂っていようと、藍緋の枷を外してくれたことは事実で。

「ネリ……」

白の蟲から解放し城の外に出してくれたことには、揺るぎない感謝の念しかなくて。

「……ありがとう」

藍緋は微笑みを浮かべながら、お礼を言うことが出来たのだった。

その時、寝ぼけた氷蛾が『くあつ』と欠伸を漏らして藍緋とネリは顔を見合わせて笑った。

火黒の言う通り正守の様子を見たいと思ったネリは、取りあえず人型に戻ることにした。

藍緋によれば、白衣からサンダルにいたるまで全てが彼女の“体”なのだという。

「元の姿に戻る度に服をダメにするわけにはいかんからな。慣れればこんなことも出来るぞ」

藍緋の白衣姿が、一瞬にして和服姿になる。それは純白の白装束だった。

目を輝かせて尻尾を振るネリに、得意気に胸を張る藍緋。早速ネリは人型になるために、氷蛾をそつと降ろし彼の異空間部屋に寝かせ

た。

何となく目を閉じて、烏森学園中等部の制服をイメージする。もう通うことも無いだろう人間の学校は、ほんの少ししか通っていないのに懐かしかった。

「上手くいったな」

「…あ、ホントだ」

目を開けて立ち上がると、藍緋と同じ位の目の高さになる。和服姿からまた白衣に戻った藍緋は、ネリがどこか緊張した面持ちでいるのを見て首を傾げた。

「烏森に戻るのだろうか？なぜそんなに緊張している？」

「……………戻るつもりはありません」

ネリは銀色の巻き髪を揺らしてうつむく。少女の言葉を藍緋が理解するのに、数秒かかった。

「戻らずに…どこへ行くつもりだ」

「皆の顔を遠くから見たら…これからは離れた所で皆を助けます。妖の姿ならきつと分からないだろうし」

つまりもう彼らとは話すこともせず、黙って消えるつもりなのだ。この少女は。

なぜ、と藍緋が詰め寄るとネリは寂しそうに笑った。

「頭領を　　正守さんを殺しかけたんです。もう夜行にはいられない……ッ」

「…なら、ここにいればいい。」

藍緋の言葉に、ネリはハツと顔をあげた。

藍色の瞳が真っ直ぐにネリを見た後、ニヤツと意味深に笑みを作る。

「大体、正守はそう簡単に死ぬ男ではない。初対面の私を縛り上げた男だぞ」

「え　　いつ会ったんですか!？」

「お前に言われた通り鏡を開けたら、網にかかってぐるぐる巻きにされた。」

日中はさして力が使えんと知っているはずなのにな。凄い念の入れようだった」

『半分以上死を覚悟した』と笑う藍緋に、ネリはひきつった笑みを浮かべる。

(そつだ…百合香のこともきかないと)

コンパクトを取り出し、白い指を押しつける。見送る藍緋は、何も言わずに少女が鏡に吸い込まれていくのを見守るのだった。

「もう夕焼けか…早いもんだな」

腕を組みながら独りごちる翡翠は、菊水の言葉を思い出していた。

今は、文弥と菊水と白菊3人がかりで治療を行っている。

今夜が峠だ。ネリが残した品も、もう妖気が僅かしかない。

そう静かに報告した菊水の拳は、微かに震えていた。

自分が不甲斐ないのだろう。救護班主任であり、今まで数多の夜行あまた構成員を治療してきた彼を、正守は高く評価してきた。

任務に行く先々で、夜行の頭領は菊水と白菊に絶大な信頼を寄せてきた。

治癒の力を注ぐとすると、渦巻く邪気が反発して火花が散る。刀傷の治りも著しく遅い。このままでは傷口が腐ってしまう。

今でも傷が放置状態な為に血は流れ膿を持ち、さらには発熱している状況だという。消毒の類いや薬の投与も突き詰めれば、自然“治癒”を促すのが役目である。

“治癒”事態を邪気が阻害しているので、ネリの僅かな妖力で中和している内に治すしかない。

今夜が勝負。

時音が持っていたペンダント、学校の目印になっていた短剣、限に贈られた漆塗りの日本刀。全てが正守の部屋に集められていた。

時子は单身、黒芒楼を調べに行つたきり連絡がない。夜行の方でも

黒芒楼がある異界に目星がついているものの、入ること自体容易ではなかった。

土地神が健在となった今では尚更難しい。

墨村家の家族には、陽が暮れる前に告げなくてはいけないだろう。

最悪の場合は、覚悟をと。

「……俺の方が覚悟出来てねえよ……!!……戻ってください、頭領……!」

堅い表情で微動だにしない翡翠は、奥歯が碎けそうなほど歯を喰いしぼるしか出来なかった。

(14) 誤解が生み出す悲劇

いきなり現れる勇気の無かったネリは、まず鏡渡りをすることにした。

誰にも見えない、誰にも関知されないネリだけの世界。

左右対称の世界には誰もいないが、反射物を通して現実世界をうっすら見ることが出来るし聞くことが出来る。

上手い具合に正守がいる部屋に目印があるようで、しかもそのすぐ側に水が張られた桶があった。

そこから現実世界を覗くと、部屋に誰もいない。

拒絶の箱に入ったまま現実世界に出ると、ネリは正守の枕元に立った。

そして、言葉を失う。

「とっ、りよ……?」

呼吸は早く正守の額からは、玉のような汗が吹き出している。右肩を覆う様に包帯が巻かれているが、既に血が滲んでいる。

布団の周りにはミミズがのたうち回っているかのような太い円が描か

れ、その上に見覚えのある品々が置かれていた。

正守の頭上に漆塗りの刀。

向かって右にロケット。

左に、学校に置いてあるはずの短剣があった。

今頃死んでるかもなア？

火黒の言葉がネリの頭の中で、ぐわんぐわんと容赦無く反響する。

その時、隣の部屋からバンツと机を叩く音がした。

ふざけんな！！兄貴が死ぬわけねーだろ！！

落ち着け良守。まだ話は終わっとらん。

声が聞き取りにくかったので、意を決して拒絶の箱を解除する。

部屋を隔てる襖ふすまに、ネリは頭を引っ付けて耳をそばだてた。

切り傷は全て治ったのだが、右肩に受けた傷は能力で治癒を
阻害されている。

細胞の繋がりを断つ能力のようだな、邪気と相まって……思うよう
に治療が進まん。

ネリが聞いたことの無い声だったのだが、治療といわれれば想像ぐ
らいつく。

(双子の…お兄さんか…)

“組織の繋がりを断つ能力”は、まさしくネリの異能のマイナスベクトルの結果である。

邪気…と言われて正守を振り返っても、変化していないネリには何も分からなかった。

再びネリが聞き耳をたてると、今度は修史の声がする。

静江さんから何か受け取っていたようですが、あれは何だったんですか。

原作では気さくで明るかった良守の父も、今は必死で激情を押さえつけているようだった。

謝って済む問題ではないと分かっているながらも、ネリは土下座して叫びたかった。

自分の意思では無かったとはいえ、ネリの異能で正守に致命傷を負わせた事実は変わらないのだから。

翡翠や染木の前でたった一言謝れば、ネリの誤解は直ぐに晴れただろう。

『頭領にこんな酷い怪我を負わせて、すみませんでした』と。

そうすれば即座に否定して、『それは君を拐った火黒がやった』と言ってくれただろうに。

修史の質問に、翡翠は重い声で答えた。

ネリの妖力が残った品に、邪気を中和する働きがあると分かったんです。

(……………！)

息を飲んだネリは、一步襖から下がった。心臓が一際大きくドクン、と波打つ。

(私の、妖力…？て、ことは　　！？)

助けられる、かもしれない。
変化して正守に引っ付けば、彼に巢食う邪気は無くなるのかもしれない。

(でも……………今さら、傷つけた奴が戻ってきて癒して……………)

叩き出されるかもしれない。

銀毛に覆われた自分を見て、恐れおののくかもしれない。

かつてネリの世界で迫害されたように、『化け物』と呼ばれるかもしれない。

“可能性”の恐怖に手が震えた自分自身を、ネリは口汚く罵った。
小さな声で。

「だから、何だよ。化け物？　事実でしょうが……！」

当人の家族を前にしてその事実を述べるのは、言い表せない程の苦痛を翡葉に与えた。

まだ全貌を知らなかった修史の質問に答え、ネリの妖力が妖や妖混じりを癒す事を明かす。

彼女の治療を何度も受けたことがある限は、唐突に顔をあげた。そしてゆっくりと、正守がいる部屋に目を向ける。

説明をしていた翡葉も唐突に口を閉じたので、靈感の無い修史は眉を寄せた。

「どうしたんですか、皆さん」

しめ縄に乗せた呪いまじなのお陰で、部屋の外に邪気が漏れることはない。だが元々、妖気を遮断するものではない。

修史以外の全員が、一瞬にして臨戦体勢になった。

「修史さん、少し下がっていてくれんか。正守の部屋に、何かいる」

『息子の部屋に』と聞いて真っ青になった修史だったが、彼に戦う力は無い。義父の言う通り反対側まで後退し、繁守はその上から結界を張った。

悲しみに支配されていた全員は、得体の知れない妖気が“真の姿”であるネリのものだと気がつかない。

闇の結晶体という不純物が無くなったネリが、妖により近い妖気を纏うようになったからだ。

「1、2、3で開けるぞ。1、2……」

『3!』で良守と限が思いっきり襖をひいた。敷居から外れそうな勢いでバンツと、音だけが二部屋に響き渡る。

誰も、何も言わない。

正守の掛け布団は取り払われていた。彼の左側に寄り添う銀色の光が、全員の目に飛び込んでくる。

山犬にしては小さく普通の狐にしては大きい銀狐が、九尾を揺らし、正守を見つめていた。

今にも飛びかかりそうな状態で固まる面々に、銀狐はつと悲しそうに顔を向ける。

紫色の瞳は何か諦めた様に人間を順に眺め、最後に限を見つめた後、正守の胸にそつと頭を乗せる。

『…ごめんなさい』

狐が口を開いた訳ではない。どこから声が聞こえてくるのか分からないが、少女の声は全員の耳に届いた。

その言葉でハツと限が目を見開く。

「ネリ、だろ…お前。」

「はあっ!？」

良守が目を白黒させて銀色の狐と、志々尾を交互に見る。

拐われたはずの少女が狐になって帰ってきたという展開に、着いていけてなかった。

ネリはスツと身を起こして体ごと反転し、人間達と正面から向き合う。そして一言。

『…………治療を』

「…………!」

救護班と呪い班まじなが、弾かれた様に動き出した。3人共ぶっ続けの治療で既に疲労困憊だが、そんなことを気にする当人達ではない。

ネリが沈黙を守ったまま側に横たわり、3人がかりで治療が始める。

翡翠は何度も口を開こうとしたのだが、ネリの変わり果てた横顔を見て口をつぐんだ。圧倒的な存在感を放つ銀狐が統合型の“完全変化”でないことは、翡翠しか知らない。

あの場で、鬼の告白を聞いていたのは翡翠と染木だけだ。そして染木には『妖の血を引く者』と、『妖混じり』の妖気の区別はつかないだろう。

(血を引いているのと…妖混じりは違う…！)

あり得ない、異種族間の生殖は過去に例が無い。
人と、妖の間に子が成されたということになってしまう。

だが、心のどこかで翡翠は納得していた。

変化して一度も暴走しないというのは、統合型ではあり得ない。並大抵の精神力で抑え込めるものではないのだ。
限が良い例である。

今のネリは、人間ベースの妖混じりでは無い。

妖ベースの、人間なのだ。

そこまで考えが至ると、不意にネリが翡翠の方を見た。

紫水晶の瞳が、暗緑色の瞳を覗き込んだ後、口の端をつり上げる。
赤ん坊の頭も噛み砕けそうな牙が、ズラリと露になった。

『正解』

「……………」

心を読まれたことに動揺し、翡翠の呼吸が止まる。だが幸いにも、正守の様子をずっと見守っていた他の人間には気づかれなかった。

ただ一人、限を除いて。

ネリが寄り添って邪気を中和させると、治療は驚くほどはかどった。菊水の見立てでは、数日あれば意識が戻るだろうとのこと。

「ありがとうネリ。お陰で頭領も救われた。よく戻ってきたな」

『……………』

代表で翡葉が口を開くと、ホツとして息を吐いた面々がネリに注目する。

律儀に伏せたままのネリは、尻尾の先で正守の額に乗った手ぬぐいを替えた。

『赤い結晶は、どこに』

相変わらず抑揚の無い声で、ネリが言葉を発する。翡葉が部屋の隅に置かれた黒い箱に目をやると、狐はつられて視線を向けた。

呪符がベタベタと張られた箱に、ネリは尻尾を揺らす。

『ああ、それですか。』

牙を剥き出しにして笑うネリに、良守は何か違和感を覚えた。以前から感じていた紙一重で危ない様な、魔性の様な何かを。

ネリはそれだけを見つめて、呟いた。

『これで、安心できる』

何の前触れもなく、黒い箱の上に漆黒の裂け目が生まれる。そして箱は糸で絡め取られ、裂け目の中に消えていった。

ほんの一瞬の間の出来事である。

あれだけネリから引き剥がすのに苦労した代物を、少女は自分から回収してしまった。文弥が訳が分からず戸惑い、翡翠は剣呑な目付きになる。

「何を考えている。あれのせいでお前は」

『夜行の皆さん。墨村家の方々』

皆まで言わず、銀狐はスツと立った。

4本の足で入り口まで歩き、そこで振り返って行儀良く前足を揃え座る。

白い煙をあげて中等部の制服を着た人型へ戻ると、皆一様に驚いた。正座したままネリは深々と頭を下げる。

「この度は皆様に多大なご迷惑をおかけしました。お詫びしても、しきれません。」

沢山の人を傷つけ烏森を脅かし、私は頭領と限を殺すところでした。見ての通り、私は人間じゃありません。この体には妖の血が流れています。

人外は人外らしく、これからは人がいないところで暮らすことにします。」

畳に手をついたまま、ネリは自分の手から無理矢理視線を外して一人一人の顔を見た。

誰もが目を見開き、ネリを驚きの表情で見ている。そこに“恐れ”

が無くて、ネリは心の底から嬉しかった。

こんなに理解ある人間と縁が“繋がって”いたと思うと、自分の人生も捨てたもんじゃないとさえ思えてくる。立ち上がって、またネリは一礼した。

「今まで、ありがとうございます。そして さようなら」

ウン、と少女の背後に空間転移の門が現れる。そこで翡翠はハッとした。

何かがおかしい。

ネリと自分達の間にか、おかしなことが起こっている気がする。
踵きびすを返すネリに、先に動いたのは限だった。

「ネリ、違う！行くな、話を聞け！！」

「限……」

門の縁に手をかけたまま、緑色のセーラー服が半分だけ振り返る。

彼女は、壊れそうな笑みを浮かべていた。

「……………お姉さんのこと、いつか赦してあげてね。」

「!?!?」

思考が凍りついた少年を残し、自らを“人外”と言った少女は深い暗闇の中へ消えていく。

限が伸ばした手は、あと少しの所で届かず空を切った。
無情にも漆黒の裂け目は口を閉じ、嫌な静寂だけが残る。

限は、掴み損ねた手を握りしめ床を殴った。

「　　違う、違う！！俺はお前にやられてなんかいない！！やられ
てなんか……………！！！」

少年の叫びが、少女に届くことは無かった。

(15) 黒芒楼と裏会の反応は？

「んで、これからどうすんだよ。烏森はもういいわけ？」

中央にそびえ立つ大きな城。それに寄り添うように位置する中華風の東屋で、黒芒楼の幹部達が会議を開いていた。

かったるそうに頬杖をつく紫遠は、統括役の白しろに目を向ける。

姫の延命がそもそもの目的で、烏森を狙っていたのだ。組織としての目標が無くなったのは、事実である。

白が口を開く前にダンツと机を叩き、立ち上がった男がいた。

名を、牙銀がぎんという。

「関係ねえ。総攻撃かけて一気に攻め落とそうぜ。」

胴を身につけて吼える男は、見るからに闘いを好む妖だった。

人型をとってはいるものの本性は暴れ馬、喧嘩屋。その上闘いしか目に入らない奴である。

毎回おなじみの男の発言に、法衣をまとった小柄な男が眼鏡を指であげる。

一見僧侶な妖は、ヤレヤレと首を振った。

「出たよ、筋肉バカ的意見。」

「なんだと!?!」

牙銀が噛み付くと眼鏡の男

江朱いっしゅがハア…とため息をつく。

「何でも戦えば良いってもんじゃないだろ。時間の制約が無くなっただから、もっと慎重に事を運ぶべきだ」

幹部の中で一番の古株である江朱は、城の状態を把握する管理部である。

事務所に一日中もっていてもおかしくなさそうな外見だった。

白が彼の意見に賛同する。

「そうだな…。妖力は今のところ心配無い。だが、問題が先送りになっただけで、解決には至っていない。」

一応ネリが狐の姿で姫に寄り添い、緩やかに妖力を与えながら共に城を歩き回っているという。鬼百合の一件から二人の仲はとても良く、一緒に歩く様子はとても人間には見えない。

「姫様は外に出たいとおっしゃっていたが…ネリも出すとなると異能者が黙っていないぞ」

腕を組んだままの藍緋が、鋭く白を見る。烏森から戻ってきたネリは、以前のような明るい様子から一変、感情が乏しくなってしまった。

ほとんど人型にならず、姫と一緒にない時は氷蛾を抱いて異空間の中にいるようだ。

「姫にはしばらく我慢していただく。烏森を献上するまではな」

「フーン。古巣を攻めるってあいつが聞いて黙ってんのかな？」

紫遠が至極もつともな疑問をあげる。それには藍緋が答えた。

「…極力知らせない方が良さだろうな。だが、姫に関しては一つだけ気になる事を言っていた」

「…何と？」

興味を引かれたように白が問うと、白衣の女性は少し間を置いた後ゆっくり答えた。

「烏森の力は……姫を殺すと」

「……！」

断言というより、過激な予言に場は一瞬静まり返った。藍緋はなおも続ける。実際、ネリから幹部へ伝えるよう頼まれたものだったのだ。

「烏森は神佑地では無いから、姫は主になれないと言っていた。」

「…本当に、謎の多い土地デスナ」

ずっと沈黙していた碧闇が、布の奥で言葉を発する。情報部としては、作戦を立てるにはより沢山の情報が欲しいところだ。

「事実かは分かりかねマスガネ。その人間が言っているだけなのデシヨウ？」

「嘘と断じるには…少し気になるところがあつてな。あの少女の扱いは、今のところ保留中なんだ」

言葉だけを信じるなど愚の骨頂なのだが、白は火黒から話を聞いていた。

曰く、ネリは『異世界』の者だと。

あいつをここに置いときゃ、まず負けはねエだろうな。それだけの知識は持つてるみてえだぜ？

(幹部の情報も把握しているようだし…油断は出来ない、か)

慎重な白は心の中でネリの言葉を一応頭に刻んだ後、その場をまとめた。

「しばらくは情報収集に徹するつもりだ。各自好きなように烏森を調べてくれ。現地に行く時は、私に一言頼む」

方針を固めて幹部会を閉じると、皆バラバラと東屋を後にする。藍緋は、白に声をかけられて振り返った。

「烏森のことを彼女が少しでも話したら、私に教えてくれ」

「……伝えるよう頼まれたことは、教えよう」

それだけ言うと、白衣の女性は踵を返して連絡通路を歩いていった。烏森で少女と正守の間は何があったのか、心を波立たせながら。

ネリが失踪して、限は前にも増して無口になってしまった。

きちんと夜の仕事はこなすものの、昼間の学校には出てこなくなった。昨日の今日では無理もないかと、良守は1組を後にして自分の教室へ戻る。

（大体ネリもネリだ。あいつが操られてたつてことはもう皆知ってるのに。）

ガラガラツと引き戸を開けて自分の教室を見渡せば、空席がぼつんと一つある。

銀髪の少女が座っていた、席だ。

ネリが妖の血を引いていて肉体自体が人間とは異なる存在と聞き、良守はようやく謎が解けた気分だった。

（斑尾は確か……『人間じゃない』とか言ってたんだよね……）

机に突つ伏すと、途端に睡魔に襲われる。あまりにも眠かった良守は早々に意識を手放し、国語の授業はいつも通りに睡眠学習になるのだった。

帰りに志々尾の家に行こう……と、ぼんやり思いながら。

放課後までをほとんど寝て過ごす、良守は隣のクラスの担任を捕まえた。限の住所を聞き出すには苦労したが、授業プリントを持って行くからと言い、何とかメモに書いてもらう。

メモの住所を見ながらたどり着くと、そこは3階建てのアパートだった。しかも3階の角部屋。

(ちゃんとしたとこ住んでんじゃねーか…)

階段を登りながら、周りを見渡しつつ足を進める。夜行の方で用意されただろう部屋の前に立つと、良守はチャイムを押した。

『ピンポン』と能天気な音が鳴るが、部屋からは何も音がしない。

「あつれ　？留守かな。オイ、志々尾　？」

呼んでも返事は無く、良守は眉を寄せた。ビニール袋でも持ってきていればプリントをドアノブにかけられるのだが、生憎そんな用意はない。

「し・し・お　！！コラ、居留守使うんじゃねえ！！」

沸点の低い少年結界師が『うがー』と、独りで勝手にキレていると呆れた声が聞こえた。

やはり、無視するつもりだったらしい。

「……………何しにきた」

「授業プリント！……………同じクラスでもねえけど、何となく持ってきたから」

だから開ける、と良守が言うと一拍間があってガチャリと音がする。学ランを着たままの良守が中へ入ると、いつもよりも数倍無愛想な限がいた。無表情で無いただけまだマシなのだが、若干やつれたようにも見える。

玄関先で立ち話も変なので部屋の中に入ると、とてつもなく殺風景だった。

「っわぁ。なあーんも無えんだな」

「本当にお前何しに来たんだ…」

「だから、授業プリントだって」

ホレ、と一日分溜まったプリントの束を限に突き出す。限の顔には、『たったこれだけのために？』と書いてあった。

視線を不自然にさ迷わせた良守は、言いくそくに口を開く。

「お前、さ……………。落ち込んでんじゃねえかと思って…ネリのこと。」

「……………っ」

限の顔に険が混じる。凶星だったのが気に食わないのか、口調が荒くなった。

「お前に何が分かる……!!」

初めて限と面と向かって叩き付けられた怒気に、良守は面食らった。同時に感動さえ覚える。

（本当にネリが絡むと性格変わるな　こいつ。）

ただ、そういった負の感情は溜め込むと良くない。今回は聞き役をやってみようと、良守は珍しく腹をくくった。

「いつも側にいた奴が突然いなくなって、あれだけ守ると言ったのに俺は　…逆に守られてばっかだ……!!」

ああ、と良守は直感した。

志々尾こいつも同じなのだ。

一番大事な人を守りたいのに、その誰かは自分の気持ちに気づかない。

ネリは限や夜行の仲間を守ったつもりなのだろうが、それはただの自己満足に過ぎないのだ。

少なくとも、一方的に身を引いたネリとは絶対にきちんと話す必要がある。

「今度こそ、守れば良いじゃねえか。」

「!?!」

ニツと良守は笑いながら、腕を組んだ。限はその笑みの意味が分からず、険しい表情に疑問の色をのせる。

「行こうぜ、黒芒楼に」

「……………!!」

息をのむ限に対して、不敵な表情で笑う良守。だが、次の瞬間良守は『ん?』と窓の外を見やった。限の懐からも携帯の振動音が鳴る。

胸に正方形の方印が描かれた黒い烏の式神が来たのと、限が通話ボタンを押したのはほぼ同時。

どちらも、墨村正守の意識が戻ったことの連絡だった。

「兄貴!!」

正守は布団に入ったまま体を起こし、沢山の人に囲まれていた。その顔は土気色ではなく生氣が宿り、卓を置いてゆっくりご飯を食べる姿は元気そうである。

「おお、良守。限と一緒にだったのか?」

「ああ、まあな。　　ってそれより大事な話が　　」

「ネリの事なら聞いた。」

静かに言う正守に、良守は口を閉じる。正守の側にいる翡翠も、グツと唇を噛んだ。

そんな周囲の様子を見た夜行の長は、箸を置いて話し出す。

「黒芒楼にいるネリと今すぐ誤解を解きたいのは分かるが、異界に行くのはそう簡単なことじゃない。土地神が力を取り戻した今となつてはな。」

だから、と正守は続ける。その顔が何かを企んだ様にニヤリと笑った。

「難しいなら……招いてもらえば良い」

「頭領　何か策があるんですか?!」

染木が身を乗りだして上司を見るが、正守は何も喋らなかつた。

(16) 時子さんときつ

白や幹部達が烏森について話しあっていた頃。

銀と黒の尻尾をなびかせる女性は、銀色の狐をお伴ともに廊下を歩いていた。

姫君は窓の外をぼんやり見ていたかと思うと、唐突に藍色の瞳を下に向ける。

『ねえ、ネリ。今日は城の外に出てみたいわ』

『え……大丈夫なんですか、体調とかは……？』

『もう平気よ。それより早く行きたいわ』

二、三百年程外に出ていない姫君は芒すすが広がる黄金の野原を歩きたいようだ。

突然の御要望にネリは首を傾げるが、この姿でいる限り姫に妖力が流れるので大丈夫だろう。

白の執務室へ向かおうとしたネリに、姫は待ったをかけた。

『白には内緒で行きましょう。きつと止められてしまうから』

『え…』

獣の顔が少し曇るが、それ以上感情が表に出ることは無い。それをどこか残念に思いながら、姫はなすがままの狐の背を軽く叩いて急かした。

ネリはコンパクトだけを藍緋の研究室に転移させ、万が一帰り道が分からなくならないようにする。

姫は待ちきれない様子でネリの背に手を置き、窓の外に広がる黄金の海を指差した。

『あつちの小高い丘が良いわ。跳べるんでしょっ？』

『はい。ちよつと待って下さい』

ジツと姫が指差す方向を見極め、空間を繋ぐ扉を開ける。姫には既に赤い花緒の下駄を履かせていたので、ネリはすぐにその漆黒の裂け目をくぐった。

目を閉じたままぐり、また目を開けると　そこはまさしく、

“海”。

『……わあ…』

絶景にネリが言葉を失っていると、後から姫も転移してきた。目を細めて嬉しそうに見渡すと、ある方向で視線を止める。

ニコリと土地神は笑ったが、景色に見とれていたネリはそれに気がつかなかった。

『ネリ。人型におなりなさい。これから半刻（一時間）あなたに自

由時間をあげるわ。』

『……………？』

訳が分からず銀狐は九尾をユラユラとさせるが、次の瞬間には中等部の制服姿になっていた。

姫の考えていることが分からない。だが、有無を言わせぬ様子なのでネリは黙って従った。

「では姫様。この指輪を持っていて下さい。これを目印に一時間後、迎えに来ますので」

『ええ。楽しんでらっしゃい』

何やら含みのある言い方に首を傾げながら、ネリは姫に背を向けた。姫はその場を動くつもりは無いのか、芒を一つ手折って眺めている。

久しぶりに銀髪の巻き毛を風に揺らしながら、少女は空を見上げて歩き始めた。

薄紫色の、人間界ではお目にかかれない妖しい空。

それなりに裏社会でも有名な、『黒芒』くろすずめという“力ある土地”。

妖は基本的に長命なだけであって、死なない訳ではないようだ。そして寿命は妖力の多さで決まる。

（人間界で暮らすのは……………まあ、無理だろうなあ。総帥のゴタゴタに巻き込まれる前に、黒芒楼からは出た方が良いよね……………ここ真っ先に狙われるだろうし）

また根なし草かあ…と、少し寂しくなりながらネリは両手を広げて歩く。人間界の芒と同じはずなのに、まったく虫はついておらず手で触れると柔らかかった。

(限には悪いこと言ったなあ…。お姉さんのこと、私は知らないはずなのに)

丘から少し離れてきたが、姫が動いていないのであまり問題は無い。思いつきり、銀髪の少女は駆け出した。

(ごめんね、限。生きてて本当に良かった……)

火黒から、ネリが藍緋・氷蛾・正守・限を手にかけたと聞き、少女は自分を責めた。

嘘だと思ったかった。だが実際、会う人皆が傷ついているのを見て否応なしに認めさせられた。

自分は、化け物なのだ。

親しかった者ばかり手にかけておきながら、記憶さえ無いのだ。

「ごめん…ごめんね。もう迷惑はかけないから、離れてるから。」

懺悔するかのように、少女の口から言葉が溢れ出してくる。足を止め、小さくネリは呟いた。

「だからこれ以上、嫌わないでね…限。」

空を見上げたネリは、無表情という名の仮面を被る。でないと思し

くて狂いそうなのだ。

限に会いたい。

限の側にいたい。

あの暖かい彼と一緒にいられたら

「ダメだよ。“化け物”」

無表情の仮面を被ったネリは、自分の弱い心をなじった。独り言は端から見ると怪しいが、決心が鈍りそうだったのだ。

彼の側にいたら傷つけてしまふ。

彼の腕を切り飛ばした時のように、意識の無いまま彼を殺してしまつたら。

「歴史の通りにもし彼を殺したら？お前はレナモンと百合香を死なせた前科者なんだよ？」

ビュオ、と一際強い風がネリの側を駆け抜けた。芒の海が揺れてネリの素足を優しく撫でていく。

妖の力を奪う太陽の匂いが、鼻腔を掠めた気がしてネリは目を閉じた。

「良いんだこれで。烏森からは距離を置かないと。」

暗示のように呟くと、ふと何かの視線を感じた気がした。気のせいかと思いつながら、遠くに見える楼閣を眺める。

そんな彼女の背中を見つめる存在がいた。

「……………ネリさん」

「!?!」

バツと振り向き　そこにいた人物に目を見開いた。
年老いてもなお力は衰えておらず、雪村家の当主として厳しくある女性。

雪村時子。70歳の老女は白い衣を身に纏い、ネリを困惑したように見ていた。

「無事なら無事と……………なぜ知らせてくれなかったんですか、ネリさん。」

「……………」

無意識に一步後ずさったネリに、時子は言いつのつた。

「一緒に帰りましょう。先程の妖はこの地の主なのでしょう？私に気がつきながら貴女を逃がしたのですよ」

「…えっ」

遙か彼方に見える丘の方を見れば、姫の姿はもう見えない。まさか、ネリを残して城に戻ったのだろうか。

だから突然外に出たいなどと。白には内緒でなど言ったのだろうか。

(なんで、姫様！もう私には…どこにも ……)

「さあ。帰りましょう、烏森へ」

少女の手を引こうとした時子の手が、勢い良く払われる。驚いた時子は、感情が抜け落ちた少女に目を見開いた。

「私は戻りません。ここに留まるつもりもありません。一ヶ所に定住してはいけません、私は。」

「何を…何を言っているんですか」

感情を排除してしまったかのような少女に、雪村の当主はどこか危うさを感じた。

人形のような無機質さと、美しさ。

今までの太陽の様な快活さは、影も無かった。

「どれだけの人が貴女を心配したと知っているのですか？…いい加減になさい」

時子の苛立ちにもネリは、表情筋ひとつ動かさなかった。それどころか諭すようにゆっくり言葉を紡ぐ。

「時子さんや正守さんが心配しているのは私じゃない。烏森の情報が黒芒楼に渡る事を恐れているんでしょう？」

『大丈夫』と、少女は薄く微笑む。訳もなく時子の背を冷たいものが走った。

(以前と何か違う…!!このうすら寒い妖気は、一体……)

「私はもう未来の事を言うつもりはありません。それに……皆を傷つけたく無いんです。」

「本気で言ってますか、それ」

ネリの言葉に老女は厳しい目になった。老いた小さな体から、圧倒される怒気が発せられる。ざわり、と黄金の芒が揺らいだ。

「確かに……貴女が持つ知識は危険です。妖の力もその異能も、一般人の世界で生きていくには大変でしょう。ですが。」

泣きそうな、それでいて怒っているようなそんな顔で時子は叫んだ。同時に右手を構える。

「なぜ周りの者を頼らないのですか……！貴女はどうしてそう自身を罰するような真似をするの……！」

ネリの四肢に重なるように小さな結界が生成され、ギシツと体が軋む。身動きが取れなくなったネリは、慌てることなく体の力を抜いた。

人型を解き、同時に拒絶の球体で結界を斬る。地面を蹴って空中で宙返りすると、ネリは空気を踏みつけて宙に浮かんだ。

空間を拒絶する。九尾を従えた銀色の狐と対峙して、時子はその姿に目を奪われた。

「ネリさん……その、姿は」

『帰って下さい。』

尻尾を扇のようにピンと伸ばすと、その先にバレーボール大の火の玉が灯った。9つの火炎で辺りが眩く照らされる。

彼女が空中へ逃げたのは、地上を焼け野原にしないためだった。

『もう私は人間じゃない。あなた達と共にはいられない。………帰ってください』

紫色の瞳が凄みのをせて小柄な女性を見るが、時子はやはり冷静だった。獣の顔になってますます表情が分からなくなってしまったが、ネリが混乱の極みなのは確かだった。

一緒にいたい。

でも距離を置かなければならない。

ネリの中で相反する二つの気持ちを、70歳の老女は敏感に感じ取っていた。

「人間じゃない……？今まで裏会で何を見てきました？貴女よりも余程人間から外れた者がたくさんいたでしょう！」

ネリの不安を理解した上で時子は、その矛盾を突いた。

紫水晶の瞳が揺れる。火炎玉が放たれようとしても、時子は結界でもって自分を防御しなかった。

「全ては貴女の心次第。貴女が人間でありたいと願えば、貴女は人間なのよ。決して化け物じゃない。」

『……………!!』

狐の姿になった自分を“人間である”と言った時子に、ネリは目を見張った。

雪村家にはネリが妖の血を引いている事実を告げていない。

それを知れば、時子もこんな気休めは言えなかつただろう。そうネリは冷静に結論づけた。

火炎玉を収め、瞬時に人型へ戻る。夜行の戦闘服を着た姿のネリは、上空から白い衣を見下ろした。

そこに感情は、無い。

「対象の存在情報を捕捉　　“鏡渡り、世界渡り、空駆け”を併用します」

「ネリさん!!」

時子が不穏な気配に気づいたがもう遅い。ネリの周りに結界が張られたが、外界と遮断されても術は発動する。

時子に向けて、ネリは無機質な声を発した。

「強制送還」

バツクリと漆黒の裂け目が、時子の後方に空間を押しつけて生まれる。老女は自らを結界で囲んだが、それはなんの意味も為さなかつた。

「　　ッ!?!」

結界ごと後ろへとずるずると引つ張られる。逆に身動きが取れず時子は直ぐ様結界を解除した。

縦に口を開けている裂け目に噛ませるよう結界を張っても、あつという間に暗闇へ消える。サツと青ざめた時子は、上空のネリに念糸を巻き付けた。

「私を帰そうというなら貴女も連れ帰るまでです、ネリさん!!」

「あー…成る程」

まさかこうして抵抗されるとは思わなかったネリもまた、引きずられていく。

だが、ネリが発動した術に術者自身が巻き込まれるなどありはしない。時子が地面に伏せて吸い込まれるのを防いでいるのに、ネリは念糸を切って地上に立った。

時子の荷物はとっくの昔に亀裂へ吸い込まれている。

「ごめんなさい。世界渡りは私がいないと暗闇だけど……すぐに終わるから、心配しないで下さい。では……」

ネリが無情にも右手を亀裂へ向ける。するとそれは前進し始めた。ブラックホールのように辺りの物を吸い込みながら、近づいてくる漆黒に時子の顔がひきつる。

「貴女の帰りを待っている人がたくさんいるのですよ!」

小柄な体がとうとう浮かび始める。時子は最後の力を振り絞って、口を開いた。

一番言わなくてはいけない一言を。

「 貴女を、独りにはしません」

「……！」

ネリは、暗闇の中であっという間に白い点となって消えた老女を見送る。

音もなくゆっくり閉じていく裂け目に、ネリは呟いた。

「私は今までずっと独り。これからも、変わらず独りですよ。」

届かないと知りながらも、ネリは言わずにはいられなかったのだった。

(16) 時子さんと会っ(後書き)

最新33巻買いました〜〜(^ O ^)

アニメ早く第二期やってくれないかなあ〜

(17) まっさんとまた会いました (前書き)

簿記試験のために、27日までちょっとお休みします。

ああ…新学期始まるまでには3章終わらせたいなあ…

(17) まっさんとまた会いました

幹部会が終わった藍緋は、本人が気がつかない内に早足になっていた。

ネリが烏森で別れを済ませて来たのは分かる。

だが、なぜあんなにも人形のように表情が抜け落ちてしまったのか。

『接触はせずに顔を見て帰る』だけのはずだが、それにしてもネリの変貌は不自然過ぎる。

「考えたくは無いが……人間達に何か言われたのか……？」

ネリを黒芒楼に迎えた夜、藍緋達を殺しそうな目で見ていた少年。

アレはネリに一番近いといえた“妖混じり”だった。

服装からしてもネリと同じ所属なのは明白である。

あの少年の様にネリの周りには、彼女を守る存在がいると藍緋は勝手に思っていたのだが。

研究室へ続く長い廊下を、サンダルの音が忙しくなく響く。それはまるで藍緋の心情を表しているかのようだった。

白衣の女性が最早駆け足になっていると、欄干に男が留まった。漆黒の布地に火炎模様で縁取られた着流しの男　火黒である。

『どうした藍緋。そんなに急いで』

言葉とは裏腹にからかう様な口調が、女性の勘にさわる。不機嫌そうに白衣の女性が男を睨み付けると、火黒は肩をすくめた。

『あのお嬢ちゃんに随分ご執心だな。情でも移ったか？』

「私の客人だからな。面倒を見るのは当然の義務だ」

すげなく足早に通り過ぎようとする藍緋に、火黒は口の端を吊り上げた。シルエットは人間にしか見えないのに、その笑みは邪悪以外の何物でもない。

くくく、と笑った男は欄干を軽やかに移動した。

『アイツはさ、もっと孤独になるべきなんだよ。そうすりゃ、あんな中途半端にはならない。』

「何が言いたいんだ、お前。」

いつもの戯言かと聞き流す藍緋は、足を止めない。聞いている余裕は無いのだ。

『……あんだ、なんで城に残ってる？』

「……ただの気まぐれだ。」

珍しく繕うのに失敗した藍緋だったが、男は笑みを深めるだけだった。火黒は藍緋を追いかけず、後ろ姿を見送る。

すぐに角を曲がって見えなくなった彼女に、火黒の笑みの意味は分からなかった。

研究室に戻った藍緋の目に飛び込んで来たのは、あのコンパクトだった。

外側に金細工の彫刻がなされた鏡は、静かに机の上で光っている。閉じたままでも充分な輝きを放つ代物だ。

もしかしたら、と白衣の女性はコンパクトをジッと見つめた。あの時と同じく、あの人間の元に行けるかもしれない。

ネリの直属の上司であり、ネリの身を一応は案じていたあの男なら。

(正守を傷つけたことを気にしている風だったしな……あ。)

まさか、と藍緋の顔が一瞬にして強張った。ネリが表情を失った理由

「まさか、死んだのか　　？正守。」

やはり、確かめなくてはならない。珍しく平静さを失った藍緋は、ネリのコンパクトに手をかけたのだった。

藍緋に『まさか死んだのでは』と思われている正守は、布団で身を起こし報告書に目を通していた。ネリの妖力が籠められた品々は、既に持ち主の元へ帰されている。

邪気を漏らさないように囲いこんでいたしめ縄は、もう取り払われていた。刀傷に巻かれた包帯も血はにじんでおらず、3日もすれば包帯も取れるだろうとのこと。

「絶対安静、か。俺はもう大丈夫なんだがな。」

「休暇だと思って一日くらいは寝ていてください。」

報告書を墨村家まで持ってきた刃鳥が苦笑する。確かに夜行の頭領である正守は、色々和多忙な人物であった。

各地の怪異を解決するのも基本的に夜行など裏会の仕事。裏会に属する団体としては、任務を沢山こなさないと組織として成り立たない。

頭領である正守も各地を飛び回り、第一線で任務をこなす結界師だった。

声を若干潜めて、副長の刃鳥は以前から調査中の案件を報告する。

「東北地方の件ですが、まだ大きな事件は起こっていないようです」

「……………そうか」

刃鳥の報告に、正守が頬杖をついて視線を落とす。

正守は秘密裏に裏会東北支部の方へ、部下を何名か転属させていた。

頭領が東北地方の妖退治に足止めを食らい、夜行の人員がそ

れに割かれた隙に、烏森が襲われます。

もう随分昔に思えるが、ネリが語った未来の一つである。もっと詳しく話を聞いておけば、と今さら悔やんだ所で遅い。

「ネリは…どうしてるかな…」

「……誤解が生じている、と聞きましたが。」

「ああ。歪んだ形でネリに情報が伝えられているのは確かだな。」

この際誰に吹き込まれたかは後回しである。ネリとの誤解を、一刻も早く解く必要があった。

あの知識を野放しにはしておけない。

もし誰かがネリの存在に気づき、精神感応能力者にでも捕まった日には取り返しがつかなくなる。

刃鳥も心の中で、ネリのことを心配していた。居場所が無くなったと思い込んでいるネリに、叫んでやりたかった。

“人外は人外らしく人から離れて暮らす”とは、どういう意味かと。

フツと微笑を浮かべた刃鳥は、自分の左腕を押さえた。今は動きやすい小袖を着ているので、彼女の腕は布地に隠されている。

彼女の左腕には、肩から手首にかけて刻まれた刺青　もとい呪印があった。

（“人外”……貴女は、自分が何を言っているか分かってないのね）
夜行は、はっきり言って“人外”の集まりである。

呪現化能力者はギリギリ一般人に紛れることが可能かもしれないが、妖混じりは無理だ。

まず、一般の病院にかかれない。精密検査をすればすぐ、体細胞がおかしいことに気づかれる。

治りが異常に速く、どんなに華奢だろうが一般人に比べれば、はるかに頑丈な造りなのだ。

翡翠の様に左手が植物である者。
轟のように異様な怪力を持つ者。

呪力を具現化出来る能力者と違って、確実に多くの制約がある。

ネリが夜行の面々に言った言葉は、根本的どころが間違っているのだ。

彼女は自分自身を卑下しているようだが、人外なのは夜行も同じ。

否、人外だからこそ夜行にいるのだ。

一般人からつま弾きにされた者同士、自分の人生を胸を張って生きる
それが正守率いる『夜行』。

（貴女にとっては……わたしたち夜行も歴とした人間に見えるんでしょうね）

刃鳥が深く考えているのを、正守は遮らなかった。彼は彼で別のこ

とを考えていたからだ。

(藍緋を帰したのは馬鹿だったな……)

彼女の立場もあるだろうとそのまま黒芒楼へ帰したのだが、夜行に留めておくべきだった。

そうすれば火黒という奴の行先もすぐに分かっただろうし、所属しているのが黒芒楼であるともっと早く分かったからだ。

夜行の面々に“火黒が黒芒楼の一味である”と知らせたのは雪村だ。正確には、時音である。

ネリちゃんがずっと前から警戒している人物です。黒芒楼に行かなきゃってそればかり言っていました。

まだ正守が危篤で、墨村家に運ばれて間もない頃の話である。勿論彼女が直接墨村家に出向いた訳ではない。

翡葉が雪村家に時音のペンダントを借りに行った時、発覚したのである。

正守も火黒という名には聞き覚えがあった。氷蛾ひむしと初めて遭遇した夜、植物系の妖をネリがバタバタ枯らした後の事。

虚ろな目で薄く笑っていた彼女を抱き上げた時、確かに彼女は『火黒攻略の糸口は…』と呟いていた。

あの頃、ネリは黒芒楼に行くことしか頭に無かった。そしてそれは、『限の死の未来』を回避するための行動である。

夜行の頭領に、そこまで情報が揃って分からないはずがない。

（おそらく火黒という妖が…未来で限を殺す奴だな）

ならば、本当に時間が無い。

ネリは黒芒楼で火黒を殺す為に動き始めているだろう。

ネリを拐った火黒を直ぐ追いかければ良かったのだが、絶対無敵（部下にはそう思われている）の正守が倒れたことで混乱したらしい。

いつも冷静な翡翠らしくない失態だった。といっても烏森に、様子見程度の人員しか配備していなかった正守にも非があるのだが。

刃鳥は正座したまま、正守は報告書を座卓においたまままで治療部屋に沈黙が降りる。

それを破ったのは、正守だった。

「……………」

「………!」

「………」

正守は枕元に置いてある金色の短剣を凝視していた。無言で部屋ギリギリの大きさの結界を張る。

「やっと来たか………」

「……………」

訳が分からず刃鳥が眉を寄せる。だがすぐに答えは目の前に現れた。短剣の少し上に、マンホールぐらいの黒い“門”が出現したのだ。まるで、抜け穴のような。

「まさかネリが!？」

「いや、残念ながら違う。」

正守が警戒しながらもブラックホールの向こうへ、声をかけた。

「俺ならここにいるぞ」

正守が名乗らなかつたのは、万が一向こう側に敵がいる場合を考えての事だ。案の定、その言葉を待っていたようで暗闇の向こうから女性の声がした。

そちらに行っても大丈夫か？

「ああ」

最初に出てきたのは白衣の袖だった。藍色の頭がのぞき、すぐ全身が現れる。

妖が家の中に入るなど、普通なら考えられない。それに墨村家はただの家では無いのだ。

妖を滅却する結界師の家　そんな中に妖が侵入するなど、自殺行為である。

肩までの髪を揺らし、白衣の女性はまっすぐ男の顔を見た。

「元氣そうで何よりだ、正守」

サンダルもはいたままの藍緋が、墨村家に現れたのだった。

ネリに“強制送還”された時子は墨で塗り潰された様な闇にいた。

結界師として直ぐ様周囲を把握しようと感じを研ぎ澄ませたが、何も引つ掛からない。

(これがネリさんの空間支配……?)

悪意は感じない。だが息苦しさがあった。胸を締め付けるような不安が、訳もなく時子の心にのしかかる。

唐突に闇の世界は、光の登場によって終わりを告げた。導かれる様に進めば、ふわっと胃が浮き上がる感覚に陥る。

「え…?」

何の前触れもなく重力に従い落ち始めた老女は、無意識に結界を足場にしようとしたが出来なかった。

そんな暇もなく、地面に倒れ込んだからだ。

いや、地面というには土の感触では無い。反射的に目をつぶっていたのだが、無理矢理こじ開けると意外な人物が目の前にいた。

「時音……?」

「お祖母ちゃん!？」

そこは、確かに孫の部屋だった。

(17) まっさんとまた会いました (後書き)

前書きでも触れましたが、1週間程休みます。

この話はハッピーエンドで終わりますが、それまで結構ハチャメチャです。

節操なしでごめんなさい m () m

こんな長〜い話にここまで付き合っただ下さり、ありがとうございます。

(18) 狂気が二つ(前書き)

ケ タイから投稿できなくなったので、パソコンのみになります。
火曜日・金曜日を目指して投稿できるようにしますが・・・私室に
パソコンがないので、出来ない時もあるかもしれません。
その時は、ごめんなさい週1になるかもです。

(18) 狂気が二つ

「頭領、こちらは先日の……?」

「そう。ちょっとした知り合いでね、黒芒楼について詳しいんだ」

正守は座卓を下げて、一応は身動き出来るようにしていた。この妖が戦闘を好まない性格なのは薄々察していたが、念のためである。

藍緋は、正守以外の人間に黒芒楼幹部とは知られなくなかったので何も言わなかった。

その女性の目が、厳しく二人の人間達を見据える。

「単刀直入に言う。ネリに何をした」

藍緋の声に若干糾弾する響きがあったのは、仕方ないだろう。夜行の頭領と副長は顔を見合わせ、正守が慎重に答えた。

「どつという意味だ?」

「ネリから表情が無くなった。……というより、感情が表に出なくなった。こちらから帰ってきて突然だぞ。」

彼女に何か…心無い事をしたんじゃないのか?」

刃鳥はネリを友のように心配する藍緋に目を見張ったが、正守はため息をつく。

「それは…十中八九、俺のせいだな」

「何をした、貴様」

ぶわ、と藍緋の髪が不自然に逆立つが、夜行の長は全く動じない。副長が自身の左腕に手をかけたが、男は目で制した。

「俺の傷、ネリちゃんにやられたんじゃないんだ」

「……？」

眉を寄せる藍緋に、正守は困ったように笑う。

「火黒つて奴に刺されたんだよ。」

「…何だと？」

困惑した様に正守を見る女性に、夜行の長は包み隠さず話してやった。

途中からは人づての話になってしまったが、聡明な藍緋が理解するには充分だった。

苦々しく藍緋は息を吐く。

「……てつきりあの子には、記憶があるのだと思っていた…。そうか、だから一人で思い詰めてたんだな」

舌打ちしかねない勢いで藍緋が言葉を発した。

「おそらくネリが誤解するよう仕向けたのは、火黒だ。あいつはあの子に興味を持っているようだし」

「ネリに、興味を？」

顔には出さないが、正守の心臓が嫌な音を立てる。刃鳥も自分の上司を殺しかけた妖が、今度はネリを狙っていることに青ざめた。

藍緋は腕を組んで頷く。

「そつだ。元はと言えば、ネリを拉致する様に提案したのもあいつだ。……もつとも、二人を引き合わせてしまったのは私だが。」

「……………」

ジト目で正守が藍緋を見ると、彼女は気まずそうに目をそらした。

「成り行きで仕方がなかった。それに、ネリは既に火黒の強さも危険性も把握していたようだし……全く知らぬ仲でも無いんじゃないか？」

「……………そつ、かも知れないな。」

正守が言葉を濁すと刃鳥が疑問の色を浮かべたが、何も言わなかった。正守が真顔になって、白衣の女性を向く。

「それで藍緋。頼みがあるんだが」

「……………何だ」

半ば予想しているような口振りだったが、藍緋は真面目に訊く。正守は一拍置いた後、一気に言った。

「黒芒楼へ入れて欲しい。君が招いてくれれば、俺達部外者も入れるはずだ」

「……………」

感情が読み取れない目で、藍緋は男を見返す。彼女は土地神では無いが、確かに『招く』ことで部外者を黒芒楼へ入れることは可能だった。

それが一番安全で確実な方法なのだ。

これはどの異界に入る時でも、適用される条件である。

勿論、ネリの異界に関しても。

「……………」

黙って考え込んでしまった藍緋に、正守は緊張した面持ちで待った。

刃鳥は、これだけ長く侵入者がいるのに墨村家の人々が　　繁守
などが、なぜ気がつかないのだろうと場違いなことを考えていた。

藍緋は、誇り高い高等な妖である。

およそ100年前人間の男に飼われていたことがあるが、それは彼に興味を沸かしたからだ。

正直な所、藍緋は目の前の男を食えない奴だと思っていた。
敵地のご真ん中で、相手の要求を断れる筈が無いのだから。

（まあそれを抜きにしても……そろそろあの城を出る良い時期かもしれないな……）

どう返答しようか思案していたのは、ほんの1分程度だ。その間、治療部屋にはピリピリとした緊張感が漂っていた。

藍緋が、静かに口を開く。

「分かった」

「……！」

「が、その代わり条件がある」

喜びから一転、正守が厳しい顔になる。それには構わず、白衣の女性には自分の条件を提示した。

「ネリを自由にしろ。」

藍緋の言葉に二人の人間は、全く違った反応を示した。

刃鳥が訝しげに眉を寄せるのに対し、正守は驚きを悟らせまいと表情を繕う。

男の目をジッと見て、藍緋は自分の予想が外れていなかった事を悟った。

「正守。お前があの子の知識の流出を、危惧しているのは分

かる。だが、あの子にも選ばせる。人間と共に生きるか、否か」

そこで初めて正守が『降参』とでも言いたげに、手を振った。

「やれやれ、参ったな。さすがに鋭い」

「当たり前だ。お前、あの子を縛りつけるつもりだろう？一生、夜行の側に」

「人聞きの悪い…」

顔をしかめる正守に女性は容赦しない。

刃鳥の手前決定的なことを言わない正守だが、藍緋の言わんとする所は分かっていた。

幽閉するとまではいかないが、それに近い処置を正守はするつもりだったのだ。

彼女が一生夜行に　この世界に、いるように。

「あの子の“自由”を侵害するつもりなら、私はお前達を招くことは出来ん。ネリが火黒と戦いたいなら、それを止める権利はお前達に無いはずだ」

藍緋が固い声で言うと、正守が観念して息を吐いた。ここまで藍緋が“ネリ贖身”だとは思わなかったのだろう。

夜行の長は呆れた様に口を開いた。

「なんで君はそんなに、ネリの事が気に入ったんだ？」

「……気に入ったんじゃない」

いくらか齒切れ悪そうに、藍緋が言う。

「……あの子からもらった物を、返したいだけだ。」

「……」

目を見開く人間二人は、同時に同じことを思っていた。

ネリは、黒芒楼さえも救おうとしているのだ、と。

その黒芒楼では土地神と、その血縁の少女が同じ部屋にいた。

『意外だったわあ。アナタ、帰ると思っていたから』

「姫様……。もうあんなこと止めて下さい。私はあの人達の所へは戻れないんですから」

爽やかな風が通る城の一角。風通しの良い部屋に寝所を移した姫君は、人型のネリと話していた。

銀髪の少女は烏森学園中等部の制服で、緑を基調としたセーラー服を身に纏っている。

『アラ。なぜ戻れないの?』

「人間の異能者達、そのトップを殺しかけたんです。帰る場所は、

とうにありません」

今のネリは、墨村家で謝罪した少女では無かった。怒っている訳でも無いのに、顔に何の表情も浮かんでいない。

よく白が座る椅子に腰掛け、どこを見ているのか分からない瞳をしている。

千年近く生きている土地神は、妖艶に微笑んだ。

『それじゃ、仕方ないわねえ。でもずっとこの城にいるわけでも無いんでしょっ?』

「……ええ、まあ。仕事が終わったら、すぐに出ていきます」

寝台の上で何の治療具も着けずに身体を伸ばす姫は、歌う様に言った。

『アナタが何をしようと構わないわ。でも、簡単に死んだりしないでね?アナタの話、面白いもの』

「…努力します」

スツと立ち上がり、その部屋を後にする。姫に預けた深い藍色の指輪は、ネリが異世界で手に入れた鉱石で出来ていた。

なんだか気に入ったようなので、そのまま彼女にあげることにし、ネリは人気の無い廊下を歩く。

鏡渡りでもう一つの黒芒楼をネリの世界の中に作ったので、彼女は

この城の間取りを熟知していた。

ネリはぼんやりと無気力に、足だけを動かす。途中で妖に会っても良いものだが、彼らはネリを遠巻きにしていた。

無謀というか、愚かな雑魚がネリを攻撃したことがあったのだが、瞬殺だったのだ。その時、ネリは視線を向けようとせず、無造作に葬っていた。

破裂するのと、切り刻まれるのと、干からびるの…何がお好み？

その不気味な言葉は、知能の低い奴でも飲み込まざるを得なかった。目の前で仲間が妖力を吸い尽くされ、干からびていったのだから。

『あの童女わらわにや、近づかん方がええ』

『命がいくつあっても足りんぞ』

妖の間で、それが暗黙の了解となっていることをネリは知らない。下っ端に関しては彼女を幹部だと思っている者もいるくらいなのだ。

そんな腫れ物扱いのネリに話しかける猛者がいた。火黒である。

『よう。どうだった、烏森は』

「別に。貴方の言う通りの状態でしたよ。みーんなボロボロで、なのに優しくして。」

だから逃げて来ました、と薄く口を吊り上げる少女に、火黒は満足そうに笑った。

『そいつは良い。君も晴れて妖のお仲間ってワケだ』

カラカラと嬉しそうな火黒は、両手を懐に引っ込めて少女の側まで来る。

並んで歩き始めても、ネリは表情一つ変えなかった。

「どうしたんです？火黒さん、何か私にご用ですか？」

『……君さア、コロコロ性格変わるよな。一番最初のが俺、気に入ってたんだけど』

一番最初、と聞いてネリが少し記憶を遡る。すぐに『ああ』と納得した様に言った。

「だって、あの時より私強くなりましたし。」

いたって丁寧かつ真面目に少女が答えると、火黒が呆れた顔をした。こつも感情が乏しく言われると、肩透かしを食らった気分になる。

初対面の時、ネリは火黒の存在を全身で警戒していた。人皮を被った状態にも関わらず、銀髪の少女は火黒を一番の敵と認識していたのだ。

それなのに、今はどうか。

『戦えば、少しは警戒してくれんのかねえ……？』

「私と？火黒さんが戦うんですか？」

その言葉には珍しく感情が籠っていた。少女にとって、火黒の“誘い”はとても意外だったらしい。

「貴方はヒリヒリした感覚が欲しいんでしょう？残念ながら、私と戦っても得られませんよ」

『なぜ？』

火黒が足を止める。つられてネリも、男の数歩先で立ち止まった。

ゾツとするような美しい笑みを浮かべて、ネリは火黒を振り返る。そこには、“妖”の方へ傾いてきた人間の狂気があった。

かつての黒田源一郎も飲まれてしまった、狂気が。

「だって」

以前のオドオドしていたネリなら、間違っても言わないだろう言葉が小さな唇から零れる。

「すぐ、終わるもの。」

静かな城で、人知れず“戦い”という名の“殺し合い”が始まったのだった。

(19) 火黒の昔を入れちゃいました(笑)

「そっちの戦力はどのくらいだ？」

「目下の所、危険なのが幹部2人程。なんといつても部下の数が多いからな。」

「万が一あちらが戦場になった場合、土地神は参戦すると思うか？」

「まず、ないだろう。あの方は我が俣を言つて、家臣を困らせるのがお好きなだけだ。本当は烏森も…それほど本気ではないはず」

協力するとなると藍緋は、出来る限りの情報を正守に与えた。幹部一人一人の能力を全て把握出来ている訳ではないので、いささか心許ないとも言えるのだが。

城の規模や大まかな内部構造、幹部の力関係や人数、特に白のことに對して藍緋は殊更念を押した。

「幹部を統括している元人間の妖がいるんだが、そいつは蟲使いだな。監視から伝達から、多彩な蟲を使役している。服従用の蟲は取るのが厄介だから気をつける。」

“どんな問いかけにも答ええない”ように、と言われた正守は突然プツと笑った。眉を寄せる藍緋に對し、彼は笑いを含んだ声を出す。

「藍緋つてさ、人間のこともしかして…好きなんじゃない？」

「…は？」

唐突な正守の言葉に、藍緋の思考が一瞬止まる。呆けた顔をした女性に、右肩に包帯を巻いている正守は床とこから立ち上がる。

「君と話していると、なんだかネリを見ているようだね。君達が仲良くなったのが分かる気がするよ」

「私とネリが…似ている？」

『どこが？』と言わんばかりに顔をしかめた女性に、正守はまたもや笑った。スタスタと歩くと、治療部屋の出口の前で藍緋を振り返る。

「お人好しで優しすぎるところ、かな」

部屋一杯に張られていた正守の結界が消え去る。その途端、繁守がスパーンと襖を開けながら飛び込んできた。

「一度ならず二度までもとは　舐めてくれるわ！！」

「ハイハイ、お祖父さんちょっと落ち着いて下さい。」

予想していた正守が、『まあまあ』と祖父の肩に手を置いた。

呆気にとられている藍緋と、墨村家21代目当主の視線がぶつかる。瞬間、繁守の目がつり上がり孫に厳しい目を向けた。

「正守イ!!!」

「今から説明します…良守達が帰ってくる前に。」

祖父をなだめる正守を見て、藍緋は小さく息を吐く。問答無用で滅されずに済んで、ひとまず良かったと彼女は胸を撫で下ろした。

特に藍緋が口を開くことも無く、正守は黒芒楼の事を説明し終わると、外は茜色の空になり始めていた。

太陽の力で弱まっていた妖の力が、段々と戻っていく。その様子がやはり結界師達にも分かるのか、藍緋は人間達に若干警戒されていた。

だが、夕焼けの美しさに目を奪われている女性を、さすがに二人共拘束したりはしない。藍緋の邪気が薄いのも幸いした。

「藍緋には一端向こうへ戻って、ネリの誤解を解いてきて欲しい。必要とあらば俺を呼んでくれ。」

「……本当にお前、来るつもりなのか？妖が、千は下らない程いる異界だぞ？」

その内、百は下らない妖を屠ほぶったのがネリなのだが、それは言わないことにした。

100人以上の異能者をまとめあげ、部下を何より大事にする夜行の頭領は薄く笑う。

「当然。来るなど言われたって行くさ。」

ネリとの誤解を解けば、問題なく解決するはずである。

夜行の面々がネリをどれ程心配しているか伝えれば、彼女はまたこちらまで来てくれるだろう。

まずは一度、皆ネリと面と向かって話がしたいのだ。

「……」

即答した男に、藍緋は不思議な感動を覚える。人間を観察するのが最近（ここ100年ほど）趣味になっている彼女だが、ネリとその仲間は格別だった。

見ている飽きない。

妖より遙かに短命な弱い人間いきせのなのに、藍緋は見ていて心がざわつくのを感じていた。

この気持ちを言葉に表すなら 羨望せんぼう、もしくは憧憬どっけいか。

（私なりに、最後まで見守ってみよう）

いつも表情を表にあまり出さない藍緋だが、この時はすんなり微笑むことが出来た。

およそ100年前に別れたきりの呉服屋の男が、目に浮かぶ。死よりも“繋がり”を それが妖とでも関係無く 求めた、孤独な

人間が。

独りにするくらいなら、わしを喰ろつてくれ!!

(……結局喰えなかったがな。私も最後を看取った。)

どこか憂いの表情を浮かべた植物の妖は、正守達の気持ちを胸に黒芒楼へ帰るのだった。

ネリが投下した爆弾発言に、火黒のこめかみが引きつった。

『……すぐに終わるたあ、大きく出たねえ?』

「終わりますよ。こうやって……」

火黒の背後で巨大な漆黒の顎あごが、その深淵を覗かせる。時子を追放した時とは裂ける方向が違った。

床に平行、しかも獣が口を開けたような どこか禍々しいモノを放っている。

ネリが初めて完全変化（厳密には人と獣の不完全変化）して以来の、邪気だった。

『……………!?!?』

間一髪で得体の知れない“口”から逃げた火黒は、城の廊下を飛び出した。目指すは屋根瓦がひしめく外である。

(狭い所で使われたんじゃ俺でもマズイかもなア…?)

生と死の狭間、その境界線をどうにか踏み留まった火黒は、裂けた口をさらに吊り上げた。

『コレだよコレ!!俺が求めてたのは、この』

「殺されるかも、という恐怖ですか?」

宝石の如く輝く一对の瞳が、男を真っ直ぐに追いかける。細められたそれらは妖しくもあり、陽炎のように揺らめいて美しかった。

空間を踏みつけ、時に着地地点との距離を“繋ぎ”、ネリは屋根を駆ける。

万物を拒絶する漆黒の球体を両手から出していく。圧縮すれば強度は上がる。薄くすれば凶悪な刃となり、細胞の結合さえ許さない。

「貴方が求めている“ヒリヒリ”とやらは、つまりそうなのでしょ
う?」

氷の女王のような銀髪の少女は、いつの間にか膝丈のドレス姿になっていた。

“百合香”と共に戦った時の姿、鬼の血を存分に吸ったであろう戦闘服である。

「次は殺されるかもしれない、でも戦わずにはいられない…その矛盾した思いに飲まれて、貴方は妖になっただんでしょ?」

『……………』

姫の寝所があつた中央の天守閣から随分離れ、二人は西のはずれまでやってきた。屋根の端と端に、黒い着流し、黒いドレスがはためている。

『……………そうかもな。だが一つだけ間違つてる』

ジャキン、と浅黒い両手から日本刀が生はえた。その彼の顔は、この上なく満足気で

『恐怖なんて 感じたこと無えよオ!!!』

戦いの狂気に染まっていた。

火黒が人間だつた、推定江戸時代中期。
17世紀末から18世紀にかけての元禄時代は、幕政が安定した平和な時代だつた。

町の道場師範を決める試合で、火黒は 黒田源一郎は、ライバルの坂井に負ける。勿論それは、真剣ではなく木刀を用いた非殺生の試合だつた。

負けたからといって敗者が死ぬわけでもなく、黒田は年相応の青年らしく落ち込む程度だつたのだ。

ライバルの一言さえなければ、黒田は“火黒”にならず人の一生を

終えただろう。

真剣だったら僕は君に負けていただろう。君は剣を振るう時、まるで躊躇いが無いからね

慰めるつもりが、修羅を生み出す辻斬りとなり。

奥義書に、“神に会うては神を斬り、仏に会うては仏を斬る”という言葉があるそうだ。そういう気概で臨めば、君はもっと強くなれるさ

その言葉は、戦闘狂の“火黒”を生み出した。戦いを求めずにはいられない、血を浴びずにはいられない狂人に。

なまじ黒田が素直な性格で、坂井の言葉通り強さを求めた結果、殺人鬼が生まれたのだ。

刑事に追われた黒田は、山で間流結界師と遭遇したがなんとか逃げ出し、ライバルに再会した。

全ての発端である、坂井に。

最後まで剣に迷いがあつた坂井は、黒田を殺すことが出来ずに死んだ。自分が生み出した修羅によって。

『戦いの刹那、命のやり取り。相手を殺すその一瞬、俺は満たされると同時に、物足りなさを感じてた』

少女が放つ漆黒の鎌鼬が、火黒の四肢を狙う。だが、驚異的な反射神経で全て回避されていた。

『求めても、与えられても満たされねえ。何かが違う。だから俺は刀を振るう』

世界から追放する禍々しい“口”は、ネリの負担が大きいため多用出来ない。7歳のネリが記憶を飛ばしてしまうほど、脳に負担がかかるのだ。残りは後3回が良いところだろう。

元々殺傷目的の異能の使用は、精神が疲弊する。逆に平気になった時、それはネリが完璧な妖に身を落とすことでもあった。

拒絶の球体を鎧の様に身にまとい、ネリは無表情のまま火黒に絶え間なく攻撃を浴びせる。反撃の隙を与えたら、速さで勝てるわけがないのだから。

『君の攻撃は……まだまだ俺の刀にはグツと来ねえな。殺気がイマイチだ』

「あら、そうですか？それでも全力で殺そうとしてるんですけど」
火黒の身体に空間転移の門を開いて、問答無用の攻撃が出来れば良いのだが、それが出来ればとうにやっている。

躊躇う、躊躇わないの問題ではない。

隙を見せれば、懐に入られてお陀仏である。痛みに怯んでいる暇が怖くて作れないのだ。

「変化しても良いんですけど……噛み殺すとか、まだやったことないんですよね」

「へえ、人間の心が邪魔するかい？……そんなんじゃ、俺は殺せないぜ？」

白人ということを考慮しても、ネリの顔は健常者と比べて蒼白だった。対人（妖）用にこれ程長く異能を使った事はない。

（せめて火黒さんがケダモノだったら蠍鎌みたいに殺せるのに……）

火黒には知性があり、元人間だっただけに複雑な会話も出来る。姿形も人間そのもので、ネリはどうにも攻めあぐねていた。

殺してやるのが、火黒にとって最高の救いだと分かっているだけに。

「……………」

ネリの迷いに気がついたのか、火黒は軽やかに跳び上がりながら舌打ちした。鎌鼬をうるさそうに全て叩つ斬り、屋根に着地する。

ネリが攻撃に移る前に、両手をあげて降参のポーズをした。

「待つてやるから変化しろよ。それじゃ、面白くもなんともねえ」

「優しいんですね、火黒さん。じゃ、恥ずかしいんで5秒間後ろ向いててください。」

間髪入れずに答えたネリに少し面食らった火黒だが、愉快そうな顔で後ろを向く。

この最大の間をつけば、ネリの勝ちではある。だが彼女はあえてそれをしなかった。

ボウン、と白煙をあげて人型を解く。そこには黒いドレスの名残を残した、今までとは違う銀狐がいた。

両耳と、九尾の内四尾が黒い。

ただそれ以外は銀糸の様に美しい毛並みだった。ネリが鏡を見ない限り、彼女が気づくことはないのだが。

そして、邪気。

今まで純粋な妖気しか無かったネリなのに、怒りに任せて覚醒したあの夜と同じ邪気を放っている。

レナモンを殺され、ヨキの甲羅を粉々に壊したあの瞬間と、同じ。

『へえ〜…もう少しみたいじゃん。』

振り返った火黒は、ニタリと笑った。

(20) チビ氷蛾登場

「…なんだこの邪気は!？」

部屋に戻って早々、藍緋は背筋がゾクつとする程の悪寒を感じていた。既に土地神級クラスに匹敵するほどの妖気、邪気である。

しかも、戦闘中なのかその放出量が桁外れだ。

「姫　　ではないな。」

治療具を外せたとはいえ、千歳をゆうに超える姫君がそんな無意味な事をするとは思えない。

あれだけ高齢な妖が、無理をして良い訳無いのだ。

「黄河!黄河はいないか!」

「…帰られましたか、藍緋さん!」

奥の研究室ラボから慌てて出てきたのは、ネリに命を救われた妖・黄河だった。

いつもなら妖の姿なのだが、今はなぜだか旧タイプの人皮を着ていた。

藍緋が問いただす前に、彼は堰切った様に報告する。

「あの娘と火黒が、西の外れで交戦中です。この邪気はどうやら妖混じりの娘が発信源で……あいつの所へ向かいますか？」

「……それを着てないと、お前でも辛いのか……」

「……はい。」

凶星だった様で、黄河は勝手に人皮を使った事を詫びた。藍緋でも息苦しさを感じるほどだ、黄河でも厳しいのだろう。

外気を完全に遮断出来るので、黄河の判断は正しいといえる。

「戦闘が始まってからもう20分ほどですが……城内にそれほど混乱は起こってません。牙銀様の配下が数十体塵になりましたが、下の方の者ですから。」

「大方、様子見して巻き添えを食らったんだろう。人皮ならどうにか大丈夫そうか？」

「ええ」

しっかりと部下が頷きを返したのを見て、藍緋は彼を伴いその部屋を出るのだった。

所変わってその頃烏森学園中等部では、限が教室で英語の授業を受けていた。

窓際の一番後ろの席である。陽が燦々と降り注ぎ、昼寝するにはうってつけの場所だ。

「……………」

だがここ数日珍しいことに、限は授業中寝ていなかった。ネリが心配で呑気に居眠りなど出来る気分ではない。

何をして胸が塞ぎ、頬杖をついて外を眺めても気は晴れなかった。

（ネリを拐った火黒って野郎……絶対に……！）

ざわ、と一瞬だけ邪気が漏れ、無言で少年は矛を引っ込める。あまり酷いと一般人に被害が出るので、どうにか落ち着かせるよう努めた。

土地神クラスの邪気となると、あてられただけでも一般人なら死んでしまう。

だが彼が無闇やたらに邪気を放ってしまうのは、今回が珍しいことではなかった。

ピクリ、と隣の教室　2年2組にいる良守がむっくり起き上がる。ちなみに数学の授業だが、彼の教科書は閉じたままだ。

（今ので……3回目か？志々尾の野郎、こりゃー参ってるな…）

高等部の方まで届いているかもしれないが、毎晩同じく仕事をしていれば邪気の質は覚える。

なので結界師の二人が、変に警戒することはない。

時音もきつとやるせない気持ちでいることだろう。限の苛立ちがよく分かるだけに、下手な慰めは逆効果だ。

右手に巻いた包帯の緩みを直しながら、良守は目線を落とす。

うーん…と打開策を考えても、そう簡単に見つかれば苦労は無く。

(だ　　！！もう、どうすりゃ良いんだよ！！)

勢い良く頭をかきむしる少年だが、誰も彼の苦悩に気づく者はいなかった。

問題なく授業も終わり、生徒達はそれぞれの帰路につく。夕焼けに染まる住宅街を歩く限は、鞆の帯に仕込んだ刀を眺めながら歩いていた。

見る人が見れば懐刀の類いだと分かるはずだが、少年の周りに人はいない。限の五感は常人よりもはるかに優れているのだ。人間の臭いが近づけば直ぐに分かる。

チャキ、とすっかり手に馴染んできた刀をほんの少し抜く。

刀身はネリの異能を宿しており、なおかつ残り香のように妖気が残っていた。

(ネリ……………)

限が口を引き結びながら心の中で少女の名を呼んだ時。

見つけたぞ。

「ッ!?」

慌てて周りを見渡すが、誰もいない。

まるで耳元で囁かれたかのような声に、限は総毛立った。

「誰だ!」

油断無く物陰などに素早く目を移し、死角を無くす為民家の屋根へ跳び上がった。妖混じりだからこそ出来る芸当である。

オリンピック1位の体操選手でも、壁の塀を足蹴にして屋根に跳ぶことは出来ないだろう。

お主、あるじの刀をもっておるな。志々尾限であろう?

「……………」

より一層厳しい目になった限だったが、何かが頭に引つ掛かった。そんな少年には頓着せず、姿の見えない声は安堵したように息を吐く。

陽が落ちておらんのでな、我は部屋から出られんのだが…。

お主に伝えておきたくてな。

「お前……まさか氷蛾か?」

いくらかは警戒を解いた限は、屋根の上で感覚を全開にしていた。視覚、聴覚、嗅覚を最大限に研ぎ澄まし位置を割りだそうとする。

いかにも。我は氷蛾だ。…あるじが今、黒芒楼の妖と戦っておる。完全変化してな

「……………」

内容が漠然とし過ぎて、少年は眉を寄せた。だが、続いた言葉に彼は息を飲むことになる。

未来でお前を殺す火黒という奴と、あるじは戦っておるのだ
馬鹿者！！

「……………」

目を見開いた限は、取り落としそうになった漆塗りの黒刀を握りしめる。さらに彼にとってあり得ないことに、屋根の上でバランスを崩しかけた。

ギリ、と奥歯を噛みしめる。彼の決断は早かった。

確かめるべく、夜行の頭領がいる実家の方へ駆け出す。人目もはばからず屋根の上を跳んでいたが、彼に気にする余裕は無かった。

変化してすぐにネリは、攻撃的な思考への違和感を抱いた。身の内から煮えたぎるマグマの如く、どす黒いモノが外に溢れ出している。

何に対する怒りかも、もはや分からない。なぜこんなに心がささく

れだっているのかも、全く分からない。

『殺さなくては…殺さなくては…火黒は…殺す…殺す…』

『おーい、嬢ちゃん。何か病んでんぞー？』

間延びした声で火黒が忠告するも、彼の顔にいつもの余裕は無い。火黒は今回で2回目の生命の危機を感じていた。

1回目は、間時守の弟子に会った時。絶界の技を使う結界師は、まだ人間だった火黒にかなう相手ではなかった。

化け狐のネリが使う7匹の色鮮やかな炎狐。これも厄介だった。

(斬った感触は皆無…だがそれで俺に止めを刺すわけでも無え…一体何考えてんだ、こいつ?)

左腕を塵にまで分解されてしまっていた火黒だが、致命傷には程遠い。だが既に足場の屋根は穴だらけだった。

ネリは紫の瞳を鈍く光らせ、禍々しい邪気を放っている。焦点などとうに合っておらず、火黒を見ているかも怪しい。

男は舌打ちを漏らし、ふと目線を離れた建物へ向けた。すると見慣れた藍色の頭が目に入る。

『あれは…藍緋じゃねえか』

ひとまず引くか、と火黒はネリの立っている屋根を建物ごと崩すことにした。

『おい、嬢ちゃん！俺を殺したいなら、追ってこなくちゃなア！』

フツと目の前から掻き消えた火黒に、銀色の狐が首を巡らす。炎狐達は心得たかのように散開し、男の行方を探し始めた。

その時、ピシッとネリの足元から嫌な音がした。

『少し寝てな』

いきなり屋根瓦が弾け飛び、銀狐の足元は脆くも崩れ去る。

呆気なく瓦礫に足を取られたネりに、火黒は追い打ちをかけた。

頭上から渾身の力で刀を振り下ろす。

『つ！？』

ネリは拒絶の盾で防いだものの衝撃は消せない。崩れ落ちる瓦礫に背中から押し込まれ、あっという間に彼女の姿は見えなくなった。

炎狐が主の危機に流れ星のように集まって来たので、もう一仕事する。

ネリを飲み込んだ半壊程度の建物を、さらに斬って斬りまくる。瓦礫の山にネリを埋めて足止めさせると、7匹の炎狐はフツと空気に解けた。銀狐が意識を失ったようだ。

土煙をあげながら倒壊させた建物を振り返りもせず、黒衣着流しの

男はその場を後にする。

ひとつ飛びに白衣の女性の前へ降り立つと、火黒は口を開いた。

『藍緋。あれは何だ？』

「…お前、よく平気でいられるな……アレにあそこまで近づけるとは…」

『そんなことは聞いてねえよ。あの嬢ちゃん、理性ぶつ飛んでるぜ。このままじゃあ、この土地までダメになる』

太陽の制約がある人間世界で戦うとなれば、まず間違いなく火黒は負けるだろう。

彼が人皮を被って昼間も戦うとなると、全力が出せず面白く無い。

黄河は藍緋程強い訳ではないので、この距離でもドス黒い邪気のせいで顔が青い。根性で何とか立っている状態のようだ。

火黒は、彼が一番懸念していることを白衣の女性に確認した。

『土地が傷つくとなりや、姫さんだって出てくるんだろ？俺としては、邪魔しないで欲しいんだけどねえ』

だから、ネリを“まとも”にしたいと。

誰にも邪魔されず太陽も関係無いこの異界で、真に強い彼女を殺したいと。

少し意外そうに目を見張った藍緋は、慎重に口を開く。

「火黒。お前は一体何がしたいんだ？ネリに色々吹き込んだの、お前だろう。」

『良く分かったな。…俺はまともな嬢ちゃんと殺り合えればそれでいいんだ。』

捉え所の無い表情で、包帯の奥に隠された瞳が光る。また何か企んでいるような火黒に、女性は探るような目を向けた。

だが彼は肩をすくめた後、顔色の悪い二人に背を向ける。

『1時間待ってやる。それ以上かかるようなら……仕方ねえ、今の嬢ちゃんを遊ぶとしようかねえ』

言うまでもなく火黒の“遊ぶ”は、“殺し合う”ということだ。やめると言ったところで聞く男でないのは、良く分かっている。

火黒が欄干を蹴り、空中に身を踊らせるのを見届けると、藍緋は急いで駆け出すのだった。

(21) 恨みと救い

限が息急きききって墨村家に駆け込んだ時、夕焼けは地平線の向こうへ殆ど沈みかけていた。

玄関で倒れ込んだ少年に、慌てて正守が駆け寄る。

「おい限ッ！？すっかりしろ、何があつた！！」

息を整えるのもそこそこに、限は己が信じられる唯一の人を見上げる。良守も騒ぎに気づいたのか、自室から降りてきた。

限は姿勢を正し、どうにか呼吸を整えて正守だけを見る。声が震えたのは、呼吸の乱れのせいだけではなかった。

「ネリが今…火黒と戦っているのは、本当ですか？」

「……………！」

「なッ！？　　って、え？それって兄貴刺した奴だろ！？」

正守が息を飲み、良守が玄関先で驚きの声をあげる。限の真っ直ぐな目に、夜行の頭領はこれ以上隠せないことを悟った。

下手に隠した所で、勝手に黒芒楼に乗り込まれても困る。

「…そうならないよう、藍緋に言付けを頼んだ。今頃、誤解も解けているはずだ」

「でも、氷蛾が…！」

話を続けようとした限をなだめ、とりあえず場所を移す。客間に移動して、先程氷蛾から聞いた話を限は繰り返した。

妖の敵である太陽が、地平線に沈む。

限が漆塗りの刀を取り出すと、部屋に声が響いた。

あるじが、危ない。

先程限に話しかけたのと同じ、高くて幼い声だ。ひっきりなしに不穏な気配が墨村家に現れるので、繁守は腕を組んだまま渋い顔をしている。

最初に現れたのは小さなプラカードだった。

墨で『氷蛾の部屋』と横文字で書かれた表札が、にじみ出る様中空中でふわふわ揺れる。

その少し右の空間に ちょうど刀を握る限の左腕の上に、裂け目が発生した。

『あるじの闇が、大きくなってしまった。』

幼い少年の声と共に、濃紺に白抜きの六甲紋が描かれた袖から、小さな白い手が出てくる。

透明感溢れる水色の髪を揺らし、金色の瞳を悲しげに伏せた氷蛾は

結界師の家に足を踏み入れたのだった。

「あれ…？なんでお前、縮んでんの？」

以前の氷蛾と直接会ったことのある良守が、首を傾げる。

6歳児程度の身長になった氷蛾は、良守の腰に届くぐらいしか無い。顔形もそれ相応に幼くなっていた。

水色の髪に紛れるように、白い触覚が揺れる。

『我は鬼百合に殺されかけたが、あるじに妖力をもらい命を拾った。まだ以前ほどの妖気には戻っておらん』

ちよこん、と一同と同じく畳に正座した氷蛾は、限の隣で神妙な顔になる。

『契約の刻印もまだ有効なのでな、我はあるじの状態がある程度分かるのだ。…今のあるじは闇に傾いておる』

「闇とはどういう意味だ」

正守が厳しい目で小さな妖を見る。それにチラリと目を向けた氷蛾は、『そのままの意味だ』と続けた。

『闇とは詰まる所…邪気や瘴気のような、人体に悪影響を及ぼすモノを発する状態のこと。』

…黒芒楼の異界が壊れる程のな。』

吐き捨てる様な言い方に良守が反発する。なぜか理不尽に責められている気分になったのだ。

…それは、ある意味正しかった。

「なんでネリは、そんなことになったんだよ!？」

ネリが異世界から来た人物だと知っているのは、この場で正守と良守、それに限だけだ。翡翠は烏森監視の為、もう墨村家にいない。

当然、繁守と刃鳥はネリの異世界事情まで知らなかった。

金色の瞳を物騒に光らせ、幼い氷蛾の口がへの字に歪む。

小さな拳を握りしめ、言葉に出来ない怒りを目の前の少年にぶつけた。

否、ぶつけたかった。

『お前がッ…!!』

「…な、何だよ。俺が何かしたのか？」

ネリに禁じられているので、良守に真実を話すことは出来ない。

未来で烏森の力を自由に出来る彼が、ネリごと闇の鬼を殺す役目を負っていたことは。

血が出るほど唇を噛んでも、幼い彼はこの激情をどうすればいいのかわからない。

だが助け舟は意外な所から、やって来た。

あまり悠長に話している時間は無いぞ、氷蛾

良守の横で、藍緋の切迫した声が届いた。正守が肌身離さず持っていた金色のダガーが、黒芒楼との橋渡しをする。

すぐに見慣れた姿が客間に加わった。

「正守、状況が変わった。力を貸してくれ」

「…火黒との戦闘だな？」

白衣を翻して登場した藍緋が頷く。

そのまま氷蛾に近づくと、安心させるように軽く頭を撫でた。

『藍緋、あるじは！？』

「まだ大丈夫だ。落ち着け。」

藍緋は結界師達に向かいあった。皆困惑の色を浮かべて説明を求めている。

生まれて1ヶ月経っていない氷蛾とは、云百倍の年月を生きた藍緋だ。良守のことはおくびにも出さず、別の方へ意識を向けさせる。

「ネリは今己を見失い、完全な妖になりつつある。…姫の血縁ならば、土地神級の妖だ、不安定な今を叩くしかない」

聞き捨てならないことを女性がサラッと洩らすと、予想通り正守が

藍緋に詰め寄った。

「藍緋！今、何と言った！？ネリが…黒芒楼の主の」

ふと繁守は、庭に舞い降りた新しい気配に目を向ける。
蜈蚣率いる戦闘員が到着したようだった。

「血縁だ。正確には姫の孫にあたるそうだ。」

その部屋にいる全員が、息をのむ。初めて聞いた時、藍緋もそれはそれは驚かされたものだった。

妖に無いはずの“家族”という概念。

この世界にネリを組み込む過程で、そんな常識は吹っ飛んでしまったようだった。

「その辺の詳しい話は私も訊かなかった。ただ鏡が…」

「鏡？」

限が鋭く聞き返すと、藍緋はハッと我に返る。

自分から話し始めたがこんな悠長に話している場合ではないと、今さら気がついたのだ。

「話は後だ。ネリを半妖まで元に戻したい。力を貸してくれないか、正守。」

『…我からも頼む。あるじを見捨てないでくれ』

「愚問だな」

薄く笑った正守が、背中に“七”と描かれた羽織を翻す。庭へ続く障子を開けると、そこには夜行の精鋭達が指示を待っていた。

「……………黒芒楼へ向かう!」

「……………ハイ!」

黒芒楼と烏森、土地神や人間を巻き込んで、ネリの未来は大きく変わっていくのだった。

姫は永く生きた狐の化生だった。

生前は人間を化かすのが好きな人畜無害な狐で、いつの間にか黒芒くろぼうまきという異界に流れ着く。

小さな土地なりに居心地は良く、仲間の狐はとうの昔に皆生を終えていたが、彼女は化生　妖となって住み着いた。

常に黄昏の空は、人間世界ではあり得ない藍色と紫色が入り交じった、太陽が無い世界。

美しい世界が気に入り、彼女は土地の真ん中を獲得した。その土地には他にも小さな妖達がいたが、彼女より強い者はいなかったからだ。

江朱が“姫”と呼び始めてからは、本名は胸の奥にしまって他の妖

にも“姫”と呼ばせる。

永く住み着いて、いつの間にかその土地の主ぬし　土地神へと、彼女
は変化を遂げた。

『……まあ。物騒な気配がするわねえ……。大丈夫かしら、あの子は』

城の中央、風通しの良い寝所で姫は体を伸ばして寛いでいた。それを邪魔するようなピリピリと肌を刺す邪気。

ネリがいよいよ妖になりそうな予感が、胸をよぎった。

土地神に力を注いだ結果、黒芒の異界そのものにもネリの力が及んでいる。そうなる異界も邪気の影響も受けやすいと、姫は分かっていた。

分かっては、いるのだが。

『これ以上永く生きるのも飽きたし……どうしようかしら』

袖で上品に口元を隠すと、コロコロと上品に笑う。

蟲で城内の様子を見たのか、白がいつもより早口で来室を告げた。事態が切迫しているのは、たかさんの“目”を持つ蟲使い　白も、分かってはいる。

だが仕えている主人が、いたって普通にしているのを見て内心首を傾げた。

「姫。あの者をいかがするおつもりで……？」

『ふふふ……。ネリには楽しませてもらったわ。最期に何か、してあげたいわねえ』

ネリの旅した世界の話は、好奇心旺盛な姫の興味を引いた。

姫の世話を担当する白も、時々一緒に異世界の話聞いていて。

いつも希薄な白の表情に、幾分か色が戻っていた様で姫はどこか嬉しかったのだ。

「邪気にあてられて、下層の者が塵になったようです。城にも影響が出始めておりますが……。」

『邪気、ねえ……』

光を見つけないと飲み込まれるわよ？

私の愛しい娘……

早くあちらへお帰り。貴女には太陽がお似合いよ

…

形の良い紅い唇は、袖に隠されたまま優しく微笑んでいた。

数々の世界を渡り歩いた。

“可能性”の世界、それは漫画や小説の中だけで存在するはずの、実際にはあり得ない世界。

否、『あり得ない』とお互いに思い込まされているのが真実だ。

だが、世界は幾重にも重なっている。

隣り合う世界が、どういった形でお互いに影響を及ぼし合うか。それは“文字”であり“絵”であり、“言葉”であった。

(初めての平行世界が…結界師の世界とは、ね……)

今までネリが“修正”してきた世界は、彼女が持つ知識に該当しない世界だった。

こんなものか、とあまり期待せずにネリは世界渡りを楽しむ。

魔法があったり、天使や悪魔、魔物や聖獣がいたりとまあまあ面白かったのも事実で。

彼女は彼女なりに“使命”だと割りきって世界の要求に応えていた。

(それなのに、さあ……!!)

ドス黒いモノが、ぐるぐると瓦礫の下で渦巻く。意識は半分程覚醒に近づいていた。

(あれだけ働いてやったのに、この世界で殺すこと無いんじゃない……?)

それは、裏切り。

生まれた時から、この世界に来ることは決まっていたのだから。

金色のコンパクトが、その証拠だった。

過去と現在、そして未来は同時に流れていると言う。

庇護者に捨てられ、孤児院でもつま弾きにされ、寄ってくる大人達にも最後は『化け物』と罵られ。

いつ『私』の存在は、悲しく処理されると決められたのだろう。

初めて“世界”の要求に逆らった『私』は…好きな人、一人さえ護らせてもらえないのだろうか…

護れないなら、“不安”を殺せ。

ピクツと黒い獣耳が震える。

“不安”を摘み取り未来を変えてしまえ！

どンドン負の感情に流されていくネリを止められるのは、ただ一人だけ。

その者の為に彼女は戦い、その者がいるから彼女は人間でいられる。

(げん……、ごめ…ね…?)

瓦礫の下で、悲しそうな狐の鳴き声が響いた。

(22) 憎しみの先に

正守達が黒芒楼に足を踏み入れようとしたその瞬間。

ネリの空間転移の門は、空気に溶けるように消えてしまった。

まるで『邪魔をするな』と言わんばかりのそれに、藍緋が苦い顔をする。

「どうやら本当に時間が無いようだな…。仕方ない。いつも我々が使っている入口に案内しよう」

多少時間は食うが、ネリが作った門がいつ復活するか定かではない。時間短縮のため、蜈蚣の乗り物に乗る人数を減らすことにした。

「限。ネリを正気に戻すのはお前しかいない。だが、前衛には出るな。」

「はい。」

厳しい顔で限を見る正守の心中は複雑だった。火黒という妖は、ネリと限の間に立つ“壁”そのものなのだ。

二人にとっついていまや“死”の象徴とさえ言える。

そんなモノがいる黒芒楼に、限を連れて行って良いものだろうか。

(ネリには悪いが…状況を見て俺が片をつけよう)

静かに決心した正守は、千里眼の箱田、彼の護衛で行正、さらに裏会総本部所属である白道と、黄道を黒芒楼へ連れて行くことにした。案内役として、藍緋も連れていく。当然、憤慨した少年がいた。

「何で俺が行けねーんだよ！？ネリは大切な仲間なんだぞ！！」

「この馬鹿タレ！！お館様をお守りするのがお前のお役目、烏森を離れられると思つとるのかア！！」

当然とばかりに限に続こうとした良守に、当主のチョップが入る。正守も弟の反応を予想していたのか、ヤレヤレと肩をすくめた。

「悪いけど、^{おまえ}正当継承者は連れていけない。…危険な場所だからな」
「……………っ」

良守は唇を噛み、地面を睨み付ける。理屈は通っているし、祖父の言葉は至極もつともだ。だがそれで、納得出来るかは話が別である。

良守がギリ…と拳を握りしめると、限が追い抜き様に囁いた。

ありがとう、と。

「志々尾…？」

「ネリは俺が連れ戻す。…………お前がこれ以上気に病むことはない」

藍緋に続いて乗り、限は漆黒の衣の少年に背を向けた。良守を慰める様な限の様子に、正守が微笑む。

以前までの“人間嫌い”な限ならば、考えられない言葉である。

もう陽は沈んだ。

蜈蚣に乗っている面々は、皆夜行の戦闘服を纏い夜闇に溶け込む。藍緋も一応暗色の着物に衣装替えしておいた。

ふわりと“ムカデ”に酷似した乗り物が浮かび上がるのを、良守は唇を引き結んで見守っていた。

歴史を変える それは世界を破綻させ得る大罪。

秩序を乱し、未来を閉ざしかねない行為は“世界”が許さない。だがそれでも、ネリは助けられるならば助けたかった。

目の前で生きている命を、歴史の通りに見殺しには出来ない。

(命は、尊い。私の世界は……狭い。)

手が届く範囲だけでも、自分の知識で守れるならどんな代償だって払う。

たとえネリ自身が“代償”であっても。

『火黒……殺す……』

目を開けると、一面瓦礫の山で銀狐は顔をしかめる。だが、九本の尻尾が体が潰れるのを防いでいたようだ。

鎧の様に体を覆っている尾に、グツと力を入れる。

どうにか隙間を確保すると鏡渡りを発動し、金色のコンパクトを目印に転移した。

一瞬にして“道”を通り過ぎると、そこはもう城のどこか廊下。残念ながらネリに見覚えは無かった。

(目印が動いたか……)

コンパクトを回収し首を巡らせながら、低い目線で足を進める。ネリの通った跡が黒ずんでいったのを、振り向かない彼女は気がつかなかった。

「……………つ、う」

ネリが廊下を曲がり見えなくなった後、屋根からどさりと落ちてきた者がいた。

金色のコンパクトを見張っていた黄河である。

着ていた人皮は所々溶けていて、あまり意味を成していない。

『あい、さんに……報^レこく……』

禍々しい邪気のせいで虫の息になっている黄河は、どろりと溶けた

人皮の中で腕を宙に伸ばす。

それは誰にも気づかれることなく、黒ずんだ床に落ちた。

烏森の仕事へ行く準備をしていた時音は、突如天井付近から落ちてきた存在に飛び上がって驚いた。

何も無い所から、自分の祖母が落ちてきたのだ。

「時音……?」

「おばあちゃん……?え、え!？」

思わず落ちてきた所を見上げると、ブラックホールの様な漆黒の穴がある。

すぐにフツと消えてしまったそれはひとまず置いておき、時音は祖母に駆け寄った。

「何があつたの、おばあちゃん!？」

「貴女その格好は…! 時音、今は何時？」

一瞬混乱していた時子だったが、孫が夜の仕事服に着変えているのを見て青ざめた。

時子がネリと話したのは、3時を過ぎたぐらい。だが窓の外はすっかり暗くなり、時音が仕事着を着ているということは夕食も済んだ

ということだ。

案の定、時音はちょうど今から烏森へ向かう所だった。

「ネリさんが妖の姿になっていたわ。どうやら私は数時間程飛ばされていったようね…。」

「飛ばされた…？」

慌ただしく二人は情報交換し、時音はネリと火黒が戦い始めたことを伝える。そして夜行の戦闘員が、先程黒芒楼へ向かったと話した。

「そうですか…。では貴女は、お務めに行きなさい。ネリさんは夜行の方に任せましょう」

「うん……。」

煮え切らない様子の孫に、師匠でもある時子は厳しい目を向ける。

「貴女が第一に考えるべきは烏森です。黒芒楼の動きも不透明なので、こちらには万全の準備をしなくてはいいけませんよ」

ネリさんが帰ってくる場所でもあるのですからね。

付け加えられた祖母の言葉に、ネリが大きく頷く。

「はい！」

立ち上がった時音に、もう不安の色は無かった。

一方とりあえず人型に戻ったネリは、紫水晶の瞳を妖しく光らせながら廊下を進んでいた。

本人に自覚は無いが、邪気は幾分か収まっている。

だが“火黒を排除する”という一念だけは、ネリの中で揺るがなかった。

…逆に、その思いしか彼女の心の中には存在しない。

烏森や隈、夜行や藍緋その他諸々のことは、心の奥底に沈んでいた。

「火黒…どこへ行つた…？」

幽鬼のような表情で銀髪を揺らす人型のネリは、重い体を引きずる。

一歩一歩が重くて、足が鉛のようなのだ。

しかもそれが少しずつ増えている感覚がある。

ネリが放つ邪気で雑魚妖怪が死に、その力を吸収してさらに侵蝕範囲が広がっているなど、妖狐は知るよしもなかった。

そんな歩く死神状態のネリの前に、現れた男がいる。

「止まれよ娘。お前の仕事は姫の回復だろう？ さっさとその邪気を引つ込めろ」

黒の法衣に身を包み、僧侶の様に紅い袈裟を纏う妖
江朱である。

小学生程の身長だが幼さは皆無で、伊達眼鏡の奥には冷たい怒りがある。

彼は城の管理部として、黒芒楼の城を美しく保つのが仕事だ。怒るのも無理はない。

「……………」

無表情のまま首を軽く傾げるネリは、江朱のことなど目に入っていない。

新たな情報源が現れた位にしか、考えていなかった。

「火黒は……………」

「引つ込める、と私は言ったんだ。これ以上城を汚したら、姫が許しても私が許さないぞ」

「……………」

有用な情報は持っていない、と判断した妖狐は止めていた足を動かし始める。

無視された男のこめかみに、ピキッと青筋が立った。

「ハイ、返事は？」

「……………邪魔…しないで…」

拳を突き出す様にネリが、軽く握った小さな手を前に出す。怪訝そうな顔をした江朱は、次の瞬間目を見開いた。

「なっ
」

「さよなら」

発動の言葉も簡略化し、より大胆になる。床と平行に開いた漆黒の“口”は、濃い邪気を振り撒いてその顎あごを開いた。

獣の様に“それ”が飛び掛かると、法衣の切れ端が舞う。

「ッ
」

小柄な男を、漆黒の口は容赦無く喰らい尽くした　いつぞやの氷蛾よりも、呆気なく。

抗あひがう声は一瞬で静かになり……

「火黒…ド…」

……世界から追放された男は、跡形も無く塵になったのだった。

『「りゃ、凄いな』

ネリが歩みを進めるのを遙か遠くから眺めている火黒は、屋根の上
にいた。江朱が成す術すべもなく消え去ったのを、笑みを浮かべて見て
いる。

『面白くなって来やがった…！』

大きく裂けた口を更に吊り上げ、両手を懐にしまうと軽い足取りで歩き出す。その様子は気味悪い程、嬉しそうだった。

『あと30分つてとこか』

今度こそ本当に死ぬかも知れない相手に、着流しの男は至って冷静である。

生身の時なら絶対に敵わない相手と、戦^やり合うことが出来るのだ。男にとって至福の時間だった。

『あのままでも良いんだけど。役者が揃わなきゃなあ』

誰にともなく、男の呟きは薄闇の空へ消えていく。

ネリを、更なる狂気へ。

ネリを、完全なる妖へ。

その為に必要な者^{モノ}は？

『俺が待つてられる内に早く　来いよオ!!』

手近にあった建物を真つ二つに叩つ斬る。

火黒の刀は、妖混じりの少年の血を吸いたくてウズウズしていた
…。

(23) 戸惑いと光

「お前は黒芒楼行かねーのかよ。ずっとあいつと一緒にいたんだろ？」

火黒との戦いが始まった際は、烏森へ逃げるよう言われておる故…我は動けぬ

常人が当てられたら発狂しかねない邪気を、人型のネリが発していた頃。

烏森では若き22代目達とネリの僕しもへ、氷蛾が話をしていた。

翡翠の足輪をはめているので、烏森の影響は受けずにいられる。だが念のため、彼は異空間の中に避難していた。

「ネリちゃん、大丈夫かな…。」

「兄貴も志々尾も、まだ何か隠してるっばいんだよな。　　ったく水くせえ」

ガシガシと頭に手をやる良守を、時音は横目で見ながら首を傾げる。時子も全てを教えてくれている訳では無いので、時音にも疑問があった。

(ネリちゃんが“妖”になってた…ってどういことなんだろう…)

？それになんで火黒と戦うなんて…)

火黒とネリ。

烏森と黒芒楼。

“烏森を守る”役目がある良守や時音に、核心に触れることはあまり知らされていない。

限が氷蛾の話をした時も『未来の話』は省いて正守に報告していた。

周囲は『お前達は心配するな』と、配慮しているのだ。

烏森のことだけを考える、という意味でもある。

「氷蛾はどうして烏森へ逃げなきゃいけなかったの？」

“妖”に対して言う言葉としては、確かに変である。雪村の結界師の疑問に、氷蛾は慎重に言葉を選んだ。

我が側にいても、あるじが動き辛くなるだけだ。それに奴等の狙いが烏森なのは、変わっておらぬ

どこか固さを感じる幼い声に、結界師二人は納得いかないような顔をしていた。

烏森を守るなら、ネリも夜行の戦闘員として限と同じくあればいい。誤解を解くだけで済むはずが、なぜ火黒と戦うなど…『妖になる状態』に陥っているのか。

闇に傾いた原因とは一体何なのか。

「志々尾のヤロー、変に静かな目しやがって…」

『調子狂うんだよ……』とゴニョゴニョと口ごもる少年に、時音は観念したように息を吐いた。

「ま、あたし達がここで言っても始まらない。ネリちゃんも頑張ってるんだし、信じて待ちましょ」

「……そうだな」

結局、結論が出ることはなく二人はそれぞれ巡回を始めるのだった。

『やあ、待ったかな？』

「……」

背後で発せられた男の声に、ネリは振り向き様に変化した。白煙から飛び出した狐は漆黒と銀の九尾をピンと張り、戦闘体勢に入る。

グルルル…と、獣らしい唸り声が静かな廊下に響いた。

『あらら、言葉まで分かんなくなっちゃった？つまんねエなア。俺君に訊きたいことあったのにさ！』

ひとつひとつの尻尾の先に、バスケットボール程の火炎玉が灯る。これが返事、と言わんばかりに9つの大砲が打ち出された。

勿論直線ではなく、死角を攻める屈折した軌道　まるで、追尾ミサイルだ。

『おっと。君、こついつの出来たのか。もっと早く教えてくれよ』
手始めに初弾を刀で斬ると、火黒は次弾も真つ二つにした。3個目を切った所で、刃が溶け落ちる。

だが男が気にする様子は無く、むしろその熱量に感心していた。

『牙銀程じゃ無エにしても、人間にしちや上出来だ。』

次々に打ち出される火炎の玉に、火黒はヒラリと欄干に乗った。脚力にものを言わせて、隣の建物へと跳び移る。

360度、全方位からの攻撃を男は片手だけで全て斬った。

斬られた後の火炎玉は、スイカを切ったかのように床へ散らばり延焼する。

火の海になった廊下には目もくれずに、ネリはさらに炎の技を繰り出した。

コエンリユウ！

炎の灯った尻尾をぐるんと勢い良く回すと、燃え盛る円盤が生まれ火黒を追う。

2回、3回と重ね計10個に及ぶ炎の渦が、辺りの物を巻き込みながら男に迫る。

同じく火黒は斬ろうとしたのだが、刃が折れたので失敗に終わった。仕方なく身をひねってかわすが、裾を少し焦がしてしまう。

『中にあの黒いの入れてたんだ？良く考えたね』

『…………』

銀狐は何も答えない。無言で今度は無数のガラスの刃を滞空させた。それらは空間転移で消えたネリに変わり、火黒の周囲を取り囲む。

『隠れんぼ？ やっぱ君って臆病なんだ』

ウルサイ

姿は見えないが、火黒は彼女が反応を示したことに心が踊る。まだ人語を忘れていないようで、どこか安堵している自分がいた。

(…………？何考えてんだ、俺は)

殺し合いが出来れば、満足なはずである。どんなに強い相手だろうと、どんなに桁外れな異能を相手が持つていようと、戦えれば良い。

相手が強ければ強いほど、火黒の心は猛り狂い身体は歓喜にうち震える。

その、筈なのに。

(俺は…戻って欲しいのか？こいつが……人間になれるように……？)

狂気に吞まれ、完全な妖になったネリと 手がつけられない程強くなるだろう彼女と、戦いたい自分。

丁寧に挨拶してきて、小動物のような表情をする小さな少女と、もう一度話をしたい自分。

る。

「ちょっと良いかな」

「構わん」

ムカデの先端に術者の蜈蚣、比較的尾の方に夜行の戦闘員。そのち
ようど中間に、二人は座った。

今の藍緋は、随分昔に呉服屋の男にもらった和服姿をしている。
薄桃色の帯は後ろで高く結んで長く垂らし、振袖には細やかな花が
散らしてあった。

全体的に藍色なので暗色なのだが、藍緋が着ると儂げな印象を与え
る。

「氷蛾が断片的に話していたんだが…この世界がネリにした仕打ち
というのは何だ？」

「……………」

口の軽い奴め、と藍緋は内心舌打ちを漏らした。

(ネリに口止めされているというのに…!!)

幼い氷蛾に上手く追求をかわす芸当は、まだ早かったようだ。眉を
しかめて顔を背けた藍緋に、正守は声を落としてはつきり言った。

「火黒が……限を殺す妖だというのは知っている。」

「……………!?!」

「…おそらく本人も、知っている」

さらに目を見開いた藍緋は、正守の肩越しに妖混じりの少年を見た。その少年は、14歳とは思えない静かな表情で眼下の岩山を見つめている。

知ってて、連れてきたのか。
知ってて、ついてきたのか。

声も出ない女性の、長い振袖がはためく音が響く。目まぐるしく頭を回転させ、必死に言葉を紡ごうとする藍緋に男はフツと笑った。

「本当に優しいね、藍緋は。」

「…私が優しいなら、お前は底抜けの阿呆だ。対した策も無いのにあんな状態のネリに近づくなど……………」

「策ならある。……………ネリに訊くのが筋なのは、重々承知の上でお願いだ。こうなつた原因を教えてください」

「……………」

頭くぶを垂れる夜行の頭領を、黒芒楼元・幹部の藍緋は藍色の瞳で見つめる。

その必死な姿に、銀色の少女が自分に笑いかけた気がした。

藍緋さんは、生きる権利があるんです。幸せに、誰にも邪魔されずに生きる権利が！

あの時、月光一色に染まった狐は宝石の様な瞳で女性を見ていた。感情が乏しくなる前の、『生きている』少女だ。

姫様の延命は私も考えます。必ず白を説得して、障害物も全部叩き壊して、黒芒楼の皆も幸せになれるように私、

“ ”

！！

「……分かった。」

「……！」

正守が顔を上げると、うつすら微笑んだ藍緋がいた。それは正守に向けているようでもあり、目に見えぬ誰かに微笑みかけているようにも見える。

「私も……“頑張つて”みるか。……全て教えよう。ネリがなぜ鳥森に落とされたのか、なぜこの世界だったのか。」

月が欠けるなら、^{まはゆ}眩い星々を天に置こう。

闇が深いなら、^{かがりび}沢山の篝火を地上で焚^たこう。

人間の友として、妖が協力するのもまた一興。

「お前達にとって辛い話になる。覚悟しろ。」

人間だろうが、妖だろうが、そのどちらの血も引いていようが関係ない。

皆の気持ちは同じ。

「ああ。覚悟なら、出来てる」

ネリを助けたい、その一念で妖と人間の心が一つになった瞬間だった。

(24) 火黒の求むもの

『惜しかったねエ。もう少し右なら俺もヤバかったかも、しれねえが…』

男は無事な右手で、挟られた左脇を押さえる。黒い衣は焼けただけ、全身に巻かれていた包帯も腹の部分は千切れて吹っ飛んでしまっていた。

左腕は肩口から先が無い。左脇からは紅い血がドクドクと流れ落ちている。絶体絶命の状況にも関わらず、火黒は笑みを浮かべていた。

『…順調に近づいてるねエ……』

それは誰に対しての言葉だったのか。姿を消しながらも火黒の隙を突こうとするネリには、関係ないことだった。

殺せれば、それで良い。

原作で限と藍緋を殺す存在など、消えるべきだ。

(ゲ……ン?)

闇に傾いた銀狐の意識に、何か光が走る。それはほんの小さな瞬きだが、確かにネリの中で輝いた。あれは何。

この感情は何。

タスケテ、ワタシは、化け物ジャナイ…

『……………』

スツと火黒の目が細められる。楽しそうだった笑みは姿を消し、押さえていた脇腹から手を外した。舌打ちしかねない声音が、裂けた口より零れる。

『まさか。ここまできて怖じ気づいたか？……………ふざけんなよ、お嬢ちゃん』

攻撃が止んでしまい、何も斬るものが無くなった火黒は剣呑な目付きで宙を睨む。

そこにさっきまで揺れ動いていた“感情”は無かった。

『そんなナリで化け物じゃ無いだア？…馬鹿言え、そんな邪気振り撒いて人間だとでも？
君は妖側こっちなんだよ……………最初ツからなア！』

ジャキン、と右腕の至るところから刃が生える。そのまま火黒は南西の空に目をやった。

空に浮かぶ小さな黒い影に、男が嗤わらう。それは勝ち誇ったような、待ちわびたような笑みだった。

そして影は徐々に近づいて来ている。

『隠れてばかりじゃお前に俺は倒せねえ。獣らしく噛み殺してみろ』

よ、君にそんな覚悟無いだろうけどさ。』

いきなり煽るような言い方をする火黒を、変だと思う余裕はネリに無い。銀狐が異空間から出てくるのを待たずに、火黒は南西の方角へ走り出した。

(!?)

突然の行動にネリは慌てて飛び出して、男の跡を追う。“イツナ”を出す余裕が無いので、一番操作しやすい鬼火玉を打ち出した。

だが、まるで背中に目があるかのように火黒は軽々と避けていく。

男と同じ屋根を駆け、時に何も無い場所で空間を拒絶し踏みつける。火黒の向かう先に何かがあるのか、銀狐にはどうでもよかった。

『逃ゲルナ!!』

諸悪の根源が逃げてしまう。火黒を殺さなくては、逃げられては困るのだ。

(…何デ困ルンダツケ?)

ネリの心を『何か』がぐちゃぐちゃにかき乱す。それは正常な判断さえ鈍らせ、少女に何も考えられないようにした。

『お願い。未来ノ為に……死んデ』

存在を拒絶し喰らい尽くす黒い“口”が、火黒の背後に生まれる。操作の為に、銀狐の足が若干遅くなった。

『ククク……ハハハッ!!』

脳に走る激痛で顔を歪める狐に、火黒は駆けながら可笑しそうに笑った。遠く前方に浮かぶのは何やら長く、太い影。

背後からは江朱を一瞬にして喰らった、禍々しい獣のような“口”。危機的状況なのに、男は“可笑しくてたまらない”と高笑いしていた。

『…待つてたぜエ!!』

ぐん、と加速した火黒は次の瞬間真下に消えた。ネリはいきなり男を見失い、集中が途切れる。ほんの30秒程しか形成出来ない凶悪な“口”は、悔しそうに身をよじりながら空気に溶けた。

それはまさに、ネリ的心情を形にしたかの様な消え方で。

紫水晶の瞳は一瞬にして、気が狂わんばかりの怒気に極限まで開かれた。

『……………!!』

狂気に支配された咆哮が、藍と紫の入り交じる空を振るわせる。どす黒い邪気を怒りにまかせて解放しながら、銀狐は天に向かって牙を剥いた。

「皆！城の西側に包帯だらけの男がいるヨ！ネリが追ってる……こ
つちに向かつてるヨ！！」

岩山を抜けるとそこには、絶景が広がっていた。

風に遊ばれる度、複雑な波紋が広がる様子は、芒とは思えない。城
を囲むように輝く、まさに黄金の海。

箱田の報告に、夜行の頭領はひとまず息を吐いた。

「無事だったか…戦況はどうだ？」

「ネリが押してる…アレ、男が消えたヨ？」

千里眼の箱田が見つめる先では、黒煙が立ちこめる城の一角で狐が
まさに攻撃しようとしている。

だが、満身創痍の男が消えた事で不発に終わったようだ。

人間の目では点で見えるか見えないかの距離。それだけ離れた所か
ら、箱田は消える寸前男と目が合った気がした。

「？……あの目は……ぐツ！？」

いきなり力が抜けて箱田が膝をついた。周りが慌てて駆け寄る前に、
“それ”はある人を除いた皆に襲いかかる。

瘴気　邪気と言っても良い　禍々しい空気が、重くのしかかっ
たのだ。

まるで酸素が一気に薄くなり、尚且つ体が金縛りにあったかのように動けなくなる。

とにかく息苦しく、無意識に体が酸素を欲してしまう。

ムカデを操作していた術者、蜈蚣も胸を押さえて倒れこんだ為、一行は空で立ち往生するしかない。

このままでは墜落しかねなかった。

「これ程、とはッ…！」

戦闘要員ではない箱田と蜈蚣が倒れるのを見て、正守はすぐに二人を結界で囲んだ。直接肌で触れるより大分マシな筈である。

行正は箱田がいる結界の側にいるが、刀で体を支えなければまともに動けなさそうだ。

白道と黄道も反射的に邪気祓いの呪符を己に貼り付け、なんとか意識を保っている。

蜈蚣は自分が意識を失えば、ムカデの形自体が無くなると分かっているので何とか意識を繋ぎ止めていた。だが、それが精一杯だ。

耐性の低い者から倒れたということは、この中でまともに動けるのは

「頭領！この邪気はネリの…？」

志々尾限、ただ一人である。なぜなら彼は言うまでもなく、邪気をその身に持つ妖混じりだからだ。

だが、それを差し引いても限はなんの影響も受けていなかった。

勿論藍緋は顔色こそ白いものの、そこは幹部級の妖。クラスネリの怒り任せの邪気に何とか耐えた。

「限、何ともないか？」

「はい、全く何も…」

本人が首を傾げるぐらい、邪気の禍々しい空気は限を素通りして行く。正守もすぐ身に纏うタイプの結界を発動した為、事なきを得た。

（これ以上皆で近づくのは無謀だな…俺と限だけでこの先行くしか…）

冷静にこれからの方針を出すと、正守は蜈蚣のいる結界に近づいた。呪現化能力者である彼は、夜行で大量輸送が出来る唯一の異能者。

無理をさせるわけにはいかなかった。

「蜈蚣、ここまでご苦労だった。俺と限が降りたら、もつと上昇して城から距離を取れ。2時間経って俺が戻らなかった場合、この異界から脱出してくれ」

「待て。私も行く。」

二人だけで行こうとしたのを、藍緋は瞬く間に白衣姿へ戻った。やはりこちらの方が動き易いらしい。

自分を置いていくつもりだった男を軽く睨み付ける。

「私に気を使っているならいい迷惑だぞ。人間の小娘程度の邪気で、幹部の私が倒れるとでも？」

「……………」

人間、そう藍緋は言った。幹部級の妖花クラスが何とか耐えた邪気、それを発するネリのことを彼女は“人間”と断言する。

邪気にあてられた部下達に正守が視線を向けると、藍緋はため息をついた。

「私を信じるとは言わない。……だが、部下のことぐらいは信じる。心配ならお前が結界を張れば良いことだろう?」

「……………本当にさあ…君ってヒトは……………」

万が一、部下達の動きが鈍った所を妖に襲われたらと思い、正守は藍緋に残ってもらうつもりだった。

“元”幹部といえどそう簡単に攻撃する者はいないだろうと。

気を使った訳じゃない、きちんと計算した結果寧ろ残ってもらいたかったのに。

そんな若造の心などお見通しと、数十倍歳上の女性はニヤリと笑った。

「私は案山子かかしじゃない。ネリの所まで、お前達を“無事に”導くのが仕事だ」

『さつさと行くぞ』と言い残すと、ヒョイと結界に飛び乗った。観念した夜行の長も、そのまま蜈蚣達が上昇していくのを見守る。

十分距離を取った所で、正守は大きめの結界でムカデごと囲んだ。
さて行こうかと眼下に足場用の結界を張ろうとして、正守を含めた
3人は息を飲む。

「芒野原が…枯れている…?!？」

ほんの数分前まで黄金の海が広がっていた、城の南西から西にかけて景色が一変していた。

まるで何か駆け抜けて行ったかのように、扇形に黒く枯れた大地が広がっている。

金の穂は黒く腐り落ち、地面に残ったその爪跡は3人の表情を曇らせた。

「ネリが出所近くにいたはずだ。…限、気を付けるよ」

「はい。」

固い声の正守に対して、少年はいつもと変わらず答える。両手足を妖のそれへ変化させ、限はジツと前を見据えた。

今度こそ、自分がネリを守ると心に誓って。

（待ってる、ネリ。お前は独りじゃない…俺は、まだお前に何も…
！）

唇を噛む限の腰には、ぼんやりと紫に光る刀が少年を邪気から守っていた。

絶界を発動させながら正守は、『やはり』とそれに目をやる。ネリの妖気があれば、邪気を中和出来るだろうという読みは当たっていたようだ。

“策”と言ったのはこれのことだったのかと、藍緋は駆ける少年を目で追う。

本能的に『行きたくない』とってしまった体を鞭打ち、女性は白衣をなびかせながら結界を跳んでいった。

(25) 狂姫を救うのは(前書き)

はいすいませんでした！

(25) 狂姫を救うのは

ぞわり、と身体中の毛が逆立つ。
どくり、と脳の血液が脈打つ。

思い通りにならない苛立ちで、ネリは頭が破裂してしまうのではないかと思った。
いつもあと一歩の所でスルリと逃げられる。

どうしてだろう。何が足りないんだろう。火黒はなぜ死んでくれな
いんだろう。

その方が未来の為なのに。その方が救われる命がたくさんあるのに。

(救ワレル、命…。)

怒りで見えなかった視界が、段々と焦点が合ってくる。周りの建物は黒ずみ、壮麗な佇まいを誇っていた城壁は見る影も無い。

ネリがいるところを野球グラウンドのホームとするなら、銀狐の向く方向全てが死の大地になっていた。
原型は保っているものの、瓦は溶け廊下は腐り真っ白な壁は黒に染まって崩れている。

あまりの惨状にさすがのネリも目を見張った。

『…………？』

火黒のことはひとまず、横に置いておく余裕が出来た。

奈落の底のように続く吹き抜け部分を、銀狐がゆっくり降りていく。九尾を揺らして地面に降り立つ姿は、神掛かった様に美しかった。

黒く染まり、所々崩れそうな回廊を一瞥した後足元の地面を見る。

鼻先を黒ずんだ土に近づけると、鉄クサイの臭いが鼻をついた。

まるで血のよう。

思わず顔をしかめたネリは、興味を無くしまた火黒を探そうと地面を蹴る。

だが次の瞬間、青みがかつた透明の結界に閉じ込められた。

『ギャンツ！？…グルルル……！』

勢い余って鼻先をぶつけてしまい、狐は忌々しげに唸った。

またも邪魔された怒りに、紫の双眸が怒気に染まる。荒れた心に任せて暴れると、結界はすぐに音を立てて粉々になった。

ぐるん、と獣の瞳が邪魔者へ向けられる。

崩れやすくなっている回廊の底ひもとの上に、正守、藍緋、限の3人が立っていた。

その顔は、皆一樣に固い。正守は絶界でネリの邪気を相殺すること出来るし、限にも守り刀がある。だが、藍緋は邪気の渦中に近づいて、顔色が真っ青だった。

結界師独特の構えのまま、男が口を開く。

「ネリ、迎えに来たよ。一緒に帰ろう。」

『……………』

黒と銀の九尾を揺らすネリは、正守の言葉に何の反応も示さない。敵なのか、敵では無いのかそれを見極めるだけ。3人を“仲間”と認識していなかった。

「君は火黒に騙されたんだ。俺の肩の傷は君がやったんじゃない、奴の仕業だ。」

『……………カグ、口』

“火黒”という単語にネリの瞳が妖しく光る。限が口を開こうとしたのを、正守は肩に手を置いて止めた。藍緋の頭ではひっきりなしに警鐘が鳴っている。本能が『ネリに近づくな』といているのだ。

「正守…様子がおかしいぞ。」

「……………分かってる。藍緋、キツかったら離れてて良いよ。」

二人のやり取りを聞く限は、唇を噛んで銀狐を見つめる。今のネリは、まさしく完全変化して意識が飛んでいる状態のようだった。限が訓練中に何度も経験した感覚である。

破壊衝動に突き動かされ、身体が勝手に獲物を求めてしまう感覚。“人間”の意識はあるのに、“獣”の本能が身体を支配してしまう

のだ。

(あんなに完璧な変化をしていたネリが……！)

意を決した少年は一步前へ踏み出した。目は銀狐に向けたままである。

「…頭領。俺に行かせて下さい」

「待て、限。今のネリはお前のことも分からないはずだ」

止める夜行の長の声に、4年間戦い続けてきた少年は自然と笑みを作っていた。

滅多に笑みなど浮かべない限を、驚いた正守が凝視する。

揺るぎない決意がさせる少年の横顔は、今までとは異なっていた。

それは“大事な人を守る”ために力を発揮する、歡びを持った力強い笑み。

「…思い出させてみせます。俺は　　ネリを信じてますから」

「……そうか。」

その言葉は、『行ってこい』と背中を押す意味だ。

瓦を蹴って飛び出す限を“敵”と認識し戦闘体勢に入るネリ。ピンと張られた尻尾の先に、火炎の玉が灯った。

「俺が勝つたらあの約束を守れ、ネリ！！！！」

爪を振りかぶった少年は、心が張り裂けそうになりながら戦いに身を投じた。

実際は、どちらが勝ち残っても困る戦いに。

絶対に、任務で死なないで。次会う時も、笑ってハグしようね

お前も、約束しろ……困った時は、俺を頼ると

月の下で交わされた言葉が少年の脳裏で、愛しい少女の笑顔を蘇らせる。

一晚語り明かした。

早朝、見送りの時間になるまで語り尽くした。眠れないという彼女に付き合っ

ようよ！
限が来るまで、私が烏森を守る。そしたらまた、手合わせし

「…お前の訓練に付き合ったのは誰だ…！」

銀狐は答えない。意識の糸を核にした鬼火玉が、以前よりも一回り大きくなって限に襲いかかる。

ネリをこの世界に留まらせた張本人に攻撃しているのに、紫水晶の瞳は全く揺らがない。

ん〜私が勝つたら…そうだな、どっか一緒に行こうか！すっごい静かな田舎がいい、のんびり昼寝するの！

「お前、言つてたよな…?」

火炎の玉が身体を掠ろうが構わない。爪で弾き決る度に火傷が広がるが、知ったことか。

限の勢いは、そんなことでは止まらなかった。

決して後退しない。

決して背中を見送つたりしない。

もう…二度と。

え、地味? 良いじゃん、私これでも日本の自然大好きなんだよ? なんか綺麗だよね〜森とか川とか。西欧には無い良さがあるよね〜

「俺が勝つた時の約束、忘れたとは言わせない。」

限はジグザグに縫うように銀狐へ向かう。全く勢いが衰えない少年に、妖狐はたじろいだ。

全く攻撃せず、必死で炎を捌く少年に何とも言えない懐かしさを感じる。

こんな風に、心地よい戦いの高揚感はそうそうあるものではない。

戦っているのに、どこか安心出来るという矛盾した感覚は。

本人が気がつかないぐらいの迷いが、ネリの“闇”を照らして意識を攻撃から逸らしていく。

戸惑ったように攻撃の手数が格段に減つたのを見て、後ろで見守る正守がグッと拳を握った。

後少しだ、と全身に火傷を負っている部下へ声無き声援を送る。

（行け 限！）

限もホラ、何か決めとかないと後で後悔するよ？ま、どうせ私が勝つけどね！は ッはッはッは！！

「俺が勝つたら」

自分の勝ちを信じて疑わない銀髪の少女に、限は到底『望み』とは言えないささやかな『願い』を口にした。

白む空に溶けていった月を眺めながら、あの夜のネリに言ったものだ。

「また一緒に月を見よう」

少年の口から零れた言葉に、銀狐はピタリと動きを止めていた。自分で止めたつもりは無かったのに身体が震え、打とうとしていた火炎の玉は霧散する。

『！？』

限を“敵”だとささやく本能と、攻撃するなと叫ぶ理性がせめぎあう。

攻撃が完全に止んだのを見て、限は一気に距離を詰めた。脚力にものをいわせ、一直線に銀狐へ駆け出す。

「思い出せ、ネリ!!!」

『ア…あ…うあ、あ』

今度はネリの意思に反して獣化が解けた。白煙をあげて夜行の戦闘服姿になる。

だが、黒い獣耳と黒と銀の九尾は健在だ。

銀髪の少女は呆然と自分の“人間の手”を見つめた後、迫る少年にハッと気がついた。

変化によって妖気レベルが上がっているので、慌てて地面を蹴って空中に浮かび上がる。

『烏森へ帰れ、人間!!!私はやらなきゃいけないことがあるんだ!お前に構ってる暇など無い!!!』

「何だと……!!」

人間の時の記憶が眠ってしまった少女に、限のことは分からない。だが“攻撃したくない”という自分の心は、無視できなかった。

妖の力が振るえないぐらいなのだから。

『…あれ？人間……お前は…ん？烏森って…？』

空中で首を傾げ始めるネリを、限は若干呆れながら睨んだ。少年が届かないと思つて油断している彼女に、叫び返す。

「だから、いい加減思い出せとさっきから言っている！！お前も烏森の人間だろ！！」

叫ぶと同時に地面を抉る勢いで蹴る。当然そのままでは、到底少女のいる所まで届かない。

だが地上には、凄腕結界師である夜行の頭領が控えていた。

「あとちよつと、かな？」

男の小さな呟きは隣にいる藍緋にしか聞こえない。正守は遠距離から軽々と、ネリを囲むように置かれた小さな結界を作った。限の足場になるようにと。

『なっ！？』

「戦闘中に油断するなど、何度も言つただろ。」

目で追えない速さで限は、弾丸のように動き回る。結界がバネの役割してくれるので、さらに加速し始めた。

仕上げに正守が、ネリの頭上5メートル地点に結界を作る。

心得た限が、それを目指して進路を瞬時に頭の中で組み立てた。

藍緋は二人の鮮やかな連携に目を見張る。逆にネリは苛立ったように声をあげた。

『ああまったく！誰だか知らないが、私の邪魔をするんじゃない！最後の一回は火黒にとってあるのに！！』

今まで3回“世界から追放する口”を開いた。あと1回使えばネリの脳は大ダメージを食らってしまう。

7歳児のネリは、4つを一度に使った為一時的に記憶が飛んだ。脳は一朝一夕に耐性がつくわけではない。

火黒を殺していないのに、そんな博打をするわけにはいかないのだ。

「最後の一回？何だそれは」

『貴様に言った所で、何も変わらん！無駄使いするわけにはいかないんだよッ！！』

手から拒絶の球体を出し、警棒のように形状を整える。

傷つけないように攻撃するのに、薄く研ぎ澄ませることは出来なかった。

殺傷能力がある使い方だと、自分の心が邪魔するのか形状が保てない。球体に戻ろうとしてしまう。

『まったく厄介な相手だな…！火黒が逃げたらどうしてくれるんだ、人間！』

憎々しげに限を見る瞳には、混乱と焦りが渦巻いていた。

(26) 心は正直ですね・・・と、藍緋と正守喧嘩勃発！？ (前書き)

題名ほど軽い話ではないのですが・・・、一応ハッピーエンドに向かうので。

(26) 心は正直ですね・・・と、藍緋と正守喧嘩勃発!?

「火黒を殺して私は証明するんだ　　未来は、変えられるとな！
！」

頭上の結界をバネに、限がネリの死角から少女に跳ぶ。だが警棒を交差させて、振り返ったネリは少年の勢いを受け止めた。交差された警棒と、少年の妖仕様の爪が火花を散らす。

「前にも言ったが…接近戦も学べ。」

「な…にッ!？」

一瞬拮抗した二人の力は、限が警棒をバネに跳びすさったことで終わった。少年の全体重が少女の両腕にかかり、思わず片足を後ろで踏ん張る。

人間離れた体の動きで身をねじり、限は透明な足場に片手でしがみついた。

そして間髪入れずに結界を蹴り、少女に向かって跳ぶ。ネリは頭に血が昇り、特攻しようとする少年に警棒を突き出した。

いくら先が丸いといえど、このまま突っ込めば下手をしたら死ぬ。それが分かっているながら、ネリはフェンシングのように短い棒を出したまま少年を迎えた。

否、迎えようとした。

ほんの瞬きする間の刹那、実際は一秒にも満たない時間。

時間がゆっくり流れるような錯覚の中、“その声”はネリの頭の中で強烈な言葉を放った。

そう、それでいい。“我”を殺したように、今度は恋人を殺せ：お前自身の手で。

そのまま闇に堕ちればいい！！

紫の双眸が見開かれ、訳の分からない恐怖にネリは叫んだ。

『嫌ッ！！！！』

少女の声に心える様に、2本の警棒が砂となって消える。啞然となったネリに、軽く息を飲んだ限が迫った。

物凄い勢いで少女に激突した限は、そのままネリを巻き込み崩れかけた城へ突っ込む。

怪我をしないよう限は右手で銀色の頭を己の胸に押し付け、衝撃の殆どを引き受けていた。

壁をぶち抜き柱を折って、彼らはようやく止まったが：双方ピクリともしない。

限の右肩は火傷もあったが、ネリを庇ったせいでさらに悲惨なことになっていた。

至る所より痛々しく肉が裂け、摩擦でずり剥けた皮膚と焦げた服が衝撃の凄まじさを語っている。

たとえ本気で闘うとしても、ネリの身体を傷つけるなんて限には無理な話。

火傷に続いて全身打撲の限だが、ネりをしっかりと離さなかったお陰で彼女に外傷は無さそうである。

ゴホツ、と先に気がついて咳をしたのは少年の方だった。

「……………つぐ、ふツ……………ネリ？」

『……………』

限が身体を張って庇ったが衝撃は充分だったようで、妖狐はまだ目を回していた。

渦巻いていた邪気が完全に消え、外にいた藍緋が大きく息を吐く。流れ星のように城に激突した時は肝を冷やしたが、上手く邪気の暴走を止められたなら御の字だ。藍緋の目標は達成されたことになる。

安心した顔をする藍緋を見て、正守は絶界を解きフツと笑った。

無傷のままネリを無力化出来て、ひとまず息をつく限。壁などが脆くなってはいたものの、少しヒヤリとしたのだ。

「ネリ…大丈夫か」

『…うあ、あ…』

獣耳がピクピクと痙攣し、自動で身を守るはずの尻尾は動きもしない。そんな暇が無かったぐらいの速さだった。

痛みで眉を寄せたままの少女を右手で抱き、胡座をかいた自分の上に座らせる。さすがに瓦礫に横たわったままなのは気が引けたのだ。体を動かす度に火傷がひきつって痛んだが、限は顔色一つ変えなかった。

逃げられないように、抱いていない左手でネリの右手首を掴んでおく。

もうこれ以上、離ればなれになるのは嫌だった。

「…起きられるか、ネリ。」

『…ん…んあ…。はれ？』

ネリは痛みで霞む頭を叱咤し、どうにか焦点を合わせる。

だがピントが合っても、ゆっくり5秒数えられる間動けなかった。そのくらい、目覚めたばかりの頭では理解出来ない。

どうにか声を振り絞ったが、驚きで掠れていた。

『どうして…限が、ここに？』

「良かった、正気に戻ったな」

あちこち擦り傷を負った顔の少年に、ネリが青ざめる。一瞬にして自分が、また限を傷つけてしまったのだと悟った。

慌てて傷だらけの限から退こうと身体を起こしかけるが、少年はがつちり腕を掴んで離さない。

「落ち着け、ネリ。話を聞いてくれ」

『またっ……！また私は限に怪我を……！！』

「……………」

ジタバタもがく少女は、何とかして限から降りようとする。自分が乗っている限が全身火傷ばかりだと、臭いでわかったからだ。

人の皮膚が　蛋白質が焼けるニオイである。

そんな重傷者に乗っかって良い訳がない。

『駄目、降ろして！限、身体が　！！』

「……俺が痛むのは身体じゃない」

静かな少年の声にネリの動きが止まる。少女が止まった隙に限は、肌がひきつるのも構わず細い身体を強く抱き締めた。

ふわりと仄かに甘い香りが、少年の鋭い鼻をくすぐる。以前のまま、月色なのに太陽のような暖かい匂いだ。

やっと“心”の痛みが癒された気がした。やっと、ネリが戻ってき

た実感が湧いて、火傷のことなど忘れられる。

戸惑ったように身体を固くするネリに、限はそっと呟いた。

「頭領の怪我は、火黒にやられた刀傷だ。俺もあの時確かに負傷したが…それは一つ目コウモリにやられた。お前は誰も傷つけていない、全部誤解なんだ」

ゆっくりと言い聞かせる少年の言葉は、スツとネリの心に染み渡る。じわりと紫水晶の瞳に涙が浮かんだ。

『「う」か、い…?』

「お前があの時身体を乗っ取られて、その間記憶が無かったのも知っている。…お前の居場所は、無くなってなんかない。」

『安心しろ』と左手で背中を軽く叩いてやると、ネリはくしゃりと顔を歪めた。

『「ごめん…ごめんね限…」』

「戻ってこい。話したいことが沢山ある」

誤解をようやく解くことが出来て、限がネリの身体を離す。少女は泣きそうな顔のまま、悲痛な声で詫びた。

『「ごめんっ…!」』

どんつと限を九尾で突き飛ばし、少年から離れたネリはそのまま吹き抜けの方へ飛び上がる。

咄嗟のことですすがの限も、軽く吹っ飛ばされた。
受け身を取りつつ見上げると、崩れかかった欄干の上でネリが微笑
んでいる。

それは、狂気に染まっではない。だが、無理矢理作った…恐怖を
押し殺した笑みだった。

『帰る場所を守る為に、私は戦いたい。やっとここまでアイツを追
い込んだの。最後の一回で決めてくるよ。』

「おい！待っ…」

目を見開く限は、少女の壮絶な覚悟を甘く見ていた。ネリは正気に
戻ったが、これでは意味が無い。

吹き抜けで待機していた正守も二人の異変に気がついたが、少し遅
かった。

男はとりあえずネリを結界で囲もうとして、不穏な気配に絶界を発
動する。

そのすぐ後に束になった植物の蔦が、正守のふくらはぎ付近で消し
飛んだ。夜行の頭領が、ゆっくりと振り返る。

そこには、白煙をあげて妖花となった藍緋本来の姿があった。
美しくも妖しく咲き誇る花の巨人に、正守が目を見張る。
邪気は薄いが、その妖気は高位の妖が持つものだ。

「…どういっつもりだ、藍緋」

『それはこちらの台詞だぞ、正守。言ったはずだ…彼女の邪魔はするな、と。』

蔓を縦横無尽に伸ばしながら、正守の退路を断つ。

みるみる内に崩れかけた城の吹き抜けは、緑で埋め尽くされた。

正守を緑の揺りかごに閉じ込めたまま、藍緋は飛んで去っていくネリを別の目で見送る。

妖混じりの少年が後を追って顔を出したので、不意をつき拘束した。ぐるぐる巻きにしてやれば、元々負傷して動きも鈍かったのもあり、そう簡単には抜け出せない。

「何のマネだ、離せ！！」

『断る。お前は少し身体を休めたらどうだ？』

揺りかごの内側で正守と睨み合ったまま、外側で二輪の蕾が生まれる。

身動き出来ない限を藍色の蕾まで引き寄せると、花が『ポフン』と緑の花粉を吐きかけた。

咄嗟に息を止めた少年だったが、僅かに吸い込んでしまった粉に意識が白濁する。

(眠り、粉　！？)

敵地のご真ん中で寝るなど、死ぬことに等しい。渾身の力を体に籠

めるが、もう感覚も危うかった。

『火黒は遠くに行つてはいない。ネリが奴の首を持ってくるまで、大人しく待っている。』

「この、や……る……………」

体が弛緩した少年をそのまま内側へ引きずり込む。ちょうどその時正守は、自分を見下ろす妖に凍りつく様な声で詰問していた。

「冗談じゃないね。君はネリをみすみす死なせるつもりか？」

『…やはりお前は、部下を信じていないのだな。ネリをお前達の物差しで測り、闘いの邪魔をしようとしている。』

部下を心配して、なんとかネリを危険から遠ざけたい正守。

ネリの望みは誰に止められるものではないと、何より“本人の自由”を優先する藍緋。

二人の考えは最初から違つていたのだ。ただ期限付きの“共同戦線”を張つていたというだけで。

藍緋を殺すなど造作も無い正守は、望まない闘いであるだけに厳しい顔をしていた。

「頼むからやめてくれ。君が死ねばネリが悲しむぞ。」

『ネリは私に自由をくれた。私は生きたいように生きている。それで死んだなら、ネリも納得するはずだ』

それが、彼女の願いだから。
理不尽な死神を遠ざけ、自分の死に場所を選ぶ“自由”をネリはく
れたから。

花の中心で小さな青年を見下ろす妖の瞳に、殺意など皆無である。
彼女の狙いはしばらくの間、正守達を足止め出来れば良いのだ。

逆に正守は迷う時間が無い。腹を決めて絶界の出力をあげ始めた。

『言っておくが、多少消した所でこちらに大したダメージは無いぞ。
植物系の強みは再生力だからな』

話している間も緑の揺りかごは厚みを増し、広い吹き抜けを埋め尽
くさんばかりに巨大化していく。

「…すまない。手加減してる時間は無いんだ。これ以上、火黒とあ
の子達を会わせたくないんでね。…このまま突っ切らせてもらう」

間流の結界師である彼にとって、絶界で消せないものはない。壁が
厚かろうと、“自分の世界を作れる”能力者を留めるなど容易では
ないのだ。

だが今回ばかりは、知恵も力もある藍緋の方が一枚上手だった。

『それなら、消し飛ばす場所を選ぶことだな。少年は今私の中にあ
る。お前の進路にその塊を置くことも出来るんだぞ』

「……………!!」

正守が絶句して言葉を失う。その目の中に先程まではなかった殺気

を読み取り、藍緋は悲しそうに目を伏せた。

見てて飽きない“観察対象”だったのにな…と残念そうにため息をもらす。

早く戻ってきてくれ、と運命に喧嘩を売りに行った少女に藍緋は願うのだった。

(27) 姫の過去、思いっきり捏造です！という閑話休題な感じ (前書き)

やっと最後の話まで書き終わりました。

見直ししたらずくに投稿しますので、連投になると思います。

ここまで付き合って下さって本当にありがとうございます

(27) 姫の過去、思いっきり捏造です！という閑話休題な感じ

空を東へ天女のように駆けていくネリは、勿論緑の揺りかごが大きくなるまではその場にいなかった。

邪気が抜けたのはネリにとって良いことなのだが、正気に戻った分疲労と倦怠感が酷い。

頭に血が昇っていた時は、妖力も呪力も無限に使える気がしていたが、さすがにそれは無理だったらしい。

長時間、殺傷目的に使っていた拒絶の球体は、少女の脳を容赦なく揺さぶっていた。

後一回、世界から追放する規模の異能を使えば、ネリの脳は重大なダメージを負うだろう。

だが火黒の死を見届けなくては、ネリは一生安眠出来ない。このまま引くつもりも無かった。

『出てきなさい火黒おー！！』

可憐な少女に似合わない叫びが、城の上空に木霊する。

邪気が消えたのを好機と見たのか、ワラワラと雑魚妖怪が城から現れた。

長虫やら小鬼やら、まるでハエがわくようにそこかしこから出てく

る。

思わぬ邪魔に、ネリの瞳孔が更に裂けた。

『邪魔する気？今の私は手加減なんてしないよ』

ちよつど力が減ってきた所だし、とネリが両手から意識の糸を張り巡らせる。

見えない糸に絡め取られた妖達から、妖力の欠片を集めていく。余計な邪気は吸わぬように気をつけ、ある程度の所で離してやった。

だが、弱った者から後続に喰われていくので助けたことにはなっていない。

胸が悪くなる光景だったが、共食いはこの城の日常茶飯事。弱い者が強い者の糧となるのだ。

『火黒　　！！！！』

大声で叫びながら、屋根の上や隠れられそうな場所に目をやる。だが、黒に火炎模様の着流しは何処にも見当たらない。

傷が治るまで逃げ回るつもりかと、ネリは唇を噛んだ。

『アンタとはさっさと決着つけなきゃいけないんだよ…隠れるなー！！！！』

少しの妖力を補給した所で、ネリは力をかき集めてイツナを放った。7色の色鮮やか炎狐達が、尾を引いて少女へと馳せ参じる。

残りの妖力を全て注ぎ込んでしまったので、もうイツナはこれが最後だ。

『火黒を探して！見つけたら鳴いて知らせて』

了承するように炎狐達が少女の頭上で円を描くと、四方へ散開する。それを見送った後、ネリは屋根瓦の上に降り立った。西の外れから東へと移動していたので、丁度中央の天守閣が確認できる。

姫の寝所がある建物だ。何気なくそちらへ意識を向けると、ネリは眉を寄せた。

『あれ、姫様……？』

包み込む様な、それでいて我が侘で奔放な姫の妖気に、陰りが見える。

ネリがこの世界に組み込まれる過程で、姫とは“血の絆”が出来ていたので、お互いある程度状態が分かるのだ。

弱って、いる？

『え、嘘、なんで！？』

さすがに土地と主の感覚までは分からないので、ネリにその理由は分からない。

（火黒をどうにかしなくちゃいけないのに……！）

だが、土地神の様子も気になって放って置けなかった。

原作では妖力の枯渇と寿命のせい、黒芒くろすずめの土地は消滅する。だがネリは妖力を姫に分け与え、それで寿命も伸びたはずだ。

『……………』

ネリは一瞬で決断し、天守閣を向いたまま目を閉じる。

（　　火黒を見つけたら尾行。2匹以上になったら攻撃を開始して）

イツナに新たな指令を飛ばし、銀髪の妖狐は空間を踏みつけて空を駆けた。

『姫様！！』

『あら。ネリじゃない…。光は、見つかったようね…』

御簾をあげたまま、高齢な姫君は寝そべって身体を休めていた。手を振る代わりに、黒い尻尾の一つをヒラヒラと揺らしている。

いつもと同じに見えるが、近づけば一目瞭然。

明らかに妖気の輝きがくすんでいる。

疑問をのせて黒スーツの男性を見ると、彼は正気に戻ったネリを見て警戒を解いた所だった。

安堵の声が、白の口から漏れる。

「土地が負った傷は主にも反映されることがある。姫は生え抜きではない、まだ大事に至っていないようだが……時間の問題だ」

『 ……あゝ私の垂れ流した邪気のせいだね……。ごめんなさい、姫様……』

銀髪の少女が寢座まで近寄ると、藍色の瞳がふわりと笑った。そしてゆるりと首を振る。

『いいえ。……これだけ長く生きると、ちょっとした事じゃ……へこたれないのよ？』

それに貴女には、沢山楽しい話をしてもらったわ。……でもね、まだまだ聞き足りないの』

だからまだ逝かないわと笑う姫に、ネリは妖力を分けてあげることさえ出来ない。

湯水のように使った妖気は、そうそう短時間で戻るものではないのだ。

(どこかから妖気を調達する……？藍緋さんには頭領達の足止めをしてもらってるし……)

今から幹部の居所を探す訳にもいかないし、白は元々人間なので妖力はさほど多く無い。

火黒を殺し、戦闘を早く終わらせれば良い話なのだが……肝心の相手は逃亡中。

何やら悩んでいる銀髪の少女に、白は口を挟んだ。

「火黒との戦闘を止めればいい。なぜあいつにこだわる。」

『…アイツは殺しとかないと。私が黒芒楼くまろうに来たのも、元々火黒を倒すためだったの。

…アイツは未来で私の大切な人達を殺すから』

だから無理、とネリは目を合わせずに告げる。

城に来た時から　　黒芒楼へ連れて来られると分かった時から、
火黒だけを見て少女はここに来たのだ。

必ず殺すと、固く心に誓って。

少女が素直に城に来た理由の一端が分かり、白はどこか納得していた。

だが同時に落胆する。

姫は『大丈夫』と言うが土地が傷ついている今、ネリの妖気以外に姫を回復出来る存在はいない。

(何とかならないものか…)

白髪をうつ向かせる男は、ネリに蟲を入れ強制的に妖力を譲渡させる案まで出していた。

だが、姫の血を引くネリにそんなことはさせられない。

第一、姫自身が黙っていない。

考えを巡らせつつ、白は蟲達から寄せられる情報を集計し始める。
その時、彼の身体が不自然に強張った。

「……………ッ!？」

『…どうしたの?』

取り乱すなど珍しい白に、ネリが目を向ける。見た目は若い70過ぎの男は、驚きを露にした後口を開いた。

「火黒と藍緋が…交戦中らしい」

『…!?!?何ですって!!!』

『…行きなさい、ネリ。』

ぐったりしたままの姫は、顔だけ起こして少女を真っ直ぐ見つめた。藍色の瞳が、以前までは同じ色だった妖狐の瞳を覗く。

お揃いの黒と銀の九尾を揺らして、姫は孫娘に微笑んだ。

『行って、貴女の星達を助けてらっしゃい』

姫が黒芒に住まう様になった頃、一對の手鏡が城まで流れ着きました。

黒の漆に精巧な金細工が施されており、一つは梅、もう一つは百合の花が咲き誇っていました

『この土地なら、まだ大丈夫よ』

ですが、ある時姫は大事にしていた“梅の手鏡”を割ってしまいます。

欠片は塵となり風となって大空へ舞い上がり、二度と戻って来ることはありませんでした

黒芒の土地に選ばれた狐の妖は、凄味をにじませた笑みを浮かべた。

『こんな邪気で、土地神が死ぬとでも？…馬鹿にしないで頂戴、ネリ。』

異界を飛び越えた欠片は途中で人間の魂を抱き、異郷の地で小さな金色のコンパクトになりました。

それには姫の持ち物であり、姫の城から流れてきた証である文字が彫ってありました

『姫様…、でも！』

金細工の鏡を受け継いだ少女は、紫水晶の瞳を揺らす。

かつて白い産着にくるまれ、梅の花が彫られた金の鏡を持っていた赤ん坊は、祖母の名を苦し気に呼んだ。

『……郁李様にもしものことがあつたら…！』

『…フッフ、私を本名で呼んでくれるのは、もう孫娘あなただけなのねえ…。』

遠くを見つめて、姫君は儂く笑う。

原作では、周囲から“姫”と呼ばれていた黒芒楼の主。

一番の古株であった江朱が黒芒に流れ着いた時、美しい城に惚れ込んだ彼は自分から“姫”の臣下になった。

姫が彼に本名を教えたのは随分後になってからだだったが、土地神に敬意を表し江朱は“姫”と呼ぶことにしたのだ。

江朱以外の幹部は半強制的に集められた妖だったので、本名は教えず全て呼び名で通した。勿論、日の浅い白にもである。

『心配してくれるのは嬉しいけれど、時間が無いわ。……あ、そうだ！アレがあるじゃない』

ポン、と小さく姫は手を打った。ネリが分からず首を傾げると、藍色の瞳がニコオと笑う。

スツと細い指が、銀髪の少女の背後を指差した。

『あの子を私が引き取るのはどうかしら。ネリも闇に吞まれなくなるし、私の力も増すわ』

ネリの背後に空間の裂目が生まれる。術者の意に関係なく生じた異空間の入口に、少女は背筋がぞくりとした。

呪符まみれの黒い箱が、フワフワと姫の方へ引き寄せられていく。異空間の最奥にしまいこんでいた“闇”の塊　　ネリの身体を乗っ取った友を、姫は御所望なのだ。

それに気がついたネリは、身体中から血の気が引いた。

『駄目です、姫様！！』

それが視界に入って、ネリはさらに顔面蒼白になった。

闇の結晶体を納めた箱に、無数のヒビが入っている。
しかも今まさに、パラパラと欠片が腐り落ちているのだ。

妖狐化しているネリには、禍々しい邪気まで感じられた。

『…え？封じたはずじゃ』

『完全には無理よ。この子の怨みが消えない限りは。…アナタの暴走も、半分はこの子のせいだったようね』

ついに箱が空中で崩れ落ち、二色に別れた紅い球体が露になった。

透明なガラス玉の中に浮かぶ深紅の結晶体は、不気味な光を発しながら姫の目の前まで来る。

固唾を飲んで見守ることしか出来ないネリは放って置いて、土地神は妖艶な微笑みを球体に向けた。

異界の鬼に身体を奪われて死にかけていたのに、不問に伏すらしい。

『大丈夫、悪いようにはしないわ。私の中でお眠り、小鬼ちゃん』

難なく握り拳大の球体を抱き込むと、姫君は愛惜しそうに瞳を閉じる。

風が吹き抜けて寝所の御簾を揺らすと、もうそこに“闇”の玉は無かった。

千年を生きる土地神に、吸収されたのだ。

あまりに呆気ない幕切りに、銀髪の少女はポカンと口を開けていた。

『…え、こんな…簡単に…』

『……行きなさい、ネリ。手遅れになるわ』

先程よりしつかりとした土地神の声に、ネリは我に返った。

完全な妖であり、土地神である姫は紅い結晶体を御することが出来たのだ。それならもう何も心配は無い。

あれだけ因縁の深かった“百合香”との戦いがこんなにもあっさり終わってしまい、どこか納得していない自分がいる。

胸にしこりが残った様な気分だったが、呆けている暇はない。霞がかかる頭を叱り飛ばし、ネリは祖母の寝室を後にした。

この時ぐずぐずしていたのを、ネリは後で死ぬほど後悔することになる。

(27) 姫の過去、思いっきり捏造です!という閑話休題な感じ (後書き)

黒芒楼編がやっとあとちょっとで終わります。

裏会総帥暗躍編とかやろうかどうしようか悩み中です。

当初の目的は達成されたしなあ・・・。

短編集みたいのを別に用意しようとは思っていますので、限とヒロインのイチャイチャはそちらになると思います。

(28) 火黒の執念、どこで彼は道を間違えたのでしょうか・・・

正守と藍緋のにらみ合いは、それほど長くは続かなかった。元々これが時間の戦いなのは、両者共に分かっているからだ。どちらがより早く相手を屈伏出来るかに、ネリの命運がかかっている。

夜行の長が、聞き取れない程小さく呟く。

「……黒姫。」

男の影からパシャン、と場違いな水音がたった。普通の鯉より胴が太く、中型犬程の大きさの“管理者”が宙に浮かぶ。

主に情報管理を司り、術者が術を行使する上で補佐にあたる存在だ。

殺気立った声で、男は己の相棒に指示を出した。

「影を広げる。限の場所を読み」

黒い鯉は声を持たないが、了承したように正守の周りを一度泳ぐ。

正守の影がまるで波の様に形を変え始めると、黒姫はその中に身を踊らせた。

四角の結界とはまた性質が異なる、周囲を探查する為だけの結界だ。

完全に藍緋を敵と見なした夜行の長は、もはや言葉での説得を諦め

た。
ここでぐずぐずしている間にも、ネリが傷ついているかもしれない。
烏森と夜行の皆を守るため、自分を一人犠牲にして。

(そんなことをさせる為に、俺はネリを置いたんじゃない!!)

右肩の傷から血が流れた気がしたが、正守はことごとくこれを無視した。

力が抜けそうになる右手を、左手で血が止まるほど握り締める。

本人が感じている以上に具合の悪い男に、妖花は心がズキリと痛んだ。

無理をさせたいわけじゃない。少しだけ少女を信じて待つて欲しいだけなのに。

これを絆だと勘違いしていた今までの自分を、藍緋は笑ってやりたかった。

こんなものに自分は憧れていたのかと。

決闘の意味すら理解出来ぬ人間を、自分は羨んでいたのかと。

(“自由”とは何だ。他者に侵害されず、自分で自分の道を決めることだろうか?.....なぜあの子の邪魔をする、正守!!!!)

『悪足掻きはよせ。あの子を信じて待つことが、どうしてお前は出来ない?』

「信じる信じないってそんな複雑な話じゃ無い。ただ、俺は…気に入らないだけだ!」

影を読み終わり、限の場所を特定した正守が結界で少年を囲む。藍緋と繋がり断たれた事で、移動させられていた限が止まった。

藍色の妖花が内心舌打ちする。空間支配系能力者は多彩な異能を扱うので、対策は立ててきたつもりだった。

場所が分からなければ結界で囲むことが出来ないと思っていたのだが、ネリ同様正守も相当手強い。

肩から血が滲む羽織の背には、裏会最高幹部第七客の証である“七”の数字が描かれている。

未来で裏会総帥を伐つことになる男は、怒りに満ちた声で言った。

「小さな女の子が一人戦ってる横で、黙って見てられる訳無いだろっがッ!!」

『……!!』

限がいる方向に向かって、絶界をまとった正守が走り出す。

捕まった少年が声もあげずに沈黙しているということは、意識が無いか良くて朦朧としているかのどちらかだ。

一面植物の蔓で覆われた結界は、藍緋がどうにかそれを動かそうとしていたのが分かる。

だが、間流結界術の結界はそうそう自由自在に動く代物ではない。

正守は迷わず絶界をまとった手で、蔓を引き剥がしに掛かった。

「限!!限、返事をしろ!!大丈夫か!!」

『 させるかッ!!! 』

足元から壁にいたるまでが隆起したが、正守は結界の傍から離れない。右肩が上がらなくても、緑の植物を掻き分ける。

だが唸りをあげて更に絡み付いてきた蔓は、遂に絶界ごと男を包み込んだ。ぐるぐる巻きにする速さが、消し飛ばす速さを上回ったのだ。

「な……クソ!!」

正守が本調子なら、こんな展開にはならなかっただろう。

限を動かせないことに変わりはないが、緑の蔓はしつこく二人の間に入る。

いよいよ最大出力で絶界を纏うしかない、と肩の感覚がもはや無くなった正守が覚悟した時。

『 ツ!!! 』

唐突に藍緋の動きが止まった。どこか今までとは違う緊迫感に、正守が怪訝な顔になる。

黒姫が正守に耳打ちする前に答えは、彼の足元を突き抜けて現れた。

『 死んで無かったんだなア? 』

「……………!!」

禍々しい殺気に反応し、反射的に最大出力の絶界をまとう。その上を黒衣着流しの男が左下から一文字に薙いだ。

万物を拒絶する最終奥義の上から、いとも簡単に火黒は傷をつける。あんなに厚みがあつた緑の揺りかごに一瞬で道を切り開き、中心部まで到達してみせた火黒。

右腕だけでこれだけ動けるのは、はつきり言つて異常だった。

『絶界、か。久しぶりに見たなあ……アンタは結構やる方なのかねえ？』

「…ネリはどうした」

限が入った結界を背に庇い、正守が殺気を隠そうともせず聞いた。だす。

さも可笑しそうに、妖に身を落とした男は笑った。そんなことはどうでもいい、と言わんばかりに口がつり上がる。そこには狂気が垣間見えた。

『知りたいか？　じゃあ、力づくでやってみなアア！！！！！！』

ジャキン、と火黒の隻腕から無数の刃が生えた。

未来でお前を殺す妖と、主は戦つておるのだ！！

痺れが残る四肢を投げ出したまま、限の意識は徐々に周りを把握し

ようとしていた。

ここで暢気に寝ている場合ではないと、体を起こそうとするがピクリとも動けない。眠り粉の威力は思いの外、強力だった。

（頭領だけでも、ネリを止めてくれれば…！）

歯噛みしたいが、その歯が動かない。

蔓が弛んではいるものの、金縛りにあったように身体は言うことを聞いてくれなかった。

覆われた視界の中で、聴覚一つに神経を研ぎ澄ます。近くで誰かが戦っているようで、蔓が移動する音と男性の荒い声がした。

それに混じって反響するような、妖独特の声もする。

あいつには、本当にがっかりだ。あれだけお膳立てしてやったのに、人間を捨てきれなかった。妖になりや、あんな窮屈な思いをしないで済んだのにさあ。

お前と一緒にするな。妖の血が流れていようが、あの子の心は人間だ！！

火黒、はぐらかさずに答える。…ネリを殺したのか貴様！？

藍緋の絶望を含んだ声に、限の頭は真っ白になった。自分の心臓の音が、耳元で妙に強く聞こえる。

近くに“火黒”がいる。

だが、“ネリ”はいない。

その意味するところは。

(ま、さか…まさか、まさか …!!!)

身体の奥から突き上げる激情が、動かないはずの少年を動かす。限の心の叫びは、途中から声帯を震わせて現実のものとなった。

「 ツあああああゝ…!!! 」

邪魔をしてくれた藍緋への憤りと、少女を失った悲しみ。

不甲斐ない自分への怒りと、愛しい少女を殺したという妖への殺意。

全てがない交ぜになった悲痛な叫びは、限の身体に力を与えた。妖混じりの身体が、ミシミシと音を立てて少年の想いに応える。

『オオオオオオオオオオオオオオ…!!!』

完全変化が始まったのだった。

限の猥染みた咆哮に正守は目を見開いた。同時に焦りが胸を締め付ける。

完全変化した限を相手にしながら、火黒を仕留める余裕など正守には無い。

なんと間の悪い…と、夜行の長は痛烈な舌打ちを漏らした。

『…その絶界ってさあ、もうちょっと強く無かったつけ。俺の記憶違い？』

限に気を取られたその一瞬で、火黒は残像も残さず正守の背後へ移動する。

執拗に狙う妖は、斬撃を利用して右回転しながら正守を弾き飛ばした。

位置が入れ替わってしまい、正守の額に汗が滲む。救護の菊水が『絶対安静』と言っていた刀傷は、大袈裟なものでは無かったようだ。

刀身は届かったものの、強烈な剣圧に三筋の切傷が正守の左上腕に刻まれた。

上がらない右肩では、手早く止血という訳にもいかない。

満身創痍の正守に、火黒は手を止めて楽しそうに話し始めた。

『あいつさ、異世界から来たんだって？前に、面白えこと話してくれたよ』

絶界で消し飛んだ刀身を捨て、また新たな刀を右腕から生やす。緑の床には無数の先が消えた刀身が散らばっていた。

『この世界の歴史を知っているとかが言ってさあ、最初は気が触れてんのかなと思ったが……本当だったんだなこれが』

死角から繰り出される結界を、着流しの男は軽く身を捻ることかわす。

正守は火黒がネリの事情を知っていることに、嫌な予感がした。

戦闘狂は、河原でネリの戒めを斬った時の事を思い返す。

『あいつは俺の過去を知っていた。調べて出てくるもんじゃねえのにさ。』

お前等の未来も知っているとなれば……今までさぞ生きにくかっただろうよ。

……ここで問題。なぜあいつは最初から、俺を殺そうとしてたのか？ 他人なんて殺したことも無えような小娘^{ガキ}が、だ。』

5重の結界を切り裂きながら、火黒はニタリと嗤う。もう彼の中で出た答えを、馬鹿丁寧^{マカ}に正守に教えてやるのだ。

同時に背後にある緑の瘤を 限が入った蔓の塊に狙いを定める。

『答えは簡単。俺の未来に、あいつの絶望があるから……だッ！』

後ろへ跳びすさった火黒は針山の様な腕を、見もせず瘤の中心に刺し込んだ。

蔓がバタバタと足下に落ち、中の結界まで貫いたのが術者の正守に伝わる。

息を飲んだ夜行の長に、火黒は肩まで埋まった右腕を一瞬で引き抜いた。

『藍緋、この邪魔な緑退けるよ。小僧が出てこれねえだろ？』

『……そうか分かったぞ、お前の魂胆が。』

「…………！」

正守の結界が解かれたのは不本意だったが、藍緋は火黒の味方ではない。わざわざ妖に、限を差し出す真似もしないだろう。

正守は静かにタイミングを図っていた。

時間を稼ぐ意味もあって妖花は、己の体内にいる戦闘狂に自分の考えをぶつける。

『火黒。貴様……正守達を先に殺すつもりで、今までネリに大して攻撃を仕掛けなかったな？』

あの子がお前を『憎まざるを得ない状況』になれば、ネリは真の妖になる。お前が望む通り、身も心も闇に堕ちて戻ることには無い。

……彼らを呼ぶよう、私を利用したかッ！！』

普段温厚な妖である藍緋から、怒気が渦巻く妖気となって緑の空間を占める。

人型の妖は、ケタケタと笑った。

『こいつ等足止めしてくれてご苦労さん。お陰で探す手間が省けたぜ』

火黒の思惑通りまんまと正守達を招き入れてしまった女性は、傍観から攻撃に転じた。

正守は絶界を纏っているので、ちよつとやそつとの攻撃に巻き込まれる心配は無い。

間髪入れず一面緑の部屋に、無数の藍色の華が咲いた。

『私が幻術のみを使うと思うな』

それぞれの華の中心から、純白の蔓が放たれる。

地を這う声で、約百年振りの本気を出す藍緋。

原作で彼女は、相手を侮ったせいで火黒によって命を散らした。

ネリ以外は分からないことだが、やはり運命さだめというものは違った形になっても互いを引き寄せるようだ。

首や足、身体に巻き付いた蔓は火黒の生命力を吸い始める。

『お前を動かす“力”そのもの全て、喰らい尽くしてやる。…私の養分となるが良い…！』

『…ほう？アンタもやれば本気になれるじゃん。なんでまた白に蟲を入れられたんだか』

からかう口調の火黒に、蔓の勢いが増す。だが突如、養分を吸収する藍緋の様子がおかしくなった。

『な、バカな…！』

その反応を予想していたのか、火黒の口元が皮肉な笑みに変わる。それはまるで己を自嘲しているようでもあった。

正守はもういつ出てきてもおかしくない限に、神経を集中させている。

火黒の背後でギチギチと暴れる音がしているのだ。藍緋の抑えもそう長くは持たないだろう。

驚愕を露にする藍緋の声を、正守は意識の外で聞いていた。

『お前……！なぜそんな状態で立っていられる……！』

『……………ハッ……………』

手の平から刀を生やし、火黒は白い蔓を煩そうに斬る。だが正守の時とは格段に精彩を欠く動きだ。

左腕が無いせいでバランスが取りにくいのか、右手からの刀を杖替わりにして火黒は真っ直ぐ立った。

左脇は黒い着流しで判りづらいが、手の平ほどの穴が空いている。人間なら腎臓やら大腸やらの内臓が飛び出している怪我　否、動けるはずもない致命傷だ。

今の火黒に生命力など残ってはいない。

いつ死んでもおかしくない。恐ろしいことに、気力だけでなんとか立っている状態なのだ。

だが包帯の奥で光る瞳は、まだ力を失っていない。

『…俺にも分かんねえよ。ただ、言えんのは…俺が“まだ”満たされてねえってこと、だけだ…』

火黒の背後で禍々しい殺気の塊が爆ぜる。

藍緋の緑の蔓が必死で押さえ込もうとするが、それこそ悪足掻きだった。

壁を突き破って最初に出てきたのは、尖った爪を持った太く黒い腕だ。

黒髪は長く伸びて鬢たてがみとなり、全身は闇の如き漆黒。尻尾は馬に似ているがさらに長く、少し先がくるりと丸まっている。

白い刺青が顔面、胸、上腕に至るまで刻まれている荒々しい獣ケモノの姿。

黒い体を彩るその白き紋様は、鬨気や殺気と相まって限をえるなら、闇夜の嵐の化身としていた。例

『ガアアアアア！！！』

押し返そうとする緑の蔓を、鋭い爪で切り裂き滅茶苦茶に暴れる。

緑の瞳は虹彩が縦に割れ、顔形だけ見れば一見虎の様に見えるかもしれない。

だがこの獣は野生さながらで、檻の中で大人しくしてくれなかった。

『くッ！！なぜだ…暫くは動けないはずだぞ！？』

藍緋が手足に絡み付いても、仕込み針を紛れ込ませても限の動きは止まらない。

邪魔な蔓を引きちぎりながら慟哭ういきうとも咆哮ほうとも違う、殺気の籠った叫びを火黒の背に浴びせかけた。

出られなくて、苛立たしくて仕方無いと言う風に。

『オオオオオ！！！』

『……遅え、よ……』

苦り切った声で、包帯男の体がぐらりと前に傾ぐ。間髪入れずに正守が、結界で黒衣着流しの男を横にとついた。

火黒は成すがまま抵抗もせず横へ突き飛ばされ、緑の床に倒れ込む。獣が解き放たれたのはその直後だった。

「限、しっかりしろ！ネリは死んでない！落ち着け！！」

『…………アアアアアアアア、！！！！』

聞こえていない。

完全に妖の意識に乗っ取られてしまっている限は、結界を物ともせず火黒の方を向く。

火黒を殺す、という一念が少年の思考を支配しているようだ。

（全く…似た者同士だな！！）

舌打ちを漏らした正守は、火黒を守る形で結界を生成する。こんな意味の無い殺しなど、限にもネリにもさせられない。

ネリが本気で火黒を殺せなかったのは、他でも無い。

火黒がまだ何もやっていないからだ。

歴史が進んでいけば確かに火黒は、限を殺しただろう。藍緋もきつと殺したし、ゆくゆくは良守の手によって伐たれただろう。

だが全て、まだ来ていない未来の話だ。ネリが知る“火黒”は確かに悪だが、今この時点で彼はまだ限に触れてさえいない。

ネリは無意識に『本当に殺して良いのだろうか』と迷っていたのだろう。

その戸惑いを見抜いた火黒は、彼女を本気にさせるためネリの近い者を殺そうとした。

だが結局正気を失った状態のネリから致命傷を負い、火黒は一人で死にかけている。

僅かな力も藍緋に取られた火黒は、倒れたままくつくつと笑った。

（俺が欲しいのはこんなンじゃねえ。こんな温いモンじゃねえんだ…もつと…もつと　　！！）

ヒリヒリしたもの。

それは生命の危機であり、強者と会う悦びであり、戦いの中にしか存在しない。

こんな緩やかな死は、火黒の求めるものではないのだ。

思い通りにならないなら、せめて最期は戦いの中にいたい。

死をもう間近に控えた掠れ声で、火黒は妖混じりの少年を呼んだ。

『来い、よオ…その爪は…飾りかア？』

『ガアアアアアアア…！！』

「待てッ 限!!」

挑発に乗せられた限が鉤爪を伸ばし、障害物の結界と蔓を切り刻む。一直線に火黒へ突進した限は、己の爪を大きく振りかぶった。

その時。

『限!!!』

火黒の待ちに待った少女の声が、正守の後方より発せられる。

ネリの背後からは、薄紫と藍色が混ざる美しい空が見えた。

緑の揺りかごは既に道をネりに譲り、限と正守が銀髪の少女を振り返る。

今だ、と火黒は力をかき集めて右手の中に最後の刀を生んだ。

そんなに長くは無い、肘までぐらいしかない小さな日本刀。だが限がこれだけ近づいている今なら、その刃先は少年まで届かないことはない。

火黒がもし右手を突き出せば、切っ先は少年の右腹を貫く。

それに気がついたのはネリだけだった。

『対象捕捉、“世界追放”……!!』

『……ハ……』

ネリが叫ぶと、火黒が倒れている緑の床に漆黒の裂け目が口を開ける。

この間に彼が少年へ右手を突き出すのは簡単だ。

胸がから空きの少年は失速出来ないまま、わざわざ刀の間合いに入つて来ているのだから。

だが、脳のダメージを覚悟したネリの“世界追放”の門は、火黒の背筋をゾクリとさせてくれた。

絶対的な 神の様な力で、塵も残さず自分は殺されるのだと男は悟つたのだ。

圧倒的な力とは、なんと心地よいものだろうか。放っておいても死ぬような男に、ネリはわざわざ最高の技を使ってくれる。

充分だ。

倒れたままの火黒が、最期の刀を手放す。鈍器で殴られた様な痛みに苦しむネリが、火黒の行動に気づくことは無かった。ズブズブと冥い深淵に、人型の妖が飲み込まれていく。

(神に会うては神を斬り…仏に会うては仏を斬る……ハッ、最期の最期に斬れなかったが…まあ…)

こういうのも悪くねえ…

ネリが頭を両手で抱えて、脳を揺さぶる痛みを耐える。

正守と藍緋だけは、目をつむり穏やかに飲み込まれていく彼を目を見開いて見送った。

『アアアア……ア………』

限が膝をついて火黒を飲み込んだ裂け目を呆然と見る。スツと閉じてしまった門の後には、藍緋の緑の床しか無かった。

少年の緑の目が見開かれ、瞬時に完全変化が解ける。

「はっ……はっ、俺……は………」

「限、戻ったな」

正守が絶界を解いた後、満身創痍の限に駆け寄る。

全身に打撲傷と火傷を負った上、眠り粉をまぶされた少年である。

もう立ち上がることさえ出来なかった。

僅かに腰元を隠すだけの少年に、羽織を肩にかけてやる。

もうこれで何もかもが終わった。

夜行の長が大きく息を吐いた時。

『正守！……ネリが……』

藍緋の悲痛な叫びが、緑の部屋一杯に反響した。

正守と限が弾かれるように振り返った先には、鼻から血を流す顔面蒼白の少女が倒れていたのだった。

(29) 嵐の後

目が覚めて初めて少女が見たのは、立派な木目の天井だった。

肌寒くなってきた空気はとても澄んでいて気持ちが良い、たくさん吸い込むと畳の良い匂いがする。

西洋で育った彼女だったが、和風の部屋の方が好きだった。頭がゆっくり回転を始める。

頭の奥が重くてズキズキするが、昨日の夜更かしが悪かったのだからとあまり気にはしない。

「…どこ?」

部屋の装飾から見てこの場所は日本だろう。人生の半分を日本で過ごしてきた少女なので、中身は丸つきり日本人だ。

すんなりと流暢な日本語が口からこぼれた。

「いつの間に…シフトしたのかな…?」

身体を起こすと、冷たい布が視界を横切って布団に落ちる。誰かが額に置いてくれていたようだ。

妙に鋭い嗅覚が、ほんのさっきまで傍に人がいたことを知らせる。若い男性…というより少年の匂いだ。

嫌な気はしないが、なぜこんなに鼻がきくのだろうとネリは首を傾げた。

「私…なんで…？」

疑問に答えてくれる親切な人はいない。一人部屋なのか誰もいない小さな和室なのだ。

遠くで子供のはしゃぐ声が聞こえる。身近な草木や土の匂いが、ここが自然豊かな場所だと教えてくれる。

布団の中からぼんやり外を眺めていると、ふいに襖ふすまの引く音がした。そちらに目を向けると、息を飲んで固まった女性が桶を持って突っ立っていた。

藍色の髪をひつつめで留めた、凛々しく美しい女性だ。和服の袖を襷たすきでまとめて、理知的な雰囲気と活動的な仕事ぶりが伺える。

その女性も息を飲んでいたが、ネリはさらに驚いた。この女性の名前は勿論知っている。

水を取り替えていた女性　　刃鳥は、桶を置いてネリに駆け寄った。

「ネリ、起きたのね！大丈夫？何か欲しいものは無い？」

「…………え」

銀髪の少女は、刃鳥の口から飛び出した自分の本名に内心飛び上がって驚いた。

いつ教えたのだろう。

……
記憶に無い。

言葉を失うネリに、刃鳥は布団の上から手ぬぐいを拾って桶に入れた。細くて長い指が力強く白い布を絞る。

「ネリが黒芒楼で倒れてから、1週間も意識が戻らなかったのよ。皆心配してたわ」

「黒……芒楼……？」

原作・結界師の漫画を頭の中でめくって、ネリはここが“その”世界であると確信した。

同時に、自分が記憶を無くしてしまったということも。

前にも経験した心の空白感のお陰で、ネリが取り乱すことは無かった。

（なんで……レナモンがいないんだろう……）

さりげなく部屋に目をやっても、近くにデバイスも無ければ相棒が潜んでる気配も無い。

この女性は何か知っているだろうか。

初対面のように質問してしまったら……記憶が無いことがバレたら、衝撃を受けるんじゃないだろうか。

「ネリ?どうしたの?」

嬉しそうな顔から一転、心配そうな顔になった副長を見てネリはますます言い出せなくなった。

とりあえず『いいえ…』と、冷たい手ぬぐいを目の上に乗せて横になる。さっきまでいたのは少年だ、この女性ではない。

そしてどうやら自分は夜行の一員になっていたらしい。黒芒楼での戦いで、異能を限界まで使ってしまったようだ。

今度は誰を殺したのだろう、とネリは乾いた笑みを漏らした。親友に引き続き、記憶を飛ばすほど憎い敵を世界から追放したらしい。

(本当に、最低な女…)

「……ネリ、貴女…」

「どうかしました、副長?」

この呼び方で間違っていないはず。“刃鳥さん”や“美希さん”とは間違っても呼ばないはずだ。

ネリのしっかりした答えに目に見えて刃鳥は、ホツとした様に息を吐いた。

「いいえ、何でもないわ。ネリが起きたってこと頭領に報告してくるわね」

「お願いします」

紫水晶の瞳が、刃鳥に向けられることはない。以前ネリが嘘をついた時、直ぐにバレてしまい『分かりやすい』と苦笑された覚えがあるからだ。

(嘘をつかないでくれって……誰に言われたんだっけ……?)

宝物のように大事だったはずなのに、ごっそり頭から抜けている。いつまで隠し通せるかと、ネリは小さくため息をついた。

刃鳥は元々少女が使っていた部屋を後にし、もう近くにはいない。本当にいつたいたいから自分は、こんなに感覚が鋭くなったのだからと少女はそら恐ろしくなった。

まるで相棒のようだ小さく笑い、その瞬間ネリの顔が引きつる。

ガバツと布団を蹴り上げる勢いで身を起こした。

「(レナモン、私はここだよ?!……もう人もいない、ちょっと出てきて!訊きたいことが沢山あって……レナモン?)」

異国の言葉が空しく部屋に消えていく。常に繋がっている意識の糸を辿っていくが、何も無い。何も感じない。

レナモンが、いない。

手で押さえるも、悲痛な声が漏れる。

「(なんで…、なんでッ!!!いつ!?!?この世界で!?!?誰に…誰かに

殺されたの!?)」

呼吸しているつもりなのに、上手く息が吸えない。清潔感溢れる新品の掛布団が、段々と色を無くしていく。

視界が段々と黄色に染まっていき、聴覚までもが怪しくなっていく。

「(嘘でしょ...?そんなことも私は忘れちゃったっていうの!?)」

いよいよ彼女が叫びそうになった時、部屋の扉にノックがあった。襖なのに固いノックが出来る不自然に、ネリが気づく余裕は無い。

「入って良いかい?」

「.....!」

アニメで聞いたことのある声そのもの 墨村正守の声である。変に鋭くて暗い影を持つ夜行の長に、ネリの誤魔化しなどきかないだろう。

慌ててネリは布団を被って、手ぬぐいで目を隠した。

必死で呼吸を落ち着けて、寝ているフリをする。寝ているまでは無理でも寝起き位には見えるよう、頭を空っぽにするよう努めた。

「...寝ちゃったかな。ごめんね、入るよ?」

「.....今、起きたところですよ」

緩慢な動作で起き上がり手ぬぐいをそのまま、顔を隠すように額にあてる。二日酔いの様に頭を右手で支え、ネリは背中を丸めた。

裏会最高幹部を直視しながら、嘘をつく自信は無い。
具合が悪そうだと察したのか、正守は何も言わずネリの横に腰を下ろした。

少女は寝起きを装いながら、必死で考えをまとめる。

基本的な情報はあるものの、結界師の世界に来てからの記憶は全て飛んでしまった。前回は取り戻すまでに約1年かかったが、今回はいったいどれ程かかるのだろうか。

悶々とするネりに、正守が先に口を開いた。

「…俺の言いたいことは分かるね」

「……………」

「君の身勝手に大勢の人に心配をかけた。たとえそれが仲間の為だったとしてもだ。」

「……………」

ネリは何も答える事が出来ない。自分の所業がどれだけ危険なことだったのか、それを訊く勇氣も無かった。

「なぜ一人でこんな…、こんなボロボロになるまで戦ったんだ。未来は皆で作ろうと…無茶はするなと…あれほど言ったのに、お前は一切聞いてなかったのか!!」

「……………」

ビリビリと肌を震わせる怒声に、ネリの肩が跳ねる。
謝りたかったが、謝れない。

いい加減に謝ってはいけない事柄なのは、記憶が無くとも分かる。
叫びたい気持ちがかかるのとネリの中で渦巻くが、その度に『喋っ
てはいけない』と自分を戒めた。

自分の身勝手を押し通したせいで、記憶を失うなど虫が良いにも程
がある。

頭を抱えたまま俯いているネりに、正守は静かに言った。

「何も言うことは無いのか、ネリ。自分は間違っていないかったと？
火黒を殺すことで烏森を守ったと、そう言いたいのか？」

男性の声は驚く程に冷たい。

ネリは自分が誰を殺し、それが誰の為だったのか瞬時に理解した。

記憶が無いのを除いても、この世界に来たら絶対自分がやりそうな
事だけに儂い笑みを浮かべる。

その笑みを正守が見とがめ、不審気に眉を寄せた。

「何がおかしいんだ」

「いえ…自分の愚かさは筋金入りだなと思ったら妙に笑えて…」

「なに…!？」

正守がネリの肩を掴んで上に向かせると、少女は能面の様な顔で男を見返してきた。

上司が目の前にいるにも関わらず何も見ていない瞳に、正守が息を飲む。

笑ってるなんて生ぬるい、死に顔の様な穏やかな笑みに男はゾツとした。

「…謝罪は出来ません。形だけ繕ったってそこに心はありませんから。」

同じ状況でこの先、必ずその人を救うと決めたら、私は間違いなくまた同じことをします。それに…」

突き放してくれることを願い、ネリは辛辣な言葉を吐く。

「…私が誰を助けようが、誰を殺そうが…貴方には関係の無い事でしょう」

「……………!!」

弾かれた様に細い肩から手を退けた正守は、憤りより先に困惑が立った。

今まで太陽の様に笑っていた少女と、まるで別人のようで…纏う空気が違う。

ネリのはずなのに、ネリじゃない。言い知れぬ違和感が付いて回る。そんな正守の困惑を勘違いした少女は、うつすらと笑みを浮かべた。

「意外でした？私って結構自分勝手なんですよ。自分の手が届く世界は、自分の思い通りにしなきゃ気が済まないんです。」

握り締めたせいで温くなった布巾を、少女が桶へ放り込む。勢い余って少し水が桶から溢れ出た。

揺れる水面を眺めながら、少女はポツリと呟く。

「…未来、どこまで話しましたっけ」

「…未来というか…その、藍緋から君の事情を聞いた。鬼百合の件も…、全て、聞いた。」

「……………!?!」

ネリは突然出てきた親友の名前に、心臓がドクンと強く脈打ったのを感じた。

なぜ…なぜ夜行の頭領の口から、殺した親友の名前が出てくる?!

思考が凍りつき、『訊きたい』という欲求が膨れ上がる。

分からない事が多すぎて、咄嗟に返事をするさえ出来ない。

やはり自分は嘘を突き通すのが苦手だ。

口が勝手に謝罪の言葉を紡ぐ。

「しゅめ…なぞい…」

「…それについては君が謝ることじゃない。むしろ、君は被害者だろう。俺こそ勝手に聞き出す真似をしてすまなかった。」

「……………」

違う。

ネリの謝罪は、把握出来ていないのに偽ったまま話をさせていることについてだ。

正守は何かネリに後ろめたいことがあるらしい。考え事をしながら聞いていたので、“鬼百合”しか聞き取れなかった。

「……………いえ…」

曖昧な相槌しか打てない自分が腹立たしい。これではいつかバレかねない。

記憶があるように見せる為、ネリはさも最初から気になっていたかのように話を切り出した。

「それはそうと…黒芒楼はどうなりました？私が…倒れた後。」

刃鳥は黒芒楼の戦いからネリが1週間寝ていたと教えてくれた。黒芒楼で火黒を殺したのがネリなら、原作と大きく違った展開になったはずである。

その間のことを正守に訊いても、何らおかしくは無いはずだ。話を変えられた正守は、若干渋い顔をした。

「…黒芒楼の主がしきりとネリに会いたがってる。藍緋を通して正式に俺に催促状を出してるよ。」

「…姫様、が？」

なぜ黒芒楼の土地神が自分を指名してくるのだろう。

火黒が死んで、藍緋と姫は生きているこの世界。ならば志々尾隈も生き延びた可能性が高い。

訊きたかったが、そこまで深入りしては確実にボロが出る。

疑問を全て押し殺し、今持つ情報だけでネリは受け答えするしかなかった。

「会えるなら…会いたいです」

「駄目だ」

即答する正守に、ネリはやっと桶から視線を外した。いつまでも目を合わせないのも不審に思われるだろう。

ネリの希望を一蹴した男は、腕を組んだ。

「今のネリなら黒芒楼に残りかねない。そんなことになったら俺も限も困る。…あちらは大歓迎だろうが」

「……………」

正守の言い方だと、やはり志々尾少年は生き残っているようだ。

彼の運命が変わったと聞いても、今のネリは『ああ良かったな』くらいにしか思わない。

黒芒楼側が“大歓迎”する意味は分からないが、行けないからと言って特に残念とも思わない。

何を言われても、感情が着いていかず流してしまうのだ。

目下、情報収集に努めないといつか誰かに気づかれる。

暢気に姫の気まぐれになど付き合ってられない。

「……………それなら、別にいいです……………」

「……………」

正守の視線が厳しくなる。目が泳ぐ前にそっと閉じ、誤魔化すように少女は窓の外に目をやった。

態度が言外に『もう話したくない』と示している。

これ以上の会話は正直厳しい。記憶喪失の頭で少ない情報を元に、必死で考えながら喋ったのだ。

流石に疲れてきた。

「……………」

「……………」

何とも言えない、息苦しい沈黙が降りる。

口数の少ないネリを、恐らく正守は訝しく思っていることだろう。試す様な事を訊かれたらお終いだ。さっさと一人にして欲しいのが本音だった。

今はただ、情報を整理する時間が欲しい。

ネリの願いが届いたのか、正守が静かに腰を上げた。

「暫く謹慎を命じる。屋敷から外に出ないこと。その間訓練も無しだ…良いね？」

「わかり…ました」

訓練をしてはいけない、という言葉でネリは恐ろしいことに気がついた。

自分はその戦闘班に、所属していたのだと。

それなら謹慎と言われて逆に助かった。必要以上に戦闘班の仲間と、顔を合わせないで済むのだから。何とかかなりそうだと分かり、ネリがホッと息を吐く。

「あ、そうそう」

襖に手をかけた正守が思い出した様に少女を振り返った。弛んだ少女の気持ち再度強張る。

「限が“また一緒に星を見よう”ってさ。あいつ楽しみにしてるから、早く体調調整えてやってね」

「あ……はい、頑張ります」

一瞬ドキリとしたネリだが、自分が志々尾少年と親交があることが分かり、また新しく知識に付け加えた。

（志々尾限か……。これまた最短距離で接点を作ったんだな！。）

戦闘班の少年達とも良好な関係を築けているようだ。

彼等の話しを聞き出すのは刃鳥からにしようと思われ、ネリは取っ手に手をかけた正守に頭を下げた。

正座はしていないが、一応の礼を示したつもりだ。

「……………？どうかしました？」

だが少女が顔を上げて、正守は目を見開いてネリを凝視したままだった。

「…ネリ……………？」

変なことを口走らなければバレない、とは限らない。

正守の言葉を訂正しないことも、充分気づかれる原因となる。

ましてや、ネリを正気に戻したあの言葉なら。

星ではなく、月。

ネリの髪色の象徴である“月”は、限とネリにとって間違えようの

ない単語なのに。

それを少女は訂正しない。素の表情で『？』を頭の上に浮かべている。

常に冷静沈着、敵には一片の情けもかけぬ夜行の長が、この世の終わりが来たかの様に喘いだ。

「……………まさか……………そうか、だから……………！ああ、俺は…………………………何て事を……………！」

「……………え？」

さっきまで部下を叱っていた顔は、己を責めて蒼白になっている。必死に繕っていたネリは、最後の最後に自分がへマをしたのだと悟った。

正守は何も言葉をかけることが出来ず、身体を固くしたネリをゆっくり抱き締める。

初対面なのだが、どこか安心出来る『大きいお兄さん』に、ネリの凍てついた心が呼吸し始めた。

「……………ごめん、気づくのが遅くて。俺がいきなり怒ったから……………恐かったよね」

「……………ッ！」

無表情の仮面が崩れ落ちていく。ポタリ、ポタリと布団に大粒の雨が降る。

くしゃりと顔を歪めて、ネリは涙ながらに謝った。

記憶を失ってすみません、と。

本人の要望で面会謝絶扱いになった少女は、正守から今までの話を聞いていた。

起きたばかりなのであまり無理はさせないよう配慮し、彼はまずレナモンのことについて話す。

相棒がヨキに殺された経緯や、鬼百合が完全に黒芒楼の主と同化したと言われても、少女には今ひとつピンと来なかった。

「私が…土地神の孫？それって無理がありませんか？」

「藍緋から聞いた時、俺も同じことを思ったよ。だが、この世界が君という存在を組み込む時に、そういうことになったんだと……その詳しい話も、俺の方が訊きたかったんだけどね」

困ったように笑う正守に、先程までの怒気は無い。

記憶が無いのに怒鳴ったのを、相当反省しているらしい。

正守でも最後の言葉は、半信半疑だったくらいだ。

見抜けなかったら、さらにネリを追い詰める所だった。

「よく混乱しなかったね？今の君には初めての場所だろうか？」

「……まあ畳の部屋から日本だって分かりましたし……。副長も“黒芒楼”って言ってたので。ああ『あの世界なんだな』ってすぐ分かりました」

「あの世界？」

眉を寄せる正守に、少女もキョトンという顔になった。

未来を知っていると明かしているのに、中途半端な所までしか話していなかったらしい。

話して良いものとネリは少し思ったが、正守ならば信用できるだろう。

なんたって、自分の上司なのだから。

「この世界は、墨村さんの弟を中心に回っている変則的な世界なんですよ。」

「良守を中心に…!？」

「ええ」

ごく軽い調子で、未来の悲喜劇全てを知っているネリが頷いた。正当継承者になれなかった正守にとって、“良守が世界の中心”という言葉はどこかストンと心に落ちてくるものだった。

常に何かを弟を助けている気がしていて、“選ばれた”良守と“選ばれなかった”自分は何が違うのかとずっと思っていたのだ。

沈黙してしまった正守に、少女は綺麗な笑みを浮かべる。

「彼目掛けて、烏森を巻き込んだ恐ろしい大戦争が起きます。開祖様も今は見守って下さってますけど、手を出すことは出来ません。頭領は…、その戦争を終わらせる大役があるんです。敵の親玉に引

導を渡す、大事な役目が」

それは遙か未来の話でもあり、悲劇の発端は何百年も昔に遡る。

開祖が犯した過ちから生まれた悲しい愛の物語と、一人の男が引き起こした野望渦巻く物語。

後者の終幕を引くのに欠かせないのが 正守の総帥討伐の役目だ。

「今はまだ詳しく言えません。でも質問には出来る限り答えます。志々尾君や藍緋さんもそうですが、私は、夜行の皆に理不尽な死を迎えて欲しくない。」

頭領…にも悔しい思いをして欲しくないんです。」

「……………ネリちゃんさあ、本当に記憶無いの？」

以前と同じように呼んで貰えた正守がいたずらっぽく笑うと、初めて少女の顔に太陽が昇った。

「前にも私、同じこと言いました？」

「限のことを話してくれた時に、そういう言い方してたよ」

全然変わらないな、と夜行の長は眩しそうに微笑む。

未来を知っているが故に、一人で全て抱え込み奔走してしまうネリ。目を離したら、簡単に自分を切り売りしてしまうぐらい心優しい少女なのだ。

時に“悪”を排除する冷酷さも見せる、まるで 気まぐれな神の

よう。

その時、面会謝絶にも関わらず部屋の襖にノックがあった。

「……じゃあ今日の所はここまで。なるべく外には出ないで、情報収集は鏡の世界からにしてくれ。」

「は、はい」

そこまで知っているのかと、ネリは慌てて返事をする。

刃鳥あたりが頭領である正守を回収しに来たのだろうと、ネリはノックした人物へ特に注意を向けなかった。

一気に色々な情報を仕入れたので、一旦頭を整理したい。布団に横になり、少女は静かに目をつむる。

だから、気がつかなかった。

ノックした人物と、ネリが最初に嗅いだ少年の匂いが同じだということに。

(30) 物語の終演。記憶は繋がってます

周囲には謹慎及び療養という形で接触を絶っていたネリは、もう2週間以上正守と刃鳥以外顔を合わせていなかった。

ネリの預かり知らぬ所だが、業を煮やした藍緋が夜行に乗り込んできたり、烏森警護に飛ばされた超不機嫌な限がいたりと中々に混沌とした2週間だった。

せめて見舞いを許可しろと刃鳥が無言の圧力を正守にかけたので、彼女だけには仕方無く真相を伝えてある。

脳に負ったダメージでネリが記憶を失ってしまったと聞いて、刃鳥は地面が崩れたかのような表情で悲鳴を飲み込んだ。

大慌てで考えが至らなかったことを二人に詫び、直ぐ様少女のフォローに奔走する。

ネリの謹慎を解かせようとしてた少年達を、何とか宥めて事態を収拾することに成功した。

限に烏森警護の任を再提案したのも、実は有能な副長の仕業である。流石に相思相愛だった二人を引き裂くような真似はしたくなかったのだが、ネリが火黒に手を下したのは突き詰めれば限の為。

これ以上少年に心配をかけたくない、一番大切だったならなおのこと伏せておいて欲しいと、ネリは頭領と副長に頭を下げた。

「志々尾君には記憶を失ったことを知られたくないんです」

唯一名前で呼び合っていた少年を、ネリは今や名字でしか呼ぶことが出来ない。

人生で初めて出来た『大切な人』に、これ以上悲しい思いをして欲しくないのだ。

「バレる前に、必ず記憶を取り戻してみせます。」

決意を秘めたネリの紫水晶の瞳は、純粋な妖気と相まって強い光を放っていた。

限の死の運命が無くなったことで、影宮や秋津が烏森に派遣されることはなかった。

良守との友好を築くのは、先延ばしになってしまったのだろう。

良守の真界を発動する下地を奪ってしまったのは、この世界にどんな影響があるのだろうか。

気になることは、多々あるが今のネリに出来ることは限られているのも事実。

「おはようございます」

謹慎中に十分な知識を貯めたネリは、晴れて面会謝絶の札を自分の部屋から取り去った。

まずは食堂で初の朝食をとってみることにする。

料理長の愛川を初めとした、食堂にいた面々は銀髪の少女に一齐に目を剥いた。

「……………ネリ（ちゃん）?!……………」

「あ…えと、お久しぶりです?」

精々数人が返してくれるぐらいだろうと思っていた挨拶は、予想以上の反響を生む。

暴れる情けない心臓を押さえながら、ネリは朝食セットを取って席についた。

『どもども』と頭を下げつつ、一人で食べ始めようとする。

だがすかさず、閃と秀がネリの横まで物凄い勢いで移動してきた。味噌汁が零れそうになったのだが、二人の少年は気がついていないようだ。

「暢気に“お早う”じゃねーだろ!? 怪我はもう大丈夫なのかよ!? 2週間も見舞いすら出来なくて、副長がストライキ起こす所だったんだぞ!？」

閃が半狂乱になってクリーム色の髪を振り乱せば、秀もオロオロと口を開く。

「皆心配してたんだよ? 誤解したままネリちゃんたら黒芒楼行っちゃったし。このまま帰って来なかったらどうしようって…」

泣きそうな顔の少年達に、ネリは困ったように微笑んだ。
これだけ心配させておいてさらに、記憶がありませんなどとは言えない。

明るい少女の仮面を被って、ネリは手をブンブンと振った。

「頭領に大目玉食らっちゃってさ、謹慎も兼ねてたから部屋から出れなかったんだよー。いや、缶詰めは辛かったわー」

原作の主要人物とは、特に仲が良かったと正守から聞いている。タメ口でなおかつあっけらかんとした口調で、この場は正解のはずだ。だが妙に明るい少女に、本人も気がつかない程の微かな違和感が閃の脳裏を走った。

「……………俺、お前が本当に戻って来ないかと思った。黒芒楼の土地神が、お前を城に引き抜こうとしてんだろ？書状がわんさか山になつてたぜ」

「この前の女の人は凄かったよねえ…。 “ネリを出せー！！” って怒鳴り込みに来てさ…」

何も気がついていない秋津と、眉を少し寄せた影宮が若干深刻そうな顔をする。対するネリは『うげっ』と冗談の様に顔を引きつらせた。

「藍緋さんがこんな山奥まで来たの!？」

「ああ。頭領が丁度いない時に来ちまったもんだから、門のトコで大乱闘になつたんだぜ。」

「すぐにアトラさんが副長に知らせて、副長が何とか収めたらしいけど……どうやったんだろうね？」

「さあな。あれ以降パツタリ文書も来なくなつたから……次は実力行使に訴えんじやねえの？」

総本部のすぐお膝元にある夜行の本拠地なので、門前での騒ぎは勿論御法度だ。

対応に出たのがいつもの白道・黄道コンビでは無かつたのも、話がこじれた原因らしい。

もし坊主二人組であつたならば、藍緋とは黒芒楼に行った際に面識があるからだ。

「お前、当分一人にならない方がいいよ。いつ土地神ほあちやんが拐かどいに来るか分かつたもんじゃねえし」

「……………ああそれは多分無いから、大丈夫。」

閃の半分本気の忠告に首を振るネリ。藍緋には話す機会があれば伝えてもらおうよう、刃鳥達に事前に話してある。

一応土地の神様が絡むネリの血筋なので、黒芒楼側には記憶喪失の話を通すことにしたのだ。

『そんな状態なら、ネリを人間の傍に置いておかない方が良さだろー！』と藍緋がさらに過熱したのだが、部下によって止められていた。

ちなみに、ネリの邪気で瀕死の重傷を負つた黄河だが、どうにか一

命をとりとめている。

「姫様は御高齡だからあの城を出るの大変だろうし…お付きの白がさせないよ、多分。」

「ふ〜ん…大丈夫ならそれで良いけど」

何となく腑に落ちないのか、影宮は目玉焼きにかぶりつく。彼に白という人物のことは分からなかったが、特に詳しく訊くことはしなかった。

『あ、そういえば』と秀を押し退けて閃がまた口を開く。

「限が烏森警護を続行することになったんだぜ。多分お前もあつちに戻されるんじゃないか？」

「そうだよ！！限君と全然会ってないよね!？」

「あ〜…えつとですね…」

ネリにとっては漫画の紙面上でしか知らない顔である。期待を裏切るようだったが、こればかりは偽りたく無かった。

会ったこともなく、会話もしたことが無い人を親しげには呼べない。いい加減に自分の気持ちに嘘について、“限”と口にするのは抵抗があった。

彼に関しては、何故か嘘をついてはいけない気がするのだ。

「今の私は呪力と妖力を全て封じてるから、任務が来ることはまず

無いかな。」

「封じてる!?!?!」

『なんで!?!』と秀は憤慨したが、閃は持ち前の分析力で冷静に正守の意図を推測した。

ネリは、“要注意人物”から“危険人物”に格上げされてしまったのだと。

未来予知も驚異だが、一人で突っ込む性格が危険視されたのだ。

(頭領もとうとう踏み切ったな…。ネリがそれほど“未来”に影響力を持つってことか…)

実際は呪力を使うと記憶を取り戻す妨げになるため、妖力は単にネリの自信が無いだけのことなのだ。

後々諜報班に移る少年達でも、そこまでは分からない。

朝食での話はそこでお開きになり、ネリは少年達とそこで別れた。彼等には訓練という名の仕事があるのだ、ネリとは違う。

今のネリの仕事は記憶を取り戻すこと。

ぶらぶらと邸内を散策していると、何となくどこかしこ見覚えがあることに気がついた。

限とぶつかった廊下の角、正守の執務室、ネリの歓迎会を開いた“葵の間”など懐かしい気持ちに広がる。

「わあ…何か、良い場所だな…ここ…」

どこが特別良い訳ではない。漂う空気が何となく心地よいのだ。

記憶が無くても五感が、からだ 軀が覚えている確かな感覚。

以前の記憶喪失よりも、散らばったピースが多い気がする。それだけ沢山手掛かりがあり、絆があるのはこの世界がとても良い世界だからだ。

「早く思い出さなきゃな…。全部、皆のことも。…志々尾君のことも」

彼のことは一番に思い出さなくてはならない。少女が命をかける程、大切な人なのだから。

…あの火黒に挑むということは、相討ちを覚悟することだ。

胸が締め付けられる様な痛みに動けなくなり、ネリはその場につずくまる。

仕方無く少しぼんやりと休憩することにした。縁側の縁までごろりと転がり、手入れの行き届いた庭を眺める。

訓練が無い日は邸内を掃除するぐらいの戦闘班なので、部屋はどこを見てもピカピカだ。

私服のネリは、フード付きのパーカーと七分丈のジーンズを着て今は裸足。

靴下は持っているのだが、畳を素足で踏みしめて艶々の廊下を歩いてみたかったのだ。今は寝転んでいるが。

ふと記憶を無くした自分が、無意識ならどこを目指すのか試したくなかった。

(……あれ？屋根に登ってみたいかも)

いてもたってもいられなくなり、ネリは起き上がって靴下を履く。異空間から運動靴を取り出すと、縁側に腰掛けて久しぶりの外履きに足を滑り込ませた。

何だか屋根の上に宝物があるような、“行かなくては”と気が急せくのだ。

地面を思いつきり蹴る。

妖力と呪力を封じられてはいたが、身体能力は以前より上がっている。難なく屋根の上にたどり着いた。

「わぁー！ー！！眺め最高ッ！！」

空気が澄んでいて、緑が生き生きとしている山並みにネリは嬉しくなった。

何故だかふと、限の事が頭を掠める。

「そつえば彼の実家も、自然いっばいな所なんだよねえ……」

理由は分からないが、とても屋根の上が気に入った。

人の手が入っていない自然は、こんなにも気持ちが良いものなのか。

今夜もここに来よう、とネリは美味しい空気を目一杯吸った。

既視感溢れる屋根の上の少女を、正守だけが嬉しそうに頷きながら眺めていた。

毎夜毎夜屋根の上で過ごす様になったネリは、10日目にして『何が足りない』と思い始めていた。

両手で顎を支えながらも、目線はいつも横に動いてしまう。

そこには誰もいない、そんなことは見なくとも分かりきっていることだ。

「全くなんてポンコツなのッ!? 百合香の時より、ダメージは軽いみたいじゃない! さっさと思い出せー私の頭ぁー……この、アホぉー……」

自分を罵倒する言葉も、最後の方は小さく消える。
しゅん、と身体を縮こませたネリは真ん丸の月を睨み付けた。

正守から聞いた『約束の言葉』を口に出してみる。

「また一緒に月を見よう」かぁ……。星の方が毎晩良く見えるの
にね」

人里離れた山奥なので、満天の星空は月以上にネリの心を惹き付ける。

いつかは欠けて消えてしまう月よりも、ネリは正直星座を眺める方が好きだ。

今夜は満月。

ネリの銀髪が夜風に揺れ、濃い紫の小袖が月明かりに優しい色彩を帯びる。

もう少し少女が成長したら、姫との血の繋がりは表面化してくるだろう。

人間を超越し、妖混じりでも無い和服姿の少女は土地神然とした空気を纏っていた。

少し肌寒いな、と少女が自分の身体を抱く。するとその瞬間、柔らかな感触がネリを包んだ。

振り返ると同時にバランスを崩したが、『それ』が落下を防ぐ。

虹彩が縦に割れた瞳で、ネリは驚くべきものを見た。

『え…な、これ……え?』

元々封じられているので、ネリが妖気をコントロールする必要はない。

黒い獣耳が銀髪から覗き、漆黒と銀の九尾が久しぶりにユラユラと陽炎のような動きをしている。

初めて見るそれにネリは、前と同じ感想を漏らした。

『レナモンの尻尾みたあい…』

ふわふわで手触りの良い尻尾を二三まとめて抱きしめ、少女は嬉し

そつに顔を埋める。冬も深まってきた夜に、思いがけず暖かい布団を手に入れた気分だ。

柔らかさを堪能していると、不意に砂利を踏む音がした。ピクン、と黒い獣耳が音がした方向の闇に向く。

『…誰かいるの？』

「俺だ。元気そうだな、ネリ。」

スタン、と屋根の上に現れたのは髪をツンツンに立てた少年で。以前の自分なら一番会いたかった人物であり、今の自分は遠ざけてしまった少年で。

『……あ……』

この時間なら烏森警護の真つ最中である筈の 志々尾限その人だった。

まさかこんな所で会うと思わなかったネリは、思考が凍り付いてしまった。

何か喋らなくてはいけないのに、咄嗟に何も出てこない。

殆ど1ヶ月会っていないから、たのだから、“ネリ”は嬉しがらなくてはいけないのに。

言葉を失う程驚かれた少年は、ほんの少しだけ苦笑した。

「驚いたか？頭領に中間報告がてら此方に戻ったんだ。烏森も大分落ち着いて来たからな、やっと休みが取れた。」

「……そ、そうだったんだ……」

自然な動作で少女の右隣に腰を下ろした限は、ネリと同じ方向を向いた。少女と目は合わせず、ただ並んでぼんやりと闇も深い空を眺めている。

ネリが良守達の事を訊こうとした時、限が唐突に口を開いた。

「俺…姉ちゃんに手紙書いてみようと思う。」

「………!!」

思わずネリは少年の横顔を凝視してしまった。

限の姉、涼はこの4年間限に幾度となく手紙を送り続けている。だが、原作でその思いが限に届くことは無かったのだ。

その前に、限が死んでしまったから

表情に暗い影を落とす限は、今まで自分から話すことをしなかった過去を少女に見せ始めた。

「聞いたことあるかもしれないが…、俺は姉ちゃんを危うく殺すところだった。」

「………!!」

「4年前、頭領に保護された時。俺はこの爪で三人の兄と、姉……」

その前に近所の同級生まで手にかけてんだ。…皆、後少して殺す所だった」

淡々と語る限に、少女は話を聞くべきか迷った。本当の“ネリ”でない今の自分が、聞いても良いものなのか判断しかねたのだ。

少女の葛藤には気づかず　気づかないフリをして　限は己の過去を話す。

「手紙を読まなかったのは…中に恨み言が書いてあると、思ったから。自分を殺しかけた俺を…姉ちゃんが赦してくれる筈がないって…読む勇気が俺には無かった」

『だが…』と少年は続ける。黒芒楼での戦いや、その後の烏森警護の任務が限の意識を変えたのだ。

勿論、隣で輝く銀髪の少女の存在も。

「知らなくては…逃げてばかりじゃ駄目だと、やっと分かった。…お前の知ってる未来じゃ、俺は姉ちゃんと二度と顔合わせることも無かったんだろ？」

『そ…それは…』

寂しそうな顔で、限は真っ直ぐ少女を見る。目が泳いだネリは『その通りです』などと、口が裂けても言えない。

ましてや、棺で帰省したなどは。

少女の沈黙で大方察したのだろう。限はそれ以上追及はしなかった。確認程度だ。

そこで初めて限は、うつすら笑みを浮かべた。

「読んでみたんだ、一番最初の手紙を。そうしたら…」

限、姉ちゃんはね。あんたがいらなからって、父さんに賛成したんじゃないんだよ

限が傷つかない場所がもしかしたら他にあるんじゃないかって、その方が家うちにいるよりまだマシなんじゃないかって……一瞬だけ思ったの。

本当にあたしって最低。あんたを守るって、約束したのに……どうしようもなく馬鹿だった。

ごめんね…限。

4年前の手紙は古くなって黄ばんではいたが、暖かい姉の心が確かにそこにあった。

傷つき傷つけたまま 別れの挨拶も出来ないままの少年に、涼の手紙は読まれるのをずっと待っていたのだ。

涼がどれ程悔やんでいるかと。

一瞬でも、限を手放すことに同意してしまった彼女が、この4年間どれ程悔いていたのかと。

今もまだ、赦しを請うているのだと。

その気持ちを限が受け取るまでに、実に4年もかかってしまった。

ネリの瞳から流れ星のような涙が落ちる。

この世界ではまだ4年で済んだ。
運命を変えてみせると決意した前の自分の成果が、確かに目の前で
息づいていた。

「お互いに“赦してくれ”って思ってて…姉ちゃんは一言も俺の事
を責めて無かった。一回会って謝りたいって、どの手紙も最後に必
ず書いてあったんだ。」

『……………』

ネリには無い、家族という絆。暴力を奮った兄達はともかくとして、
姉の涼は限の大切な家族だ。

羨ましい、とは軽々しくて言えない。それは限の過酷な半生を侮辱
する言葉だから。

ネリは、己が言える唯一の言葉を口にした。

『良かったね…本当に、良かったね…』

少年の名を呼んであげることが出来ない自分を、ネリは齒がゆく思
う。心に溜まったしこりが、言葉にするのを邪魔するのだ。

苦しそうなネリを横目で見て、限の左手がピクリと動く。

だが、その手をギュッと握りしめた限は瓦屋根の上にそっと下ろし
た。

「……」

『……』

沈黙が降りる。

記憶が　思い出があれば、抱きついて喜びを全身で表せるのに。
今のネリに、限と築いた暖かい日々の記憶は無い。

息苦しくて、申し訳なくて銀髪の少女は立ち上がった。『ふわあ……』
と口に手を当てる。

『…眠くなつたし、私もうそろそろ戻るね？お休みなさい…』

いつかの夜と同じく、ネリは嘘のあくびをして限に背を向ける。

9本の尻尾が名残惜しそうに、ゆっくりと屋根を離れる。それは記憶が無い分、ネリの本当の心を代弁しているかのよう。

飛び立とうとする少女の白い手を、限が力強く引いた。

『んきや！？』

尻尾ごと抱き締められたネリの身体が、すっぱりと限の腕に収まる。
途端に少女の心を混乱させる、甘い既視感。

強張る細い身体に、少年は耳元で“同じ”言葉を囁いた。

「俺に…嘘は、つくな…」

『……………!!』

ビクッと、少年の切ない声にネリの軀が反応した。もうそれは反射といっても良い。

この人を知っている。

この声を、腕を、匂いを、熱を…自分は知っている。

『……………!!』

紫水晶の瞳が極限まで開かれた後、ゆっくりと閉じられる。

ザン、と銀と黒の九尾が扇の様に広がった。獣耳がピンと立ち、縦に割れた虹彩から淡い紫の光が漏れる。

ゆっくり身体を離れたネリは、今度こそ真っ直ぐ限を見つめた。その瞳は今にも涙で決壊しそうである。

嬉し涙で。

『……………たッ…ただいま 限!!』

「…！…おかえり、ネリ。」

少年は軽く驚いた後、フツと目を細めてネリを見やる。今度は思い切り抱きついてきた少女を、優しく受け止めてやった。今までと同じ甘くて安心する匂いの、銀色の太陽。

限がゆつくりと波打つ銀髪を撫でてやると、ネリ的心情を表して九尾が跳ねる。

『限…限…！』

「泣くな、ネリ。」

限の暖かさを少しも逃がすものかと、頬をすりすりするとネリは少年の胸に押しつけた。

赤面した限の心臓が、今頃になって暴れ始める。

『……………？』

物音一つしない夜を見守るのは、天空の満月だけなのに少年は何を緊張しているのだろう。少女が内心首を傾げ、限を見上げる。

だが死の運命から逃れた少年と、異世界からの少女を祝福するのは夜空だけではなかった。

「…………おめでとう、二人共ー！！…………」

『…………えー！？』

バツ！と効果音がつきそうな程振り返ったネリは、奇声を発しながら声の出所を探した。
ひよこ、と見知った顔が屋敷や向かい側の屋根からわらわら出てくる。

「限^げん！！ネリをちゃんと幸せにすんのよ　！？」

夜中に大声を張り上げるのは、白熊の妖獣を連れた女性。

「祝いの品にはスルメやるからなー」

「わー！！ついに限君の春が実ったー！！おめでとー！！」

コーヒー缶を持った眠そうな少年と、一人嬉しそうに小躍りする吸血鬼少年。

「やれやれ、やっと収まる所に収まったな。これで姫の機嫌が直る」

「ちよつと待て。緊急の任務が入ってるんだ。悪いがそつちを優先させてくれ」

「…断る」

「なっ！？」

藍色の髪に白衣をはためかせたサンダル姿の妖花と、軽くあしらわれている凄腕結界師。

副長の刃鳥に戦闘班の少年達、幼い少年姿の氷蛾^{ひむし}や人皮を被った黄^お

河。

夜行の人間達と黒芒楼の妖達が入り交じって、屋敷から屋根に至るまで鈴なりになっていた。

度肝を抜かれたネリは、思わず少年にしがみつく。すると限の身体が小刻みに震えていることに気がついた。

『ん？』とあって、少年の顔を覗き込む。

『限！？』

「……ぷ、くく……っ、クハハハハ！」

腹を抱え身を擦って笑う限に、今度はネリが赤面する番だった。

皆、知っていたのだ。

ネリが記憶を失って、夜行や仲間の事を全て忘れてしまっていた事を。

一人で苦しみ、懸命に周りを窺いながら過ごしていた事を。

半分本気の妖気が、紫色の炎となってネリを包み込む。

憤りとそれを上回る恥ずかしさで少女の瞳が凄味を増し、風も無いのに銀髪が不気味に浮かび上がった。

それを見て青ざめた限が、後退りながら慌てて言った。

「い、言っておくが俺が知ったのは今日の夕方だ！最初からな訳ないだろ！？」

「……そ、それに限は夕方かもしんねえけど、俺達なんかほんの1時間前だぜ!? 頭領が“良い夜になりそうだから”って……!」

さりげなく正守に責任をなすりつける閃も、膨らんでいく妖気に冷や汗を垂らした。

少女はずっと無言のままだし、銀と黒の九尾が背後でユラユラ蠢いている。

これは、まことに宜しくない。

感動的な場面のはずなのに、なぜ観客が寒気を感じなくてはならないのだろう。

少女の視線はとある人物からずっと離れないでいる。言わずもがな観客を集めた張本人 墨村正守だ。

「ネリ…ちゃん…? ちょっと落ち着こうか!」

「……………もう知りません。実家に帰らせて頂きます」

「「「早まるなネリー!」」」

夜行の人々が大声で悲鳴を上げたが、その中で藍緋だけが嬉しそうだった。

「おお、そうか! 姫様もきつと喜ぶぞ、では早速行こう!」

「…藍緋さん、ここで真面目に返したら收拾がつかなくなります。

過度な期待はお辞めください」

嬉々として少女を黒芒楼へ迎えようとする上司に、冷静な意見を述べる妖と。

「……まだ、手合わせしてないだろ。どこにも行くな、ネリ。」

ネリの手を限がガシッと掴み、空駆けしようとする少女を寸での所で止め。

「今夜こそ酒飲むわようー！！」

「違う！！今はネリを引き留めるのが先だッ！！あいつ空間転移しようとしてっぞ！？」

『ネル！ネル遊ば！！』

祝酒に飛び付く妖獣使いを、戦闘班主任がひっぺがし、その横を白い巨体の熊が走り抜ける。

……中々に混沌とした、優しい満月の夜だった。

『…限。』

「何だ？」

『……私、ここに来て良かった。』

「……」

一応頭を冷やしたネリが、観客のどんちゃん騒ぎを高めから見下ろす。

紫の小袖姿に尻尾を揺らしている彼女は、驚くほど黒芒楼の主に似ていた。

結界師の世界に組み込まれたことで、二度と孤児院のシスターに会えなくなったというのに、銀髪の彼女は晴れ晴れとした顔で仲間を見守っている。

それは、とても穏やかな横顔だった。

『前の世界に戻れなくたって全然構わない。私の居場所はこの世界なりだもん』

「……嬉しいことを言ってくれるんだな」

愛しい少女が記憶を失ったと聞いて、限は激しく己を責めた。全て、自分のせいだと。

また大事な人に取り返しをつかない傷を負わせてしまったと、彼は出していた休暇申請を取り消した。

少女に合わせる顔が無かったからだ。

だがそんな限を夜行本拠地に呼び戻したのは他でもない、夜行の頭領　正守である。

電話から聞こえる上司の声は、いつもと同じく謎めいていた。

まるで、『今日は特別な日になるのだ』と知っているかのように。

今夜は満月だ。奇跡が起きそうな夜になると思わないか？限。

“満月”という単語に少年は、ネリが夜行を発った時の笑顔を思い出す。
白んでくる空を少女と肩を並べて迎え、限はどこか寂しい気持ちを抱えていたものだ。

いつまでもこの優しい夜が明けなければいいのに、と柄がらにもなく本気で月に願ったのを覚えている。

願うだけではだめだ。行動に移さなければ。

『明けなければ…』ではなく、夜が明けてからも一緒に居られる様に努力しなければならぬのだ。
ネリは限の運命を変えてくれた。それに少年が報いる方法はたった一つしかない。

携帯電話を握り締めた限は、正守の言葉に一つの決断をした。

…もし、奇跡なんてものが本当にあるんなら。

頭領。 姉ちゃんからの手紙、そっちに着いたら返して頂けませんか

…己が変わらなくては、気まぐれな神様も助けてはくれないだろう。そして姉の気持ちを受け取った限は、ネリに微笑みかけることが出来る。

4年間強張っていた表情筋は、今や自由自在に緩めることが出来るのだから。

「ありがとう、ネリ。俺は、ネリに会えて良かった。」

以前より表情が柔らかくなった限を、ネリがぐいっと引き寄せる。不意を突かれて驚いた少年の頬に、『ちゅ』と少女はわざと音を立ててキスをした。

限の体がピシッと固まり、観衆からは黄色い声上がる。

『限の初頬っぺチユー、もっらい!!』

彫像の如く固まった少年に、ネリは花が綻はなんだ様に微笑んだ。

その笑みは夜闇を照らす月の様に優しく、限にとっては太陽の様に暖かい光を放っていた。

(30) 物語の終演。記憶は繋がってます (後書き)

これで本編は完結です。

…本編は、です。

次は私が個人的に一話挿入したいだけです、物語とは全く関係ありません。

あえて言うならこの話を書いた人の感想、という感じでございます

(笑)

ありがとうございました

御礼とお知らせ（前書き）

同時に最終話と投稿いたしましたので、先に前話をお読みになって下さい

この『御礼とお知らせ』は作者のぶっちゃけ話でございます

御礼とお知らせ

こんなに長くなってしまった話をお読み頂き、ありがとうございました。

以下、作者の言い訳という名の後書きが続きますので、どうぞ読み飛ばしてくださいませ。

本当に、ありがとうございました！！！！

あっちへフラフラ、こっちへフラフラの女主人公でしたがどうにか最後は収まるところに収まりました。

志々尾君の爆笑など原作では絶対に見られない描写ですが、二次創作の中だけでも彼に笑って頂ければと思います。

過分に作者の妄想と、希望と、甘ったるい生善説が入っておりますが、よくぞお付き合い下さいました。

単行本は35巻で完結する田辺イエロウ先生の漫画・結界師の世界をこねくり回してしまい、反省しております。

(後悔はしておりません(笑))

原作で唯一14歳という若さで亡くなった少年ですが、やはり復活を望む声が大きかったようです。

私も勿論、その一人ですが。

でも、二次創作を通して志々尾少年と向かいあってみて、臆気に分かったことがあります。

彼は、死ななくてはいけなかったのだと。

というよりキャラクター自体に死亡フラグが立ちまくりです。書いていて不思議でした

酷い言い方になりますが、書いていてどうしても志々尾君が死に向かいそうになるんです。

(いや、作者の力量不足…ゲフンゲフン)

この話はハッピーエンドで終わるんだ！！ってか終わらせるの！！と自分に言い聞かせ、志々尾君の死亡フラグを全てへし折りました。いや〜危なかったです。

最後の最後に火黒がちよっぴり改心してくれなかったら、彼は大怪我してましたよ、多分。

そういう展開も(時守様と宙心丸君を巻き込む形で)考えないではなかったのですが、志々尾君の怪我は最小限にしました。

火黒の心理が何だか最後まで一番謎でしたが、自分なりに彼が求めた“ヒリヒリ”を与えたつもりです。

…え、えと、圧倒的な力…みたいなの…？

原作では火黒を殺すのは良守君です。

…真界（未熟版）も、火黒にとっては『圧倒的な力』な訳でございます。

充分強くなってしまった火黒は、肌を焦がす様な…自分が敵わない相手に、最期の幕切りをして欲しかったのではないのでしょうか？

火黒の過去はアニメ版の方からたくさん引用させていただきました。一応火黒さんに最初に斬られた侍が『この太平の世に辻斬りとは…』みたいなことをおっしゃっていたので、江戸時代で一番幕政が安定した時代に彼が生きていたことにしちゃいました。

原作漫画重視とタグに書いたのに、結構アニメからセリフをそのまま使っています。

この話は後半から原作破壊なのは決まっていたので、前半だけでも原作を守りたつたんです…。

というかこの話、人が死ななすぎてもう滅茶苦茶だあ。

皆良い人〜で話を進めちゃいました。だって死んじゃうキャラクタ―皆を『助けたいなあ…』なんて思っていましたので。

この話は本編は完結しましたが、後日談を入れようと思います。ですの『完結済』の表示にはしばらくなりません。ちょこちょこ更新します。

まあ…一応、自分の中でまだあんなことやこんなことを書いたもので…。

とまあ、ズラズラ書きましたが改めました。

ありがとうございます！！！！

ここまで読んで下さったあなたは、神様です！！！！

あの時の夜行く大乱闘の巻く（前書き）

なんか色々壊れてきた気がします・・・。

あの時の夜行く大乱闘の巻く

正守が地方の任務で夜行を留守にしており、ネリが必死に刃鳥から情報を仕入れていた時。

前代未聞の嵐が、夜行本拠地に吹き荒れたのだった。

「当方へどのような御用向きか。この門は、裏会に属する者以外通れませぬ」

「……見かけぬ妖だが、主人はどなたか。」

その時門番をしていたのは、裏会総本部所属の異能者二人。

臨時の門番として生真面目な彼等は、怪しい訪問者に当然警戒を露にした。

白道と黄道は正守と共に任務で中部地方に妖退治に行っており、帰るのは2日後である。

規則にならって呪現化能力者の二人は、夕焼けを背負った妖に矛を向けた。

妖を使役する術者は少なくないので、問答無用で滅すことはまずない。

だが、主人と一緒にいないなら話は別だ。顔見知りでも無い限り、

妖をわざわざ敷地に入れるなど狂気の沙汰である。

一応永く生きた妖である藍緋は、幸いなことにこの程度で怒るほど気は短くなかった。

藍色の振袖姿で礼を表す程度、頭を軽く下げる。

「私とはある土地神の使いだ。夜行の頭領、墨村正守殿に謁見を申し込みたい。」

「土地神の御使者?!」

土地神が特定の人間を名指しで指名するのは、極めて異例なことだ。というより、まずあり得ない。

礼は欠かさぬように矛は収めたが、二人共警戒は解かない。一人が蝶のような式神を取り出す。

「只今確認します故、しばし待たれよ。念の為、そちらの神佑地の名があれば教えて頂けますかな」

「面倒をおかけしてすみませぬ。これも規則なもので」

本物の土地神の使者だった場合、こんなやり取りをしている間に殺されても不思議ではない。

悪い意味で唯我独尊、人間を対等の立場で見ることが無いのだ。

下界の人間と異界の土地神が接触するなど、緊急事態でもない限りあり得ないこと。

二人の門番が警戒を解かずに、その場を動かなかったのはある意味正しかった。

藍緋もそこは寛容に、（怒鳴るのは正守だけと決めていたので）答えてやった。　そして、その言葉が波乱を巻き起こす。

「私の主は、黒芒楼の土地神。此方では…黒芒楼と言った方が通じるか」

「「！！？」」

途端に二人の顔が強張った。

黒芒楼の土地神がネリの祖母であるなど、細かい事を彼らが知るはずもない。

だが黒芒楼が烏森を狙って組織的に動いていたのは、総本部の者なら知っていて当然だ。

夜行の頭領が黒芒楼の妖に攻撃を受けたのも有名な話。

二人が戦闘体制に入るのも無理のないことだった。

「黒芒楼の者が、何故この場所に！？」

「一匹で乗り込んで来るとは、愚かなことよ！！」

丁寧な態度から180度変わった彼等に藍緋は面食らってしまい、咄嗟に反応が遅れた。

一人が刀を左下段から、もう一人が二又の槍を跳躍と共に真上から振り下ろす。

どちらも殺気の籠った攻撃で、藍緋は瞬時に相手が情報を全ては把握していないと悟った。

…逆に、分かっただけで攻撃しているなら馬鹿にするにも程がある。

軽く後ろへ跳びすさって距離を取り、内心の怒りを封じ込めた藍緋は冷静に口を開いた。

「黒芒楼と夜行は和解に向けて話を進めている。貴様等が私に攻撃すれば、全てが水の泡だぞ。」

「和解…？」

「特級認定されている神佑地に手を出した輩が、何をほざくかッ！」

刀を持った男だけは迷った風と同僚を見たが、その同僚は槍を構えたまま激昂している。

それでもギリギリまで藍緋は、攻撃するのを控えるつもりでいた。生きた年月を考えれば、か弱い子供が癩癩を起こしたとてすぐ手を上げる大人はいない。

彼らが普通の妖ならそんな情けは無用だが、相手が異能者で正守の部下かもしれない以上殺すことは出来なかった。

（だが……正守の部下にしては短絡的過ぎる。別の所属の者だろう……）

殺気を振り撒く男の前に、藍緋は無表情の下で思考を進めていく。黒芒楼の名を出した為、結局夜行の方へ確認用の式神は飛ばされていないのだ。正守が気がつくまでにいつたいどれ程かかるのだろう。手を出して来ない振袖の女性に、槍の男はまたもや喚いた。

「しかも先日、夜行の戦闘員が二人も負傷したと聞く。うち一人は未だに嚴重な結界で今も治療中だ!!」

『滅殺してくれる!』と息巻く槍の使い手を、冷静なもう一人が必死で止める。

だが藍緋はそんな様子など見えてはいなかった。

(嚴重な……結界、だと　!?)

随分前からネリを正式に招く書状を送っていたものの、待てど暮らせどなしのつぶて。

とうとう姫君が動きかねない所まで来たので、夜行とも親交がある藍緋が使者として来たのだが。

やはり、正守は未来を知るネリを最初から幽閉するつもりだったようだ。

鼻から血を流して意識を失ったネリを、『治療の為なら』と仕方無く藍緋は見送ったのに。

聡明で逆に深読みし過ぎた女性の妖気が膨れ上がる。

攻撃するしないで意見が別れていた門番二人が、ハッと藍緋の方を向いた。

ミシミシと振袖姿の女性が、白煙をあげて変化していく。

『おのれ正守……交わした約束を忘れたか……！』

地面に緑の蔓が根を張り、緑の巨人が藍色の花を咲かせて小さな人間達を見下ろす。

それは、人型をやめた藍緋の真の姿だった。

「なっ……！」

「正体を現しおったか、妖め……！」

槍の使い手が同僚の制止を振り払い、己の武器を手に走り出す。刀を持った男は迷った拳句、蝶の式神を総本部ではなく夜行の方へ飛ばした。

この時、総本部へ応援を頼まなかったのは唯一の正しい判断だったと言えよう。

門番の主な役目は侵入者が来た場合、一人が迎撃しもう一人が式神で総本部に応援を要請すること。

裏会の紋が入った身分証を持った人間ならば何の問題もないのだが、藍緋のように妖で身分も保証出来ないとすると、とても通すことは出来ない。

土地神の使者足る書状を早く出せば良かったのだが、“黒芒楼”の

物である時点で効力は無かっただろう。

それに元々今回の藍緋は、仲良く談笑しに来た訳では無い。

土地神に返事も出さない男を、一発殴りに来たのだ。

門の前で騒ぎが起こってからおよそ5分、夜行の詰所で緊急時の受付業務をしていた花島は飛び上がって驚いた。

虫とは思えぬ速さで詰所の壁にぶち当たった蝶が、殴り書きの手紙を届けてきたからだ。

彼女は初等教育を担当する班なので、活動的な印象とは裏腹に雑務も受け持っている。

だが、実際こんな切迫した伝令は今まで一度も無かった。

『大至急、墨村正守殿に確認したき事あり。黒芒楼の妖が貴殿に謁見を申し込み、ただ今二人が門の所で足止めしている次第。この妖の申すこと、真実なら貴殿に門までご足願いたい。偽りなら、戦闘員の応援を要請いたす。』

筆をとって書いた訳では無い、術者の呪力を念写で形にした書状のようだ。

焦っている心情が窺える字体に、亜十羅は詰所を飛び出し刃鳥に電話をかける。

正守が不在の時は副長に届けるのが筋なのだが、刃鳥も一ヶ所に留まっているほど暇な人では無い。電話で呼び出す方が断然速い。

すぐに電話口に出てくれた副長に、花島は早口でまくし立てた。

「美希、大変よ！！門の所で頭領に会いたって妖が来て、そいつ

が黒芒楼の妖らしいわ！！話がこじれて門番と既に戦闘になつて
つて！！」

『えっ！？……分かった、代わりに私が門に行く』

一度で理解してくれた副長に、花島はホッと胸を撫で下ろす。さすが
が仕事が速い夜行のNo.2である。

落ち着きを取り戻した花島は、幾らか速度を緩めて口を開いた。

「まさか一人で行くつもりじゃないでしょうね？……誰を連れてけば
良い？」

『……確か今頃の時間なら……影宮達のいる訓練所が一番近いわね。1
0人……いや、5人程連れてきてくれる？』

「そんなに少なくて大丈夫なの？」

影宮達がいる所には、精々後方支援が出来る程度の戦闘員しかいな
い。

戦力不足ではないかと危ぶむ亜十羅に、刃鳥は全速力で廊下を駆け
ながら笑った。

彼女とは、戦う訳では無いからと。

「……っていつ訳なのよ。動ける人は門に向かってちょうだい。」

花島が大筋を説明すると、少年達は鼻息を荒くして憤慨した。亜十

羅に怒っているのではない、黒芒楼の妖　藍緋に怒っているのだ。

「ちょ、黒芒楼ってネリを拐った奴らですよね！？復讐ってことですか！？」

「こんにやる、黒芒楼って言ったら頭領に大怪我させた奴らだぞ！？こつちが殴りたいわ！！」

「ネリを洗脳して烏森を襲わせた奴が、頭領にどの面下げて来たんだ！！」

走り出した少年達が花島に続くと、やはり不満が爆発する。

仕方無いこととはいえ、黒芒楼を悪者にしてしまっていることに花島は小さくため息をついた。

ネリが土地神の血を引いている事実や、正守が数日生死の境をさまつたことは、烏森任務についていた者と幹部しか知らない。

対外的にはネリは黒芒楼に『操られていた』ということになっていたし、正守は『大怪我』を負ったが直ぐ完治したと認識されていた。でなければネリがずっと黒芒楼に留まっていた理由が説明出来ないし、夜行に戻ってきたネリが離反者という扱いになってしまう。

自分で別れを告げ、自分の意思で火黒を殺すべく黒芒楼に残ったのだから。

ネリが記憶を失っている状況で、真実を広めるのは危険だった。

亜十羅はネリの事情を知る前に夜行へ帰っていたのだが、妖獣使いということでも刃鳥から伝えるようにと正守は指示した。

よって花島はネリが土地神の孫で、正守を殺そうとした家来を倒し、怪我をした為今現在意識不明（本当は勉強中）だと知っている。

その殺した家来の事で、抗議の使者が来たのだと思っていたのだ。

だが、電話口から伝わる副長の声はそこまで心配しているようには聞こえなかった。

まるで知り合いと話しに行くかのような気軽さだったのだ。

(…何も無けりゃ良いんだけどねえ…)

もう一波乱起きそうな予感に、花島は急いで門へと向かうのだった。

『約束を違えたあの恥知らずはどこにいる!!! さっさと連れてこい
!..!』

無関係の異能者を問答無用で殺すほど、藍緋は考え無しではない。門など通らずに直接敷地に忍びこんでも良かったのだが、黒芒楼の正当性に傷をつけたくなかったのだ。

土地神の孫である少女を迎えるのは、何ら間違っていないのだと証明したかった。

だがこれ程騒ぎを起こしても、夕闇にたたずむ建物から正守が出てくる気配は無い。

昼日中は藍緋も満足に動けないので、途中まで人皮を被りここまで足を運んだのだが。

『おのれ…どうあってもネリを出さぬつもりか…？あの子の自由を奪い利用する気が、この下衆けすがッ！！』

「くっ……おい！応援はまだか！！もう陽が沈むぞ！！」

「もう少し…もう少し待て！」

暴言を吐く割りには、二人の門番を軽くいなす程度しか妖は攻撃してこない。

強行突破するかしないか、彼女は迷っているようだった。

一方門番も土地神にまつわる者を殺害するのは、後々のリスクが高過ぎる。

お互い決定打を出すわけでもなく、既に戦闘が始まって15分になろうとしていた。

刀を持った男が腹をくくって総本部に使いを出そうとした時、花鳥達が到着する。

だが、刃鳥がない。

「ええッ！？ちょっと、美希なんではないの！？」

てつきり刃鳥がいると思っていた亜十羅は、予想外の事態に度肝を抜かれた。

「おお、やはりあれの言う事は偽りであったか!！」

『偽りの場合は応援を』と伝令を飛ばしたので、刀の男はそう解釈したのでらう。

刃鳥がまだ来ていないのは、絶対に訳があるからだ。それまでの時間稼ぎは、少なくとも遂行しなくてはならない。

慌てて亜十羅が弁解した。

「ち、違います!!あの妖は敵じゃないんですよ!!ちょっと待って下さい!」

『……お前、正守の部下か?』

蔓を張り巡らせて尋常ではない妖気を放出していた藍緋は、『敵ではない』と言った花島に注目した。

それは人間達も同様である。

「亜十羅さん!?!いやどう見たって敵ですって!」

「だって黒芒楼ですよ!?!」

少年達は既に各々の武器を取り出して、花島の攻撃命令を待っている。

上司の許可なく攻撃を仕掛ける馬鹿は、夜行の戦鬪班にはいない。

総本部の二人は今にも藍緋に斬りかかりそうな勢いだ。

妖花は静かな目で花島の言葉を待っている。

後に引けなくなつて、花島が声を張り上げた。

「黒芒楼は敵じゃありません！！ネリを救出する際だって、頭領に協力してくれたんです！！……武器を収めて下さい！」

「いや、しかし……」

何やら話がややこしくなつてきたことに戸惑い、刀を持った男が藍緋と花島を交互に見る。

藍緋は戦意が無いことを示す為、白煙をあげて人型に戻つた。武器を向けられても物ともせず、花島を真つ直ぐに見つめる。

傍で見守るしか出来ない影宮と秋津や、憤慨していた少年達がゴクリと唾を飲んだ。

そんな緊張感漂つ中、藍色の髪をした振袖姿の妖が口を開く。

『……………ネリを出せ。』

「……………！頭領に会いに来たんじゃ……」

『あいつには…正守には、失望した。ネリだけ城に連れ帰ることにしよう。姫と静かに暮らす方が、あの子の為だ』

妖気を収めず話を進める藍緋に、閃は鳥肌が立つた。

穏やかで静かそうに見える妖だがとんでもない。恐ろしくイカれた妖だ。

(なんでネリをまた、俺達から引き離そうとすんだよッ……！)

『ネリの為だ』などと最もらしいことを言う黒芒楼の妖に、影宮は耐えきれずに噛みついた。

「なんでネリを傷つけた奴が、ネリを保護するみたいない方すんだよ……！あいつの事利用して、烏森を襲わせたくせに……！」

『……………！？』

眉を寄せて藍緋が顔をしかめる。予想以上に真実がねじ曲げられていることに、彼女の機嫌は一層悪くなった。

道理で話が噛み合わないはずである。

この場にいる人間全員足したよりも永く生きている藍緋は、黒芒楼がとんだ汚名を着せられていることにいち早く気がついた。

それならば門番の反応も説明がつくし、正守の無視も筋が通る。

藍緋の結論が出るのは早かった。

フフ、と妖から乾いた笑みが漏れる。

『……そうか、そういうことか。体よく我等を利用して悪者に仕立てあげ、ネリを一生幽閉するつもりだな？』

『……良かろう、気が変わった。』

ぶわ、と藍色の髪が風もないのに巻き上がり、振袖も不気味にはためく。

花鳥が部下の前に立って庇うと、藍緋は変化を始めながら憎悪を籠めた瞳で人間達を見た。

『……期待した私が馬鹿だった。お前等はここで』

「藍緋！！」

今にも爆発しそうだった藍緋が、聞き覚えのある声に視線だけそちらへ寄越した。

息急ききって駆けてきたのは、先程までネリの勉強に付き合っていた刃鳥である。

彼女は触れれば切れそうな殺気を無視して、藍緋に一直線に駆け寄った。

「頭領は今日任務でいないのよ。その代わりに手紙を預かってきたわ。……これを読めば、全ての事情が分かる」

『……今さらあいつが何を……』

「お願い。これを読めば、ネリのことも分かるから」

『……………』

渋々藍緋が手紙を受け取り、刃鳥が花鳥に合図すると妖獣使いは少年達に武器を下ろさせた。

影宮は注意深く黒芒楼の妖と、副長を見つめる。

どうやら夜行の上層部は、本当に黒芒楼を敵と見ていないようだ。

そうすると、大分状況が違ってくる。

(何がどうなって…！)

裏会は勿論、同じ組織内でも隠す程の重要事項に、銀髪の少女が関わっている。

単純な話で無いことぐらいは、頭の回転が速い閃にも分かった。

ぐしゃり、と藍緋が2通の内1通を握り潰す音が響く。

『刃鳥…ここに書いてある事は本当か？』

先程までの怒気が嘘の様に、妖が刃鳥に確認する。彼女は周りには分からぬ様に主語を避けて答えた。

「字体は本人のものでしょう？さっき急いで書いてもらったのよ。頭領も手を尽くしてる最中なの。」

『そうか…』

訳が分からないと二人を見る少年達に、藍緋は目線だけで刃鳥に問うた。

こいつらはネリの事情を知らないのか、と。

「……ええ、まだ。今はその時じゃないから」

藍緋が持っている手紙は、両方共記憶喪失の少女がしたためたもの

だ。一つは藍緋に、もう一つはおっかなびつくり土地神の姫に書いてある。

主語を省いた会話では正守が書いた手紙に聞こえる、という寸法だ。

藍緋さんへ

私は異能を使い過ぎて脳を痛めた結果、この世界に来てからの記憶を失ってしまいました。

でもこの世界の歴史はほとんど全て知っています。だから、貴女や姫様が生きていると知ってとても嬉しいです。

きつと私の事だから沢山ご迷惑をかけたと思いますが、もう一つかけさせて下さい。

私が記憶喪失になってしまったのを、白に言わないで欲しいんです。彼は裏会の悪い奴と接触する手段がある。私のことは極力知られたくないんです。

乱筆ですみません。よろしくお願いします。

ネリより

握り潰してしまったのを丁寧に畳み直し、藍緋は懐へしまつ。異能者を束ねる裏会というの、なかなか手強い組織なのだ悟ったよっだ。

正守が黒芒楼の手紙に返信しなかったのは、途中で奪われるのを恐れていることだろう。

土地神相手にいい加減な事を書く訳にもいかず、かといって未来を知るネリの情報が万が一盗まれたら大変なことになる。

妖気を完全に収めた藍緋は、刃鳥がもたらした手紙でひとまず落ち着いた。

「姫様にも伝えておこう。今までの言葉は忘れてくれ。暴れて済まなかった。」

来た時と同じく軽く頭を下げる藍緋。それに対して刃鳥も礼を返した。

最初から最後までネリの味方であった妖に、敬意を払ったのだ。

少年達は釈然としないまま、女性達は和解してこの乱闘は收拾がっていたのだった。

夜行にいる人間の殆どが、年端もいかぬ少年少女達で構成されている。

今回大広間に集められたのは、戦闘班を始めとするネリと親交のあった面々だった。

影宮や秋津は勿論、巻緒や染木などもネリとは深く関わりのある人物達だ。

幼い子達はこの場にはおらず、14、15歳より上の人員が正守と相対している。

腕を組んで目をつむっていた夜行の長は、全員揃ったのでゆっくりと目を開いた。

直後、盗聴防止の結界が部屋ギリギリに張られる。いつもより緊張感漂う空間に、閃は震える手を押さえた。

「これから話すネリの事は他言無用、上には報告出来ない内容だ。……知りたくない者は、申し出てくれ。遠慮はいらない。」

正守の言葉だけが痛いほどの静寂を支配する。

もう1週間以上顔を見ていない少女が、そんな大それた秘密を持っていることに少年達は驚きを隠せないでいた。

誰も席を立つ者はいない。

皆の意思が動かないのを見て、正守はフツと笑った。

「……では、最初から話そうか」

異世界から来たネリの話。

そして未来を知るネリの、火黒を倒すまでの計画。

土地神の孫であるという生い立ち。

藍緋が全面的に協力してくれて、土地神がネリを傍に置きたがっている訳。

裏会に明かしたら格好の餌食に成りうる危険な少女の話、正守はネリを守るために部下に明かしたのだった。

限君との日常はもうちょっと先のようにです (前書き)

導入編。

今回の神佑地編は、ちょっとストレスな危ない香りがします。
ん、現代であつたら犯罪かも・・・。

限君との日常はもつちよつと先のようにです

「それって扇一郎に言われた話ですよね？」

「……ネリちゃんてホント何でもお見通しなんだね」

少女が記憶を取り戻して少し経ったとある冬の日、盗聴防止用の結界内で夜行の長と新人の少女が密談していた。

ネリを正規の方法で烏森学園に再入学させるため、手続きが済むまで現在彼女は夜行本拠地で寝起きしている。

二、三日に一度はこうして顔を付き合わせて話をしたりするのだが、ネリは訊かれないことには答えない。

話し始めたら一日で終わらない情報量を、彼女はその頭の中に秘めているからだ。

もっぱら正守が話すとネリが補足する形の会話だった。

銀髪の少女が白い扇子を取り出し、おどけながら似ても似つかない扇一郎の真似をする。

「東北支部の重鎮に泣きつかれた案件なんだよお（助けてえ）」とか、“幹部の死因の殆どが不慮の事故なんだぜえ…ふんっ”とか…あの団扇おじさん、ほざいてました？」

「……そこまで軽くはなかったけどね。」

もはやその場にいたのではないかと疑うぐらい知っているネリに、正守は苦笑いするしかない。

当然少女は、正守が背中を怪我しているだろうと勘づいていたが、それについては何も言わなかった。

ネリがしかつめらしく、閉じた扇で自分の額をトントンと叩く。

「じゃあまず間違いなく、本来なら黒芒楼が襲撃してきた時期に差し掛かったということなんでしょうね。…でも変だな、白が頼まなくても団扇が頭領に話を持ってくるなんて」

「……本当に黒芒楼は烏森を諦めたのかな？」

「実を言うと……分かりませんね。姫が元気になりましたけど……あそこには牙銀や紫遠がいますから」

黒芒楼とは一応協定を結び、烏森には手を出さないということ落ちて着いている。

だが鉄砲玉のような牙銀に、退屈が何より嫌いな紫遠の二人がいて何も起こらない訳がない。

白に幹部達を蟲から解放するように言っても良かったのだが、流石に口を挟みすぎかとネリは控えたのだ。

おふざけは止めにして、ネリは扇子を異空間の中に放り投げる。

「これからも監視するに越したことは無いと思います。烏森を狙う輩は黒芒楼の他にも……まだまだ沢山いますし。」

夢路久臣、とか。

まだ少女は口に出さないが、心の中で小さく呟く。

一度黒芒楼に行った時それとなく白を脅しておいたのだが、まだ扇一郎と交流があつたら厄介だ。

烏森が裏会幹部二人に狙われる事にでもなつたら、とてつもなく面倒臭いことになる。

「私の空間転移でちよくちよく抜き打ち調査しときます?」

「…今のところは良いかな。一応藍緋とは連絡を取り合っているし。

…その厄介な東北の件だけど、内容は詳しく知ってる?」

黒芒楼の話はひとまず置いて、東北地方の怪事件に移る。触り程度しか知らないネリは首を振った。

原作でもそんなに詳しい描写は無かつたのだ。

「住民が妖に操られてるってぐらいしか知りません。時間がかかりそうで、村一個封鎖しちゃおうかってぐらい切羽詰まってるんでしたっけ」

「…そこなんだよね。俺がしつくり来ないのは」

顔をしかめた正守にネリはキョトンとした顔になった。少女の疑問に男は難しい表情で腕を組む。

「関東にいる夜行が出張らなくちゃいけないほど、東北支部の規模は小さくない。あっちにも裏会に所属してる実行部隊が幾つもあるはずなんだが」

「あー…確かに。でもその人達には荷が重かったから、こっちにお鉢が回ってきたんじゃないですか？」

あ、そだ。全然関係ないですけど、真白湖と大首山がその内神佑地狩りに遭いますよ。」

「なっ!？」

仰け反る正守だが、ネリはまるで“近所の子供が転んだ”ぐらいの軽さで爆弾を挟む。

彼女の口振りだと、そちらの神佑地問題に首を突っ込むつもりは無いようだ。

真白湖は既に狩られた後かもしれないし、大首山は少なくとも夜行の人達が死ぬ訳ではない。

それを正直に言うと、案の定正守はゾツとする笑みで薄く笑った。

「本当に君って人は…気まぐれな神の様に話すんだね。人が沢山死ぬというのに」

「だってまだまだ先の話ですよ？少なくとも3ヶ月以上先に起こる事件ですもん。いくら寿命が長くなっただからって、そこまで私お人好しじゃありません」

正守の部下 知った顔に死んで欲しくないから、ネリはこんなに未来を暴露しているのだ。

全ての人を救えるなどと、ネリはもう考えてはいない。

神佑地狩り関連であることを思い出し、少女は顔を引き締めて口を開いた。

「神佑地狩りの時期に差し掛かったら、任務内容には気をつけて下さい。特に、行正さんと未熟な子達に回す一見簡単そうな任務に。」

「まさか…」

正守が目を見開く。

流石に青ざめた夜行の長に、ネリは安心させるように言った。

「少なくとも頭領が無道さんと戦った後ですから！！それに八重樫君と行正さんはちゃんと帰ってきますから！！」

「……つまり二人以外が犠牲になるのか」

ウツと詰まるネリに、正守は苦い息を吐く。ずっと先の未来の話とはいえ、部下が死ぬかもしれないと聞けば気分が落ち込むのは当然だ。

つくづくネリを取り戻して良かったと、正守は天の采配に感謝した。

「……その話。思い出せる限り、詳しく頼む」

「…勿論です」

彼を安心させるには、全ての事を話さなければいけないだろう。今回の密談もまた、長くなりそうだった。

『東北支部？まさかそんな遠くへ行くのか？』

「ああ、大丈夫。多分私が行くわけじゃないし。頭領から話を聞いただけだよ」

鳥森にいる限と夜行にいるネリは、携帯電話という文明の利器で話をしていた。

限の持つ漆塗りの刀を目印に空間転移しても良かったのだが、一応二人共真面目なので公私はわきまえていた。

どうせ1週間以内に会えるのだからと、お互い言い聞かせている風ではあるが。

屋根の上で温かいココアをすすりながら、ネリは近況報告をする。

「こっちは比較的近場の任務に駆り出されてるよ。帰りが速いから、ちよつと遠めのも多いけど」

『…気をつけるよ、ネリ。お前が無理しても誰も喜ばないんだからな』

念を押してくる少年には見えない所で、少女は苦笑いを浮かべながらカップを手で包んだ。

実際久しぶりの妖退治だったネリは、頑張りすぎて秋津に背負われて帰還したのである。

体力の無さは如何ともし難かった。

「大丈夫だよ？私無茶はしても、無理はしないから」

『……………どうだかな』

電話の向こうの彼は、まるで疑わしいと言わんばかりに愚痴をこぼす。

『俺はお前が無茶するだけでも心配なんだぞ。最大のやつをついの前やったばかりだろ。』

……………早く俺の目の届く所に、来てくれると有難いんだが。』

「む…限ったら過保護なんだから」

遠回しに“ネリに早く会いたい”と限は言ったのだが、少々鈍感な彼女は気がつかなかったようだ。

妖が来たと言って電話を切った少年に、ネリはくすりと笑う。それは、会えるのを心待ちにしているのが一目で分かる顔だった。

……………そう、少なくとも1週間以内には限に引っ付いて寝れると、ネリは固く信じていたのだ。

眠れぬ長い夜はもうすぐ終わると、夢見ている。

「ああ…あの時の自分が恨めしい…」

「ん、何か言ったか？」

頭を抱えるネリの前にいる、クリーム色の髪をした少年が振り返る。つられて背の高い吸血鬼少年も後ろの二人を振り返った。

銀髪の少女は風で乱れる髪を無視しながら、情けない声をあげる。

「うう、直ぐに烏森へ行けると思っただのに……!!」

「……ああ、それはドンマイな。世の中そんな甘くねえって」

「元気出して、ネリちゃん。ほら！もうすぐ今日の宿だよ！」

限に会えなくて落ち込んでいる少女を秀が励まし、閃は我関せずと速度を上げる。

ちなみに三人共『歩いて』はいない。

一般人が通り掛かったら、大きなムササビが木から木へ跳び移っているように見えただろう。

彼等は忍者のような目にも止まらぬ速さで、仲間と共に山中を進んでいたのだ。

奥羽山脈に程近い山間の村。住民の約半数が妖に操られているという問題の集落は、滝峰村たきみねといった。

到着が昼間だったということもあり、大量輸送が可能な蜈蚣むかでが正守達を人里離れた山中に着陸させ、そこからは自分の足での移動だ。

どうしても妖混じりと呪現化能力者では体力が違い過ぎるので、移動は5班に別れている。

後方支援組の閃と秀は、足の遅い（それでもオリンピック選手よりは上の）ネリと一番最後の班にいた。
意地悪な顔で閃が秀の言葉を補足する。

「宿ったって、村の直ぐ側で野宿みたいなもんだけどな」

「…別に私ベッドで寝る訳じゃないし。ちゃんと寝る用の異空間部屋があるもん」

「…夜に仕事すなのに、ぐーすか寝てどうすんだよ。ってか任務地じゃ仮眠中に叩き起こされるのだからザラだぜ」

『うそお！?』と、長期任務の経験が無いネリは目を丸くする。実際閃も無かったりするのだが、未来の諜報班としてはその位の情報収集はお手の物だった。

秀はその翼を買われて長期任務にも数度ついた事があるが、これ程大規模な人数の任務は無い。

彼もまた、不安そうな顔をしていた。

「もしネリちゃんも村の人みたいに操られたりしたら…!」

「ん…。ま、そんな時はそんな時つしょ？頭叩いてでも元に戻して頂戴な」

「なんつー他力本願な…」

あっけらかんとするネリに、今度は閃が頭を抱える。

前線に出るなど言われていた少女は、『遠足とでも考えるか』とこの任務を軽く考えていた。

そして村の入口が見えてきた時。

白い何かの木々の間ではためいた気がして、ネリは一人そちらに目をやった。

（何だろ…？）

ほんの一瞬だったのだが、体が暖かい風に包まれた気がしてネリは心地良さそうに目を細める。

体が一瞬のうちに軽くなった気がして、土地神の孫はほんの少し足を止めた。

そなたなら良さそうじゃ…

温かいお湯に浸かった気分を味わうネリに、その眩きは届かない。ぽけー…と虚空を見つめる少女に、仲間の少年たちが声をかけた。

「何やってんだよ、ネリー！置いてくぞー！」

「…！あ、待ってよー！」

パタパタと駆けていく銀髪の少女は、覚えた違和感をすぐに忘れて滝峰村の入口を潜ったのだった。

すまぬ…すまぬなあ、娘よ…

少女の心に灯った小さくとも神聖な気配は、意識の奥底に眠る。

どこかで、水音がパシャリとなった気がした…。

憑依フラグが立ち過ぎ？気のせい…ではありません (前書き)

長野県御嶽山にてバイト中！

虫がたくさんいるので、毎日格闘しています。

何が言いたいのかというところ、更新遅れてすみませんってことです
(笑)

憑依フラグが立ち過ぎ？気のせい…ではありません

操られた村の住民は夜な夜な山中を徘徊し、フラリと戻ってくるかと思えばまたいなくなるらしい。

そこに規則性は無く、正気な村人の話だと操られた者達の殆どはある湖に入っていくことが多いようだ。

だが不思議と服は濡れておらず、操られている間の記憶はぼっかりと抜けている。

最初は誰も気がつかなかった程の小さな異変だった。

普通、家族単位で頻繁に家を留守にしていれば畑も荒れるし、近隣の住民も気がつく。

だが、移住計画が元々持ち上がっていたのもあって、当初引越したのだろうと思われていたらしい。

それで気がつくのが遅れたのだと、夜行の長は締めくくった。

「班ごとに分かれて調査を行う。問題の湖以外にも何か原因があるかもしれない。第1班、第2班は件の湖へ、第3班は東部の山林を

…」

濃い藍色の天幕内で、正守が各班へと指示を出していく。

ネリは第5班だったが、班長は数馬だった為特に話は聞いていなかった。

喧嘩っ早い性格の戸田数馬だが、なかなかどうして指揮をとるのだけは上手い。

任せておけば大丈夫だろうと、ネリは足元の石ころを見つめていた。

（原作みたいに速攻で終わらせなくて良いもんね。一般人が関わってるから、慎重にいかないと）

戦いたい訳ではないネリなので、『限へのお土産話があれば良いな』程度しか考えていない。

森林浴が楽しみだな、とネリは一人でにんまり笑った。

そんな緊張感の欠片も無い少女を、正守が見咎める。

「…ネリ」

「はい？」

ふと顔を上げると正守が真剣な顔で少女を見ている。『はて…？』とネリが首を傾げると、厳しい声が降ってきた。

「気を抜くな。裏会調査員も一時的に操られたぐらい相手の能力は未知数だ。」

遊び気分していると不測の事態を招くぞ、ネリ」

「……はい」

しゅん、となったネリはすっかり忘れていたのだ。

…彼女の特殊な妖気は、妖に好かれるということをも。

「第5班は一番遠い田畑の調査かあ…特に変なトコ無いね？」

「……俺等下つ端にそんな重要な場所が回される訳ねえだろ」

ネリの呟きに閃が刺々しく反応する。

彼は妖混じりだが、戦闘に向いているわけではない。秀と同じく後方支援が精々の、本来なら諜報活動に適性がある少年だ。

だが彼は戦闘班にこだわって、後方支援でも構わないからと末端に加わっている。

そのため正守も危険度の低い仕事しか任せない。それにどこか安堵する気持ちと、『俺だってやれるのに』と戦闘力の高い仲間を閃は羨む節があった。

のほほんとネリが呟く。

「まあ、主犯は湖の方にいるんだろうし、散歩するだけで終わればそれに越した事は無いよね」

『ん〜』と伸びをしながら、ネリは閃の隣を歩く。

太陽がポカポカと体を暖めるような季節外れの陽気に、流石の少年も気がそがれて口を閉じた。

コンクリートが敷かれていない田んぼの畦道あせみちは、歩いていて足の裏が気持ち良い。

収穫をとくに終えている村民達は、山間部の畑に行っているのだろう。水田を見渡す限り人の姿はない。

限と同じく『力』に恵まれたネリを横目で見て、閃は小さくため息をついた。

「お前って相当気まぐれだよな。前線で一番乗りしたそんな顔もするし、そうやってやる気無い時もあるし」

「え、私“戦うぞー！”みたいな顔したことあった？」

「「「ある」「」」

数馬や、他の少年達の声が綺麗に重なる。短期任務の妖退治ではそれが特に顕著だった。

確かにネリの異能は飛び抜けて殺傷能力が高い。彼女に世界追放の門を開かせたら、誰も生き残る事など出来ないだろう。

遠距離・近距離どちらからでも、空間転移が出来るネリに間合いなど関係ない。

拒絶の刃と存在を塵にまで分解する妖の技を持つネリは、単独任務に行かせても大丈夫なぐらい有能な構成員なのだ。

ただ彼女には無視できない欠点がある。

閃がその欠点を、少女の恋人に重ねて笑った。

「一人で突っ込んで傷作って…ホントお前等似た者同士だと思う」

「限もそういつとこ酷えからな」

閃の言葉に賛同する声が幾つもあがる。若干口をへの字に曲げたネリは、ぷいっと顔を背けた。

「ふうんだ。どうせ私達猪突猛進カップルだもん」

「あ、開き直った」

「ネリちゃん…もっと自分を大事にした方が良いよ」

一人にしたら休みもせず任務に明け暮れそうな少女に、秀の顔が曇る。

どちらかというと肉体自体が妖に近い彼女は、睡眠を必要としないし疲労感が遠いのだ。

だが、人間の部分が全く無いわけではない。

そのせいか無茶をしても気がつかず限界まで異能を使い、周りが止めないと過労でネリは倒れる。

自覚の無い少女には何を言っても無駄のようだった。

ふと、少女が足を止めてぼつんと田んぼ近くにある井戸に目を止める。

山林の入口付近にそれは位置しており、水田から少し距離を取って設けられたものようだ。

それをネリが指差し、少年達を振り返る。

「ねえ、あの井戸何か変じゃない？」

「……どこが？」

つられて少年達も足を止めると、ネリはその井戸に向かって先頭を歩き始めた。

一緒に近づくに連れて、閃達も『何が』おかしいのか理解する。

「滑車が無い…?」

使われないようになって蓋がしてあるならまだしも、井戸の回りは草木もすつきりしていて水が枯れているようには見えない。

水田もすぐ側にあるのだし、使われていないことはないと思うのだが。

尚も近づこうとするネリを止め、閃は注意深くそれ以上井戸に近づくのをやめた。

こういう胡散臭いには近づいてはいけないのが常識だ。

臆病な性格のお陰か、元々持つ異能のお陰かこういった感覚には敏感な閃である。その第六感が、今の影宮を生かしていると言っても過言ではない。

「秀、場所の記録だけしとこう」

了解、と秀が手帳とカメラを取り出した
その時。

突然ネリの口から、少年の強い声が発せられた。

「《皆、逃げろ!!》」

「…え?」

ドン、と大砲の音と共に地面が揺れる。

それは、水とは到底言い難い墨の様に黒い液体だった。

井戸が噴水の如くどす黒い液体を吐き出し、空高く黒い柱となる。

重力に従って落ちてくるのかと思いきや、まるで意思を持つかのよう
に『それ』は空中で弾けた。

大量の粘着質な水は火花が散るように地面を目指した後、地面と平
行に物凄い速さで少年達に迫る。

「やばッ　　！！」

身を翻して地面を蹴る少年達だが、彼等の常人離れした脚力をもつ
てしても、こんな距離では逃れられない。速度が圧倒的に違う。

腕ほどの太さで宙を駆ける黒い水は、先端が手の形を取り始めた。

まるですがりつくかのような、不気味な触手。

なぜか一番井戸の近くにいたネリを素通りし、とうとう閃の足が絡
め取られ宙吊りになる。

そのかつてない異質な感触に、閃の体を怖気おそけが走った。

（俺ごういうの苦手なのに　　！！）

もぞもぞ、うにようによとゆっくり体を這う触手に閃の意識がスッ
と遠退く。

身体と意識が何者かによって分離されていき、意思に反して手足が動かなくなる。

もう駄目だ　と閃が諦めかけたその時、一步も動かない少女の後姿が大きく震えた。

「やめるスイキ錐奇！！この者達は村人ではない　やめるんだッ！
！」

ピタ、と触手が止まった。

まわりついていた黒い手が、戸惑ったように5人の少年達を解放し、そのままそろりそろりと後退する。

白濁しかけた意識を頭を振って追い出し、閃はちょうど地面に尻餅をついた。

そのまま糸が切れた人形の様に横倒しになる。体に力が入らなかった。

自分は助かったのか。

危険はとりあえず去ったが、身体が動かない恐怖で息が乱れる。

何とか感覚を後方に向けると数馬や秀、もう二人も無事なようだ。妖混じりなら誰しもが持つ邪気を辿れば、死んでいない事ぐらいは分かる。

落ち着け、と閃が自分に言い聞かせていると、またもやネリでも仲間でも無い声がした。

「…もうやめてくれ。こんなことをせずとも、静かに暮らせるじ

やないか。これ以上人間に迷惑をかけるな、錐奇」

銀髪の少女はただ一人その足でしっかと立ち、井戸から出現した黒い物体に語りかけている。

スイキ、と呼ばれた黒い水を説得しているようだ。

その様子を見て閃は、出来ることなら空を仰いで叫びたかった。

（勘弁してくれ　お前いったい何に憑依されてんだよ…！）

後ろから見てみると、気味の悪いことこの上ない。

上半身の感覚がいち早く戻ってきた閃は、必死で体を起こした。

無事なこの間に頭領へ連絡しようにも、先程の黒い触手のせいか指先に力が入らない。

誰か動ける奴は、と後方にいる仲間を振り返っても閃と似たり寄ったりで、意識があるかも怪しかった。

一番動けるのが、身体中笑っている閃のようだ。

焦る影宮などに目もくれず、少女は　否、少年の言葉はヒヤリとする声音になった。

「…お前がそんなに分からずやだとは思わなかったぞ。村が沈むのはもう決まったことだろう。」

今さら我らが抵抗したとて変わるわけでも無し。こんなことをしても虚しいだけだ」

黒い液体は井戸を花瓶に例えると、生けられた花の様に天高くで咲

いていた。

もちろんユラユラと不気味に揺れながら、である。

スイキという名の液体は、未だに帰る素振りを見せない。物欲しそうに閃や動けない少年達を窺っているのが、気配で分かった。

それに気がついた閃が、じりじりと後ずさる。

少女には黒い水の返事が聞こえているようだが、後ろにいる閃は全く音を拾えなかった。

閃の位置からでは表情が分からない少女は、尚もスイキを諭す。だが途中から口調がおかしくなった。

「もう帰ろう。人がいなくなっても、我等の土地は消えぬ。またあの頃の様に外…を…く。限界、か…」

ぐらりと少女の身体が傾ぐ。

ネリの体を支えたのは、意外なことに黒い触手だった。

少女を丁寧な黒い手で抱えながら、同時に閃達にも触手を伸ばす。

いよいよ叫ぶしかない時、閃が息を吸い込んだ時、黒い水が不自然に動きを止めた。

ピク、と何かに気がついた様に『それ』は突如物凄い勢いで井戸に吸い込まれていく。

ネリも連れていこうとしたのだが、青みがかかった透明な箱がそれを阻止した。

少女は青み掛かった結界内に取り残され、黒い液体は悔しそうにそ

の身をくねらせる。
どうにも動かせなさそうだと悟ると、その触手は井戸に向かって退き始めた。

閃がその人物を認めて、顔を情けなく歪める。

「…頭領　　！！」

「　　結…滅。」

遠距離から地中の井戸ごと囲んだ正守は、淡々とそれを破壊する。断末魔の悲鳴はどんどん遠ざかっていき、終いには聞こえなくなつた。

数個の結界を足場にして、夜行の頭領が空から地面に降り立つ。

「閃、無事か…怪我は」

「俺は大丈夫です。それよりネリが　　！」

「分かった、今見よう。」

意識が朦朧としている秀や数馬達に救護班を向かわせ、正守はネリの結界を解除した。

少女に目立った外傷は無い。

顔色は悪いがそれほど深刻そうには見えない。訝しげに眉を寄せた正守は、少女の肩を軽く叩いた。

「ネリ、大丈夫か。目を覚ませ、こんな所で寝たら風邪をひくぞ」
本気なのかボケているのか分からない男の呼びかけに、ネリは小さく呻いた。
意識はあるのだが体が動かず、返事が出来ない。

仕方なく意識の糸を正守に伸ばし、直接心に語りかけることにした。

人型を…保ってられません。妖力を殆ど取られ、て…も、無理…

「何だつて?!」

突然驚愕の声をあげた正守に閃が飛び上がって驚き、伝え終わったネリは糸を切った。

力尽きたネリの輪郭がぼやけ、白煙に包まれ人型が解ける。

煙が晴れるとそこに少女はおらず、代わりに九尾の銀狐が天を向いて伸びていた。

しかもその姿は前回より格段に縮んでおり、新生児位の大きさを弱々しい。

お腹を天に向けた銀一色の仔狐は、口を半開きにしたままピクリともしなかった。

いくらか回復した閃が地を這って上司に近寄り、銀狐の長い鼻先から尾の先までしげしげと眺める。

彼がネリの獣型を見るのはこれが初めてだ。

ひょっとして妖がネリに化けていたのかも、と先程助けてくれた少年の声を思い出す。

その間正守は、ネリの様子に若干焦りながら何事かを呟いていた。

「まさかここまで逃げてくるとは…地下水脈でもあるのか…？」

「こうなると厄介だな…」

「と、頭領？」

夜行の長が『厄介だ』と言うのだ、閃は目の前の仔狐が本当にネリなのか心配になってきた。

余程閃が不安そうな顔をしていたのだろう、正守がハッと気づく。

安心させるように少年の頭をぼんぼんと優しく撫でて、こちらへ来た経緯を軽く話した。

「湖で蛇の化生と戦ってたんだが、隙を突かれて逃げられてしまったね。追った先に閃達がいたんだ。ネリも心配ない、妖力を奪われただけらしい」

「……この狐は、本当にネリなんですよね？誰かが化けてるんじゃないか。」

ジッと仔狐を見つめたままの閃に、正守が目を見開く。

「……何があった？」

妖気を捕捉出来る影宮が、目の前にいるネリの妖気を信じられないでいる。

姿が変わったとしても、少女の純粋な妖気は間違える筈がないのだ。

自然と正守の目が厳しくなった。

閃は頭で整理しながら、ネリの体が乗っ取られていたことを報告する。

「声は精々俺等と同じ年の少年。さっきの黒い液体の事を『スイキ』と呼んでいました。」

口調からしてネりに憑依している者とは仲間で、この村一帯が縄張りの妖のようです。

……村人じゃないから襲うなって言っただけで引かせてたんですが、仲間割れしてました。ネリが倒れた途端黒いのが襲ってきて……頭領が来てくれて助かりました、ありがとうございます」

「こつちこそ礼を言うよ。たった一人で良く意識を保っていたら……お陰で対策が立てられる」

ニコツと頼もしく笑う上司に、閃は強張っていた体の力が抜けるのを感じた。

この人さえいればもう安心だ、と思うと緊張の糸が解けたのだ。

自分の役目 情報を持ち帰るといって大役を終え、達成感が沸いてくる。

慎重に銀狐を羽織でくるんだ正守は、救護班に野営地へ戻るよう指示を出した。

「ネリの姿をなるべく人目につかないよう注意してくれ。花島にネリの看護及び護衛を。俺はもうしばらく付近を搜索してみる。」

染木に羽織ごとネリを託すと、正守は背を向けてぼっかり空いた井戸の跡を覗き込む。

蜈蚣の乗り物で彼等が去って行くのを背で感じながら、夜行の長は絶界を発動させた。

近くの木に念糸を引っ掛けて、奈落の底へ壁伝いに降りていく。

目当ての物を見つけた正守は、『やはり』と唇を噛んだ。

ペロペロ

くすぐつたい、とネリが感じたのはよりによって顔面だった。

生暖かいものがさつきから頬と言わず目と言わず、そこかしこを舐めているのだ。

嫌、と顔を背けてもまだ追ってきてベロリと舐められる。

思わず顔を尻尾でガードすると、嬉しそうな女性の声が聞こえた。

「あらネリ、起きたのね！」

『ネル、痛い？どこ痛い？』

ゆっくりと目を開けると、そこには妖獣使いと白い熊。

真ん丸紫色の瞳を見開いて、ネリは低い目線から見上げた。

『亜十羅さん…雷蔵…』

安心したようにポトリと尻尾が白いベッドに落ちる。睡眠を取った事で少なからず妖力が回復してきたネリは、瞬時に人型に変化した。

緑のセーラー服 中等部の制服だ。

「ネリ、辛いんなら狐のままでも大丈夫よ？」

「いえ…頭領に外での獣型は危険だと言われているので」

「この天幕の中なら他の子達と見分けつかないわよ」

笑いながら手をヒラヒラと振る彼女につられて、広い天幕の中央を見る。そこには水槽に入っている、多種多様な妖獣達がひしめいていた。

鰻うなぎの尾にふぐの頭が付いたモノや、シャコ貝のようだが隙間から丸い目が見えたりと かなり不気味だ。

原作で登場しなかった水棲妖獣達に、ネリの顔がひきつる。

広い天幕の中で2本足で立っているのは、ネリと亜十羅だけだったのだ。

ネリの強張った顔に、妖獣使いは苦笑する。

「まあこの子達には戦闘じゃなくて、水中の案内と“気泡の衣”をお願いするんだけどね。ネリは一応炎熱系の妖だから、水の中じゃ絶対必要になるわよ」

『ネリ、一緒に寝よ！寝よ！』

本調子じゃないことが分かるのか、雷蔵が自分の寝床に少女を引張る。

白熊のお腹をベッドにするのも暖かくて良いかも、とネリはありがたく甘えることにした。

ポウン、と白煙をあげて人型を解く。横になった熊のお腹によじ登ると、すぐにネリはまどろみ始めた。

妖気が全快するまでは、彼女の場合いつまでも眠いのだ。

『潰さないでね、雷蔵…？』

「大丈夫、ちゃんと見ててあげるから」

仔狐の背を亜十羅が優しく撫でてやると、急速にネリの意識は落ちていったのだった。

助けてくれ

ポチャン、とすぐ近くでした音にネリの意識はフツと目覚めた。

それは静寂の中に一石を投じたような、唐突で大きく響き渡る音。

助けてくれ、私の友がこのままでは消えてしまう

暗闇の中で、ネリはぼんやりと悲痛な少年の声を聞いていた。

どこから聞こえて来るのか分からないのだが、不思議と足が動き出す。

土を踏んでいるのか、ただ足が動いているのか少女には分からない。意識がふわふわしたまま、ただ何となく足を動かす。

友が消えてしまうのは、私の土地が無くなるより辛い。我等はこの村で出会い、妖ながらも守り神となり私は土地を…彼は人を守ってきたのだ

少年の声に混じって何やら騒ぎがネリの耳に届く。

だがそれが仲間の声であることも、ネリを必死で止めようとする正守の声であることにも気がつかない。

何も見えない暗闇の中、ネリはその少年に語りかけた。

「友達が消えるのは…悲しいよね、分かるよ。私の友達も目の前で死んだ」

聞き慣れた女性の強い声が聞こえる。

目を開いているはずなのに、ネリの視界は真つ暗だ。

一際近くで男性の声がして、ネリは前に進めなくなってしまうた。両肩にかかる温もりが、少女が前に進もうとするのを邪魔する。歩かなくてはいけないのに、とネリが顔をしかめるとまた大声がした。

ネリ！目を覚ませ！そいつは…

だがそれに被って感極まった少年の声が聞こえる。音声多重放送に、ネリの頭痛が酷くなった。

おお、分かってくれるか！やはりそなたを選んで正解であった！

「私を…選んだ？」

怪訝そうにネリが聞き返すが、少年はそれには答えない。最後に朗らかな声で恐ろしい言葉を吐いた。

錐奇を説得する為、そなたの体を私にくれ！

「……………！？」

瞬間、背筋に走った悪寒にネリは目を見開いた。何かが入ってくる感覚に、全身の毛が逆立つ。

それはいつぞやの鬼百合の異物感と酷似していた。力一杯“拒絶”し、意識の支配権を守り通す。

キラッと紫水晶の虹彩が、壮絶な怒りで縦に割けた。

「……………つぶざけんなああッ！！！！！！！！！！」

ネリの異変に最初に気がついたのは、雷蔵だった。銀色の仔狐が突如腹の上から転がり落ちたので、白熊にしては珍しく目が覚めたのだ。

同じく水棲妖獣達の世話をしていた花島も気がつく。その時は、寝相が悪くて落ちたのだらうと然程気にしなかった。

雷蔵のお腹の上に戻してあげようとする、仔狐が人型に戻る。てつきり少女が起きたのだと思って、亜十羅は声をかけた。

「良く眠れた？まだ深夜ちょっと前だから、もう少し寝てても良いわよ」

「……………」

ゆらり、ゆらりと足元がおぼつかないまま、少女が歩き出す。首を傾げた女性に対して、雷蔵が唸った。

『ネル違う…ネルどこ…!!』

威嚇する白熊に、亜十羅が目を丸くする。まさか、と一瞬にして青くなった。

ネリに憑依しているという“少年”なのか。

ネリが再び操られる事態は予想されていたので、花島は迷わず笛を吹いた。

だがその笛は動物にしか聞こえない高周波の音を出す代物。正守の天幕に待機している小さな妖獣に、花島は指示を出したのだ。

正守を呼んで来て、と。

「ネリ、しっかりして!!負けちゃ駄目よ!!」

『ネル返せ!!』

亜十羅と雷蔵が少女の足止めを図る。白熊がネリに飛び掛かり、妖獣使いの瞳が妖しい光を帯びた。

「ネリ、止まりな！！」

花鳥が妖獣使いと呼ばれる所以、それは獣に対する圧倒的な優位性と強制力である。

亜十羅の異能ともいえる声と目の強制力は、妖獣は勿論狐の妖であるネリにも有効なのだ。

「ネリ、ストップ！！！！」

「……………」

強制力のある言葉がネリの動きを止める。その隙を逃さず雷蔵の巨体が少女に突進したが…ビクともしなかった。

ネリの細い左腕が雷蔵の巨体を受け止める。変化していないにも関わらず、彼女は100キロ以上もある白熊を突き飛ばした。

天幕が揺れ、水槽の水と共に妖獣達が1、2匹零れ飛び出してしまふ。それを見て銀髪の少女はなぜか足を止めた。

「……………」

地面で必死に口をパクパクさせるフグ頭の鰻を凝視し、手を差し伸べようとする。

その時、頭領である正守が天幕に飛び込んで来た。

憑依フラグが立ち過ぎ？気のせい…ではありません (後書き)

ここで切るかってとここで切ってしまいました。

ちょっと区切り悪かったです、すみません。

氏神の過去、人間は餌？それとも…（前書き）

んゝ成人男性と少女の生活みたいなもんです。

……なんだか話が膨らみ過ぎちゃいました（汗）

2011年10月21日改稿「1000年」を「800年」にしました。

同年10月29日「800年」を「1000年」に戻しました。

氏神の過去、人間は餌？それとも…

「ネリ！！！」

地面で跳ねる妖獣に気を取られていた少女は、咄嗟に男の手を振り払うことが出来なかった。

少女は両肩をガシツと掴まれ、身動きが取れなくなる。

その表情は虚ろで、紫水晶の瞳は正守を見ていなかった。

夜行の長が叫ぶ。

「目を覚ませ！！そいつは君の体に乗っ取ろうとしているんだぞ！

！」

「……………？？」

微かな呟きが少女の口から漏れたが、それは喉の奥で音のようになっただけだった。

正守は辛抱強くネリに呼びかけ、正気に戻そうと細い体を揺する。

「自分を見失うなッ！！またあんな目に遭いたいのか！？」

正守の悲痛な叫びで少女の体が強張った。

わなわなと体が震え、紫の瞳が壮絶な怒りに燃える。

少女の妖気が不気味な程静かになったのを感じて、正守が慌てて手を離すと
ネリが吼えた。

『　　ツんなああああ！！！！』

「ッ！？」

天幕を突き破りそうな勢いで、可視化された紫の妖気が放出される。

一気に獣人型へ変化したネリは無理矢理意識を奪い返し、怒りに身を任せて“力”を爆発させた。
身体にはびこる異物を追い出すべく、狂ったように喚く。

『出てけッ！！あたしの身体から出てけッ

！！！！！！』

紫の炎がネリの体を包みこみ、漆黒の球体は少女を中心に高速回転する。

衝撃で地面が抉れ天幕に穴を開け、ほとばしる妖気は太陽のようにじりじりと妖獣達に降り注いだ。

ビキッ、と雷蔵の額の血管が不自然に浮き上がる。

相棒である白熊の異変に、いち早く気付いた亜十羅が声をあげた。

「……………！頭領、まずいです……………！！」

「そのようだな　　結！！」

正守が少女から距離を取った後に花島と雷蔵、水棲妖獣達を結界で囲む。

勿論彼等を守るためでもあるが、ネリの妖気に当てられれば妖獣達に変化して凶暴化する恐れがある。

ネリの純粹な土地神由来の妖気は、譲渡可能な“力の塊”なのだか

ら。

「頼むから勝つてくれ　　ネリ！」

前回操られたネリと戦って、その強さを身に刻んだ正守である。手加減して戦える相手では無いのは身に染みているのだ。

外は外で妖気に寄ってきた妖と戦う音がして、夜行内の妖混じりも影響され始めたようだった。

妖染みた人間の遠吠えや唸り声、暴走を始めた仲間を止めにかかる呪現化能力者達の怒声が聞こえる。

正守が懐の式神を取り出そうとした時、唐突に妖気の暴走が止まった。

紫色の太陽はゆっくりとしぼみ、その中心である銀髪の少女が目に見えない相手に向かって怒鳴る。

『だあ　　！！分かったからメソメソ泣くんじやないの！！上手くやってあげるから大人しくしてなさいッ！！！！』

ネリの叫びを最後に妖気が収縮し始め、獣人化が解ける。ぜえはあと肩で息をつくネリに、雷蔵がトコトコと近づいた。

くんくん、と少女の匂いを嗅いだ後、先程までの警戒心が嘘の様に嬉しそうな声をあげる。

白くて太い腕が力一杯ネリを抱き締め、大きな舌が少女の頬を舐めた。

『ネル、戻った！！嬉し！！』

「ありがとう、心配してくれて…あゝ疲れたあ…」

「ネリ、大丈夫か！？」

结界を解除して駆け寄って来た上司を、白熊に抱きつかれたままの少女が見上げる。

疲労はあるようだが、妖気はそれほど消費していないようだった。

周囲の妖と妖混じりを酔わせる程の妖気を、そこら中に振り撒いていたというのに。

(……………今更ながら、凄い妖気だな…)

夜行の長は内心舌を巻き、これくらいで済んで良かったと胸を撫で下ろす。

「例の少年は……まさか、追い出さなかったのか？」

嫌な予感がした夜行の長は、間髪入れずに少女を問いただした。

最後の言葉で、ネリが侵入者を追い出していないと踏んだからだ。

案の定銀髪の少女は持ち前の仏心で、侵入者が意識の片隅に住むことを許したらしい。

『なんて馬鹿な事を！！』と目を吊り上げた正守を、少女が苦笑と共に弁解した。

「代わりに今までの話を教えてもらったので赦してあげてください、頭領。」

『それに……』と少女が困ったように笑い、自分の胸を親指で指す。
……彼女の言葉は、新たな頭痛の種を夜行の長にもたらした。

「私の中にいる奴、土地神なんですもん。」

冬の寒さは並の人間が住む世界でなく、滝峰村の住人達は先祖が代々住んでいたからこそ、村を“故郷”として愛していた。

昔から水神信仰の根強いこの土地は、山の中腹にちよつとした池

もとい湖を抱えていた。

陰暦六月晦日みそかには、人から家畜まで山の麓で楔をしてからその湖で神事を行う。

今は太陽暦なので、曆上は6月でも本来の陰暦とは多少時期がずれる。

だが、近隣の村も総出でお祭りを執り行うので、とても華やかな大祭となっていた。

前夜祭。神官が神楽を舞い、奉納し今年の豊作祈願を聞き入れて下さるようにとお願いする。

その後が続くのは、可愛らしい13歳未満の子供達だ。

普段せぬ白粉を振られ、目の横のちようどこめかみに紅い点を描かれた子供達が、小さな錫杖片手に受け継がれてきた舞いを奉納する。

御神体である湖

月夜つぐよヶ淵と呼ばれ、満月の晩には黒い大蛇が出

てくると伝えられていた。
よって太陽暦六月晦日に最も近い満月の前日に、神官と神童達は舞うのだ。

徐々に小さくなっていく村の、唯一誇れる由緒正しい歴史ある大祭。前夜祭もさることながら、本祭も神事としてはとても重要だった。

“投鏡夏越しの節供”

豊作祈願も勿論だが、安産、病氣平癒など多種多様な願いが鏡に込められ、月夜ヶ淵に投じられる。

和鏡が最も良いとされるが、最近では現代の手鏡で個人などは特に代用されてきたりしていた。

「『幸せだった……。人間が沢山淵まで来て子供達が笑い、夜の祭だというのに村外からも町の人間が訪れていたものだ』」

ネリの口を借りた、この地域一帯の土地神が語る。

だが驚く事に、彼は祭神ではなかった。

「『私はただあの湖に元々住んでいた魚の化生。祭神とされていたのは我が朋……錐奇だったのだよ』」

正守とネリは二人だけで天幕の中で昔話を聞いている。少年の土地神と同時に身体を共有している状況なので、両者とも意識があるのだ。

ネリは意識の底で、正守は少女に面と向かい黙って土地神の独白に

耳を傾けていた。

村に転機が訪れたのは約60年前。

山地の農村では珍しく無い、ダム計画が持ち上がったことにより滝峰村は揺れ動いた。

ダム反対を叫ぶ村民もいた一方で、元々縮小傾向にあった村民の離村が加速したのも事実で。

子供の笑い声は目に見えて少なくなり、祭の主導を担っていた若者達もめつきり減った。

土地神の彼は悲しみながらも村民の幸せを願い送り出したが、祭神である錐奇は悪神へと豹変する。

水田に水を送り、獣から畑を守った神に対してなんたる仕打ち！！

あれだけ祈願した舌の根も乾かぬ内に、氏神を棄てるとは！！

お前はこんな不条理を受け入れるのか、海菴ハイレン！？見損なつたぞ！

「…海菴ハイレンというのが貴方の名前？」

正守の声が少し厳しくなったのは、気のせいではない。

部下の身体を間借りしている土地神などに、下手したてに出る気は毛頭無いのだ。

「『ああ。錐奇はお前も戦った蛇の妖だ。あれでも1000年は生きた村の守り神。しかも今の奴は……滅った信仰の力を己の妖力で補って暴れておる。』」

辛そうな表情を浮かべる少女の顔に、正守はため息をつく。正守の本音としては、『土地神なら自分でどうにかしてくれ』と頭を抱えたい気分だ。

小規模な神佑地の主ぬしとは言え、土地神が人間に助けを求めるなど聞いたこともない。

苦い息を吐く男に、今度は本物のネリに交代した。

「頭領…私、助けてあげたいです。このままじゃ錐奇さんは妖力の枯渇で、消滅することに…！」

「…今回。俺達に課せられた任務は二つだ。

一、操られた村人を正気に戻すこと。

一、騒動の原因を取り除くこと

夜行はボランティアで人助けをする程余裕は無い」

感情で動くネリに、組織の長として諭す正守。

蛇の妖が土地神でないことが分かった点に関しては、正守も今回の対談を有益だったとは思っていた。

だが、深入りするにはもう遅すぎる。

錐奇が暴れたせいで土地が弱り、結果下位に過ぎない土地神も随分弱ってしまった。

これ以上村民も土地神も、傷つけられない。

静かに夜行の長は、心優しい少女の銀の頭を撫でた。

「土地神がこれだけ弱っている状況で、暴走した妖を静める時間は無い。……………ネリ、土地神殺しが極刑なのは知っているね？見殺しにするのも重罪なんだよ」

「つでも！^{スイキ}錐奇を助けられれば、^{ハイレン}海菴だつて救われるんですよ！
？友達を見殺しに出来るわけ無いじゃ無いですか！！」

氏神である水の祭神と土地神を呼び捨てにしたネリだが、それだけ彼等の境遇に同情しているからだろう。

ネリは一番最初の友を救えなかっただけ、余計に。

少女の意識の奥底へ引つ込んだ土地神が怒る気配は無かった。
逆に、神の血を引く純粋な妖気に包まれ……………静かに涙していた。

「私の妖気なら^{ハイレン}海菴の延命に少しは足しになるし、そうすれば錐奇を説得する時間もあるはずです！」

「……………半世紀以上暴走している妖を、数日で鎮める気か？」

正守の言う事は正論だ。最悪の場合妖気を吸い尽くされたネリは、昏睡状態に陥る可能性もある。

……………夜が明けるまでネリが説得しても、正守は錐奇を助けることを了承しなかった。

海菴ハイレンは一目見た時に分かった。

ネリが人間でも妖でもなく、どこか遠くの土地神の血を引いていることに。

その身に渦巻く妖気は濃く純粹で、今まで来たどの異能者よりも良い物件だと直感した。

弱った土地神が昼日中、器かたも無いまま神佑地の外に出れば　　す
ぐに死ぬ。

側近達が止めるのもきかず、彼は一か八かの賭けに出た。

木陰から顔を出して少女をジッと見つめてみると、彼女は直ぐに気づいて振り向いてくれた。

陽の光に煌めく白銀の髪、そしてきよとんとした紫水晶の瞳。
全く警戒心の無いその娘に乗り移るのは、死にかけの土地神でも簡単だった。

見えない風となり、心の隙間からスルリと入り込み……海菴ハイレンは『しめた！』と内心膝を叩いた。

予想以上の好物件で、これならあと一月は持ちそうだ。

(……すまぬ、娘。…朋を助けるまで、この死に損ないを住まわせ
てくれ)

少女の身体を乗っ取って、罪悪感が無い訳ではない。ただどうしても、諦めきれなかったのだ。

時間は怠惰な土地神と、血気盛んな妖の出会いにまで遡る。

湖で独り暮らしていた土地神の所に、ある日突然訪れた蛇の妖。

黒い蛇は住みやすそうな湖に先客がいると分かると、牙を剥いて襲いかかって来た。だがそこは下位でも土地神、海菴ハイレンは軽くあしらい追い払った。

元々闘いは好きでもないし、興味も無い。実力が拮抗しているならいざ知らず、笑いたくなるぐらい蛇は弱かったのだ。

それから毎日毎日、悔しそうに挑んで来ては追い払われる黒い蛇。

暇潰しにはちょうど良かったので、海菴ハイレンは毎度止めを差さなかった。土地神と妖。その差はどう足掻いても埋められないのだから。

『お前、俺を馬鹿にしているのか?!』

『百日目にしてやっと分かったか。随分体力のある奴じゃと思うて相手しておったが……なかなか楽しかったぞ』

人間の子供など丸飲みに出来そうな大蛇相手に、鯉ほどに小さい青銀色の魚が笑う。

同じ水を操るといふのに、大蛇　　錐奇は海菴ハイレンに全く歯が立たなかった。

『なぜ俺を殺さない。鬱陶しくはないのか？』

『いいや、その愚かさが面白い。よくもまあ懲りずに何度も向かって来るものだ。お前、名は何と言う？』

叩かれては立ち上がり、潰されてもへこたれない大蛇に気まぐれな土地神は興味を持った。

弱い人間にも無関心だった海菴に、初めて出来た暇潰し　名は、
錐奇と言うらしい。

二人が会う度、辺り一帯水浸しの嵐になったが、海菴は一向に気にならなかった。

ずっと長い間、独りで退屈していたのだ。

土地に選ばれたお陰で莫大な力を入れたが、滅多に來ない人間で遊ぶのも飽きた。

数百年ぶりの楽しい日常。

100年続いた“遊び”は彼等の挨拶代わりの日課になり。

50年過ぎた頃には、あれだけ突っ掛かって來た大蛇も闘いを楽しむ様になり。

1000年経つ頃には、最早じゃれ合いになっていた。

『なあ、海菴。お前、土地神なのに村を見たこと無いのか？』

ある日『毎日暇だ』とぼやく海菴ハイレンに、大蛇が不思議そうに訊いた。

『村に降りてもつまらんしなあ。どれ、久しぶりに大洪水でも起こしてみるか』

『やめとけ。去年東の川を氾濫させたばかりだろ。村民が泣くぞ』
どことなく不機嫌になった錐奇に、唯我独尊の土地神は『カカカ』と笑った。

『人間などここ数百年見ておらんわ。戦に駆り出されて、大分減ったようじゃしの』

『本当に降りてないんだな……。ここ数年の不作で、口減らしの童が山に捨てられているというに』

はあ、とため息をつく錐奇。だが山に子供が捨てられていると聞いた途端、土地神の声が低くなった。

『私の山に……捨てるだと……？』

湖の水が沸騰するかのようになり、ゴポゴポと音を立てる。木の枝に絡み付いていた錐奇は、ハッと鎌首を上げた。

肌を刺すような怒りが、空気を伝って周囲の木々をざわつかせる。大蛇が初めて喧嘩を吹っ掛けた時よりも殺気立った、土地神の“本気”が厚い雲を呼ぶ。

嵐が、近づく。

『口を減らしたいなら私がやってやるのではないか。ちょうど暇を持って余っていた所だ。』

『馬鹿な真似はよせ！土の入れ換えはもう充分やっただろうが。これ以上は土地が荒れるだけだ！』

土地神の怒りに呼応して、昼だと言つのに暗雲が垂れこみ太陽が顔を隠す。

生ぬるい風が村を吹き抜け、粗末な板張りの家々を揺らす。

一気に重くなつた大気に、異変を感じた村民達が顔を出した。

それが、合図となつた。

『全て…押し流せ！！』

悪夢としか思えない豪雨は、あつという間に穏やかな清流を濁流へと変えた。

みるみる内に水嵩が増えていき、美しい湖も流れの一つに飲み込まれる。

その間錐奇は必死で木の幹にしがみつぎ、荒れた土地神に叫び続けた。

『童は皆死んでおらん、一ヶ所に集めて俺が保護している！！死の穢れなぞ山に無いッ！！鎮まれ、海菴ハイレン！！』

ミシリ、と黒い大蛇の下で不吉な音がした。水圧と錐奇の体重に耐えかねて折れかかっているのだ。

バケツをひっくり返した様な雨が、村や田畑を打ち付ける。

村人が血豆を潰しながら鍬を振るい、やっとの思いで耕した土地が流されていく。何とか止めさせたくて、錐奇は牙を剥いて吼えた。

『お前に村への愛着は無いのかッ!?!』

だが土地神の返事はにべもないもので、錐奇は生前冷温動物だったにも関わらず背筋が凍った。

『愛着?そんなもの、有るわけが無かるうよ。……疾とく去いね、喧しいわ。』

バキヤン、と決して細くない樹が、悲鳴をあげて水に押し流される。他の木々に巻き付くことも出来たが、大蛇は最早土地神の説得を諦めた。

くさくさしていた所に聖域である山へ人間が入り込んだのだ、面白かるう筈も無い。

海菴ハイレンの頭が冷えるまで近づくのは諦めた方が良い。

スルリと岩やら大木やらをくぐり抜け、錐奇は濁流の上流へ泳ぎ出した。

洞窟に匿っている子供達が心配になったのだ。

濁った視界はゼロに近く、時々頬をささくれだった木やら石の破片やらが傷を付けていく。

目当ての洞窟に辿り着く直前、錐奇は人型に変化した。

跳ね気味の黒い髪を乱暴に紐で一つに結び、無精髭がちらほらと目立つ浪人の様な出で立ちだ。

何処からどう見ても、蛇の妖には見えない。

水がまだ届いていないことに安堵した錐奇だったが、子供達の気配がしないことに気がつく。

「りん、はつね、せいた、しょう!!何処にいる、返事をしないか!!」

空っぽの洞窟に錐奇の声が反響していく。耳に痛い位わんわんと響いたが、濁流に掻き消されてすぐ聞こえなくなった。

「しずく!!……しずくもないのか…?」

一番年長(といっても数えて八つ)の『しずく』すらいない。昼間のリーダーはしっかり者の彼女に任せているので、彼女の許可なく子供達がいなくなるのはまずない。

獣に襲われたか、妖に襲われたか。

昼食前の木の実集めにはもう遅いので、大方荒れた川に恐れをなして水の見えない方へ逃げたのだろう。そう信じたい。

『困ったな』と錐奇は武骨な指で首をかきむしった。

「この雨では臭いも分からん。せめてしずくの……」

途中で錐奇が言葉を切る。洞窟の奥でチカリと何かが光った気がしたのだ。

そういう光り物に目がない錐奇は、訝しげに思いながらも引き寄せ

られるように歩み寄る。

小指程しかないその欠片は

翡翠の原石。

「……！」

一瞬にして、捨て子達の養い親は悟る。

去年、ちょうど今ぐらいの時に子供達が自分にくれた
忘れもしない人生初の贈り物。

元々種族的に貴金属や宝石の類いが好きな錐奇は、去年の翡翠を大切に糸に通して首にさげている。

だが、拾ったこれは小さい。

「　　こんな時に“鬼壺”へ行ったのか、あ奴等は……！」

納得する鉱石が採れず、再度探しに行ったという所だろう。

こんな村中水浸しの時、大雨降る水辺にもし子供達がいたら。

瞬時に人型を解いた漆黒の大蛇は、鱗が傷つくのも構わず濁流へと身を躍らせた。

5人は時期も場所もバラバラに捨てられた子供だった。

当然皆、滝峰村　　旧名・多鬼群^{タキムレ}の出身ですらない。

三つ山を越えた村から多鬼群近くの山に置き去りにされたり、人買

いから逃げ出したりと様々な生い立ちを持つ不運な時代なら珍しくも無い子達だった。だがこの

錐奇が最初に拾ったのはガリガリに痩せた女の童。

骨と皮にまで痩せ衰えながらも、4歳の彼女は懸命に生き永らえていた。

木の根をかじり、花をかじり、成っている実には食らい付く。

その姿に錐奇はなぜか感動を覚え、しばし見守ることにした。

何となく、そう何となくだ。

妖である以上、人間など数えられない程喰らって来た錐奇である。だが黒い大蛇の姿でチロチロと舌を出しながらも、彼は彼女を食べようとはしなかった。

あまりにその子供が不味そうだったからだ。

髪はボサボサ、肌も服もボロボロ。そこら辺の獣の方がまだ小綺麗に見える位である。

そこで錐奇は閃いた。

不味そうなら、美味しくなるまで育てれば良いのだと。

気がつけば人型に変化し、錐奇は話しかけていた。

「おい、その餓鬼。死にたく無かったら俺に着いてこい。飯を食わせてやるわ」

「……………うゝっ?」

それが4年前“しずく”と錐奇の出会い。

直情型の錐奇にしては、甲斐甲斐しく世話をするのが嫌で無かった
そんな、人と妖の不思議な営み。

妖に睡眠は必要ない。夜は人型で添い寝しながら一人、また一人と
増えていく子供達の寝顔を眺め、昼は海菴と会う。

土地神に会った帰りに一日分の獲物を牙で捕らえ、自生しない野菜
や穀物などは時々村から失敬する。

代金としてその分、くすねた家の軒先に血抜きしたウサギや鹿を置
いていくので、咎められることも無いだろう。

毎日が目が回る程忙しかったし子供は良く泣き喚くしと、錐奇は『
暇だ』と言う海菴が理解できなかった。

……そして口を滑らせた数十分前の自分を、殺してやりたいと切に
思う。

あれほど潔癖な土地神だとはい正直、彼も気がつけなかった。ただ人
間に興味が無いだけなのだと、勘違いしていた。

『無事でいてくれ……！もうお前達は……違うんだ。もう、お前達は
』

餌なんかじゃ、無い。

『しずく　　！！何処にいる、声をあげろ！！』

育ててみて分かったことがある。

確かに子供は五月蠅いし、汚いし、一時も大人しくしてくれないし、いきなり熱を出す。

『やめろ』と言ったってへばりついてくるし、置いていこうとすると泣き叫ぶ。

こんなに手がかかるなら、確かに捨てたくなるのも分かる気がする。

だが“食料”なら捨てる気は起きない。

常に傍に置いておきたいし、他の妖にだって横取りはさせない。今は“食料”ではないから、尚更見捨てることなど出来ない。

『……………ツ血の臭い！？』

黒い大蛇は邪魔な丸太を尻尾で弾き飛ばすと、水面から顔を覗かせた。ほんの微かだが濁流の中に、見知った血の臭いがしたのだ。

普通・の人間の血なら分からなかっただろう。だが“しずく”の血ならば良く分かる。

『まだ上流なのか…？ああ全く海菴ハイレンの奴、こんな所まで降らせなくとも良いだろうが！！』

悪態をつきながら流れてきた岩を尻尾で叩き切る。イライラしてきた所で、また濁った泥水の中へ潜り込んだ。

氏神の過去、黒蛇父さん焦る！ (前書き)

2011年10月21日改稿「500年」から「800年」に変更
しました。

同年10月29日「800年」から「500年」に戻しました。

氏神の過去、黒蛇父さん焦る！

小さくとも“しずく”は子供達のお姉さんであり、身を震わせる年下の弟妹達を守るのが仕事だ。

大きな岩の上に避難したは良いものの、もう逃げる場所が無い。この巨石が流されれば皆、濁流の餌食になる。中洲に取り残されてしまったのだ。

錐奇に憧れて伸ばしている深緑の髪が、ワカメのように少女の顔や首に張り付いて気分が悪い。

しかも乗り上げてきた大木を蹴り飛ばした時、運悪く足の裏を切っ
てしまい血が流れていた。

止血も出来ず、じくじくと地味に痛む。これでは満足に歩けない。

「しず姉え…怖いよう…」

「大丈夫、大丈夫だよ」

涙と恐怖で年下の子達は、皆物凄い顔になっている。対するしずくは感情を押し殺し、安心させるように“しょう”の背中をさすった。

お互い濡れ鼠のような有り様なので、ちっとも暖かくならない。だが捨てられた者同士肩を寄せ合い、家族が傍にいただけでも安心出来る。

錐奇がいればもつと心強いのに。

「錐奇様が助けてくれるからね、大丈夫だよ」

宥めるしずくの声自体、轟音に掻き消されそうな程か細い。
年長の彼女には分かっていたのだ。

行き先も告げずに来た自分達を、養い親である彼が見つけれられるわけがないと。

“鬼壺”の滝はもう見る影もないぐらい鉄砲水に飲み込まれ、しずく達の乗っている巨石が傾きでもすれば　　5人は死ぬ。

その足元が段々傾いているのは気のせいだと自分に言い聞かせ、しずくは誰一人欠けぬように4人を抱き締めた。

5歳の“りん”が己の運命を悟ったかの様に泣き止み、逆に体の震えが酷くなる。

お互いがお互いにしがみついているので、その震えは瞬く間に全員へ伝染した。

岩が無視できないぐらい傾き始め、しずくは両足を踏ん張って弟妹達を支える。

八歳の少女が抱えるには重すぎる重量を、彼女は　　妖混じりであるしずくは、歯を食いしばって耐えた。

足からさらに血が流れ、赤黒い筋が岩の表面を走る。

その時。傾いていた方向とは逆に岩が跳ね上がった。

「きゃああつ！」

水平に戻った反動で、5人の小さな体は一瞬宙に浮いた。バランスを崩して、しずくの手の力が緩む。

雨で滑る岩の表面を、小柄なりんがなすすべも無く転がり落ちていく。

手を伸ばして届く距離では無かったが、しずくは叫ばずにはいられなかった。

「りんツ！！！！」

しずくの叫びと、不自然な波が立ったのはほぼ同時。

濁流に飲み込まれると思われた少女の体は、背中が水面に着く直前漆黒の丸太に押し返された。

「…………え？」

りんは目をぱちくりさせながらも、慌てて黒い丸太にしがみつく。だがすぐにそれが丸太などでは無いと、上から見ていたしずくは息を飲んだ。

なぜならその丸太が、細かい鱗に覆われていたからである。

周りを見渡せば、黒くて長いものが巨石をぐるりと一周し水面下で蠢いている。

信じたく無かったが、聡明なしずくの頭は一瞬にして答えに辿り着いてしまった。

（これは、蛇だ）

しかも冗談のように大きく、良く見かける蛇とは違う気配がする。しずくは自分が『人間ではない』と自覚していたので、漠然と黒い大蛇が尋常のモノではないと覚った。

呆然とするしずくの元へ、物干しにかかった洗濯物扱いのりんが届けられる。

間近に黒い鱗が迫って怖い筈なのに、疲労困憊のしずくは緊張が解けた気分だった。

それは黒い蛇に乗ったりりんも同じなようで、こちらは騒ぐこともなく身を任せている。

しずくは自分でも驚いたことに、感謝の気持ちを表して黒い胴体を軽く叩いた。

「…ありがとう、助けてくれて」

「ありがとう、へびしゃん」

舌ったらずだが、しっかりとりんも礼を言う。人間など軽く10人は飲み込めるだろう巨体が、一瞬びくりと震えた。

泣き虫な“しょう”やジツと耐えていた“せいた”と“はつね”も黒い胴体をポカンとした顔で見上げる。

頭からパクリと食べられてもおかしくない怪物であるのは、しずく以外の子達も理解し始めていた。

なのに、悲鳴をあげるところか安心が胸に押し寄せる。

5人共安心感の理由までは分からなかったが、さっきまでの涙が嘘のように引っ込んだ。

黒い胴体は濁流に戻って、子供達の乗った岩を支える。それから雨が止むまで、黒い大蛇はとうとう水面に顔を出さなかった。

昼過ぎに降り始めた雨が止んだのは、夜が明けて東の空が白み始めた頃だった。

随分と水の勢いも弱くなり、巨石を飲み込もうとしていた濁流は申し訳程度しか無い。

体に突き刺さった木々を気合いで抜きながら、巨石に巻き付いた大蛇は気だるそうに鎌首をもたげた。

周囲にあった木々は押し流され、逆に押し流されてきた木々が至るところに散乱している。

これでは危なくて子供達を歩かせられない。

(俺も大概…親馬鹿だな。最初は餌としてしか…見ていなかったのに…)

妖にとって太陽光は天敵である。早く木陰にでも移動した方が良い

のだが、そんな気力は残っていなかった。

鱗は無惨にも剥げ、両目のすぐ横に大きなトゲが二本も刺さっている。

巨石が流されないよう一晩水底で踏ん張っていた為、身体中ポロポロだ。

少し一眠りしようと、大蛇は岩を抱きかかえたままゆっくり目を閉じた。

そして錐奇が金色の瞳を開けた時、目の前にあったのは緑の髪だった。

夕方だというのにあるうことが、まだ着替えもしていない“しずく”がもたれかかって寝ていたのだ。

大蛇の顔面がヒリヒリするのは、トゲが抜かれているからだろう。その代わりに薬草が貼り付けてあるのが臭いで分かった。

『全く警戒心の無い奴め…。喰ってやろうか』

チロチロと二股の舌先で、妖混じりの娘の顔を舐める。寝ぼけてギョツと掴まれそうになったので、錐奇は慌てて舌を引っ込めた。

『…おい、餓鬼。起きろ、喰われたいのか』

「……………ん……………」

大蛇が凄んでも、少女はゴシゴシと目を擦りながらのんびり起きる。

そして、大蛇も度肝を抜かれる言葉を発した。

「あ……おはよー錐奇さまあーあー……わふう。……怪我は大丈夫で
すか？」

『……！？』

目を極限まで見開いた錐奇は、思わず聞き間違いかと眠そうなしずくを見つめてしまった。

この4年間、当然のことながら本来の姿を子供達に見せたことは無い。

怖がらせたくなかったし、人型でも充分妖を追っ払うことが出来たからだ。

土地神には負けるものの、この近辺で錐奇の右に出る妖はいないだから。

寝ぼけた欠伸混じりの少女は、暢気に錐奇の上で身体を伸ばした。

「ねむー…あ、そだ。りん達は岩の上で寝てますよー…？」

『お前……俺が恐ろしくないのか？』

「……？」

きよとん、と一番最初に拾われた子供が蛇を見つめ返す。

澄んだ黒い瞳の少女は『あ！』と声をあげて大蛇に詰め寄った。

鼻先間近にしずくが迫り、紅葉の様な手が確かめるように大蛇の顔を触る。

気のせいか、その手は少し熱かった。

「錐奇様だよね！？うそ、違うの!？」

『いや…まあ、俺は確かに錐奇だが。』

いや、そうではなくて

…』

大蛇を目の前にして更に近づく人間がどこにいるだろうか。

確かに助けはしたが、自分より数倍も大きい妖の顔を普通ベタベタと触るだろうか。

そもそも蛇の顔に触って、何が分かるというのだろうか。

「なあんだ、脅かさないで下さいよう。てっきり別のヒトかと思つたじゃない…です、か……」

『…しずく?』

ズルズルと顔に添えられた小さな手が、力を無くしていく。

慌てて傾く身体を額で支える。緑の髪はおよそ一日経っているにも関わらず水気を含んでおり、しずくの体はかなり高い熱を持っていた。

『しずく！おい、大丈夫か!？』

「むう ……ひんやりしてて気持ち良い……」

額にへばりついているしずくには悪いが、冷温動物の化生である錐奇にはいささか熱すぎる。

まるで松明を体に押しつけられているようだ。

妖混じりで体力があるはずの彼女が、ここまで熱を出したことは今まで一度もない。

何故濡れた服のままだったのかと、黒蛇は舌打ちを漏らした。

どうにも熱くて敵わないので、一旦胴体の方へしずくを下ろす。

彼女はぐったりと目をつむったまま、ごろりと黒い鱗の上に転がった。

『熱い…。他のチビ達は岩の上だと言ったか…』

岩をぐるりと3周半巻いていた錐奇は、ほつきながら巨石の上を覗いてみる。

4人は揃いも揃って赤い顔をし、明らかに熱があった。

だが額には布切れが置かれていて、看病した形跡が見てとれる。

その着物に心当たりがあった錐奇は、妖混じりの少女を振り返った。

『お前が看ていたのか、自分も辛かったろうに』

「……………んむ ……」

良く見れば、しずくの着物に両袖が無い。己で千切ったのだらう、薄汚れた上に酷い格好だった。

『……食料も無い。薬草も無い。夜露もしのげない上にもう陽は落ちる……。不味いな』

自分の身体以外に子供達の体温を下げるものを思い付かなかったので、錐奇はとりあえず全員を背に乗せた。

満身創痍の大蛇であったが、そんなことは言ってもらえない。

たとえば皮膚が爛れようとも、子供達を失うよりはるかにマシである。

錐奇がとるべき選択肢は二つ。

村に降りて薬草を分けてもらうか、洞窟に戻って看病するか。

予想以上に熱が高い子供達に、500年生きている妖でも判断しかねた。

今回の水害で、薬草関係は流されてしまった可能性が高い。

食料となる野生の獣も、水害の前に安全な場所まで逃げてしまっただろう。

そもそも病人、しかも子供に鹿だの猪だのの肉を与えることは出来ない。

すると子供達を連れて帰ったとしても、蛇の体で体温を下げるくらいしか錐奇は出来ない。

薬草も食料も与えることが出来ない、万事休すだ。

『……脅して、襲ってでも手に入れよう』

壮絶な光を金色の瞳に宿らせ、焦りと心配で我を忘れた妖は物凄い勢いで山を滑り降りていったのだった。

始めに村民達を叩き起こしたのは、地を震わす不気味な地鳴りだった。

豪雨でついに地滑りが起こったのだと、山で暮らす彼等は瞬時に跳ね起きた。

「早く起きろ！！逃げるぞ！」

「地鳴りだ、ぐずぐずするな！！飲み込まれる！！！」

満月が闇夜を照らしてくれるので、村民は己の目を頼りに一目散に音から逃げる。

彼等をまとめる村長は、松明を掲げながら逃げ遅れた村民がいないかどうか確かめる。

避難の指示を出し終わった村長　弥作は、ふと暗闇に目を凝らした。

「……ありや何だ…？」

山を滑って来るものがある、それは分かるのだが…聞けば音がおか

しい。

丸太が時々はね飛ばされて、地響きと共にあらぬ方向へ落ちていくのだ。

徐々に地鳴りが収まって、月を背後に従えた細長い影が現れる。

そして弥作はようやくそれが地滑りではないと気がついた
闇に光る一対の金色が、村を見下ろしたからだ。 暗

松明に照らされた妖の姿に、村長は悲鳴を飲み込み立ち尽くすことしか出来なかった。

そんな小さな男を、大蛇が悠然と見下ろす。

『…危害を加えるつもりは無い。俺の言うことを聞けば、悪いようにはせん』

それは見上げるほど大きな、大蛇だった。

人間と比べるのもおこがましいくらい巨大な、黒い大蛇。

鱗が松明に照らされ黒光りする様は、大の大人が束になっても敵わないだろう妖。

家に残っている娘と孫をどうやって逃がそうか、弥作は必死に頭を回転させていた。

だが見透かされたかのように、化け物の声が降ってくる。

『逃げようとも無駄だ。俺から逃れる術は無い』

「ど…どうか、命だけは…」

ガタガタと松明を持つ手が恐怖で震えている。
時たま村に妖が降りてきたことも過去にあったが、これ程巨大で恐
ろしい妖は無かった。

年齢^{よわい}50を過ぎた男性は、夫を亡くした娘を守りたい一心で、その場
に踏み留まり勝機を探る。

だが、錐奇の発した言葉に思考が凍り付いた。

『お前の家に、子供を持つ母親はいるか？』

「……………！！！」

心臓を鷲掴みにされたように、呼吸が止まる。今まさに危惧してい
たことを言い当てられて、男は頭が真っ白になった。

そこで、運悪く家から孫と娘が飛び出す。

「父さん、支度が……」

「来るな、チサ！！逃げろッ！！」

「……………！？」

若い娘はいきなり響いた父の叫びに、飛び上がって驚いた。だが次
の瞬間、弥作を見下ろす大蛇に目を見開く。

喉までせり上がった悲鳴は、張りついて音にならなかった。

金色の瞳は妖しい光をたたえて、若い娘を振り返る。

「…………あ、ああッ…………！」

「わぁー！おっきな蛇しゃんだー！」

恐怖で震える大人と違い、高い声が静寂に響き渡る。

母親の足元から少女が顔を出し、泣きもせずに大蛇を見上げた。はつねと同じ年位の3歳児だ。

先が見えない位大きな身体を一心に視界に収めようとする姿は、りんやはつねと似た物怖じしない雰囲気を持っている。

金色の瞳が満足そうに細められた。まさか一番最初の家で理想の母娘が見つかるなんて、と笑みが浮かぶ。

人型ならそんなことも無かっただろうが、大蛇の笑みは弱者にとつて死刑宣告以外の何物でもなかった。

一見凶悪な捕食者が、嬉しそうに舌を出しながら若い母親と幼い娘に近づく。

慌てて二人に駆け寄り背に庇った村長は、狂った様に叫んだ。

「喰うならわしを喰え！！娘と孫は見逃してくれ 頼む！！」

『…………』

見当違いの命乞いに、錐奇の顔が面倒くさそうに歪む。

何もしていないのにこれ程警戒されるなど、はつきり言っただけで心外だ。間近に迫ってため息をついた蛇に、ぺち、と紅葉のような手が添えられる。それは若い母親の娘、チエだった。

「蛇しゃん、おめめ痛いのか？大丈夫？」

喰われる、と大人二人から声にならない悲鳴が漏れる。蒼白になった二人に、錐奇は苦笑しただけだった。

目の横に刺さったトゲは抜かれていたものの、貼りつけていた薬草は取れていたのだ。

『いや、もう痛くない。……俺に触れると、母君に後で怒られるぞ。俺は妖だからな』

「あやかし」？

『そうだ』

金色の瞳に殺気などあるはずもなく、少女を優しい眼差しで見つめている。

凶悪な妖とは思えないその姿に、母親のチサは唐突に理解した。

この蛇は、そこら辺にいる乱暴な妖ではないと。

訳が分からず固まっている祖父に、孫娘が無邪気に言った。

「じいじ、“あやかし”って？」

「チ、チエ……」

パクパクと唇は動くものの、彼の声は出てこない。
この男は元に戻るまでしばらくかかりそうだと悟った錐奇は、隣の若い母親に目を向けた。

相変わらず小さな手は、黒い大蛇の顔をぺたぺたと触っている。
くすぐったそうにしながら、錐奇は用件を告げた。

『お前達を取って喰いに来た訳ではない。俺の子供が5人そろって熱を出してしまつてな、看病してもらいたい』

「子供…?」

ズルズルと大蛇の胴が地面を擦り、ぐったりした少年少女がチサの目の前に並べられる。

そこでようやく村長の弥作も、この蛇が普通の妖では無いことに気がついた。

真っ先に食べられてしまいそうな孫娘は大蛇を楽しそうに触っているし、大蛇は慣れているかのようにジツとしている。

そして極めつけは黒蛇の背に乗った5人の子供達だった。

『案ずるな。お前達と同じ、人間の子供だ。俺が山で拾って育てた』

「拾つて…育てた?」

「…父さん、看病してやりましょう。」

腰を抜かしている父を尻目に、恐怖を乗り越えた娘が立ち上がる。その姿は18とは思えない程遅しい、一児の母親だった。

「チサ、何を言っつて　！」

「この…方^{かた}が私達を食べるつもりなら、最初から話なんかしませんよ。さつきからチエにも優しいわ」

恐る恐るチサが一番幼いはつねの額に触れる。錐奇はその様子を横目で静かに監視していた。

弥作も村で一番学のある薬師なので、せいたやしように触れてみる。

熱こそ高いものの、そこまで深刻な状態ではなかった。

熱の子供を何度も看病したことがあるチサも、フツと頬を緩ませる。

「安心して下さいまし。一晩ゆっくり寝かせれば、これ以上酷くはなりませんよ」

『そうか…。それは良かった。』

次々に家の中へ運ばれていく子供達を、大蛇は心配そうに見送る。最後にチサがしずくを運ぼうとした時、緑髪の少女がつつすらと目を開けた。

それに気がついた錐奇が、鎌首を向けて少女を覗き込む。

『しずく、大事無いか』

「錐奇、様…ここは…？」

『人里だ。お前達を看てもらおうと思っただけだ』

のろのろと視線が錐奇からチサに移る。弟妹以外の人間を見たのは、少女にとって実に4年ぶりだった。

彼女にとって“人間”は自分を迫害した上に追放し、人気の無い山に置き去りにした異種族。

当然、しずくが大人しく女性に抱かれる訳が無かった。

「嫌だ、いやッ！！錐奇様が良い！！」

何とかチサの手を逃れ、蛇の背にへばりつく。困ったように女性が蛇を見ると、錐奇は二股の舌を出し入れして自分の鼻先を舐めた。

『……はあ、全く。穏便に済ませたかったのだが…』

少し離れるようにと女性を遠ざけると、錐奇は白煙をあげて人型に変化した。

地面に落ちかけた少女を片手で掬い上げ、軽々と右腕に乗せる。

ちようど家から出てきた弥作は、いきなり白煙から現れた人型の錐奇に足が止まった。

切れ長の目は先程の大蛇と同じく、闇夜に光る金の瞳。

肌は異様な程白く日焼けを知らない、まさしく夜の生物。

跳ねまくる黒髪を高く結び、背中を半分覆う程に流している。

地が真つ白な着流しは、裾に向かうにつれて翡翠色の濃淡が濃く彩られていた。

山ではもつと崩れた格好をあえてしていたが、ここでは汚ならしくする必要も無い。

甘えん坊の少女は体温の低い男の首に抱きつき、安心したように身を任せていた。

熱を出したことの無いしずくは、弟妹達のように抱っこをねだることもなかなか出来なかったのだ。

ここぞとばかりに引っ付く少女に、金色の瞳の男はよしよしと髪を撫でてやる。

どこからどう見ても人間の親子にしか見えない。

「すまないな。しずくは一番長く俺といるせいかな、人間が苦手なようだ。気を悪くしないでくれ」

「は…はあ。」

不思議な光景に、若い女性は驚きを隠せない。弥作もポカンと口を開け、村長にあるまじき間抜けな顔を晒していた。

家上がる訳にもいかないので、錐奇は裏庭の方へ歩き出す。

チサは構わないと言ったのだが、男は首を横に振った。

「俺が傍にいたらやり辛いだろう。それよりも、他の子供をしつかり見てやってくれ。」

軽く手を上げると闇に紛れた錐奇は、溶けるようにして消えた。

氏神の過去、少し幕間な感じ

子供達が眠る部屋を庭から眺めながら、人型の妖は一夜を明かした。冷温動物の妖であるので、錐奇の体温は人間と比べると驚くほど低い。

腕には養い親を氷のう代わりにした、妖混じりの少女が眠っている。炎を肌身離さず抱えている様な苦しさに、錐奇は大分弱っていた。

「…………ツ、はは。海菴ハイレンに知られたら、笑われそうだな…」
だがそこは500年以上生きた妖。気力で何とか人型に踏み留まり、しずくを起こさぬように抱き続ける。

部屋の木戸が開いたのは、ちょうど朝陽が山の峰を昇ってきた時だった。

ぼんやりしていた妖は、ハッと我に返ると自分を叱咤する。

（俺は妖だぞ？…………脅して従わせたくせに気を抜くなど、なんと愚かな…）

子供達が大丈夫そうだからといって、油断するにも程がある。

自分が蛇の化け物なのを、この家の者は先刻承知済みなのに。

隙を見せたら子供達に危害が及ぶかもしれないし、錐奇が弱っているなどと知られれば、鍬や鋤で攻撃されるかもしれない。

錐奇はあくまで、『強くて恐い妖』でなければならぬのだ。

目を擦りながら出てきた女性が、庭の石に座る錐奇に声をかける。

「…お早うございます。朝餉あさぐはどうします？」

「…俺はいらん。…子供達に食わせてやってくれ…」

眠りこけているしずくを気にしてか、妖が小さな声で返す。

本当は、体に力が入らなくて普通の大きさをえ出なかったのだが。

一晩少女の布団をしていたらしい妖に驚き、若い母親から思わず言葉が溢れた。

「どうして…そこまで…？」

「……」

問いではなく、純粹な疑問。それだけに二、三の言葉で答えるのは難しい。

咄嗟に答えに窮した妖の反応に、寝不足の母親はハッと身体を固くした。

「ごめんなさい！私ったら考え無しで…！直ぐに粥を作りますから…」

「……ああ、頼む」

バタバタと台所へ去っていく女性を見送ると、錐奇は何とも言えない気持ちになった。

なぜ自分は“餌”を育てたのだろう。

最初はちよつとした好奇心からで、小汚いしずくを気まぐれに世話し、生かした。

名前で呼ばせているのは、いつか喰らう時に余計な情けをかけないためだ。

否。ため、だった。

「人に返すなら……早めが良い。俺が狂わぬ内に」

とうに子供達を“食料”としては見ていない。

庇護すべき対象として、今まで色々な危険から守ってきたくらいだ。

夜の妖や獣、山賊や悪質な獵師から。

だが籠に入れて守ってばかりでは、子供達の成長を妨げてしまう。

彼等の世界から“人間”という隣人を奪う権利など、妖の錐奇には無いのだ。

妖混じりであるしずくは、もしかしたら人里に還せないかもしれないが他の子供は違う。

まだ混じり気無しの人間な分、望みはある。

「こんな狭い世界で生きることには無い。お前達には友人や伴侶も出
来る　俺と違ってな」

汗で張りついた前髪を優しく寄せてやると、唐突に少女がパチツと
目を開けた。

起こしてしまったかと錐奇が手を引っ込めようとする、小さな手
が男の袖を掴む。

何故だか鬼気迫る少女の表情に、妖はぎよつとした。

今にも泣き出しそうな少女は、大きな瞳を潤ませて養い親を凝視し
ている。

仕方が無いので、錐奇の方から声をかけてみた。

「……………良く眠れたか、しずく」

「錐奇様…！あた、あたし達を、捨てるの…?!」

声は熱で掠れ、袖を掴む手はわなわなと震えている。

みるみる内に黒曜石の瞳から涙が溢れ、口がへ字に歪む。

既に起きていたのかと、錐奇は己の迂闊さに頭を抱えなくなった。
どうやら本当に感覚が鈍っているらしい。

腕の中にいる少女の意識の有無など、呼吸音や体温で分かっただろ
うに。

(俺もそろそろ水辺で休まねば死ぬかもな…)

養い親の沈黙を肯定と取ったしずくは、子供とは思えない握力で男の襟首を両手で掴んだ。

「あたしはッ！！捨てられるくらいなら、餌になる方がマシです！！」

少女の叫びに呼応して、人間離れした深緑の髪がさつと色づいた。至近距離でポロポロと流れる少女の涙が、錐奇の胸や袖に染みを付ける。

「親に二度も捨てられたら…私は、何のために生まれてきたのか…分からなくなるッ！後で捨てるくらいなら　あの時食べれば良かったのにッ！！」

熱は下がったというのに、しずくの身体は火の様に燃えていた。

その熱は、蛇の妖である錐奇の命を容赦無く削る。

だが彼は、しずくの血を吐く様な叫びに言葉を失っていた。

しずくにとって“捨てられる”ということは“死”よりも恐ろしいことなのだ。

「妖と人間は、一緒にいちゃいけないんですかッ！？あたしはッどつちでも、ないのに…！！」

「…言葉が足りなかったな、そうではない。お前達を捨てるとは言っておらん」

落ち着かせるように錐奇が背中を手で擦ってやると、しずくは小さく肩を震わせた。そのまま妖に体重を預けて泣きじゃくる。

それは妖に食べられる恐怖ではなく、また親に捨てられるかもしれないという絶望から来る涙だった。

高い場所から落ちてでも死なず、怪我也恐ろしく治りが速かったしずく。

気味悪がられ石を投げられ、しずくの両親は魔性の子を生んだと陰口を叩かれた。

狭い世界の村社会でしずくを受け入れてくれる人間は、皆無だったのだ。

錐奇は四肢の感覚が麻痺しながらも、4年間育てた少女に言い聞かせる。

「お前達を選ぶんだ。寿命を縮めてまで俺と共にいるか、俺と別れて同族と契るか…。ちなみにお前は俺としても死にはせん。妖混じりだからな」

だが他の4人は違う、と純粹な妖である大蛇は続ける。

「俺はこの世の理ことわりから外れたモノ。普通の人間は、共にいるだけで寿命が減る。……たとえ俺が喰わずとも…お前達を殺して、しまっやも 知れん……」

少女の背を擦っていた手が、パタリと落ちる。

ハッと顔を上げた少女は、錐奇の顔色が真っ青なことに初めて気がついた。

ぐらりと傾いだ体は、しずくを抱えて離さない。

座っていた岩を滑るようにして転げ落ちた妖は、少女を抱いたまま地面に尻餅をついた。

しずくが錐奇の膝から飛び退くと、彼は大きく深い息を吐く。それはまるで生気まで抜けていくような吐息だった。

驚いて泣き止んだ少女に錐奇は安心させるよう、ぎこちないが笑みを浮かべる。

「…少し休めば治る。お前は部屋で朝餉あさげを食べてこい」

「イヤです！錐奇様がこんなに　　！」

『具合が悪いのに』と言おうとした少女の口が、大きな手で塞がれる。

言わずもがな、間一髪で錐奇が止めたのだ。

「朝餉が済んだらここを出る。お前達は洞窟に戻って俺の帰りを待て。俺は……月夜ヶ淵へ行く。」

小声でしずくに指示を出すと、男は手をそつと外した。

今にも決壊しそうな位瞳に涙を溜め、少女は鼻をすすする。しずくは小さく頷いた後、胸元から巾着袋を取り出した。

「これ、錐奇様にあげようと思って……」

中からコロンと顔を出したのは、蜂蜜色の透明な琥珀。それを見た錐奇は優しい笑顔になった。

その表情は幼い我が子を愛しく思う、父親そのものである。

限界まで弱っていた錐奇は嗅覚、聴覚共におかしくなっていた為近くまで漂う朝餉の香りに気がつかなかった。

遠い台所ではなく、ほんの近くで香る山菜粥に。

「一飯の恩は忘れん、とあの親子に言っておけ。荒れた水田ぐらいなら元に戻しておく。……これは、俺の首飾りに加えるでしょう」

「本当は翡翠が良かったのに……」

しゅん、とするしずくの頭を養い親は優しく撫でてやる。

日本で翡翠が採れるのはごく限られた地域のみであり、去年子供達が拾えたのは奇跡に近い。

その気持ちだけで、養い親の妖はとても嬉しかった。

明るくなってきた空に背を向けて、錐奇が立ち上がる。軽く目眩がした妖だったが、何とか踏ん張って歩き出した。

しずくに見送られながら錐奇が村長宅の庭を後にしようとしたその時である。

「お待ち下さい!」

静かな朝に女性の声が響き渡る。

しずくが振り返り、錐奇はそのままの体勢で顔をしかめた。

声がかかるまで生物の気配に気がつかないとは、本格的にまずい。早く神佑地の湖で体力を回復させないと、命に関わる。

山菜粥を一人分持った女性　　チサは、膳を廊下に置いて口を開いた。

「貴方は…貴方様は、月夜ヶ淵ぬしの主なのですか？」

「……………」

ここで“違う”と言えば少々面倒なことになる。

きっと彼女は先程の会話を聞いただろう。

錐奇が今は強くも何とも無い、水辺を求めるただの“死にかけ”と
いうのも想像がつくはずだ。

「……………俺は、」

だが、土地神であり親しい友人である海菴ハイレンを騙かたることは…

「……………俺は、こいつ等の育て親だ。それ以外の何者でも無い」

出来なかった。

代わりに錐奇は振り返り、金の瞳を恐ろしげに光らせる。

その壮絶な眼光にチサは「ヒッ」と悲鳴を飲み込んだ。

「こいつ等に仇成すことあらばお前の娘共々、村の人間全てを喰ら
つてやるからな……………！」

白煙が上がり、黒い大蛇が姿を現す。

暗闇の月明かりの下で見るのも恐ろしいが、弱い陽光の中で鱗が黒

光りしているのも充分迫力があつた。

まして、子供を守る為なら手段を選ばない妖。
大切にしているだけに傷つけでもしたら、多鬼群タキムレの集落は簡単に消滅するだろう。

畏怖と恐怖を骨の髄まで叩きこまれたチサは、首が外れそうな程頷いた。

それを見てひとまず安心した大蛇は、黒い体をくねらせて林の中へ消えていったのだった。

あれれ、黒蛇さんは鈍感！？ (前書き)

一応妖と人間の恋は悲劇なので、取り入れたくないのですが……。おもに寿命の関係上。ですが後々の伏線：みたいなものでもあるので、匂わせておきます。

あれれ、黒蛇さんは鈍感！？

錐奇が月夜ヶ淵の神聖な水で体力を回復するのに、およそ5日掛かった。

傷だらけで訪れた黒蛇を、海菴ハイレンが問答無用で神佑地に放り込んだからだ。

半ば封印されるように眠らされ、全快するまで錐奇は神佑地から出られなかった。

『おのれ海菴ハイレンめ……一発殴ってやろうか……』

目を覚まして湖から顔を出した黒蛇は、土地神である青銀色の魚の気配を探る。

だが、神佑地の主だというのに近くに海菴の妖気は感じられなかった。

それどころか、酷く遠い。

しかもなぜか村の方から感じる。

『……………？』

音もなく湖から這い出して、錐奇は首を傾げながら人型に変化した。純白の地に新緑の濃淡で彩られた着流しを着た、一見粗末なように優美な出で立ちである。

帯に差すのは刀よりも、横笛が似合うだろう。

「……海菴、何を考えているんだ…？」

逡巡した後、鬱陶しい烏の濡れ羽色の髪を払い、錐奇は村へ向かって降りて行ったのだった。

「チサさまあ　！！見て見て、綺麗なお花あ！」

集落の入り口に足を踏み入れた所で、人型の妖はガクツと転けそうになった。

錐奇に気づかず目の前を通り過ぎた少女　　りんが、跳ね気味の髪をなびかせて走っていく。

駆け寄る先には、慎ましい衣に身を包んだ1児の母がいた。

以前のような強張った顔では無く、りんを見る眼差しは年若くとも母親のものである。

少女が女性に白い花を渡し何やら言葉を交わした後、りんはこの上ない満面の笑みを浮かべる。

その幸せそうな笑顔に、妖は心になんとも寂しい風が吹き抜けたのを感じた。

喜ばしいことなのに、巢立つ我が子を垣間見ているような…心を鋭く突かれたような痛みに呻く。

錐奇が入り口付近で突っ立っていると、ドサツと背後で何やら落ちる音がした。

振り返れば籠が地面に引っくり返り、転がった黄緑の果実が悲惨な事になってる。

その先には 子供達。

「「「錐奇様あ !!!」「」」

二人の少年を直ぐに引き離し、最初に錐奇の胸に飛び込んできたのはしずくだった。

妖混じりの脚力で、勢い良く抱きついた少女を難なく受け止める。

遅れてやって来た“せいた”と“しょう”も、軽くベそをかきながら養い親にしがみついた。

皆採ってきた果物など、放り出している。

“しょう”がポカポカと小さな拳で錐奇を叩いた。

「何処行つてたんだよお…俺達、忘れられたのかと…思ったじゃんかあ…」

「……心配、した」

口数の少ない“せいた”も嗚咽混じりに瞳を潤ませる。

余程不安な思いをさせていたらしい。

錐奇は大きく腕を広げて、3人とも胸に抱えこんだ。今まで熊だの鹿だの野生染みた臭いがしていた子供達からは米や囲炉裏といった人里の匂いがする。

すぐにりんも気がつき、しずくに負けないぐらいの砲弾となったのは言うまでもない。

それはもう親子の抱擁以外の何物でもなかった。

興奮覚めやらぬ様子の4人と、浮世離れた錐奇、心逞しい村娘のチサが連れ立って歩く。

子供をまとわせた状態では威厳も何もあつたものではないが、錐奇はチサに感謝を述べた。

「子供達が世話をかけた。村長殿とチサ殿への恩は忘れん。礼を言う」

「いえいえ、そんな！……良いんです。私も、その…楽しかったです」

頬を染めて微笑む女性は、とても夫を亡くした未亡人には見えない。どこにでもいる村娘そのものだ。

錐奇への態度も畏怖で縮こまっていた頃とは、段違いに丸くなっている。

何故だろう、と妖はりんとしずくを腕に乗せたまま疑問に思っている。

た。

「錐奇様、おけがは大丈夫？」

こめかみをジツと見つめて、緑髪の少女が口を開く。

とげが刺さった傷は完治したものの、赤い痣となつて錐奇の肌に残つてしまつていた。

神佑地の力で回復して痕が残つたということは、存外深い傷だったようである。

「ああ、大事ない。」

その神佑地の主を探して村に降りてきたというのに、彼の者の気配はずれども見つかからず。

はつねがチサの娘と家で遊んでいるというので、錐奇達は集落の中央に近い村長宅へ向かっているのだ。

見慣れぬ男が村の権力者の娘と歩いている様子は、さすがに他人の目を引く。

チサの話では錐奇のことを“見聞を広める為に放浪中な、良い家とこの三男坊”と説明してあるそうだ。

見た目は立派な偉丈夫で着物も華やかなのに、本人から滲み出る野生的な鋭さは隠しようがない。

貴族にしては粗暴な立ち居振る舞いであり、かといって平民にしては泥臭さが無い。

詰まる所“家を離れた貴族らしくない青年”という肩書きに、人型の妖は感心していた。

よくもまあそんな胡散臭い男を、村の人間は自分達の住みかに入れたものだ。

もし妖一人だけだったら叩き出されていただろう。

村の人間が一応の警戒を解いたのは、子供達に寄るところが大きい。

5人もの子供を育ててなおかつ慕われていれば、少なくとも道を踏み外した輩などでは無いと判断出来るからだ。

村長の多大な努力もあって、錐奇は難なく人里に紛れ込むことが出来たのだった。

そうこうしている内に、見覚えがある大きめの家が見えてくる。

だが近づくとつれて、妖は100年来の付き合いである土地神の気配に気がついた。

(なぜ村長の家に…?)

しかもはかったかのように突然漏れ出してきた微弱な妖気。向こうはこちらの妖気に気がついていたようだ。

間違いない。

月夜ヶ淵の主が昼間から人間の家にいる。

困惑顔になった養い親を、錐奇の右腕に乗ったしずくが首を傾げながら見下ろした。

「錐奇様、どうかしたの？……ここ、皺寄ってるよ？」

ぐりぐりと小さな指が、錐奇の眉間の皺を広げようとする。

ここで騒ぐわけにもいかないので、ひとまず妖は小さく息を吐いた。

「……………いや、何でもない。」

敷地内に入り、錐奇が二人の少女を地面に下ろす。

心なしか男が足早に引き戸を開けると、はたして

彼は、いた。

「《随分遅かったな、錐奇。待ちくたびれたぞ》」

はつねの身体を借りた土地神が、まったりと寛いでいたのだった。

ガラリと口調が変わった3歳児に皆度肝を抜かれたが、錐奇はいち早く我に返って少女に詰め寄った。

室内に上がる際、足を水で清めているのだから、意外にも冷静である。

水の球がするりと妖の足を拭っていくのを、チサは驚きながら見送った。

「なぜお前がここにいる！？人間嫌いのお前が！」

「《お前が童共わっはを育てていると言っていたのを思い出してな、興味が沸いた。中々楽しかったぞ》」

この5日間全く口をきかなかつた3歳児は、声変わり前の少年のよ
うな声音である。

それでいて口調は老成しているので、面と向かうととても違
和感に襲われた。

背後で混乱している子供達に気づき、錐奇は舌打ちを漏らす。
はつねの首根っこを猫の様に持ち上げ、チサを振り返った。

「悪い。適当な部屋を借りるぞ」

「…あ、それなら離れを使って下さいな。」

錐奇の言葉にすぐさま反応したチサへ、男は元に戻した金の瞳で満
足気に笑った。

3歳児が錐奇と同等に喋っているのを見ても、村娘の彼女は動じて
いない。

人間にしては随分と胆の据わった娘である。言動に少々驚かれない
のは、錐奇にとっては非常にありがたかった。

「礼を言う。……しずく、チビ達の面倒を頼んだぞ」

「…！は、はい」

慌てて返事をした少女は、疑問に蓋をして養い親の指示に従う。

そのまま“ハイレン”と呼ばれた“はつね”は、錐奇と共に離れへ
消えたのだった。

殆ど真円に近くなった日の入り間近の月を、縁側に座った女性が見上げる。

去年の秋チサの夫が亡くなるまでは、二人肩を並べて良く月を眺めたものだった。

「……あたし、どうしちゃったんだろう」

ぽつりと、後家になるにはまだ早過ぎた女性が、夕焼けに浮かび上がる月に語りかける。

彼女の夫は、静かに輝く月のように儂い人だった。

学問が好きで、薬師であるチサの父から手ほどきを受けていて。

真面目で勤勉で“村の為に出来ることをしたい”と、体力の無さを知力で補う人だった。

「…違う。違うんだ。住む世界が違うもの」

つと、女性の頬を涙が伝う。その口元には泣き笑いのように寂しい笑みが浮かんでいる。

自分はきつと人恋しいだけなのだろう、とチサは自分の想いを固く閉ざした。

この感情は、恐怖の裏返しなのだと思理矢理自分を納得させる。

弱者は捕食者に対して本能的に、気に入られることで生き延びよう

とするらしい。

そう。その程度の感情なのだ、きつと。

こうして毎日月を見てみると、ほんの一週間程前の事を思い出す。

金の月のような、妖しく美しい瞳を持つ男性を。

「馬鹿だなあ、あたしは…困らせるだけじゃないか…」

はあ…と深いため息をつき、チサは日が長くなった夜の始まりに鬱々とした気分になった。

早く目の前から去って欲しいと思う反面、これから時折でも村に降りてきて欲しいと願う。

チサは視線を庭に落とすと、柱に寄りかかる。火照った身体に優しい冷たさが気持ち良くて、女性は目をつむったのだった。

離れではまったりお茶をすする3歳児と、静かに殺気を放つ男性が向かい合って座っていた。

“気に食わない”だけで水害を起こす土地神なのだ、同じ事を村の中心にするなら 半殺しにしても止めるつもりである。

先に口を開いたのは、刺々しい空気に耐えられなくなった土地神の方だった。

「…おお怖、少しは邪気を抑えんか。お前が死にかけてまで守っ

た餓鬼共にただ興味が沸いただけさ、他意は無い。
自覚しろ、あの時のお前はもう少して手遅れになるところだったんだぞ」

湯呑みを脇に置いた土地神は、幼女の瞳にちぐはぐな威圧プレッシャーを乗せる。

あの時　　錐奇がのろろと神佑地近くまで這って来た時、荒れ狂っていた土地神は一瞬にして我に返った。

微弱な妖気は今にも消えそうな蠟燭の如く、まさに風前の灯火の様な有り様。

一体誰にやられたのかと、変わり果てた1000年来の友人に恐怖まで覚えたくらいだ。

気の遠くなるような時間独りでいた土地神にとって、今さら1000年も一緒にいた錐奇を失うのは耐えられない。

それだけ楽しい毎日を提供してくれた朋ともなのだから。

童は皆死んでおらん、一ヶ所に集めて俺が保護している！！
死の穢れなぞ山に無いッ！！鎮まれ、海菴ハイレン！！

その必死に叫ぶ姿が妙に輝いて見えたのは、きっと見間違いではないのだろう。

たかが人間エサそれも幼子おまこを守ろうとした錐奇は、妖には無縁の“絆”
を確かに持っていたのだ。

「人間ものなぞ、生き急ぐ花のようなもの。そんな存在ものの為に死にか

けたお前を見て、色々思うところあつてな。

土地の境界も曖昧になった故、私が降りぬ訳にはいかなかったのさ
《
》

“境界が曖昧になった”と聞いても、いまいちピンとこない錐奇に
3歳児はため息をついた。

今まで神佑地の仕組みを詳しく話したことも無かったので、無理か
らぬことではあるのだが。

錐奇の針鼠のような雰囲気が少しずつまシになってきたのを確認し
つつ、土地神は村に降りた理由を明かす。

「…私の守護する土地にはな、縁に目印として和鏡が地中に埋め
てある。今回大暴れしたせいで北の一角が流され、境界が甘くなり
おつたのよ。」

神佑地が位置するは、真反対の南。

私が村まで出張らなければ、野良が早々に群がっておつたわ《
》

海菴ハイレンの言う“野良”とは、力の拠り所を求めてさすらう“住処を持
つていない”妖のことだ。

妖は古来から、人のいない所では存在出来ない。

それは妖というのが人間の“恐怖”から生まれるものでもあるし、
“闇”は“光”があるところには出来ないからでもある。

人が通る山道ならまだしも、獣しかいない山の中では妖は消滅する
しかない。

ある程度人間がいて人里の“光”がないと、土地を持たない妖は“
個”を失ってしまうのだ。

「《この少女には神降ろしの才がある。私の依り代の器としても丁度良かった。意識は眠ったままに、色々と知識を提供してくれたしな。》」

くつくつと笑う姿は、間違っても抱っこをせがんでいた3歳児ではない。

とりあえず村を滅ぼすつもりは無いようなので、錐奇は内心胸を撫で下ろしていた。

「お前に今のところ害意が無いならそれで良い。これ以上田畑を荒らされたら、村が飢え死にするとところだ」

「《失敬な。土地神を死神のように言いおつて。

……まあ、お前がこの村に入れ込むのも分からんではないな。特にこの家の娘は気持が良い。父親はまあまあ凡人だが》」

遠くを見るように目を細めた少女に、着流しの男が眉を寄せる。海菴の言った意味が分からなかったのだ。

「気持ちが良い……？なぜそこでチサ殿が出てくる？」

「《……お前は頭が固いからな……ま、いずれ分かるだろうよ。》」

少し冷めてしまったお茶を、また少女がすする。最後に湯呑みを置いた3歳児はおもむろに、ごろりと横になった。

そのまま天井に顔を向けつつ口を開く。

「《月夜の宮も空いたことだし、私はもう行く。この娘の記憶は曖昧だろうからしっかり世話してやれ、じゃあな》」

すう、とはつねの胸の辺りから虹色の球体が漏れ出る。

すぐにそれは小さな青銀色の鯉となり、空中で優雅にくるりと輪を描いた。

いきなり器かじから出たら、はつねが頭をぶつけると配慮したのだろう。

癩癩や気まぐれで大洪水を起こしていた以前とは、随分人間に好意的になったようだ。

『中々に面白かった。お前が仔を作ったら、さぞかし子煩悩な父になるであろうな』

「…言っておくが、これ以上子供を増やすつもりは無いぞ。もう5人が限界だ」

意味を取り違えている錐奇に、海菴の真意は分からない。

どことなく含んだ目で笑う海菴に、黒蛇の妖はむっとした表情になった。

土地神が妖気を清らかな水のように張り巡らせ、人間には聞こえぬ音が波紋となつて村に響き渡る。

刀工が玉鋼を打つたような澄んだ金属音に、錐奇の肌がざわめいた。

『今夜だけは村に結界を張っておく。境界を直すは…そうだな、2日はかかるかもしれん。』

明日と明後日の夜はお前が人間を守れ。私は土地の面倒を見よう』

「……すまないな、海菴^{ハイレン}。恩に着る」

胡座をかいた膝に手を付き頭を下げた朋^{とも}に、青銀色の鯉は尾で頭を叩いてやった。

『私は土地神ぞ。土地を守護するが役目よ』

本人は認めないだろうが、極めて分かりやすい照れ隠しである。

空中で大きく身をくねらせたかと思うと、あっという間に海菴は小窓から姿を消したのだった。

寝ているはつねを起こさぬよう胸に抱き、羽根のように軽い我が子と共に離れを出る。

もう月は中天に差し掛かり、室内に灯りの気配は無い。

夜闇に金の瞳を光らせながら、錐奇はこの家のことを考えていた。

村長の弥作と娘のチサ、そして幼いチエ。

この時代には珍しくもないが、チサは夫に先立たれた女^{むすめ}だ。

だから若くして芯の強い母として在り、妖に無闇に怯えることもなかったのだろう。

(これが他の人間の女なら…卒倒していても不思議は無いな。)

実際、村長の目からは未だに恐怖が消えていない。

老体に緊張を強いるのも憐れなので、錐奇は出来るだけ室内に足を踏み入れなかったのだが。

（今夜から庭で夜を明かすとするか…）

音もなくはつねを子供達の部屋に寝かせ、錐奇は気配を消して廊下を歩く。

体重を感じさせない動きに木張りの廊下は軋むこともなく、錐奇は誰にも会わずに庭まで辿り着いた。

その途端、嗅覚を刺激する人間の匂い。

周囲を見渡すと、柱に寄りかかった小柄な影が見えた。

縁側から陽に焼けた足を投げ出し、ほつれた黒髪の間からは細い首が覗く。

昏間と変わらない質素な形なのに、月明かりの下では何やら妖しい色香が漂っているように見える。

弥作の娘、チサであった。

1児の母といえど、まだまだ瑞々しい18歳の女。
小さな可愛らしい耳、ぷっくりと柔らかそうな桜色の唇。
袖から覗く手はしずくより大きいものの、女の指は華奢で細い。

甘い匂いは今まで嗅いだこともない、山の獣とは違う人間の雌の匂い。

息を飲んで立ち尽くした錐奇は、慌てて頭を勢い良く振った。

（俺は今、いったい何を考えた…？）

心臓が強かに打ち、冷たい血が熱を持った様にたぎる。

ともすれば人型が解けそうなくらい、錐奇は動揺していた。

一瞬でも、恩人を食料として見てしまったのだろうか。

もうずいぶん長い間人間は食していないのだが、まだ習慣が抜けていないのだろうか。

「まずいな…」

小さな咳きが男の口から漏れる。

その声に反応してか、幼さを残す女性がうつすらと目を開けた。

寄りかかっていた柱から、凝り固まった身体をゆっくりと引き離す。

自分がどこで寝てしまったか気付いた女性は、慌てて意味もなく襟をかき合わせた。

「いやだ私ったら、こんな所でうたた寝を…」

身体を伸ばし目を擦ると、ふと周囲を見回す。…だが誰もいない。

なぜ自分は起きたのだろうかと頭の片隅で不思議に思ったチサだったが、自分のくしゃみで我に帰った。

すぐそこまで夏が来ているとはいえ、夜更けに外で居眠りなど風邪

をひきかねない。

「早く戻りましょ」

立ち上がって自室へ続く廊下へと足を向ける。

彼女が縁側から姿を消した後、庭の隅を黒々とした蛇が這っていったのを誰も気づくことはなかった。

あれれ、黒蛇さんは鈍感！？（後書き）

普通の妖の寿命は800年届かないぐらい。

土地神など、『力』に選ばれた存在は妖力の供給があるので地力が衰えない限り基本不老。1000年超えても生きられる妖も存在。けれど不死というわけではないし、妖力が尽きれば消滅に向かいま

す。
ちなみに本作の主人公『ネリ』は世界に選ばれてしまった^{イレギュラー}異分子なので、色々と過酷な設定があります。その内容は後々の番外編中にて。

血濡れの黒蛇さんはお酒がお好き(前書き)

残酷な描写があります。

血が目一杯出てきますのでご注意ください。

血濡れの黒蛇さんはお酒が好き

神佑地の力とは妖にとって、極上の美酒のようなものだ。

本能的に力を求める性質の上、消滅の危機に常に怯えている根なし草は、僅かに漏れ出る“力”にさえ釣られてしまう。

海菴^{ハイレン}が張る結界は、そんな“力”を感知されにくくするものだった。だがいくら土地神の彼が村を覆う結界を張っても、神佑地の“力”を使って境界の補修作業していれば近隣の妖は気づく。

正確な場所が分からないまでも美酒の匂いに引き寄せられて、弱いものから強いものまでやってくるのだ。

「……………今宵は虫の居所が悪い。加減せなんだが、愚か者には似合いの末路だろうよ」

小さな祠に鎮座する地藏菩薩の隣で酒瓶を煽り、口の端から伝った滴^{くろし}を青年が手の甲で拭う。

好き勝手に跳ねている髪は、一つに纏められているにも関わらず背中を覆う程に広がっている。

月の光に照らされた彼の肌は異様なほど白く、闇夜に金の瞳が物騒な光を放っていた。

右足だけを立てるようにして曲げ、その膝の上に無造作に置かれた腕はだらりと脱力している。

纏う着物は上等で色鮮やかな淡緑なのに、着崩しているためかどこか危険な“野生”を抱かせるだろう。

もつとも、夜も深い時間帯にわざわざ村の外れを歩く人間はいないのだが。

「……………満潮まで2日だったか。新月でなくて災難だったな、雑魚共。そうであればまだ、もう長く生きられたかも知れんものを」

武士とも役者ともつかぬ風体の青年は、月を眺めながら土瓶を片手に啜う。

青年が座っている場所を除いた辺り一面の地面は、どす黒い液体に覆われていた。

その上を風が通り過ぎると、何とも生臭い血の臭いが鼻をつく。

もし今この瞬間この道を通り過ぎる人間がいたなら、凄惨な光景に腰を抜かしていただろう。

血の海に浮かぶ、無数の肉塊に。

そんな中で至って暢気に寛いでいる青年は、自嘲の笑みを浮かべながら軽く頭を振った。

「余程俺は動揺していたということか、全く。……………にしても臭うな、さすがに食い散らかし過ぎたか」

少しも反省していない様子で、青年は周囲に目をやる。

長虫のような妖や、大型の狸に似た妖などが変わり果てた姿で沈黙している。

結界のお陰で血の臭いが村に届くことは無いのだが、それでも今夜だけで2体、やや骨のある“はぐれ”が来た。

大方ここら一帯の“力”のバランスが崩れたので、様子を見に来た所だろう。

苛ついていた人型の錐奇にとっては、飛んで火に入る夏の虫であったのだが。

酒瓶を綺麗な地面に置くと、彼はおもむろに右手を宙に掲げた。

「……………獣避けには丁度良いのだがな……………しばらく草も生えぬのはいささか……………」

ぶつぶつと独り言の多い着流しの男は、得意の水を操り血を洗い流す。

地面に染み込んだのもあって完全には取れなかったが、臭気は退けることが出来た。

あとは自然に薄まっていくだろう。

空が白んできたのを確認して最後に、地藏菩薩のこじんまりとした

社やしろを清める。

目の前を汚したせめてもの償いだ。

「邪魔したな」

仕上げに屋根の上を神佑地の水球で拭うと、青年　　錐奇は村の北端を後にしたのだった。

「あ、錐奇様。おはよーございます」

早朝のまだ太陽も顔を出していない時間帯、村長の家に戻ってきた錐奇は最年長の少女の姿に驚いた。しずくはというと、井戸から鶴瓶を引き上げてはたらいに水を張っている。

「随分早いな。よく眠れなかったのか？」

「逆ですよ、昨日は久しぶりにぐっすり眠れたもん」

嬉しそうに笑う少女は、深緑の髪を紅色の紐で一つに結んでいる。そうすると髪型が養い親と一緒にになるので、何処と無く嬉しそうだ。

妖とは違い癖の無い髪なので、綺麗に一本の房となっている。

「はつねがずーっと変だったけど、昨日は大丈夫だったから。錐奇様が治してくれたんでしょう？」

「……………」

やはり妖混じりのせいか、そういった気配には敏感なようだ。しずくは本能的に大きな“力”を感じて気が張っていたのだろう、同じ部屋では休めなかつたらしい。

それを聞いて錐奇の表情が曇った。

「5日も満足に眠れなくては辛かつたろう。良く頑張ったな、しずく。」

結わった髪を崩さぬよう優しく撫でてやると、恥ずかしそうにそして嬉しそうに少女は首をすくめる。

人生の半分を共に過ごした錐奇に誉められるのは、どんな些細な事でも誇らしいのだ。

だが撫でられている内に、しずくは何か引つ掛かる臭いにかがった。

思わず頭の上の手を取り、鼻を近づけてくんくと嗅いでみる。

「…何だろ…??」

鼻をひくつかせて首を傾げる少女に、手を取られた男は少し目を見開いた。

だが次の瞬間、表情が抜け落ちたかのように真顔になる。

「…恐らく血の臭いだろうよ。昨夜は結構な数の妖を喰ったからな」

雑魚も含めれば、20は下らない。それを錐奇は言葉通りに“喰らって”いた。

しずくが錐奇の正体を知っているとはいえ、さらりとんでもないことを言う。

案の定8歳の少女は、想像しなかった答えにビクリと身体を震わせた。

男の手から視線を外し、恐る恐るといった風に見上げる。

錐奇が地面に片膝をついて少女と目線の高さを合わせると、金色の瞳が凄味を帯びた。

先程までの優しい父親の顔ではない。

怖がらせることは勿論錐奇も分かっていたが、唯一正体を知る彼女には話しておかなくてはならなかったのだ。

…子供達のこれからに関わることだから。

「良く聞け、しずく。今日と明日の夜、俺は今以上の血を浴びることになる。相手によっては…元の姿に戻らねばならぬやもしれん。もしそうなれば俺は二度と、この家には来ない。チサ殿や村長殿に迷惑がかかるからだ。

……俺が何を言いたいか、分かるか？」

「……………」

村の近くで黒蛇の姿になったら、人間の家には二度と入れない。誰が見ているかも分からない狭い土地で、妖本来の姿になるのは危険が伴う。

人間は妖を、恐怖に駆られて排斥するだろう。妖とは本来、人間を襲って食べる敵なのだから。

そこまではしずくも理解していた。

わざわざ錐奇がずっと人型をとっているのも、自分や弟妹達の為なのだと分かっていた。

だがいくら聡い8歳児でも、錐奇が残酷なことを言おうとしているのには気がつけなかった。

洗い流しても完全には落ちなかった血の臭いのする両手を、妖である男は少女の肩に置く。

そして言い聞かせる様に、ゆっくりと口を開いた。

「…村人が俺に刃を向けても、お前達は知らぬふりをしろ」

「！？」

極限まで見開かれた少女の瞳には、決して冗談を言っている顔ではない錐奇が映っている。

反射的に後ずさるうとしたが、しずくの体は一步も動けない。逃さないように、養い親が押さえているからだ。

「酷な事を強^しいているのは俺も分かっている。だが妖と親しめば、お前達は村人に殺されてしまうだろう。

……しづく。俺がお前達の前で血まみれになろうと、無関係を装え。間違っても名を呼んだり、駆け寄ったりしてはならん。知らぬ存せぬで押し通せ。」

「そ、そんな……！」

父が他の者に殺されそうになって、娘が黙って見ていられるだろうか。

いざという時は自分を見殺しにしろと、目の前の養い親は言っているのだ。

金色の瞳は真っ直ぐにしづくの返事を待っている。

突き放すような眼差しに耐えられず、緑髪の少女は思わず錐奇に抱きついた。

首に腕を回し血の臭いを纏う黒髪にも構わず、力一杯しがみつく。

「なんで？…なんで錐奇様がそんな危ないこと、しなくちゃいけないの？…そんなことしてまで、なんでこの村を助けなくちゃいけないの…!？」

ぶわり、と深緑の髪が色鮮やかに逆立つ。

風も無いのにしづくの髪は、煽られたかのように薄闇の中で波打った。

感情の高ぶりで妖の力が表面化しつつあるのだ。

錐奇にしがみつくと手が、ギリリと力を増していく。

だが女兒とは思えぬ力であっても、錐奇にとっては所詮妖混じりの力。

ぼんぼん、と慌てた様子もなく背中に手を当てて落ち着かせた。

「……ここは、お前達が将来世話になるかもしれない村だからだ。それ
にここは、俺の朋が治める地でもある。」

……あいつが“土地”を、俺が“人”を守護すると決めた」

一番長く一緒にいる子供を、錐奇は手を止めて愛おしそうに抱きしめる。

すると幾らか安心したのか、逆立っていた髪の毛がパサリと重力に従って落ちた。

「村長殿とチサ殿にも、俺から話を通しておく。お前は夜、出歩かなければそれで良い。」

あくまで可能性の話だ、と錐奇は締めくくるとゆっくり身体を離す。

野生の勘か、妖の勘か　　しずくは嫌な予感がしてならなかったが、頷く以外出来なかったのだった。

日中は特にやることもないので、錐奇は田畑の様子を見に行くことにした。

子供達にはチサの手伝いをさせているので、一人でのんびりと歩く。水害から1週間経っているにも関わらず、爪跡は至る所に残っていた。道を塞ぐように岩があれば退かし、水路が土砂で塞がっていれば水を操って通りを良くする。

あまり派手なことは出来ないので、ちょこちょこ小規模で土地を整備していた。

いくら土地神に次ぐ力を持っているとはいえ、太陽の下では妖の力が制限されることに変わりはない。

万が一にも村の人間の目があるので、巨大な倒木を退かすのは後回しにするしかなかった。

夏も近い時分、亡くなった者達の遺体は早々に土に埋められる。

錐奇が見た限りでは、土砂や倒木のせいで埋葬出来なかった者はもういないようだ。

「……っ」

自分の失言でこの村に死人が出たと思うと、なんとも胸が痛い。

体に流れる血は余程死人より冷たく冷酷な筈なのに、身体が端から強張っていくようだ。

錐奇の周囲には荒れた土壌と、崩れた畦道、押し倒された木々が人間の苦勞を嘲笑うかのように広がっている。

田植えの期限までそれほど時間は無いというのに。

「…海菴は境界で手が空か^あんだろうしな…俺がやるしかないか…」

人手は幾らあっても良いだろう、と錐奇は復旧作業中の田畑へ向かうことにした。

「兄^あちゃん、本当に力持ちだなあオイ！」

「助かるさなあ、若い衆でもあんな程の奴あいねえよ」

服装だけ見れば場違いな緑の着流しの男は、泥まみれの村民に混じって手伝いをしていた。

女達は落ち枝を拾う者や、握り飯を作る者に別れて男達の作業を補助している。

チサは炊き出しの分担で、はつね達は遊びながらも邪魔な石を拾ったり炊事を手伝ったりしていた。

錐奇はといえば大の男が3人がかりでも運べない巨石を1人で担いだり、畦道の修復に必要な丸太を常人の5倍は運んでいる。

疲れ知らずな上に軽く大人5人分の働きをしてくれる男に、作業は思った以上にはかどった。

休憩になれば、若者達がわいわいと貴族の放蕩息子一（という肩書

の妖)を取り囲む。

「なあ、あんたどうして自分家出たんだい？こんな田舎じゃ、大分勝手も違うだろう？」

真つ先に口を開いたのは左頬に傷跡がある青年。名を八十吉やそきちというらしい。

好奇心旺盛なのか、怖いもの知らずなのかズバツと物を言う青年だ。

錐奇としては怖がられるより余程良いので快く答えてやった。

「…やらねばならんことが出来たのでな。子供ガキの為にも一度人里に寄ってみたかったんだ」

穀物を食す習慣の無い錐奇は、恐る恐る握り飯を口に運ぶ。
塩のきいた米の塊は、想像以上に美味だった。

(熊や猪ばかりでは食に偏りが出る…俺は良いがしずくにはまともな物を食わせてやりたいものだ…)

錐奇の頭の中では既に、しずく以外の子供はこの村に留めようと考えて始めている。

しずくの緑の髪は編むことで濃さを増し、黒髪を装おってはいるがやはり人間離れした色だ。

この村が比較的朗らかで、細かいことを気にしない性格だとしても油断は出来ない。

最初は手拭いをほつかむりのように被っていたらしいのだが、今では隠していない。

炊き出しの所でチサの手伝いをする娘しずくを見ていると、彼女が迫害されたのはなんだったのだろうと思えてくる。

「やはり米は良いものだな…」

「オイオイあんた、本当に貴族の坊っちゃんかよ!？」

しみじみと錐奇が呟けば、こんがりと日焼けしている八十吉がバシバシと妖の肩を叩く。

人間など食料でしかなかったのに、正体が黒蛇な妖はその遠慮の無い手を、嫌いだとは思えなかった。

この者達の為にも、野良を一步たりとも村に入れはしない。

(俺一人が罵りを受けるなら、甘んじて受けよう。子供達ガキがここで平和に暮らせるなら…)

どこか寂しく、どこか遠くを見つめる錐奇に気が付いた者はいなかった。

昼間の村長に“夜間外を出歩けば命の保障は出来ない”と脅した後、錐奇は北の村外れに足を運んでいた。

夕闇に沈んでいく太陽が、ゆっくりと妖の時間が来たことを告げる。

妖の天敵である太陽が完全に地平線の向こうへ消えると、錐奇は抑圧されていた力がみなぎっていくのを感じた。

本来妖というのは、日中を陽の届かぬ所で寝て過ごすのが普通である。

それを錐奇は神佑地で得た妖力にものを言わせ、人型になって動いているのだ。

疲労が無いはずもなかった。

黒目にしていた瞳を本来の金へと変えると、早速招かれざる客がぬうっと薄闇に現れる。

その数　　およそ昨夜の比では無い。

「……ここから先は通さんぞ　　雑魚共。」

二又の真つ赤な舌先が、着流しの男を唯一“妖”だと主張していた。

黒蛇と青年、氏神誕生の訳 (前書き)

・・・話が膨らみすぎちゃって、もはや章作ろっかなあと思いはじめ
ている今日この頃です。

黒蛇と青年、氏神誕生の訳

月は中天に輝き、人々が静かに眠っている真夜中。

幼い妹を持つ青年、八十吉は自分の身体を揺すられて目を覚ました。

眠気をどうにか飛ばして目を開ければ、8つ下の妹がべそをかいて自分を見下ろしている。

また一人では怖くて厠に行けず、仕方無く兄じぶんを起こしたらしい。

日中あれだけ働いたのだし、夜が明ければ今度は一番酷い北の田畑の修復がある。

ゆっくり寝かせて欲しいのが本音だったのだが。

「兄に…起きてよう」

可愛い妹の泣き顔を見て、心優しい八十吉が断れるはずもない。

『しょうがないなあ』と苦笑しつつ、外にある厠まで手を引いてあげたのだった。

すっきりしたのか布団に戻った妹は直ぐに寝付き、反対に青年は目

が冴えてしまった。

寝汗が気持ち悪く感じたのもあるかもしれない。

仕方無く寝間着のまま土間まで行き、瓶に溜めてある飲み水を柄杓ひしゃくで掬すくって喉を潤す。

汗が乾くまで家の周囲でも歩こうと外に出ると、小さな地響きを感じた気がした。

草鞋わらじ越しにだが、微かに地が震えている。

「なんだ…？」

夜中に出歩くのはあまり誉められたものではない。

村長からも夜間の出歩きは絶対にするなと伝えられている。

夜は魔性が跋扈はつこする時間。

人間が妖に一度出会ひとたびえば、死を覚悟しなくてはならないのだから。

だが不気味な地響きは続く。

しかも心なしが大きくなっている気がする。

「……………」

好奇心旺盛な彼が、このまま家に戻って眠れるはずもなかった。

『……………ふっ、俺も腕が落ちたものだ』

月光を反射させる黒々とした鱗が、血みどろの大地を這う。

ゆうに大人を丸飲み出来るだろう巨大な黒蛇は、“食事”をしたせいで腹が膨れていた。

別に食べても微々たる力にしかないのだが、屍しかはねをそこら辺に放置する訳にもいかない。

あまりにも美味しくなさそうなのは捨て置き、黒い大蛇は雑魚妖怪共を仕方無く咀嚼そしゃくしていく。

するとまだ死んでいなかったのか、か細い声で恨み言を吐く塵ちみがいた。

『……なぜダ…なぜ、人間を守る…？貴さまモ妖のくぜに…！』

『ああ？』

透明な黒い液体が問答無用とばかりに、刃となって死にかけの止めを刺す。

息絶えた妖の骨を噛み砕き、内臓を嚙りながら黒蛇は少し考えてみた。

なぜ自分は人間を守るのか。

『何故と問われても…俺にも分からんよ。』

ああ不味あじ、と角やら触角やらを吐き出して次の客を迎える。

今度の野良は、鳥の体に鬪牛の頭が乗ったような妖だった。

『此処は俺の土地だ、長虫は大人しく地を這っている!!』

『……ハッ、どの口がほざくかと思えば』

金の瞳を物騒に細めた錐奇は、天を駆ける妖鳥に牙を剥く。

そのまま鎌首を伸ばして噛みつくのかと思いきや、闇夜に紛れた黒曜石の如き水の刃が、牛頭の右翼を切り落とした。

知能の高い錐奇だからこそ出来るフェイントだ。

『ぐぎゃあああ!?!』

『……牛頭にしては頭が悪いらしい。所詮鳥頭か』

羽根を散らして墜落した馬鹿鳥に容赦無く飛び掛かり締め上げると、鋭い二本の毒牙で喉を穿つ。

いい加減斬り飛ばすのも飽きたし、この妖鳥は再生力が高いようなので毒を仕込む方が効果的だ。

現に切り落とした翼がもう再生し始めている。

『くそつ、離せええ!!!!』

ジタバタともかく鳥を、長い体を巻き付けて封じる。

こればかりにかかりきりになる訳にもいかないの、尻尾の先で持ったまま次の客えきに取りかかることにした。

『…いい加減俺でも腹を下しそうだ。面倒だが土に埋めるか…？』
妖の多さに辟易しながらも、村に侵入しようとする羽虫を水の刃で切り落とす。

神佑地の主に認められている錐奇と、おこぼれに預かろうとする野良とでは圧倒的に格が違うのだ。

十や二十では相手にすらならない。

『……月夜の宮で、海菴ハイレンと語り明かしたいものだな』

ぼやきながらも攻撃の手一（？）は緩めない。妖鳥は締め上げたまま、醜い化生達を葬り去る。

だがふと、血の臭いに混じって人間の臭いがすることに気が付いた。内心で舌打ちしながら、気づかぬふりをする。人型に戻る時に気をつければ良い話だからだ。

黒蛇が貴族の放蕩息子であると、悟られなければそれでいい。

人間が皆、緑髪この拾い児このように黒蛇を怖がらない訳がないのだから。

（それならそれで、恐れれば良い。俺は正しく“化け物”だ）

早く立ち去るようにと、見せつけるように惨たらしく妖を食い干切り、血を滴らせながら嘔下する。

少し悪戯心を出して、人間が隠れているだろう方向に蜘蛛の様な妖の頭を吐き出してやった。

ギョロリと本来の蜘蛛なら無いはずの血走った目玉が、粘液を撒き散らしながら地面を跳ねる。

それでも叫び声がないのをみて、恐らく見ているのは“男”だなど、錐奇はあたりをつけた。

女子なら間違っても今ので叫ばない筈が無い。

恐怖に竦んで声も出ない臆病者か、腰を抜かして呆然としている愚か者か。

だがそこで黒蛇は、はたと気がついた。

(…よもや、気を失ったのではないだろうか？)

あまりにも完璧な沈黙を貫く人間に、最悪の状況が錐奇の頭をよぎる。

こんな妖の出没する場所で気を失うなど、『どうぞ食べて下さい』
と言っているようなものだ。

気もそぞろになった錐奇の隙を突き、百足のような妖が黒蛇の頭上を跳び越える。

しまった、と彼が振り返った時には遅かった。

『ハツハア！！一番乗りだぜえ！！！！』

ずっとある一線を越えさせなかったのに、よりによって人間が隠れている方面へ跳ばれてしまった。

死にかけの妖鳥などすぐさま放り出し、慌てて錐奇が後を追う。

直後、百足が木陰から引きずり出した人間に、遠目で見た黒蛇は叫びそうになった。

(……八十吉ッ！！)

彼は気を失っているわけではないが、顔面蒼白で鋤すきを振り回している。

あまりにも無謀であり、彼一人ではとても勝ち目などない。

彼が、真実一人だったならば。

「来るな、妖めッ！！」

『鉄の板つきれで何する気だよ、ああ、！？』

早々に鋤すきの先端を素手で掴まれてしまい、八十吉はにっちもさっちもいなくなってしまうた。

目の前の妖は女の様に長い髪を振り乱し、腕が4つも生えている。それでいて鳩尾から下が百足の体なのだから、気味が悪いことこの

上ない。

まさに異形、人間を餌としか見ていない人外の化生。

彼は不用意にこの場へ近づこうと決め足を運んだ、少し前の自分を呪った。

同時に何故早く帰らなかったのだろう、と自問する。

圧倒的な力を誇る黒蛇に、さっきまで彼は不覚にも見とれていたのだ。

肉を引きちぎり、牙で悠々と獲物を仕留めるさまは心底恐ろしいのに　目が離せなかった。

蛇が大してその場を動かなかったのも、あるかもしれない。

残虐なのにごここか必死さを感じさせる姿に、恐怖するのが間違っているように思えたのだ。

「ここで死んで　　たまるかッ!!」

持っていかれそうになった鋤を逆に相手へ押しつけ、体勢を崩させる。

その間に身体を反転させ足元の石を投げようとして　　背中
に走った痛みは八十吉はたたらを踏んだ。

右肩から袈裟懸けに百足の節足が、まるで目の粗い鋸のように
難いのだ。

まぐれで当たったのでなければ、青年の身体は今頃真っ二つに分かれていただろう。

「……………痛っ」

倒れることだけはなんとか避けたが、勢い余って木の幹に左肩を強く打つ。

自分が死ぬ瞬間は意地でも目を瞑るまいと青年が百足を振り返ると、そこには歪な笑みのまま固まる妖がいた。

動く様子は無い。

だが『なぜ』と青年が言葉を発する前に、その身体がずるりと横に動いた。

豚や牛の首を落とす時よりもゆっくりと、腕が4本ある上半身だけがズルズルと横に滑っていく。

最後にドシャツと地面へ落ちると、下半身の百足も力無く倒れた。

そこでようやく青年は、百足の背後にいる存在に気がつく。

王者の風格で佇むその黒蛇は、何の感情も伺えない瞳で人間を見つめていた。

普通の蛇でももう少し表情があるのではないかと、疑いたくなる様な無表情。

虹彩が縦に割れた黄金の瞳は八十吉を餌として値踏みするでもなく、

恐怖を刻み込もうと沈黙しているわけでも無かった。

殺気も何も無い、まるで青年の反応を見逃すまいと凝視しているようだ。

身体の内側まで覗きこもうとする視線に、青年が思わず後ずさった。無意識に寄りかかった幹に背中が触れてしまい、痛みに歯を食い縛る。

そこで初めて黒蛇の表情が変わり、金の瞳がスツと細められた。

そう、この蛇は八十吉の怪我の具合を見極めていたのだ。

背中から流れた血が青年の尻と太ももを伝い、決して少なくない量の血溜まりを作っている。

走って逃げるのも鋤^{すき}を取って戦うのも、出血し打撲している人間には無理な話だ。

腹を決めて、八十吉はその場にどっかりと座った。

「…食うなら食え。この傷じゃあ大して抵抗も出来ねえ。

だがもし、アンタに俺を助ける気が少しでもあるんなら、俺を背中に乗っけて村長の家まで運んでくれないか。」

『……………！』

驚愕に目を見開いた大蛇から、禍々しさが綺麗さっぱり吹き飛んだ。

無表情から一転、鳩が豆鉄砲を食らったような顔である。

凶悪な造りの爬虫類顔なのに、意外と人間臭い反応だったので八十吉の方も目を見張る。

互いに驚いている様子が何やら可笑しくて、八十吉の方が耐えられずプツと吹き出した。

「……何だよその顔、妖に物を頼む人間はおかしいかい？仕方無えじゃん、もう俺動けねえし。アンタ以外に頼める奴いねえだろ」

血を流しすぎたせいか、段々と指先から順に熱が奪われていく。寝汗をかいていたのが嘘のように、青年の寒気は止まらなかつた。

だが八十吉が寒さで身体を丸めようとする、切られた背中が痛みを主張するので出来ない。

笑ったことで緊張の糸が緩んでしまったらしい、気持ち悪い位に脱力感が酷い。

腕で身体を抱えることも出来ず、立ち上がる事も出来ない彼に地を這う音が近づいて来た。

ズリズリズリ…

それは本来なら死を覚悟すべき、捕食者の不気味な足音。

暗転しかけた意識を必死に目の前へ繋ぎ止めれば、黒蛇がニンマリ笑いながら青年に向かって蛇行していた。

腰が引けた八十吉だったが、その腰はとうに力を失っているため一歩も動かない。

しかも後ろには木の幹があるので、後退も不可能だ。

強くなる濃厚な血の臭いを、どこか他人事のように思いながら八十吉は　　意識を手放したのだった。

青年が目を覚まして最初に目に入ったのは、白い布団と枕だった。

何やら意識がハッキリしないが、背中に走る引き吊るような痛みだけは確かにある。

彼は今、うつ伏せに寝かされているらしい。

命は拾ったか。

あの蛇が運んでくれたのだろうか、とぼんやり考え始めた所で声が聞こえてきた。

夕暮れまでに作業を切り上げさせねばならん。それ以降は間違いなく死人が出る

そ、それほどに北は危険なのですか？妖というのは真夜中に活動するのでは…

俺は逆に食事にありつけるから良いが、陽が落ちたら向こうにとつては入れ食い状態だろうよ。

ただでさえ目の前に餌があるんだ、日没と同時に沸いてくるぞ

で、ですがとても今日1日で終わる作業とは…

焦った声色の村長が、すぎるように余所者と話をしている。

内容は殆ど聞き取れなかったが、スイキという放蕩息子が例え貴族だといつても、これでは立場があべこべだ。

それにスイキは、敬語を強要するような人間には見えなかったのだが。

若い衆達にも、そんなに偉そうな素振りそぶりはなかった。

内心首を傾げつつ、包帯で身体がぐるぐる巻きの青年はゆっくりと腕に力を入れる。

部屋の中にもう薄暗さは無く、徐々に陽が登っているのが分かった。恐らく朝餉を食べ終わった位の時間帯だろう。

唯一無事な右腕を支えに布団から身体を離すと、不意に会話が止んだ。

そして唐突に音もなく、視界に深い緑の裾と足が入る。それが誰なのかは、見上げるまでもなかった。

「まだ寝ている、傷が開いたらどうする。」

「……大丈夫だよこんくらい。ちょっと引っ掻けちまっただけさ」

妖にやられた傷は邪気を含む為に治りが遅い。

ただの獣傷でないと知られたら、こんなに村が忙しい時なのに長く寝かされかねない。

八十吉が無理に身体を起こそうとすると、有無を言わず上から背

中に圧力がかった。

御丁寧にも痣がある左肩や、袈裟懸けに斬られた背中の傷は避け、首の直ぐ下の位置だ。

その恐ろしい位の力が放蕩息子のものだと理解する前に、八十吉は瞬時に布団へ沈められる。

ぼふん、と間抜けな音をたてて青年の顔が枕にめり込んだ。

「怪我人は寝てる。お前の分まで俺が働いてやる」

「……スイキ、あんた貴族の坊っちゃんとは思えねえ位力強えな……」
野育ちの農民より強いとは、村の主力の働き手である八十吉としては正直凹む。

顔が枕にめり込んだままの青年には分からなかったが、錐奇の顔にはうつすらと笑みが浮かんでいた。

この村の人間に初めて名前を呼んでもらえて、予想以上に嬉しかったのだ。

それ以前に“黒蛇”の錐奇に「乗っけてくれ」と言った八十吉に、好感が持てたのもある。

「情けねえ…勝手に出歩いて動けねえ程の傷をこさえちまうとは…」

“お袋にどやされる”とため息をつく青年が顔を左に向けると、錐奇はいつの間にか枕元で胡座をかいていた。

薬師くすりである村長に訊こうと思っていた疑問を、八十吉は目の前の放浪者がれにぶつけてみた。

「なあ…俺のこと、誰が運んだか知ってつかい？」

「……っ、…いや？知らん。この家の前で倒れていたのを……俺が見つけた」

いきなり核心を突いた問いに、人知れず錐奇の鼓動が速くなる。

内心冷や汗ものの妖には気づかず、青年は「そっかい…」と残念そうに呟いた。

そして錐奇の予想斜め上の言葉を口にする。

「俺さ…妖に襲われたところを、氏神様うじがみに助けてもらったんだ…」

「……!?」

いったい何をこの人間は言っているのかと、珍しく思考が停止した錐奇はポカンと口を開けた。

普段仏頂面の妖がそうなるくらい、予想もしない答えだったのだ。

妖である錐奇スイキと、土地神である海菴ハイレンの存在が入れ替わった瞬間だった。

本来なら恐怖となるべき感情が、幸か不幸か畏怖にすり変わったよ
うだ。

よりによって人間嫌いの土地神と間違えられるなんて、と訂正出来ない妖は頭を抱える。

「何を言つかと思っただら…お前、頭もやられていたのか」

「違えよ!!…確かに信じられねえ話かも知んねえけど、俺確かに聞いたんだ。」

「何を？」

黒蛇ほんにんが思い出そうとするも、別段変なことを口走った覚えはない。

恐怖を煽るような言動しかなかったのだから当然だ。

懐疑的な顔になった錐奇に、信じてもらえていないと勘違いした青年は憤然として叫んだ。

「月夜の宮つぐよ」ッ!!それって氏神様のいる湖のことだろ?確かにあいつ、そう言っただんだよ!!」

「…ああ」

確かにそんなことを言ったかもしれない、と氏神に間違えられている本人は遠い目になる。

そして誤解でも“氏神”を“あいつ”呼ばわりする八十吉に、改めて錐奇は思った。

この村の人間は面白い、と。

今なら100年来の朋の言葉にも頷ける。

どうもこの村の人間は、人外を恐れているようで恐れていないのだ。少し気になった錐奇が、もっともな質問をする。

「助けられたのは分かるが…恐ろしくはなかったのか？」

「…？」

左頬に傷がある顔で、青年は幼子のようにきよとんとした顔になった。

そしてすぐ得心したように頷く。

「そりゃあおっかなかったさ！でっけえし血まみれだし、おまけにむしやむしや妖喰ってたし。」

「…けど何だかなあ、あんまり人間臭いもんだからさ。次会ってもきつと俺、恐いって思わ無えんじやねっかなあ？」

最後の方はもはや推測になっていたが、その言葉だけで錐奇には充分だった。

血まみれの黒蛇を前にして“人間臭かったからもう怖くない”など、胆の太い者で無ければ言える言葉ではない。

しずくやチサの他にも、錐奇を怖がらない人間がいる。

その存在は500年以上生きてきた妖にとって、心踊る発見だった。

命をかけても守りたい、と思える程に。

「次が無いことを祈る。お前の様な怪我人が増えたら敵わん」

錐奇が軽やかに立ち上がると、烏の濡れ羽色の髪が跳ねる様にして揺れる。

その時何やら鉄の臭いが強く香った気がしたのだが、八十吉は自分の血の臭いだろうと大して気に留めなかった。

去り際に着流しの男が、フツと小さな笑みを漏らす。

そして背を向けたまま、半分だけ振り返って警告を残した。

「氏神やも知れぬとしても、そう簡単に警戒を解くな。

黒蛇がお前を喰わなかったのは、ただ腹が一杯だっただけやも知れんぞ？」

「……………分かってるさ、俺の考えがおかしいことくらい」

むすっとした顔になって頭を反対側に向けた青年に、人型の妖は今度こそ部屋を後にした。

スツと障子が閉じられると、部屋に静寂が戻る。

背中に走る痛みを顔に顔をしか擡めた青年は、強張っていた肩の力を抜いた。

命を拾ったのは、本当にまぐれなのかもしれない。

あの蛇の妖は偶々腹が膨れていたから、八十吉を見逃しただけなのかもしれない。

だがそうだとしても、八十吉が黒蛇のお陰で助かったことに変わりはないのだ。

（あいつに……礼ぐらい直接言いたかったなあ）

月夜ヶ淵にある社へ御礼参りに行けば良い話なのだが、出来るなら面と向かって言いたい。

あの“黒い大蛇”を目の前にして冷静でいられるかどうか、青年にあまり自信は無いのだが……

うとうとしてきた所で、錐奇の残した言葉が頭をよぎる。

簡単に警戒を解くな。黒蛇がお前を喰わなかったのは

半分以上意識が休息に向かいながら、八十吉は最後に眉を寄せた。

自分を助けたのが“黒い大蛇”であると、錐奇にいつ言っただろうかと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4109n/>

もう一つの黒芒楼

2011年12月11日10時51分発行